

---

# とある化学の接続回路《インターフェイス》

櫻井 亮介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある化学のインターフェイス接続回路

### 【Nコード】

N1901R

### 【作者名】

櫻井 亮介

### 【あらすじ】

上条当麻がインテックスと出逢い、魔術サイドの者たちが引き起こす事件に巻き込まれている中、学園都市の裏でもまた、多くの陰謀が渦巻いていた。

ありとあらゆる物体・物質・分子・原子を接続・分解する能力を持つ非公式のレベル5、インターフェイス接続回路は、上層部から下される命令に徹底に従い、その圧倒的な力を振るう。

これは、接続回路という一人の少年を軸とした物語である。

投稿タイミングの関係で本作での心理掌握は食蜂さんではなくオリキヤラです。ご了承ください

1 - 1 削除 始まり (前書き)

連載開始しました！これからよろしくお願いします！

## 1 - 1 削除 始まり

学園都市。

総人口約230万人の新世代都市である。その技術力は世界平均レベルをはるかに凌駕し、現存の地球科学の頂点に君臨している。

発達しているのは技術力だけではない。

この都市の最大の特徴は、特殊な能力を持つ学生を育成している点である。総人口の大半は学生で構成されており、それと比べると年長者の姿は少ない。

能力者は6つの能力レベルに分けられ、生徒たちはそのレベルに見合った学習環境を提供されており、生徒の能力を開花・発展させることに重点を置いている。

しかし、多くの生徒が何かしらの能力を持つ中、能力を開花させられない者たちは劣等感を抱き、非行に走るなど問題も多い。

そう。

何かに頼ってでも、能力者になろうとするほどに。

時刻にして午後11時。工業地区の人気のない路地に、十数名の若者の姿があった。

一人は髪を金に染め、一人は肩から背中にかけて刺青をし、また一人は耳に大きなピアスをしている。第三者の目から見れば、それ

らは「不良」と称される出で立ちだった。

「やっと手に入ったな……」

刺青の青年が、懐からそれを取り出す。それは、市販の音楽プレイヤーのようだった。

「ああ、コイツさえあれば、俺たちだって……」

もう一人の青年も、同じようにポケットからそれを取り出す。

「能力さえ持つちまえば、ジャッジメント風紀委員だって怖かねえんだ……!!」  
喉の奥から、ククツ、という裏返った笑いが漏れる。若者たちが、ゆっくりとイヤホンを装着しようとしたとき、カツ、カツ、と、狭い路地に足音が響いた。

「だ、誰だ!」

青年の1人が、足音の主の方角に体を向ける。

そこには1人の少年がいた。

「オイオイ…本当に来ちまうのかよ」

耳を丸々覆い隠す、男性にしては長い髪。その色は灰色で、月に照らされ銀色に輝いて見える。その声は呆れているようで、楽しそうだ。

青年たちは警戒して身構える。

「さすがは学園都市の監視システム。アリみてえにチンケな連中の

動きまでお見通しかあ」

状況から、少年の示す「アリ」が何を指すのかは、一目瞭然だった。

「おい、ガキ……。てめえ何の用だ」

「今すぐ家に帰るってんなら、痛い目見せずに帰してやんぜ？」

青年たちの数は13。少年は1人。戦力比較をする必要もない。

「ホォー、強く出るじゃねえか虫ケラ共。流行りのオモチャ手に入れてご満悦かあ？」

少年は臆するどころか、楽しそうに嘲笑う。ただでさえ気の短い面々、その眉間には皺が浮かぶ。

「このガキっ……!!」

青年の一人が、少年の胸ぐらを掴み上げた。だが、少年の嘲笑は止まらない。掴み上げた青年の額に、青筋が浮かぶ。

青年の拳が振り上げられ、それはまっすぐに少年の顔を捉え、その体が宙を舞う。はずであった。

「う、うわあああああああッ!？」

「ッ!?!どうした!？」

突然上がった悲鳴。手を下すまでもないとその様子を観察していた青年たちは、突如叫び出した青年を見た。

言葉を失う。

少年を捉えたはずの右手。

それが手首まで、ごっそりと無くなっていたのだ。

「俺の！俺の腕っ！！俺の腕があああああああ！！」

だらだらと血が漏れる右腕を振り回し、錯乱した様子で青年が仲間の方に逃げる。少年は追おうともせず、ただただ嘲笑を浮かべるだけ。

「おい！やめろ近付くな！」

「だってっ！！だって俺のっ……！！」

まるで鉛筆の背のように、最初からそうであったかのような手首の断面。覗く筋肉と皮膚からは血が滴り、赤く染まった骨がわずかに見える。

そんなものを見て平静で居られる者など、この場にはいない。

「消し去る前のイイ見せしめになったってか？ハハッ、くっだらねえ。んな程度でビビってるよおじゃ、この先メンタル保たねえぞ？」

この少年を除いて。



「ひいひい!!」

消す、そんなことは有り得ないと、普段ならば吐き捨てられる。だが、錯乱した青年たちは確信していた。この少年ならば「消す」ことができる。

比喩的ではなく、物理的に。

かつてない恐怖に襲われ、青年たちは駆け出した。少年とは反対の方向に。少年は、未だに笑みを絶やさない。

「逃げらんねえつつつてんだろおが」

少年が足を軽く上げ、固い地面に振り下ろす。すると。

「なっ……!!?」

青年たちの方から息を呑む声が聞こえる。無理もない。

何もなかったはずの通路に、突如として、巨大な壁が出現したのだ。確かに『逃げ道』として、表通りに通じていた道の先に。

もはや退路はなく、三方をコンクリートの壁に囲まれ、残る一方からは先ほどの少年が不気味に近付いてくる。

「……?」

ジャシッ、と。聞き慣れない音を聞き、青年が足元を見る。

それは土だった。アスファルトで敷き詰められていたはずのそこは、自然の本来の姿へと形を変えていた。錯乱した青年には、それが何を意味するのかすらわからない。

「さあてと、そいじゃ温情で……」

15メートルほどまで近付いたところで少年が手を広げ、胸の前に突き出した。その手に向かって、何かが集まる。突き出された少年の掌に向け、吸い寄せられるように風が吹く。

「あ……ああ……」

もはや打つ手のない青年たちは、少年がする「何か」を見ていることしかできない。

「自分が消される瞬間は……見なくて済むようにしてやるよ」

刹那、少年の掌から風の奔流が迸り、青年たちを出現したコンクリート壁へと叩きつけた。

「ぐばあっ……!!」

尋常ならざる衝撃に、青年たちが呻く。頭を強打した青年達は、その一撃で失神していた。しかし刺青の青年だけは、うまく頭を守ったのか、立っていないながらも意識を保っていた。

「ぐ……ぐう……っ」

周りには、頭から血を流して倒れている仲間たち。青年自身も、ほとんど身動きがとれないようだ。

「お？しぶといのが居んじゃねえか。あれで一発だと思ったんだがなあ」

少し賞賛するような響きを声に持たせ、少年が歩み寄る。

「お…お前…。何…者、なん…だ…？」

途切れ途切れに、青年が尋ねる。少年は青年を見下ろして。

「そうだな…：冥土の土産に教えてやるか」

少年は屈み込み、仰向けの青年の瞳を覗く。多少打ち所が良かっただけで、そう長くはなさそうだ。

「俺はレベル5の接続回路…インターフェイス上の命令でな。テメエらのグループが不要になったから、テメエらを殺してきてくれって頼まれてきた」

初めて、青年は事の経緯を理解した。とはいえ、納得は行かないのだが。青年は震える唇を動かし、

「接続…インターフェイス回路…？レベル5は…7人しかいないんじゃない…なかった…のか？」

「あん？レベル1のくせして7人全員知って…：いや、逆にそれを利用されたクス組織だったな。その程度の情報知ってたとしても不思議じゃねえか」

少年 インターフェイス 接続回路は軽く前髪を掻き揚げ、

「俺は8人目…：上層部の使い勝手がいいように秘匿された、非公シクレットナンバー」

式の超能力者って部類だよ」

インターフェイスの接続回路の嘲笑が絶えた。その表情は暗く、忌々しそうに奥歯を噛みしめている。

「さあて…お喋りはここまでだ」

数秒の間を開けて、無表情になった接続回路が足下の土を擦るよ  
うに踏んだ。

すると彼の行為に呼応するように、意識を失っている青年たちの  
地面が、口を開けたかのように深く抉れ出した。

「うぐっ……!？」

穴に落ち、刺青の青年が呻く。顔を上げると、こじ開けられた地  
面を見下ろすようにして、灰髪の少年が立っていた。

「冥土の土産にや十分な話だったろ？格下。残念だったなあ、死の  
恐怖をジワジワと感じて死ななくちゃならねえんだから」

再び嘲笑いを始める接続回路。彼は自らを誇示するように胸に手  
を当てた。

「俺の能力、接続回路は、触れたありとあらゆる物体・物質・分子・  
原子を結合・分解する。……テメエらの周りの酸素を無くして窒息  
させることはもちろん、生き物の体をバラバラの粒にしてやること  
もできんだぜ？」

「なっ……!？」

目を見開く青年を見て、インターフェイス接続回路は白い頬をつり上げた。

「苦しんで逝つちまえ、レベル0のクソ虫が」

\*

インターフェイス接続回路と青年たちが居た路地は、何事もなかったかのように元通りにされていた。

壁に用いた分子を、また元の位置に戻したからだ。13人も人間が殺されたにも関わらず、その路地は綺麗なまま。証拠の隠滅をも図れるのが、彼の能力の特徴だった。

跡形もなく13人を消し去ったインターフェイス接続回路は、支給品の携帯を手に第七学区の歩道橋を歩いていた。

『処分できたようだな』

低い、機械的な音声が、携帯を当てた耳に響く。

「ああ。アスファルト掘り起こして土ん中の分子ひとつひとつ調べでもしなけりゃ、証拠は上がって来ねえ」

深夜でも、学園都市は光が絶えない。それでも、第七学区はまだマシな方だ。娯楽施設の集まる学区ならば、もっと明かりの数は多いだろう。

『分子に留めたのか？君が』

驚いたように言う合成音声。白い肌の少年は舌打ちする。

「原子クラスの分解は面倒なんだよ。素粒子ともなりや尚更な。この程度の事に無駄な頭も使いたかねえしよ」

歩道橋の手すりにもたれ、泥酔して通り過ぎる男性を眺める。さすがにこの時間は学生の姿はない。強いて言えば大学生くらいのものだ。

『まあ構わんが。よくやってくれた。報酬はいつも通り…』

そこから先の話は、耳に入れなかった。決まった流れだったというのもある。

通話を切り、ポケットに携帯を入れると、インターフェイス接続回路は頭上で輝く月に鋭い、隈のある目を向けた。

(…なんで分子に留めたか…か)

答えは簡単だ。

(分子までなんだよ…個々の性質が生じんのは)

勿論、あの13人それぞれは完全に殺した。だが、その構成粒子の性質くらいは残してやったのだ。原子レベルまで分解すれば、性質すら失ってしまうから。

だから何だ、とは思う。彼らを殺したのは間違いないし、粒子の性質が生きていたところで何にもならない。殺したという事実は変わらない。

(誰にも理解できねえ……理解されねえ綺麗事だ)

自分のことだと言いつのに、鼻で笑ってみせるインターフェイス接続回路。

しばらく夜月を眺めると、彼はその場を後にした。

1 - 1 削除 始まり (後書き)

とりあえず第一話です。すぐに第二話も投稿致します。

本文は試作時より少し改変しています。



1 - 2 誤解 人違イ (前書き)

引き続きお楽しみ下さい。

学園都市の第一位、一方通行がレベル0の少年に敗れてから2週間。  
アクセラレータ

インターフェイス  
接続回路の周囲もまた、大きく変動していた。

「……………」

手からコンビニ弁当の入った袋を提げた彼は、先ほどから背後に気配を感じていた。

(……………またか)

ハア、と彼は面倒臭そうにわざとらしくため息をつく。心底気怠そうに一度空を見上げて、くるりと振り返る。

「……………オイ。こっそり後付けてねえで、ちったあ面見せやがれ」  
ツラ

そこにいたのは、レベル0から2程度の集団だった。大方スキルアウトか何かと能力は持っている落ちこぼれの落第者か。数週間前の者達よりも数は少ない。一言も口にすることなく、彼らは一斉に襲いかかってきた。

(……………チツ)

軽く舌打ちすると、彼は研ぎ澄まされた感覚で、周囲の状況を把握する。『シークレットナンバー非公式の超能力者』である彼の有する能力は、ありとあ

あらゆる物体から原子までを分解し結合する能力だが、それは攻撃だけでなく索敵にも応用できる。認識範囲に映り込む襲撃者たちを、頭の中で『物質の集合』として処理し、その形を掴み取る。

（数は11……。3人は素手、2人がナイフ、4人は木製バット、2人は……遠距離攻撃か。向かってる連中の一部をバラすか？面倒臭いな）

一秒足らずで整理すると、彼はもう一度ため息をついた。

「死ねえええ!!!」

迫り来る刺客たち。彼は足元に目をやって、端正な顔を邪悪に歪ませる。

（まあ……とりあえず吹っ飛ばしとくか）

彼がそう決めた瞬間、彼を中心として同心円上に突風が発生する。それは熱を伴わない爆風も同義だった。これでも大分加減したつもりではある。

「ぐがつ!!」

「ぐふつ!!」

「があっ!!」

ある者は街路樹に、ある者はガードレールに、またある者は壁面に打ちつけられ、強打した場所を押さえてうずくまる。

「……………」

無言のまま、インターフェイス接続回路は能力による遠距離攻撃を仕掛けようとしていたであろう者達へと目を向けた。

「ひっ……!」

決して睨みつけたわけではない。ただ視線を向けたただけだ。だが、抜き身のナイフのように鋭い瞳はそれだけでも凶暴な輝きを放っている。

「……ここ最近、テメエらみてえのに何度か襲われてんだけどよお……」

今度は、睨みつける。剥き出しのナイフを構え、相手へと突きつけるように。

「心当たり、ねえか?」

「うわああああ!」

質問には答えず、錯乱した青年がインターフェイス接続回路に掌を向けた。飛び出したのは電撃の奔流。

インターフェイス接続回路は動かない。

あるうことか、彼を襲うはずの電流は彼に触れる寸前で拡散した。

簡単なことだ。所詮は電子の集合体である電流。素粒子レベルの分解すら可能な彼からすれば、電子をバラバラに散らすことも苦ではない。

「ご挨拶な野郎だなあ。理由くらいあんだろ？こんな大所帯で俺を襲うんだから」

「ひ、ひいつ！うわああああ！！」

逃げ出す電撃使い。他の能力者たちもそれに続く。接続回路は無理に追おうとはしなかった。あんな格下をわざわざ追いかけてやるほど自分は安くない。

そんなことをせずとも、周囲には今見た光景に恐怖し、震えながら打撲箇所を抑える青年たちが転がっている。

「……動けねえよなあ。怖いよなあ？今すぐ逃げ出したいよなあ？」

青年たちは震えるばかりだ。こういうくだらない連中の脅える姿を見るのは悪くはない。向けられる視線に込められた畏怖の念は、自らが絶対的な存在であることを証明するかのようだから。

「……安心しろ。俺も無駄な殺しをするほどヒマじゃねえ。命くれえは残しといてやる」

インターフェイス  
接続回路は街路樹にぶつかっただらしい青年に歩み寄る。彼は悪意に歪んだ白い顔を、小麦色の青年の顔に近付け、爛々と輝く瞳を突きつけた。

「だから教える。俺を襲った理由をな」

\*

「……まさか、人違いとはなあ」

狭いアパートの自室に寝そべり、彼は人知れず呟いた。

レベル5の第一位、アクセラレータ一方通行が、レベル0実験に介入した無能力者に敗れた。そんな噂を耳にした彼らは、アクセラレータ一方通行が『最強』ではなくなつたと誤解し、アクセラレータ一方通行を襲撃しようと考えた。そして、偶然通りがかつた容姿の似ているインターフェイス接続回路が、アクセラレータ一方通行と間違われ襲撃を受けた。

「……バカか」

震える声で答えた青年の顔を思い出しながら、インターフェイス接続回路は吐き捨てた。

「第一位のクソつたれが……いや、そいつに当たっても仕方ねえか」

偶然の事象に文句など言えない。文句を言うなら、よく確かめもせずに襲ってきた連中に、だ。もっとも、そのほとんどには痛い目を見てもらったが。

しかしこれが今日限りとも限らない。あの手の馬鹿は幾らでもいる。また別のグループが襲ってくる可能性は大だ。

(それにしても……)

目を瞑り、まどろみが訪れるのを待つ。

(皮肉なもんだな…… 『非公式の超能力者』<sup>シークレットナンバー</sup> が第一位と間違われる  
たあ)

今までは影に潜み、この学園都市の裏側<sup>やみ</sup>の中で活動してきたとい  
うのに。

まあ、自分は接続回路<sup>インターフェイス</sup>だと弁明したわけでもない。接続回路とし  
ての自分は、表舞台には現れていない。それは以後、変わることは  
ないだろう。彼らにやったことは全て、幸運にも一方通行<sup>アクセラレータ</sup>にもでき  
ることだ。

(だが……問題はある)

懸念するのは、自宅を突き止められた場合だ。よく調べれば一方<sup>アクセ</sup>  
通行<sup>ラレータ</sup>の寮か何かも突き止められるのだろうが、単細胞の格下連中で  
は接続回路<sup>インターフェイス</sup>をストーキング<sup>アクセラレータ</sup>しココを一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の住居と考える馬鹿が  
居てもおかしくない。接続回路<sup>インターフェイス</sup>は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>とは違い無意識下での能  
力使用はできないため、寝込みを襲撃されれば無能力者<sup>レベル</sup>も同義であ  
る。

(何か手を考えねえとな)

彼はプライドの高い人間だ。レベル5であり、他には任せられな  
い任務を任せられ、『非公式』にされていることがそれを助長してい  
る。故に、低レベルの人間を恐れるなど言語道断だ。

そうは思うものの、極わずかな不安要素を抱えただけで、彼は保  
身のことを考えている。

我ながら馬鹿馬鹿しい。

人知れず苦笑すると、彼はすぐに眠りについた。

\*\*\*

(…なんなんだろうな)

インターフェイス  
接続回路の掌が、鉄の腕を掴む。

(変な気分だ)

掴んだ鉄の腕は瞬く間に砕け散り、破片が周囲に飛び散っていく。

(バカ共に間抜けな襲撃されて以来だな)

掌に気体を集め、一気に解放して。反動で宙返りしながら、周囲の状況を把握する。鉄の殻を被った兵士は、何とか耐えるも動きを封じられていた。

(ビビってんのか？俺が)

着地と同時に、地面に変換公式を働かせると、一部のコンクリートが姿を消し、代わりにコンクリートの槍が飛び出した。

(……んなわけあるか)

要はもっと強くなればいい。誰もが恐れ、その後ろを歩くことすら出来ないほどに。そう、かつてのあの第一位アクセラレーターのようにならう。



コンクリートの槍が、強風で身動きのとれなかつた鉄の兵士を貫いた。断末魔が聞こえる。接続回路はフウ、と一度深呼吸し、

「んなオモチャで俺に勝てるかよお!!」

広い室内に、少年の声が響き渡る。周囲には、血やケーブル、装甲の破片などが落ちていた。学園都市の誇る人型兵器、駆動鎧が無惨にも破壊された後であった。

『このっ!!』

残り3体となったそれらが、対戦車機関銃を斉射するも、接続回路に当たる寸前で火花を散らして粉と化する。悪魔のような笑みを浮かべた少年は、引き裂くように口端を吊り上げ。

「オラオラどうしたあ!!?イヒヤハハハハッ!!」

接続回路が駆動鎧の片足を横蹴りする。通常であれば自殺行為だが、彼の足は振り抜けた。蹴られた駆動鎧は、片脚の膝から上と下とを分断され、バランスを崩して倒れ込む。分断箇所からはおびただしい量の血が流れている。

「ヒヒヒッ…!!…ヒヤハハハハッ!!」

掌に気体を集めたまま、こちらを撃ち続ける駆動鎧に迫る。

「楽しいよなあ!?オイ!!フヒッ、ギャハハハハハハハッ!!」  
駆動鎧の胸部、それは中の人間のそれと、位置は変わらない。彼はそこに掌を向けた。

『 ツ！ 』

「逝つちまいなア！ヒヤハハハハッ！！」

零距离で放たれた巨大な空気砲。鈍重な駆動鎧パワードスーツが吹っ飛ばされる。同時に分解も行ったのか、その胸には穴があいていた。

「あああとひとつうー！！」

発生した気圧から力を受け、インターフェイス接続回路は再び宙を舞った。残るひとつの頭上に降り立つ。彼は相手の頭上で仁王立ちし、嘲るような笑みをガラスの向こうの男へ向けた。

「さあて…どうしてやるおか？」

口ではそう言いながらも、彼はすでに行動に移していた。パワードスーツ駆動鎧の顔部分、防弾強化ガラスを踏み砕く。

「ぐぎゃああああつー！！」

剥き出しになった顔面に、本来それを守るはずの強化ガラスが突き刺さる。

「アハハハハッ！！痛そうだなあ、ええ！？可哀想にい！」

言いながら、彼は苦痛に歪むパイロットの顔を無情にも蹴った。

「ぐぎゃッー！！」

只でさえ突き刺さったガラス片でグシャグシャだった顔が、さらに悲惨に歪んでいく。

「……片付いたか」

いささかハイになり、声も裏返っていた接続回路インターフェイスだが、殺戮にんむが終わった途端、クールダウンしたかのように落ち着いていた。

そこは最新鋭の格納庫だった。今回、上層部が兼ねてより最新式の駆動鎧パワードスーツを管理させていた組織、『グリッド』が謀反を企てたという情報を入手し、接続回路インターフェイスを遣ったのである。本来ならばこの虎の子の10機、整列して固定装置に並べられていたはずなのだが、今やそれは最新鋭のマシンを保管する場所と言うよりは、ジャンクパーツの物置のようだった。

「おい、終わったぞ」

彼はポケットから携帯を取り出し、無表情で告げる。

『こちらでも確認した』

相変わらずの無機質な音声。抑揚のない冷たい声だ。

「始末はどうする」

『それはこちらに任せてくれ。君は自由にしていてくれて構わない』

「……わかった。ところでアンタ…茂田つつたか？アンタのポストはなんだ」

む、と。合成音声ながら、躊躇するような声が聞こえた。

『何故そんなことを聞く?』

決まっている。ここ数日の襲撃事件についてだ。

「ちつと聞かせてもらいてえことがあんだ」

『答えられる範囲で答えよう』

「チツ…」

これだけ働かせてよく言うと、インターフェイス接続回路は苛立つ。だが、他に聞く宛もない。

「第一位のアクセラレータ一方通行って居ただろ。奴のことなんだが……」  
割り切って、彼は数秒おいて口を開いた。

1 - 2 誤解 人違イ (後書き)

電流は集束した電子。それをそれぞれ拡散してしまえば電流としての効果は成さない。

そんな確証のない確信から作ったワンシーン。

ちよつと無理があるでしょうか？

次回は会話回です。

1 - 3 異動 悲劇ノ予兆 (前書き)

ダーク(?) な会話回です

「一方通行：奴が被験者だった『絶対能力進化実験』が、レベル0の無能力者に奴が敗れたことで中止になったのは本当か」

『そのように伝え聞いている』

無機質な声は、無感動な響きを帯びて、接続回路の耳に響いた。

「そのせいで、俺は奴と間違われて四度襲われてんだよ」

『なるほど。君は彼のように無意識下での能力行使ができないから、不安なのかね？』

「ああ？」

接続回路の声に、威圧的な響きが加わった。

『渦中の彼はそんな者たちのことなど気にも留めていないことだろうね』

相変わらず抑揚のない声。だが、確かな悪意が感じられた。

「茂田：テメエ、俺を誰だと思ってやがる」

『唯一の非公式の超能力者、接続回路だろうか？』

期待した答えを、まるで諭すように言う茂田。プライドの高い接続回路にとって、それは苛立ちを加速させるものだった。

『不安』というの的を射ているからこそ尚更気に食わない。

「低レベルのクソ共なんか不安なんざ持たねえ。俺が懸念してるのは…」

『死、かね』

「ッ」

お見通しのようだ。

『死は誰もが畏れる必然だよ。特に、君くらいの若者はね。…そう  
だ、君とは今日でお別れなんだったな』

「は?」

虚を突かれたような声が出る。

『上の決定でね。君に重大な命令が下されたんだ。君の担当者は私  
ではなくなる』

「重大な命令ってのは」

数拍置いて、茂田の声…と言っても合成音声か、再び耳に響いた。

『レイディオノイズ  
量産能力者計画を知っているね?』

「第三位を量産したアレか」

『そう。本来は超電磁砲レールガンの量産による軍備力増強を狙った計画だ。



まあ、できたのは二万ものできそこないだったかね』

インターフェイス  
接続回路の眉が、微かに動いた。

『その無駄な二万体は結果として、レベル6シフト絶対能力進化実験の標的とされ、実験中止までに10031体が処理された』

「手短に話せ。そこまでは俺でも知ってる」

『残る9069体の内、200体はデュアルスキルシフト多重能力進化実験の実験台にされてきたのだが、やはり実戦投入する前にテストをしたくてね。君に彼女らの相手をしてほしいそうだ』

「淡々と説明する合成音声。」

「何で俺なんだ」

シスターズ  
妹達を相手にする能力実験。これではまるでアクセラレータ一方通行だ。

『君の能力の発現率は未だ81.6%。我々としても、虎の子の非レクレットナンバー公式のレベル5は最大限活用したいのでね。デュアルスキルシフト多重能力進化実験と君の能力発展を同時に済ませたいのだよ』

そんなのはそっちの都合だろう。そう言い返そうかと思っただが、彼は気付いた。能力発展。それが叶えば、端的に言えば今よりも強くなることができる。

ひょっとしたら、茂田たちにはこれも想定内だったのではないだろうか。

死を畏れるが故に、さらなる力を求めたインターフェイス接続回路が、それを掴み

取れるかもしれない機会を逃すはずがないと。

(掌で躍らされてるみてえで癩だが…)

断る理由はない。

たかが2000人だ。今までの累計で、自分は軽く1000人以上は殺してきた。

今更2000人を殺すくらい、何のことはない。

「簡単すぎる仕事だな。全員殺しちまっても構わねえんだろ？」

『それはそれでデータになる。どの道、研究者たちに損はない』

「オーケー引き受けた」

薄ら笑いを浮かべ、インターフェイス接続回路が言った。

『感謝する。上にはそう伝えておくよ』

「待て」

通信が途切れる前に、彼は口を挟んだ。

『なんだね？』

相変わらずの合成音声だが、不思議そうにしているのは伝わってくる。

「いつも電話口に居たのがアンタとは限らねえが…世話になったな」

普段より声音が柔らかいことに、茂田は気付いた。

フフツ、という笑いを境に合成音声が続切れ、

『似合わない台詞だね』

ブツツ、と切れる通話状態。インターフェイス 接続回路は携帯をしまつと、まだ賑わっている繁華街へと足を踏み入れた。

(似合わねえ声だな、茂田)

何だかんだで、自分は電話口の彼に依存していたのかもしれない。さんざんな言葉を浴びせてきて、会話内容も仕事のことはかりだったが、唯一の会話相手だったのだ。

(…バカバカしい)

新たな力への期待と、何ともいえない寂しさを胸に、インターフェイス 接続回路は足を進めた。

1 - 3

異動

悲劇ノ予兆

(後書き)

閲覧・評価してくださった方々、ありがとうございます。

今回はこの後の展開を事前に予想していただくために会話回と致しました。接続回路の心境等察していただけたなら幸いです。

次回はちょっと癒しのある内容になります。

尚、作中の矛盾点や誤字などはチェックしているもの至らないところがあるかと思いますので、見つけたら知らせていただけると助かります(^^;)

それでは次回、お楽しみに

1 - 4 邂逅 出会イ (前書き)

す 僕はこの主人公にも可愛げがあるということを書きたかったんで

デュアルスキルソフト  
(多重能力進化実験……)

公園のベンチに腰掛け、手にした菓子パンを口にしながらインターフェ接続回路は新たな担当者から受けた実験の概要を思い起こしていた。

多重能力者は、文字通り複数の能力を持つ能力者のことである。デュアルスキル  
現時点で天性の多重能力者が発掘された例はない。本来は『置き去り』の子供たちが実験対象となり専用のカリキュラムが組まれるらしいのだが、今回の実験は妹達……既に『欠陥電気』という確たる能力を持つ素体を用いていることが特徴だ。

シスターズ  
妹達を素体にする理由は大きく分けて三つ。

まず、二万体を生産したこともあり、生体データの解析が最も進んでいるということが挙げられる。実験をする上では適正審査が不可欠だが、生体データの解析が進んでいれば数段階の審査内容の省略を図れるのだ。

次に、成功した場合、実戦投入時にミサカネットワークを利用した戦略展開ができること。どうせ実験をするなら多くのデータを探っておきたいと思うのが普通だ。多重能力者の作戦行動が前代未聞である以上、この点は研究者たちにとって大きなポイントとなる。

最後に、自然に作られたモノでない以上、倫理的配慮の必要がないこと。もともとそんな甘えた考えを持つ者は少ないだろうが、それでも置き去りを始めとする実験動物に良心の呵責を感じる人間も少なくない。複製人間である妹達はそういった配慮を必要としない、

研究者サイドから見ても都合のよい素体なのだ。

以上の理由から、10212号から10412号までの個体が研究所にて能力開発を受け、そのすべてが今回の実戦審査に参加することだ。

(作られたモノだから倫理的配慮が必要ない……か)

生まれたくて生まれたわけでもないのに随分な謂われようだなと、  
彼は妹達シスターズに微かな同情を抱いた。

聞くところによれば、研究者側は「実験はしても、おそらく被験体インターフェイスに勝ち目はない」と考えているという。無論接続回路も同意見だ。

今回の実験はあくまでも、レベル5の超能力者との程度渡り合えるかが検証目的であり、被験体の勝率は1%にも満たないと考える者がほとんどらしい。

シスターズ妹達のことなどどうでもいいと思っていたが、この経緯を聞いてしまうと、少なからず哀れに思えてしまう自分は疲れているのだろうか。

(……アホか。くっだらねえ)

心の中で吐き捨てると、彼はもう一口パンに口を付けた。何気なく周りを見てみると、昼間の公園なだけあって、砂場や遊具には小さな子供の姿がある。その全ては笑っていて、本当に楽しそうだ。もしも自分が彼らのように恵まれた環境で育てられていたとしたら、こんな実験に参加することもなかったのだろうか。

(……くっだらねえ)

自分は何をアンニユイになっているのだろう。考えたところで、やり直すことなどできないというのに。

ふと、彼は足元にちょこんと座る存在に気付いた。

やせ細った小さな猫が、ニィニィと弱った鳴き声を上げている。

「……………」

しばらく子猫と目を合わせ、周囲を見渡してみるも、母猫の姿はない。それに、こうして人間の目の前に座り、物欲しそうにこちらを見つめてくると言うことは。

「……………情けねえ面<sup>ツラ</sup>しやがって」

察した時、言葉が通じないことなど分かっているにも拘わらず、無意識のうちに言葉が出ていた。勿論相手は小首を傾げている。

「恵んでもらわなけりゃ生きてけねえようじゃ、オマエじきに飢え死ぬぞ」

「ニィー」

「……………チツ」

一度舌打ちして、インターフェイス接続回路はパンを千切り、子猫の口元に持つて行く。嬉々としてそれに食らいつき、ががつと食べる子猫。よほど空腹だったらしい。



(……何やってんだかな)

胸の内で苦笑しながら、もう一度パンを千切り、子猫に与える。  
そんな行為を数回繰り返し返した時。

「おや、ここに居たのですか、とミサカはようやく発見した例の子猫に呼びかけます」

「あん？」

突然の声に、インターフェイス接続回路が顔を上げる。目に映ったのは、茶髪の少女。何度か見かけた女子制服と、頭にはめている軍用ゴーグルがどうにもアンバランスだ。

少女は子猫の傍に屈み込むと、ポケットから蒸しパンを取り出しインターフェイスて接続回路がしたのと同じように猫の口元へ持って行く。しばらく様子を見ていると、少女はこちらに顔を向け、

「あなたも猫が好きなのですか？とミサカは状況から推測し端的に尋ねてみます」

「……別に」

ぶつきらぼくに答えるインターフェイス接続回路。目の前の少女はまるで表情筋を動かすことなく淡白に、

「そうですか。この子猫に餌を与えていたので好きなのではと思ったのですが、とミサカは質問の理由を補足します」

いちいち言い回しが面倒くさい奴だと、インターフェイス接続回路は焦れつつく感じながら言葉を紡ぐ。

「嫌いつてわけでもねえがな。餌をやったのは気まぐれだ」

「なるほど、とミサカは初対面のあなたに対し適当に相槌を打ちます」

「……………ん？」

ここまで話して、インターフェイス接続回路はあることに気が付いた。今、この少女は妙なことを……………いや、決しておかしくはないのだが、今のインターフェイス接続回路からすれば無視できない単語を口にしていた。

（『ミサカ』だと？）

まじまじと、インターフェイス接続回路が少女の顔を見る。それはどう見ても、資料で見た第三位、レベルガン御坂美琴の顔だった。アクセラレータ一方通行によって殺された妹達を含む二万の個体は、すべてその第三位のクローンだ。となる……………と。

「どうかしたのですか？と、ミサカはこちらを覗き込むあなたに尋ねます」

すると、無表情な少女は首を傾げるような仕草と共にインターフェイス接続回路を見返してくる。彼は気付いたように視線を外すと、小さく「いや……………」と呟いた。

間違った間違いなく、彼女はついさっきまで反芻していた実験の被験体、妹達だ。この個体とは限らないが、これから殺すことになるかもしれない相手とこんな場所で対面させるとは。

「……おや、もう食べてしまったのですね、とミサカは足元の子猫に話しかけます」

見れば、与えられた蒸しパンを平らげ、少し元気になった様子の子猫が、屈んだ少女の膝にすり寄っているところだった。

……殺すかもしれない相手。そんなものが相手で、これ以上会話などしていられるか。そう、思うのだが。

「……毎日、コイツに餌やってんのか？」

不思議と、そんな言葉が口から漏れた。何故なのか、わからない。必要ないはずなのに。

そんな心の葛藤など露知らず、何も知らない妹達シスターズはあっさりと頷いて。

「はい、とミサカは聞かれた質問に対し率直に返答します」

\*

「……以上がミサカとこの子猫の馴れ初めです、とミサカは話を聞いてくれたあなたに話の区切りを伝えます」

「……猫相手に馴れ初めって表現はあってんのか？」

「……。……ミサカにとってこの猫はそれに等しい存在ということです、とミサカは用法を間違えたらしいことを曖昧に誤魔化します」

「誤魔化した意味ねえじゃねえか……」

呆れたように目を細め、インターフェイス接続回路が言った。

気付けば、彼はかれこれ小一時間ほどこの妹達と会話している。システムズ

内心、インターフェイス接続回路は驚いていた。

殺す相手かもしれないと念頭に置いていたにもかかわらず、完全に油断し、不思議と気分が晴れていたことに。

端的に言えば、「楽しい」に該当する感情だ。

クローンとはいえ同年代とするとりとめのない会話、と言つのもあるかもしれない。

インターフェイス接続回路は自分の行動を後悔した。クローン体と言っても、口調

こそ面倒くさいが真正銘心があるのだ。それも襲撃してきた無能レベル力者と違い、善意の心が。と鳴き声を上げた。

そう考えてしまうと、持っていた攻撃意識も揺らいでしまう。

(何を感傷的になってやがんだ俺は。関係ねえだろうが。俺が強くなるために、実験で妹達を殺す。システムズそれだけのことだろうが。クソみてえな同情なんかしてんじゃねえ)

自分に言い聞かせ、強く拳を握りしめる。

大丈夫だ。やれる。

「それでは、餌も与え終えたのでミサカはここで失礼します。と、ミサカは去り際の挨拶をします」

「……ああ」

ぺこりと一礼すると、少女はスタスタとその場を後にした。残されたインターフェイス接続回路は、同じく足元に座っている子猫を見る。子猫もこちらを見ると、何を言いたいのか、「ニイ」と小さく、何度も何度も鳴いている。

「……くっだらねえ」

本日三回目の台詞を吐き、インターフェイス接続回路は立ち上がった。そして、まだ三分の一ほど残っていた菓子パンを、子猫に放る。

子猫は目の前に放られた菓子パンとインターフェイス接続回路とを交互に見てから、菓子パンをくわえ、ベンチの後ろの植え込みの中に入っていった。

「…クソつたれが」

誰に向けてのものでもない。

自分でも理解できない今の甘ったるい感情を、断ち切るための手段だった。

そう。自分はこれから、実験とは言え『殺し』をするのだ。

殺しをする人間に、余計な感情は不要。

割り切らなくては、自分の持つ唯一の誇りが崩れてしまう。他に生きる理由を持たない彼にとって、それは死活問題であり、失ってはならないモノなのである。

公園の敷地外へ出てから、彼はもう一度中を見た。

相変わらず、笑顔に溢れたその空間。その誰一人として、彼が多くの人間を殺してきたことを知らない。さっきまではあの空間に、自分が居たのだ。

端から見れば、あの妹達のシスターズのゴージャス以上に不釣り合いだったに違いない。

彼は吹っ切るように正面を向くと、いつもの仏頂面で歩き出した。

\*\*\*

『インターフェイス接続回路。実験の準備が整った。指定の場所に向かってくれ』

茂田と同じ合成音声、馴染みの響きを耳に残す。

『インターフェイス接続回路、聞こえているのか？』

「……………ああ。分かった」

間を置いて、彼は低い声で応えると、一方的に回線を切った。

もう、あの時の甘い考えは息を潜めている。

今のインターフェイス接続回路に迷いはない。

こきこきと体の関節を確かめ、決意を新たに拳を握る。

(実験なんか関係ねえ……………。俺はもっと強くなる……………強くなるために、この実験に参加する……………)

そこに選択肢は用意しない。

(絶対の確証なんかねえ……だが、俺はこの……陰しかねえ道を突き進む。

どんな連中でも、俺を必要としてくれる以上……！)

だから。

「一人残らず……ブチ殺す」

暗い決意が、暗い室内に響き渡った。

1 - 4 邂逅 出会イ (後書き)

やっと登場しました、原作のキャラクター。

ちなみにこのミサカは原作に登場している型番ではありません。

今回は戦闘回です。

閲覧・評価してくださった方々、本当にありがとうございます！  
お気に入り登録してくださった方々もありがとうございます！

大変励みになりました！これからも応援宜しくお願いします！



1 - 5 実験 悪魔ノ所業 (前書き)

ついに実験スタートです。

\*\*\*

「お待ちしていました、とミサカはやって来た審査員に一礼します」  
指定された場所に到着すると、そこには既に少女の姿があった。

「私達には審査員のパスを確認する義務がありますが、とミサカはあなたにID番号の提示を要求します」

「ID：CC491366、インターフェイス接続回路だ」

低い声で、インターフェイス接続回路は言った。そこには冷徹な意思が垣間見える。

「ID照合完了、インターフェイス審査員接続回路を確認。実験概要の説明に入ります」

ちら、とインターフェイス接続回路は周囲に目をやった。そこは鉄骨が組み上がった工事現場。

何やら大きな建物を建てようとしていたらしく、その広さは国立の競技場ほどだ。繁華街や分譲地のあるエリアから離れたここは、「行こう」という意思でもなければ誰も来ないような場所である。実験には最適な空間と言えるだろう。

「今回はミサカ5人の相手を同時にさせていただきます。これは小隊レベルのミサカネットワークを利用した戦略行動の参考にするためです。と、ミサカは説明を補足します」

少女が言つと、彼女の背後、骨組みだけの構造物から、そろそろと少女達が現れた。その姿は全く同じで、見分けることなど不可能だ。

「5対1か。油断したらヤバいかもな」

露ほども思っていないことを、わざとらしく口に出す。少女らはそれには反応せず、ゴーグルを目に装着し、身構えた。

「ミサカ10407号から10411号まで、戦闘準備が整いました。現時刻を以て、第113次多重能力進化実験・実戦審査を開始します。審査員、接続回路は配置について下さい」

促され、インターフェイス接続回路はポケットから手を出し、それらしく構える。

(コイツら含めてあと6人か…ハン、どうってことねえな)

インターフェイス接続回路の頬がつり上がった。

ミサカ達の体から、電光が迸る。

「審査開始だ欠陥品共オ!!!」ガラス

インターフェイス接続回路の音が響き、ミサカ達も動き出した。

「……!!」

無言で、ミサカ10407号が電子の束を放射する。インターフェイス接続回路はとっさの計算でそれを全て拡散させ、10407号へと分解公式を伴った拳を構える。

「…っ！」

拳が10407号に届く瞬間、背後から電撃音が聞こえ、再度展開した公式で電流を無効化する。

「何だ何だあ！？出し惜しみしてんじゃねえぞ欠陥品ア！！」  
ガラクタ

電流を無効化しつつ、インターフェイス接続回路は10407号に拳をぶつけられなかった。

「！」

目の前から10407号の姿が消えた。そして数m横に、別のミサカ…10411号と彼女に腕を掴まれた10407号が現れた。接続回路の口元が、邪悪な笑みを作り上げる。

「なるほどねえ…テレポート空間移動か…」

どうやら10411号はテレポート空間移動の能力を会得したらしい。が見る限りレベルは3程度。

10407号を助ける、それもほんの数mずらしただけでも息切れしている。さすがに二人分の質量移動は難しいようだ。

しかし、テレポート空間移動できる分単体としての汎用性は他より高い。

「いいいいえ！！面白えよ！！面白くなってきたなあ！？」

ヒヒヒッ、と狂気じみた笑いを浮かべ、インターフェイス接続回路が言い放つ。

彼は足元に公式を働かせ、地割れを起こし、さらに形を変化させ、

今までの倍近い大きさの岩槍を飛び出させた。

さすがに攻撃パターンが分かっているのか、ミサカ達は跳躍あるいはステップ等で回避する…も。

「こんなデータはないよなあ!？」

「っ!？」

岩槍を横にステップして回避したミサカ…10409号を、石の驟雨が襲う。再度公式を組みなおし、それを気圧で吹き飛ばしたようだ。

ドズウン、という重厚な音がした。10407号が告げる。

「中間報告。審査開始1分4秒57、ミサカ10409号がロストしました、とミサカは規定に従い報告します」

言いながら、10407号が大きく左手を振りかぶった。発生したのは今までの比ではない、太い電子の束だった。

どうやら10407号は複数の能力を得られず、代わりに欠陥電気が強化されたらしい。実験の目的から考えると、言わば彼女は失敗作だ。

電流の威力は関係ない。微動だにせず、接続回路は嘲笑しながら、迫る電撃を分散させる。

「オイオイオイどうしたんだあ？早速一人やられちゃったぞ？」

接続回路が片手を広げ、そこに周囲の空気を集める。

「!？」

ミサカ達の顔が、わずかだが驚愕のそれに変わる。

工事中からずっと放置されていただろうコーンや機材が、インターフェイス接続回路の掌に向かつては掌に触れた瞬間見えなくなる。

(これは…！)

10406号を初めとするミサカ達は、気付いてしまった事実  
に恐怖した。

今インターフェイス接続回路は、周囲の気体を掌に集中させている。この際、急激に空気中の分子が動くため、それに応じて風が発生する。そしてその風は彼の掌に向かつて吹く。

即ち。

「あつ…！」

ミサカ10410号が、風に煽られ吹き飛ばされる。もちろん、方向は風向きに従いインターフェイス接続回路の掌へ。

「ヒヤハハッ！」

インターフェイス接続回路が笑う。

次の瞬間、10410号の腹には、細く白い腕が突き刺さっていた。

それを呆然と見つめながら、10407号は再度告げる。

「第二次中間報告。ミサカ10410号、審査開始1分28秒、口ストしました、とミサカは二次報告を済ませます」

その表情は相変わらずの無表情だ。

「もう二人逝つちまったなあ…これナニ？もう5人での戦略展開とか無理だよなあ。今回の実験目的が早くも崩れちまったぞ？」

腕を振り、腹に穴の空いた10410号を抜き捨てる。あらゆる物質を分解する彼の肌には、少女の血液はついていない。鈍い音を立て、地面に転がる少女の遺体。

「なんか飽きてきちまったなあ…ああ、つまんねえ。つまんねえからさ…」

気怠そうな表情から一変、ニイツ、とつり上がるインターフェイス接続回路の口元。

ミサカ達が身構える。

「そろそろ本気になってもいいか？」

\*

あまりに静かな空間。つい先ほどまで、能力者同士の戦闘が行われていたとは思えない。

彼は慣れた手付きで、ポケットから携帯を取り出した。

「榎野。今日の実験は終了だ」

『思ったより早かったな』

合成音声は驚愕というイントネーションまでは再現できていない。

「こんなモンだ」

実験開始から28分。思ったより残りのミサカ達が粘ったため、インターフェイス接続回路としては時間がかった方だ。

『まだ時間も早い。後10412号の審査を終えれば本実験は終了するが、どうする？今日中に終わらせるかね？』

槇野の提案に、インターフェイス接続回路は少し間をおいてから、

「そうだなあ…一体だけならやっちゃまうか」

『わかった。すぐに向かわせる。君は待機していてくれたまえ』

ブツツ、と通信が切れる。

携帯をポケットに収めつつ、インターフェイス接続回路はその灰色の髪を風になびかせ、背後を振り返った。

来たときと何ら変わらない、無機質な鉄骨で組まれた建物の骨組み。

その下で、頭が、腹が、手足が。体中ズタズタの少女の姿。

10407号。今回の戦闘に参加した妹達のリーダー役を務めていた個体だ。能力はレベル4クラスまで引き上げられたレディオノイズ欠陥電気。



インターフェイス  
接続回路が視線を移す。手足を投げ出して、元は事務所か何かであつたらしい小さな建物にめり込んでいる少女。

10408号。彼女は電磁力が特化したようで、鉄骨を利用しながら新たに会得したらしい、風による攻撃を繰り返してきたが、各関節を分離させた後、力づくで吹き飛ばさせてもらった。

インターフェイス  
接続回路は横目で、積み上げられた瓦礫の山を見た。

10409号。姿こそ見えないが、あの瓦礫の下敷きになっている。どのような能力を身につけたのか、見ることもなく殺した。

彼はそのまま視線を足元に持ってきた。そこにも少女の姿があつた。

10410号。彼女もまた、10409号同様能力を見ることなく、気体の収束と物体の分解を同時に行う戦法で腹に穴を開け殺した。

インターフェイス  
接続回路の隈のある目が、建物の骨組みに引っかかるようにして死んでいる少女を映す。

10411号。空間移動テレポートという実に厄介な能力を会得していた。リーダーの10407号を失い、最後の一人になっても必死に攻撃を繰り返した。空間移動テレポートの範囲から計算し、移動先に先回りして心臓を殴り抜いた。

決して、気分の良いものでもなかった。

インターフェイス  
接続回路も、戦っている間は一切の躊躇いもなかったのだが、こ  
うして『終わった後』を目にすると、少しばかりやましい気分にな  
る。

「…バカが」

こんな自分に呆れてしまう。何故、こんなにやり切れない気持ち  
になっているのか。

（後一人だ。後一人殺つちまえば、実験は終わる）

インターフェイス  
接続回路は強くなっていた。度重なる戦闘で、判断力や応用力に  
磨きが掛かっていくのを感じていた。

（俺は間違つちやいない）

最初に決意した。さらに強くなるために、最強に、無敵の能力者  
になるために。

しかし、冷静に分析してみると、彼は自分が実験に参加した理由  
は他にもあるように感じていた。

「……」

物憂げな表情で、彼は足元に転がる少女を抱き起こす。

体温は感じられない。ぽっかりと腹に空いた穴からは、血液すら  
滴らない。

彼は抱き起こした10410号から、それぞれのミサカに視線を

移していき、目を瞑って呟いた。

「……悪いな」

彼女たちには分かっていたのではないだろうか。自分たちに勝ち目がなく、ただデータの収集に利用されたただけだと言うことに。

使い捨てられるために生まれてきたように謂われ、実験、実験と倫理的配慮が必要ないと使われ続けてきた。

接続回路は、冷酷な人間だ。命令とあらば、10000人だろうが10000人だろうが殺せる人間だ。

そう思い、思われていた。

可能性を奪うことに、苦痛はなかった。

そう思い、思われていた。

だが、実際の彼は、それを演じているに過ぎないのかもしれない。

善人の心を持つであろう哀れな少女達を殺したことで、ようやくその可能性に気付くことができた。

しかし。

例え演じているだけだったとしても、彼にはこの道しかない。

痛いから、苦しいからと、そんな甘えは許されず、許さない。

「ミサカ10412号、指定エリアに到着しました」

だから、まずは実験を終わらせる。

「早いじゃねえか。オマエで最後なんだとよ」

周囲に妹達の死体はない。

おそらく彼が処理したのだろう。

彼の声は低く、冷たい。それは決意の表れだった。この暗く、孤  
独な、言われるままに動く生き方を貫くための。

そこに揺らぎはない。

そう思っていた。

しかし。

「……！」

現れた10412号が息を呑む。接続回路には、何がなんだかわ  
からない。

「おい、どうした」

振り返り、彼女の瞳を睨むような目つきで見る。10412号は、  
数拍置いて口を開いた。

「あなたが…インターフェイス接続回路だったのですかと、ミサカは驚きと同時に  
悲しみを露にします」

しかし、神とは悲劇を好む。

1 - 5 実験 悪魔ノ所業 (後書き)

何とももつたいないことをしたもんだと思います。

折角の多重能力進化実験なのに電撃以外に描写がない…。

後々の話にとっておきたかったというのが本音です(汗

五人も居ると描写が書きにくくて…。だからと言って一人だとあ  
っという間に終わってしまうので…。

反省しています。

次回も戦闘回になります。楽しみに

1 - 6 葛藤 惑ウ心 (前書き)

厨くさい内容でスミマセン)・・・(

「な……」

インターフェイス  
接続回路が目を見開く。

（今、コイツは何て言った？『あなたがインターフェイス接続回路だったのですか』だど？）

つまり、この個体、10412号は、事前にインターフェイス接続回路に出会っていたと言うことになる。

…いや！

「何言ってるんだ？オマエ。今までの個体と頭ん中繋いでんなら当然……」

「ミサカは本計画最終個体<sup>ラストナンバー</sup>、過去のミサカ達のデータを元に能力開発を受けました。研究者達からは『エクストラローラ多重観測』と呼ばれています。ミサカは今までのミサカとは異なり、単騎戦力としての研究を受けています。そのため、あなたが10212号から10411号までに勝利したという事実しか知りません。即ち……」

その表情は無表情ではなかった。悲しそうに眉を下げ、それでも毅然として言い放つ。

「あなたと公園で話したミサカです、とミサカは告白します」



…やはり。神なんてモノが居るとしたら、そいつは相当のひねくれ者だ。いや、それともこれは罰か？

インターフェイス  
接続回路は湧き上がる感情を殺し、静かに口を開き。

「ふーん…偶然ってのもあるモンだな。さて、始めるか」

無理矢理口の端をつり上げ、躊躇の欠片も見せないように努める。

すると、10412号はシュツ、と手を挙げた。

「実験の中止を提案します、とミサカはあなたの顔をまっすぐに見て訴えます」

時間が止まった気がした。インターフェイス接続回路の最新式CPU並みの頭脳ですら、言われたことの理解に時間を要した。言っている言葉の意味は分かった。しかし、理解は及ばない。

「…はあ？」

侮蔑するような響きすらする彼の声。10412号は続ける。

「ミサカはあなたと戦えません。いえ、戦いたくありません、とミサカは痛む心中を吐露します」

彼女が口を開く度。

彼の頭脳は情報の処理に惑う。

(何…言ってるんだコイツ)

シークレットナンバー  
非公式の超能力者としてのプライド。

(戦えない？戦いたくない？は？なんだそれは)

公園で感じた微かな、穏やかな感情。

(ふざけてんのか？これは実験なんだぞ？俺の実験であると同時に、オマエらの実験なんだぞ？)

暗い道に響く、自分を必要とする声。

(それを拒否するってのはなんなんだ？訳が…わからねえ)

切に訴えるような瞳で、真っ直ぐにこちらを見つめ続ける少女。

「199体のミサカはあなたと実験として戦い、敗北しましたが、ですが、ミサカはあなたの別の一面を知ってしまっています」

脳が急速に回転する。その先を聞くなと精神に呼びかける。

しかし、混乱した接続回路の精神は、プライドの防御反応すら狂わせていた。

「あなたが、空腹の子猫に餌を与えるような優しい気質を持ち、本当は他者とのコミュニケーションを望んでいるということを、とミサカは分析します」

自分が…優しい？

他者とのコミュニケーションを望んでいる…？

(ふざけるな…！)

理性が、壊れる。

「黙れえええええエエエエエ！…！」

彼の足下が、周囲の空気が、凄まじいまでの唸りを上げる。

「…っ！やめて下さい、とミサカは再度呼びかけ」

「うるせえんだよオオオオオオオ！…！」

彼の周りに、5つの空気の固まりが出現する。同時に、地面が地割れを起こす。

10412号は身構えた。

「お願いします、やめて下さい、とミサカは再三説得を試みます！」

「却下だっつってんだろおがあああああ！…！」

インターフェイス  
接続回路の叫びがこだました。同時に解放される5つの巨大な空気砲。10412号は鉄骨に張り付き、鉄骨群の中へと逃げていく。

「ヒヤハハッ！逃がすかあああ！…！」

彼は片足のかかとを上げ、地面との間に収束させた空気を解放する。

さながらロケットのように跳び上がるインターフェイス接続回路。空中で再度集束解放し、正面へと突き進む。重力による下向きの力を、空気の小爆発による浮力でカバーし、鉄骨群へと飛び込む。

「お願いします！とミサカは……」

「黙れ！」

一度鉄骨に着地し、彼は鉄骨それに対して公式を働かせる。

飛び出す鉄の刃。それは10412号へと向かっていく。

「ヒヤハハハッ！実験終りよおおっ！！」

10412号の降り立つであろう作業用の足場。隣接した鉄骨から、狂気の刃が襲いかかる。

が。

「何っ！？」

慣性に従い、落下運動していたはずの10412号は、突如として姿を消した。

インターフェイス接続回路が驚愕していると、ちょうど彼の乗っている鉄骨からねじれの位置にある鉄骨に、茶髪の少女が現れた。

「お願いします、とミサカは何度目かの説得を試みます……」

それを見て、くくっ、と笑うインターフェイス接続回路。

「へえ…オマエも空間移動テレポートできるのか。ヒヤハハッ！いいねえ！最終ラストランパー個体だけはある！」

言いながら、彼は10412号の居る鉄骨へと乗り移った。

「何故、あなたはそんなに実験を継続したいのですか？」とミサカは問いかけます」

10412号が、棒立ちのまま口を開く。

「決まってるだろ。俺が強くなるためだ」

接続回路インターフェイスが即答する。空間移動能力を目にし、いくらか頭が冷えたらしい。

「前にも、そんなことを言った人物がいました、とミサカはネットワークから外される前の記憶を辿ります」

「あん？」

10412号は続ける。

「絶対能力進化実験…被験者、一方通行アクセラレータの言葉です」

聞いて、接続回路は眉をひそめた。

「第一位のことなんざどうでもいい」

「ミサカ達の上位個体はこう推測しています。一方通行アクセラレータは、本当

は実験をしたくなかった。しかし絶対能力者という肩書きを得て、これ以上他人を傷つけないためには仕方がなかった』と、ミサカは要約して話します」

さらに、インターフェイス接続回路は目を細めた。

「あなたにも、通じるものがあるのでは？  
と、ミサカは今までの経緯から推測します」

その推測は正しい。インターフェイス接続回路は心の中で肯定する。が。

「…ねえよ」

俯き、低い声で彼は呟いた。

「俺にはそんなご大層な理由はねえ。ただ…強くなりてえただけだ！」

「…っ！」

再びの空気砲が、10412号を不意撃ちする。  
反応しきれず、落下する10412号。

「…！」

無言で、足に磁場を発生させ、二階部分の柱へと吸着する。

「ヒヤハハハハッ！」

狂ったような笑いを響かせ、インターフェイス接続回路が真上から落ちてくる。重

力で数倍の威力を伴うであろう彼の右足が、10412号を襲う。彼女はすぐさま空間移動し、刃が突き刺さったままの作業台へと降り立った。

「お願いします、とミサカは…」

10412号が振り返るが、そこに接続回路の姿はない。

周囲を見回すも、彼の姿はどこにもなかった。

「…?」

不気味なほど静かな空間。油断せず、10412号は目を凝らす。

(…どこに…?)

360度見回し、頭上も確認するが、姿はない。

下に降りようと、10412号が空間移動し、移動先の空中に出た瞬間。

「待ってましたあ!!」

「ッ!?!」

瞬間、10412号は世界が90度傾くを感じた。

空中1メートル地点から、うつ伏せに地面に叩きつけられる。

これは特に能力は使っていない。単に移動先にやってきた彼女の

首を掴み、全体重をかけた右手でのしかかっただけだ。

10412号の首を地面に押しつけたまま、インターフェイス接続回路は嘲笑う。

「楽しかったぜ？エクストローラ多重観測。俺としたことが、ちつとばっか躊躇っ  
ちまったよ……」

「うぐっ……」

地面にめり込むかと思うほどに押し付けられ、10412号が呻  
く。

「さあーて、どうしてやるうか」

このまま首と体を分断するか。

岩槍で貫くか。

はたまた穴に落として生き埋めにするか。

殺り方過程はいくらでも用意できる。

「オイオイどうした？テレポート空間移動しないのか？」

もっとも、10412号とて分かっているだろう。テレポート空間移動した  
ところで、インターフェイスどの道接続回路の射程範囲。

「……ミサカ……は……」

10412号の呻き声が、言葉の形を取った。インターフェイス接続回路の目が一  
瞬見開かれる。が、それは再び嘲笑のそれへと変わった。



「何だ？言ってみろよ。遺言として聞いてやる」

「ミ…サカは、あなた…と…」

「またしても脳が警告を発する。話を聞くなと促す。

「あなた…と、戦い…たく、ありません…」

「…ッ！まだ言うかテメエはあつ！」

「押さえる力をさらに強める。

「ぐっ…ミサカは…また…あなたと、あの猫と…」

「ッ…ふざけんなあ！あなたかが一時間程度の会話で勝手に親近感抱いてんじゃねえ！」

「誰に向けての言葉なのか。

接続回路インターフェイスの渾身の蹴りが、10412号の脇腹を襲う。

「うがっ！」

少女の悲鳴。苦痛に歪む顔。それを見る度、接続回路インターフェイスも物理的でない痛みを感じる。

二度、三度、四度、五度…同じ箇所を、何度も蹴る。

「ミっ…サカっ…はっ…あっ…！なた、と…」

「うあゝ あアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」  
ついに脚に宿らせる、人体分解の公式。

終わる。これをこの甘ったれに当てた瞬間、終わる。

実験も、この個体の命も、この矛盾を孕んだバカバカしい気持ちも。

…変わるかもしれない、可能性も。せんだくし

「止めるおっ!!」

「!」

ピタッ、と。インターフェイス接続回路の動きが止まった。

背後からの第三の声。 ゆっくりと、インターフェイス接続回路は振り向いた。

「そいつにこれ以上手を出すな…今すぐそいつから離れろっ!!」

「この…声は…と、ミサカは聞き覚えの、ある声に…」

そこには、黒髪のツンツン頭が目立つ、一人の少年の姿があった。

1 - 6 葛藤 惑ウ心 (後書き)

遂に現れました正統派主人公。

後の展開はお約束(?) (笑)

次回も戦闘回です。

それでは次回、お楽しみに

1・7 幻想殺し《イメージンプレイヤー》（前書き）

VS上条さん です。いやあ、説教シーンって大変ですね（  
^ ; ^）

1 - 7 幻想殺し（エイマジンブレイカー）

「……はあ？」

浴びせられた大声に、インターフェイス接続回路が振り返る。

「なんだオマエ。部外者のクセしてなに勝手に口挟んできてんだ？」

「つべこべ言わず10412号から離れろ！！」そいつ

現れた少年、上条当麻は、再三の叫びを発した。インターフェイス接続回路は笑う。

「……何なのオマエ。何？正義のヒーローにでもなりきってんのか？まあ、んなこたあどうでもいい」

かつかつと、上条へと歩み寄る。3mほどまで近付くと、彼は値踏みするように上条を眺め、

「こっちは大事な実験中なんだよ……テメエのクソみてえな正義感なんざ、ここじゃ何の意味もねえ。くだらねえヒーローごっこはよそでやりやがれ」

「……確かにな。オレのしてることは、お前やこの実験を始めた奴らにとつてはただのヒーローごっこかもしれない。部外者の勝手な介入でしかないかもしれない。でも、俺はあいつと……御坂と約束した」

物怖じせず、上条は毅然とした表情で告げる。

「必ず、10412号を助け出すつてな」

上条の脳裏には勝ち気な少女の、弱気な表情が映っていた。また妹達シスターズが実験に利用されると打ち明けてきた、あの表情が。

そんな姿を見て接続回路インターフェイスはしばらく思考した後、フウと小さくため息をついた。

「どっから情報が漏れたんだか……ま、どうでもいいんだがなあ」

こきこきと首をならし、口端を吊り上げて上条を睨みつける。緋色の瞳に、黒髪の少年が映し出される。

「10412号の相手は後回しだ。まずは部外者のテメエから片付けてやる」

「その前に聞かせる……なんでまだ実験を続ける。10412号はお前と戦いたくないって言うてんのに」

殺気を感じとったか、上条が身構えた。接続回路インターフェイスはわずかに眉根を寄せるも、あくまで平静に答える。

「……ハン、盗み聞きたあ感心しねえなあ。ここに来たつうこたあ、わざわざ説明しなくてもわかんたろ？」

接続回路インターフェイスは尊大な調子で腕を広げ、顔に笑みを刻んでいく。

「こいつはその妹達ガラクタを主旨に見せかけた、俺が強くなるための実験だ。一人残らずブツ殺さねえと『成功』にはならねえ。大体、被験体に拒否権も人権もねえんだよ」

「お前が強くなるため？人権がない？だから他の妹達シスターズを殺してきたって言うのか」

上条の問いに接続回路インターフェイスは答えず、ただ不適に笑ってみせた。その通りだ、そう暗に告げる。上条は目を鋭くし、

「そうかよ……なら教えてやる。お前は雑魚だ」

「んだと？」

平静を保っていた接続回路インターフェイスの眉が、ピクリと動いた。明らか不快が表情に現れる。それを知ってか知らずか、黒髪の少年は続ける。

「確かに何人もの人間を使って何通りものパターンで戦闘を行えば、数字上は強くなれるかもしれない。だが、本当の意味でメエは弱い。総括理事会直属の非公式シークレットナンバーのレベル5……そんなくだらぬないプライドにすがって、世界を狭めてるだけの大馬鹿野郎だ」

上条の言葉が、接続回路インターフェイスの自制心を破壊していく。

「……俺が……弱いだと？」

こんな格下が。

俺に向かつて。

弱いだと？

「ハッ、ハハッ。……どの口利いてんだあクソ野郎……面白え。面

白えなあオマエ……」

「……」

上条が身構える。接続回路インターフェイスから、今までの比ではない凄まじい殺気が放たれていく。

無言のまま、接続回路インターフェイスは足元に公式を働かせた。瞬時に形成される岩槍。上条が身を翻す。

「うおっ……」

「低レベルの格下がいきがつてんじゃねえよ……身の程わきまえやがれこのクソ野郎がア……」

立て続けに飛び出す岩槍。さらに接続回路インターフェイスは手を広げ、空気を圧縮し上条へと放射する。並び立てた岩槍を、車をも跳ね飛ばす烈風が吹き飛ばす。上条の居た空間に、無数の岩がシャワーとなって降り注ぐ。

「ヒヤハハッ！！アヒヤハハハハッ！！どうですかぁヒーロー気取りィ！！まだ立ち上がれますかねえ！？エヒヤハハハハッ！！」

狂気の笑いを繰り返し、接続回路インターフェイスが砂埃の中に呼びかけた。

返事はない。

裂けるような笑みを少しずつ和らげ、彼はポケットに手を入れる。とりあえずは小休止だ。

「クソ野郎が……ノコノコ出てきたりしなけりゃ、死なずにすんだ



つてのに」

さて……と彼は背後を振り返った。10412号にとどめを刺すためである。が。

「あん……?」

そこに茶髪の少女の姿はなかった。一応辺りを見回してみるが、彼女の姿はやはりない。彼は少し目を細め、

「尻尾巻いて逃げ出したか……?」

それは困る。それでは実験が完了しないではないか。

だが、心のどこかで安堵している部分があることを、インターフェイス接続回路は自覚しつつあった。そんな自分の変化に反吐を吐きたくなくなるが。

「逃げ出してなんかいねえよ」

「ッ!」

背後からの声。驚愕の表情で、インターフェイス接続回路が振り返る。

そこに居たのは、変わらぬ瞳でこちらを見据える、あの少年。

上条当麻。

「デメエ、どうやって……」

あんぐりと口を開けるインターフェイス接続回路。あの攻撃は仮に生き残れたとしても重傷にはなつたはずだ。にも拘わらず、上条には傷一つついていない。

こんなことは、有り得ない……。

「あいつのお陰さ」

インターフェイス接続回路の混乱を察してか、上条が背後に親指を立てる。その先にいたのは、鉄骨柱にもたれる10412号。思わず目を見開く。

「あいつは頼まれてもいないのに、体に鞭打つてオレを助けてくれたんだ。お前に無いものを、10412号は持つてる」

……俺にはなくて10412号にはあるモノ？なんだそれは。

胸を支配するのは混乱。どうして10412号はこの少年を助けたのか。何の利点があったのか。この自分から助けてもらうためか？この少年を守るためか？考えれば考えるほど、不快な感情が蓄積されていく。

「うるせえんだよ……おとなしく殺されるよクス野郎がああああ……」

もつ殺し方には拘らない。

空気圧で加速しながら、インターフェイス接続回路は分解公式を腕に宿らせる。

最初からこうすれば良かったのだ。10412号の行動は想定外だったが、あの様子ならもう上条に保険はない。

急速接近するインターフェイス接続回路。上条当麻は動かない。

(何だあ？ビビって動けねえのか？)

大きく拳を振りかぶった刹那、上条の胸に風穴が空くはずであった。

「な……」

パシッ……と。

有り得ない音が響き渡った。

それは上条の右手が、インターフェイス接続回路の左拳を受け止めた音。分解公式を発動させた、あらゆる物体を触れるだけで粉碎させられる左手をインターフェイス接続回路が混乱する中、上条はそのまま彼の左手を掴み、背負い投げの容量で投げ飛ばした。

「ぐぶあっ……!」

思い切り地面にたたきつけられ、インターフェイス接続回路が呻く。物理的な痛み。おそらく初めての経験だった。

(……どうなってやがる……こんなこと……あり得る、はずが……)

よるよると立ち上がるも、打たれ慣れていない彼の体はこれだけでもびくびくと震えている。

「まだ分からねえか？アイツにあって、お前にないものが」

上条の厳しい声が響く。

何が、『まだ分からねえか？』だ。

レベル5でもないのに。

格下の癖に。

「……調子乗ってんじゃねえぞクソ虫がアアアアアアアアアア！！」

吠えながら、接続回路は上条の立つ地面に目を向けた。その座標を算出し、上条の真下に深さ5メートル近い穴を出現させる。だが、上条はまるで予期していたかのようにそれを避け、またまっすぐにこちらへと向かってきた。

打ってくるのは左のストレート。避けることなど容易い。

インターフェイス  
接続回路はそれを避け、上条の左斜め前へと移動し分解公式を構成するも、それが使われるよりも早く、右の拳が飛び込んできた。

「じぶつ……！！？」

無様に回転しながらよるめいて、インターフェイス接続回路は口の中に広がった痛み<sub>に</sub>に歯を食いしばる。口の端から血が漏れるのを、袖で拭って鉄の味を噛み締める。

なんだこれは。

痛いだと？血が出るだと？ぶざけるな。こんなのは自分ではない。

『シークレットナンバー非公式の超能力者』の姿ではない。しかもこんな醜態を作り上げたのは、学園都市最強の超能力者<sup>レベル5</sup>ではなく名も知らぬ格下。築き上げたプライドが、引き裂かれていくのを感じる。

(どう考えてもおかしい……まさか、こいつも上層部に隠された能力者、なのか?)

そうでも思わねば自分を保てそうにない。

インターフェイス接続回路が体勢を立て直すも、再び右拳が飛び込んでくる。二撃、三撃、四撃、五撃……連続で繰り出される、上条の右拳。

「ぐほあっ……!!」

このままではジリ貧だ。理由はわからないが、この少年には分解が通じない。とはいえ、肉弾戦では向こうに分がある。

息切れしながら、インターフェイス接続回路は一度距離をとった。

「……御坂たち(あいつら)に頼まれてんだ。早く実験を中止しろ!!」

インターフェイス接続回路は頷かない。それを見るや、上条は構えた拳を静かに下ろした。

「お前はこの実験を続けてること……強くなるためって言ったよな。本当にそれだけなのか」

「ハア……ハア……ぐっ……なに?」

「お前は本当は、失うのが……踏み出すのが怖かっただけじゃない

のか？」

「！」

上条の言葉に、インターフェイス接続回路が目を見開く。

「10412号から聞いた。テメエは『シークレットナンバー非公式の超能力者』として常に陰に隠れて生きてきた。ずっと1人で、一緒に過ごす奴もいなくって、寂しかったんじゃないのか。だから、お前を必要としてくれる上の連中にすがって、お前はそこに凝り固まったんじゃないのか。10412号は言った。またお前と子猫の世話をしたいって一緒に話したいって。上の連中だけじゃなく、10412号もお前を必要としてるってこと、お前も本当は気付いてるんじゃないのか？」

「……！」

インターフェイス接続回路が息を呑む。

「お前が実験を続ける最大の理由は、上の連中からもつと信頼されたいからじゃないのか。もつとずっと、お前の存在を認めてもらいたいからじゃないのか。お前がそれでいいなら構わない。だが、それで10412号が殺されていいことにはならない。本当はお前も嫌なんじゃないのか？」

「ッ……！」

「本当は妹達を……いや、誰も殺したくなかったんじゃないのか。認められるために、言われるままにやっただけで、テメエ自身は嫌だったんじゃないのかよ！！テメエが本当に選びたかったのは……」

10412号の方だったんじゃないのか!!」

そうかもしれない。やろうと思えば、自分は10412号をあっという間に殺せたはずだ。

なのに殺せなかった。

茂田：無機質な合成音声だけだったのに、自分は彼に依存していた。唯一会話できる相手だったから。

だから、偶然出逢った10412号と話した時、楽しいと感じたのかもしれない。今までにない、仕事以外の話を他人としたことで

(俺は…)

抑えていた感情が染み出してくる。自分が真に求めたもの……普通ならありふれた、誰もが経験するモノが。

だが、彼はこれで「わかった、実験をやめる」と言える性格ではない。

「分かった口利いてんじゃないぞ…格下ア!!」

猛る<sup>インターフェイス</sup>接続回路。無駄とわかっていても、分解公式を宿した脚を接近して振り上げる。

「この分からず屋が…っ!」

上条は振り上げられた脚を避け、<sup>インターフェイス</sup>接続回路に接近する。

「うおおおあああ!!」

「チツ……」

インターフェイス  
接続回路は正面に向けて空気を爆発させ、上条から距離をとった向かってきた上条は生まれた烈風に阻まれ、吹き飛ばされる。

(肉弾戦じゃ一方的に削られるばかりだ……。どうする、あのクソ野郎をブチのめす方法は……)

一度使った手をもう一度使うか？ いや、手段を先読みされていたら何の意味もない。岩槍と烈風で起こした岩石のシャワー。かわすことも難しい範囲にもう一度バラ撒けば、致命傷を与えられるか。攻撃の材料はこの地上に無限に存在する。大気も大地も、ありとあらゆる物質は自分の掌中だ。方法はいくらかでも用意できる。この場で新しく作り上げたっていい。

だが。

(……こいつは一体何の能力者なんだ？)

こちらの能力が、分解がまるで通じない敵。一体どうすればそんなことができるのか、予想すらできない相手。

その秘密を解き明かさないことには、手が打てない。

秘密？

コンマ数秒の思考の中で、引っかかる物があった。ついさつき、この少年から受けた殴打の応酬。そこに見た、あからさまな不自然な。



( 右手 )

そつだ。こいつは攻撃の際、右手しか使っていない。連続して相手を攻撃しようと言うのなら、拳を引き戻す動作を短縮するため左手もしくは脚などと交互に使った方が効率がいい。わざわざあんな方法を探るということは。

( 右手以外は無能力者……？ )

とするなら。

( 右手以外に触れちまえばそれで終わりってコトじゃねえか!! )

くきき、と接続回路は金具が軋むような、奇妙な声を発した。次の一手が定まったのだ。

「くそっ……」

体勢を立て直し、上条は接続回路の方を見た。接続回路はそんな上条を満足そうに見やり、

「なあ一般人。テメエ、竜巻って見たことあつか？」

「竜巻？」

上条が聞き返す。接続回路はゆっくりと白い腕を動かし、広げてもせた。

「まあ、こんな街ん中じゃテレビのニュースで見る程度かもしれないけどよ。ありゃあ、積乱雲の底から下方向に向かって風が渦巻い

てるわけなんだが、そいつの威力ってヤツは木造家屋なんかを一瞬で吹っ飛ばしちまうくれえなんだと。で、だ」

言いながら、灰色の髪の子少年が、天に向けて両腕を掲げる。そこに向かって吹き込んでいく、周囲の空気。

「俺の能力は、ありとあらゆる物体・物質・分子・原子を結合・分解する能力だ。ついでに言えば、空気中の気体も副次的に俺の思うままになる。第一位ほどじゃねえが、応用次第で『流れ』もねじ曲げることができんだよ。……さあて問題です」

「うわっ……」

風圧に、上条が体勢を崩した。さながらブラックホールのように、周囲の機材や瓦礫、草、組まれていない鉄骨、さらにはひび割れたコンクリートの地面までが、インターフェイス接続回路の掌に吸い込まれては消えていく。

「俺は何をどおしたでしょうか？……ヒヒッ、ヒヒヤハッ、アギヤハハハハハハハハハハハハッ！！」

インターフェイス接続回路の不気味な笑いがこだまする。ここまで自分を追い詰めた相手だ。一瞬でカタをつけたのでは割に合わない。じわじわと傷つけ少しずつ命を削り取ってやる。何も知らない一般人如きがこの体に触れ、ひとつのプライドを打ち砕いた以上。

「ギヤハハハハッ！！どおしたよおクソつたれえ！！縮こまっちゃまってビビってんのかあ！？」

地面に突き刺さったポールに必死にしがみつくと上条を、インターフェイス接続回路

は嘲笑する。

頑丈に組まれているはずの鉄骨群ですら、その風圧にミシミシと音を立てていた。上条の周囲から飛んでいくガラスや瓦礫の破片が、彼の衣服や肌を切り、赤い液体が染み出し滴る。

これだ。

これこそが『インターフェイス接続回路』。

これこそが無能力者<sup>レベル0</sup>。

格下と格上の関係。それは絶対に揺らがない。あの一方通行の一件も関係ない。

オレ接続回路はオレ接続回路だ。

アクセラレータ一方通行じゃない。

上条当麻は焦っていた。

このままではじきに体を持って行かれてしまう。分解を防げるのは右手だけ。それ以外に触れられれば終わりだ。上条は歯を食いしばり、真っ直ぐにインターフェイス接続回路の顔を見た。

「そんなにまでして…！ テメエは縛られていたいのか！！ 任務だとか命令だとか！！ 言いなりになって生きていきたいのか！！」

上条が声を張り上げる。インターフェイス接続回路は目を剥いて、

「うるせえつつつてんだろ格下ア！！俺は今までこうして生きてきた！！他の道なんざ……」

「歩いてもねえ道を否定すんな！！踏み込んでみるよ！！あいつやその猫と一緒に！」

「そんな甘い道じゃ力は手に入らねんだよ！！俺は……」

「強くなりたいなら教えてやる！！」

間合いを見極めるように数瞬置いて、上条が支えのポールから自ら手を離す。意外な行動に、インターフェイス接続回路も目を見張った。

「お前に決定的に足りないモノ……そいつはっ！！」

真っ直ぐにこちらへ向かってくる上条。

彼は軽く跳躍すると、なんと自分から風に巻き込まれた。渦を巻く風向に従い、インターフェイス接続回路に接触する目の前で、上条の体が反転する。これなら体には触れられない。

「自分以外の何かを……！！」

「！！」

空中で逆さまになった上条の伸ばした右手が、インターフェイス接続回路の手に触れる。

刹那、小型のブラックホールは何事もなかったかのように消え去った。

背後に降り立つ上条。思わずインターフェイス接続回路が振り向いた。振り向く彼の眼前には、既に上条の右拳が迫っていた。が、

「誰かを守りたい気持ちだあつ!!」

顔面に浴びせられた一撃。吹っ飛び、ごろごろと転がった後、鉄骨柱にぶつかってようやく止まる。

「……!……ぐ……がふあつ……」

動けない。いや。動かない。

びくびくと体が痙攣していて、力もまるで入らない。

「テメエの幻想は……ここまでだ」

幻想……。

意識が遠のいていくのを感じる。痛み慣れていないせいもあるのだろつ。

(俺が……この俺が、負けた……)

そんな自問を最後に、彼の意識は途絶えた。

\*\*\*

『インターフェイス  
接続回路が敗れただと？』

「ええ。第113次多重能力進化実験の最中、乱入してきたレベル0の少年に」

暗い室内で、年輩の男性の声が反響する。通話相手の声は、茂田らと同じ合成音声だ。

『またか…絶対能力進化実験の時もそうだったな。あの時は一方通行だったか。して、彼は今どこに？』

「大山の班に都市内の病院へ運ばれたそうです。まあ、デリケートな体してますからねえ奴は」

『そうか。構わん。代わりに手配はできているかね？』

「ええ、何とか」

年輩の声は、どこか気さくな印象を持たせる。

『計画を変更した方が良さそうだ。多重能力進化実験は『多重観測』を以て一時凍結。接続回路は非公式の超能力者から解任だ』

「仰せの通りに」

ブツッ、という馴染みの音と共に、回線が切断された。

「さて、どうするんだ？接続回路」

人知れず、男性はぽつりと呟いた。

1・7 幻想殺し（エイマジンブレイカー）（後書き）

とりあえず一区切りということ。これで言わば「非公式の超能力者編」は終わりです。まだまだ続きますのでどうか最後までご覧ください。

冒頭にも書きましたが、説教シーンって大変ですね（汗）

何度も書き直してしまいましたよ。後、最後のは書いてて恥ずかしくなりました（笑）

「誰かを守りたい気持ちだっ！！」

ってやつです。もっと他に思いつけなかって思ってたんですが、接続回路にストレートに届かせるにはこれくらいがいいかなど。

原作キャラはイメージ崩壊が本当に怖いので、書くのが億劫になっ  
てしまいますね。

さて、今回の大目玉は上条さんもそうですが、小型のブラックホールです。上条さんが反転するのは多少無理があるかなって思いましたが、ラノベということでご勘弁を（汗）

プラズマって考えもありましたが、最後くらいは一方通行にはできないことをさせたかったのでブラックホールになりました。比喩表現なので厳密には異なりますが。

さて、三連戦だったので次回は会話回というかおとなしい内容になります。



それでは、長くなりましたが、次回お楽しみに

**章末特典 キャラクター紹介？ 接続回路へインターフェイス (前書き)**

後々、好物等も追加されます。

章末特典 キャラクター紹介? 接続回路へインターフェイス

本名不明

年齢：書類上16歳

身長：169cm

体重：51?

血液型：不明

来歴：

上層部の命令に従う非公式の超能力者<sup>レベル5</sup>。『非公式の超能力者<sup>シークレットナンバー</sup>』と呼ばれる立場にあり、特定の人間以外との親密な接触はできないように常に監視されている。それは非公式という立場上、能力を公にしない為でもある。そのため、接続回路はインターフェイス<sup>インターフェイス</sup>は二年ほどの間『エージェント』の声以外との対話をほとんどしたことがない。

幼少期に特例能力者多重遺伝子操作研究所に引き取られ、そこで能力改造を受けており、その際に何人かの研究員と会話をしているが、決して穏やかな内容ではなく接続回路自身も施設内の人間に敵意を持っていた。施設を出てからは超能力研究機関を出入りしており、そこでも研究員とは関わりを持ってしているものの、性格柄まともに取り合ったこともなくあくまで必要だから出入りしていた程度の認識である。

多重能力進化実験参加間際に妹達<sup>シスターズ</sup>10412号と経験したことの無い『普通の会話』を行い、それ以来彼女の事を気にかけるようになる。同実験で上条当麻に敗れたことで『非公式の超能力者<sup>シークレットナンバー</sup>』を解雇され、後盾を失ったがある程度の自由を手に入れた。

容姿関連：

元は不明だが、幼い時に受けた薬物投与で全体的に色素が薄く、アルビノに近い状態になっている。

そのため、髪の色は灰色で瞳は緋色。目の下には隈がある。夜型で昼間はほとんど外へ出ないため、肌の色は白い。顔そのものは端正である。髪型はロシア編アクセラレータ一方通行を参照。

性格関連：

幼少期の体験の影響なのか口調は汚く、相手を侮蔑し下に見る言動が目立つが、その本心は過失に恐怖する純粋なものである。

レベル5の中でも上位クラスの演算能力を持ち、81.1%の発現率でも素粒子レベルの操作が可能。物心ついたときには学園都市の研究機関で生活しており、身内については本人も知らない。

そのため会話相手は研究員ぐらいしかおらず、同年代の人間と会話したのは14歳の頃、『シークレットメンバー非公式の超能力者』として処理したグループのメンバーが初めてである。

いわゆる雑談をしたのはミサカ10412号こと多重観測が最初エクスプローラである。

故に多重観測エクスプローラに対しては非情になれず、そんな自分を不思議に思うと同時に妙な安らぎを感じている。

趣味嗜好：

甘いものが好物で、イチゴ味のものに目がない。酸味のあるイチゴそのものにはあまり興味はなく、あくまでも加工された味が好き。食べ物に関しては好き嫌いが無い。

能力：

レベル5の『インターフェイス接続回路』。

認識したありとあらゆる物体・物質・分子・原子を結合・分解し、素粒子レベルでの操作をも可能とする。

分解には対象の構成粒子を把握することが必要であり、把握していないモノは分解できない。銃弾などの飛来物は、物質そのものを分解すると同時に力を媒介する素粒子を臨機応変に排除しているため、衝撃波などの影響を受けない。

尚、「分子・原子レベル」の粒子分解をする時は対象の構成物によつて分解所要時間が変化する。例えば、人体のような複雑な物体は全体を粒子分解するのに数秒かかり、石などの単純な構成の物体は一瞬で分解できる。構成さえ同じならば大きさは関係ない。ちなみに人体でも局所的な分解であれば一秒未満で分解することも可能である。

接続にも同じことが言え、素材を理解し組み方さえわかれば、その粒子量に応じた物体を生成することもできる。ただし、これには素材となる粒子が必要である。本来結合するはずのないものでも結合でき、人間の皮膚とコンクリート壁を結合させることもできる。

空気中に漂う粒子を一点に集めるもしくはA地点からB地点へと移動する座標を設定することで副次的に風を起こすことが出来る。空気においてはひとつの物体と認識し、認識さえ出来れば数キロ先までの風の流れを作ること可能である。ただ前者ならば全方位、後者ならば直線的にしか流れを作れないため、細かい風向の操作などは出来ない。

非常に応用性の高い能力であり、使い次第では『窒素装甲』などと同様の結果を作り出すことも可能である。

服装：

第一章～第四章 無地の黒Tシャツ。七分袖。

第五章↳ 黒の長袖Tシャツ。全体に灰色の模様がある。

第九章↳ シルバーグレーの防寒着。

章末特典 キャラクター紹介？ 接続回路へインターフェイス (後書き)

CVイメージ：櫻井孝宏

2 - 1 変化 光ノ世界 (前書き)

「なんでこんなところで切るのかなーって、ミサカはミサカは不思議に思ったり」

シスターズ シリアルナンバー  
妹達・検体番号20001号 打ち止め(ラストオーダー)



2 - 1 変化 光ノ世界

少年が目覚めたとき、そこは白い天井だった。

(俺は…)

意識が失せる前、確かに自分はその工事現場に居た。本来であれば、目が覚めるのはそこはずだ。

(ここは…病院ってヤツか?)

何もかもが白系色で構成された、清潔感漂う一室。見る限り、この部屋には接続回路インターフェイス以外に誰もいない。

軽く体を動かしてみるも、打撲箇所の痛みが邪魔になり、スムーズに動かせなかった。

(俺は…確か、実験の最中に…)

ハッ、と接続回路インターフェイスが気付く。

痛む体を動かし、携帯を探す。しかし、病室着のポケットに入っているはずもない。

ベッドの側に置いてあるチェストには、色とりどりの造花が生けられているだけ。

ここは病院なのだ。彼の衣服に携帯が入っていることに気付けば、手近なところに置いておくはずだ。

つまり…。

「回収、されたのか…」

おそらく、見舞いの名目でここへ来た槇野か上層部の人間が、こっさり回収していったのだろう。

回収。それはつまり、シークレットナンバー非公式の超能力者から外されたというわけだ。

だからと言って、彼が公式の超能力者になるわけでもないが。

「…チクシヨウ」

誰もいない病室で、彼は1人毒づいた。

シークレットナンバー非公式のレベル5を解任させられたからではない。

あれほど失うことを恐れていたはずの肩書き。

何千人も殺してまで、守ろうとした肩書き。

……なのに。

悔しさや過失感よりも、安堵感の方が大きかったからである。

(くそつたれが…)

『うん…病院のごはんはイマイチ美味しくなくて食が進まない！  
つて、ミサカはミサカは憤慨してみたり！』

『うつせエぞクソガキ。飯くらい黙って食いやがれ』

何やら隣の病室が騒がしい。言っていることまではわからないが、どうも小さな子供と若い男性がいるようだ。男性の声からすると兄妹だろうか？

『でもでも！あなただってあんまり食べてないって、ミサカはミサカは指摘してみる！』

『俺ア腹が減ってねエだけだ』

『じゃあミサカもお腹が減ってないから食べないって、ミサカはミサカはわざとらしくお腹をさすって…ぐうう』

『減ってんじゃないか。バカ言ってるねエでさっさと食べ。そして寝ろ』

『うう…ヨミカワの差し入れメロンが懐かしいって、ミサカはミサカは現実逃避してみたり…』

良くはわからないが、仲が良さそうに思えた。

自分はあるな会話に憧れていただけなのかもしれない。それがいつしか形を変え、こんな結果に結びついて…。

「チツ…」

彼は一度舌打ちすると、目を瞑り、とりあえず今後の方策を練ることにした。

さし当たっては拠点の確保だ。今彼の住んでいるアパートは、上層部からの支給品。この病室よりも狭い一部屋だが、特にそう言ったことに拘らない彼にとっては十分だった。

そんな生活拠点だが、剥奪されるかは微妙なところだった。

目立たないようにと質素なアパートを選んだため、スキルアウト対策もなく、学園都市内の底辺レベルのセキュリティだ。要するに、簡素な鍵だけ。

こんなものまで剥奪はしないだろうが、どの道インターフェイス接続回路は場所を移すつもりでいた。

大して使わなかった給与と、デュアルスキルシフト多重能力進化実験の契約料がたんまり残っているから、一気に公務員クラスのマンションに移ることも不可能ではない。

それであればどこかの学校に籍を置いて、寮を貸してもらおうくらいだが、あいにく学校に通うには諸々の条件が欠けている。

…と、というか。

(俺はこれから何すりゃいいんだ?)

拠点の確保は何とかなるだろうし、金銭的にも問題はない。

だが、目的が存在しない。

今までは勝手に湧いてきたそれが、全く出てこない。

自由にはなつたがその使い道がないのでは、宝の持ち腐れだ。

思い出すのはあの少年、上条当麻の台詞。

(誰かを守りたいと思う気持ち…)

何だかんだで今までは、自分のことで手一杯だった。

他人について考えるほどの余裕がなかったのだ。

(そいつを俺は…見つけられんのか)

答えの浮かばない問いが、ぐるぐると頭を回っていた。

\*

「うおっと…」

病院の廊下で、インターフェイス接続回路がよろめいた。

打撲というものを経験したことのない彼には、動かす度に痛む体が忌々しく感じられた。

打撲。そんな理由で入院。インターフェイス接続回路が。

仮に自分に友人が居たなら、笑われてしまうに決まっている。

まあ、いないのだが。

「くそ…」

ぎこちなく歩き、傍の長椅子に腰掛けると、彼はハアとため息をついた。

（情けねえ…）

今の自分を第三者の視点から見ると、あまりに情けなさすぎだ。自分でも笑い飛ばしてやりたくなる。

（ん…）

ふと気配を感じ、そちらを見てみると、何やら怯えるような顔つきのお婦。何故かこちらを凝視している。

(なんだこの婆さん…喧嘩売ってるわけねえしな…ああ、そうか。この婆さんここに座りてえのか)

まあ見慣れない髪の色や鋭い顔つきを見れば無理もないかもしれない。

やれやれと、インターフェイス接続回路はぎこちなく立ち上がり、

「座れよ、婆さん」

老婦は戸惑った表情からやがて笑顔を見せ、頭を下げて腰を下ろした。

(誰かを守りたい…要は人のこと考えろってこつたる…ハン、バカが。しっかり影響されちまってんじゃねえか)

何だかんだで気分がいいことに、インターフェイス接続回路は自重気味に苦笑した。

\*\*\*

い。  
どうやら自分は表向き、喧嘩で怪我をしたことになっているらしい。

直接診察をしたカエル顔の医者が言っていた。

医者自身は何故かこちらの事情を知っており、しばらくの間はこの病室を貸し与えてくれるとも言っていた。上層部と何らかの繋がりがあるのだろう。

…シークレットナンバー非公式の超能力者を解任させれたとも言っていた。

まあ何にせよ、とりあえずはあの医者と言つとおりにしていれば事は済みそうだと、インターフェイス接続回路はいくらか楽な気分ベッドに寝そべっていた。

『ねーねー、トランプしようよーって、ミサカはミサカは現物を持つて頼んでみたり!』

『あア?少しくらいおとなしくしてらんねエのかオマエは』

『もう充分おとなしくしたもんって、ミサカはミサカは反論してみる!』

『延々と昔話音読してたじゃねエか。うるさくて昼寝もできやしねエ』

相変わらず、隣の部屋からは賑やかな声とそれを諭すような声が出していた。

それをBGMに、インターフェイス接続回路は眠りに落ちようと目を瞑るが、コンコンというノック音で瞼を上げる。

「誰だ?」

こんな時間に部屋を訪問する者に心当たりはない。

「エクスプローラ多重観測です、とミサカはミサカだけの固有名詞を名乗ります」

扉越しの声に、インターフェイス接続回路は目をむいた。

はい、とりあえず状況整理に一話です。次回は多重観測との対話  
がメインになってきます。しばらくは明るい話になります。戦闘シ  
ーンを盛り上げるためにも(笑)

ちなみに多重観測<sup>エクスプローラ</sup>なんですが、由来が分かる方いらっしゃいます  
か?居らしたらあなたは衛星とかお好きだと思えます。

これから前書きは登場人物風に書いてみます。良かったら  
読んでくださいね

それでは



2 - 2

白い道

灰色ノ心

(前書き)

「なんか隣が騒がしいな……」

学園都市最強の超能力者(レベル5)

一方通行  
アクセラレータ

（エクストロラ多重観測：！？）

思わぬ来訪者に、インターフェイス接続回路は動揺していた。

無理もない。インターフェイス接続回路にとって彼女との関係は被害者と加害者に他ならない。

例え受け取り方が異なっていたとしても。

「入室してもよろしいですか、とミサカは念のため確認をとります」  
扉の向こうから声。どう答えていいのかわからない。が、ここで拒む理由も見つからない。

「ああ…」

言つと、10412号ことエクストロラ多重観測は、スタスタと室内へ入ってきた。

あの時と変わらない女子制服を着て現れた彼女の腕の中には、もぞもぞと動く毛むくじやらの何か。インターフェイスそれが何なのか、インターフェイス接続回路にはすぐわかった。

「…よく平然と俺のところへ来れるな」

「はて、ミサカはあなたの機嫌を損ねるようなことをしましたでしょうか、とミサカは尋ねます」

「そういう意味じゃねえ。よくまあ、オマエを殺そうとしたヤツの所へ来れるなって聞いてんだ」

言われた多重観測はキョトンとし、

「確かにあなたはミサカに攻撃を加えましたが、殺そうとはしていませんでしたのでは？」と、ミサカはあの高校生の話を思い起こします

「…。チツ…」

否定も肯定もせず、接続回路は毒づいた。どうやら多重観測の中ではそれで結論づけているらしい。

「つかオマエ、アバラとかイツちまわなかったのか？すっかり元の調子みてえだが」

「あばら？ミサカの傷は軽い擦過傷とわき腹の打撲だけですが、とミサカは報告します」

…。どうやら自分は相当甘かったらしい。考えてみれば、能力を使わなければいくら連続で蹴ったからと言ってあばらを折れるはずがない。

「やはりあなたは深層意識で傷つけることを拒んでいたのですね、とミサカは思うところを口にします」

「どうだかな。ただの気まぐれに決まってる」

そっぽを向いて、接続回路が応えた。

「……………」

「……………」

お互い何も喋らず、ただただ無言の空間が広がる。

「…そういやオマエ、あれからどうしたんだ？実験は中止されたはずだから、オマエも元通りミサカネットワークだかに繋がったのか？」

先に口を開いたのは接続回路の方だった。多重観測がほんの少し口元をゆるめる。

「はい。ですがまだリンクが未完成なため、知識としての記憶は共有していますが感情としての記憶は曖昧です、とミサカは質問に対し冷静に答えます」

なるほど…と接続回路は状況を頭に入れていく。

「つまり、他の妹達にも俺のやったことは筒抜けってわけだ」

「そういうことになります。ですが心配はいりません。あなたに理由があつたことも記憶として共有していますし、ミサカ達にはどの道ただの実験という認識でしかありません、とミサカはあなたの懸念をフォローします」

多重観測の言葉を聞き、接続回路は眉をひそめた。

「ただの実験としか認識してない…？」

「はい、とミサカは答えます」

「お仲間が殺されてんに、もつと何か考えることとかねえのか」

「仲間…というよりは自分自身、究極的に自分と近しい者達という認識です。あなた方の価値観で言うなら、他のミサカの死とは皮膚をすりむいたようなものです、とミサカは例を挙げて説明します」

「…そうか。ま、オマエらの認識なんてのは分からねえから俺も下手に口出しなんざできねえがな。…コイツは他に当たるしかねえか」

最後はぼつりと、エクスプロード多重観測に聞こえないような声で呟く。

あの乱入してきた少年の言うことを理解するには、まだまだ時間がかかりそうだ。

『むむっ！近くに別のミサカがいる！って、ミサカはミサカは察知してみたり！』

『こんだけデカイ病院なんだ、別に珍しかねえだろうが』

相変わらず向こうは楽しそうだ。

こっちの重苦しい会話とはまるで違。

「うっ ああ、っ…！！」

インターフェイス接続回路の悲鳴が、静かな室内にこだました。キョトンとする多エ重観測が、なんともしュールな状況を際立たせる。

「このクソ猫オ！！いきなり人の膝の上に飛び乗ってんじゃねえぞ  
ゴラァ！」

そういうことなのである。歩くだけでも痛みを感じる　普通  
なら大したことない　のに、軽いとはいえ生き物が乗るとい  
うのは、彼にとっては苦痛に他ならない。

彼の叫びも虚しく、子猫は彼の全身打撲の上を移動する。

「うぐっ！…おいコラテメエ！俺の話聞き流しやがって降りろげ  
あゝっ！」

かつて数千の人々を殺してきた、レベル5の超能力者インターフェイス接続回路。

それが今、こんな小さな子猫にじゃれつかれ悲鳴を上げている。

お笑い草もいいところだった。

「エクスプローラ多重観測ア！！呑気に眺めてねえでコイツを降ろいゝっ…！」

「？子猫にじゃれつかれているだけなのに何をそう叫んでいるので  
すか？その猫はあなたと遊びたいようですが、とミサカは微笑まし  
く思います」

「これのどこが微笑ましいんだオイ！こちらら体の節々がっ…！」

「そうですか。なら仕方ありませんねと、ミサカは微笑ましい一幕  
の終わりを虚しく感じます」

ひょいと子猫の首根っこを掴み、彼女はすっと立ち上がった。

「そろそろ検査の時間ですので、ミサカはこれで失礼します、とミサカは去り際の挨拶をします」

インターフェイス  
接続回路はしばらく彼女を見た後、

「ああ」

と頷いた。スタスタと多重観測エクストローラが病室から出る寸前、彼は何を思ったのか、静かな声で呼びかける。

「多重観測」  
エクストローラ

「？」

呼び止められ、多重観測エクストローラは不思議そうに振り向いた。

「その猫、またあの公園に戻しとけ」

「とりあえずはそのつもりですが、何故ですか？とミサカは疑問を口にします」

すぐには答えず、接続回路インターフェイスは彼女から視線を外し、目を閉じた。そして静かに口を開く。

「怪我が治ったら…またソイツに餌をやりに行く。わざわざソイツに足を運ばせんのも癪だからな」

言いながら、インターフェイス接続回路は内心で苦笑した。

同時に、「今」の目標を定めることができた、満足もしている。  
この子猫もまた、守りたいもののひとつなのだ。

エクスプローラ多重観測はしばらく目を瞬かせ、やがて悟ったように頷きかけた。

「分かりました、とミサカはあなたの宣言に感銘を受けます」

「…早く行け」

面と向かって感銘を受けた、などと言われ、インターフェイス接続回路は戸惑いながらも言い放った。

エクスプローラ多重観測は何も言わず、ガラガラと扉を閉めて出て行った。

一人になった病室。まるで嵐が去った後のように静かで、物寂しさすら感じる白い空間。

『んぎゃーっ！またミサカの負けーって、ミサカはミサカは18度目の敗北に頭を抱えてみたり！』

『テメエが俺に勝てるわけねエだろ…って、其方汝が独善的な理を以て手前が能を搾取されるか！（テメエ何勝手に俺とのリンク遮断してんだ！）』

（なんだよ…）

今度こそ、隣の賑やかな会話を耳に睡魔を待つ。



(俺も、似たような会話できんじゃねえか…)

子猫に乗りかかれ、悲鳴を上げていたあの時。

当時は痛くてそれどころではなかったが、今思えば、あれはあれで楽しかったように感じる。

痛がり騒ぐ自分と、構わず自分の上で動き回る子猫。そして、表情変化が乏しいと言われる割には笑顔を見せていた多重観測<sup>エクスプローラ</sup>。

まだ分からないことはたくさんある。

だが、案外見つけるのは簡単なような気がする。

彼自身はまだまだ灰色で、白からは程遠い存在だが。

ここはもう、あの暗い道ではないのだから。

会話回って大変ですね…。戦闘の方が書いてて楽に感じます。

今回はちょっとコメディ色を出してみたり。接続回路が上条さんみたいなキャラじゃないので露骨なのは難しいですが、彼にもだんだんと笑えるポイントを与えていきたいと思います。  
尚且つ格好良いキャラにしたいと思います。

冥土返しに怒られそうですね…

「君は一度に多くのことを目標にしすぎている」

とか(汗

というわけで、次回は主人公に外へ出てもらう予定です(笑

今時間軸的には淡希と黒子の接触寸前です。次回は一気に時間が飛ぶ感じですよ。

それでは次回、お楽しみに

2 - 3 研究員 ユウナギ シノ (前書き)

「ミサカは別に悪いことをしたわけではありません、とミサカは身の潔白を主張します」

シスター・多リアルナンバー  
妹達検体番号 10412号

エクストローラ  
多重観測

2 - 3 研究員 ユウナギ シノ

9月19日。学園都市の祭典、大覇星祭で外が騒がしい中、インターフェイス回路は院長室を訪ねていた。

「痛みはなくなったかな？」

「ああ」

穏やかな口調に、インターフェイス接続回路は静かに答えた。

エクスプローラ多重観測が病室に現れてから6日、インターフェイス接続回路は痛みが消えたことを例のカエル顔の医者に報告しに来たのだ。

「なら、もう外へ出ても大丈夫だね。どうする？あの部屋は一応、しばらくの間貸してやれるが…」

カエル医者：聞くところによればハンキヤンセラー冥土帰しなどと呼ばれているらしい。

「悪いな。しばらくの間は借りさせてもらおう。新しい拠点の確保ができるまでだ」

インターフェイス接続回路が生活していたアパートは、すでに取り壊されていた。シークレットナンバー非公式の超能力者を解任された時点で、アパートとの契約を上層部が解約したのだろう。元々居住者はインターフェイス接続回路だけで、持ち主も立ち退きを望んでいたため、解約してすぐ取り壊しに入ったらしい。

まあアパートには精々冷蔵庫と小さなテーブルくらいしか家具も

ないため、未練もない。

「わかった。ああ、そう言えばさっき、君を訪ねてきた女性が居たんだが…」

「何？」

「夕風さんとか言ったかな…君と面識があるとかで、君にメッセージを残していったよ」

「夕風…アイツか」

その名前に、彼は心当たりがあった。夕風<sup>ゆうなぎ</sup> 志乃<sup>しの</sup>。幼少時から接<sup>イッ</sup>続回路<sup>タイフェイス</sup>が出入りしていた能力研究機関の研究員で、彼も何度か会話したことがある。

「これが彼女が残していったメッセージだよ」

医者が机脇の引き出しから、A4サイズの茶封筒を取り出す。接<sup>イッ</sup>続回路<sup>タイフェイス</sup>はそれを受け取ると、何気なく隅に書かれた文字を読んだ。

『夕風 志乃』

丁寧な文字でそう書かれている。そう言えば、几帳面…いや、神経質な性格だったような気がしないでもない。

「中身は？」

「見ての通り、未開封さ。君には僕が無断で人の手紙を読むような人間に見えるのかい？」

「あいにく疑心暗鬼でな」

そう言うと、インターフェイス接続回路は院長室を出て行った。

ハンキョウセンセラー冥土帰しはふむ、と顎に手をやると、ぼつりと呟く。

「彼も、か…」

「…あのバカが」

病室で手紙を読み終わったインターフェイス接続回路は、誰もいない室内で呟いた。

要は会って話したいことがある、という内容だ。長々とA4用紙三枚に、何をどうすればここまで膨らむのかという文章が書き連ねられていた。どうせならここに話したい内容を書けばいいだろうに。

無視することもできるが、話ぐらいは聞いておこうという気が彼にはあった。

「…行ってみるか」

彼は腰掛けていたベッドから立ち上がると、足早に部屋を出た。

\*

同病院内の一室に、デュアルスキルソフト多重能力進化実験被験体、エクストラローラ多重観測は居た。

インターフェイス  
接続回路の部屋とは違い、ここは六人部屋である。とはいえ、こ  
ここに居るのは全員妹達であり、特に気兼ねなく過ごせる空間だ。  
シスターズ

「ミサカ19090号、これはどういうことですか、とミサカ10  
039号は発見したチケットを突きつけます」

「そ、それは…偶然頂いたもので…とミサカは」

「本日18時30分からの大覇星祭ナイトパレードのチケットを、  
ずっと入院していたミサカ19090号が何者かから貰うなど不可  
能です、とミサカ10032号は供述の矛盾を指摘します」

何やらピリピリとした空気が漂っている。

つまりミサカ19090号は何かしらのルートでチケットを入手  
し、あの高校生とパレードを楽しもうという算段だったらしい。そ  
れを、何か捜し物をしていたらしいミサカ10039号が発見し、  
他のミサカも便乗して詰問状態になっているようだ。

彼女らがあの高校生…上条当麻に好意を抱いていることは記憶と  
して知覚したものの、その当時に多重能力進化実験に回され、ネ  
ットワークから外れていた多重観測はいまいち理解できなかった。  
エクスプローラ

(ナイトパレード…)

上条当麻絡みの争いよりも、多重観測の興味はそちらに向いてい  
た。ここ最近、何かと気掛かりなああの灰髪の少年と行けないかと思  
案する。

…決して彼は興味を示さない気もするが、たまには彼に息抜きを

させてあげたいと思っていたのだ。

(どこへ行けば手に入るのでしょうか…)

そもそも当日に手に入るのかどうかも怪しかった。まあ、手っ取り早い方法ならひとつある。

彼女はベッドから降り、スタスタと論争を繰り広げている集団の中へ入っていき、ひょいとチケットを取り上げた。

「！ミサカ10412号、何を…」

「このまま不毛に話し合ったところで時間の無駄です。ここは平等にジャンケンによる事の解決を提案します、とミサカはあなた達に同意を求めます」

「しかしジャンケンでは、ネットワークを通じて不正を行う輩が居る可能性があります、とミサカ10032号はその提案の欠点を指摘します」

ちら、と10032号が19090号を睨みつける。びくっ、と肩を震わせる19090号。

「…ではごうしましょう。ミサカ達以外の第三者にあみだくじを作ってもらい、当たりを引いたミサカがチケットを獲得できるというのは？、とミサカは提案の概要を説明しつつ再度同意を求めます」

「え…それは、ミサカが…」

「なるほど、それならば異議はありません、とミサカ10039号



は10412号の提案に同意します」

「ミサカ10032号も同意します」

「ミサカ13577号も異論はありません」

「ミサカ10511号もその提案に同意します」

19090号の抵抗も虚しく、インターフェイス多重観測は口を開いた。

「では、多数決でこの案を採用とします、とミサカはこの場を取り仕切ります」

\*

「ここか…」

辿り着いたのは洒落た喫茶店。彼女らしいチョイスかもしれないと、インターフェイス接続回路は心の中で納得した。

どうやら大霸王祭の影響で会場側に客を持って行かれ、ここはあまり人がいないようだ。これを読んだ上での場所指定かと、少しばかり感心する。

とりあえず店内に入り、目当ての女性の姿を探す。すると窓際の席に、それらしい人物の姿があった。

少し警戒しながら、インターフェイス接続回路はかつかつと女性の傍へと歩み寄る。

「遅かったわね」

「こちらより先に、向こうの方が声をかける。落ち着いた澄んだ声だ。接続回路は舌打ちし、

「…何の用だ」

「相変わらずつれない子ね」

セミショート的茶髪を揺らし、彼女がこちらに顔を向けた。研究所に籠もりきりのせい肌は白く、顔は絵に描いたように整っていて、十人とすれ違えば十人が振り返るような美人だった。もっとも、接続回路には関係ない。

「非公式の超能力者：辞めさせられちゃったんだって？」

「…ああ」

取りあえず対面の席に腰掛け、接続回路が頷いた。吹っ切ったように、まだなかなか吹っ切れないところがある。とはいえ結局公式のレベル5になったわけでもないの、立場的には変化はない。要は干されているか否かだ。

「それで今は病院暮らしだったかしら」

「そつだ」

「ふん？」

志乃は掴み所のない微笑を浮かべ、オーダーしたらしいコーヒーに口を付けた。

「まあ、あそこのお医者さんならちゃんと面倒見てくれるだろうけど。アナタの性格じゃ、あまり長居する気もないんでしょ？」

「ああ。オマエから連絡なんか来なけりゃ、今頃は物件探ししてただろうな」

「ホント、意地悪な言い方するわね。私はアナタを心配してあげてるのに」

「あいにくオマエの手を借りようと思うほど切羽詰まっちゃいねえ」

「素直じゃないわね…」

見透かしたように言う志乃。接続回路は腕を組んで彼女を見据えた。インターフェイス

「んで？哀れなモルモットの様子を見に来た夕凧サンは、何を伝えるに来たわけ」

「一概に否定もできないけど、そうね…あなたを引き取ってくれそうなり合いが居るのよ」

そこまで聞いて、彼はハン、と鼻で笑い、

「くだらねえ、俺が保護者なんか必要としてるように見えるか？」

「ええ。とつても寂しそうね」

「…」

真っ向から肯定され、インターフェイス接続回路が言葉に詰まる。

「悪いけど、あなたの事なんてお見通しよ。毎日毎日あなたのデータとにらめっこしてたんだもの」

大人の余裕とでも言いたげに、口元だけ笑顔を作る志乃。

「……」

「少しは厚意に甘えたら？可愛げ、ないわよ？」

立ち上がるインターフェイス接続回路を呼び止めるように、志乃が言った。

「差し当たっては必要ねえ。お節介もほどほどにしやがれ」

足を止めようとせず、少年はそのまま店を出ていった。志乃はハアとため息をつき、

「すっかり疑り深くなっちゃって。ま、仕方ないわよね……」

最後の一口を飲み干して、彼女は窓から見える街並みに目をやった。

(そつでもしなきゃやってけないもの…暗部なんて)

彼女は二、三分の間をおいて、思い立ったように席を立った。

2 - 3

研究員

ユウナギ シノ

(後書き)

はい、新キャラ登場ですね。一応彼女も物語の重要人物ですので、この話は彼女を登場させるのが目的でした。

大霸王祭、さすがに接続回路を競技に出すわけにも行かず、蚊帳の外です。大霸王祭編はもう一回あります。

今度はシリアス抜きのコメディ回…のつもりでいます。

上条さんが頑張ってるどころ申し訳ないですが(汗

それでは次回、お楽しみに

2 - 4 大覇星祭 光ノ花 (前書き)

「バーンッてすごい綺麗だったねって、ミサカはミサカは感動を  
思い起こしてみたり！」

シスターズリアルナンバー  
妹達検体番号 20001号 打ち止め (ラストオーダー

ー)

「あんなの爆弾と変わんねエだろ…」

学園都市最強の超能力者 (レベル5)

アクセラレータ  
一方通行

「…チツ」

志乃の居た喫茶店から遠く離れ、インターフェイス接続回路は競技場傍まで来ていた。辺りはさすがに人が多く、人混み慣れしていない彼は忌々しうに舌打ちをする。

(大霸王祭…街クラスでの体育祭ってヤツか)

やったことはないが、話には聞いている。何でも超能力の使用が認められている競技がほとんどで、大体結局は都市内でのランキング準に順位が出るとか。下層の学校は勝てないとわかっていても参加しているところもあるだろうに。

ふと見てみれば、ビルの壁面に設置された大型モニターに、競技場内の様子が映されている。

『一位を獲得した御坂美琴選手は、ゴール後も体勢を崩すことなく、まだまだ余力を感じさせる姿を見せてくれました!』

映し出される、エクスプローラ多重観測らと同じ顔。もつとも、表情は段違いに豊かである。

(コイツがアイツらのオリジナルか…)

資料で表の情報はある程度入手しているものの、動く彼女の姿を見るのはこれが初めてだ。初めてなのだが、顔が同じなのでどうも初対面という気もしない。

「…さつさと戻って寝るか」

つまらなそうに言うインターフェイス接続回路。だがそんな彼の瞳が、傍にあった屋台に止まった。

(コイツぁ…)

「……」

数分後、屋台傍のテラス席に、アイスクリームを持つインターフェイス接続回路の姿があった。機嫌が悪いというよりは、「なんで俺が…」というオラを出している。

その理由は彼の正面の席、明らかに不釣り合いな修道服の少女にあった。さながら飢えに飢えた肉食動物のように、五個目のホットドックに口を付けている。

「それで私はね、当麻の帰りを待ってたんだけとお腹が空いちゃってね…」

「食いモン口に入れて話すなクソガキ」

外見と行動がまるで噛み合っていない彼女は、ひよっとしたらイベントの一部なのではないだろうか。

そんな現実逃避すらしたくなる食べっぷりだった。

さすがに屋台の傍でぶっ倒れている少女を放置するわけにもいかず、仕方ない何か食べさせてやるうと思えばこれだ。



苛ついた顔つきで、彼は手にしたソフトクリームに口を付ける。薄々自覚していたことだが、自分は甘いものが好きだ。別に苦いものが嫌いというわけではないが、純粹に美味しいと思う。

ふとあのシスターの方を見ると、彼女は物欲しそうな目でこちらを見ていた。…まるであの子猫のように。

「どうした？」

「ねえ、それおいしい？」

この流れは要求されるな、とインターフェイス接続回路は直感する。

「…ああ」

「へえ！食べてもいい？」

いつから自分はこんなに甘くなったのだろうか。あの頃だったらこんな風に要求を受けて考えてやることも、大体倒れているのを助けてやることもなかったろうに。

「…チツ。買ってきてやるからそこ動くな」

「ありがとうー！」

…多分、こうして感謝されることに少なからず喜びを見出してしまったからだろう。

そんな自分に苦笑しながら、彼は席を立ち上がった。

だが彼は思いもしなかっただろう。

要求を聞いてやるうち、このシスターがよもや、この辺りの屋台  
全てのメニューを制覇することになるうなど…。

「…あのガキ…遠慮云々のレベルじゃねえぞ…」

夕方、インターフェイス接続回路は財布の中身を見て呟いた。いや、嘆いた。  
いくら出費したのか、考えるのも忌々しい。

終わった後にもまだ余裕があつたらしいところを見ると、当麻と  
か言う彼女の保護者は生活費に困っているのではないだろうか。

(…仕方ねえ、貯金下ろすか)

ハアと大きなため息をついて、彼はきびすを返した。

\*

「……ハア」

一方、エクスプローラ多重観測はインターフェイス接続回路の病室のドアに寄りかかり、小さくた  
め息をついた。

その後、6人で冥土帰しヘヴンキャンセラーのところへ押しかけ、あみだくじを作っ  
てもらい、公正な条件で争奪戦を行ったのだが、結局軍配は真の持  
ち主である19090号に上がった。

なので話くらいしようとしてインターフェイス接続回路を訪ねてみれば、どこへ行ったのか姿がなかった。

(ミサカは何を躍起になっているのでしょうか…)

いまいち自分で自分の感情が分からなかった。

何故あの灰髪の少年がこんなに気になるのか。

(他のミサカ達は、あの高校生に対してこの感情を持っているのでしょうか…)

時間を確認すると、18時20分。

パレードがもうすぐ始まる。どの道行くことはできないが。

「…オイ、そこで何してる」

「はっ…」

不意の声に、エクスプローラ多重観測はびくりと反応した。声の方向を見てみれば、そこに居たのは灰髪の少年。

「何か用があったのか」

「いえ…とミサカは少し動揺しながら答えます」

「…そうか」

怪訝そうにこちらを見るインターフェイス接続回路。彼はそのまま病室に入ろうとする。反射的に、エクストローラ多重観測は声を出した。

「あの…」

「あん？」

少年の緋色の瞳が、エクストローラ多重観測の姿を映す。

「あなたはパレードに興味など、あるでしょうか…とミサカは尋ねてみます」

「パレード？興味ねえな」

バッサリと否定する少年。誘わなくて良かったと、内心ホッとする。

「そうですね…実はその、今日チケットを手に入れられる機会がありました、結局駄目でしたが、あなたを誘うつもりで…とミサカは質問の補足をします…」

「…なんだって俺を」

少し不思議そうにして、インターフェイス接続回路が尋ねる。エクストローラ多重観測は謎の緊張を感じていた。

「それは…あなたにも息抜き…というか…とミサカは表現に戸惑います…」

何故か高鳴る鼓動。何故か熱くなっていく頬。理解不能な現状に、

エクスポローラ  
多重観測は戸惑っていた。

インターフェイス  
接続回路とは言えば、しばらくその様子を見た後、小さくため息をつく。

「…来い」

「はい？」

エクスポローラ  
多重観測が聞き返す。彼は彼女に背を向け、歩き出した。

インターフェイス  
接続回路に連れられてやってきたのは、病院の屋上だった。すでに何人かの患者らしき人々が、わくわくしながら街並みの方を見ている。

「あの、これはどういう…とミサカはあなたの行動の真意を問います」

「いいから黙って待て。あと5分もねえ」

(…?)

言われるままに、エクスポローラ  
多重観測は黙って待つ。

刹那、明るい街並みの上に、眩い光が輝いた。

「あ…」

ナイトパレードの花火だった。色とりどりの光の花が、咲いては

散っていく。

「オマエが見せようとしたのはこれだろ」

「あ…ミサカは、チケットでちゃんとした席を…」

「バカか。んなことしなくても見られんだろ。…俺には、これで充分だ」

まだ片足を明るみにかざしたに過ぎない、自分には。

「そうですね…」

二人とも、花火など見るのは初めてだった。それ故か、二人ともこの光が織りなすショーに見入っている。

ちら、と接続回路インターフェイスが何気なく多重観測エクストラローラを見てみると、彼女は驚いたような、それでいて嬉しそうな顔で花火を見ている。

接続回路インターフェイスも表情にこそ出さなかったが、この光景に目を奪われていた。

(……ったく、どいつもこいつも…)

昼間見た冥土ヘウンキャンセラー返しと志乃の顔に、ついさっきの多重観測エクストラローラの顔が浮かぶ。

(お節介が過ぎんだよ……くそつたれが)

眩い光に目を細め、彼は静かにそう思った。

書いてて恥ずかしくなる文面、最後まで読んでいただいております。ありがとうございました(笑)

まず思ったことは、多重観測って感情データインストールされてそうだなんて疑問です。能力開発の副産物とでも言って後付けしちやおうかなんて考えてます(汗)

接続回路が美琴の映像見た広場は、一応黒子と初春がいる設定です。彼女らの台詞も入れようかと思いましたが、特に伏線とかにならないので省きました。

インデックスとは今絡んでおかないと後のシーンが不自然になるので無理矢理つぼかったけど入れました。

接続回路の面倒見の良さみたいなのが伝わっていれば幸いです。

次回で一区切り…かな？

とうとうあの子と接触します。

それでは次回、お楽しみに



2 - 5 打ち止めへラストオーダー（前書き）

「あのー、<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めさん？それ、オレ宛の台詞だよね……」  
学園都市の無能力者（レベル0） 上条 当麻

## 2 - 5 打ち止め（ラストオーダー）

9月30日。インターフェイス 接続回路は繁華街を歩いていた。

上層部に回収された携帯の代わりに、新しく端末を購入するためである。

彼がこの行動に踏み切ったのは、志乃のお陰だった。置いていった封筒の中に、偽の身分証明書が同封されていたのである。

少なくとも自分の名前ではないそれを使うのはいささか気が滅入るが、持っていないと不便なのは間違いない。

彼は早速、先ほど手続きを済ませて受け取った端末を開いた。

メールボックスも通話履歴もアドレス帳も空っぽのそれは、オニキスブラックのオーソドックスな形をしている。特に迷うこともなく、「防水」という文字を見ただけで買うことを決めた。色は彼の趣味だろう。

さて、とインターフェイス 接続回路は頭の中にあるヘンキャンセラー 冥土返しへの直通回線と志乃のアドレスを打ち込んだ。

志乃に至ってはまだ警戒しているが、一応入れておくことにした。あのいつだって余裕綽々な研究者は、シークレットナンバー 非公式のレベル5でなくなった自分と暗部を繋ぐパイプ。勝手な拘りで暗部の動向を探れなくなるのも面白くない。

彼は携帯を閉じると、空中通路を降り、病院を目指す　　が。

「ミサカを心配して探しに来たのー？って、ミサカはミサカはあなたの腕に抱きついてみる！」

「あ？」

ポケットに突っ込んだ左腕に、小さな質量がぶつかった。というか引つ付いた。

徒勞の気配を感じながらも、インターフェイス接続回路はそれを見る。

まず目に付いたのは、ショートカットの茶髪。てっぺんの髪がピヨンと立っている。世に言うアホ毛というヤツだ。

次に目に付いたのは、幼い顔。どこか誰か達の面影が垣間見えるそれは、表情豊かに笑っている。

最後に目に付いたのが、そのサイズ。顔だけなら見覚えがないでもないが、その身長には一切の見覚えがない。

結論。

(…なんだ？こりゃあ)

まあともかく、自分の知り合いでないことは確かだ。そもそも自分の知り合いなど数える程もない。

「あれね？なんでそんなに無反応なの？って、ミサカはミサカは急な変化を尋ねてみたり」

「…とりあえず降りろクソガキ」

苛ついた口調で接続回路がポケットから手を出し、促す。

「あ、うん…うん？あれ？杖もないし電極もないし服とかいろいろ微妙に違うしネットワークに反応がない…ひよっとして人違い？つて、ミサカはミサカは驚愕を露わにしてみたり！」

…杖？電極？ミサカ？ネットワーク？…ちょっと待て。

ぐわっ、と接続回路が顔を近づけ、この小さな存在を凝視する。

「オマエ…今、ミサカつつたな…ネットワークとも…っーことはオマエも妹達の一人か？」

「あー！誰かと思えばそうかそうか！あなた接続回路だねって、ミサカはミサカは現状に納得してみる！」

「あん？」

質問に答えず一人で騒ぐ少女に、少し苛つく接続回路。  
だが彼はひとつの結論に至っていた。

とりあえず彼女が妹達の一人なのは、ミサカ、ネットワークというワード、及び顔から推察できる。

さらに、ついさっきまでわからなかった事をまるで今ダウンロードしたかのように納得している。

つまり、仮定が正しければこの少女は意図的に各個体から情報を探り出すことができる個体ということだ。

という事は…。

「…オマエ、ラストオーダー打ち止めか」

「おおー！名乗ってもないのに素性がバレてしまったよ、ってミサカはミサカはあなたの推理の正解を称えてみたり！」

「どうやら推測は当たっていたらしい。シスターズ妹達の上位個体にしてホストコンピュータ コンソールの方が妥当か デュアルスキルソフトの役割を担うミサカ20001号。多重能力進化実験の概要説明の際、ついでに教えてもらった情報だ。」

「うわあ…ホントにあの人にそっくりだよって、ミサカはミサカは感嘆の声を漏らしてみたり」

「また一方通行の絡みか…」  
アクセラレータ

特別彼に敵意があるわけでもないのだが、こう何度も間違われてはさすがに気にせざるを得ない。

「って、何で話の途中なのに歩いて行っちゃうの？って、ミサカはミサカは後に続きながら尋ねてみたり！」

「何でも何も、オマエに付き添う理由が俺にねえだろうが」

一蹴するインターフェイス接続回路。別に機嫌が悪いわけではない。なんとなく、この間のシスターの二の舞になる予感がしているだけだ。

「うーん、ホント出会った頃のあの人にそっくりだって、ミサカはミサカは妙に懐かしさを覚えてみたり」

「いい加減ソイツと俺を重ねんのやめるクソガキ。世の中には何十億って人間が居んだ、その内ひとりやふたり似てたって不思議じゃねえ」

「そうだけど、ここまでそっくりだとミサカも戸惑いを隠せなかつたりって、ミサカはミサカは胸の内を明かしてみる」

「だからどうしたってんだよ。さっさと戻るところ戻れガキ」

「他のミサカと追いかけてこしてる上に、帰るところはいろいろ理由があつてそういうわけにもいかないって、ミサカはミサカはあななの指示を断つてみたり」

「…思えば、自分も随分気が長くなったものだ。とはいえ苛立ちを生じている。」

「だったらタラタラ歩いてねえでさっさと走って行きゃいいだろうが」

「もう結構走つて疲れていて、何より誰かと一緒にいたいって、ミサカはミサカは屈託のない笑顔で応じてみたり」

「…くそつたれが」

舌打ちし、インターフェイス接続回路は諦めた。一般個体以上に特徴的な喋り方をする彼女と討論するのは面倒な上に苛立つ。

\*

「いったただつきまーす!」

「……ハア」

休憩所のベンチに座り、インターフェイス接続回路はため息をついた。

なんでこうも、遭遇する相手は腹を空かせているのか。時間は15時過ぎ。このくらいの子供ならおやつを求める時間帯。仕方ないとは思うのだが…。

「うーん、外見とか喋り方とか雰囲気はみんなそっくりなのに、食べ物好みは結構違うんだねって、ミサカはミサカは発見した相違点を指摘してみたり」

「あー、そうかい」

「ひょっとしてどっちかがミサカ達みたいにクローン培養されてたりって、ミサカはミサカは当てずっぽうに言ってみる！」

「……まさかな。」

「アクセラレータ一方通行ってのは、どんな奴なんだ？」

「え？」

ラストオーダー打ち止めが目を丸くする。初めてこちらから話題を振ったからだろつ。

「…俺はアイツと間違われてバカな連中に狙われてんだ。文句言うつもりはねえが、俺がどんな奴と間違われてんのかくらい知るとき

たくな

ラストオーダー  
打ち止めは少し考えると、にっこり笑ってこちらを見る。

「あの人はね、見た目より不器用で、すごく傷つきやすく、弱い。自分がしたことに責任を持つとして、いつも悩んでる。みんなに心配させないように強がってるけど、ホントは脆くて…優しい人なんだよって、ミサカはミサカはにっこりしてみる」

(…同じだ)

ラストオーダー  
打ち止めの笑顔を見ながら、インターフェイス  
接続回路は思う。

こんな風に言っては失礼かもしれないが、インターフェイス  
接続回路は一方通行の  
気持ちが分かる気がした。

犯した罪の大きさを前に、立ちすくまないように気を持って、悩み、叫びたくなるような衝動に駆られても、自分を見失わないようにまた気を持つ、背水の陣。

そして、アクセラレータ  
一方通行にとっての多重観測が、ラストオーダー  
この打ち止めなのだろ  
う。

自分一人では支えきれない罪の重みに、大切な何かを支えに立ち向かう。

上条の言った「守りたい気持ち」とは、このことなのだろう。

確かに俺に足りなくて、強くなれるモノだな。



インターフェイス  
接続回路がふつと笑う。

「あなたもあの人と同じだねって、ミサカはミサカは曖昧な記憶から評価してみたり」

「…かもしれねえな」

ぼんやりと接続回路が呟いた…その時。

「むむっ！ミサカのリーダーが楽しそうなイベントに反応してる！  
って、ミサカはミサカはこうしちゃいられないと駆け出してみたり  
！」

彼女のアホ毛がピクピクと動いたかと思うと、彼女はたたたと、  
と駆けていく。

「接続回路っ！またねーって、ミサカはミサカは手を振ってみたり  
！」

インターフェイス  
接続回路の前には、ペろりと食べ尽くされたアイスクリーム。  
騒がしい人物だっただけに、居なくなると物寂しい空気が垂れ込  
める。

「忙しい奴だな…」

呆れたような視線を、もう大分小さくなった打ち止めに向けた。  
ラストオーダー

\*

(まだしばらく厄介になるしかねえか…)

18時28分、インターフェイス接続回路は帰路に就いていた。ラストオーダー打ち止めと別れた後、どこが良い所はないかと物件探しをしたのだが、結局収穫はなかった。

というか、病院以上にセキュリティが固い建物などそうそうないだろう。だんだん住み慣れてしまってもいる。

刹那。

「!!!」

背後からの殺気。振り返るまでもなく、インターフェイス接続回路が全身に分解公式を作用させる。

ガードレールを破って、ひとけ人気がない歩道に突っ込んでくる黒のワゴンボックスカー。それがインターフェイス接続回路の体に触れると同時に、触れた箇所が粉となって散っていく。

真つ二つになった車は、勢いのままに明かりの消えたビルに突っ込み爆発した。

「…なんだってんだ？」

インターフェイス 接続回路は怪訝そうな顔つきで、炎に包まれた車を見る。そこから這いだしてくる、武装した人影。

「ヒイツ…ハアツ…」

「ホオー…」

インターフェイス 接続回路の口端が吊り上がる。ゆっくりと、這い出した人影に近づいてゆく。

「はっ…!」

「なんだこりゃ…いつものスキルアウト共とは違うなあ…なんだあ？アンタ」

「ひっ、ひいっ！うわあああっ…!」

逃げ出す人影。 インターフェイス 接続回路は昏く笑う。

「いやあー、なんだオイ…なんか気分がさあ…」

軽く踵を上げ、まるで徒競走のスタートラインについたかのようなポーズで、 インターフェイス 接続回路は不気味に笑う。

「…ハイになってきたんだけどさあ…!」

解放される空気圧。あっという間に人影に迫り、そのままの勢いで足を払う。

「あがあっ！」

肩から地面に落ち、呻く人影。接続回路インターフェイスが思い切りその肩を踏みつける。

「うぐ！」

「なんなのかなあ、これ。説明してくれよサバゲーマニア」

見る限り訓練された人間らしい。挑発する少年の顔は、さながら悪魔のようだった。

それでも相手は何も話さない。ここまで力の差を見せつけてここまで黙秘できるのなら大したものだ。ククツ、と接続回路インターフェイスは邪悪に笑う。

「…ああー、そう」

「………？」

接続回路インターフェイスの足が、うつ伏せになった人影の肘へと乗せられる。

次の瞬間、接続回路インターフェイスが男性の肘に乗せた足が、肘を突き破って地面を踏んだ。

「なっ…！う、あああああっ…！」

信じられないと言った表情から一変、男性の顔は苦痛に歪んだ。腕が分断されれば無理もない。

「ヒヒヒッ…」

同じように膝の裏を踏んだかと思えば、そのまま地を踏むインターフェイス接続回路イス。

「ぐあああああつー!!」

「まあですか…って」

インターフェイス接続回路が謎の男性の顔を伺うと、男性は口から泡を吹いて白目になっていた。顔色は悪い。

(まさか…)

インターフェイス接続回路が男性の口をこじ開ける。すると男性の奥歯には、噛み潰されたカプセルが残っていた。

(この臭い…青酸カリか…。コイツ、バツクにどんな組織が…)

車から逃げ遅れた者たちは向こうで丸焦げになっている。おそらく彼らだけではないだろう。

(なんだ一体…夕風なら何か知ってんじゃ…)

ともかく移動した方がいいことは間違いない。

男性をそのままに、少年が駆け出す。

\*

時刻18時43分。学園都市には雨が降っていた。昼間は賑わい

を見せていた歩道を、灰色の髪を揺らして少年が駆ける。

(…警備員アンチスキルの数が普通じゃねえ。さっきの連中…まさか外から…?)

インターフェイス

接続回路が思案する中、不意に背後から物音がした。べしゃっ、という、濡れた地面に何かが倒れる音だ。

彼が振り向く間にも、続いて起こる同じ音。

そこには異質な光景が広がっていた。

雨の降りしきる学園都市。倒れ込んでいる警備員アンチスキル。一人や二人ではない、来た道に展開していた警備員アンチスキルが、一人残らず倒れている。全く状況がわからない。

「…オイ、オマエ」

倒れ伏した警備員アンチスキルの一人に呼びかける。反応はない。駆け寄って脈を確かめると、どうやら気絶しているだけのようだ。

(何が…)

立ち上がり、自分しか立っていない空間を見渡す。

(やっぱりアイツに聞くしか…)

携帯を取り出し、二つしかないアドレスの片方、夕凧志乃のアドレスにカーソルを合わせ、通話ボタンを押す。

(…?)

がしつ、と。

腰に何かかしがみつくと感覚がした。頼りない小さな力で、震えながら掴まってくる何か。

インターフェイス  
接続回路がゆっくりと視線を落としていく。目に付いたのは、忘れもしない、頭のとっぺんで跳ねた髪の毛。

ラストオーダー  
打ち止め。

つい3時間前、一緒にアイスを食べた、屈託のない笑顔の少女だった。

「助けて…」

「！」

力ない涙声で、ラストオーダー打ち止めが呟く。顔を上げた彼女の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「お願いだから…お願いだからあの人を助けてって、ミサカはミサカは頼み込んでみる！」

涙で歪んだ彼女の声が、雨音だけの空間に響き渡った。

2 - 5 打ち止めへラストオーダー（後書き）

はい、一気に崩していきました。

ここからはまた戦闘続きになります。少しグロくもなるので耐性のない方はご注意を。序盤の接続無双よりグロいつもりです。

先の展開がわかってきてる方も多いのではないのでしょうか。

それではこれからも応援宜しくお願いします。



## 章末特典 キャラクター紹介？ 多重観測へエクスプローラ

ミサカ10412号

身長 161cm

体重 超電磁砲と同一  
レールガン

血液型 AB型

容姿関連：

ホストである御坂美琴及び他の妹達同様、赤みがかつた茶髪の美少女。

外見から彼女であると判断できるものはないが、彼女の着用する軍用ゴーグルはレンズ部分が紫色に発行し、彼女の扱う『欠陥電気』レイオノイズの電流も紫に近い。威力は他と変わらない。

来歴：

絶対能力進化実験の中止と同時に多重能力進化実験に回された200体の最終個体にして一完成個体。  
レベル6シフト ホストナンバー デュアルスキルシフト

配置変更の際に既存のミサカネットワークから外されたため、絶対能力進化実験中止前後の記憶が曖昧。  
レベル6シフト デュアルスキルシフト

多重能力進化実験では参加個体のみの小規模なミサカネットワークが形成されたが、彼女は10212号から10411号までの強化データを参考に最終調整された単騎実戦仕様のため、こちらのネットワークにも組み込まれなかった。

短期間ではあるものの、ネットワークを他と共有しなかったため

一個体としての「自我」を確立し、曖昧な感情データが発現している。

性格関連：

他の妹達と同様の性格パターンだが、独自の記憶や感情データの影響でやや人間的である。

インターフェイス 接続回路が子猫に餌を与える様子を見ただけで彼の本質を見抜くなど、洞察力にも長けている。インターフェイス 接続回路に大しては複雑な感情を持っており、恋愛的なものなのか家族的なものなのか本人はハッキリしていない。

能力：

- ・レベル3の『レイオノイズ欠陥電気』
- ・レベル3の『レポート空間移動』
- ・レベル4の『エレムオブザーヴ科学観測』。

『レイオノイズ欠陥電気』は一般個体と変わらないが、実験による強化で二つの能力を会得した。

『レポート空間移動』の範囲は半径25m圏内で、一度の使用から次の使用までには8秒の間隔が生じる。自分一人の移動なら問題ないが、自分を含め大人二人運ぶのが限度で、移動後に息切れしてしまう。

『エレムオブザーヴ科学観測』は、学園都市レベルの範囲の大気密度、放射線、地磁気、太陽放射線を観測することができる。

服装：

第一章～第三章 常盤台の夏服

第四章～ 常盤台の冬服

章末特典 キャラクター紹介？ 多重観測へエクスプローラ (後書き)

C V . . . わたきのぞみ

3 - 1 襲撃 ハウンドドッグ (前書き)

「し、白い人が二人!？」

クス 禁書目録を司るイギリス清教のシスター インデックス

「かはっ…！」

雨に打たれ、白髪の少年は固いアスファルトの上に血を吐いた。

アクセラレータ  
一方通行。

レベル5の第一位、即ち学園都市の頂点と呼ばれていた少年。口から滴る深紅の血液。その左頬もまた赤く腫れていて、第一位という肩書きが嘘のような有様だった。

「まったく…ゴルフボールじゃねえんだからよお」

その傍に立っていた白衣の男が、やれやれと呆れてため息をつく。

「ヤード単位で人飛ばすなって」

名を木原数多<sup>きはら あまた</sup>。一方通行<sup>アクセラレータ</sup>を追い詰めた張本人である。木原は一方通行<sup>ラレータ</sup>から離れ、部下の武装した男達に何やら指示を下している。

アクセラレータ  
一方通行は一度状況を整理することにした。

つい数十分前、打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>と共に新たな住居となった黄泉川愛穂のマンションに帰ろうとしていたところ、雨だというのに走り回ってはしゃいでいた打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>が転んで足を擦りむいた。仕方なく消毒液と絆創膏を購入し、バス停で待たせておいた打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>のところへ戻ろうとしたところで、この黒ずくめの武装集団の車に突っ込まれた。振り返りにし、後続の仲間がやってきたところで、突っ込んできた

車を爆破、圧倒したところまでは良かった。

だが、そこにあの白衣の男、木原数多が現れた。

彼は一方通行アクセラレータの能力を開発した張本人だった。能力使用モードだ  
というのに真つ向から殴りかかってきたため、たわいないと思っ  
ていれば、妙な戦法で反射を無効化され、今やこの有様だ。

そして木原の部下が捕獲してきた打ち止めラストオーダーを、着陸地点を計算し  
て吹き飛ばし、今に至る。

奴ら：ハウンドドッグ 獵犬部隊と言ったか。それそのものは何のことはない。こ  
んな状態でも十分に対応できる相手だ。だが、問題は木原の存在。

仮に今から風で吹き飛ばそうとしても、超音波によるベクトル妨  
害で無効化されてしまい、木原も未だ反射の機能している一方通行アクセラレータ  
を部下に撃たせるような馬鹿な真似はしない。地面を割るうにも、  
やはり例のベクトル妨害の超音波がネックになる。

ああして部下と何か話しているものの、木原もこちらにはある程  
度の注意は払っているだろうし、傍に停まっているワンボックスカ  
ーにも木原の部下が乗っている。迂闊に動けば、すぐにそいつが木  
原達に知らせて対応されてしまうだろう。

絶体絶命とはこのことを言うのだろう。頭の片隅で、一方通行はアクセラレータ  
思っていた。

だが、だからと言って諦めるわけではない。何か手はないかと、  
未だ頭は考えている。

だが、何度樹形図が組みあがっても、その全ては途中段階で崩れ

れてしまう。既に一方通行アクセラレータの頭の中では何百通りもの作戦が組まれたが、未だに採用できるようなものはない。

(チクシヨウ…木原の野郎さえいなければ…)

「いやあ？殺すよ？捕まえとく理由もないし」

部下と話していた木原が、再びこちらを振り返った。

「この手の努力しちやってる人見るとイライラすつからさあ」

木原の顔の左半分に刻まれた刺青が、表情の変化に応じて形を変える。

「こーいう根暗な自己満足野郎は、ここで殺しといた方が無難なんだよ」

口調こそ柔らかいものの、その侮蔑したような視線が、うつぶせに倒れる一方通行アクセラレータを見下ろした。

「…黙れ」

「ん」

低い、静かな声を、一方通行アクセラレータが絞り出す。

「クソツたれが…オマエにゃ一生わかんねエよ…」

木原はしばらく一方通行アクセラレータを白けた目でみると、はっ、と苦笑する。



「…そうかい。んじゃ、殺すけど今のが遺言ってことでいいんだよなあ？」

歩み寄ってくる木原。木原は一方通行アクセラレータの能力を完璧に理解している。確実に殺される。一方通行は確信した。

(クソっ…誰か…)

アクセラレータ  
一方通行は木原から目を逸らすことなく、その瞬間を待つ。

(起きろよ…ラッキー…手柄ならくれてやる。俺を踏みにじって馬鹿笑いしても構わねエ…)

木原が迫り、真上から見下ろす。ニヤリと笑うその表情は、冷酷そのものだ。

(誰か…誰でもいい、誰でもいいから…あの、ガキを…！)

「た、隊長！」

不意に、木原の後ろから声が聞こえた。彼の部下だ。

「どうしたー？」

木原が声だけを背後に向ける。視線は一方通行アクセラレータから外れていない。

「西に展開させておいたC班が…」

「C班だあ？」

木原が一度、部下の方へと戻っていく。一方通行は耳をそばだてた。

「おいおい…なんだこりゃ」

モニターに映し出された学園都市の地図と、味方のポイントを示す青い点。それが瞬く間に、ひとつまたひとつと画面から消えていく。元々C班は囷も兼ねた搜索班だった。しかし、アンチスキルに捕まったただけなら反応が消えるはずがない。そもそも囷を任せただどのC班のメンツはそんなへマを犯すような連中でもない。

つまりこれは…。

「誰かがC班を撃破してってるってことか？」

木原がモニターを見て言った。完全なイレギュラーだ。こんなのは計画にも入っていない。尋常じゃない速度で、それは確実にこちらへ向かっている。

幸い、まだ現場からここまででは距離がある。今の自分達の目的は、この一方通行を殺すこと。最終目的は打ち止めラストオーダーに細工を施すことだが、さしあたっては邪魔な存在を片付けるに限る。謎の現象は相変わらず続き、ピピツ、という音を何度も立てながら青い点が消えていく。一方通行を殺すだけの時間ならば充分にある。木原は多少警戒に似た緊張を感じながら、一方通行の方へと向かおうと。

「そこでなにしているの？」

「は？」

(あア?)

木原と一方通行、ハウンドドッグ 獵犬部隊の面々が、声の主の方を見る。  
立っていたのは、修道服の少女。

(アイツ…!)

アクセラレータ 一方通行には、彼女の姿に見覚えがあった。つい数十分前、人捜しを勝手に手伝ったインデックスとか言う少女。

「どうしますか」

「どうするってお前…」

アクセラレータ 一方通行の聴覚が、部下と会話する木原の声をとらえた。イレギユラー 続きのせい、うざったそうに手を振って、

「殺すしかないだろ。テキトーに弾丸ブチ込んでけ」

(野郎…!)

もう迷ってなど居られなかった。自分ひとりならともかくも、あの修道女まで巻き込んでいい道理はない。大体、あの修道女もまた、表の世界の人間なのだ。根本から自分とは違う。それが闇の住人バカに食い潰されていいはずがない。確率がどうなんて話じゃない。どのみち悪い結果にしかならない。ならば…。

(やっつてやるうじゃねェか…!)

一方通行アクセラレータが覚悟を決め、能力を使おうとしたその瞬間。

二階の位置、一方通行アクセラレータが横たわる道と交錯するようにしてあった  
空中通路が、突如として崩れ出した。

「!?!」

「うわあああつ!?!」

驚愕する木原。丁度下に停めてあった彼らの車が二台、通路に潰  
されて爆発する。

(な…あのガキは…!?!)

一方通行アクセラレータも目を見張る。

見る限り、猟犬部隊の仕業ではない。通路が落ちたときの土煙に  
加え、爆発による黒煙と炎。何より、通路の向こう側にいたインデ  
ックス。彼女は無事なのか。

皆が啞然とする中、強烈な烈風が爆発の黒煙と炎を払い、ハウンドドッグ  
隊を吹き飛ばす。

そして現れる、少年。

インデックスの前に立ち、不敵に笑うその少年。

炎に照らされた灰色の髪。細い体躯に黒い服。

そして一方通行アクセラレータに通じる、爛々と光る緋色の瞳。

一方通行アクセラレータが、木原が、ハウンドドッグ獵犬部隊が、インデックスが見る中、目を剥いてニヤリと笑いながら、少年は告げる。

「真打ち登場だ。クソ野郎」

どうも、今回は一方通行視点だったり木原視点だったりでコロコロ変わってややこしかったかと思えます。

猟犬部隊の人は木原くんのことなんて呼ぶのかな、てずっと考えてましたが結局「隊長」にしました。木原さんじゃ変だし、他にも特に思いつかなかったの。知っている方がいらしたら教えてください、すぐに修正致します。

ヴェントは…出ると思います、出す予定です。接続回路に多少魔術に絡んでもらうためにも！（汗）

これから連戦になります。次回お楽しみに！

3 - 2 始動 二人ノ少年 (前書き)

「獵犬部隊？狂犬部隊の間違いだろお？」

非公式の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「あ…あ…」

ハウンドドッグ 猟犬部隊の一人が、声を震わせた。彼は爆炎を払って現れた灰髪  
の少年と、地面に倒れて目を見開いている白髪の少年とを見比べる。

雨の降りしきる中、まだわずかに残る炎と所々の街灯しか光源のない空間で、二人の見分けはつかなかった。

故に、叫ぶ。

「あ…一方通行が…ふ、二人っ!？」  
アクセラレータ

その場にいる全員の声を代弁した。少年の背後のインデックスも、爆炎から庇ってくれたこの少年と、瓦礫の向こう側の少年とを「あわ、あわわ」と交互に見ている。

(なんだコイツァ…)

結果として、好機は訪れた。ラッキ 三台あったハウンドドッグ 猟犬部隊のワンボックスも二台が潰れ、残る車両は木原が乗ってきた一台のみ。全部で十人ほどいたハウンドドッグ 猟犬部隊の黒ずくめも、立っているのは四人だけ。  
何より、自分を含め皆が混乱している。

この好機を逃すわけにはいかない。

「おおおおアアああッ!！」



獣のように咆哮し、一方通行は地面に押しつけた爪先に力を込め、思い切り蹴る。同時にベクトルを制御し、地面から浮きつつ砲弾のようなスピードで残り一台となったワンボックスへと突き進む。その体がワンボックスの後部スライドドアにぶつかると、止まらない勢いはドアを押し込み、少年を後部座席へと収めた。

それを見て、インターフェイス接続回路は後ろの少女の腕をつかむ。

「わっ…」

「動くなよ」

「え…？うわああっ！」

インデックスの体が宙を舞った。インターフェイス接続回路が彼女を思い切り放ると同時に、風を操作して吹っ飛ばしたのだ。

飛んでくる少女の腕を、アクセラレータ一方通行が掴み、ベクトルを制御して中へと釣り込むと、同時に剥ぎ取ったドアの金具を運転席の黒ずくめに突き立てた。

「い あっ！ー！」

声にすらならない、叫びともいえない叫びがする。アクセラレータ一方通行は突き立てた金具を背に、入ってきたインデックスをストーンと座席に座らせた。

「進め…さっさとしねェと手遅れになるぞ」

「っ つー！ー！」

決断は早く、黒ずくめの男は車を急発進させた。どのみち、こんな状態では木原に潰されるのは目に見えている。

「あーあーあーあー！あーあーあーあー！何してんだ早く撃て！」

ヒステリックに木原が叫ぶ。あの一台にバズーカやら何やら-heavy weapons が入っていて、ごっそり持ち去られてしまったのはわかっている。だからここにいる武装した男達は、精々サブマシンガンと手榴弾などの小回りの利くものしか持っておらず、走り去っていくワンボックスを破壊するものなど持っていないこともわかっている。だが、ここでみすみす一方通行を逃がすのも面倒なのだ。

言われて男達がサブマシンガンを斉射する。狙い目はもちろんタイヤだ。

が、それは突如出現したコンクリートの壁によって遮られ、目標にたどり着けずに跳弾する。

「当てさせませんってなあ」

灰髪の少年、インターフェイス接続回路が口を開く。

「てめえ…余計な真似しやがって」

静かな低い声で、威圧的に木原が言った。インターフェイス接続回路は動じない。

「お目当てに逃げられて残念だったなあ。ははっ、無様なこった」

恐怖の欠片も感じさせない声で、接続回路はあざ笑う。木原が手を振り、

「殺せ」

木原の命令で、四人の黒ずくめがサブマシンガンを斉射する。しかし、それは少年に届く寸前に、小さな火花を起こして塵と化する。

「なっ……」

黒ずくめから息を呑む声がある。

「無理無理イ……そんなオモチャで俺を殺せるわけんねえだろ」

「うあああっ……」

黒ずくめの一人が、接続回路インターフェイスに向けて手榴弾を投げる。それを見て、少年はさながら指揮者のように腕を振った。

刹那、分子レベルに平面圧縮された空気が、刃となって投げられた手榴弾を分断した。

黒ずくめと接続回路インターフェイスの間、およそ15mの距離の半分ほどで、真っ二つになった手榴弾が爆発する。爆散する破片。それは黒ずくめ達の防護服やマスクに突き刺さるも、分解公式を展開させている接続回路インターフェイスには、傷一つつかない。

黒ずくめの男達は確信した。

この少年には勝てないと。

持てる武器は全て使った。強いていうなら手頃なハンドガンと軍

用ナイフが残っているが、サブマシンガンと手榴弾が効かない相手にそれが通じるとは思えない。

途端に震えが大きくなった。

「オイオイ…もうお終いかよつまんねえ」

ゆっくりと、優雅とすら思える速度でインターフェイス接続回路が歩み寄る。

「ひいつ…く、来るなあ!!」

無駄とわかっていても、男達はサブマシンガンを斉射する。確かに当たっている。当たってはいる。なのに、少年は全く怯まない。反射的に目を瞑ることもない。よろけず、怯えず、退かず。一歩一歩、確実に近づいてくる。

「なにやってんだか」

無駄な攻撃を続ける黒づくめに、インターフェイス接続回路は言った。嘲笑はなく、その表情は呆れ顔だった。憐れんでいるようにも見える。

「ひいつ…ひいつ!!」

撃てども撃てども効果はなく、少年は迫ってくる。もう距離は5mもない。

「少しは逃げようとか考えろよ…あの連中よりバカだな」

インターフェイス接続回路の脳裏に、アクセラレータ一方通行と間違って襲撃してきた青年達の顔が浮かぶ。

本来、インターフェイス接続回路には黒ずくめを殺す道理はなかった。

打ち止めに頼まれたのはアクセラレータ一方通行の救出のみ。

ハウンドドッグ猟犬部隊を殲滅しろとは言われていない。

だから、アクセラレータ一方通行を逃がした時点でインターフェイス接続回路の役割は終わっている。

だが、インターフェイス接続回路はアクセラレータ一方通行の片棒を担ぎ、ハウンドドッグ猟犬部隊を殲滅する気  
でいた。

理由は簡単だ。

システムズ妹達を守ろうという共通した目的があるからである。

アクセラレータ一方通行を逃がすだけで、後はのほとんど病院へ戻っていいわけ  
がない。

ラストオーダー打ち止めを一度捕獲したということは、ハウンドドッグ猟犬部隊はラストオーダー打ち止めを介  
し、ミサカネットワークに何らかの干渉をしようとしているに違  
ない。それが何なのかはわからないが、あの少女達にとって良いこ  
とでないことは間違いない。

なら、それは防ぐ。

邪魔をする。

それだけだ。

地面に転がる黒ずくめ。たった今、四人全員の胸に風穴を開けたからだ。まだぼんやりと意識が残っているやつもいるかもしれないが、長くは保たないだろう。

ここまで来て、インターフェイス接続回路は気付いた。

木原の姿がないことに。

「オイオイ…ひでえ上司だなあアイツ」

そびえさせたコンクリート壁を元に戻し、少年はぼやく。

「木原つつたつけ。化け物の相手は部下に任せて自分は逃亡かあ？血も涙もねえな」

自分が言うのもなんだが。

インターフェイス接続回路は自重気味に笑い、胸にハンドボール程の穴が空いた男のポケットから、連絡用のトランシーバーと、味方の位置情報が表示されるモニターのついた小さな端末を抜き取った。

これで残りのハウンドドッグ猟犬部隊の居場所、状況が掴める。

インターフェイス接続回路はそれらを強引にズボンのポケットに押し込むと、雨水が満たす地面を駆け出した。

\*

「ねえ…エクストラローラ多重観測、ってミサカはミサカは不安を声に出してみたり」

「なんでしょうか、とミサカはあなたに向き直ります」

18時56分、ラストオーダー打ち止めとエクストローラ多重観測は、隠れながら街を移動しているところだった。

インターフェイスへケンキャンセラー  
接続回路が冥土返しを介し、エクストローラ多重観測に連絡をしてきたのはほんの10分前のこと。

呼ばれて来てみれば、彼は打ち止めをラストオーダー多重観測に押し付け、大急ぎで駆けていったのだ。今は安全な場所を探して移動しているのだが、エクストローラ多重観測はそんな場所はないことに気付いていた。

いつもなら雨だろうと人工の光で満たされる学園都市。

それが、あつても数えるほどしかなく、今の街は本当に暗い。まるで、今の自分たちの感情に呼応しているかのようだ。

「二人は…大丈夫かな、って、ミサカはミサカは胸の不安を打ち明けてみたり」

路地裏に駆け込み、廃材の陰に隠れて暗視ゴーグルで周囲を確認する。腕の中には、ただでさえ小さな打ち止めが小さくなって震えている。雨に濡れていて寒いのかもしれない。エクストローラ多重観測も寒さを感じていた。だが、震えの原因が寒さだけではないことに、二人は気付いていた。

「大丈夫。あの人が助けに行っただんです。必ずアクセラレータ一方通行を助けてくれます、とミサカはあなたを元気づけます」

「うん…そうだね、ってミサカはミサカは頷いてみる」

周囲に人の気配はない。エクストローラ多重観測は打ち止めを抱え、路地を抜け

て通りに出る。

雨音だけが響く暗い街。

エクスプローラ  
多重観測は注意を払いながら駆け出した。

そこで。

思わぬ人物と遭遇した。

「御坂妹…ラストオーダー打ち止め？無事だったのか、お前ら！」

それは、ハウンドドッグ猟犬部隊を相手に奔走する二人の少年に大きく影響を与えた少年。

上条当麻だった。



どうも、櫻井です。

いつもより遅い時間に更新することになってしまいました。

戦闘描写は考えるのが楽しくていいですね。このペースだと三章の長さがハンパなくなりそうですが、なんとか10話前後で片付けたいと思います。

三章は接続回路サイド、一方通行サイド、多重観測サイドで展開する予定です。魔術サイドの話は多分多重観測サイドで少しと、各サイドで例の天使の翼を見るだけになりそうです。

科学サイドメインになってくるので、原作本やアニメを見ないと魔術側の状況が掴みにくいかもしれません。ご了承ください。

それでは次回、お楽しみに

3 - 3 原因 マジユツ (前書き)

「いつんなつたら木イ原のどこまで行けんだ？」  
学園都市最強の超能力者(レベル5)

一方通行  
アクセラレータ

「…車ア出せ」

シスターの去った車内で、一方通行はシートに縫い付けられた黒アクセラレータずくめに呼びかけた。

あれから十数分。病院の傍の路肩に車を止め、簡単な嘘でインデックスを病院へ向かわせたところだった。嘘の中身は、彼女には理解できないであろう内容だ。

『カエル顔の医者を見つけてミサカネットワーク接続用電極のバッテリーを用意しろと伝える』

そう言った。

無論そんなものはないし、あつたとしてもあのシスターには行かせなかつたろう。

これ以上彼女を巻き込むわけにもいかないし、役に立つとも思えない。むしろ彼女を守る事まで考えなくてはならない。

そんなのは、あの獬犬部隊ハウンドドッグを相手にする上では邪魔でしかない。

「ま…まだ解放してくれねえのかよ あが！」

黒ずくめ…もうマスクとゴーグルを外して顔が見える男性が、悲鳴を上げる。

アクセラレータ一方通行が男性を縫い止めている金具を揺らしたからだ。軽くさすってやるだけでも、結構な効果がある。

一方通行は低い声で言った。

「死ぬか生きるかオマエが選べよ」

静かに発進する黒のワンボックス。雨の吹き込む入り口から、白髪の少年は思考を始める。

交通表示板を見るに、どうやらここは第七学区の端らしい。

ならば、あそこが使えるそうだ。

木原に殴られたときに失った杖の代わりも、なんとか用意できた。最も、なかなか面白い杖ではあるが。

(しかし、あの俺とそっくりなヤツ…)

空中通路を崩したり、あのシスターを正確にこちらへ飛ばしてきたり。少なくとも風を操作することができるのは間違いないが、彼の能力はそれだけではないだろう。

敵ではないようだが、信用しすぎるわけにもいかない。大体、なんで自分なんかを助けにきたのか。

…いや待て。

(確か、あのガキが俺とそっくりなヤツに会ったって言ってたなア。ひょっとして、さっきのヤツか？だとすると…)

確か打ち止めは、その少年のことをインターフェイス接続回路と呼んでいた。何やら長々と喋っていたが、覚えているのは名前だけだ。

（インターフェイス接続回路…あのガキに頼まれて俺を助けに？ならガキはどうした）

いくらなんでもこれ以上一人にしておくわけにはいかない。

アクセラレータ  
一方通行が雨風の吹き込むドアから外の様子を伺う。

一台も車が走っておらず、妙な静けさが辺りを満たしている。

（まさか…この静けさも木原のクソ野郎の演出ってわけじゃねエだろオナ…）

\*

「なあ、お前らこのくらいの修道服来た女の子見なかったか？」

上条が肩の辺りに地面と平行にした手のひらを当てた。

「ミサカは見ていません、とミサカは即答します」

「そっか、悪いな。ったく、あいつどこに行ったんだ…」

上条が天を仰ぐ。と言っても上を向けば雨粒が降り注ぐのだが。

瞬間、エクストラローラ多重観測に抱えられている打ち止めが、ピクツと何かに反応する。

「ヤツらが来た、ってミサカはミサカは路地裏へ駆け込むよう促してみたり！」

「ヤツら?」

「ともかく一緒に来て下さい、とミサカはあなたに同行するよう促します」

上条が動き出すのを待たず、エクストラローラ多重観測はさつき隠れていた路地裏へと駆け込んだ。続いて上条が駆け込んでくる。

「おい、どういうことなんだ?」

「静かにして下さい、とミサカは唇に人差し指を当てて促します」

路地裏から見える大通りの一部分を、黒のワンボックスが通過していく。

エクストラローラ多重観測がゴーグルに内蔵されたサーモグラフィで向かいの壁を見て、

「…どうやら中に居る人も意識を失っているようですね、とミサカは熱紋反応から推測します」

「アンチスキル警備員が倒れてたことと何か関係があるのか?」

アンチスキル警備員が倒れていたのはエクストラローラ多重観測も目にしていた。死んではないな  
いようだったから逃げることを優先したが、こんな偶然が相次ぐなど、何らかの力が働いているとしか思えない。

「またヤツらが来た、ってミサカはミサカは警戒してみる」

「なんだって?」

上条が耳をそばだてる。

確かに、武装同士がこすれる音、何より重厚な足音が、ガチャガチャと雨音に混じっている。

「おそらく、ラストオーダー打ち止めの臭いを追跡してきたのでしょう、とミサカは推察します」

「くそっ……」

上条が目の前壁に設置されたドアに手をかけた。わかつてはいたが、開かない。

「御坂妹、電子ロックを外せないか」

言われてすぐに、エクスプローラ多重観測はロックに手をかざし、あっという間に開けてみせた。レイオノイズ欠陥電気の扱いには慣れている。どうでもいいことだが、どうやら上条には御坂妹で通っているらしい。

三人は建物の中へ入ると、再度電子ロックをかけ直した。どの道破られそうな気がするが、気休めぐらいにはなる。どうやらここはファミレスの厨房のようだった。三人が入ってきたのは非常口だったらしい。

「これからどうするの？ ってミサカはミサカは尋ねてみる」

「そうだな…連中は車を持つてる。多分足で走っても追いつかれちまう。この時間じゃ電車もバスもないし、素人のタクシーを捕まえても逃げきれないと思う」

そもそも、この分だと街中の人間が気絶していそうだが。  
厨房から客の座るメインフロアに出て、上条は思った。

エクストラローラ  
多重観測の推察通り、店内の人間は誰一人として立っていないかった。老若男女、客、ウェイトレス。全員が倒れ突っ伏し気を失っている。取り付けられたテレビから流れてくる愉快なバラエティ番組と、明かりはついていても全員が倒れている空間。ミスマッチにも程がある。

「うわあ…ってミサカはミサカは目の前の光景に息を呑んでみたり」  
エクストラローラ  
多重観測の腕を掴んで、ラストオーダー  
打ち止めが息を呑む。上条もエクストラローラ  
多重観測も、目の前の光景には驚愕していた。

「…ここは駄目だ。とにかく人の多いところへ行こう。連中も騒ぎは起こしたくないはずだ、大勢と一緒に居れば迂闊に手は出せないだろ」

上条が言うと、二人はこくりと頷い。

ダダダダッ！！、と。

ファミレスの入り口から厨房側に向け、L字型に取り付けられた窓が、一斉に粉々に碎け散った。  
それがサブマシンガンによる斉射だと気付くより先に、三人は伏せて窓の高さから浴びせられる弾丸をしのぐ。

(あいつらか…！)

さっきの黒ずくめの集団が、わずかに見える。



(他の客が居るのにおかまいなしかよ…)

もしかしたら、飛び散った破片や斉射された弾丸で傷付いた人が居るかもしれない。上条が唇を噛み締める。

黒ずくめ達が店内には入ってくる気配がする。逃げ道は入ってきた非常口と、たった今黒ずくめが開けてくれたギザギザに割れている窓。

どちらへ向かうにしても、三人はレジ前に居るであろう黒ずくめの視界に入ってしまう。

入れば、挽き肉にされてしまうことは目に見えている。

(どうする…なんとか…なんとかして二人だけでもここから逃がす方法は…)

上条の頭脳がフル回転する。

エキスクローラ 多重観測の空間移動を使えば、打ち止めと彼女の二人は逃がせるはずだ。だが、外に黒ずくめの仲間がいるかもしれない。彼女は風マジメント紀委員の白井黒子とは違う。連続で発動できないために、一度使えば大きな隙ができてしまう。

(どうする…?)

明かりの消えた店内で、上条が、エキスクローラ 多重観測が、ラストオーダー 打ち止めが思案する。

…三十秒。胸の内でなぜか数えていた、黒ずくめが入ってきてからの時間。遊んでいれば瞬間に過ぎてしまうような時間が、こん

なに長く感じられるとは。8月31日の時間の流れがこんな感じなら、自分はどのくらい宿題が進んだだろうかと、現実逃避のような思考が頭の隅で始まりかける。

(…あれ?)

上条当麻が疑問符を浮かべた。

(なんで三十秒も経ってんだ?)

客が居るのにも構わず撃ってきた連中が、こんなに行動が遅いはずがない。ここはレジから直線距離で5mも離れていない。なのに何故こんなに時間がかかる?

その答えは、隣に座る、常盤台中学の冬服に身を包んだ少女が口にした。

「…気絶しています、とミサカは彼らの体温から推測します」

「なんだって?」

つまり、この謎の現象は黒ずくめの仕業ではなかったのか。上条はうつすらと、ひとつの可能性を浮かべる。こんな超常現象を、自分は何度も経験している。

不意に。

「ハッアアアィ びっくりしちゃったカナ?怖がってないで出ておいでー?」

意に反して、聞こえてきたのは甲高い女の声だった。

3 - 3 原因 マジユツ (後書き)

はい、今回は主人公が登場しませんでしたね(汗

思った以上に上条サイドで文字数を食ってしまったって、接続サイドが書けませんでした。大体3000文字くらいで一話にしているのですが、もっと増えても問題ないでしょうか？5000文字くらいでも大丈夫でしょうか。

忙しい中読んで下さっている方々もいらっしやるかと思うので加減していたんですが、実際どうでしょうか？意見を聞かせてください。

次回は接続サイド多めになります。

それでは次回、お楽しみに

3 - 4

決意

残虐ナ意志

(前書き)

「今回は前半グロテスクだから気を付けてね、ってミサカはミサカは注意を促してみる！」

シスターズ  
妹達検体番号20001号

打ち止め(ラストオーダー)

！)

「これで三組目だな…」

接続回路インターフェイスの足下には、黒ずくめの女が倒れていた。獵犬部隊ハウンドドッグは男女関係なく隊に組み込む、能力重視の方策なのかもしれない。

最初に撃破した黒ずくめから奪ってきたトランシーバーとモニター端末は、思った以上に役に立っていた。

トランシーバーに記憶されたメンバー全員の固有周波数は、こちらから一方的に繋げることで向こうの会話や周囲の音を聞き取り、状況を把握できる。

端末の方は、獵犬部隊ハウンドドッグの使用する車両のポイントとメンバーのポインタ両方を把握でき、位置を把握できる。

状況と居場所、それらを掌握できれば、たかが武装集団などもの数ではない。

接続回路インターフェイスはモニターを見て、人知れずニヤリと笑って見せた。

どうやら、カモがかかったらしい。

ダダダダダツ、と、サブマシンガンを斉射する音がした。それは接続回路インターフェイスの細い体に正確に浴びせられるも、そのひとつとして効果を為さず、小さな火花を散らせるだけだ。

「…馬鹿な…！」

黒ずくめの一人が言った。

接続回路はどこかの学校のグラウンドを照らす巨大なライトの光を背に、口端を吊り上げる。

「不意撃ちすりゃあ一方通行も殺せると思ったのかあ？」

「う、撃て！撃ち続ける！」

接続回路の声を無視し、黒ずくめ達はサブマシンガンの連射を継続する。相変わらず、接続回路にダメージが通らない。

「まあ、バッテリーも残り少ねえみてえだし？戦闘直後の不意撃ちなら殺せたかもしれねえなあ。ははっ、今の一方通行だったらなあ」

サブマシンガンの斉射は止まらない。投げられた手榴弾も空刃で無力化し、ハンドバズーカの砲弾もバラバラに粉碎し、足元の死体を炎に包む。

「テメエらが俺を一方通行だと思っ理由は特徴のデータと臭いだろ？だけどなあ…」

ゆっくり歩いていた接続回路は急加速し、黒ずくめの一人の顔面を貫いた。

「ヒヤハハハハッ！！」

目の前に迫った接続回路。サブマシンガンの斉射が止まる。

横一列に路地を塞いで、斉射していた黒ずくめ。その一番端の黒ずくめの顔面を、少年の左腕が貫いている。接続回路インターフェイスは微小な気圧操作をし、空中で薙ぐように回し蹴りをする、並んでいた残り三人の首を跳ねた。

残る一人に邪悪な笑みを向け、接続回路インターフェイスは口を開く。

「臭いってなあ、一定の分子配列によって生じてんだ。テメエらの嗅覚センサーにや一方通行アクセラレータの臭いがデータ化されて入ってる。…後はわかるよな？」

言ってみて、接続回路インターフェイスは黒ずくめが自分の能力を知らないことを思い出した。まあどうでもいいことなのだが。

腰が抜けたのか、黒ずくめは無様にも地面にしりもちをついていた。見下ろして、接続回路インターフェイスは続ける。

「データを参考に構造式を算出して、俺の臭いを書き換えればいい。そうすりゃ…」

がしっ、と黒ずくめの顔を鷲掴みにし、少年は目を剥いた。

「完璧な囷の完成だ」

ぐしゃっ、という生々しい音が辺りに響く。物体レベルに分解し、肉片や頭蓋の破片、脳漿までもを飛び散らせる。

別に綺麗に殺すこともできたのだが、無様に散ってもらいたかった。

理由ははっきりしない。

だが、より楽しく潰したいと思った。

「ああー…たーのしっ」

長年隠蔽され続け、誰とも接し合うことなく、ただただ殺し続け  
て過ごしてきた彼は、その過程で歪んでしまっていた。

だが彼は、あの時とは違う。

「くそっ、たのしーなあちくしょう。すっかり本題忘れちゃったよ」

これはただの殺戮ではない。

「チツ、久しぶりだからテンション上がって仕方ねえわ…駄目だな  
あ…ああー駄目だ」

誰かを守るための殺戮だ。

やっていることは変わらないが、少なくともインターフェイス接続回路にとっては  
絶対的な違いを持っていた。

ゆらり、と。

インターフェイス接続回路が、残る黒ずくめを見た。血塗られた白い腕。黒い長袖  
のTシャツの袖口は、赤黒く変色している。黒ずくめの顔が引きつ  
った。

「悪いなあ…ホント、悪いわ…」



言いながら、インターフェイス接続回路は空気圧による加速と同時に宙を浮き、黒ずくめの一人に迫っていく。

「来るなっ！来ないでっ！」

黒ずくめが喚きながらサブマシンガンをぶつ放す。声から判断するに女性らしい。インターフェイスだが、インターフェイス接続回路は容赦をしない。当たっても平気だが、敢えてインターフェイス接続回路は回避行動をとった。微小な操作をし、低空で半回転しつつ、仰向けの状態からオーバーヘッドキックの要領で脚を振り上げる。それは黒ずくめの頬を直撃した。が、インターフェイス接続回路は分解をせず、敢えて地面との間まで持つて行き、全体重をかけて相手の顔を踏み砕く。

「さあて？お次あ…！」

残り、二人。片方の攻撃を完全に遮断しつつ、片方に迫る。また、女だ。ひよつとしたら、このチームは女性メンバーで固めているのかもしれない。頭の片隅で考え、インターフェイス接続回路は彼女の目の前に脚をつき、喉元と下顎の隙間、骨のない、肉で敷き詰められた部分に、分解公式を作用させた手刀を突き立てた。

「あっ…がっ」

女の頭頂部から、白い指が四本、突き出てくる。

「せ、セレーナを放せっ！」

「あ？」

不意に、背後から男の声。ガクガクと震えて、こちらに銃口を向

けている。インターフェイス 接続回路はしばらく呆然と男を見た。

( ああー、逆光のせいで俺が女の胸倉掴み上げてると思ってんのか )

インターフェイス  
接続回路は納得し、

「何だあ？この女、テメエの婚約者フィアンセか何かかあ？ああー、そりゃあ悪いことしちゃったなあ。…じゃあ」

バリバリツ、と、何かを砕くような、引き剥がすような音が聞こえる。

「や、やめろっ！セレーナを…」

べちやつ、と。

男の足元に何か放られた。男はしばらく、目に映る情報の処理に時間が掛かっていた。

気付いてはいけないと、脳が理解を遅らせているのかもしれない。

そう。

眼球のない、面のようになった彼女の顔面が、地面に落ちていたのだから。

「うわあああああああああああああ！…！」

狂ったように、男はサブマシンガンを乱射する。インターフェイス 接続回路は眼球の垂れ下がる断面むき出しの女を放り捨て、男へと飛び掛った。

アクセラレータ  
一方通行の居場所はすぐに確認できた。

本来ひとつの車両には5人のメンバーが乗り、それがひとつのチームとなる。

ひとつの車両に1人しか乗っていないのは、間違いなく一方通行アクセラレータが強奪した車両だろう。

第七学区を出て、今は第五学区に進入したところだ。

そのずっと後ろには、ハウンドドッグ 獵犬部隊の追跡部隊がいる。

(このままじゃ追いつかれんな。アイツと二人一緒に居るのはあんまり見られたくねえし……)

インターフェイス まあ接続回路の姿を見て生き残った木原が部隊全体に警戒を促している可能性はあるが。

(なあと、こっちはアイツの臭いを付けてんだ、向こうから来てくれる可能性の方が高え)

早速こちらへ向かっている部隊もある。まずはこれを片付けてから移動しよう。

インターフェイス 接続回路は決断すると、服にこびりついた肉片を払った。

＊

「…やっぱり駄目かア」

アクセラレーター  
一方通行は第五学区の電話ボックスに居た。

直接携帯で打ち止めと通信するのは危険と考えたからだ。  
ラストオーダー

携帯電話の電源が入っていないか電波の届かない場所にいる、そんな旨のアナウンスが流れている。おそらくは前者だ。

(…まア、予想通りってトコだな)

アクセラレーター  
一方通行は再度小銭を放り込み、別の番号を入力する。

『こんな時間にどんな用件かな？』

低い、年輩の声が受話器から聞こえてくる。

「トラブルが起きた。デカイトラブルだ」

『一応、御坂妹さんとやらから大体の事情は聞いているよ？彼女たちの電氣的ネットワークを介して情報の交換が行われているらしいね』

なるほど、彼女らには電話なんかよりもずっと安全な手があったな、と一方通行は関心を示す。自分には使えないことが少し不便にも感じたが。

「だったら話は早エ。ソッチが知ってる情報を渡せ。あのガキはど  
オなってる？」

『予想はしていたが、君もそれを聞くんだね。今は<sup>ハウンドドッグ</sup>猟犬部隊の別働  
隊に追われているようだ』

「待て。俺も、だと？」

意外な返しに、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は聞き返した。

『ああ。君はもう彼には会っているはずだよ？<sup>インターフェイス</sup>接続回路という少年  
ね』

「ソイツア、俺みてエなら<sup>シラ</sup>面したヤツか？」

『ああ。彼も<sup>シスターズ</sup>妹達に関して特殊な立場にあつてね。今は<sup>ハウンドドッグ</sup>猟犬部隊と  
やり合っているようだ。最初に<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めを保護するために<sup>シスターズ</sup>妹達の一人  
を向かわせると言ってきた、ついさっきはケガ人が届くから簡単に  
処置をしたら職員、患者全員退避するようにと言われたところだ  
よ』

思った以上に、あの少年は頭が回るようだ。背中を刺して運転さ  
せていた<sup>ハウンドドッグ</sup>黒ずくめをさっき救急車で運ばせたばかりだった。

<sup>ハウンドドッグ</sup>猟犬部隊の端末でも奪ったのだろうか。

「…色々話す手間が省けたな。俺もソイツと同じことを言うつもり  
だった」

『それで。それを知った上で、君はどこまでやるつもりだい？』

電話の相手、カエル医者こと冥土<sup>ヘウンキヤンセラ</sup>歸しの問いに、一方通行は答え<sup>アクセラレータ</sup>る。と言つより宣言する。

「木原は殺す。獵犬部隊もブツ潰す。そして…あのガキを無傷で助け出す」<sup>ハウンドドッグ</sup>

『不可能だよ。この限られた状況の中で、君はあまりに多くの行動目標を抱えすぎている』

「獵犬部隊とはソイツもやってんだろ？なら面倒は半減だ。大体、<sup>ハウンドドッグ</sup>いつから医者はフザけたリップサービスまで始めたんだ？ソツチの世界の住人が、知ったよオナクチで闇を語んなよ」

『僕は君以上の地獄を見てきているよ。君と同様、闇つてヤツを知つてる先輩からアドバイスをしようと言うんだ。目標は一つに絞れ。<sup>インターフェイス</sup>折角<sup>ハウンドドッグ</sup>接続回路が獵犬部隊を引き受けてくれているんだ。それを無駄にしない方がいい。君がすべきことは一つだけのはずだ。分かるだろっ？』

<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は間をおいて、

「オマエが期待する答えの検討アついている。お医者様らしいお綺麗な答えだな。だが、あのガキを無傷で助けることも、木原達を潰すことも同じ事なんだよ」

『いい加減に現実を見るんだ一方通行。<sup>アクセラレータ</sup>君だつてわかっているだろっ？君は能力を使ったにも拘わらず、木原に一度敗れている。勝つことすら難しい相手に対して、余計な希望は持たないことだ。妥協<sup>ラストオーダー</sup>をしる。打ち止めを無傷で助けることなど不可能だ。最善の手を打つたとしてもね』

いつの間にか、自分は随分とこの医者に依存していたらしい。言葉の一つ一つが重厚に響いてくる。

「クソツたれが。それを認めたくねエからこそ、泥ン中這い回って血まみれになっても木原を殺すつてのが分かんねエのか？」

「分からないね。望んだ程度で上手く行かないからこそ、僕は医者になつたんだ。腕が折れようが皮膚がはがれようが内蔵がつぶれようが頭蓋が欠けてしまおうが、生きて僕のところまで連れてくれば必ず直す。完璧にね。だから一方通行アクセラレータ」

呼ばれて、一方通行アクセラレータはハツとした。

医者の話に、いつの間にか聞き入っていたのだ。

その言葉のひとつひとつが、汚れ荒んだ心にやすりをかけていく。

「君は無駄な高望みなどせず、ただただラストオーダー打ち止めの命を助けることを優先しろ。それが一番大切なものだ。僕みたいな未熟者の腕では取り返せない、唯一無二の至宝だ。違つかい？もしも違つと言うのなら、あの子の命よりも大切なものを今ここで言ってみろ」

一方通行アクセラレータは答えない。

答えられなかった。

医者言うことは全て正しかった。

「木原に獵犬部隊ハウンドドッグ。そんな退屈な前哨戦はさっさと二人で終わらせ

る。ラストオーダー 打ち止めを早く僕の所へ連れてこい。そこから先が決勝戦だ」

ラストオーダー 医者はその後、一時病院を放棄した後の身の隠し場所を教えた。打ち止めを回収してから彼女を連れて来させるためだ。

受話器を置き、アクセラレータ 一方通行はぼんやりとボックスの中から外を見た。

相変わらず雨は降り続け、ガラス張りのボックスに水滴をつけている。

(…)。どんな最善の手を打ったって、無傷じゃあのガキは助けられねエ…か)

諸々の条件から鑑みれば、仕方のないことだ。

余裕はない。

「上等じゃねエか…」

彼は立てかけておいた杖…車から奪ったショットガンを取り、ボックスのドアに手をかける。その表情は笑っていた。にこやかなものではない。殺意に満ち満ちた、悪魔然とした笑みだ。

「あのガキを救い出すためなら、善人でも悪人でもブツ殺してやる」

暗い決意が、雨音に混じって放たれた。



グロ回です。書いててどんどん次の惨い殺し方が浮かんでくる僕は危ない人なんでしょうか(汗)

今回は5000文字オーバーです。長くても問題ないという方がいらしたので、少し多めにとってみました。

最高6000文字前後、最低3000文字前後を基本にしたいと思います。

今日は大きな地震がありましたね。授業中に揺れたのでびっくりしました。

僕の地域は震度4程度で済みましたが、皆さんは大丈夫でしたか？

現地の方々の無事を願います。

3・5 前方 ヴェント (前書き)

「あたしの出番まだかしら…」

学園都市第三位の超能力者(レベル5)

御坂美琴

19時16分、暗いファミレス店内で、上条当麻は状況の把握に努めていた。

まず、あの武装した黒ずくめは打ち止めを狙って動いている。多<sup>エ</sup>クスプローラ<sup>ラ</sup>ラストオーダー<sup>ター</sup>で自分と会い、今こうして一緒に行動している。警備員が倒れていた件については、てっきり黒ずくめによるものではと思っていたが、今黒ずくめ達も倒れていることを考えるとその可能性は薄い。

そして突如として現れたこの女。姿は見えないが、少なくとも黒ずくめの仲間ではなさそうだ。

今まではやり方は極力自己主張をせず、音も声も最低限、迅速な対応をとっていた。

だがこの女は、むしろ自己主張し放題だ。見つけてくれ、捕らえてくれと言わんばかりの大声で、こちらに呼びかけてきている。

以上のことから、この女は黒ずくめの仲間ではないように思える。足元に仲間が転がっているのに何もしない、しかも一人しか居ないという点からも間違いなさそうだ。

だが、だからと言って出て行って大丈夫というわけではない。黒ずくめの仲間でないから仲間ということにはならない。敵の敵は味方なんて言葉があるが、それは勢力が二つしかない場合だ。現に、第三の勢力に心当たりがある。

「ハハッ、怖がってるなあ。まあ、あんだだけピンチってたら仕方がないでしょうけどね。でもさー、こっちにも事情があるからさー、

あんまり言うこと聞いてくれないとー」

女の声には笑いが混じっていた。飄々とした喋り方だ。上条が判断しかねていると、

「グツチャグチャの塊にすんぞコラ」

「ッ!」

上条は多重観測エクスプローラに逃げるように合図し、女の前に躍り出た。

刹那、見えない攻撃が、ファミレスの中央にあった円柱を薙ぐ。真つ二つになった円柱は、勢いをとどめることなく奥の壁に激突し、壁は余りの衝撃に耐え切れず、破片を撒き散らして崩れていく。建物全体が大きく震える。どうやら、円柱がぶち当たったのは建物の骨組みだったらしい。

背筋が凍った。

改めて、上条は相手の女の姿を見た。妙な風貌の女だった。服装は現代的ではなく、中世ヨーロッパの女性が着ていたような黄色のワンピース。髪は帽子のような布に覆われ、毛髪は見えない。

何より、その顔。顔中に銀色に光るピアスをしており、整った顔を歪んで見せている。目元にもきつい化粧が施され、一見して嫌悪感を抱くような風貌だ。

だが、上条は外見もそうだが、その手に持たれた巨大なハンマーに注目していた。無論、一般的なハンマーとは異なり、これも風貌と同じく西洋風で、禍々しい見た目をしている。

彼は彼女の足元に転がっている数人の黒ずくめを見た。誰かに殴り倒された、と言うよりは、自然に倒れこんでいるように見える。ハンマーで殴られたようなものではない。大体、ハンマーで殴ったにしろ仲間が気付くはずだ。それに、上条はあの三十秒間の中で、打撃音や悲鳴は聞いていない。

(…待て)

倒れこんでいる黒ずくめ。その姿が何かと重なった。

(これ…)

武装こそ違うものの、一見黒ずくめ達の姿は警備員アンチスキルに酷似している。よほど詳しくなければ、間違えてしまいそうな程に。

故に。

(似ている…やっぱり、あの変な現象に…)

中世ヨーロッパ。妙な武器。怪現象。それぞれのピースが、一つにまとまるつとする。

それが形を成す間際、女は静かに口を開いた。

「『神の右席』の一人、前方のヴェント」

ヴェントと名乗るその女。彼女はイタズラのように舌を出した。

「目標発見 まーそんなワケで、さっさとぶっ殺される上条当麻！」

舌につけられた鎖の先。

上条の思い描いたビジョン。

銀色の十字架が、そこにあつた。

\*

「これで半分か…」

インターフェイス  
接続回路はスラム街の一角に居た。華々しい学園都市の雰囲気とはまるで違う、スキルアウトの溜まり場。インターフェイス  
接続回路もクス野郎と小馬鹿にするその集団の溜まり場は、隠れ場所には持つて来いだ。無論、隠れるためにここを選んだのではない。自然を装うためだ。

バッテリーを消費しつつある一方通行が、堂々と道の真ん中に居ることはないだろう。ハウンドドッグ  
猟犬部隊を煙に巻き、面倒はなるべく避ける方針のはずだ。

彼は端末を取り出し、画面を見た。一方通行の居場所を特定するためだ。アクセラレータ

既に最初に奪取した車両は降りている。故にインターフェイス  
救急車に運ばせると予測し、冥土返しに指示しておいたのだ。幾分わかりにくくはなつたが、特定は簡単だ。ヘンキャンセラー

ハウンドドッグ  
猟犬部隊は匂いを追って一方通行を追っている。そして臭源はふたつ。

インターフェイス  
接続回路の居るエリアとは違う方向で、尚且つメンバーが集まっている場所。

そこが一方通行の居場所だ。  
アクセラレータ

彼は端末を簡単に操作し、  
ハウンドドッグ  
猟犬部隊が集まっているエリアを検索する。

「第三資源再生処理施設：要はゴミ処理場か。ははっ、なかなか洒落てんじゃないかねえか」

もつとも、一方通行はそんな言葉遊びよりもここで分子配列を組み換える洗浄剤でも探すつもりだったのだろう。もしくは両方かもしれない等と、どうでもいいことを考える。

たった今、  
インターフェイス  
接続回路は何組目かの  
ハウンドドッグ  
猟犬部隊を文字通り虐殺したところだった。指先についたグチャグチャした物体を、軽くこねてから分解する。彼の体は綺麗なままだった。相手の肉片やら何やらがこびりついて、分解すれば綺麗さっぱり消えてなくなる。服の汚れも、服にはない素材に限定して分解公式を使うことで、汚れのみをそぎ落とすことが可能なのだ。

「さあてと？俺はこの後どうするか」

薄汚れたドラム缶に腰掛け、  
インターフェイス  
接続回路はトランシーバーのスイッチを入れ、モニターを見ながら周波数を合わせる。

『ナンシー。ヤツの目的は何だと思っ？』

『この施設が戦略上、重要になるとは感じられない。しかし、単に物陰に隠れるなら、わざわざセキュリティをかくぐって、こんな所へ来るのは手間だ』

会話の内容がはつきり聞こえる。どうやら施設の敷地内ではあつても中ではないらしい。

(コイツら、まだ中には入ってねえなあ。まあ、一方通行アクセラレータの居場所はハッキリしたが…)

部隊数はもう残り少ない。後はスラムに向かつてきている班がふたつとゴミ処理場に居るのがふたつ。アクセラレータ一方通行ないしは自分が使うために空けさせた病院にもひとつ向かつている。それと街中で待機している班が三つ。おそらく一方通行アクセラレータが利用した運転手の処理だろう。さらに言えば一方通行アクセラレータに任せた修道服の少女の口止めも兼ねているかもしれない。病院付近で一度車を停めていたから、あの時点で修道服の少女とは別れていると推測できる。

(だとしたら、あのガキをカエルに任せたって事か。…病院の移動にはどれくらいかかる…)

ヘウンキャンセラー 冥土返しを促してからまだ10分も経っていない。患者の数、運転手の処置の時間を考えると、全然足りない。

(病院に向かつてるクソ犬共は…14人か。やべえな、こんだけ居たらすぐに制圧されちまうぞ。仕方ねえ、こつちに向かつてる連中は道中潰して、病院目指すか)

インターフェイス 接続回路は立ち上がり、能力を行使した。強烈な風が、彼の体を後押しする。爆発的な突風を背後に浴びせながら、彼は真剣な表情



で滑空した。

\*

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ」

息切れしながら多重観測は<sup>エクスプロラ</sup>ず濡れになって走っていた。上条の合図で、ファミレスから空間移動で<sup>テレポート</sup>脱出したのだ。腕の中の打ち止めは<sup>ラストオーダー</sup>相変わらず震えている。

「ハアツ…ハアツ…」

高架下の柱の影に駆け込み、<sup>エクスプロラ</sup>多重観測は座り込んだ。

どれだけ走っただろう。数キロは走っている。途中何度か空間移動も<sup>テレポ</sup>使用しているから、何百mかは少なくなるが、結構な距離を走った気がする。本来ならこの高架橋の上は、学園都市全域に伸びる快速線が走っているのだが、今日はどうやら動いていないらしい。静かな、小さな街灯の明かりくらいしかないこの空間には、<sup>エクスプロ</sup>多重観測の吐息がこだましている。何とか音を小さくしようとするも、一向に効果がない。

「大丈夫…？ってミサカはミサカは尋ねてみたり…」

いつもなら澆刺としている打ち止めの声も、<sup>ラストオーダー</sup>相変わらず小さくて頼りない。いや、自分が頼られなくてはならないのだが。

「大丈夫…です。少し疲れただけです、と、ミサカはあなたの頭を

なでて微笑みます…」

軽く打ち止めの頭を撫でてやる。言っではみたものの、自分がちやんと笑ってるのか分からない。

「そう…無理しないでね、ってミサカはミサカは…」

俯いて、打ち止めは言った。多重観測はその小さな体を抱きしめる。

（接続回路…あの人は、大丈夫でしょうか…）

総合的に判断するなら、接続回路が黒づくめに殺される可能性は極めて少ないだろう。だが、一方通行をも追い詰めたという話を聞くと、どうにも心配だ。その一方通行も、上条だつて心配だ。こうして自分は逃げていてもいいのか、という気にもなる。

それに敵は武装集団だけではない。あの妙な格好をした女。今上条と戦っているあの女は、普通の人間ではない。何らかの超能力ないしは特殊能力を持っていると、多重観測は考えていた。

もしかしたら、あの女こそが最も危く。

「っ…」

ドサツ、と。コンクリートの地面に倒れ込む。力が抜け、抱きしめていた打ち止めが腕の中から外れた。

彼女は目を瞬かせ、ゆさゆさと多重観測の体を揺する。

「多重観測…多重観測？ねえ、起きてよ多重観測っ、てミサ力はミサ力は…」

涙目になる打ち止め。多重観測は起きない。辺りは暗く、むしろ不安を煽るような街灯がぼつぼつとあるだけ。直ぐ傍ではポタポタと雨粒が落ち、水溜りに波紋を広げている。

不安。怖い。嫌だ。逃げたい。

抱擁から離されて、打ち止めの頭の中にはそんな感情が蔓延する。

「多重観測っ！多重観測っ！！」

より強く、彼女の体を揺るも、反応はない。生きてはいるのに、返事がない。

そこに。

「あっ…」

打ち止めの大きな瞳が、高架下を通る道路に向けられた。黒のワンプックスが、強引に横付けするところだった。そして出てきた、黒づくめの武装集団。

二人が隠れている柱から、数十メートルしか離れていない場所に、黒づくめたちが降り立った。手に持っているのは嗅覚センサー。頭の中にある証拠隠滅マニュアルから情報を引き出す。見つかったしまづまでにその時間は掛からないだろう。

最悪逃げることはできる。だが…。

「う…」

ラストオーダー  
打ち止めの瞳が、意識のない多重観測を映す。逃げることは出来る。だが彼女を連れて行けない。彼女は黒ずくめの姿を見ている。残していけば、彼女は殺されてしまいかもしれない。

「アクセラレータ  
一方通行…」

つい一時間も前は、彼と一緒に居てくれた。

「インターフェイス  
接続回路…」

つい三時間も前は、彼と一緒に居てくれた。

「エクスプローラ  
多重観測…」

ついさっきまで、彼女と一緒に居てくれた。

今は、一人。

守ってくれる人は誰も居ない。  
しばらく迷うように俯いて、ラストオーダー  
打ち止めは立ち上がった。柱の陰から、ハウンドドッグ  
猟犬部隊の様子を見る。まだ距離は20mほど離れている。音を立てずに慎重に移動すれば、何とか逃げ切れそうだ。

本当はこのまま、エクスプローラ  
多重観測と一緒に居たい。  
だが、それでは彼女や、彼らの行動が無駄になってしまう。

アクセラレータ インターフェイス エクスプローラ  
一方通行も接続回路も多重観測も上条当麻も、自分を守るために  
行動し、してくれたのだ。

ここで捕まっては皆の想いを無駄にしてしまう。なら、少しでも  
逃げ切れそうな道を選ぶべきだ。

ラストオーダー  
打ち止めは決意し、暗闇の中を駆け出した。

3 - 5 前方 ヴェント (後書き)

どうも、とりあず打ち止めを原作の状態まで持つていくことができませんでした。

多分魔術サイドの話は一方通行覚醒のための流れくらいしか取り上げられないので、魔術サイドは原作本を読んでもください。魔術サイドにはほとんど手をつけませんので。

美琴もちよつとだけ出てくる予定です。

それでは次回、お楽しみに

東北の大地震被害のニュースが続いていますね。亡くなった方々の冥福をお祈りし、被災している方々の無事を願います。

3 - 6 嘘 二人ノ悪党 (前書き)

「もう本章でミサカの出番はないのですか？とミサカは不安を打ち明けます」

シスターズリアルナンバー  
妹達検体番号 10412号

エクストローラ  
多重観測

3 - 6 嘘 二人ノ悪党

(これで粗方片付いたか…)

アクセラレータ  
一方通行の足下には、黒ずくめ達が転がっていた。その形はかろうじて人と認識できる程度で、綺麗な形ではない。

(ゴミ処理場で殺った連中を含めて、分班をふたつ潰したことになる)

総勢で27人。インターフェイス 接続回路が潰してる連中も含めれば、結構な大部隊のようだ。それだけ重要な任務なのだろう。

(さアてどうすつかア。クソ野郎一匹殺ってるトコを警備員に見られちまったからなア)

第三資源再生処理施設で、逃げ出した拳げ句に警備員に助けを求めた黒ずくめに逆上し、完膚無きまでに叩きのめし おせてのになげん 原形をとどめないまでにグチャグチャにし アンチスキル たのをその警備員に見られ アンチスキル たため、おそらく学園都市中の警備員に手配されているだろう。

(アイツも下手なことになってねエだろうな…)

インターフェイス  
接続回路のことが頭に浮かんだ瞬間、ポケットの携帯が振動した。彼はゆっくりと取り出すと、それを開いて表示を見る。目を見開く。

ラストオーダー  
(打ち止め…!…いや、木原か…!)

アクセラレータ  
見開いた瞳を細め、一方通行は通話ボタンを押した。



ラストオーダー  
打ち止めか木原か。一方通行の耳には、二人の声紋が行き交っていた。

が。

その声はどちらでもない、予想だにしない声だった。

\*

(なんだっただ…?)

ボロボロになったファミレス店内で、上条当麻は傷口から垂れる血を拭う。

終始ヴェントに圧倒され、攻撃を防ぐのに手一杯の上条だったが、何故かヴェントの方から逃げていった。魔術の副作用か、口から血を流して。

ともかく、助かったことに変わりない。

(あいつらは…)

居るはずはないのは分かっているが、上条はなんとなく、二人の少女が隠れていた柱の陰を見る。もともと、当の柱は壁を突き抜けて道路に転がり、雨に濡れているが。

(早く合流しねえとな…ん?)

外へ出ようとした上条の瞳が、床に転がるそれを映す。

それは丸みのある、ヒマワリの柄が施されたキッズケータイ。こ

れを使う人物の心当たりと言えば、一人しかない。

（ラストオーダー打ち止めの携帯か…？逃げるときに落つことしたのか）

拾い上げながら、上条は考える。

ラストオーダー打ち止めはエクスプロラ多重観測と一緒にいる。これは間違いないが、エクスプロ多重観測とて女性だ。複数の能力を所持しているにせよ、いくらか欠点もあるし、この手のプロフェッショナルである黒ずくめが相手では何とかできない可能性がある。

上条の頭の中には、地下街で彼女の話していた『知り合い』のことが浮かんでいた。あの様子だと、その『知り合い』は打ち止めと親しいようだし、話せば彼女を保護してくれるだろう。

アンチスキル警備員たちのように気絶しているかもしれないが、今の上条にはそれしか手がない。

人の携帯の中身を見るのは良心が痛むが、仕方がない。

上条は携帯を操作し、アドレス帳を開いた。

「誰、とかはないな…まあいい」

自分なら『土御門 元春』みたいに名前で登録しているところだが、彼女の携帯はそうではなかった。『登録1』、『登録2』という素っ気ない表示がされているだけ。

片端から上条は通話ボタンを押し、応答を待つ。

『登録1』、応答なし。

「次っ…」

『登録2』、応答なし。

「こっちもかよ…」

『登録3』、応答なし。

早くも最後のアドレスだ。これに応答がなかったら、打ち止めを  
探す方法が『片っ端から走って探す』しかなかったってしまっ。一緒  
に居るであろう多重観測の携帯番号も知らないし、通信手段を利用  
しての打ち止め保護は不可能になる。  
ラストオーダー

祈るような気持ちで、上条は『登録4』にコールする。

1コール…2コール…3コール…。

虚しくコール数が積み重なっていく。

(駄目かな…)

諦め、上条が携帯を耳から離そうとしたとき、勝手に呼び出し音  
が途切れた。慌てて上条が耳に当て直す。向こうからの応答はない。  
だが、間違いなく回線は繋がっている。

「良かった！やっと繋がったな！」

とりあえず呼びかけてみた。相手からの応答はない。打ち止めの  
アドレスから違う人間の声が出たから戸惑っているのかもしれない。  
上条は続ける。

「今、ラストオーダー打ち止めの携帯電話に残った登録番号に片っ端からかけてんだ。応答したのはアンタだけだった。突然で悪いが協力してほしい。あの子が危ないんだ！」

すぐには反応はなかった。だが、数秒おいて、静かな低い声が耳に入ってくる。

『どオいう状況だ？』

ようやく聞けた相手の声。聞き覚えがあるような気がするも、気にせず上条は相手の言葉通り、今までの一部始終を話した。相手は時折質問を挟んできたが、上条はそれにありのままに答えていく。数分ほぼ一方的に話した後、上条は浮かんだ疑問を口にした。

「なあ。もしかして、アンタがあの子の言った『知り合い』って事でいいのか？」

『多分な』

相手は即答した。

「良かった…そっちは無事か。ラストオーダー打ち止めの事もあるし、もし合流したら一緒に隠れてくれ」

『あのガキとはどこで別れた』

相手は頷かなかった。だが、ここで取り立てても仕方がない。

「第七学区の…えーと…」

「この通りを上条は『ケンカ通り』と呼んでいるのだが、それで相手に通じるとは思えない。雨の降りしきる通りに出て、表示板がないか探してみる。見つかるのに、そう時間はかからなかった。」

「39号線の木の葉通りだ。そこにある…えー…『オリヤ・ポドリータ』っていうファミレスだ。常盤台中学の制服着た茶髪の女の子と一緒に逃がした」

相手はなるほど、と何かに納得し、

『逃げた方向は？』

それに対し、上条は返答に困った。何せ空間移動して逃げていったのだ。方向などわからない。レポート

「分かんねえ。一緒に付いてるヤツが空間移動系の能力者でな。別れてからかなり経ってるし、居場所については見当がつかない」

言ってみて、上条は少し自分が情けなくなった。相手にしてみれば、連絡手段くらい確認しておくと文句を言いたいくらいだろう。

聞こえてきたのは、小さな嘆息だった。

『…分かった。後はコッチで回収しておく。オマエはそのケータイ捨てて、サツサと一般人に戻れ』

淡々と言い放つ電話の声。だが上条は納得がいかなかった。

確かに自分のつめが甘かったのは間違いない。だが、だからと言って全てを他人任せにするのは性に合わないし、それを承諾しては

自分が許せない。

故に、叫ぶ。

「何言ってるんだ！オレも手伝うに決まってるんだろ！！」

相手はうざったそうにしながらも、低い声で、

『そオだな。オマエは第七学区のデカイ鉄橋へ行け。あそこがいざつて時の合流地点って事になってる。あのガキが行動方針を決めるとしたら、アイツが居るのはそこだ』

合流地点。有力そうな情報を得て、上条は力む。

「ああ！分かった！！アンタも気をつけるよ。なんか今日の学園都市はおかしい。変なヤツは外から侵入してきてるし、街中の人クタバタ倒れてるし……」

『なに？』

終始冷静だった相手の声が、少し変わった。どうやら驚いているらしい。

「侵入者の方とはかく、街の異変も知らなかったのか？警備員と<sup>アンチスキル</sup>ラストオーダーか、打ち止めを狙ってたヤツらまで被害に遭ってた。殴られたりして、ってよりは自分から倒れてる感じだな。確認した限りじゃ、みんな気絶してるだけみたいだけど」

しばらく、相手の声は返ってこなかった。どうしたものかと考えているのかもしれない。

「かなり無差別な攻撃みたいだから、アンタも気を付けるよ」

『…面倒臭工…』

低い声が、小さく聞こえた。上条はしばらく黙り、口を開く。

「…悪いな。本当なら、あの子は一人にするべきじゃなかった」

なんと言われても仕方がないと思っていたが、相手はそれを責めるようなことはしなかった。むしろ自分自身を責めるように、

『…。お互い様だ。俺もあのガキを一人にしちまったからな』

何か言おうと思ったが、通話は向こうから切られてしまった。もっとも、かけ直すような真似は上条はしない。向こうにもやることがあるのだろう。なら、自分は自分のできることをするべきだ。

(第七学区のデカイ鉄橋…)

打ち止めがあラストオーダーの『知り合い』を信頼している様子を見ると、彼の約束通り鉄橋に居こうとする可能性は高い。

希望を持って、上条は駆け出した。

\*

暗闇に包まれた高架下。ハウンドドッグ 猟犬部隊の一員、テスターとロイは、嗅覚センサーを使って打ち止めの捜索をしていた。

ハウンドドッグ 猟犬部隊は現在、アクセラレータ 一方通行討伐隊、ラストオーダー 打ち止め捜索隊、木原数多護衛班に分かれて行動していた。

テスターとロイはラストオーダー 打ち止め捜索隊に該当する。

大きな柱が一對ずつ、数10m間隔で配置されたこの高架下は、なかなかの広さがあった。

と言っても、隠れる場所は幅5mの柱の陰ぐらいしかなく、それ以外はときたま草がのぞく程度のコンクリートの地面と、高架橋の幅と長さに合わせて設置されたフェンスがあるだけ。ここ逃げるには、高さ3mほどのフェンスを越えるか自分たちが車を横付けしたような高架下を通る道路に出るしかない。

そして、その道路は車を停めた場所以外には数百m先まで行かないと存在しない。

もっとも、見る限り走っていく人影もないし、臭いの反応も近いことを踏まえると、このすぐ傍に隠れているのだろう。

テスターはにやけていた。彼は元々アンチスキル 警備員の一員だった。スキルアウトを追い詰めることに快感を覚え、いつしか手当たり次第に捕まえては尋問という名の拷問を始め、アンチスキル 警備員を解雇されている。

その時の他人を追い詰める快感が、今まさに彼の中を駆け巡っているのだ。慎重そうに動いているが、さっきから興奮しっぱなしである。

不意に。



「テストー。来てくれ」

同僚のロイが呼びかけてきた。嬉々として、テストーがそちらへ向かう。

「見つかったのか？」

口調は自然だが、さっきから気分は高揚していた。

「いや。目標とは違うんだが…」

「ん？」

ロイがライトを当てる柱の陰を、テストーが見る。

そこには少女が倒れていた。綺麗な顔立ちの、制服に身を纏った少女だ。頭には軍用らしいゴーグルが装着されている。

「こいつは…妹達シスターズじゃないのか？」

テストーは木原から受けた作戦要項を思い出していた。打ち止めラストオーダーを捕獲する理由として、彼女ら妹達の間で作られるネットワークがどうか。正直過程さえ楽しめればどうでもよかったテストーにとって、作戦は気にするものではなかった。

「どうする。回収しておくか？」

ロイが尋ねてくる。テストーは適当に、

「とりあえずしておこう。駄目なら道端にでも転がしておけばいい」

テスターが少女の身を起こさせる。

(…おっ、結構上玉だな)

手袋越しに、露出した足を軽くなでる。とことん腐っている彼の頭には、良からぬことしか浮かんでいない。単価18万なら安いなとか、一体くらいいいなくてもわからないんじゃないか、などだ。

「う」

不意に、ロイの声が聞こえた。苦しそうな、だが呻き声というわけでもなく、喉に食べ物を詰まらせた、みたいな感じだ。

「おい、どうした…」

もう少し上の方まで撫でようとしていたテスターの目が、ロイに向けられ、息を呑んだ。

片手に嗅覚センサーを持った、我が同僚。

見たところ、妙に体を反らしている以外は普通に見える、我が同僚。

だが、その胸。

装甲服の鳩尾の辺りから、手首から先の白い手が生えていた。

「え…?」

テスターの頭が真っ白になる中、鳩尾から突き出た白い手は、まるで刃のようにロイの鳩尾から上へと切り裂いた。べちゃっ、と、胸から真っ二つになった同僚が、中身をまき散らしながら倒れ込む。

テスターはどうしていいのかわからなかった。混乱した頭で少女を抱え、一目散に車へ走る。

が、体の横を何かが通り抜けたような音がしたかと思うと、彼らの車は真っ二つになって爆発した。

ぴちゃっ、ぴちゃっ、と、濡れた靴でアスファルトを踏む音が聞こえる。

「ひ…ひい…」

お姫様抱っこのような状態の少女を落としそうになるほど震える。目の前で起こった爆発で、あたりが赤く明るくなる。

靴音は止まらない。

「…離せ」

「は、はひ…？」

低い、冷たい声に、テスターは震えを加速させる。

「今すぐソイツを離せ…汚ねえ手で触ってんじゃねえぞ三下がア！」

「はっ、はい！はい！」

突然大きくなった声。テスターは悲鳴を上げて少女を後ろに放り、振り返った。

そこには一人の少年が居た。放られた少女を受け止めて、こちらを睨みつけてくる。

「クソ野郎が…」

「ま、待てよ！渡したじゃないかよ！ふ、普通は、見逃すところだろ！？」

後ずさりして、テスターは言う。少年の緋色の瞳が炎を反射して輝く。

「ああ…？離れたら助けるなんて言っただろ…コイツはテメエみてえに汚ねえ世界に染まってねえんだよ…テメエにコイツが触れられたっただけでも、俺ん中じゃ許せねえんだよ…クソ犬はクソ雌とやってりゃいいんだよ…軽々しく触ってんじゃねえよクソ虫がぁ！！」

少年が叫ぶと、強烈な烈風がテスターを吹き飛ばす。先にあつたのは、炎上している車。一直線に、炎の中へと突っ込んだ。強烈な炎は、テスターの体を包み、彼の皮膚に装甲服を焼き付ける。熱い、という言葉では括れない、何ともいえない感覚が、全身を支配する。

「たすつ、助け…」

手を伸ばすテスター。溶けかけ、ほとんど機能を失いつつある彼の瞳に、少女を抱える少年が映る。だが追い打ちをかけるように、

変形したコンクリートが炎ごと彼を押し潰した。

\*

「…この症状、街のヤツらと同じ…」

仰向けに多重観測を寝かせ、インターフェイス接続回路は呟いた。

スラム街から病院を指す最中、近い距離に黒づくめの反応があったため、こちらへ向かっていたのだった。

そして来てみれば、倒れている多重観測にいと簡単に触れ、そのまま回収しようとしていた男達が。

自分でもよくわからないが、頭の中が真っ白になって、気付けば奴らの片方を切り裂いていた。

ラストオーダー  
（打ち止めがない…コイツが倒れて、あのクソ犬が来たから一人で逃げたのか…）

となると、彼らの手に渡る前に保護するのは難しくなる。

エクスプローラ  
（多重観測が気絶したら、ミサカネットワークで居場所を特定することも出来ねえし…）

ラストオーダー  
居場所の特定は難しそうだ。打ち止めがここを離れてからの時間もわからない。すぐ傍にいなければ、このあたりを探す分の時間が無駄になる

(くそ…すぐにアイツのところに戻すべきだったか?)

かと言って、一方通行を逃がした後に合流しては、ハウンドドッグ 猟犬部隊の相手ができなかった。

例えば、エクスプローラ 多重観測一人に任せるのは重荷だったかもしれない。

(ここでうなだれてたって仕方ねえ。まずはカエルにコイツを…)

首と膝の裏に手を回そうとした瞬間、一瞬インターフェイス 接続回路は躊躇った。

さっきの黒ずくめに言った言葉が蘇る。

本当なら、自分も彼女に触れていい世界の間人ではない。

能力を使わなければ、彼の体は返り血や肉片、脳漿や脳ミソでぐちゃぐちゃになっていることだろう。

さっきの奴よりも深く、闇に浸かっている。

その自分に、彼女に触れることが許されるとは思えない。

(わかってんだよ…どんなに光を見せてもらったって、俺の中にある闇は消せやしねえことぐれえ…)

アクセラレータ 一方通行は、シスターズ 一万人の妹達を殺した。

インターフェイス 接続回路は、一万人の人間を殺している。

(取り戻せやしねえよな…ああ、無理に決まってる)

浴びてきた血は、こびりついて取れない。一生体に染み着いて、

永遠に接続回路インターフェイスを縛り続ける。

(ハン、結局駄目だったんだよ…調子が良すぎた。もう暗い道には居ないだあ？笑わせんな。どんな理由並べたって俺は悪だ。そこらの殺人鬼の比じゃねえ。とんでもねえ悪党だ)

どんなに明るみに触れても、払拭することはできないほどの。

ならば。

(悪なりに守って見せりゃいい…そう)

接続回路インターフェイスが多重観測エクスプローラを抱き上げる。

「コイツだけでも…」

炎に照らされ、灰髪の少年が口を開く。

「あのガキだけでも…」

雨に打たれて、白髪の少年が口を開く。

\*

『この闇から引きずり出す…!』

時を同じくして、二人の少年の誓いが響いた。



3 - 6 嘘 二人ノ悪党 (後書き)

少し遅めの更新になりました。

最後に一方通行と台詞合わせをしたいなあと思ってたんですが、無理矢理感を感じています(汗)

学園都市の詳細な地図がないのでいまいちオリジナル展開を盛り込み辛いです。一方通行が第三資源再生処理施設出て病院でも戦ってるのに接続回路はなんで高架下に居るのか、とか、時間軸的なツッコミどころが多いです。

今回は接続回路の悪党宣言を書きたくてやりました。一方通行とはまた少し違う悪党っぷりにしていく予定です。…いや、悪党っぽくないところも出てくる予定です。

これでやっと原作の半分くらいですね。魔術サイドは大分削っていきますので、ここから先は流れが早いつもりです。

第三章最終話では原作でも大人気のアノ人が登場します。お楽しみに

3 - 7

胎動

目覚メル天使

(前書き)

「一気に飛ばしやがったなあ……」

非公式の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

木原数多は使われていないオフィスに居た。

周囲には五人の黒づくめの姿がある。

彼は長い脚を机に乗せ、部下の報告に耳を傾けた。

「複数の班から連絡が途絶えました。我々を除けば、E班とK班しか残っていません」

「おいおい…」

木原が言った。彼は頭の後ろで手を組み、社長あたりが座っているような椅子に寄りかかる。

「それ、全員死んでんのか？」

「いえ、生命反応が確認できる者もいます」

この言い口だと、おそらく大半は死んでいるのだろう。木原の頭には灰髪の少年の姿が浮かんでいた。

(あのガキ…<sup>アクセラレータ</sup>一方通行を庇いやがったが、アイツは一体何だ?)

風の操作に空中通路の破壊、コンクリートの壁の生成…。どう考えてもひとつの能力によるものではない。多重能力者だとすれば、あんな風に野放しになっているはずもない。

となると…。

(暗部にも公開されてねえ能力者ってことか?)

木原の頭に、アレイスターの含みのある声が浮かぶ。彼はしばらく眉間にしわを寄せて考え、

「えーと…アレだ。死んでない連中ってのの詳細はわかってんのか」  
黒づくめの一人がはい、と頷き、

「外傷は全くないのですが、三種類の症状に分かれて気絶しています。眠るように気を失っている者から、石のように硬直している者まで」

「種類を分ける基準は。倒れた場所か」

「いえ、同じ場所で倒れたものでも症状はバラバラですね。この辺りはまだ調査中です」

ふむ、と木原が顎に手をやる。

外傷がないという所を見ると、目に見えないなんらかの化学物質の可能性がある。一方通行の能力では不可能だし、そもそも彼はバッテリーの節約を優先することだろう。ということはあの灰髪の少年の能力だろうか。しかし、風の操作や圧倒的な破壊力、加えて銃弾の無効化との関係性は。

「簡単な検査の結果、倒れた者たちは体内の酸素が極端に減っているとの情報もあります。しかしやはり体組織そのものにはダメージがないですし、おそらく最低限の体機能を維持するだけの酸素は確保できているのではないかと」

「…、人工的な仮死の誘発か」

木原が私見を述べる。黒ずくめの一人が木原に近づき、

「それと、連絡の途絶えたJ班から、我々以外の侵入者の目撃情報が報告されています」

「俺たち以外の侵入者？」

木原が聞き返すと、黒ずくめは木原に端末を渡した。そこに表示されている画像。

中世ヨーロッパ風の衣装に身を包んだ、妙な女だった。

木原はそれをじっと見つめ、考え。

「う」

不意に、写真を渡した黒ずくめが、オフィスの机に身を預けるようにして倒れた。木原は適当に脈を見て、

(こいつもやられてやがる…)

木原は目を細め、辺りを見回した。これ以上の異常は起きない。これも何らかの能力なのか。だとしたらどんな能力なのか。

木原は鋭利な頭脳を駆使するも、明確な答えは出てこなかった。

彼はフウと息を吐いて、

「まあいい。こっちはこっちの事をやるだけだ。お偉いさんもイラついてそうだしなあ」

木原の目が、事務机の上に乗るアタツシユケースと、離れたところにあるもうひとつの机の上を順に見る。机の上には、男物のワイシャツと空色のキャミソールに身を包んだ小さな少女。

部下がアタツシユケースの中身、「学習装置<sup>テストメント</sup>」を組んでいく。カチャカチャとパーツがひとつになっていくのを見て、木原は笑みを作っていった。

\*

<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は薄汚れた路地裏に立っていた。その手には、彼の携帯電話が握り締められている。

あの電話の男の話どおり木の葉通りを訪れた<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は、<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めが証拠隠滅マニュアルに従うと踏んで、とりあえず近くの路地裏に入り込んだ。<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めは発見できなかったが、彼女の衣服の切れ端が落ちていた。最悪の事態を想定した瞬間、木原から電話が来た。

内容はくだらない罵詈雑言と、<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めを捕獲したと言う報告。

こちらにも罵詈雑言を彼に浴びせ、木原のバックボーンを把握するために彼を煽ったところだった。

(あの野郎の人格なら、ここまで言われりや電話の前であのガキの目玉の一つぐれエは絶対弾く。…それがなかったって事ア…おやおや、コイツは本格的にパシリ確定かよ)

下手をすれば本当に打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>に危害が加わるところだったが、これくらいのリスクと向き合えなければ木原とはやり合えない。

(あの木原を思い止まらせるほどのバック…まさか、学園都市そのものが…)

最悪のパターンかもしれないと思いつつも、彼はその仮定で思考を続けた。

(なら総括理事会…奴らを洗えば…)

フフツ、という笑いが漏れる。彼はよろよろと路地の壁に身を預け、

(おいおいスゲエな…あつという間に進展しちまったぞオ…)

はははっ、と笑いながら、彼は握り締めていた携帯電話を懐に収め、

「ふつげんじゃねエぞ!! ナメやがってええええええええええええええええッ!!」

憤怒の表情で絶叫した。素早くチョーカー型電極のスイッチを切り替え、絶大な演算能力を取り戻す。

二方を壁に囲まれ、見通しの悪い空間。だが彼には関係ない。

絶対座標から、エモノの位置を特定する。

彼はその腕を思い切り壁に殴りつけた。いや、殴りつくだけではない。

ベクトル操作された彼の拳は、二の腕までを壁に埋没させる。

「がっ、アアアアアアアアアアアアアアアアッアア!!!!!!」

地響きを起こすような咆哮と共に、思い当たる全てのベクトルを総括制御する。

彼の制御するベクトルは、そこらのエネルギーとは違う。

自転。

惑星を回転させるような莫大なエネルギーのベクトルまでも、彼は掌握していた。

考え得る限り最大のベクトルを伴って、彼が腕を埋没させたビルが、轟音を立てて投げ放たれる。質量を考えれば不可能とさえ思えるスピードで、投げ放たれたビルが進行ルート上のビル郡を破壊しながら突き進む。

その果てにあったもの。

窓のないビル。

学園都市総括理事長、アレイスター・クロウリーが根城にしていると云う建物。世界最硬とも言われ、核弾頭が直撃しようがびくともしないという巨大な建造物。

それに、自転のエネルギーを伴い、高速でビルが直撃する。

強烈な轟音と衝撃波が、辺りを満たす。その衝撃波だけでも、多くの建物を倒壊させていく。灰色の粉塵が垂れ込め、一方通行は息アクセラレータ



切れしながら成果を見る。

「な……」

彼の目が見開かれる。

考え得る究極の破壊力を込めた一撃。

にも拘らず。

窓のないビルはヒビ一筋入っていなかった。

壊れたのは、その周りの建造物郡だけ。

彼の渾身の一撃でも、歯が立たなかったのだ。

「……つく……アアアアッアアアア！」

膝を折り、一方通行はアクセラレータ雨粒で満ちる地面に拳をたたきつけた。

\*

「なんだ？」

強烈な轟音で、インターフェイス接続回路は思わずそちらを向いた。  
窓のないビルに何かがぶつかり、何かが崩れ落ちる所だった。

(こんなことできんのは……一方通行か？しかし、何だってあのビル

を…)

疑問に思いながらも、彼はひとまず視線を戻した。

彼は雨の中を滑空していた。

その手にはまだ、エクストローラ多重観測の姿がある。彼はとりあえず三階建てのビルの屋上に降り立つと、エクストローラ多重観測を狭い屋根の下に寝かせた。携帯電話を取り出す。

数回のコールの後、相手は電話に出た。

『何の用かな?』

低い、年配の声だ。カエル顔の医者、ハンキョウセラ冥土返しである。

「急患だ」

『君か?』

「エクストローラ多重観測だ」

医者問いに、インターフェイス接続回路は短く答えた。正直、焦っている。

「今オマエ達はどこにいる?」

『第七学区の立体駐車場さ。今ならベッドも空いているよ』

「なら話は早え。今からコイツをそっちに届ける。だから動くなよ」

『わかった。ラストオーダー打ち止めは一緒かい?』

医者の方に、インターフェイス接続回路はすぐには答えず、

「…いや」

「医者もすぐには応えなかったが、

『早く彼女を助けに行ってくれ』

「分かってる」

インターフェイス接続回路が回線を切ろうとすると、

『どついつの意味が、正しく理解したのかな？』

「奴らに捕まる前に、あのガキを見つけて保護する、そういうこと  
たる」

うざったそうに、インターフェイス接続回路は言った。だが、医者の返しは意外な  
ものだった。

『違うよ。奴らの本拠地に、ラストオーダー打ち止めを助けに行ってくれ』

「…！！捕まっちゃったのか!？」

インターフェイス接続回路が目を見開く。医者はあくまでも平静に、

『我々の病院車を警護している妹達シスターズの様子がおかしい。ラストオーダー打ち止めか  
ら緊急コードが発信されているんだ。どう考えても、彼女の意思に  
よるものじゃない』

それだけで十分だった。

「つーことはだ、ミサカネットワークを利用して、ガキを探すこともできねえんだな」

『ああ。できればもう君や一方通行アクセラレータに指示しているぞ』

なるほど、と接続回路インターフェイスは頷くと、通話を切り、多重観測エクスプローラを抱え上げる。

結局、彼女達を完全に守ることはできなかった。だが、引き返すことも出来ない。

なら、最小限に留めるまでだ。

(待ってる…)

一方通行アクセラレータの謎の行動。それがヒントだと接続回路インターフェイスは確信していた。

(木原潰してガキ助けんのに執念燃やしてる野郎が、あんな事する理由はただひとつ…)

総括理事会、もしくは総括理事長が、今回の件に関与していると突き止めたのだろう。確証はないが、意味もなくあそこまでやるヤツだとは思えない。

ならこの仮定の上で行動すればいい。

(まずは総括理事会を探ってみるか)

方針を決め、彼が地面を蹴り、宙を舞　。

（何だ…あれは…）

少年の目が映す、異質な光景。

高層ビル群の向こう側から、光の筋が何本も伸びていた。

どうも、櫻井です。

ようやくヒューズ「カザキリの辺りまで来ました。と言っても途中をかなり省いているわけですが」汗

参考程度にお聞きしたいのですが、上条さんと一方通行の電話二回目のシーンは直接描写した方が良いでしょうか？それとも木原くんと電話みたいに回想風でも十分でしょうか？

皆さんのご意見をお聞かせください。

ちなみに原作と対比するために一回目は上条さん視点で書きましたので、今度は一方通行視点での予定です。

それでは

3 - 8 役割 壊ス者ト救ウ者 (前書き)

「来やがったなあ！一方通行ア！！」  
アクセラレータ

学園都市の学者且つ『ハウンドドッグ 猟犬部隊』のリーダー

数多

木原

ダアン！という銃声が、豪華な室内にこだました。

たつた今、アクセラレータ一方通行の前に死体が生まれたところだった。散弾が拡散する間もなく胸にすべてを受けた哀れな男。彼の名はトマスII プラチナバークと言った。

今の今まで順風満帆な人生を歩んできた彼は、今の今まで四苦八苦して生きてきた少年によって命を奪われた。

少年は派手に吹っ飛んだ彼に軽く目を向ける。

(ン…?)

アクセラレータ一方通行はプラチナバークを見て、小さく嘆息した。

これはまだ死体ではない。傷を負った上で気絶しているだけだ。おそらくこんなこともあるのかと防弾チョッキでも着込んでいたのだろう。

まあ、彼の生死などどうでもいい。もともと長居するつもりもないのだ。

アクセラレータ一方通行は濡れた髪を軽く払い、土足でいかにも高級ですと言ったカーペットに上がり、辺りを見回した。

四方、豪華な調度品で囲まれている。が、広さは大したことはない。調度品を売っ払えばもつといい家が買えるだろうに。

そんなことを考えながら、アクセラレータ一方通行は発見した執務室に足を踏み入れ、トマスのものでらしい黒塗りの高級車を連想させる、これまた豪華なデスクに向かう。

見てくれはアンティーク品のようだが、あからさまなスイッチが



ある。彼は簡単にそれを操作する。  
すると、音も立てずに机の一部が持ち上がり、液晶モニターとキーボードが現れた。

くだらないところに金をかける、と呆れながらも、彼は椅子に座って画面を見る。

しばらく表示をじっと見た後、彼はカチャカチャとキーを叩いた。明るくなる画面。どうやら正しくデスクトップに入れたらしい。もう少しセキュリティの解除に手間がかかるかと思っていたが、思うよりも早く事が進んだ。

ハウンドドッグ  
(猟犬部隊の情報だ：ソイツが見つかりやここに用はねエ…)

データバンクを探し当て、片端からフォルダを開けていき、その情報を探す。

こういう連中は幾重にも偽装をするものだ。最初のセキュリティもそうだが、こういう小さなフォルダにすら錠をかけている。アクセラレーター一方通行はすらすらとパスワードを解き明かして中身を見ては、次のフォルダへとシフトしていく。

10分ほど経過しただろうか。本来であれば数時間かかる作業を、彼はそれだけで終わらせた。

探し求めた、ハウンドドッグ 猟犬部隊の情報。思った通り、バックにいたのは総括理事会だったようだ。

「……」

内容は決して心地の良いものではなかった。

要約すると、現在正体不明の脅威が学園都市を襲っていて、それを取り除くために速やかに打ち止めを回収する、というものだ。さらには、『ウィルスを上書きされた打ち止め』ラストオーダーを使って脅威に対抗する、ともある。

ということは、まだ打ち止めは彼らの計画にとって重要な役割を以降も背負うというわけか。木原が危害を加えられないのにも合点が行く。だが、まだ調べることはある。

ページをスクロールさせていくが、それ以上の詳しいことが記されていない。

どうやら総括理事会の会議内で配布された命令書に過ぎないようだ。肝心なところはもつと上、おそらくはアレイスターかその側近クラスを探らないと得られないかもしれない。

(クソつたれが…早くしねエと本当に取り返しが…)

焦りを殺し、アクセラレータ一方通行が続けてキーを叩こうと。

(ン?)

傍らに置いておいた、奪ったトランシーバーが音を立てている。呼び出し音だ。

(…木原か? いや、俺の携帯番号がわかってるなら、こっちにかけるはずが…)

警戒しながら彼は端末を取ると、回線を繋げて耳に当てる。

『アクセラレータ一方通行か？』

(この声…)

ぼんやりと覚えがある、その声。そう、この若い低い声は…。

「オマエ…インターフェイス接続回路か」

『名乗るまでもなかったか。手間が省けた』

ラレータ目的を同じにしながら、直接会話するのはこれが初めてだ。アクセ一方通行は舌打ちし、

「助けた礼でも言えつてのかア？」

『んなバカバカしい話じゃねえ。オマエに知らせといた方がいいと思ってるな。クソ犬共の情報だ』

「なに？」

アクセラレータ一方通行が目を見開く。

『オマエがどエラい事やらかしたの見て総括理事会を洗ってみたんだが…オマエはどこまで知ってる？』

アクセラレータ一方通行は少し間を空けて、

「奴らの目的が、外部からの脅威を取っ払う事で、そのためにはあ  
のガキにウイルスをぶち込む必要があるって事までだ」

『ふうん…。プラチナバーグ程度じゃそんなもんか。俺が拾ったのは、ラストオーダー打ち止めに打ち込むコードが『ANGEL』つつうことと、クソ犬が増えるって事ぐれえだ』

「『ANGEL』だと？」

アクセラレータ一方通行が聞き返す。ハウンドドッグ獵犬部隊の増援については、ある程度予測していたために言及しない。

天使。その単語を連想させる現象を、さっき見かけたばかりだった。ラストオーダー打ち止めの電話の男が2回目に連絡してきたとき、止めると言っていたあの現象。

『無関係って方が考えにくいよなあ…あの光の筋、見ようによっては翼にも見える。もしかすれば…』

「あのガキにはもうウィルスが打ち込まれたつてのか」

『おそろくな。カエル面ソラの医者によれば、把握できる限りのシスターズ妹達とミサカネットワークに異常が見られてるらしい』

アクセラレータ証拠としては充分だ。一方通行は画面に表示された情報を見て、

「…木原の居場所はわかった」

『そつか。なら俺はクソ犬の増援を引き受ける』

まあそれが妥当だろう。どう考えても木原の周りより増援部隊の方が数が多い。バッテリーの制限がある一方通行は数が少ない方を担当すべきだろう。それに、木原との因縁は自分で断ち切りたいと思っっている。

『だからあのガキと、妹達シスターズを頼む』

「分かった」

ブツツ、と音を立て、回線が切断された。一方通行はそれを放り、アクセラレータ代わりに辺りを物色する。

何だかんだで大分弾を消費してしまった。彼は見つけたライフルから自分のショットガンと一致する弾を探し出し、全弾補充すると踵を返した。

\*

御坂美琴は雨の中を走っていた。

学園都市の第三位たる彼女の能力はレベル5の「超電磁砲レベルガン」。  
その後ろを、黒づくめの男たちが追いつがる。

(さてとここらで…)

彼女は走りながらコインを放り、勢いよく体を振り返らせる。振り返り、彼女が突き出した腕の先に、放り上げたコインが降りてくる。バチバチと電流を散らしながら、彼女はコインを指で弾いた。普通の人間であれば、それは全く意味のない行為であるが、彼女の場合は例外だ。

弾かれたコインは轟音と閃光を撒き散らし、音速の三倍の速さで空を切り、追っ手の黒づくめを襲う。

悶絶転倒する黒ずくめ達。手加減はしておいたが、直撃したヤツは少しアザと火傷をするかもしれない。

「このガキっ！」

いつの間に背後に回ってきたのか、別な黒ずくめが発砲する。

だが、それは美琴が電磁力で引き寄せたマンホールの蓋や機材によって防がれた。そんな盾の隙間から、彼女は雷撃の槍をお見舞いする。

直撃はしないように調節して、間接感電の形で屠る。黒ずくめが倒れ、路地の視界がハッキリしたところで、新たな黒ずくめがサブマシンガンを斉射する。不意を突かれ、美琴はとっさに足元のマンホールに飛び込んだ。数段下の梯子に腰掛け足をマンホールの内壁に突っ張ってやり過ごす。

(なんなのよ一体…何人居るわけ?)

既に十数人倒したと思うのだが。こんな大部隊に狙われるなんて、あのツンツン頭は何をしたのだろう。そんな疑問が過ぎったとき、不意に携帯が震えだした。

こんな時に誰だと、美琴は苛立ちながら携帯を開く。

そこにあつたのは、たつた今頭の中に出てきたツンツン頭。上条当麻だ。さっきの様子で掛けて来ているなら何か重要なことなのだろう。彼女は通話ボタンを押した。

『御坂ッ!!』

繋げた途端に、大きな声で叫ばれた。一瞬耳から離してから、

「だあ！！な、何よ、このクソ忙しい中、人様の作業量増やしてんじゃないわよ！！」

折角契約したハンディアンテナサービス。その使用一回目の第一声がお互いこんなのは、と美琴は胸の内で嘆く。上では銃声が響いている。

『確か常盤台中学ってのは、普通の中学とは授業内容の出来が違うって言ってたよな！卒業と同時に第一線に立つために教育しているってことは、大学レベルの講義も受けてんだろ！？』

上条の叫びが携帯を当てた耳に響くが、反対側の耳は相変わらずの銃声を捉えている。

「はあ！？あんた何言って　　わっ」

不意に、頭上から強烈な風が吹き込んできた。一瞬、マンホールの中にわずかに注いでいた光が遮られる。

『あの『天使』を止めるために、知識が必要なんだ！AIM拡散力場関連の詳しいアドバイザーが欲しい！お前だけが頼りだ！任せられるか！』

「ぶっ！？」

なんかドキッとした。なんだ一体。

『お、おい御坂！大丈夫か！？撃たれたんじゃ…』  
「ち、違うわよっ！」

大きな声で、美琴が否定する。まったくなんだってこんな変で妙な感覚に陥るのだろう。

「やるしかないんでしょ！別のことに頭使いながら戦えってアンタ本当に…」

『よし！じゃあインデックス。何かわかんないことあったらコイツに聞け！』

『へ？』

「ええっ!?!」

上条の声の奥から、インデックスの声が聞こえ、美琴は諸々の理由を含めて叫ぶ。

『任せたぞ!』

そんな美琴の状態など気付かず、上条は一区切りつけようとする。

「え、ちょっとアンタ！待ちなさいって…」

走り去っていく靴音がする。話の感じだと、インデックスに携帯を預けて上条は別行動を取るらしい。

ハンディアンテナサービス。一回目の使用にして、早速他人に利用された。

…まあ別にいいんだけど。

なんだかモヤモヤしながら、美琴は警戒しながらマンホールを出



る。

が、そこには倒れ伏す黒ずくめがいるだけ。銃声も爆音もなく、ただただ静かな空間が広がっている。

「…どうなつてんの？」

さっき吹き込んできた強烈な風。ひよっとして加勢している能力者がいるのだろうか？

少し気を抜いた美琴。その背後から銃声が迸る。彼女は電磁場を操作し、銃弾の軌道を逸らし。

「…まあいつか」

コインを投げ上げ、それを弾いた。

\*

「ははっ！スゲーなあオイ！ありゃあ一体何なんだ？」

オフィスの窓から見える光景に、木原数多は歓声を上げた。

事務机に寝ている打ち止めにウイルスを流し込んで再起動させた瞬間に、街のど真ん中に光の羽が出現した。まったくもって予想外だった。優秀な研究者である木原数多をもってしても、あの光景には説明がつかない。上層部から渡されたウイルスの名称は『ANG

E.L』。その単語を連想させる光の羽。タイミングといい何といい、これを引き起こしたのが自分達であることは間違いない。

「ははははっ！飛んでやがるなあアレイスター！！理論のりの字も分からねえぞ！？科学者のくせに科学を否定するたあ、なんたる科学者だよー！！」

木原は笑い続け、背後の部下達を肩越しに見る。

「なるほどなあー！確かに命令どおりだわ！！あんなモン持ち出したらワケわかんねえ『脅威』だかつてのも木っ端微塵だわな！！はははっ！見るよてめえら！聖書つてのはいつから飛び出す絵本……」

騒いでいるのは自分だけで、部下達は無言だった。むしろあんぐり口を開けて目を見開いている。まあ、自分が見てもワケのわからないアレを見て、彼らが驚かないはずもないが。

ジャカツ、と部下の一人が木原の背後に銃を向けた。そんなもので太刀打ちできるわけがないだろう。馬鹿かこいつは、と木原がもう一度羽を見られなかった。

光の羽を背に、空を飛んだ<sup>アクセラレータ</sup>一方通行が窓を蹴破るところだったのだから。

「……」

バリイン！！、という音と共に、割れたガラスと一方通行<sup>アクセラレータ</sup>がオフイスの中に入ってくる。彼はそのままの勢いで、啞然と銃を構えようとしていた黒ずくめの鳩尾に蹴り込み、その反動で宙返りすると、手にしたショットガンを木原に向けた。

「木イイイイ原くウウウウウウン！！！！」

絶叫しながら一方通行アクセラレータが引き金を引く。狙いは木原の胸から腹。

放たれる寸前に、木原が傍に居た部下を突き飛ばす。一方通行アクセラレータと木原の間に割って入る形になり、彼は顔を青くした。もう引き金は引かれている。

ダアンツ！！という散弾銃の轟音が、オフィス全体に響き渡る。

発射された散弾全てを胸に受け、血を撒き散らして倒れこむ。

それを引き起こした一人、木原数多は爆笑していた。

「ちゃんと呼んで撃てよお！じゃねーと…みんなの迷惑だぜえ！！」

一方通行アクセラレータの鋭い目が、ギロリと離れたところにいる黒ずくめへと据えられる。

「う、うわあ！！」

目の前で起こった事に目を奪われていた黒ずくめが、ジャカツ、とマシンガンを向けてくるが、そのときには既に一方通行アクセラレータは目の前に迫っていた。

彼は男の肩の辺りに装備されている手榴弾、四つ全てのピンを、人差し指から小指まで使って引き抜き、その腹を横蹴りする。蹴られた男の勢いは留まらず、並んでいた残り二人も巻き込んで、部屋

の隅で爆発した。人間爆弾。煙が晴れたらどんな光景が広がっているのか。

残り、一人。

「ひいつ…！？う、動くなっ！」

睨み付けられ、最後の黒ずくめは背後の机に転がっていたものを掴み起こし、さながら銀行強盗がやりそうな動作でそれに銃を突きつける。

だらりと四肢を垂らし、ぐったりしている<sup>ラストオーダー</sup>打ち止め。

ショットガンの長所であり欠点でもある、『広範囲に攻撃』でできることを逆手に取ったつもりだろう。

「ハッ」

<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は吐き捨てると、脚力のベクトルを操作して男に迫る。相手は怯えて震えている。<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めを助ける隙は大いにある。彼は男の真正面まで迫ると、上から下へ、袈裟切りに振るった銃身で、男の顔を叩き潰す。男は大きく横へのけぞり、抱えていた<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めが宙を舞った。

衝撃でショットガンがバラバラになるも、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は動作の流れでそれを振り捨て、代わりに<sup>ラストオーダー</sup>打ち止めを抱きとめる。

「カツコイイーッ！！惚れちゃいそうだぜ<sup>アクセラレータ</sup>一方通行ア！！」

一人残った木原は、それを見てゲラゲラと笑って見せた。

ラストオーダー  
打ち止めを机に寝かせ、  
アクセラレータ  
一方通行が振り返る。

「さアてエ!!!スクラップの時間だぜエ!!!クッソ野郎がアあああ  
あッ!!!」

少年の叫びが、薄暗いオフィス内に響き渡った。

どうも、大分突っ走ってしまいましたね。

今回も一方通行が主役でした(笑)

やっぱり「ホイイイイ原くウウウウン!!」を言わせたかったし、黒翼は覚醒して欲しかったので、木原くんの相手は一方通行にやらせました。

ウチの主人公と共闘したら木原があっけないと思いますので、ウチのは今回裏方です。次回が本章最終回のつもりです。場合によっては10話まで書きますが。

一方通行の戦闘シーンは今回初めて書いたんですよ。楽しかったです。

純粋な破壊力は書いてる側が爽快ですよ。接回さんは破壊するときは基本的に「分解」しているわけですが、一方通行は純粋な打撃の破壊力なので。

個人的な見解としては、「殴る」攻撃に限定して考えると、「原子・分子レベル」の分解は点攻撃と言うか、触れた部分を消し去り、見えない粉にしてしまうという感じで、「物体レベル」の分解が一見純粋な腕力で破壊しているように見えると考えています。

まあ必殺は前者ですよ。能力の定義としては、生き物みたいな複雑な物体は全体を粒子分解するには時間がかかって、数種類で構成されている単純な物体は一瞬で分解できる感じ。人体においても、局所的な粒子分解であれば数瞬で済む、という構想でいます。

ここで話すことでもないか(汗 接続回路の紹介のところに書き

足しておきますね。

それでは次回、お楽しみに

3 - 9

妨害

カキネ

テイトク

(前書き)

「コイツが出てくるなんて聞いてねえぞ  
非公式の超能力者(レベル5)」

インターフェイス  
接続回路



「うがあっ!」

男の悲鳴が、相変わらず人目のない大通りに響きわたった。腹には巨大な瓦礫が突き刺さっている。

正面にいたのは灰髪の少年、インターフェイス接続回路。

絶えず雨は降り続けているが、少年の体は濡れていなかった。無意識に自分にかかる雨粒を分解していたからだ。

ようやく無意識下での能力使用を可能とした。インターフェイス接続回路は少しばかり悦に入っていた。

まだ雨粒程度の単純なモノしか無意識下では操作できないが、ここまで来れば無意識下であらゆる刺激から身を守るようになるかもしれない。

そう思うと嬉しかった。

デュアルスキルシフト多重能力進化実験から色々あったが、強さへの執着は未だに彼の根底で渦巻いているのだ。

抑えきれない喜びを、彼は裂けるように笑うことで押さえ込んだ。

(いけねえな…今は打ち止めの救出を急がねえと…)

彼は懐からモニター端末を取り出した。これを、インターフェイス接続回路は重宝していた。

総括理事会のメンバー一人を襲撃し、簡単にハッキングさせてもらったが、増援の数は50人にも及んだ。そこでデータを端末にインストールしたため、増援の位置を把握することができたのだ。

そしてその全てを抹殺した。どこかの能力者が何人が気絶させていたようだが、その後から息の根を止めた。殺してモニターから反応が消えてくれないと、紛らわしかったためである。どの道一人だつて生かしておく気はないが。

増援を消し去り、先発隊も確認できる範囲で殲滅した。なら、この五つほど密集して残っている反応が 木原の居場所だろう。あの妙な現象の被害者を回収したのか、一方通行が殺し損ねたか。

まあどちらでもいい。

インターフェイス  
接続回路はトランシーバーの周波数を反応のするメンバーのものに合わせた。

(…何も聞こえねえ。ならコイツとその周りのは回収された気絶組か。じゃあ木原の野郎が居るのはこっちの孤立してる方か)

再度周波数を調整すると、聞こえてきたのは肉を殴打する音だつた。

『あ…あアアア…』

アクセラレーター  
一方通行の掠れた声が聞こえた。

苦痛で、というものではない。

これは。。。

(まさかアイツ、電極のバッテリーが!?)

アクセラレータ  
あの一方通行なら、どんなに痛めつけられたってあんな声は出さないだろう。むしろ叫んで毒づくタイプだ。

『くそっ！てめえ離れっ…ぐあああああつ…!』

続いて聞こえたのは木原の声。何故か悲鳴を上げている。

『ああアア…ああああ…』

ドタツ、という、床に何かが倒れる音。ズリズリと擦るような音が聞こえ、バキッ、ドゴツ、という打撃音が続く。

しばらくは一方通行の掠れた声が続き、突然木原の大笑いが聞こえてきた。

『ぎやはははははッ!!ざまあみろ!!ぎやはっ!悔しがれよクソガキ!!俺はてめえの一番大切にしてるモンをぶっ壊してやったんだ!てめえはもうなにも取り戻せやしねえんだよ!何したって無駄なんだよこのバカが!』

ぶっ壊した?何を。

アクセラレータ  
一方通行が一番大切にしてるモノを?

ラストオーダー  
まさか打ち止めを?だがそんなことをしたら木原は…玉砕覚悟で?いや…。

ラストオーダー  
(まさかあの野郎…打ち止めのオリジナルスクリプトを…!!)

音から察する状況から鑑みて、木原が打ち止めを殺したとは思えない。そんなことをすればあの天使にも異常が出る。

とすれば。

『アクセラレータ一方通行やインターフェイス接続回路にラストオーダーよっての打ち止め』が、殺されたのか。

ぎりっ、とインターフェイス接続回路は奥歯を噛み締めた。

(ふざけんじゃねえぞ…あのクソ野郎!!)

もう役割など関係ない。

この手で殺す。木原を殺す。

そして打ち止めラストオーダーを助ける。

方法だって探し出す。

「はああああああアアアアアアアアああああ!!」

咆哮し、インターフェイス接続回路は飛び上がった。

考え得る最速の移動方法で、考え得る最高の操作を実行し、莫大な推進力を得て滑空する。

あまりの衝撃にビルの外壁が剥がれ、崩れ落ちようが構わない。

早く行かなくてはならない。

早く。

速く。

ハヤク。

(見つけた…!!)

視界に入ってきた高層ビル。脳内の座標と一致するその建物へ、いざ飛び込。

(な …!)

バキィッ!!という轟音が響いた。轟音だけではない。高速で移動していた体そのものに、強烈な一撃が入った。

接続回路は吹っ飛ばされ、背の低いビルの屋上に落ち、ごろごろと転がってうつ伏せに倒れた。

「ぐっ…!!」

痛覚を味わうのは久しぶりだった。上条当麻に殴られたとき…いや、子猫に乗っかられて以来か。

(なにが…)

接続回路インターフェイスが上を見上げる。そこには三対の翼があった。

「よう。驚いたか？」

聞こえてきたのは男の声だ。翼がゆっくりと降りてくる。接続回路はよろよると立ち上がり、その少年を睨みつける。インターフェイス

「テメエは…」

相手は「おいおい」と笑いかけてきた。

「そんな怖い顔するなよ。インターフェイス 接続回路」

ゴールドブラウンの髪と、整った顔立ち。どこかの学校の制服らしいものを身につけている。

「なんか派手に動いたらしいな。上のヤツらが焦ってたぜ？」

「…どけ。俺はテメエに付き合ってるほど暇じゃねえんだよ」

フレンドリーに話しかけてくる相手に、インターフェイス 接続回路は威圧的に言い放った。

「そいつは困るな。俺はお前を足止めするように頼まれてんだ。…まあ、俺には俺で目的があつてさ。お前とはいがみ合うより友好的な関係を築きてえと思ってる」

少年は降り立ち、目線を合わせる。思ったより背が高い。頭半分ほどだろうか。

「話には聞いているぜ？お前の能力、大したもんだよな。俺の『スクール』にスカウトしてえぐらいだ」

聞いて、インターフェイス接続回路は鼻で笑う。目を剥き、臨戦態勢だ。

「暗部組織へのお誘いはお断りしてんだよ……」

聞いて、相手はハハツ、と軽く笑い、

「そつか。残念だ」

途端に、少年の翼がしなり、強烈な烈風が吹き荒れた。インターフェイス接続回路が吹っ飛ばされる。

「…ッ！」

彼は空中で細かな気圧操作で体勢を立て直す。再び放たれた烈風を制御圧縮し、相手に向けて解き放つ。

「おっと」

相手はそんなことを呟くと、返しの空気砲を軽々とよける。

「まだまだアアア！！」

インターフェイス接続回路は周囲の原子から電子を抜き取り、束にして少年に放つ。少年は翼をしならせ、電流から身を守った。

「麦野とかの立場考えてやれよ」

相変わらず余裕の笑みを浮かべる少年。インターフェイス接続回路は続けざまに烈風を放ち、大きく少年へと接近した。分解公式が宿る脚を少年に向けて振るう。少年が翼で受け止める。

「なあインターフェイス接続回路。今お前のしてる演算内容、当ててやるよ」

「あ？」

「お前は無意識下で雨粒：つまり水の分解をしてるな？それと体の回りに、浮遊するための空気圧を作るために結合・分解をコンマ秒単位で繰り返している。そして最後に、俺の翼を分解しようと考え得る素材をコンマ秒単位で何千通りって組み替えて確かめてるだろ？」

「二度、三度と、蹴りや殴打を繰り返しながら、半ば聞き流すようにインターフェイス接続回路は連続で攻撃する。」

「それじゃ駄目なんだよ。それじゃテメエは俺に勝てねえ。この世界の法則に縛られてる内は、テメエに勝率はない」

「バゴオツ！！」

「！？」

「見えない何かが乗し掛かってきた。断続的にそれはインターフェイス接続回路に襲いかかり、濡れた屋上に叩きつける。」

「ぐあっ！」

「真上から少年が降りてくる。屋上に落ちた今でも、2kgぐらいの見えない何かが身体を襲う。何が何だかわからない。」

「結局テメエは知ってることにしか対応できない。先代の偉人が見



つけてきた法則に縛られちゃってんだ」

「テ…メエ…」

インターフェイス  
接続回路が手を広げる。そして彼は気付いた。

(広げた手には圧力がかからない…)

「そして、俺の『ダークマター未元物質』にそれは該当しねえ。そういうことだ」

ダークマター  
未元物質。全ての謎が解けた。沸騰していた頭はすぐに気付けなかったが…。あの翼に触れた雨粒が、何らかの変化を帯びて落ちてきているのか。

「かきねていくテメエ…垣根帝督か…」

「気付くのを遅えよ」

垣根の翼が振るわれる。インターフェイス接続回路は吹っ飛び、隣のビルのガラスを突き破り、その室内を転がった。ポケットに入っていたトランシーバーや端末が、飛び出してそこらに転がっていく。

太刀打ちできない。

つい先ほど成長を感じた自分の能力がまるで役に立たない。全身の痛みが体の動きを制限する。

(クソ…野郎が…!!?)

ふと、インターフェイス接続回路は歌を聴いた。女の声だ。

音源は、トランシーバー。

(この声…)

あの暴飲暴食シスターの声だ。呻き声と罵詈雑言も聞こえる。木原達と一緒に居るのか？何故歌っているんだ？歌の内容は聞き慣れない言語でわからないが、不思議と心が安らぐ感じがする。何かが脳に刻まれるような感覚がする。考える余裕が生まれた。

自分は何をしているのか。

何故打ち止めを助けようとしているのか。ラストオーダー

何故妹達を助けようとしているのか。シスターズ

再確認する。

瞬間、バガアッ！！という轟音が響き、壁を破って垣根帝督が現れた。

「悪く思うなよ。ほんの実験だ。殺すつもりはねえから、安心して気絶してくれ」

ヒュッ、という、何かが振り下ろされる音がする。また妙な圧力攻撃か。

寸前で、インターフェイス接続回路はそれをかわし、立ち上がった。

垣根が目を細める。

対象的に、インターフェイス接続回路は目を剥いた。その口はつり上がり、笑っている。

「そつかよお…」

「お？」

「ならテストはお終いだな…悪りいが、本気出させてもらっぜえ！」

インターフェイス接続回路は叫ぶと、思い切り床を踏みつけた。

床が割れ、形を変え、刃となって垣根に迫る。垣根はそれを翼で防ぎ、再びインターフェイス接続回路を見た。彼の姿はない。

「…上か？」

垣根が天井を見上げた瞬間、壁や天井が消えていく。彼の立っていたフロアは、屋上へと変化した。

ここから見える空中、数十m上に、インターフェイス接続回路の姿が見える。垣根がそれを睨みつける。

「…ムカついた。穩便に済ませようとしてやったのにな」

垣根の翼が大きくしなり、強烈な烈風が放たれる。インターフェイス接続回路は軽々とかわし、

「アヒヤギャヒヤヒヤッ！！帝督クンよお！！確かにテメエの未元<sup>ダイク</sup>物質<sup>マター</sup>には俺の分解なんぞ通用しねえよ！！けどなあ、テメエのその滑稽な翼も物体だつてことを忘れんなよ！！」

「あ？」

垣根が接続回路<sup>インターフェイス</sup>を見上げる。

そして。

ガガガガッ！！と、垣根に何かが降り注いだ。翼に穴が空き、体制が崩れる。

「な　　！まさかテメエ！」

バランスを崩した垣根に、重い塊が降り注ぐ。直撃は避けているが、翼を組み直しても破られる。体にも降り注ぐそれは、垣根の皮膚に傷を付ける。

「アヒヤギャハッ！！わかつちまったかなあ！？帝督クン！」

接続回路<sup>インターフェイス</sup>が腕を振るうと、空気中から固体が出現し、空気圧の補助を得て高速で垣根へと降り注ぐ。

『分解して空気中に漂わせたビルの粒子を、一気に再構成して落としている』

種を明かせば簡単なことだった。

翼の再構成、強度調節をするが、インターフェイス接続回路は物質を調整して合わせてくる。翼を振るって吹き飛ばしても、雨あられと降り注ぐそれに対応しきれない。

「インターフェイス接続回路ウウウウウウー!!」

垣根が叫ぶ。ほんの一瞬の隙を突き、彼は瞬間的に翼を再生させ、高速でこちらへ迫ってくる。

こちらにはもう降り注がせるほどの粒子は残っていない。

なら。

「防げよ、第二位」

低い落ち着いた声と共に、一部屋分ほどある平面的な塊を、インターフェイス接続回路が作り上げ、垣根めがけて落下させる。一度かわそつと垣根が動くが、風を操作するインターフェイス接続回路は軌道を変えて垣根を狙う。

「防ぐまでもねえな、非公式」

垣根も落ち着いた声で応じる。視界が塞がる中、垣根は飛び続け、落とされた塊を砕く。

「は…!!」

正面に翼の先端を重ね、弾くように塊を砕いた瞬間。

割れた塊の隙間から、インターフェイス接続回路の腕が飛び出した。

垣根の首を掴み、全体重と莫大な空気圧を以って、そのまま急降下する。

「一つ言わせて貰うぜ……」

「……!」

垣根が息を呑む。接続回路インターフェイスの顔は無表情だった。

「俺にも殺すつもりはねえ」

ついでさっきの垣根の台詞。

接続回路インターフェイスは手を離し、零距离の空気砲を垣根に放った。

強烈な気圧の奔流を受け、垣根は地へ向けて落ちていく。

(…ははっ、やりやあでできるじゃねえか非公式)

落ちながら、垣根は胸のうちで賞賛した。これだけやり合えれば十分だ。そして、こちらの目的も十分達成できた。彼は地上に落ちる寸前で羽ばたき、ゆっくりと地上に降り立った。

\*

反撃はなかった。十分足止めできたと判断したのか、はたまた退

いてくれたのかは知らないが、ともかく攻撃は止んだ。 インターフェイス 接続回路は  
少しづつ高度を下げていく。

「ハア…ハア…」

頭から血が伝ってきた。どこかで打ったのか。

「ラストオーダー 打ち…止めは…？」

フェイス 近場のビルに着地し、手すりをつかむ。手すりにもたれて、 インター 接続  
回路は街を見た。

光の翼が消えていた。

何か推論を導き出そうとするが、意識が朦朧として思考が働かない。  
い。

手すりから外れ、彼は仰向けに空を見た。

曇った黒い空が一面に広がり、全身に雨粒が降り注ぐ。目の前ま  
で向かってきた雨粒が、眼球に落ちる寸前で消える。無意識下での  
分解公式が作用しているのだろう。

体が動かない。垣根から受けたダメージは半端ではなかったよう  
だ。雨粒一粒が2kgの重さを以って降り注いだのだ。骨に異常が  
あってもおかしくない。

(くそつたれが…結局垣根の思う壺じゃねえかよ…)

アクセラレータ 一方通行はどうなったのか。 ラストオーダー 打ち止めは、 シスターズ 妹達はどうなったのか。

疑問や不安が渦巻いても、それを解き明かすための体が動かない。

重くなった瞼が閉じたとき、彼は意識が飛ぶのを感じた。



どうも、櫻井です。

まさかの垣根登場です。まあ、本気でやりあつたら垣根に軍配が上がるんですけどね。何度か垣根はこの後出てきます。

何だか微妙な終わり方になりましたが、これで獺犬部隊編は終わりです。垣根と『スクール』に至っては少し原作と変わってきます。

垣根が主役の小説とかも書いてみたいなんて思ったことがあります。原作キャラを主役にするのは僕には重荷過ぎるので(汗

次回からはオリジナル要素がさらに増えていき、ほのぼのした話が続くつもりです。

それでは次回、お楽しみに

## 章末特典 キャラクター紹介？ 夕凧 志乃

年齢：25歳

身長：166cm

体重：47kg

血液型：A

来歴：

超能力研究機関に所属する研究員にして、常盤台中学の保険医。

専門は遺伝子・薬物工学で、インターフェイス接続回路が服用させられていた薬物の中には彼女が作ったものもある。尚、保険医を担当するだけのことはあり、一般以上の医学知識も併せ持っている。

容姿関連：

癖のある深い茶髪で、髪型はセミショート。容姿端麗で十人と擦れ違えば十人が振り返る美人。屋内からほとんど出ないため肌も白い。可愛いと言うよりは綺麗というタイプの美人である。

性格関連：

大人らしいクールな性格で、インターフェイス接続回路が相手でも余裕を持った対応を見せる。

几帳面よろしく神経質な気質で、書類は行の数だけビツチリ書き込み、速記でも綺麗に字を書くことができる。

苦手な物は幽霊で、出来の悪いお化け屋敷でさえ怖じ気づくレベル。ホラー映画もBGMだけで耳を塞いでしまう程苦手である。

インターフェイスの接続回路の接触した研究員の中でも親身になるタイプらしく、何  
だかんだと接続回路の世話を焼く、面倒見のいい一面もある。  
接続回路を引き取ってくれそうな友人が居る。

章末特典 キャラクター紹介？ 夕凧 志乃（後書き）

CVイメージ：林原めぐみ

4 - 1

組織

新タナ居場所

(前書き)

「理不尽な請求だな」

非公式の超能力者(レベル5)

-

インターフェイス  
接続回路

「へえ…ホントに…て…じゃん」

「でしょ？…も…とは……えない……ね」

（なんだ…？）

意識が戻った時、インターフェイス接続回路は聞き慣れない声を聞いていた。聞く限り、二人とも女性のようだが…。

「…ん」

「おお！目が覚めたじゃん？」

瞼を開けると、そこは見慣れた病室だった。

声の方を向けば、二十代後半くらいに見える女性が二人。

一人はジャージ姿で髪を後ろで束ねており、活発そうな印象があり。もう一人は白衣を着たボブカットで、前者とは対象的に落ち着いた雰囲気醸し出していた。

どちらにも面識はない。

「…誰だ、オマエら」

黙っているわけにもいかず、インターフェイス接続回路は尋ねてみた。

「私の友達」

彼女らが答える前に、新たな声加わった。聞き覚えのある澄んだ声だ。

「遅かったじゃない？ ジュース三本買ってくるだけで」

「またどっかのオトコに言い寄られたじゃん？」

「そんなんじゃないわよ」

声の主が入ってきた。茶髪のセミロング。夕風志乃だ。彼女はベツド脇に置かれた椅子に腰掛ける。

「夕風…」

聞きたいことは山ほどある、そう言おうとした途端に、

「大丈夫、アナタのお友達はみんな無事よ。ラストオーダー打ち止めも」

見透かしたように志乃が言った。実に癪だが、聞こうとした内容の答えだった。

「…そうか」

インターフェイス接続回路が安堵のため息を漏らした。意識が途絶える寸前まで頭から離れなかったことだ。自分でも驚くほど楽になった気がする。

「んで？ 何でオマエの友達だかがここに居んだよ」

「あら、言わなかった？ アナタを引き取ってくれそうな人が居るっ

て

「言われて、インターフェイス接続回路は簡単に記憶を掘り起こす。そう、確か大覇星祭の日に、志乃に呼ばれ…。」

「その話は受けねえつつただらうが」

「ごめんなさい、こんな子だけどいい？」

「大丈夫大丈夫！もう似たようなのが居るじゃんよ」

「オイ勝手に話進めてんじゃねえぞコラ。…ん？」

このじゃんじゃん五月蠅い女の話に、気になる点があった。

「待てよ。『似たようなのが居る』だと？」

「おう。君にソックリな子がね」

アクセラレータ  
一方通行しかいない。彼の直感はそう告げていた。すると、ジャージの女に白衣の女が付け加える。

「まあ、今はちょっと部屋を空けてるけどね」

「あん？」

インターフェイス  
接続回路が彼女に聞き返す。女もよくわかっていないのか、困ったように肩を落とした。ジャージの女が彼女に何か言う中、志乃が小さな声で囁いてくる。



「聞いた限りじゃ、彼は暗部組織の仲間入りをしたらしいわ。都市内で起こした事の隠蔽諸々をしてもらう代わりにね」

…。

それだけで大方状況は理解できた。

シークレットナンバー  
非公式のレベル5として闇に潜み続けた接続回路には分かる。インターフェイス

上層部の者達は、目的のためなら手段を選ばない連中だ。

優秀な警察犬が必要なら、母犬の腹をこじ開け胎児の遺伝子を組み替えるし、優秀な軍隊が必要なら優秀な人間を量産複製する、そんな連中だ。

…失敗すれば、別の目的の為に使い捨てるような、そんなクズ共。

きっと一方通行の能力欲しさに、彼の心理を読んだ上でより深い闇に引きずり込んだのだろう。外からの『脅威』とやらも関係しているのかもしれない。

想像するだけで胸焼けがする。

(それじゃ、もし打ち止めが目覚めても…)  
ラストオーダー

誰より一緒に居たい人間に会えないではないか。

「ま、まあ、もう一生会えないわけじゃないじゃんよ!」

シリアスな空気を立て直すように、ジャージの女が声を上げ、

「ともかく自己紹介からしうか。私は黄泉川愛穂で、こっちが芳

川桔梗！」

「よろしく」

芳川と呼ばれた女が会釈する。

「私は警備員をやってるんだけど…」

…何かわからないが、勝手に世話になる流れになっているらしい。敢えて、接続回路は黄泉川の話に耳を貸さなかった。代わりに、傍らの志乃に呼びかける。

「…オイ、夕凧」

「？」

志乃がこちらを向いた。飲んでいたジュースが不味かったのか、涙目になって咳き込んでいる。

黒豆サイダーとは冒険したな、と胸の内で賞賛しながら、

「…つーことは、俺にも来てんじゃねえのか？暗い道への招待状が」

志乃が顔をしかめる。黄泉川と芳川は、疑問符を浮かべるばかりだ。一方通行を引き取るうとしていたことから鑑みると、彼女らはそれなりに暗部のことも知っているようだ。だが、本当の暗部、あの暗い闇の事までは知らないのだろう。なら知らないままにしておくべきだ。

接続回路はハアとため息をつき、

「9月30日に第二位の垣根の襲撃を受けた」

「え？」

三人が目を丸くする。接続回路は頭の後ろで手を組み、

「アイツはそれを実験って言ってた。つーことは、アイツはハナから俺を引き込むつもりだったんじゃないか？あの日にヤツがアそこに居たのは、俺が一方通行を助けちまう前に俺を退ける為みてえだが、あの時点で俺の暗部行きは確定してたんじゃないか？その上で垣根は俺を試した…違うか」

接続回路の推論に、志乃はしばらくしてから答える。

「第二位がアナタを試したかはさて置き、招待状があるのは確かよ。すごい額の請求書と一緒にね」

ぴら、と彼女は上着のポケットから紙切れを取り出した。

「ハウンドドッグ 猟犬部隊の欠損人員の治療費と補充費、建物の物理的損害の補修、…他諸々しめて七兆円。これがアナタの『今』」

淡々と語る志乃。額の大きさに、隣の二人も言葉を失っている。納得はいかないが、一方通行がそれを承諾した理由に思い当たると、接続回路はハアとため息をついた。

「…やんなきゃ、困んのは妹達か」

結局逆戻りだ。やり方を正せなかっただけではない。正真正銘、『暗部』に帰ってきた。非公式のレベル5としてではなく、暗部組織のメンバーとして。

「どうするの？」

志乃が聞いてくる。答えなんて決まっている。いや、最初から選択肢はひとつしかない。

シスターズ  
妹達を守ることを目的にしているインターフェイス接続回路にとって、第二の選択肢など存在しない。

「聞くまでもねえだろうが」

「そ。いらっしやい」

志乃が微笑みかけてきた。彼女も暗部で生きる人間だ。もしかしたら上層部は、彼女の口から言わせることで自分を取り込みやすかったのだろうか。どうでもいいことなのだが。

「なあ、第二位とか七兆円とか、イマイチ話がよくわかんないんだけど、一体どういうことじゃんよ？」

黄泉川が口を挟んだ。インターフェイス接続回路が立ち上がる。

思ったより痛みはない。少し我慢すれば簡単な戦闘くらいはできる。

「借金返すために働くっただけだ」

彼は簡単に答えると、受け取った携帯端末をポケットにねじ込んだ。

『スクール』という、新たな居場所を目指して。

4 - 1

組織

新タナ居場所

(後書き)

どうも、櫻井です。

前回の垣根があまりに唐突だったので、皆さん混乱なさったかと思いますが、こうするためだったんです。黄泉川らと会わせただのも今後の話に関わってくるからです。

接続回路を交えた10月9日までの『スクール』の活動を書いていきたいと思います。

超展開過ぎますかね(汗)

それでは次回、お楽しみに

4 - 2 初任務 スクール (前書き)

「腐ってやがるな。よほど無様な最期を遂げてえと見える」

学園都市第二位の超能力者(レベル5)にして『スクール』

のリーダー 垣根 帝督

## 4 - 2 初任務 スクール

10月3日 AM4:20

衝撃は突然起こった。

第11学区の物資運搬中央施設。外部からの輸入品などを管理し、指定された地域へと運ぶ施設の言わば総本山である。

大型の学校二つ分ほどの敷地面積のあるそこには、当然の事ながらたくさんの運搬用トラックが待機している。

そのひとつが爆発した。

「!?なんだ!?!」

別の車内で待機していた男が、思わず車外に出てそれを見た。

荷台が完全に燃やされていて、運転席のあたりまで火が届いていた。幸い中に運転手はいないようだが…。

「よう。どうだ?綺麗だろ」

「はっ!?!」

背後からした声に、彼は思わず素っ頓狂な声を上げた。180cmほどの長身の男が、すぐ後ろに立っている。

「あっちのトラック、妙なモノ積んでたみたいだな。悪いが壊させてもらった」

口調は軽いが、したことは軽くない。運搬業の男はゴクリとものを鳴らし、

「ひ、人は？あれには俺の同僚が乗って…」

「ん？ああ、いたいた。なんか洒落たマユゲしてるヤツだろ？それいづなら荷台の中だよ」

「なっ！」

男は炎に包まれるトラックを見た。黒煙を放って紅蓮の炎を上げているそれは、ボロボロと崩れだしていた。

「どっかのタチの悪いスキルアウトに物資補給しようとしてたんだと。まあ、その前に処分させてもらったが」

背後の男はかつかつと靴音を立てて、男の前までやってきた。

ゴールドブラウンの髪と端正な顔立ち、その姿は男と言うよりも高校生くらいの少年だった。

炎を背後に、うつすらと笑ってこちらを見ている。

「お、俺も、殺すのか…？」

男の頭には、最悪の可能性が浮かんでいた。この少年やその雰囲気、時間帯、事件…どれをとっても不穏としか言いようがない。彼らの行動を目にした以上、自分も消される…そんなドラマや映画の展開が、頭の中で何度も想定されている。

しかし少年は、



「んー、さあな。それは俺の担当じゃねえし。ここから今すぐ立ち去って知人友人に言いふらすってんなら話は別だが、見た目怖い連中が来るまでおとなしくしてくれりゃあ死ぬことはないかもな」

大して殺意も感じない、極々平坦な声で応じた。そう、さながら友人のような振る舞いで。

男はこくこくと頷くと、そそくさと自分のトラックへ入った。シートを倒し、上着を体にかけて目を瞑る。

「ははっ、わかりやすい奴」

少年、垣根帝督は笑うと、背後にそびえる施設を見た。

(あつちはうまくやってっかな)

\*

辰滝兼行たつたきけんこうは焦っていた。

彼が居るのは施設内の一室。本来職員の仮眠室として用意されている部屋だ。

今は彼と彼の持ち込んだ機材で一杯になっている。

外部から輸入した兵器：主に銃器や地雷を、いい取引になるためスキルアウトのグループに流していたのだが：どうやらバレたらしい。

(なんだよなんだよなんなんだよ今まで上手くやってこれたじゃないかよなのになんで今回に限って邪魔が入んだよ!！)

彼の前にある8つの画面には、運搬用トラックのターミナルの様子が映し出されていた。

各所に設置された監視カメラだ。

これで五回目となる横流し。今までの利益は、この施設で働いてきた17年間の収入の数倍にもなっていた。

（人間つてのは一度手にした感動って奴が手放せねえんだよ！無理だよ途中でやめるとか！）

突如として爆発したトラック。彼は金を渡して、運転手数人に横流しの手伝いをさせていた。何百台とあるトラックの中に、わずか5台だけ混ぜておいた横流し用車両。

高い金を払って輸入した金づるが、いとも簡単に壊されていく。最初は銃器の暴発と考えたが、事前に念入りにチェックしておいたのだ、そんなことはありえない。

何より。

ターミナルに、見るからに部外者の少年が見えたのだ。

彼の登場から、辰滝が仕込んだ車両だけが順に爆破されている。

無差別な破壊行為でないことは言うまでもない。

その事実を悟ったとき、辰滝が考えたのは保身。自分のみを守り、他を見棄てる術だった。さきほどからキーを必死に叩き、この一件に自分が関係していたことを隠すために、過去の履歴情報を改竄している。今の自分を見たら、どんな人間でも共通した感情を抱くことだろう。

軽蔑。

その二文字に限る。だが辰滝は構わない。持てる能力をフルに使って、現状の打開を画策している。

（わかってんだよわかってんだよわかってんだよわかってんだよ！）

自分のしてきたことが正しくないことなどわかっている。だが、人間とはそういうものだ。自分と同じ状態に陥れば、誰もがこうなるはずだ。

そう自分に暗示をかけ、辰滝は必死にキーを叩く。

（ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう！後なんだ？何をすればいいんだっけ！？そうだ！）

彼の細い手指が凄まじい速度でコマンドを打ち込む。

履歴は消えても、したことは消えない。何者かが何かをした事はわかってしまう。なら、調べられればいずれ自分に辿り着かれてしまうかもしれない。ならそれを避けるためにはどうしたらいいか。

（烏森…）

彼の頭の中には、同僚の姿が浮かんでいた。一応、いっしょに酒を飲んだりして親交を深めた相手だ。向こうのIDは分かっている。性格のパターンも掴んでいる。

なら。

『アイツのPCに偽装記録を残して、アイツに全てをなすりつけよう』

それが彼の出した答えだった。

もう墮ちるところまで墮ちた。もうどうでもいい。友人とかそんなのより自分の自由と命と金が大事だ。彼の手指が動き出す。

その刹那。

ビーツ、ビーツ、という警報が作動した。侵入者を示す警報だ。

辰滝が振り返る。

赤く輝くランプが回転し、警戒を促している。

赤。警告、怒り、その他様々な決して平穩ではない信号を放つ色。

弾かれるように、彼は監視カメラの一つを見た。

彼が金を使って雇った、本来とは別の警備員が、次から次へと血を撒き散らして倒れていく。

人影を視認する。

「二人目…?」

呆然と、辰滝は呟いた。さっきの茶髪の少年とは違う。見慣れない灰色の髪を揺らして、黒い衣服を纏う色白の少年。余りの速さに顔までは視認出来ないが、一人、また一人と、屈強な警備員を殺していく。

高い金を払って雇った彼らは、ただの警備員とは違う。幾度も死

線を潜り抜けてきたような軍隊仕込のエリート兵士達だ。

それが。

いとも簡単に。

赤子をひねるかのように潰されていく。

(理解：できない)

大抵の能力者とも互角に渡り合えるような者達だったはずだ。判断能力や知略で、能力者を追い詰めるようなそんな無能力者の頂点レベルの者達だったはずだ。

ソレが何故、あんな痩せっぱちのガキに瞬く間にやられていくのか。

キーボードを叩く手が止まっていた。

そして。

バゴオン！という轟音が、辰滝の潜んでいた部屋に響き渡る。

黒煙を払って現れた、カメラで見た少年。辰滝が椅子を立ち、壁際に後ずさる。

「なっ、なんだよお前は！わっ、私は、この施設の所長だぞ！それを……」

「……ああ？関係ねえだろそんなモン」

少年は薄く笑い、破った壁から室内へと足を踏み入れる。

「もしっ！私を殺したらっ！困るのは、ががが学園都市の方なんだからなっ！！」

虚勢を張ってみるも、少年は止まらない。辰滝は特殊な訓練など受けていない。優秀な人間であることには間違いないが、それは頭脳の問題であって、体力的にはごくごく平凡だ。あの警備員を打ち倒してきたこの少年と渡り合えるはずがないとは、自分でも分かっている。

辰滝の虚勢に、少年

インターフェイス 接続回路はため息をついた。

「その『学園都市』のお偉いさんから、俺たちは命令を受けてんだよ。『第11学区物資運搬中央施設所長、辰滝兼行を処分し、彼が横流ししていた銃器類を破壊せよ』ってなあ」

辰滝が目を剥いた。かけていた眼鏡が床に落ちる。

「そ、そんな…そんなはずはっ」

「生憎と、代わりの所長の手配は出来てるらしいぜ。オマエの同僚のなんだっけか。烏森泰正だったか。ソイツが後任だ」

烏森泰正。ついさっき、罪をなすりつけようとしていた同僚だ。

「ば、馬鹿なっ！そんなはずはないっ！あいつは、あいつは…！！」

辰滝が叫ぶ。インターフェイス 接続回路はあざ笑う。

「そんなデキるヤツじゃねえっつか？ そんなオマエにいい言葉を贈ってやる。『能ある鷹は爪隠す』ってなあ」

言いながら、彼は辰滝の顔面をがっしりと掴んだ。辰滝が震える。

「ま、待てよ！ 私を殺したところでっ、スキルアウトの馬鹿どもは…！…！」

最後のあがきとばかりに意味もなく叫ぶも、インターフェイス接続回路は嘲笑を浮かべていた。

「そおだな。そっちも別働隊が動いてるから問題ねえ。愛情溢れるご指摘アリガトウ」

グシャリ、と。

肉と骨とが潰れる音が響いた。

＊＊

AM4:45、垣根帝督とインターフェイス接続回路は救急車に偽装した車両の中に居た。

「やれやれ疲れたな。さすがに早朝出勤は堪える」

垣根が隣で呟いた。インターフェイス接続回路はシートに背を預け、

「そうか」

「どうした、こないだの件で怒ってんのか？」

「んなじゃねえ」

9月30日、この二人は能力を駆使して戦った。もともと、双方共に本気ではなかったようだが。

「まあいいか。後は別命あるまで待機らしいが」

垣根も頭の後ろで手を組み、背もたれに背を預ける。

「ならその辺で降ろせ」

接続回路インターフェイスは冷たく言った。垣根は気にする様子もなく、

「わかった。おい、運転手。ここらで停めろ」

『スクール』。学園都市上層部、総括理事会の命にて動く、直轄組織。

学園都市の深い闇に包まれた組織の目的は、学園都市における反乱分子・及び不穏分子の排除並びに治安維持である。

10月3日早朝に行なわれたこの事件は、リーダーである垣根帝督と上層部直々にスカウトされた接続回路インターフェイスによって行なわれた。

事件の首謀者たる辰滝兼行は抹殺、以後下部組織によって証拠の隠滅が図られ、表向き、辰滝兼行は多額の借金を抱え自殺したことになっている。

この事実を知っているのは、『スクール』のメンバーと上層部。そして、辰滝の動きを報告した、烏森泰正だけである。



これが、インターフェイス接続回路の『スクール』初任務であった。

どうも櫻井です。

『スクール』の目的がハッキリしないので『グループ』と似た感じに書いてみました。

ちょっと事件にドロドロした感じを出したかったので、簡単に親しい同僚同士が実はお互いに利用してた、みたいな才子ですね。

前書きの垣根の台詞はそういった内容を表しました。

今回はちょっとほのぼのしていきます。四章は起伏が激しい章になるかもしれませんが。

それでは次回、お楽しみに

4 - 3 公園 思イ出ノ園 (前書き)

「それでは、この猫を白虎と命名しましょう、とミサカは提案します」

シスターアマリアルナンバー  
妹達識別番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「…コイツ、どう見ても白じゃねえだろ」  
『スクール』の構成員 インターフェイス 接続回路

「突っ込むとこそこーっ!??って、ミサカはミサカは猛烈にツッコミを入れてみたり!」

シスターアマリアルナンバー  
妹達識別番号 20001号

打ち止め(ラストオーダー

い)

10月3日、AM6:10。

インターフェイス ヘヴンキャンセラー  
接続回路は冥土帰しの病院に戻っていた。大型のテレビがある休憩所のソファにもたれ、彼はフウと一息つく。

その手には、先程自販機コーナーで購入したコーヒーが握られている。疲れたときにはこれを飲むのが一番だ。

周囲に人の姿はない。時折、トイレにでも起き出したのだろう老人が通るくらいで、彼のように座っている者はいない。

外の景色にはまだ青みがある。この休憩所も、通路に沿ってある電灯くらいしか明かりがなく、実に静かだ。

(妹達 アイツら…どうしてんだらうな)

『スクール』に向かったあの日から2日経っている。ウイルスを駆除しているらしい打ち止めはともかく、あの妙な現象に巻き込まれた多重観測は目を覚ましたらどうか。  
エクストラローラ

そのことばかり考えていた。

(暗部組織に入ったなんて知ったら、多重観測 アイツはなんて思うだろうな)

多分いい顔はしてくれないだろう。彼女は接続回路を明るい世界に出す切っ掛けになった人物だ。またあの時以上に深い闇に入ったことを知れば、顔を曇らせること請け合いだ。

(…まあ、どっち道伏せるしかねえか)

こうしないと彼女らの居場所がなくなってしまうのだから仕方がない。学園都市が潰れたときが、彼女らの最期なのだ。

もうそんな悲劇は起こさないと誓った。どんなに血にまみれても、闇に喰われても、彼女達を守る。

それが、自分自身の理由を持たなかったインターフェイス接続回路の今の行動指針だった。

彼は飲み干した缶コーヒーをゴミ箱に放ると、ぼちぼちと病室を指して歩き出した。

\*

ハウンキャンセラー  
冥土帰しは院長室で仮眠をとっていた。

9月30日、インターフェイス アクセラレータ接続回路と一方通行の指示で診ている患者をあちこちの病院に一時的に移し、今日やっと元の状態に戻すことができたのだ。

4日ぶりに座る椅子の感触に身をゆだね、ゆったりと目を瞑る。

そこに。

「…どうしたのかな？」

パソコン画面に映り込んだ人影に、ハウンキャンセラー冥土帰しは振り返ることなく尋ねた。人影は数歩こちらへ歩み寄り、

「妹達はどっとなってる」

灰色の髪、緋色の瞳。自分を訪ねてくるこんな特徴の人間は、一人しかない。

「打ち止めのウィルスの影響か、多少ネットワークの形成その他に変化があるが、通常通り病室で待機しているよ。ネットワーク構築が曖昧だった多重観測は外出しているがね」

一瞬、人影は眉をひそめたが、冥土帰しが許可しているなら問題ないと判断したらしく、

「…そうか。ウィルスの駆除の進行状況は？」

「1日の深夜に運び込まれてから今までで、やっと半分というところかな。脳はデリケートだからね。あまり急ぎ過ぎるといい結果にはならないよ」

「オマエの考える最善の治療をしてくれればいい」

人影は壁に寄りかかり、宙空を見つめている。冥土帰しはギョッ、と椅子を回転させ、

「言われなくとも。ところで、今までどこに行っていた？君といい一方通行といい、全く連絡が付かなかったが」

人影：接続回路は、しばらくぼうつとした後に、

「オマエには関係ねえ」

「…ふむ」

断られ、冥土ヘヴンキヤンセラ帰しは顎に手を当て、そういえば、と切り出した。

「エクスプローラ多重観測が会いたがっていたよ。色々話したいことがあるとか言っていたね」

ん、とインターフェイス接続回路が目を向ける。

「……。任せる」

それだけ言って、彼は院長室を出て行った。

相変わらず静かな院長室で、冥土ヘヴンキヤンセラ帰しはふつと笑い、

(もう一人の方も早く来てくれればいいんだけどね)

年配の男の頭には、出て行った少年と瓜二つの少年が浮かんでいた。

\*

AM9:10、インターフェイス接続回路は街を歩いていた。

その手には、コンビニのビニール袋が提げられている。

エクスプローラ多重観測の居るであろう場所の目星はついている。彼はスタスタと歩いていき、心当たりの場所を目指す。

(……)

第七学区、寮やら何やらが立ち並ぶ一角にある、それなりの広さの公園だ。エキストラローラ多重観測と初めて出逢った場所である。

朝の公園は静かではあるものの、既に子供の姿がある。

インターフェイス接続回路は敷地の前で立ち止まり、数拍おいて踏み込んだ。

(ここに来る時は、いつも闇の中だな)

その事実が、どうしようもなく悔しい。また逆戻りした事実を見せつけられている気がしてならない。

「ニャーニャーと、ミサカは同様の鳴き声を使って猫とのコミュニケーションを試みます」

「何…やってんだオマエ」

闇がどうか考えていた矢先、目標に遭遇した。ベンチに座り、膝に例の子猫を乗せて首のあたりを指先でくすぐっている。

ゴーグルのレンズ部分の配色が違う。

間違いない。エキストラローラ多重観測だ。

彼女はインターフェイス接続回路を目にすると、わずかに無表情な顔をほころばせた。

「…あなたもこの猫に餌をやりに来たのですか？とミサカはそれとなく声をかけます」



「…ああ、それもある」

接続回路はベンチに座る多重観測に、手にしたビニール袋を手渡した。猫の餌はよくわからないため、前回ちゃんと食べていた菓子パン類が入っている。多重観測はそれを受け取り、中身を開いて子猫に与えた。

「今までどこに行っていたのですか、とミサカは数日前から抱いている疑問を投げかけてみます」

「……」

彼女の問いに、接続回路はすぐには答えなかった。

言えない理由は三つ。

ひとつは、多重観測云々以前に、『スクール』が機密組織であること。多重観測にこれを話せば、ミサカネットワークの記憶として取り込まれてしまうかもしれない。組織に属する者の責任として、それは避けたい。

二つ目に、ここが公共の場所であるということだ。おまけに小さな子供が居るような、愛すべき風景のひとつ。自分を監視する者もいないとは限らない。情報漏洩をした途端に確保、なんてことにもなりかねない。闇に住まう者として、ここで厄介事は起こしたくない。

三つ目に、彼女を巻き込むわけにはいかない。これは自分や一方通行が背負うべき問題だ。事実を知った時点で、彼女らも闇に取り込まれる。そんなことは、彼女らを守ると誓った者として許さない

し、許されない。

インターフェイス  
接続回路は数拍おいて、

「オマエが心配するようなことじゃねえ」

「そうですね。疑問は残りますが、戻ってきてくれたので不問とします、とミサカは少し上から目線で判定します」

…。なんだか少しイラついたが、まあいい。

ラストオーダー  
「打ち止めの件は申し訳ありませんでした、とミサカはすぐにできなかつた謝罪をします」

「謝罪なあ？」

コイツは何を言っているのか。

インターフェイス  
疑問に思ったが、接続回路は悟り、ため息をつく。

「…まあ、あのまま突っ走っちゃまった俺も俺だ。よく状況も把握せずにオマエにアイツを任せちゃったからな。オマエが気に病む事アねえ」

エクスプローラ  
言つと、多重観測は少し安堵したような、それでいて罪悪感を感じているような、そんな目で見返してきた。

インターフェイス  
接続回路が頭を掻く。よくわからないがどうしようもなく居心地が悪い。

「…今も病院で寝泊まりしてんのか？」

数十秒経って、そんな話題が飛び出した。多重観測は目を瞬かせ、

「そうですが、何か？とミサカは質問の意図を図りかねます」

「…なら飼育ケースが必要か」

「???何の話をしているのですか、とミサカは話題を把握できません」

インターフェイス  
接続回路は舌打ちし、

「わざわざここに来んのも面倒だ。名前でも何でも付けてオマエが  
飼え」

…あまりに不器用な好意だった。言うてから、ここに戻せと言っ  
たことを思い出す。矛盾していると感じながらも、彼はそのままや  
り通すことにした。

「飼う…？とミサカは繰り返します」

「見舞いに連れてきたの見りゃわかる。飼いてえなら飼えばいいだ  
ろおが。さっさと連れてかねえと他のヤツに持ってかれんぞ」

似合わない台詞を吐くものじゃない、と胸の内では後悔しながら、  
インターフェイス  
接続回路がついて来るように促す。あの何ともいえない空気が、彼  
は苦手だった。毎度毎度、この子猫には助けられっ放しだな、と自  
嘲気味に笑う。

背を向けて歩いていく接続回路を見て、多重観測は嬉しそうに子

猫を見た。

「これから一緒ですよ、とミサカは言葉の壁を無視して語りかけます」

子猫はなにを思ったのか、猫特有の鳴き声をあげる。彼女はそれを承諾と受け取ったのか、膝の猫を抱えて立ち上がる。

エクスプローラ  
多重観測はパンの入った袋を手に、インターフェイス接続回路の背を追った。

どうも、櫻井です。

いや、この二人って難しいですね(笑)

当麻と美琴のヤツをちよこつと書いたときより全然台詞に頭使ってますが(汗)

こう、対等じゃないから難しいんでしょうね。守る側と守られる側ってというのが。一方通行と打ち止めならまだ打ち止めが騒げるので楽なんですけど…。

次回はどうなるか未定です。『スクール』編か日常編か、しばらく考えたいと思います。

それでは次回、お楽しみに

4 - 4 怪奇現象 見エザル攻撃 (前書き)

「オマエ一人でお方付けかよ…」  
『スクール』の構成員  
インターフェイス  
接続回路

4 - 4 怪奇現象 見エザル攻撃

10月3日、PM10:40。

垣根帝督は『スクール』の隠れ家に居た。

『…というわけだ。参加人数が揃い次第行動を開始してくれ』

「…ああ。わかった」

垣根は回線を切り、席を立つ。

(人数が揃い次第、か)

軽く顎に手をやり、使えそうな人員を頭に浮かべてみるが、垣根は嘆息して出口に向かう。

確かに人数がいれば可能なことも増えるし手間も減るが、集まるのを待つ気はなかった。

実際、今回のオーダーは垣根一人でも充分にやれる内容だ。ならば無理に集める必要もないだろう。

主要メンバーは4人居る。内一人のスナイパーが先日の任務で死んだため、新たに接続回路インターフェイスを招待したわけだが…。

(…まあいいか。どうせ辰滝と契約したスキルアウト共だ)

\*

尖播牽爾<sup>せんぱ けんじ</sup>は、寂れたビルの中であばこを吹かしていた。周囲には数名の若者が立っている。

スキルアウト。

彼らはそう呼ばれる人種だった。能力を持たぬ落ちこぼれ、そう軽視される学園都市の暗い一面のひとつである。

尖播のグループはスキルアウトの中ではなかなか大きな勢力だった。辰滝兼行という『イイ所長』のお陰で、四回に渡って大量の武器を仕入れることに成功した。今日も数度に渡って偽装を繰り返されたブツが届くはずだ。

尖播は腕につけた時計をちらりと見る。日付変更まで2時間もない。いつもなら1時間前には届いているのだが…。

「おい。辰滝のパシリはまだ来ねえのか」

痺れを切らし、尖播は傍らの男を見た。男はむう、と小首を傾げ、

「遅えよなあ…」

「ま、まさか警備員に見つかって…」

「バーカ。辰滝はれつきとした公務員だぞ。奴がチェックした品物を、わざわざ警備員<sup>アンチスキル</sup>が調べやしねえだろ。もっと別な理由があんだ…例えば…」

尖播は一蹴し、煙草を灰皿に押し付けた。と、同時に。



ドゴオン!!と爆音が響いた。

尖播たちリーダー格の者達が爆音の方向を見た。暗い窓の外には、もうもうと黒煙が上がっている。

「…なんだ？」

スキルアウトの間では別段珍しいことではない。些細な闘争から手榴弾ひとつの投げ合いくらいはたまにある。

「またアイツらじゃないか？つたく、今日はどんな…」

ズバァンツ、という斬撃音がビルに響く。

「な!？」

部下の暴れ合いではない。彼らは一瞬で悟った。断続的に爆音が続き、やがてその正体が現れる。隣の部屋とを仕切る壁が爆発し、外で見たのと同じ黒煙が間近に迫る。

「さあて、お偉いさん方出て来いよ」

黒煙から現れる少年。垣根帝督。

「な、なんだお前…」

スキルアウトの一人が、震えながら垣根へと銃口を向ける。彼は

「おいおい」と笑い、

「物騒なモン持ってんじゃねえよ。下手に暴れたりしなけりゃ、変に危害加えるつもりはねえ」

「ナメてんじゃねえぞ能力者！俺たちが誰か、わかって言ってるんだろうな」

尖播が言った。垣根は彼の顔を見るなり、笑いながら睨みつける。

「某スキルアウトの親玉だろうが。テメエが犠牲になってくれりゃ、事態は丸く収まるぜ？」

「能力者だからって調子に乗ってんじゃねえぞボケ！状況良く見てみる！」

「あ？」

言われて、垣根がわざとらしく辺りを見回す。幹部クラスの五人に加え、部下の男達が銃を構え、発砲する。銃弾は垣根目掛けて飛んでいき、その胸を貫くかと思われた瞬間、あり得ないことが起こった。

垣根へと一直線に進んでいた銃弾。それが、まるで見えない何かに操られたように、軌道を変え、垣根の背後に立っていた幹部の一人へと突っ込んだ。

血しぶきが、男の胸から噴出する。

「な、なに！？」

「全員離れる！」

尖播が叫び、ガムのような粘着物型の爆弾を垣根へ投げる。反射的に垣根が腕を挙げ、それが張り付くと同時に、轟音を立てて爆弾が爆発する。垣根のと変わらない黒煙が、あたりを満たす。物陰に隠れたスキルアウト達が、垣根の立っていた場所へと目を向ける。

「…やったか？」

誰かがぼやく。だが、黒煙はまだ晴れていない。それが薄まり、いざ垣根の爆散した死体が現れると思えば、起こったのは謎の現象だった。

「がつ！」

「!?!」

「ぐうおっ！」

「おい、どうした！」

突然数名が胸を押さえ、混乱するスキルアウト。

煙が晴れる。

その場に居た全員が、目を疑った。

そこには人が立っていた。起爆した時と変わらない、腕を上げた状態で。人影が口を開く。

「…痛つてえな」

「…嘘だろ…」

目の前の光景が信じられなかった。どう考えても、あの爆発を直で喰らえば腕は吹っ飛ぶし、発生する熱量で顔はグチャグチャになるはずだ。

しかし、目の前に立つ垣根帝督は、変わらず整った顔で居る。

ただ違つのは。

その顔が怒りに歪んでいるという事だ。

「…穏便に済ませてやろうと思ったが、やっぱり駄目だな。ムカついた。テメエら全員皆殺しだ」

低い声で垣根が言うと、突然スキルアウト全員が床に転がった。

「ぐあつ…なに…?」

尖播が言った。まるで見えない何かに押しつぶされているかのような重圧が、全身に襲い掛かる。

「相手を考えるクソボケ。…いや、テメエらの頭に名前刻まれんのは屈辱だな」

垣根はスキルアウトの作っていた包囲網の真ん中に立っているだけだ。口や表情以外は何も動かしていない。なのに、何もしていないのに、見えないプレス機が体を襲つ。

グシャアツ！という音と共に、一人の男が文字通り潰された。そのまま順に、一人、また一人とミンチになっていく。血のスープに浸かったそれは、生々しい臭いを噴出し、この場に居ることに拒否反応を生じさせた。垣根は表情一つ変えず、一人残ったリーダーの尖播の前に歩み寄る。

「大したモンぶん投げてくれたじゃねえか。他の連中と同じ死に方じゃ、リーダーとして浮かばねえよなあ」

ズアツ！という音と共に、垣根の背中から翼が伸びる。三対六枚の発光する翼。尖播は目を見開いた。とてもこの世のモノとは思えない神秘的な輝き。しかし、神々しい形のそれは、やがて刃のよう鋭く形が変化する。

「な…な…」

六枚の翼の鋭利な先端が、尖播の眼前に突きつけられる。

「俺も組織のリーダーやってただけだな。大変だよなあこういう仕事は。部下のこともちろんと考えて行動しなくちゃならねえ」

じわじわと、垣根の翼が迫ってくる。尖播は恐怖と戦っていた。

「ぐがあっ…！」

不意に、尖播は脚に強烈な痛みを感じた。うつ伏せになっている彼には見えないが、膝から下がミンチになっている。

「そういう意味じゃ、テメエは最低のリーダーだよな。下の連中は温情もって殺さずに置いたが、テメエの判断で殲滅確定だ」

「何…う、ぐうわっ!!」

ズビュツ、と。垣根の翼が動き、何かを跳ね飛ばした。血塗られた床に転がる、二つの球。

眼球だ。

「ぐあぁっ!! あぁあぁぁっ!!」

感じたこともない激痛に、尖播が呻く。強烈な圧力は続けて彼の両腕をも押しつぶし、目を押さえることすら許さない。

「痛えよな」

グシャツ、と、肉を潰す音が響く。尖播の膝から腰までを潰した音だ。潰れた内臓が、とてつもない悪臭を放つ。垣根は動じない。

「なあ、お前知ってるか？中世ヨーロッパなんかの処刑法は色々あるが、一番有名なのはギロチン台だ。首を切り落とすヤツ。日本でも切腹の時には介錯がいて、首落とせば一瞬で死ぬなんて考えてたらしいがそうじゃねえ。人間ってのはな、血液が巡ってる間は生きてんだ。どんなに惨い状態になっても、血がある程度巡ってたら生存できちまうんだよ。首を切り落としたとしてもな、脳を巡ってる血流は数瞬の間は持つんだ。だからギロチン台や切腹で首落とされた連中は見ちまうんだよな、自分の首の断面をさ」

「…!!」

もう意識はほとんどない。ぼんやりと垣根の声が聞こえるだけだ。

「目玉くり抜いてやったんだ、死ぬ前にトラウマ作んなくて済むだろ？」

彼はにっこりと微笑むと、最後の圧力を尖播にかけた。

\*

垣根は下部組織と一緒に来た『スクール』の車両に乗っていた。隣にはスーツ姿の男が座っている。

「一人で遂行していたのですか？」

甘ったるい優しい声で、男が言った。垣根は窓の外に目をやり、

「まあな」

「特に問題もないのですが、指示は『参加人数が集まったら』だったはずですよ」

「明確に人数を指定した訳じゃねえだろ？敢えて言うなら、俺が指示を受けた時点で集合完了だ」

面倒くさそうに应じる垣根。男はふむ、と頷くと、

「…まあ、肝心の任務そのものは達成してくれましたからいいのですが。これで、一連の銃器横流し問題は解決ですね」

男が言うが、垣根は曖昧に頷くだけで取り合わない。

機会。

それを待っているのだ。

『スクール』のリーダーとしてではなく、第二位の超能力者、垣根帝督として。

きっかけ。

たったひとつのきっかけさえ掴んでしまえば、後はジャガイモの収穫のように結果がついてくる。

彼は腕にした時計に目をやった。

日付変更、10月4日。

(最も動きやすいのは…)

人知れず、垣根は口元に笑みを作った。薄暗い車内ではわからないくらいの小さな変化だ。

「事件解決ってことは、しばらくは待機か？」



「ん…そうですね。各題にそのように通達していますよ」

「了解了解。さてと、帰ってメシでも食うかな」

垣根は飄々と口に出すと、明かりの絶えない街並みに目をやった。

垣根主役回です。

もつと派手に動かしても良いかと思ったのですが、垣根の性格柄スキルアウト相手にそこまで本気にならないと思うんですね。

なので簡単に、原作にあった圧殺描写を盛り上げた感じですよ。

薄々キャラ崩壊を感じました(汗)

なんとなくか、一方通行や接続回路みたいなハッキリした殺意を口にするタイプでもないかと踏んで喋らせましたが、如何だったでしょうか？

垣根はあまり資料もないので下手な心理描写も書けず、今回は挑戦でした。

四章では垣根と接続回路の視点で展開していきますが、大半は主人公の視点です。余裕があれば一方通行VS垣根帝督も書きたいかなあ(笑)

それでは次回、お楽しみに

4 - 5 遺物 ジゴク (前書き)

「特力研：だつて？」

学園都市の治安を守る警備員アンチスキル

黄泉川 愛穂

4 - 5 遺物 ジゴク

10月4日、AM8:00。

インターフェイス  
接続回路は目の前の光景にため息をついていた。

「だから、ミサカはトランプがしたいんだもん！ってミサカはミサカは猛烈に主張してみたり！」

「あなたはまだ治療が終わっていないはずですよ。さっさと退室するべきです、とミサカは苛立ちながら促します」

「朝っぱらから何やってやがんだオマエら……」

つい先ほど、目が覚めたら傍らのテーブルに多重観測と打ち止めエクスプローラと打ち止めラストオーダーがついており、何やらたわいのない、くだらない議論を繰り広げていたのだ。

…人の病室で。

「ラストオーダー打ち止め。ラストオーダーソイツも言ったが、オマエ出歩いていいのか」

朝から怒鳴る気にもなれず、インターフェイス接続回路が静かに尋ねた。ラストオーダー打ち止めはひょいとこちらを向き、

「まだ完全に駆除はできてないけど、病院の中を出歩くぐらいいいだろうってお医者さんが言ってたって、ミサカはミサカは報告してみる」

「ほー…まあ、病原菌みてえな意味のウイルスとは勝手に違えか。  
んで、エクスプローラ多重観測はどうした」

インターフェイス接続回路は納得したように言うと、今度はエクスプローラ多重観測へと視線を移した。

「朝早く打ち止めがあなたの部屋へ入ろうとしたので、迷惑を被らないよう連れ帰ろうと思ったのですが…とミサカは手遅れであることを承知で申告します」

「えー、違うもん！エクスプローラ多重観測だってこの前を変な顔してウロウロ…  
…っていたたたたーっ！なんで本当の事を言ったミサカのほっぺをつねるのー！？って、ミサカはミサカは現状の理不尽を理解できなかったり！」

「余計なことを言わないで下さい、とミサカは上位個体のくせにちっこいあなたを戒めます」

「むかつ！ちっこくても個性溢れる上にミサカの方が上位個体で偉いんだもってミサカはミサカは身体的特徴を取り上げる失礼な下位個体の頬を引っ張って仕返ししてみたり！」

「……ハア」

ラストオーダー打ち止めのウイルス大丈夫かとか、エクスプローラ多重観測の理由はなんだとか、うるさくて落ち着かないとか、そんな内心全てがどうでもよくなつてくるぐらいに面倒だった。関わり合いたくない空気だ。

だが、放っておいたらおいたで延々と頬のつねりあいをしてそうなので、面倒覚悟で口を挟む。

「多重観測」

「はい？とミサカはあなたのふおおをふいふえ…！」

多重観測がこちらを向いた瞬間、打ち止めがさらに強く彼女の頬を引っ張った。

…どうやら打ち止めはこのつねりあい何らかの娯楽性を見出したらしい。怒り心頭につねっていたのが、笑いながら変わっている。

あの手の子供は一度癖になった遊びはしばらくやり続ける傾向がある。

多重観測は多重観測で遺伝子の関係が負けず嫌いが災いし、打ち止めのちよっかいに全力で応戦している。

…やはり下手に関わらないのがベストらしい。

(しかし…一方通行はどこに行ってんだ？)

打ち止めを見ていると、自然に彼の姿が浮かんできた。と言っても、遠目で見た漠然としたものであるが。

目覚めた以上、打ち止めは一方通行に会いたいと考えるのが普通だろう。

二人の関係性など知りはないが、ずぶ濡れになって助けてくれと頼んできたぐらいだ。

相当懐いていると考えていい。

だとしたら…。

(…どこの組織に居んだろうな。確か『スクール』みてえな組織は、四人から五人ぐらいの少人数で構成される。垣根の話じゃ、『アイテム』だかつてところは女四人で組織されてるつつたな。つーことあ、『アイテム』に居る可能性は低いか。すると…)

「うわあ！小さい体を背後から抱え上げるのは反則プレー！ってミサカはミサカは危機的状況の打破に努めてみたり！」

(確か五大組織つつつて、『スクール』、『アイテム』、『ブロック』、『メンバー』…後なんだっけな。消去法で残り三つの中に居るのは夕凧や芳川だかつての話から間違いねえ。野郎とコンタクトがとれりゃ、このガキが目を覚ましたことを…)

「そうはさせません、とミサカはあなたの首根っこを掴んで動きを封じます」

(『スクール』行つて、書庫でも探ってみるか…)

思考の海から帰還した接続回路は、隣で馬鹿騒ぎをしている妹達をそのままに、病室を後にした。

\*

書庫とは、学園都市内の能力者の情報が記録された専用データベースである。

基本的に一般人が閲覧することはできず、主に風紀委員や警備員、後は許可を得た組織ぐらいしか正式にアクセスすることはできない。もっとも凄腕のハッカーともなれば話は別だが、なんでも守護

神』と呼ばれる者がおり、違法アクセスを遮断しているという話だ。

インターフェイス 接続回路もハッキングができないわけではないが、わざわざ危険を冒すような真似はしない。折角『スクール』に所属しているのだ。それを利用しない手はない。

隠れ家に入ると、そこにはポテトをつまむ垣根の姿があった。彼の座るソファの前には、一人分のファーストフードの包み紙などが載っている。

「ん。珍しいな」

インターフェイス 垣根はこちらに目をやりつつ、モグモグとポテトを食べている。接続回路は歩み寄り、

「オマエ、ずっとここに居んのか？来たらいつも居るよな」

「そうか？偶然だろ。昨日は夜な夜なお片付けだったからな」

言いながら、垣根はポテトのケースに指をつっこみ、またひとつ口に放る。

「辰滝の取引先ブツ潰したんだっただか」

「おう。まあ昨日じゅうに片付けられて一安心だな。もし今日まで野放しにしてたらあいつら、何かやらかしてたかもしれねえぜ」

「…面倒は御免だからな」



インターフェイス  
接続回路は一言返すと、垣根を通り過ぎて隣の部屋へと向かう。

「お？何すんの？」

「調べモンだ」

それだけ言い、彼は部屋の扉を閉じた。

そこは無機質な印象のある部屋だった。一応観葉植物が部屋の隅に置いてあるのだが、大部分を占める電子機器が有機的な印象を覆い隠している。

Cの字型のデスクの上には、三つのPCディスプレイが置かれ、机の外枠に合わせて15個のサブディスプレイが五列三段に固定されている。一度に複数の情報を処理するために必要なのだが、垣根や自分ぐらいの能力者でもなければすべてを使いこなすことは難しいだろう。

椅子に座り、パソコンを起動させる。

慣れた手つきで認証作業を終え、彼はデータベースの海の中へと入っていく。

(…ああ、『グループ』か。コイツを忘れてたな。さすがにメンバーの一覧表なんかは出やしねえか)

さて、と接続回路は一度手を止め、一呼吸してからキーを叩く。連続して命令を打ち込み、出てくる情報を瞬間的に処理して次へと移っていく。

(…ん?)

流れるような作業の最中、ふと、何かが目に留まった。固定されているサブディスプレイの二段目、四列目の画面。能力者の管理場所のデータだ。

「特例能力者多重遺伝子調整研究所…！？」

インターフェイス接続回路が目を剥いた。この忌々しい施設を、自分は知っている。

「クソつたれが…まだやってやがったのか…！」

生まれて最初に見た景色がそこだった。わけのわからない機械が並び、誰のものかもわからない脳みそが標本のように液体で満たされた棚に並んでいたあの空間。

インターフェイス幼少の接続回路自身も、妙な機械に放り込まれたり得体の知れない薬品を飲まされたりした場所だ。

アンチスキル特例能力者多重調整技術研究所が警備員によって処分されたと聞いて、てっきりこちらの特力研も処分されたものと思っていたが、どうやらこちらは存続しているようだ。

無意識のうちに、彼は奥歯を噛みしめていた。

（まだ続けてやがんのか…あんなことを）

光を知った今だからこそ言える。研究所に居たとき、自分は地獄に居た。

同じように研究対象にされていた子供が、血まみれの奇怪な塊になっただけのこと。

強力な能力を持つ子供が、その限界を試され最終的にプレス機に潰されていたこと。

思い出せば、いくらでも出てきた。

初めて同年代の女を見た。自分とは違う彼女に少なからず興味を抱いた。

その数時間後、彼女は四肢を失っていた。

泣き叫んでのたうち回る彼女に、研究員は「失敗だな」とため息をついて彼女の脳天に弾丸を撃ち込んだ。

あれを見て、人と分かり合う事に億劫になった。

あれからもう10年は経つ。あれから今までも、あんなことが同じように行われているというのか。

虫酸が、走る。

彼は席を立ち、駆け出した。

破るように扉を開け、「調べもん終わったのか？」と聞いてくる垣根を無視して外へと飛び出す。頭の中に刻み込んだ地図を頼りに、あの最低最悪の地獄を目指した。

\*

「…なんだ？あいつ」

ポカんと、垣根は鬼のような形相で出て行った仲間の去った後を見ている。

ふむ、と彼は食べ終えたファーストフードの包みをひとまとめにする。

(アレイスターとの直接交渉権…)

それが彼、垣根帝督が求めるモノ。

それを手にするためには、いくつかのルートが思いつくが、そのほとんどは幾重にも策を練らなければ辿り着けないモノだ。

「手っ取り早いのがひとつあるが…あいつは納得行くかねえ」

たった今飛び出していった、灰髪の少年。

垣根の頭には、彼と瓜二つの少年の姿が浮かんでいた。

4 - 5 遺物 ジゴク (後書き)

どうも、櫻井です。

章題詐欺みたいになってまいりました(汗

しばらく接続回路視点の話が続きます。∴本来はそうあるべきなのですが(汗

まあ、特力研みたいな施設は多分いくらでもありますからね。学園都市の裏の顔としてすごく印象深い施設だと思って、是非とも小説に出したいと思っていました。一方通行が居たところは黄泉川が制圧・解体したと言うので、姉妹校みたいな感じでもうひとつ。

ちょっとこの先、接続回路にとって上条さんとの接触以来の転機というか、大きな出来事が起こる予定です。

それでは次回、お楽しみに

4 - 6 対面 優シイ悪魔 (前書き)

「あら、出番？」

暗部の女性研究員 夕凧 志乃

#### 4 - 6 対面 優シイ悪魔

10月4日、PM6:40。

さすがに10月にもなると日が落ちるのが早く、地平線の辺りがわずかに茜色なだけで、辺りは薄暗い。

接続回路インターフェイスは第10学区にいた。学園都市唯一の墓地がある区画であり、原子力施設なども多い。

彼の視線の先には、電力発電所があった。

表向きはそうだが、データ通りならあれはフェイクで、本命の研究所は地下にある。外観こそ知らなかったものの、接続回路インターフェイスは幼少時にそこが地上ではないと知覚していた。

精密な演算が必要な彼の能力は、そういった知覚能力も兼ね備えている。

(…あの警備員…)

一見ただの警備員アンチスキルだが、装備その他にわずかだが違いがある。猟犬部隊ウインドドッグか何かだろう。この辺りに来る人間はそういないし、知識がなければ二者を判別することは難しい。

施設の門に、二人の見張りがついている。周囲に一般人の姿もない。

彼は勢いよく地面を蹴ると、二人の警備員の前に躍り出た。殺す必要はない。接続回路インターフェイスは大きく息を吸い込み、周囲の酸素濃度を一気に引き下げる。

「がつ…」

「ぐっ…」

バタツと音を立て、見張りの二人が倒れ込む。彼は二人を敷地内へと放り込み、自身も中へと侵入する。

おそらくこの区画の電気を賄っているのだろう。網のように何本もの配線が見える。とりあえずは表向きの建物に入るべきだろう。  
インターフェイス  
接続回路はあまり焦らず、慎重に歩いた。

建物の中に人間は居なかった。一通り調べてはみたが、発電所を制御する人間の姿がない。

(やっぱり下か)

インターフェイス  
接続回路は床に手を当て、原子レベルに分解し穴を開ける。

案の定、下にも人工の空間があった。

正規の出入り口が他にもあるだろうが、わざわざ探し出す気もない。彼は開けた穴に入り込み、人工の床へと着地する。

見上げると、この床から開けた穴までの距離は6mほどだった。地下一階と言ったところか。辺りは外のように薄暗いが、所々に小さな電灯が光っている。

(気付かれたか…)



まあ門や発電所内に監視カメラはあっただろうし、気にはしない。  
多少警戒しながら、薄暗い廊下を歩いていく。

\*

しばらく移動すると、鼻につく悪臭が漂ってきた。  
光が漏れる扉からだ。この中は電気がついているのか。  
その正体に薄々勘付きながら、インターフェイス接続回路は扉を開ける。

「……ッ！」

開けた途端に、彼は目を見開いた。

金属製の冷たい床に、幾重にも折り重なって子供の死体が転がっている。

「廃棄処分されたのか……」

確かあの外道の研究員達はそう言っていた。夕子の悪いヤツにも  
なると生ゴミ処理場なんて表現をすることもある。

眉をひそめながら、インターフェイス接続回路は転がっている子供の死体を一人一人見ていった。

(…脳と心臓が抜き取られてやがる…クソ野郎が。死んだ後まで実験に使いやがって)

10年前、今ほど研究が進んでいなかった頃は、複数の脳を組み合わせて複数の能力を発言させるなんて理論があったらしいが、今ではそれが間違っていることが立証されている。ならば何に使って

いるのだろう。

(どっち道やることあ変わらねえ)

まずはこの地獄の責任者を始末することが先決だ。

シスターズ  
妹達を守ることももちろん大事だが、純朴な子供が望まず闇に喰われていくのを放置するわけにもいかない。

彼は痛ましい視線を子供達に向け、部屋を後にした。

\*

夕凧志乃は自分の研究室でコーヒーを飲んでいた。

彼女の目の前のディスプレイには、何かのグラフが絶えず信号の強弱を表している。

被験者：チャイルドエラー所謂置き去りの子供達の脳波グラフ。彼女の横にある棚には、試験管が立ち並び、透明な液体が入れられている。

：よく、優しすぎると言われる。研究員なんて似合わないとか、その容姿ならもっといいい職業もあるだろうとか。

褒めているつもりなのだろうが、志乃にとっては嬉しくない言葉だ。

大学時代、彼女には二人の親友が居た。黄泉川愛穂と芳川桔梗だ。今思えば、何故自分たちは仲が良かった。今もだが、のか、理解に苦しむ。

芳川とは同じ研究者という立場ながら、全く違う性質を持ってい

るし、黄泉川に至っては警備員という、研究者とは縁もゆかりもない職に就いている。

得てして人間とは、その性質そのものに左右されるわけではないという事だろうか。

昔から優しい優しいと言われてきた自分が、非人道的な研究機関に所属していることなんか特に該当する。彼女には別な夢があった。ただ、それになるには決定的な条件が欠けており、叶えられなかっただけで。

気づけば深い闇に染まってしまっていた。

にもかかわらず、根底にあるモノは変えられず、優秀な結果を残していないながら苦悩するという、何ともつまらない人生を歩んでいる。

こんなだからこそ、あの少年…：自分以上に闇色に染まってしまっているあの少年に世話を焼くのだ。

(あの子…：大丈夫かしら)

コーヒーに口を付け、彼女は少年の姿を頭に浮かべる。

本当は彼を暗部組織に取り込む橋渡しなんてしたくなかった。上から指示を受けたものの、彼が気付きさえしなければそのまま黙っているつもりだった。

だが今思えば、何より重視すべきは彼自身の意志であり、志乃の勝手な判断でそれを無視してしまうのは、彼のためとは言えないだろう。

そう信じ、志乃は彼を再びの闇へと迎え入れたのだ。

(…?なにかしら…)

第六感とでもいうのか。急な胸騒ぎを覚えた。

よく分からないまま、彼女は携帯電話を取り出し、あの少年…タイフェイス接続回路へと電話をかける。

「……駄目ね」

繋がるどころか、ノイズが走るだけだった。電波をジャミングするような施設に居るのか。

志乃は『スクール』の下部組織と繋がりがあり、『スクール』のオーダーリストなども閲覧できるが、見る限り、今の彼らには命令は下っており、所在も学園都市内ということだった。

(おかしいわね…これ、彼個人で行動してるってことでしょ?こんな強力なジャミングが発生する場所で、彼が行くようなところ…)

そこまで考えて、志乃はハツとした。

急いでキーボードを操作し、可能性の裏付けをとる。

結果は、すぐに出た。

強力なジャミングが行われ、尚且つ彼が自ら赴く場所。

『スクール』の高性能な情報装置、そして大して隠されもしていない、能力者の管理データ。そこから辿り着ける、ひとつの事実。

仮に彼がこれを目にしたら、真っ先に潰しにかかるに違いない。

一縷の望みにかけて、彼の病院に電話をかけるが、返ってきたのは「いないようだけど」という、あまりに予想通りの返答だった。

インターフェイス  
接続回路は今、特力研に居る。

できれば思い過ごし、気のせいと偶然であつてほしかったが、やはり神様は自分に試練を与えるのが好きらしい。

…どうすればいいだろう。

自分には何ができる？

運動能力に優れなかったがために、なりたい職業にもつけなかったただのインドア研究員に何ができる？

救ってあげたい子供のために、何ができる？

(それは…アナタの仕事じゃないわ)

志乃は少し焦りながら、別の番号に電話をかけた。

\*

インターフェイス  
接続回路は広い部屋にたどり着いていた。

高さにして十数メートル、各辺50mくらいの、体育館ぐらいの大きさの空間だ。奥の壁には鉄製の作業用階段があり、二階ぐらいの高さにある扉へと続いている。四方を囲む壁にも、いくつかシャッターで閉じられた扉がある。

彼はこの場所に覚えがあった。

(同じだ…何も変わっちゃいねえ)

綺麗に洗淨されているが、ここは被験者同士ないしは被験者と対人兵器とが殺し合う、殺戮の現場だった。

インターフェイス  
接続回路も、ここで何人も人間を屠り、多くの兵器を破壊した。

ギリツ、と、音がするほどに強く歯を噛み締める。

彼は次の部屋へ行こうと、足を進　　。

『久しぶりだなあ、インターフェイス接続回路』

「この声…!」

インターフェイス  
接続回路が身構える。

ドスツ  
その周囲、シャッターで閉じられていた扉から、数体の最新鋭駆動鎧が現れた。

インターフェイス  
だが、接続回路はそれに見向きもせず、ただ一点に視線を向けていた。

階段で繋がっている、二階部分にある扉。そこから手を振る男性。スーツの上に白衣を着ており、腰ほどまでの長い髪をオールバックにし、低いところで結んでいる。

どこか含みのある笑顔を向ける男。

その顔に、インターフェイス接続回路は嫌というほど覚えがあった。

「どうしたんだ？ホームシックにでもかかって帰って来ちゃったのか？」

小馬鹿にするような口調。インターフェイス接続回路は拳を握り、男の顔を睨みつけた。

「やっぱりテメエだったのか…蝉脇イ!!!」

殺意のこもった少年の叫びが、広い室内にこだました。

はい、新キャラ登場ですね。

辰滝とかとは違ってこいつはわりと長生きします。

一方通行でいうところの木原ポジションですね。

今回の副題は接続回路と志乃の二人を表しています。やり方や立場は違うけど最終的にやってることは似ている、そんな二人です。

前回序盤の多重観測らの絡みは嵐の前の何とやらで…まあその前から慌しい話が続いていましたけど(笑)

それでは、次回、お楽しみに



4 - 7 研究所長 セミワキ シズカケ (前書き)

「木原の野郎を思い出すな…」

学園都市最強の超能力者(レベル6)

一方通行  
アクセラレータ

蝉脇隼掛せみわきしずかけは、接続回路インターフェイスをよく知る人物の一人だった。よく知ると言っても、親交があったわけではない。

あくまでもデータとしてよく知る人物だ。

特力研の所長にして接続回路インターフェイスの専属研究員、蝉脇隼掛。

それが彼の持つ経歴だった。

生まれて物心ついたとき、既に接続回路インターフェイスは彼の掌中にあつた。

それ故に、かつては最も依存し、今や最も嫌う人間。

それが蝉脇隼掛だ。

「やっぱりテメエだったか…蝉脇イ!!!」

接続回路インターフェイスが叫ぶ。当の蝉脇は手を振って、

「おーおー、10年越しに名前を覚えててもらえるとは、お前の教師としては涙あふれる場面だなあ」

少年の剣幕など露ほども気にしていなかった。接続回路インターフェイスは睨みつ

け、

「クソ野郎が…んな実験、いつまで続けるつもりだあ？」

「おやつ？なにになに少年。しばらく見ない間にすっかり漫画に影響されちった？いやー、世界に出て行って辿り着いたモノがそれって、どうかと思うよ俺」

相変わらずふざけた態度で蝉脇が言う。接続回路は苛立ちながらも返答を待った。

「……なんだよノリの悪いガキだなあオイ。ま、何があったか知らんが、お前はくだらない正義感みたいなのを学んで来ちゃったわけな。ああー了解了解。それで何だっけ？ああそうかいつまでやるか。そうなあ、稼げる間かなあ？」

あまりに軽い言い様に憤り、接続回路は握りしめた拳を床に叩きつけた。

同時に床に公式を働かせ、周りを囲んでいる駆動鎧を狙う。

が、駆動鎧は飛び出した鉄の刃を軽々とかわしていく。接続回路は目を丸くした。

「なに？」

「はははっ、驚いたか？まあ最新式だしな。機動性が強化されてても不思議じゃないだろ？」

言いながら、蝉脇は扉を開け、奥へと入っていく。接続回路が叫

ぶ。

「蝉脇イ！！待ちやがれテメエは……」

扉へ向けて跳躍しようとするが、パワードスーツ駆動鎧の銃撃で集中をそがれ、  
空気圧を発生させられない。蝉脇はふっ、と笑って、

「悪いな。悪いが俺、悪ガキの世話焼くほど暇じゃないんだよ。それに化け物の相手は御免だ」

「蝉脇イイイイ！！」

扉の向こうに男が消える。インターフェイス接続回路は奥歯を噛み締め、

「……オイテメエら」

パワードスーツ駆動鎧は応じない。インターフェイス接続回路に向け、対戦車用ライフルを斉射する。

彼はそれを無効化しつつ、立ち上がった。

「……邪魔してくるって事ア、死ぬ覚悟ってヤツあできてんだろおなあ？」

『……っ！』

そこには悪魔の姿があった。相手が格下とかそう言った『加減』の必要性を排除した、恐ろしい超能力者の姿が。

鬼神の如く歪めたその顔は、一目見るだけで背筋が凍る。

「……ああああアアアアアアああ！！！！」

踏みつけた床が、周囲の壁が、悲鳴にも似た轟音を立てる。  
崩れる。

そう感じさせる巨大な振動。駆動鎧パワードスーツが防御体制に入り、天井の落下に備えるも。

「エヒヤッ!!」

接続回路インターフェイスが広げた両腕。それに呼応するように、駆動鎧パワードスーツの頭上に渦を巻いて気体が集まる。

『圧力攻撃を仕掛けるつもりか！各員、直ちに…』

ドバンツ!!と、圧縮された空気が駆動鎧パワードスーツに落とされた。機動性重視の機体が、いとも簡単に捉えられ、立ち上がることもままならない。

「まあだまだああ!!」

咆哮とともに少年が天高く飛び上がり、天井に触れた。

鉄製の天井が落ちてくる。

『っ！ええいくそっ…あがつ！』

もがきはしたものの、絶えず降り注ぐ強烈な空気圧は鈍重な機体を押しさえつけ、無常マダマダに瓦礫が降り注ぐ。

『ぐ…みんな、生きてるか…』

隊長らしい男が尋ねる。スーツ内の小さなモニターに、全員の生命反応が確認できたとき、悪魔の声が耳に入る。

「これで助かったかと思ってんじやねえだろおな？」

悪魔のような少年は、薄ら笑いを浮かべて擦るように地面を踏んだ。

刹那、男は急な息苦しさを感じた。

学園都市の最新鋭の技術で強化された駆動鎧は、ビルが丸ごと倒壊して来てもパイロットを守るような防御力を有している。先の瓦礫の落下等、確認こそしたが何の脅威でもなかった。ほんの少し、瓦礫が落ちてきた衝撃を感じた程度で、痛みもなかった。

不意に、スーツの内側、口元に付着するものを見て、男は気付いた。

…刺さっている。

気付いた瞬間、腹部に焼けるような痛みが広がった。冷や汗…いや、それかどうかも怪しいくらいにいやな液体が、額から滴つてくる。

床から伸びた巨大な鉄の槍が、スーツを貫いて突き刺さっているのだ。確認こそ出来ないが、おそらく他のメンバーも同じだろう。

「…ははっ、そあだよなあ。やっぱこおしなくっちゃいけねえんだよなあ…クソ、バカみてえにヒーローじみたことすんじやなかった

なあ。ヒヒヤッ」

ブツブツと、接続回路が呟く。

「そおだよなあ…ここに居る時点で、テメエらも共犯じゃねえか…」

宙を見つめていた少年の瞳が、邪悪な笑みと共に開かれる。

男たちは、向けられる力に震えることしかできない。

「誰敵に回したのか…しっかり理解しとくんだったなあ？…フヒッ

…ア、ヒヤヒヤヒヤヒヤッ！！」

狂気の腕が高々と振り上げられた。

\*

PM7:20、垣根帝督は繁華街を歩いていた。

学園都市に住む学生のほとんどは、大体8時半くらいが寮の門限であり、この時間帯はまだ皆のんびりしているものである。

彼はそんな学生達に混じって、堂々と街を闊歩する。小腹が空いたため、簡単に食事を採ろうと思ったのだ。

(ここに居る一人だって、俺が『スクール』の一員だなんて知らねえんだよな。いや、『スクール』すら知らねえのか)

時に並び、時にすれ違いながら、垣根は思う。

無論彼とて学校に通っている。そこに行けば、ある程度の会話相手は要るし、彼をレベル5の第二位と知るものならいくらでもいる。だが、それだけだ。

暗部組織に属するが故、一般に彼の素性が明かされることはない。せいぜい、『第二位の能力者は垣根って名前らしい』程度のものだ。垣根にとって、表の世界は異世界に過ぎない。

暗部という日常にわずかだけ頭をのぞかせる、偽りの世界。

垣根帝督にとって、表の世界とはそういう場所だ。

(あんだけのことをしようが、新聞に載んのは美化された死因：表しか知らねえ連中は、結果的に何も知らねえことになる)

コンビニに置いてあった新聞を手に取り、辰滝兼行の小さな記事を見る。

表向きは多額の借金を抱えての自殺。

本当は違法銃器の無断搬入・無断運搬などの職権乱用が発覚し、暗部組織の超能力者に殺害されているというのに。

昨晚のスキルアウト殲滅は、ニュースにすらなっていない。彼らの根城の中で始末したからだろう。まあ、こちらも集団自決なんて書き方になるんだろうが。

汚い世界にいる人間が、汚い世界をどうこう言う権利などないだ



ろつが、そのすべてを認めることは垣根にはできない。

そのための計画なのだ。

彼は近くのファミレスの席につき、頬杖アソをついて外を眺める。警備員チスキルらしき特殊車両が、平和な街並みに一石を投じているも、垣根は特に気にした様子もない。

（アレイスターに繋がる方法はいくらでもある。できることなら第一位と殺り合うのは遠慮してえからな…妥当なところだと…）

ちら、と彼は何もない宙空を見た。何もないように見えるが、ここにはとんでもない量の分子が浮かんでいる。

自分や接続回路インターフェイスが操る世界。ヒントはそこにあると垣根は考えていた。

学園都市の紙幣に埋め込まれているICチップ。学生証や校章に仕込まれているGPS。

この街の技術は、もはや人間の肉眼では確認できない領域にまで発展している。

学園都市を掌握するアレイスターが何故あそこまで都市内の動向に詳しいのか。都市の各所に設置されたカメラや、監視がついているだけでは合点が行かない。

しかし垣根の中では、ひとつの結論が出されていた。

その結論の真偽を確かめるには、どうしても必要なものがある。

(アレを手にするには…もう少し待たなきゃならねえな)

彼は運ばれてきた料理に口を付け、妖しく笑った。

決起の時は近い。

\*

蝉脇は機材にあふれる研究室に居た。

彼の目の前には、特殊な台座で固定された脳が、何かの配線のよ  
うなものを繋がれ、鎮座している。その台座の両側には、四つの繭  
のような形をした大きなカプセルが設置され、一部の透明な表面か  
らは子供の寝顔が覗いている。

彼は手元の小さな機器を片手で操作し、置いてあるディスプレイ  
と脳を見比べるように交互に見ていた。その顔は退屈そうだ。

(ん…)

さつきからしていた爆発が、急に近くなったのを感じた。

彼は作業の手を止め、手足に何かを装着する。

(あのガキ…思ったより早いな)

学園都市でも上位に位置する超能力者が迫ってきているというの  
に、彼はひどく落ち着いていた。

まるで、暴れまわる幼児を止めようとする親のように。

(ちゃんと効きやいいけど)

手にはめたのは、何のことはない、現代的なグローブだった。足には同じように特殊なブーツを穿いている。

バゴオ!!という爆音と共に、背後の天井が崩れ、乱雑な室内に埃が垂れ込める。蝉脇はハアとため息をついた。

「入るなら入るで、ちゃんとノックして扉使いなさいって」

「ギヒヤツ!せええええみいいいわああああきイイイイ!」

埃を吹き飛ばし、灰髪の少年が姿を現した。その口元は狂ったように笑い、目は血走ってこぼれ落ちそうなくらいに開かれている。蝉脇はハハハ、と呆れたように笑い、

「はいはいここに居る居る。つか、ガラ悪すぎ」

「楽しい遊び相手をアリガトウ!最っ高に飛んじまったぜえ!?!」

言いながら、インターフェイス接続回路は部屋の壁面にビッシリ並び、数十人分の脳に目をやった。蝉脇の後ろでたくさんの配線が繋がれている脳とその机の左右に並び四つのカプセルにも。

「くっだらねえこと飽きもせず続けやがって。まあ…とりあえずデメエはブツ潰させてもらっぜえ…?」

「くだらないか?結構楽しい作業だけどなあ。んーと、アレだ。調

理する感じだな。細かな量の調整や加熱の具合、経過時間なんかで味が変わっちまう。だから、脳（脳）たん（脳）と集めているんな方法試しまし  
ようよー、ってそういう話」

蝉脇は蝉脇で、相変わらず余裕な態度を崩さない。垣根でさえも、  
ここまでの挑発はしなかった。

「それなんて悪趣味クッキング？ハヒヤツ、そおか。んなに料理が  
好きならあ…俺が調理してやるよクソ野郎があアアア！」

踵と地面の隙間に作った空気の固まりを解放し、高速で蝉脇に接  
近する。掌を広げ、蝉脇の頭を粉碎。

「あらよ」

「な…！」

いともたやすく、蝉脇は接続回路（インターフェイス）の突進をかわし、下から上への  
アッパーを、彼の華奢な体へ打ち込む。蝉脇の一撃は、正確に鳩尾  
を射ていた。

「じぶあッ…！？」

勢いを殺される接続回路（インターフェイス）。落下する最中に、今度は上から下への  
かかと落としが、彼の腰に炸裂する。

「がつ…！」

ドサツ、と、華奢な体が、舞い散った書類で埋め尽くされた床へ  
と落ちる。

(なに…!?)

「はははははっ!あははははははははっ!ア—ッハッハッ!」

理解不能の状況の中で、蝉脇の高笑いだけが耳に響いた。

4・7 研究所長 セミワキ シズカケ (後書き)

どうも、櫻井です。

ますます木原ポジが明確化されてきた蝉脇。

正直カラクリは木原神拳よりずっと簡単です。

若干無理がある設定ですが、まあそこは学園都市のミラクル技術  
ということでご勘弁を(^^;)

それでは次回、お楽しみに

4 - 8 崩壊 壊レル心 (前書き)

「…違う。そんなのは俺じゃない…俺は…」

『スクール』の構成員にして特力研に居た超能力者

インターフェイス  
接続回路

「いやあー、木原が教え子にやられたとか聞いてすぐ考えといてよかつたわあ。ふいー、危機一髪危機一髪」

乱雑な室内で、蝉脇が言った。よろよろと立ち上がり、インターフェイス接続回路が睨みつける。

「なんだよお。ひよつとして『読まれた…!?!』とか考えちゃってんの？笑えねえぞ？」

「チツ…ああああアアツ…!」

インターフェイス接続回路が踏み込んだ。狙い目は蝉脇の腕。

現代的なグローブに掴みかかり、分解　。

「バカかつ？」

蝉脇の嘲笑と共に、わき腹に蝉脇の膝が迫る。膝蹴りを仕掛けるつもりか。インターフェイス接続回路は直ちに人体分解の公式を発動させる。

「バカはどつち　　がッ!?!」

本来であれば分断されるはずの蝉脇の脚。それはそのままの形で、少年の脇腹を襲った。

…有り得ない。



「がはっ…！」

蹴り飛ばされ、横に置かれていた機材に突っ込んだ。バサバサと、その上にあつた書類が落ちてくる。

「少しは考えて行動しな。こちらはお前の性格、能力、癖、思考回路全部把握済みなんだよ」

蝉脇の蹴りが、インターフェイス接続回路の側頭部に浴びせられる。

「ぐっ…！」

苦痛に顔を歪めながら、彼は状況を整理する。

最初に仕掛けたのは突進しつつの頭を狙った分解攻撃。かわされたのは、単に蝉脇がこちらの考えを先読みしたということ。合点はいく。しかし、問題なのは次。

二度目は確かに蝉脇のグローブを掴み、浴びせられる膝蹴りに対して人体分解の公式を働かせた。

なのに何故、向こうの攻撃が通ったのか。

「答えを教えてやろうかー？」

ガシッと、屈んだ蝉脇が灰色の髪を掴み上げる。無理やり顔を上げられている状態だ。

「まずひとつ目。お前は能力を扱いきれていない。アクセラレータ一方通行とは違って、その都度意識的に演算しないと攻撃を遮断できないからな」

「黙れ！」

インターフェイス  
接続回路が蝉脇の脚に手を伸ばすが、あっさりとかわされ手を踏まれ、髪を放されて床に突っ伏す。

「ふたつ目。お前の能力は、どのレベルの分解でもその構成原子の種類数に応じてタイムラグが生じる。結合でも同じだな」

「ぐふあっ…！ぐっ！がっ…！」

蝉脇の脚が、連続で頭へと振り下ろされる。衝撃は固い床との間で倍増し、頭に激痛が走る。

「なら話は簡単だよ少年。複数の原子を複雑に組み合わせたアイテムを用意して、そいつを使って攻撃すりゃいい。仮にお前の分析が終わっても、分解そのもののタイムラグまでは変えられないからなあ。こつちがちつと頑張って攻撃して素早く戻せば分解できないだろ？木原がダチで良かったわぁホント」

蝉脇が手にしたグローブと、脚を軽く振った。おそらく、膝にも同様のアーマーのようなものを装備しているのだろう。もしくは全身に、複数の原子を組み合わせた密着型のスーツでも着込んでいるかもしれない。それを『人体』と考えて公式を使ったため、効果が得られなかったのだ。

…まだだ。まだこちらには手がある。直接接触れずとも、蝉脇を攻撃する方法が。しかし…。

インターフェイス  
接続回路の目が、蝉脇の背後のカプセルに据えられる。

下手に風を使えば、彼らまで巻き込んでしまうかもしれない。かと言って床を変換して鉄の刃を使えば、周囲の機材を巻き込んで、

いかにも生命維持装置を使っていそうなカプセルの子供に影響が出るかもしれない。大体、あの実験に乱入してきた少年でさえもかわせたのだ。カプセルに影響を出さない程度の粒子量では、容易にかわせるものしか作れない。

勝ち目が、ない。

続けざまに、蟬脇の蹴りが襲ってくる。ここ以外の場所ならいくらでも攻撃できるのだが、蟬脇は誘導になど乗らないだろう。

「おらおらどうしたあ！風でも何でも使って来いよお！」

「つぶあ…！」

入り口付近まで蹴り飛ばされ、少年が呻く。蟬脇は怪訝そうな目でこちらを見た後、

「…？ああー、そつかそつか。あそこの『皿』を傷つけたくないとか？いやあ、やっさしーなあお前はあ！」

「ぐぶつ…！」

仰向けになっていた腹に、強烈な一撃が降り注ぐ。

「なに正義に目覚めちゃってんのインタちゃんよお！能力しか取り柄のないお前にゃ似合わないってそんなの！」

キズいたモノが否定されていく。

ブツ殺してやりたくても、このブツ潰したい激情を奮わせても、

奴の掌の上。

だとしても。

「デメエにや…死んでも分かんねえよ!!」

諦めるわけにはいかない。

強烈な推進力を以て、蝉脇へと迫り、再びその顔面を狙う。迫ったところで、狙い目を、手段を誤ったことに気付く。

「…学習しろよ」

「うっっ…!」

ボゴツ!という鈍い音が頭蓋骨に響き、気が遠くなっていく。

再び床に落ちた接続回路を、インターフェイス蝉脇の脚が踏みつける。

「…ほんつとにムカつくなあお前…折角こつちが温和にに応じてやっ  
てんによお…ブツ殺してえなあマジでさあ」

「ぐ…かはっ…」

両手両膝をつき、呻く。俯いた目に映る床には、ポタポタと赤い血液が滴り落ちている。何故こんなに余裕がないのか。動揺しているのか? 蝉脇なんかには追い詰められているから?

「あの実験動物を傷つけない? ふざけてんのかお前。俺を殺したいんだろ? 殺して実験止めたいんだろ? ならあんなの気にせず」

ガンガン攻撃してこいよ！ム力つくんだよなあそういつの。くだらねえ努力しちやつてさあ。今更遅いんだよお前！今更奇麗事吐いてんじゃねえよ！お前は俺なんかより何倍も人間殺してんじゃねえかよ！…よし決めた、もう限界までブツ壊してやる」

怒声を発し、蝉脇が胸ぐらを掴み上げ、強烈な殴打を顔面に浴びせた。壁にぶつかり、座るように倒れ込む。

それでも、無闇な攻撃はできなかった。

殴られ、蹴られ、打ち付けられ、体はボロボロで、震えて立つのが精一杯だった。

「…ハア…ハア…」

「…お前さあ、親の記憶とかってある？」

呆れたように言いながら、蝉脇がインターフェイス接続回路の足を払う。無様に倒れ込み、苦痛に顔をゆがめる。

「ぐ…何…？」

「俺はこんなクソ野郎だけどさ、一応親の記憶はあるし、感謝だつてしてる。ここまで育ててもらったからな。けど、お前はどうか？記憶あるか？感謝してるか？」

蝉脇の言葉が、聞く気もないのに耳に入ってくる。親…。

(親の…記憶？んなモン…)

「あるわけないよな。』その親に『怖がられてココに放り込まれた

んだから」

蝉脇が語気を強めて言った。

…怖がられた？

自分は置き去りではないのか？やむを得ず、親が子供を学園都市チャイルドエラに放り込み、そのまま姿を眩ます、それではないのか？何なんだ？よくわからないが、体が何か反応している。

「お前は自分が人を殺してきたのは上から命令を受けて、だと思ってるだろ？違うんだよなあこれが」

…違う？ナニガ？

「お前は自分の意志で人を殺してんだよ。それも自分の母親をな」

「……ッ!？」

インターフェイス接続回路が目をもいた。体がびくびくと震え出す。

「お前は母親の腹から出るって時、なかなか出て来られなかったんだよ。何日間もな。平均の何倍って時間をかけてた母親の負担も相当なモンだったが、赤ん坊のお前にもすげえ負担がかかった。長時間頭を締め付けられたお前は、とうとう耐えられなくなって、発現させちまったんだよな…能力を」

「はっ…はっ…?」

体に感じたこともないような悪寒が走り、震えは広がり、動けない。

「お前は自分の体ひとつ分、母親の体に穴を開けた。『自分の身を守るために』な。母親は大量出血で死亡、父親もそんな化け物は育てられないつつつて、お前をウチに差し出してくれたってわけよ。どんな風に扱われるか知っててもな。んで俺と出会ったわけだ」

ガタガタと体が震える。痛みとは全く別の感覚が体を支配し、一切動けない。

震える顔を上げ、蝉脇を見上げる。

「は…はは…。だから…どおしたってんだよ…俺は…何千何万って人間殺してんだ…いま、今更、そんな話…テメエの…テメエの言うこと、なんざ…事実かもわからねえじゃねえかよ…」

引きつった、どう見ても無理に笑っている口元。まるで、あれだけ小馬鹿にしていた蝉脇に、否定して欲しいかのようなうだ。

それを悟った上で、蝉脇は告げる。

「体は正直だよなあ…見てみる、ガツタガタ震えやがって。お前は忘れてても体はしっかり覚えてんだよ」

…違う。

(俺は何万つて人間を殺してきたんだ今更母親を殺したなんて言われたところで関係ねえじゃねえか親に捨てられたのはココに居た奴全員だ俺が俺だけがじゃねえんだ仮にそれが事実だとしても俺には関係ねえじゃねえか……っ！)

否定する。

否定したい。

否定したい。

「滅多に居ねえよな…生まれる前から誰かを傷つけ殺して恐れられるような奴あ！」お前は生まれた時点で人殺しだったんだよ！」

蝉脇の、言葉が。

汚い外道のクソ野郎の、言葉が。

これ以上なくらいの鋭さを帯びて、少年のココロを串刺しにする。

「…あ」





\*

目を開けたまま、灰髪の少年が倒れ込む。  
蝉脇はそれを見てふつと笑った。

「あちゃー…やり過ぎたかな？まあいいか。脳みそと心臓さえありやあ許されるよな。ひひっ」

インターフェイス  
接続回路は何も言わない。気絶なんてレベルじゃない、強烈なショックが与えられたからか。たった今壊したモノになど見向きもせず、蝉脇は作業中だった脳へと。

「！」

パンツという銃声が響き、頬の皮膚をわずかに削がれる。蝉脇は音の方角に顔を向けた。

研究室の入り口に立つ、茶髪の女。

自分と同様白衣を身に付け、毅然としてこちらへ銃口を向けている。

その顔には、覚えがあった。

笑顔を作って、蝉脇が口を開く。

「おやおや？オバケ嫌いの志乃ちゃんじゃないの。駄目だよー、危ないモン振り回しちゃ」

「…その子に何をしたの…」

女 志乃の瞳には、身を案じた少年の姿が映っていた。蝉脇は笑う。

「何って？本当のこと教えてやったんだよ。まー、思った以上にシヨックだったみたいだけどさー。あれ？ひよっとしてキミまで正義の味方ぶるつもり？」

志乃は眉をひそめ、

「…そんな大それたものじゃないわ。ただ、その子を助けてあげただけ」

「助けてあげたい？無理無理。こいつは取り返しなんてつかないよ。なにせ赤ん坊のときから人殺してんだもん」

「それでも、その子は優しいわ。その事実を知ったのは今初めてかもしれないけど、その子は誰かを守るために、正しいことを模索してた。今までの自分に嫌気がさして、変わろうって思ったのよ。本当に極悪非道な子なら、今頃あなたは死んでいるでしょう？」

志乃が言い切る。蝉脇は不快そうに痰を吐き、

「暗部に堕ちた女がなに言ってるんだか。見た目上玉なら何でも何とかなできるとか思ってるの？汚い世界の人間が、汚い世界の人間救うなんて無理なんだよ。どっち道ドロッドロなんだよ」

「そうね。確かに私には、彼を引っ張り出すことなんかできないわ。それは彼が出会った、彼が守ろうとしてる子達の役目よ。私はその足がかり。ほんの手助けをするだけ」

きつぱりと、再び志乃が言い切った。蝉脇の顔に影が差す。

「あそう。女だからある程度紳士的に振る舞ってやりやあ調子に乗りやがって。ほんと苛々するんだよなあキミらみたいなの。…暗部は汚れてナンボだろうが！」

蝉脇が拳銃を取り出した。と同時に、志乃の銃が火を噴く。彼女の放った銃弾は正確に蝉脇の銃を跳ね飛ばした。

と同時に、志乃の背後から現れる、武装した集団。

アンチスキル  
警備員。

「蝉脇零掛！両手を上げて投降するじゃんよ！」

黄泉川の姿もある。駆けつける前に、志乃が呼んだ、違う道を行く親友。

「なに…ええいくそっ！」

蝉脇は走り、カプセルの陰に隠れた。

「もう逃げ道はないわ！投降しなさい！」

志乃の声が聞こえる。蝉脇は薄ら笑いを浮かべていた。

彼は床にあるレバーを回した。さらに地下への入り口だ。施設の構造はついさっきここに踏み込んできた警備員より遙かに理解して

いる。逃げることなど容易い。

ダダダツ、と。警備員アンチスキルが駆けてくる音がする。蝉脇は声を張り上げた。

「動くんじゃないねえ！！カプセルん中のガキ共ブツ殺すぞ！！」

「っ！！」

我ながら小物っぽい、と自嘲気味に笑い、蝉脇は脱出口へと入り込んだ。

\*

「インターフェイス接続回路！しっかりして！」

志乃が呼びかけるも、倒れた少年からは返事がない。目を開いたまま気絶している。いや、気絶とはまた違う現象かもしれない。

「早くその子を担架に！」

黄泉川が大声で促し、男性の警備員アンチスキル数名が少年を抱え、機械的な担架に寝かせる。

まるで死人にするようで気分が悪いが、志乃は少年の瞼を閉じさせた。

警備員アンチスキルたち数名が、彼を運び出していく。

志乃はそれを見ていることしかできなかった。

黄泉川が歩み寄る。

「まあ…大丈夫じゃんよ！あそこの医者センセイならなんとかしてくれるじやん？」

「…そうね」

志乃は蝉脇のデスクの上を見た。

たくさんの配線を繋がれた誰かの脳。

…何をしているのか、ある程度わかっってしまう自分が嫌だった。

「こんな施設がまだあるなんて…思いもしなかったじゃんよ」

志乃としては見慣れた景色だった壁面の『脳のショーケース』は、黄泉川にとって衝撃だったようだ。

どうして、こんなにも道を外れてしまったのだろう、私は。

志乃の瞳が、比較的原形をとどめる室内と、カプセルの中に居る子供たちを映す。

(そう…どうしても守りたかったのね…この子達を)

もう、手遅れだとも知らずに。

このカプセルは、細胞の自己死滅システム、アポトーシスを『異

常に『促進させる培養液が入っている。

本来アポトーシスは古くなったり外部からの刺激で破壊された細胞を消滅させ、代わりに新たな細胞を作り出す循環型のシステムだが、このカプセルは『消滅』だけがひたすら続けられるように仕組まれている。

新たな細胞が形成される前に、ところ構わず細胞を『消し去って』いくのだ。

これは確実に脳と心臓、両者をつなぐ管だけを保存するために作られた、悪魔のゆりかご。

もしもインターフェイス接続回路が中を覗き込めていたら、また違う結果になっていたのではないだろうか。

「黄泉川さん！ 蝉脇を見失いました！」

向こうから人が駆けてくる。確か黄泉川の部下の、才郷とか言う人だ。

「そうか。仕方がない。とりあえず施設を制圧するじゃん。志乃、あんたはもう行くじゃんよ」

「…。…え、ええ」

少しボーっとしてしまった。才郷に促され、志乃はその場を後にした。

以降、アンチスキル警備員の間で「蝉脇事件」と称されるこの事件は、一般に公表されることはなかった。

一人の少年を壊し、多くの子供達を弄んだ男は逃亡中という、不条理な結果を残して…。



どうも、櫻井です。

如何だったでしょうか。超展開っぽいですかね(汗  
自分でも少し反省はしているのですが、蝉脇は精神的に攻めるのが専門なので、かなり彼に嫌気がさしたかと思います。

主人公に起こる重大事件というのはこれですね。

章の冒頭で黄泉川を出したのは、志乃の友人であることやこうして駆けつけた際、表の立場での台詞を言わせたかったりで。芳川：は志乃と似て非なる感じで。彼女は駆けつけませんでした。

蝉脇の戦法は、能力をよく理解した上での状況・心理を利用した限りなく卑怯な戦法です。暴れまわることもできない接続回路を肉体的にも精神的にも追い詰めていくシーンはシナリオとしては自信作でしたが、文章表現は下手くそでしたね。精進します。

今回はまた病院に寝転がる主人公から始まります。

戦闘はないつもりです。

それでは次回、お楽しみに

4 - 9 手段 二ノ舞 (前書き)

「まったくミサカネットワークは大忙しだね、ってミサカはミサカは二人目の利用者が出たことを誇りに思ったり！」

システムリアルナンバー  
妹達認識番号20001号 打ち止め(ラストオーダー

い)

4 - 9 手段 二ノ舞

10月5日、AM10:30。

ハウンキャンセラ  
冥土ハウンキャンセラ歸しの元には、夕凧志乃、黄泉川愛穂、エクストラローラ多重観測の姿があつた。

その傍らには、呼吸器を装着され、穏やかな表情で眠っているタイフェイス接  
続回路。彼の診察が終わつたと聞き、駆けつけたのだった。

彼女らの方を向くことなく、ハウンキャンセラ冥土歸しは重い口を開いた。

「：重度の精神性ショックによる脳の活動停止だね」

『っ!?!?』

志乃たちが息を呑んだ。ハウンキャンセラ冥土歸しはデスク上のディスプレイを示し、

「この二つのグラフは、彼の脳波を表している。片方が完全に直線になっているだろう?これは所謂『体』の反応だ」

「体の反応?」

黄泉川が聞き返す。

「そう。ほら、よく反射神経と言って、熱いものを触ると自分が意識する前に手を引つ込めるだろう?あれと同じさ。彼の体は、精神的なダメージを最小限に留めるため、『停止』することを選んだんだらう」

「ということとは、今の彼は植物状態ということですか？とミサカは尋ねます」

「ああ。彼の体は、これ以上傷つくことを恐れて外からの刺激と精神とを切り離す選択をしたんだろっね」

冥土ヘウンキヤンセラ帰しの返答を聞き、多重エクスプロラ観測が俯いた。冥土ヘウンキヤンセラ帰しはそれを見て、少し眉を下げると、今度は下のグラフを示す。

「だが、こちらのグラフは通常どころか活発に動いている。これは彼の『精神』つまり彼自身の意識を示していると考えてくれ」

「『体』は目覚めることを拒否しているけど、『彼』は目覚めようとしているというわけね」

志乃が言うと、冥土ヘウンキヤンセラ帰しは「ああ」と頷いた。

もしも『彼』自身がもう『目覚めない』ことを希望しているのだとしたら、あるいはこのまま停止状態にする選択もあったが、『目覚めよう』としているのならば、その意思を尊重するべきだ。

「なんとか…できるじゃん？」

心配そうに、だが彼の意思を嬉しく思うように、黄泉川が尋ねた。  
冥土ヘウンキヤンセラ帰しはフツと笑い、

「僕を誰だと思っている？」

\*

インターフェイス  
接続回路の一報は、『スクール』にも伝えられていた。  
垣根がチツ、と舌打ちする。

「なに？新入り君が入院？」

彼の傍らには、年齢を考えれば「どうだろう…」と言いたくなるような服装の少女が居た。一見すると、やむを得ずホステスで金を稼いでいる学生、という感じだ。

「多大な精神的ショックによる脳の停止だと。肝心な時に居なくなりやがって…」

垣根がぼやいた。少女は少し考え、

「10月9日の独立記念日…その日に間に合えばいいんでしょう？」

「ああ。足折った腕千切れたくらいなら間に合っただろうがな。脳、そいつも精神性の停止となると厄介だ」

心配もそうだが、垣根は接続回路インターフェイス云々よりも計画変更の具合を考  
えていた。

「代わりに誰か連れてきたら？」マネジメント「人材派遣」でも使って」

「そうだな…」

『マネジメント人材派遣』は、犯罪組織などの非合法組織が人手不足だったり

行動する上で現状の人員では技術不足と言った際に要望に該当する人材を紹介する人物である。

暗部では利用されることも多い。

「…じゃあお前行ってこい。一番腕のいいスナイパーを一人だ。どうせあつちに用あんだろ？」

ソファにもたれ、垣根が言った。少女は垣根を見返して、

「いいけど。そっちは別件？」

垣根はしばらく宙空を見た後、

「ちよつとな」

と曖昧に答えた。あそ、と少女は頷いて、先に隠れ家を出ていく。

垣根はしばらくくつろぐと、おもむろに立ち上がり、戸口へと向かう。

「…第七学区だったっけ。あいつの病院」

\*

PM 4:50、エクスプローラ多重観測は打ち止めとラストオーダー一緒にインターフェイス接続回路の病室にいた。

相変わらず殺風景な室内。ここに有機的な特徴を見出すとするな

ラストオーダー  
ら、打ち止めが絵本を熱心に読んでいるくらいだ。

インターフェイス  
接続回路の首には、輪のようなものが装着されていた。一方通行  
の一例から作られ、その形はスポーツネットクレスに近い。停止した  
脳を動かすために、冥土帰しが用意したのは、電気信号を送ること  
で脳を覚醒させる装置だった。

これにより、日常生活に最低限必要な程度の覚醒率なら48時間  
活動できる。能力使用ともなると脳の覚醒率は全開にする必要があ  
り、活動時間は20分が限界となる。電気信号はミサカネットワー  
クのものを使用し、彼の頭脳を目覚めさせるための膨大な信号量を  
カバーする。

エクスフロラ  
多重観測は冥土帰しの説明を思い返し、接続回路の顔を見つめた。  
今はまだ装置は使っていない。ある程度脳波が安定するのを待つ  
のだそうだ。

見たこともないような純粹な顔で、接続回路が眠っている。

エクスフロラ  
相変わらずの無表情で多重観測が見ていると、不意に打ち止めが  
絵本を閉じた。

「なんだか懐かしいって、ミサカはミサカはぼやいてみたり」

「懐かしい？とミサカは突然ぼやいたあなたに問いかけます」

ラストオーダー  
打ち止めは頷いて、

「一ヶ月くらい前、あの人もこんな感じだったの、ってミサカはミ  
サカは思い起こしてみる」

あの人。一方通行のことだろうと、エクストローラ多重観測はすぐに理解した。

「この人もあの人と同じで、抱え込んだじゃう上に一人で何とかしたがるタイプだから、エクストローラ多重観測もちゃんと見てあげないと駄目だよ？ってミサカはミサカは姉のような目線で言い聞かせてみたり」

普段だったらしらつと来る態度なのだが、今は不思議とそれがありがたかいように思えた。エクストローラ多重観測は小さく頷いて、

「そうですね。ミサカもあなたのように、彼に付き添えればと思います、とミサカは上位個体の言いつけに対し首を縦に振ります」

言いながら、エクストローラ多重観測はインターフェイス接続回路の手を取り、体内電気の信号を計測する。

(あの医師が言っていた数値にはまだ達していない…)

「どう？エクストローラ多重観測、ってミサカはミサカは緊張気味に尋ねてみたり」  
リストオーダー打ち止めに言われ、エクストローラ多重観測はそつとインターフェイス接続回路の手を放し、安心させるようにぎこちなく口元だけ笑ってみせる。

「もう少しかかりそうです。でも大分近づいてきています、とミサカは微笑みながら告げてみます」

それを聞くなり、打ち止めはパツと表情を明るくし、

「早く話せるようにならないかなってミサカはミサカは心待ちにしてみる」



一瞬、よくわからない感情が胸を満たしたが、彼女の会いたい人が音信不通になっていてることを思い出すと、多重観測は胸を撫で下ろした。

しばらく見守っていると、不意に病室のドアが開いた。

二人の視線が、インターフェイス接続回路からそちらへ移る。

そこには、茶髪の少年が居た。

一瞬驚いたような表情をした後、穏やかに微笑む。

「なんだ、先客がいたのか」

彼は笑顔のまま、病室内へと入ってくる。エクスプローラ多重観測は反対側に立つ彼を見て、

「どちら様ですか？とミサカは念のため確認します」

「垣根帝督。こいつのちょっととした知り合いだね。怪我したとか聞いたから、見舞いに来たんだよ」

垣根と名乗った少年は、ベッドに横たわるインターフェイス接続回路を観察している。

「へえ〜っ！この人に一般人の友達が居るなんて意外！ってミサカはミサカは驚きを隠せずに居たり！」

「はは、そいつはどういう評価かな。…ん？」

垣根の瞳が打ち止めを映した瞬間、ほんのわずかに細められた気がした。多重観測はそれを見るや、この少年への警戒を強める。

「この子がどうかしたのですか？とミサカは怪訝に思いつつ尋ねます」

「…。君の妹さん？あんまり似ているからちょっと考えちゃってさ」

ははは、と垣根がその風貌に似合わない、爽やかな笑顔をする。

多重観測は警戒を緩めない。仮にこの少年の言うことが正しかつたとして、彼は間違いなく暗部の間人だ。研究員ならともかく、つい最近まで表にかかわりを持たなかった接続回路にこんな知り合いが居るとは思えない。

今だって決してそういうことに積極的なタイプではないのだから。

打ち止めも多重観測の思考を覗いたのか、ただただ口を閉じている。垣根は困ったように肩をすくめ、

「このままこうしていても仕方ないな。こいつが起きたら伝えといってくれない？」垣根が呼んでた』って」

「…わかりました、とミサカはあなたの要望に頷きます」

間をおいて、多重観測が頷いた。垣根は「ありがとう」と一言言い、病室を出て行く。ガチャンと扉が閉まったところで、多重観測は力を抜いた。打ち止めが口を開く。

「…ねえ、今の人なんなのかな、ってミサカはミサカは尋ねてみた

り

「…わかりません、とミサカは曖昧に答えてみます」

エクストラローラ  
多重観測の瞳が、インターフェイス接続回路を映す。

(…インターフェイス接続回路。ひよっとしてあなたは…)

少女の頭に、ひとつの可能性が浮かんでいた。

4 - 9 手段 二ノ舞 (後書き)

どうも、櫻井です。

結局は能力に制限を置きたかったわけです(汗)

これからどんどんチート化が進むわけですが、完全な状態でのチート化はさすがに嫌だったので時間制限を置きました。

同時に一方通行化も進んでいるわけですが…代理演算ではなく単に覚醒を促すというネットワーク利用です。パクリと言われればそれまでなんですけど(汗)

先に謝っておきます。杖使うかもしれませぬ。というか…使います。ごめんなさい(汗)

それでは次回、お楽しみに

章末特典 キャラクター紹介？ 蝉脇 零掛（前書き）

誰得とか思わないでください…（^^;）

章末特典 キャラクター紹介？ 蝉脇 雲掛

年齢 32歳

身長 182cm

体重 72kg

血液型 B型

来歴：

特例能力者多重遺伝子操作研究所所長。

10年前までは接続回路インターフェイスの専属研究員だった。現在も置き去りの子供達などを利用した非人道的な実験に手を染めている。  
木原数多とは親交があったらしく、彼のことを「ダチ」と称している。

容姿関連：

腰まで届く長髪。前髪をオールバックにしてそのまま低いところで結んでいる。

黒い背広の上に白衣を着ており、一見すると真面目な印象を受ける。

性格関連：

人間に無理をさせたり殺したりすることに一切の抵抗がなく、疲弊していようがなんだろうが構わず実験に利用する。  
死んだ子供の脳すらも抜き取って何らかの研究に使用している模様。

芯から腐りきつた外道であるが、表向きはおちやうけた態度であり、相手を小馬鹿にした態度が目立つ。

志乃の嫌いな事柄を記憶しており、他人のそういった事柄やトラウマはすっかり覚えている。

木原が一方通行に殺されたと知っただけでインターフェイス接続回路対策に特殊な装備を開発するあたり、なかなか用心深い性格といえる。

戦闘能力：

無能力者だが、何かしらの体術を習得しており、インターフェイス接続回路の体を吹っ飛ばすくらいの力がある。

ことインターフェイス接続回路に至ってはその能力や性格を熟知しており、心境の變化すら察知して心理面から彼を追い詰め倒している。

状況や心理を利用した心理誘導による相手の自滅を促すことを基本戦法としており、殴打などはダメージを与える目的ではなく相手を焦らせ、演算を妨げるために行っている。

章末特典 キャラクター紹介？ 蝉脇 雲掛（後書き）

CVイメージ：竹本英史



5 - 1 回復 目覚メル運命(さだめ) (前書き)

「クソガキに命握られることになるなんてな」

壮絶な過去を背負った超能力者(レベル5)

路イ  
ス

接イ  
続ン  
回タ  
エ

5 - 1 回復 目覚メル運命(さだめ)

10月6日、AM7:15。

「…っ…」

灰色の髪が静かに動き、閉じていた瞼がわずかに開く。

(…。ここは…俺の病院か?)

何だか変な気分だった。自分が見ているはずなのに、どうもハッキリとした感覚ではない。

寝ぼけているわけでもなく、頭は透き通るようにすっきりしているのに、どこかいつもと違う感じがする。

ふと、インターフェイス接続回路の視線が、二人並んで自分のベッドに顔だけ突っ伏している、エクスポローラ多重観測と打ち止めに注がれる。

(コイツら…)

少し微笑ましく思えた。

彼女らを見ていると、『スクール』で仕事をしている甲斐があったと誇れるような気がする。

こうして、彼女らが平穩に生活しているのだから。

…『スクール』?

「蝉脇はっ!?!」

ガバツ、と身を起こす。すると。

「どうかな？調子は」

エクスタゾローラ  
多重観測たちの反対側から、静かな年配の声が出た。接続回路が  
インターフェイス  
そちらを向く。

居たのはもちろん、ヘウンキャンセラー  
冥土帰した。

「…オマエか」

「どうやら、上手くいったみたいだね。いろいろ大変だったんだよ」

「何がだ」

一人満足した様子のヘウンキャンセラー、インターフェイス  
接続回路は尋ねる。

「なんとなくわかっていているとは思っけど、今の君は機械の補助を受けて動いているんだ」

「機械の補助？」

「蝉脇に何を言われたのかまではわからないけど、君の脳は今、自衛のために活動を停止している状態なんだ。君がこうして考えたり話したり動いたりできるのは、首のその装置が脳に活動を促しているからさ。ミサカネットワークからの電気信号を受信して、脳を覚醒させている状態だね。」

インターフェイス  
接続回路は特に驚くことはなかった。なんとなく、首につけられたスポーツネットクレスのような装置に触れてみる。

彼は静かに苦笑した。

まさか、守るべき存在に守られることになるうとは。

情けないとは思うものの、今更他の手を考えていては時間が掛かる。

「ますますどつかの第一位みてえになつてくな。俺、もしかして呪われてんのか？」

「まあ、彼の前例のお陰で早急に処置できたんだけどね。今は通常モードといって、日常生活をする上で最低限の状態だ。能力は使えないから気をつけるようにね。多分自力では立てないだろうから、出歩くときはその杖を使うといい。通常モードなら、48時間は行動可能だ」

説明を聞きながら、面倒そうに頭をかく。

「能力は？使えねえわけじゃねえよな」

インターフェイス  
接続回路の質問に、ヘウンキャンセラー 冥土帰しは困ったように眉を下げた。

「使えるとも。だが、能力使用には脳の覚醒率も最大限に引き上げないといけないからね。そうなるとバッテリー消費が大きくなって、最大でも20分しか活動できなくなってしまふんだ。だからあまり無駄遣いはできないよ」

「上等じゃねえか。…仮にコイツのバッテリーが切れちまったらどうなる？」

「植物状態。呼吸、脈拍以外の全ての体機能が停止する。ついさっきまで、君はそんな状態だったんだよ」

ヘウンキャンセラー  
冥土帰しの声が、厳かに響き渡る。 インターフェイス  
接続回路は目を細め、

「…なるほどな。バカー一匹殺り損ねた返りは思ったよりデケエみてえだ」

「…蝉脇は今のところ行方不明。特力研は警備員アンチスキルによって制圧・解体。手つかずで管理されていた子供達は孤児院へ。リスクはあまりに大きかったけど、君の望みは叶ったんじゃないかな？」

どこでそんな情報を、と突っ込みたいところだが、前々からこの医者はこういった事情に詳しいことを思い出すと、彼は小さく嘆息した。

「…まだ一番ヤバイモンが残ってたよ。施設なんざ、人間が余ってりゃいくらだって作られんだ。俺の居た特力研がブツ潰れたところで、蝉脇ソフトつう人間ソフトが生きてる限り、施設ハードはいくらだって湧いてきやがる。まずはあのクソ野郎から潰さねえと…」

「蝉脇一人だと思うのかい？」

「いや。多分暗部を探れば腐るほど居るんだろうな、あの手のクズは。手当たり次第に潰してく。蝉脇以外に、俺への対策を練って尚且つ実行するような奴ア少ねえだろ。…蝉脇さえ潰せば、後はスムーズに進んでくるはずだ」

「君にしては、ずいぶん楽観的だね」

冥土帰しが言う中、インターフェイス接続回路はベッドを降りた。

…確かに平衡感覚が狂っている感がある。  
認め、彼は立てかけてあった杖をとった。慣れないせいか、どうにも違和感が残る。

「少しはポジティブに考えねえとな。暗部で下手にネガティブな考えなんかとってみる。何一つできやしねえ」

カチャカチャと杖をつき、具合を確かめる。

「彼女たちのためだとは承知しているけど、あまり無理はしないようにね」

言いながら、冥土帰しが部屋から出て行った。インターフェイス接続回路が再び嘆息する。おもむろに自分の携帯電話をとって、メールボックスを確かめる。

何通か来ていた。

どこかの通販の勧誘、携帯会社からの通知メール、そして、志乃からのメールだ。

(あの世話焼き…一体何を…)

カーソルを合わせ、閲覧する。

しばらくビッシリ埋められた文面に目を通して、インターフェイス接続回路は嘆息した。

書かれていたのは、蝉脇の研究室で倒れた後の事、つまりインターフェイス接続回路が知り得なかつた情報だ。

大半は冥土帰しに教えられたことだったが、わずかだが初耳の情報もある。

『スクール』に関する事だ。  
時計を確認する。まだ8時にもなっていない。

(垣根の奴は俺がこうなってること知ってるのか…？いや、知ってるだろうな)

ひとまず顔を出した方がいいかもしれないと、インターフェイス接続回路がベッドから立ち上がるうとして  
その場で立ち止まった。

視線の先には、二人の少女の姿。

こうして目覚めるのを待ってくれていたのに、寝ている間に姿を消すなんていうのはどうなのだろう。

多分、良くはない。

……。

(…もう少し後でも構わねえか…)

彼は杖を立てかけ、再びベッドに寝そべった。一番大事なものを疎かにしては、本末転倒というヤツだ。すっかり暗部優先に考えてしまっていた。全盛期の癖だろう。

しばらく機械を介してどの程度思考できるか考えていると、

「あぁっ！目が覚めたんだね！ってミサカはミサカは喜んでみたり

！」

静かで無機質な病室に、確かな「色」が加わった。  
ラストオーダー  
打ち止めがうるさかったのか、横の多重観測も目を覚ます。

口には出さないが、確かに感情が顔に出ていた。

「うっせえぞクソガキ。朝っぱらからデケエ声出してんじゃねえ」

インターフェイス  
接続回路の第一声はそれだった。そんな粗暴な言葉でも、二人は嬉しそうに笑っている。丸一日以上植物状態だったのだ。「喋っている」だけでも彼女らにとっては大きな意味を持つのかもしれない。

「装置の調子はどうですか？」とミサカは念のため聞いてみます」

エクスポローラ  
多重観測が心配そうに尋ねてくる。インターフェイス  
接続回路はぶっきらぼうに、

「あん？心配いらねえよ。聞いての通り依然問題なきこと極まりない…！？」

インターフェイス エクスポローラ  
接続回路と多重観測が、明らかな言語の異常に気付く。

「み、ミサカは装置の明らかな異常に驚愕します…とミサカは早急な対応の必要を指摘します！」

「いや待たれい！つい先までこのような不埒かつ怪異な事象起こりけりなし！」

「い、言っている意味は良くわかりませんが…直ちにあの医者を呼んだ方が良さそうですね、とミサカは行動に移す前に確認をとりま



す

「承認！風が如くあやつをお呼び！…ん？なんだ？元に戻って…」

上手く頭が回らなかったのが、急にすっきり働くようになった。

言語も元に戻る。

一体どうなっている？

(…いや待て。あの医者は『ミサカネットワークから電気信号を受信して停止した脳の覚醒率を向上させてる』つつつたよな。つうことはまさか…)

インターフェイス  
接続回路の視線が、二人のあたふたする様子を見て笑っているラ  
ストオーダーち止めに注がれる。

彼女は「いや〜」と頭をかいて、

「あの人の時はできたんだけど、あなたの場合はどうなのかなって思っ  
て試してみました〜ってミサカはミサカは…て、んぎゃ〜っ！  
！なんでいきなり頬をつねるの多重観測〜っ！！ってミサカはミサ  
カは〜っ！！」

「…悪戯が過ぎるようなので罰を与えます、とミサカはあなたに冷  
徹な視線を向けます」

「…このクソガキが…」

眉間に手を当てて、インターフェイス接続回路が呟く。

彼女に対して恩を感じるか否か、考え物だなど、復活した思考能力の中考える。

しかし、こんな日常を守ることが、自分の選んだ道なのだ。

そこに後悔はない。

改めて決意し、和気藹々と頬を張り合っている二人を見つめた。

…そんな日常の裏で、たくさんの陰が蠢いていることを覚悟して。

どうも、櫻井です。

主人公復活ということで、珍しくコメディエンド的なものを狙ってみました(笑)

どうにも語彙が少なくて原作みたいな言語障害ができませんね。古風な言い回しだったらいくらか出てくるのでそれメインで組みました。

一度切っておかないと凄く長くなりそうだったので、予定変更で五章突入です。本章で15巻の内容をクリアする方針で居ます。

自然と垣根のシーンが増えたりするのかな?まだ思案中ですが。

それでは次回、お楽しみに

5 - 2

反逆

裏切り

(前書き)

「システムリアルナンバーまたしてもお留守番なのでね、エクスプローラとミサカは嘆きます」  
妹達認識番号 10412号 多重観測

5 - 2 反逆 裏切り

10月9日、早朝。

垣根帝督は椅子から立ち上がった。その表情は昏く笑っている。

全ての準備は整い、後は実行するばかりだ。

自分が目指すべきは第18学区の素粒子工学研究所。

昼に講演が行われる予定の為政者、親船最中を狙撃する裏で、研究所の機材の一部を盗み出す。その際、『ブロック』の連中の動きもある程度読め、相互に利用し合うことでこの良き日に複数の事件を起こせる。『本命』を割り出すまでには時間が掛かるだろう。

盗み出した機材から得られる情報から、未だ知り得ぬさらなる暗部を探り、総括理事長…アレイスター・クロウリーへと辿り着く。

目的の再確認は完璧だ。

「さんざんこき使われて来たからな。喉元食い千切られる気分ってヤツを堪能してもらおうじゃねえか」

垣根は決意を込めて言い放ち、屋外へと出て行った。

\*

朝ののんびりした陽射しに目を細め、エクストラローラ多重観測は冥土帰しと共に  
病院のタクシー乗り場に来ていた。  
彼女の傍らには、ラストオーダー打ち止めの姿がある。

9月30日、『0930事件』と呼ばれる事件で木原数多率いる  
ハウンドドッグ「獠犬部隊」に連れ去られ、脳内に特殊なデータウイルスを入力さ  
れた少女である。

彼女の頭にあつたウイルスの駆除が終了し、ようやく退院するこ  
とになったのだ。

「うーん、せつかくの退院だというのに、誰も迎えに来ないとはね  
？」

ヘウンキャンセラー冥土帰しは呆れたように言った。

学園都市の独立記念日である今日は、基本的には祝日であり、都  
市に住む学生は今頃穏やかな朝を迎えているはずだ。

彼女の引き取り手と言えば陽気な警備員アンチスキルか職探し中の元研究員か、  
はたまた演算能力を失った超能力者しかない。

元研究員くらい来ても良さそうだがと、年配の男は小首を傾げる。

「ミサカは一人でもタクシーに乗れるもん、ってミサカはミサカは  
胸を張って宣言してみろ！」

打って変わって、当の本人は気にした様子もなく、腰に手を当て  
て平坦な胸を張っている。

ヘウンキャンセラー冥土帰しはそうかい、と笑って、

「まあ、頭の中のウィルスは完璧に駆除できたし、もう心配はないんだけどね」

「タクシーが来たようです、とミサカは注意を呼びかけます」

エクスプローラ  
多重観測が言つと、ちょうどロータリーにタクシーが入ってきた。

ヘウンキャンセラー  
冥土帰しは手を上げてそれをつかまえ、荷物を抱える打ち止めを  
後部座席へと乗せた。

ラストオーダー  
運転手が顔を出し、打ち止めの行き先などを告げる中、エクスプローラ  
多重観測は後部座席の打ち止めと話していた。

「またね、エクスプローラ多重観測！つてミサカはミサカは別れを惜しんで挨拶してみたり！」

「はい。またすぐに会えるでしょう、とミサカは軽く手を振って応えます」

もつとも、ミサカネットワークである程度の会話は可能なので、特に意味もないことなのだが。

「では、宜しく頼むよ」

ヘウンキャンセラー  
冥土帰しが運転手に言つと、タクシーはゆつたりと発進した。後  
ラストオーダー  
ろの窓から、打ち止めがこちらに手を振っている。

二人でそれを見送り、病院内へと入っていく。

「君たちの調整も早く済ませないとね。先に検査室へ行っていてもらえるかな？」

「問題ありません、とミサカは即答します」

言いながら、エクストラローラ多重観測はスタスタと歩いていった。

ハウンキャンセラ冥土帰しはそれを見て、ふむと顎に手を当てる。

朝早くにインターフェイス接続回路がいなくなっていて、少々心配しているようだ。暗部組織に関わっていることは口止めされているから、無闇に行き先を言うこともできない。

もっとも、それはアクセラレータ一方通行と同様なのだがー。

不意に、ゴツッ、という鈍い音と共に、背中に固いものが押し付けられた。

振り返らずとも、その呼吸の仕方などからある程度の見当がつく。

「アビニオンからはもう帰ってきたのかい？」

「チッ。どこからそんな情報を仕入れて来やった」

聞き覚えのある声と口調。

ハウンキャンセラ冥土帰しは答えることなく、ふっと静かに笑って見せた。

それは、たった今この病院を去った一人の少女が、会いたがっていた人物。



『演算能力を失った超能力者』だった。

\*

AM11:45、第七学区コンサートホール前会場。

現在ここでは、総括理事会の一人、親船最中おやふねもなかの講演が行われている。

接続回路インターフェイスは杖について、ちょっとした学校の文化祭のような簡素な舞台の傍にいた。辺りは二、三百人の学生が埋め尽くしており、退屈な初老の女性の話を聞いている。

接続回路インターフェイスが垣根から与えられたのは、どこかからあの為政者を狙撃する予定らしいスナイパー、砂皿緻密の作戦遂行を見届けることだ。さすがに杖をつくような役立たずには滅多な仕事は任せてくれないらしい。垣根や他のメンバーは『本命』の元へと向かっている。結局、為政者一人の命を狙う行為は『罔』に過ぎない。

その『罔』任務に加え、おそらく調べをつけて群衆に紛れ込んでいる『グループ』の捕捉も命じられている。

比較的退屈な仕事ではある。

快く引き受けたものの、接続回路インターフェイスはそこまで乗り気ではなかった。

『スクール』に籍を置いたのはあくまでも学園都市存続のため

妹達の居場所を守るためインターフェイスであり、その『スクール』が反

乱分子と化すのであれば、接続回路インターフェイスは鎮圧する側につきたいところだ。

どの道、寝たきりになった場合の手も考えていたらしいし、今回にしたつて『あー、じゃあお前ここのな』みたいな軽いノリで配置されていた。おそらく、一度立てた作戦を組み替えるのが面倒だったのだろう。折角効率のいい作戦を思いついたのだ、超能力者とはいえ弱体化したメンバー一人のために崩す気にもなるまい。

できることならさつさと『スクール』を抜け出したいところだが、安いバイトじゃあるまいし、そう簡単に抜けられるものでもない。真面目に学生達が親船の講演を聞く中、インターフェイス接続回路は退屈そうに、壁に寄りかかった。

その瞬間。

バズッ、と。インターフェイス接続回路は妙な音を聞いた。

正確に、音のした方向を見て、目を凝らす。

(…砂皿か)

『ウインドディフェンス妨害気流』。要人が野外活動などを行う際は、その周囲の宙空に突風を発生させる装置を設置することが多い。風の影響を受けやすい弾丸の軌道を逸らすためだ。

どうやら『ウインドディフェンス妨害気流』そのものが破壊される事までは考えられていなかったらしい。砂皿と一緒に『スクール』が買い取った磁力狙撃砲の弾丸が、静かにひとつひとつ『ウインドディフェンス妨害気流』を停止させていく。

(学生に選挙権…か)

砂皿の行いを頭の片隅に追いやり、インターフェイス接続回路は親船の語ったおめ

でたいお言葉について考えていた。

たかが一個人が喚いたところで、都市どころか集団も変わりはない。

だが多くの人間が賛同し、共に訴えた場合は違ふ。いつの時代も、結局覇権を握り締めるのは多くの賛同を得た者だ。

心理的なものなのか、例え正しいことを喚く人間が一人居て、それに賛意を示したくとも、人間は数の多い方につきたがる。

ここに集まっている学生たちも、『表』の学園都市しか知らないからこそ真面目に親船の話聞いてはいるが、都市の本当に暗い部分を知れば、こんな話に聞き入ったりはしないだろう。

闇を這い回ってきたインターフェイス接続回路でさえも掴みかねる、あまりに深い学園都市の暗部。

選挙権があっても、そんなものを相手にすると知れば誰も受けやしない。親船は暗部というものについて深くは知らないのではないだろうか。

(全部潰し終えたみてえだな…)

インターフェイス接続回路の瞳が、完全に停止した『ウィンドディフェンス妨害気流』を映す。

その刹那。

ドゴオツ！！という轟音と共に、ホールの一角が爆発した。

会場が震え、集まっていた学生が蜘蛛の子を散らすようにホールから離れ、親船最中がSPに守られながら腰を屈める。

ちょうど彼女の頭があつた位置の壁に、弾痕が刻まれる。

それを見た後、インターフェイス接続回路の瞳は緩やかに動き、爆炎と煙が立ち上る一角、『サウンドディフェンス妨害気流』を搭載していた特殊車両を見て、ぐわつと見開かれる。

目に映つた光景。

炎上する車両のすぐ近く、杖をつき、炎を背にして、ホテルの一室を睨みつける白い少年。

アクセラレータ  
(一方通行…ッ！)

思わぬ人物の出現に、灰色の少年は息を呑む。

砂皿はもういない。

「あの野郎、『グループ』に居やがったのか！」

アクセラレータ  
一方通行はあつという間に群衆の中に入っていき、その姿を眩ました。

「チツ…」

インターフェイス接続回路は舌打ちし、ひとまず地下街へと入り込む。穏やかな講演会が事件現場になつた以上、ここに長居する理由はない。

(『グループ』に接触する方法…)

今の『スクール』に未練はない。

足早に　　と言っても大分遅く　　歩きながら、インターフェイス接続回路は

目的を、『グループ』に繋がることに置き換えた。

5 - 2 反逆 裏切り (後書き)

どうも、櫻井です。

15巻の内容に無理矢理入り込みました(汗  
空気とまではいかないにせよ、今回主人公の活躍の場は微妙だっ  
たりします。

一応『スクール』のメンバーとされているので、またしてもひと  
悶着あつたりしますが。

基本的に垣根視点で物語は進行します。垣根と接続、最後の方で  
は一方視点が入るかもしれませんが。

それでは次回、お楽しみに

5 - 3

強襲

道具ト反逆者

(前書き)

「あの顔で雑誌に載ってみろ。憧れなんて抱けやしねえだろ」  
『スクール』のリーダーにして総括理事会への反逆者

垣根帝督

第18学区、素粒子工学研究所。

垣根帝督は悠々と微笑を浮かべ、ポケットに手を入れて施設を歩く。

さすがに先端技術の粋を集めた施設だけあって、セキュリティもなかなかのものだったが、『スクール』の手を持ってすれば何のことはない。

施設内には垣根を含め、二人のメンバーが入り込んでいた。

圧力操作系能力を有する少年だ。彼とは入り口で別れ、今は二手に分かれて『本命』を探している。

「さあてどこにあるかな……」

ぼやいた垣根の目の前に、この施設のガードロボットが現れた。ずんぐりした体躯に無骨なライフルを装備して、歩くというよりはホバークラフトを利用してつるつるした床を滑っている。

『侵入者ヲ捕捉。強制排除二……』

言い終わる前に、ロボットは眠るように崩れ落ちた。

無機質な廊下に、これまた無機質な物体が転がる。

垣根が何かをしたのだらう。彼はロボットをそのままに、先へと進む。

素粒子工学と言う技術。文字通り、研究対象は世界を作り上げる



微細な粒子。そのためには、その粒子を調べる機械が必要になる。

垣根が探しているのはその粒子を調べる機械、より正確には、原子よりも小さな微粒子を掴み、その情報を計測する機械だ。

名を『ピンセット』という。

あの今や機械に頼らなければ動くことすらできないガラクタ人間も、原子より小さな世界を操る人間だが、彼も素粒子に混ざる、『知り得ない異物』に対しては無力だ。

故に、その『ピンセット』は重宝できる。

垣根は笑みを絶やさず、邪魔な扉や壁を謎の爆発で吹き飛ばす。

事前に頭に入れておいた施設の間取りを反芻しつつ、彼はただ『歩く』という行為だけで道を切り開いていく。

常識に縛られない、唯一無二の超能力、『ダークマター未元物質』。

そのトリガーを手にする少年を、阻める者などここにはいない。

「……っと。見落とすところだったな」

垣根は数歩後ろの通り過ぎた扉に目を向ける。無理矢理爆発を起こし、強引に中へと入り込む。そこには数人の人間が居た。警報が絶えず鳴っているからとつくに逃げているものと思っていたが、どうやらそういっわけでもないらしい。

「き、君が侵入者……か？」

数人の内の一人、初老の男性が、言うまでもない質問をしてくる。垣根はフツと笑って、

「『極力』あんたらに手を出すつもりはない。おとなしくそいつを渡してくれないか？」

壁を破っておきながら、垣根はにこやかに告げた。

「『ピンセット』は我々が開発した精密機械だ…こんなもの、学生の君が盗んだところで使い道が…」

「口答えしねえでさっさと渡せよクソ研究者」

男性が言い終わる前に垣根から表情が抜け落ちた。

それに恐怖したのか、研究者たちは一目散に逃げていく。垣根は追うことなく、静かな表情で『ピンセット』を確認する。

思っていたとおり、その機材は小型のクローゼットほどのサイズで、持ち運ぶには少々面倒そうな品だった。

「さーて、始めるか」

垣根はゆったりとした動作で携帯電話を取り出した。

運び出す雑用は、垣根帝督の仕事ではない。

\*

研究所の管制室で、垣根は積み荷の積み込み作業を見守っていた。

下の階では、こちらに付いた下部組織の人間が『ピンセット』をステーションワゴンに積み込んでいる。

「…あ？」

不意に、垣根の瞳が数あるモニターのひとつを映す。

「へえ」

感心したように垣根が笑った瞬間、彼の頭の数十cm横、モニターのひとつに、青白い光線が突き刺さった。

彼はゆっくりと振り返る。

「ずいぶん早めのお出ましだな、『アイテム』」

振り返った先に立っていたのは、三人の少女だった。

「第二位…！」

内一人、パツと見どころかのファッションモデルのような容姿と服装の少女が息を呑む。

垣根はそれを見て、

「マルチタワー第四位の原子崩し…：麦野沈利か。それに…？」

彼の瞳が、麦野の左右に立つニットのワンピースの少女と、女子運動部が着そうなジャージに身を包んだ少女を映す。

友好的に話をフツたつもりだが、二人の少女は何も言わない。垣根は視線を麦野に戻す。

「反乱分子の掃除に来たのか？さすがは『アイテム』、文字通り理事会の道具だな」

挑発するように垣根が嘲笑うと、端正だった麦野の顔が激情に歪み、驟雨のように光線を放ってくる。

垣根は笑いを絶やすことなく簡単に手を振るう。すると放たれた光線は緩やかな弧を描き、大きく逸れて壁や天井を突き抜いた。

「チツ…！」

麦野が唇を噛み、垣根の能力に後ろの二人も驚愕を露わにする。

「仕事熱心なところ悪いが、俺も暇じゃないんでな。片手間でしか付き合わねえぞ」

それはつまり、片手間で麦野沈利を相手にできるという事だ。

「ツ！！ふざけんなよクソ馬鹿ア！！」

侮蔑されて腹が立ったか、麦野が叫び、続けざまに光線を照射する。垣根は軽々とそれを回避しながら、ちらと生き残っているモニターを見る。『積み荷』の積み込みは終わったようだ。後は垣根がワゴンに向かえば、この施設に用はない。

「汚ねえ面だな第四位」

垣根は地面を蹴り、時に動きを止めたりしながら麦野の攻撃を確実に避け、彼女の攻撃に合わせて移動していたニットの少女へと迫る。

「っ！」

彼女に振るった拳が、ギリギリで止められる。

(防御された？…なるほどな、大気操作系能力者か)

レベル4以下の能力者などいちいち頭に入れてはいないが、その性質は一瞬で見破れる。

相手の防御力まで考えるのは面倒だ。大体目的は『アイテム』の撃破ではない。潰しておけば後が楽だが、こうしている間に『積み荷』を奪還されてしまつては元も子もない。

彼は説明不可の爆発を起こし、ニットの少女を吹き飛ばす。立ち上る黒煙である程度は麦野の視界不良を引き起こせるだろう。

その間に垣根は出口へと駆ける。

黒煙に穴をあけて青白い光線が進るも、彼は振り返ることなく『積み荷』の待つ車両を指摘した。

\*

アクセラレータ

一方通行は第23学区に居た。

第七学区コンサートホール会場、今は親船最中襲撃事件現場となつた場所から離れ、彼を含む『グループ』は昼食を食べ終えて今後の調査方針について話し合っていたのだが、第五学区のウィルス保管センターがクラッキングを受けているとのこと、予定を変更しそちらへ向かっていた。

いざ第五学区に入るといふ時、今度は第23学区の衛星管制センターがクラッキングされているという報告が飛んできた。

ウィルスは未解析のものや実験用の試作品が都市はおるか都市外にまで流出する可能性があり、衛星管制センターが管理する地上攻撃用大口径レーザー砲が装備されている。

どちらか片方でもクラッカーの手に渡れば、ただでは済まない。

『グループ』のメンバーもどちらへ向かうべきか決めかねていたところ、一方通行は独断で23学区を指すことにしたのだった。

目標は衛星通信の大規模地上アンテナ。それさえ壊してしまえば、仮にクラッカーがセンターを乗っ取ったにしろ、衛星の操作には及べない。

(『スクール』…そして『ブロック』…)

一方通行はさつき強引に掴まえた『臨時タクシー』の中で、同じ『グループ』のメンバー、海原光貴うなはら みつきの話の思い出していた。

てつきりこの一連のクラッキングは『スクール』によるものかと思っていたのだが、どうにもクラッキングは『ブロック』によるものだったらしい。目的は都市への『新入生』を迎える幼稚園や小学校のある第13学区の掃滅。長期間かけて学園都市を殺す計画のことだ。

しかも間の悪い事に、その第13学区には今も『グループ』の土御門元春ちみかともはると結漂淡希むすじめ あわきが向かっている。偶然に過ぎないのだが、『グループ』の主要メンバーをも排除できる。

(まアそれも…)

彼の目の前には、巨大なアンテナの姿があった。

(こおしちまえばお終いなんだがなア…！)

膨大なベクトルを伴った彼の拳が、一撃でアンテナを粉碎する。バチバチと火花を散らして爆発する巨大アンテナ。動かない巨人的なを壊すのは、あまりに他愛のないことだった。まださつき戦った他力本願空間移動系能力者の方が頭の使いようがあったというものだ。

(これで、後問題になんのはウイルスだが…)

杖をつき、彼は施設内に入り込むと、ベルトの拳銃を引き抜き、その銃口を扉の陰へと向けた。

ガツ、と。固い何かが銃身にぶつかる。

目を向けて、彼は目を見開いた。

まるで鏡を見ているような気分だった。

自分と同じように杖をつき、自分と同じように銃を向け、自分と同じように妙な装置を首にした、瓜二つの人影。

「…よお。久しぶり…か？」

若い低い声が、人影の喉から這いだしてくる。

「オマエ……」

灰色の長めの髪。血のような緋色の瞳。

この少年には、覚えがある。

「インターフェイス  
接続回路……！」

低い、アクセラレータ一方通行の音が、乾いた空気を伝わった。

少年は、静かに笑う。



どうも、櫻井です。

原作では描写のなかった未元物質VS原子崩しです。垣根は原作でも一時撤退したようですので、下手な描写はせず、原子崩しがどんなものか見た目にわかる程度にしました。この時点の垣根は消極的だったと思うので、受け中心です。曲げて突き抜けた光線が原作で浜面が見たビームです。

前書きのコメントは麦野の顔芸についてです(笑  
ファッションモデルのような外見ということだったので…。

前書きはほぼ無法地帯ですのでキャラ崩れもお許しください(汗  
ようやく二人が顔を合わせられました。ここまで長かったです…。

垣根視点、接続視点、少しだけ一方視点で展開しているので、『  
ブロック』の描写はほぼ無いです。そちらは原作本をお読み下さい。

それでは次回、お楽しみに

5 - 4

協定

交ワサレル意思

(前書き)

「男同士っていいわね」

暗部に堕ちた研究員

夕凧志乃

「あの子達は似ているから」

職探し中の元研究員

芳川桔梗

「あなた達にも同じことが言えるのでは？とミサカはツッコンで  
ます」

シスター・マリアルナンバー  
妹達識別番号10412号

エクストローラ  
多重観測

5 - 4 協定 交ワサレル意思

「オマエ…その装置は…」

お互い銃を向け、彫像のように固まったまま、アクセラレータ一方通行が口を開いた。その視線はインターフェイス接続回路の首に装着された装置に向けられている。

「俺にも色々あってな。コイツがなけりやそこらの草みてえになっちまう体だ」

静かに、インターフェイス接続回路は答えた。アクセラレータ一方通行は続ける。

「そのオマエが何だってココに居る。まさかオマエ…」

「惜しいな」

続きを聞くことなく、インターフェイス接続回路は呟いた。

「俺は『スクール』だ」

「ッ！」

アクセラレータ一方通行が目を剥いた。ここに居たことから、あの空間移動系能力者と同様、新たに出てきた勢力『メンバー』かと思っただが、それ以上だった。アクセラレータ一連の事件を引き起こした反逆組織だ。努めて冷静さを取り戻し、アクセラレータ一方通行はインターフェイス接続回路と出会った日、9月30日の状況を思い出す。

「…オマエもあの日に回収されたってワケか」

出た可能性を、問いかける。 インターフェイス 接続回路は薄ら笑いを浮かべ、

「勤がいい奴ア楽でいいな。デケエ借金を請求されてる。オマエもどこかの暗部組織に組み込まれたって聞いて、ちつと疑問に思ったが…少し考えりゃ分かることだったな」

間をおいて、 インターフェイス 接続回路が続ける。

「オマエも妹達… シスターズ ラストオーダー 打ち止めの為にやってんだろ？」

インターフェイス 接続回路の指摘を受け、 アクセラレータ 一方通行は目を見開いた。  
正否を確かめるには十分だ。

「学園都市がブツ潰れば、アイツらの居場所が無くなっちまうからな」

「…オマエの言い分はわかった」

インターフェイス 接続回路も自分と同じ条件で暗部組織に入ったことを理解すると、  
アクセラレータ 一方通行は静かに銃を下げた。

「その上で、オマエは俺に接触してどオするつもりだ」

「情報提供だ」

短く、 インターフェイス 接続回路が答える。

「信じると思うか？」

「どつだろつな。オマエの思考パターンなんぞ、推測はできても特定はできねえ」

よく言う、と一方通行は思っていた。アクセラレータ

木原と獵犬部隊の一件では苛立つほどに当ててきたくせに。ハウンドドッグ

彼は舌打ちし、

「…言ってみる」

「『スクール』の本命は『ピンセット』」

インターフェイス接続回路は無表情で告げた。アクセラレータ一方通行が虚を突かれたような声を出す。

「他は全部ダミー。あわよくばダミーのアタリも利用するつもりだったらしいがな」

意外だったのか、アクセラレータ一方通行は目を丸くして、

「…『スクール』はソイツで何をしようとしてる」

「そこまでは分からねえ。ガラクタに成り下がった奴にはそこから先は知らされてない」

アクセラレータ一方通行が黙り込む。こちらを睨むようにじっと見て、何かを思案しているように見える。冷たい沈黙が垂れ込めた。

「…信用するかどうかはオマエに任す。俺はまだ一応『スクール』だからな。俺は俺なりに潰し方を考えてみる」

しばらくするとインターフェイス接続回路はそう言って、ぎこちなく杖をつきその場から去ろうとした。

すると。

「…待て」

「あ？」

数歩進んだところで、後ろの少年から呼びかけられる。インターフェイス接続回路は肩越しに彼を見た。彼の瞳は、まっすぐにこちらを向いている。

「オマエの目的は、あくまでアイツら…シスターズ妹達を守ることが」

ハッキリとした声で、アクセラレータ一方通行が尋ねる。インターフェイス接続回路は背を向けたまま、こちらもハッキリと、確かな意志をもって言い放った。

「ああ」

アクセラレータ一方通行は背後で小さくため息をついた。舌打ちし、静かな声で告げてくる。

「…13番だ。後は分かるな」

「…わかった」

インターフェイス接続回路は思考の後、静かに返した。その返答を区切りに、背後から杖をつく音が聞こえてくる。どうやら別の通路から出て行くようだ。

13番。一方通行専用の秘匿回線とでもいうのか。

アクセラレータ

協力。

どつちらそつするつもりらしい。

「はっ」

灰色の髪を揺らして、少年は小さく笑った。

目的を同じくする者が、今、ようやく繋がったのだ。

\*

第三学区のとある高層ビルの前に、『スクール』のリーダー、垣根帝督は居た。

その手には奇妙なグローブがはめられている。

グローブの人差し指と中指にはガラスでできた長い爪が伸び、その爪の中にはさらに細い金属の杭のようなパーツが収まり、手の甲にあたる部分には携帯電話のディスプレイのようなモニターがある。

これは『ピンセット』。随分な大きさだったそれを、垣根が組み直し、最適化された形にしたのだ。

レジャー施設が立ち並ぶ第三学区に、垣根の姿はあまりに不釣り合いだった。だが垣根はそんなことは気にせず、静かな表情でビルに

入っていく。

(『アイテム』…)

結果として、素粒子工学研究所からの脱出には成功した。だが、『スクール』の正規メンバーを一人失うことになってしまった。あの時逃げたのはあくまでも『ピンセット』の回収を急いでいたからであって、やろうとさえ思えば皆殺しも可能だったのだ。

だからこそ、垣根帝督はここへ来た。既に施設内は『スクール』の下部組織が制圧行動に入っている。

垣根がロビーへ入っていくと、装甲服を来た下部組織の男が走り寄って来る。

「『アイテム』は25階、VIP専用サロンです」

「ご苦労さん。お前らはそのまま客共逃がせ。『慎ましく』、な」

垣根は言っと、エレベーターに乗って25階を目指す。その表情は薄っすらと笑っている。

基本的にVIPルームともなると、外の喧騒があまり聞こえないよう仕掛けが施されていることが多い。本来は優雅なひと時を過ごすためのその仕掛けだが、今回は逆に利用させてもらうことにした。VIPルームで危機を察知する方法は、警報を聞くかフロントから報告が飛ばされるか自分で気付くか、しかない。その内ふたつは下の連中が潰している。



後は『アイテム』の面々が気付くか否かで進捗状況が変化して行くが…どの道彼女らが『スクール』に気付かれずに脱出する方法などない。調べは既についていて、彼女らの隠れ家も把握済みだ。

考えている間に、垣根は『アイテム』が潜む個室サロンの前へ辿り着いた。

センサー系のシステムは下で切っているので、堂々と真正面に立つても中に情報は届かない。

垣根は笑みを大きくし、思い切りドアを蹴破った。

派手な音が響き、中で息を呑む声が聞こえる。垣根は堂々と入っていく。

「『ダークマター未元物質』……ッ！」

「名前で呼んで欲しいもんだな。俺には垣根帝督って名前があるんだからよ」

忌々しそうに言う麦野に対し、垣根は笑ってそれに応えた。麦野の目が、垣根の右手、『ピンセット』を映す。垣根はフツと笑って、

「カツコイーだろ。勝利宣言をしに来たぜ」

「はん。アレイスターに選ばれなかった『スペアプラン第二候補』にはしゃがれてもね。さんざん逃げ回つといて、どういう風の吹き回し？」

「素粒子工学研究所のときは『こいつ』の回収に大忙しだったからな。お陰で『スクール』の正規要員を一人失っちまったし。ちゃんと相手してやれなくて悪かったと思ってる」

「毎回毎回、何かやる度にメンバーが減ってんでしょ。つくづく…」

垣根帝督と麦野沈利。第二位と第四位の会話は、垣根に放られた豪華なテーブルによって遮られた。垣根にぶつかつたテーブルが、粉々に砕け散る。

「…痛つてえな」

表情に変化は見られない。傷一つついておらず、垣根の言葉は信憑性に欠けるものだった。垣根の視線が麦野から、このテーブルを投げつけたニットの少女 きぬはたさいあい 絹旗最愛へと向けられる。

「そしてムカついた。まずはテメエから粉々にしてやる」

睨みつけると、絹旗は壁際まで走っていき、その拳でサロンの厚い壁を破壊する。外で待ち構えていた『スクール』の下部組織の黒ずくめを、腹を殴って気絶させる。

「余所見してんな！」

麦野が二本の光条を放った。垣根はそれをものともせず、素粒子工学研究所でしたように屈曲させる。それはそのままサロンの天井を突き抜いた。間髪入れず、垣根は麦野に接近する。

「くだらねえな」

垣根の脚蹴りが、麦野の横腹に炸裂する。

「…！」「…！」「…！」

麦野が呻き、吹っ飛ばされて、サロンのカーペットの上を転がる。無様にも、整えられた髪は乱れ、カーペットの上に突っ伏した。垣根は歩み寄り、

「いちいち狙いつけなけりや使えねえ能力なんざ俺の前じゃ役に立たねえな」

垣根の腕が振るわれ、謎の力で麦野はカーペットやソファごと壁に叩きつけられる。

「ぐっ…！」

壁にぶつかった衝撃の後、クッション素材とはいえ高速で飛んできたソファの激突を受ける。意識が遠のいていくのを感じた。

「第二位と第四位。分かるよな？どっちが上か…こんなのは学べば幼稚園児だってわかることだ」

壁とソファの間で板ばさみになり、カーペットで覆われた麦野の姿は、垣根からは見えない。こちらの声が聞こえるかも微妙なところだが、敢えて垣根は侮蔑を込めて、言い放つ。

「殺す価値もねえな。のうのうと生き恥晒しやがれクソ女<sup>アマ</sup>」



どうも、櫻井です。

今回も垣根の出番が多いですね。原作で語られていなかった麦野戦を書いてみました。もう少し膨らまそうかと思っていましたが、パワーバランスを考えたら長持ちしないと思ったのでこんな程度です。

主人公の戦闘シーンが最近ないですね(汗)

入れたくても入り込む隙がないというか…完全補欠扱いだけど『スクール』所属となんともやり難い状況にしたなと後悔しています(汗)

本章の最後は一方VS垣根で終わりになりそうですね。思いの他早く終わってしまうかもしれない…。

とりあえず接続と一方が連絡可能になったので良かったですね

それでは次回、お楽しみに

5 - 5 模倣 大八小ヲ兼ネル (前書き)

「麦野のことも考えてやれよ…」

『スクール』のリーダーにして学園都市第二位の超能力者)

レベル5) 垣根帝督

『スクール』は現在、第三学区の某レジヤ―施設を襲撃している。おそらく『アイテム』の追撃を免れるため、さっさと片付けることにしたのでろう。

(間に合うか…)

カチャカチャと杖をついて、早足で接続回路は黒煙の立ち上るレジヤ―施設へと入っていった。

フロントを占拠している下部組織の男に近付く。

「『アイテム』は今どこに居る」

接続回路インターフェイスが尋ねると、男は焦った声で、

「25階のVIPサロンを貸し切っているようですが…」

それだけ聞き、ぎこちない足取りでエレベーターに乗った。

一方通行アクセラレータと分かれた後、すぐにこちらへ向かって正解だったようだ。『アイテム』も垣根もこの建物に居る。

彼は軽く指先で装置に触れた。

(こいつを付けるようになってから4日：バッテリーは一度取り替えたいが、最後の交換から36時間は経過してる。となると能力使用モードは5分しか保たねえな…)

仮に垣根を相手にするならまず勝ち目がない。依然使った戦法も、

垣根があくまでも『テスト』のつもりでやっていたから通じたわけであつて、本気でやり合えば『掌握する世界』の異なる人間には勝てない。

だが。

インターフェイス接続回路とて、今までに本気でやったことは上条当麻と戦つたときと蝉脇零掛とやり合った時しかない。

機械の補助を借りているとはいえ、その演算能力は健在だ。

(手加減してる余裕はねえな)

インターフェイス接続回路が乗つたのはVIP専用の直通エレベーター。本当なら専用のカードやらが必要らしいが、この際遠慮する気はない。

ドアが開くと同時に、インターフェイス接続回路は目を見開いた。思ったよりも派手に戦闘が行われている。

豪華なテーブルは粉々になって転がっているし、壁面には辺りにあつたはずの家具とカーペットが密集している。

(垣根の野郎は…)

まずは彼に接触しなければ と、その時。

「ッ!?!」

眼前を、白く発光する何かを通り過ぎた。それが飛んできた方向を振り返る。

そこには家具の密集した壁があつた。



だがそれだけだ。視覚的には、さつき見たその光景しかない。

しかし、さつきとは明らかに異なる気配を、インターフェイス接続回路は感じていた。

装置のスイッチに手をかけ、気配が生じる一点を睨みつける。

その刹那。

ソファ越しに、二本の光条が放たれた。

「……！」

片方の光線が、インターフェイス接続回路の肩をかすめる。

痛みよりも、溶けるような高熱が肩に走る。服の一部が焼き切れ、火傷した肌が肩から覗く。

次がくる前に、インターフェイス接続回路は電極のスイッチを入れた。

(……………！！)

あの時の、昔の感覚が蘇る。認識範囲が広がり、さつきまで全く入ってこなかった周囲の情報も、波のように頭の中に入ってくる。

『この空間を掌握した』。

気分が高揚する。最強に肉迫する学園都市最高峰の超能力者レベル5が、今ここに再臨した。

「……クヒッ」

喉から笑いが漏れる。制限時間はたったの5分。

相手はソファと壁の隙間。垣根と戦って無様に生き恥を晒す『アイテム』のメンバー。そして先程の光線。それが誰か、接続回路は分かつていた。

「どおしたよお第四位イ！！惨めにんなとこ挟まりやがって笑い種にもならねえなあ！！」

接続回路の細い腕が、ソファに触れる。ソファは粉のように散り、憎悪に顔を歪ませた『アイテム』のリーダー。麦野沈利が姿を現す。

その瞬間、接続回路の目の前で、光が瞬いた。麦野は邪悪に笑っている。

「死になああああ！！」

放たれた光条。だが、零距离で放たれたそれはその役目を負うことなく、少年の体表で塵と化す。麦野の顔に驚愕の色が宿った。

接続回路は彼女の胸ぐらをつかみあげ、宙に放り、『放った』。

「なっ…！！」

麦野が目を見開き、激熱が迸る太股を押さえる。そこは衣服が焼

き切られ、インターフェイス接続回路同様火傷の肌が覗いている。

(この『スクール』野郎…今…今、あたしの…！)

空中で、麦野が啞然と灰髪の少年を見る。彼は薄ら笑いを浮かべていた。

(どういうこと…こいつ、あたしの能力をッ…！)

仕組みはわからない。だが、麦野沈利は間違いなく目にしていた。

あの少年の周囲の空間から、一条の光線が迸るのを。

この少年の姿は、『スクール』のメンバーリストで確認していた。だが、『インターフェイス接続回路』という能力以外に何の情報もなく、その能力さえも名前以外には何も示されていなかった。

(…他人の能力をコピーする…？いや、『パーソナルリアリテイ自分だけの現実』をコピーなんてできるわけが…)

「答えを教えてやる」

まるでこちらの思考を見透かしたように、少年が言った。

「俺の『パーソナルリアリテイ自分だけの現実』はなあ、結果としてテメエの『パーソナルリアリテイ自分だけの現実』さえも含んだよ。『大は小を兼ねる』って言葉、聞い

たことあんだろ？原子よりも小さな世界… テメエの操る電子すら操れるのが、俺の『インターフェイス接続回路』なんだよお…！』

「……………は」

麦野沈利は、少なからず自分の能力には誇りを持っていた。200万もの学生の中で、第四位、レベル5の『マルチタウナー原子崩し』を唯一持ち合わせる、暗部組織『アイテム』のリーダー。いずれも常人の範疇を遙かに越えるステータスだ。

それが、何故。

第二位だけでなく、訳の分からない正体不明の、少なくとも第一位から第四位の間ではない能力者に、圧倒されなければならないのか。

この少年は何なのか。

こんな意味不明な存在を、何だって『スクール』は手に入れたのか。

疑問はいくらでも湧き上がってきた。

沸騰した頭は、割れそうな程に警鐘を鳴らし、疑問すべてを『<sup>から</sup>理解不能』と提示する。

その刹那、麦野沈利は激情を攻撃として表した。

「あたしの『<sup>パーソナルリアリティ</sup>自分だけの現実』が…お前の『<sup>パーソナルリアリティ</sup>自分だけの現実』の領域内…だと？ふざけるなア！！！」

集束された怒涛の光線が、灰髪の少年へと向かっていく。

彼は裂けたように笑いながら、緩やかに腕を振り、その攻撃を拡散させた。

粒子とも波ともつかない、万物を貫く電子の集合は、少年の体表で八本に枝分かれし、彼の背後の壁を貫く。

壁はまるで紙のようにひしゃげ、空虚な穴を開ける八本の光条。

リスクを無視して放った一撃は、いとも容易く受け流された。

「つつまんねえなあ」

少年が再び腕を振るう。強烈な烈風が、麦野の体を包み込み、莫大な圧力を帯びて、穴が空き脆くなった壁面へと打ちつけた。

麦野が呻く。

「ヒヒヤッ！ああー楽しい。レベル5の相手すんのは楽しいっただらねえな。クソ犬共とは大違いだ…」

インターフェイス  
接続回路が嘲笑う。血が出るほどに、麦野が唇を噛み締める中、彼は面倒くさそうに前髪をかきあげた。

（さあてどおすつかあ。正直『アイテム』殺つちまうのはマズいんだよなあ）

麦野と戦うのは想定内だが、あまり好ましい展開でもなかった。今回ここへ来たのは垣根と接触するためであり、『アイテム』を潰すためではない。

麦野が攻撃を仕掛けてきて、『スクール』のメンバーとなっている人間に耳を貸すはずがないと思って止むを得ず反撃したままで。もっとも、多少アツくなってしまうてはいたが。

殺す気は毛頭ない。

むしろ本気でかかるべきは垣根だ。

麦野は今や虫の息。垣根にも圧倒されていたようだし、疲労もたまっていることだろう。こちらを一向に睨みつけてくるが、攻撃をしてくないところを見ると戦闘する余裕はなさそうだ。

ならば、無理に叩きのめす必要もない。

インターフェイス  
接続回路は杖を拾い、スイッチを切る。

消費時間は一分弱。及第点だろう。

倒れ伏す麦野に背を向け、部屋から出ようとした瞬間、彼は再度スイッチを押した。

視界の隅に、枝分かれした光線が見えた。

「……ッ……ぐ」

気絶するかのような声を漏らして、ドサツと倒れる音がする。  
今度こそ彼はスイッチを切り、部屋を後にした。

外とを隔てる壁がなくなり、風の吹き込むサロンを。

どうも、今日は事情により携帯からの投稿になります。

V S 麦野が見たいと仰った方が居らしたので一話使った次第です。

春休み中は毎日更新を心掛けていますが、学校が始まったら隔日制になりそうです。ご了承ください。

はい、やや問題行動になりますね。能力の関係上原子崩しみみたいなことができるなあと書いて書きました。麦野ファンの皆様ごめんなさいm(ー)ー)m

ただやはり専門の麦野の方が扱いに慣れているのでこの点においては強いかと。

麦野を混乱させるためにわざとやってみた、程度の戦い方でした。

本作では接続回路もアレイスターの計画で重要な意味を持つのですが、ロシア編前後にとある人物の口からその意味について言及します。

それでは次回、お楽しみに



5 - 6 焦燥 守ルベキモノノ為ニ (前書き)

「なんかすっぱりと私達の描写がカットされてますね」  
学園都市の治安を守る風紀委員 ジャツジメント 初春飾利

垣根はジャージ姿の少女と向き合っていた。

正確には、たった今倒したところだが。

垣根は前髪を掻き上げ、やれやれとため息をつく。

色々な意味で、麦野や絹旗より厄介な相手だったが、案外容易く撃破できた。

彼がこの後どうしようかと思考する中、エレベーターから一人の少年が現れた。

安っぽい衣服に、端正というよりは男らしい、ごつごつした顔つき。

垣根とは対極に位置する外見だ。

ついさっき、目の前で倒れ伏しているジャージの少女に逃がされ、下へ向かったはずだったが…。

「何だ。戻ってきちまったのか」

垣根はあっさりと言って見せた。

少年…浜面仕上の目が、垣根の前に倒れる少女へと向けられる。

彼の表情が青くなっていくのが見える。

ふむ、と垣根は首の関節を鳴らし、

「でもまあ、直接的な戦闘力はない割に、結構がんばったんじゃないの？こいつ。サーチ能力の応用なのか、俺のAIM拡散力場に干渉して、そこから『逆流』して俺の能力を乗っ取るうとしやがった。

「つたく、順当に成長すれば『八人目』…いや『九人目』になれるかもしれないねーぞ」

垣根は比較的このジャージ少女に高評価を与えたつもりだったが、聞いていた浜面はそれを悪く解釈したらしい。

ジャカツ、と隠していたらしい拳銃をこちらへ向けてくる。

(ま、そういう解釈もありだろうな)

向けられた銃口に怯えるような様子はない。何にどのようにならぬ未元物質ダークマターを混ぜれば銃弾を無効化できるかは、既に分かりきっている。

そしてこの無能力者レスレは垣根の能力がどのようなものかも理解していないだろう。

垣根自身、そのすべてを理解したとは思っていない。

やってみるよ、と垣根が態度で示したとき、

「あら。まだ終わっていないかったの？」

「いや？終わったようなもんだ」

背後からした声に、垣根は振り向くことなく応えた。

『スクール』のメンバー、あのドレスの少女だ。

浜面の視線が垣根と少女を交互に移す。どちらを撃とうか迷っているらしい。

それを見て、ドレスの女は口を開く。

「やめといた方がいいよ？」

「っ!?!」

何があつたのか、浜面の上げた両腕が震えだした。

「以前は殺す必要性があつたけど、『ピンセット』が手に入った今、下部組織のあなたまで殺す必要もないんだしね」

垣根は状況を理解すると、フツと静かに笑った。

「『メジャーハート』心理定規』…やれやれ、見てることがちが嫌になるな。正直、結構エグいぞそれ」

「『メジャーハート』心理定規だと…?」

垣根の言葉を受け、浜面が疑問符を浮かべる。

少女は『エグい』と言われたことをどのように解釈したのか、一切表情を変えることなく、

「簡単に説明すると、人の心の距離を自在に調節できる能力よ。…例えば、あなたを助けるためにここへ残ったその子との距離とかね」

彼女は垣根の前に転がるジャージの少女、滝壺<sup>たきつぼ</sup>理<sup>り</sup>后<sup>ご</sup>を示した。

「ぐ…!」

必死に撃とう撃とうと引き金を引こうとしているが、震える手はまともに狙いもつけられていない。

しばらく面白そうに眺めていたが、垣根はハアと嘆息し、

「つまんねえな。これじゃまるで俺達が悪者だ」

「お互いを庇い合う男女なんて美談よ、今どきレア過ぎて壊すのもつたいないわ」

垣根に同意するように、ドレスの女も嘆息した。

「ああ、全くだ。俺達がどうこうするまでもなく、女の方は勝手に死んじまうってのがな。救いがねえ話ってのは総じて綺麗に見えるもんだ」

垣根が天を仰ぐと、ただでさえ震えていた浜面が肩を大きく震わせる。

「何だよ……何なんだよ、それ。テメエら何言ってるんだ!？」

垣根は足元に転がっていた透明のケースを、震える浜面の方へと蹴飛ばした。浜面の目が、ちらとそのケースを映す。

「『体晶』。その女が使ってるのは知ってるだろ？」

「…能力を、発動させるための…」

震える声で、浜面が答える。垣根は無表情で、

「厳密には意図的に拒絶反応を起こし、能力を暴走させるものだ。ちよつと詳しく言つと『暴走能力の法則解析用誘爆実験』ってのが使われてたヤツだな。大抵はデメリットしかないはずなんだが、ごく稀に『暴走状態の方が良い結果を出せる』ってヤツもいる。この

滝壺つて女もそういう能力者だったんだろ」

顔を青くする浜面を眺め、垣根は面倒そうに、

「こんな状態だからな。長くは保たねえよ。今日から一生能力を使わないっつーなら話は別だが、あと一回か二回使ったらそれでこの女は『崩壊』する。俺達がトドメを刺す必要もねえわな」

彼はそう言うと、後ろの少女を連れてエレベーターへと向かった。

銃を掲げて震える浜面を、堂々と無視して。

「それよりあなた、あの子からAIM方面を経由して『自分だけの現実』<sup>リテイ</sup>を乱されかけたんでしよう？チエックするべきじゃない？私、壊滅寸前の『アイテム』よりもあなたの暴走の方がずっと怖いんだけど」

「そーだな。さっさと帰ってチエックしまうか。ここには機材もねえし」

降りてきたエレベーターに乗り、垣根と少女が階下へと降りていく。

浜面は銃をエレベーターを向けたまま、頭を垂れてうなだれた。

(あと一回か二回、能力を使えば滝壺は『崩壊』する…)

なんだよ崩壊つて、と、浜面は納得できてしまう事象を否定した。

納得と言っても、まともな教育を受けていない浜面に垣根の言う『崩壊』の意味はわからない。ただ、それがおそろしく滝壺に悪い影響をもたらすことは分かる。

滝壺の顔を覗き込んで、彼はどうしようもない焦燥にかられた。ピクリとも動かないその体、顔から滴る不気味な汗。何の変哲もない汗に見えるのに、話を聞いたらそれが彼女の生気のようにすら見えてしまう。

「くそ……」

浜面が静かに奥歯を噛み締める。

そこに。

「おい。オマエ」

「え……？」

低い声が聞こえてきた。浜面が振り返る。

そこには珍しい、灰髪の少年が居た。杖をつき、決して普通ではない雰囲気を持った少年。

彼は浜面に近付いて、静かに尋ねた。

「ここに『スクール』の茶髪のヤツは来なかったか」

\*

アクセラレータ  
一方通行は第10学区を歩いてきた。第23学区でインターフェイス接続回路と分かれてから第11学区、第10学区と任務で移動し、先ほど少年院と銘打った建物で『ブロック』を潰して今に至る。  
地味な生傷はあるものの、些細なものだ。

『グループ』の他のメンバーはそれぞれ違う目的があり今は自由行動。もとより馴れ合うつもりもない彼は独り第七学区へ戻るために駅を目指す。

(…ン?)

ポケットの携帯が振動する。取り出して液晶の表示を見ると、つい先ほど登録した番号が点滅している。

インターフェイス  
接続回路。

容姿だけでなく立場や行動目的まで瓜二つの少年だ。

アクセラレータ  
一方通行はさして警戒することなく回線を繋げた。

『アクセラレータ  
一方通行』

「どオした」

予想通りの低い声が聞こえてきた。

『気をつける。「スクール」の…垣根の最大目標は「アレイスターとの直接交渉権」。つまり、今オマエが手にしてるモンだ』



「なんだと？」

意外な言葉に、アクセラレータ一方通行は思わず聞き返した。

『アイツは「ピンセット」を使ってアレイスターのバラ撒いてる素粒子レベルの小せえ機械を調べて、野郎と互角にやり合っつもりだ。だが、んなモンであのクソ理事長を出し抜けるとは思えねえ』

「それで、第一位に居座るこの俺を狙ってくるってかア？ハッ、オマエ、俺がそんなヤツ相手にビビると思ってるのか？」

『オマエの心配なんざしちやいねえ』

きつぱりと、インターフェイス接続回路が否定する。ならなんで、とアクセラレータ一方通行が続けようとすると、彼はハッと息を呑んだ。

『第二位が第一位をただ狙うと思うなよ。アイツは必ずオマエより優位になるように事を運ぶ。そんな野郎が何を…「誰を」狙ってるかくれえ、わかんたろ？』

「まさかあのガキを…！」

アクセラレータ一方通行が目を剥いた。最後に見た、ぐったりした少女の姿から、明るくはしゃぎ回る少女の姿が頭の中を巡っていく。

『俺は今第二学区から第七学区に向かっているとこだ。あわよくばあのガキを保護する』

「…わかった。俺も今から向かう」

アクセラレータ  
一方通行は回線を切り、先ほどよりも早足で歩き出す。

(その第二位が相手ともなると、無駄にバッテリーは使えねえな)

『向こう』のバッテリーも気になるところだ。

演算能力を失ったにも拘わらず、一人の少女とその周りの世界を守る超能力者、アクセラレータ一方通行。

脳が停止しても尚、一人の少女と妹達の暮らす世界を守る超能力者、インターフェイス接続回路。

共通した目的と意思を持つ二人の少年は、確かな決意を持って歩み出した。

5 - 6

焦燥

守ルベキモノノ為ニ

(後書き)

どうも、櫻井です。

昨日から隔日投稿になりましたので、本日更新となりました。  
内容としましては一方通行VS垣根の導入部ですね。

接続回路も少なからずあのド派手な戦いに関わるわけですが、どんな役かは見てのお楽しみで。

次々回が決戦編になりますかね。次回は打ち止めと初春のちよつとほのぼのしたシーンも交えつつ垣根サイドも少し入れていこうかと。

それでは次回、お楽しみに

5 - 7 矜持 ジャッジメント (前書き)

「さアて、始めよオカ…」

学園都市最強の超能力者(レベル5)

アクセラレータ  
一方通行

インターフェイス  
接続回路は第七学区の繁華街を歩いていた。

彼の首につけられたスポーツネックレス型の装置は、端から見ればただのアクセサリーに見える。ミサカネットワークを介して電気信号を脳へと送ってくれるこの装置も、打ち止めの居場所を特定するような真似はできない。

そんなカムフラージュの効いた彼の装置だが、彼の灰色の髪の色いで彼が目立ってしまうのでは本末転倒である。

幼少時代、特力研で飲まされた薬品の作用か何かのせいらしいが、彼はそれを気にしたことはない。

そんな髪を揺らして、彼は学生が闊歩する第七学区を進んでいく。

(チツ：確か、あの黄泉川だかつて女のところに居候してんだよな、あのがキ)

アンチスキル  
警備員の自宅ならわざわざ襲撃するとは思えないが、あの垣根帝督ならやりかねない。

彼はオニクスブラックの自前の携帯を取り出し、登録された番号へと掛ける。

数回のコールで、相手は電話に出た。

『どつかしたの?』

出たのは澄んだ女性の声。インターフェイス  
接続回路という人物を知る、数少ない

人間だ。

「夕風。黄泉川ってヤツのところに打ち止めは居るか」  
ラストオーダー

単刀直入に、インターフェイス接続回路はあっさり尋ねた。しばらくしてから電話の相手、夕風志乃は怪訝そうに、

『まだ来てないらしいけど。あなたこそ知ってるんじゃないの？同じ病院なんだし、あの可愛いお医者さんに聞いてみなさいよ』

「…あのガキは今朝退院した。今黄泉川ってヤツのところに居ねえなら、何かイレギュラーが起こったに決まってる。調べられねえか」

『もちろん協力するけど。ふふ、ようやく甘えることを学んだみたいね』

からかうように言う志乃に、インターフェイス接続回路は舌打ちで返す。

「これは『甘え』じゃねえ。『利用』だよ。オマエが俺と同じ泥沼の中に居る以上、最後まで付き合ってもらおう」

志乃は考えるように間を空けて、

『…。はいはい。それで？ラストオーダー打ち止めの居場所を探ればいいの？』

いつもの通り、大人の余裕を持って頷いた。

「ああ。俺は俺で第七学区を探す。あのガキがそこらに……」

『?…?…どうかしたの?』

不自然に途切れたインターフェイス接続回路の声。志乃の緊迫した声が耳に入ってくるが、インターフェイス接続回路の目は呆然と、ある一点、数十メートル先を映していた。

そう、見知らぬ女子中学生と手を繋ぎ、人ごみの中を歩く少女の姿を。

「…夕凧。今言ったこと全部忘れる」

わなわなと震えながら、インターフェイス接続回路が言う。

『は？ちよっと、どっという』

志乃が何か言っているのにも構わず、インターフェイス接続回路は回線を切った。杖をつき、ぎこちない動きで打ち止めをラストオーダー目指す。

（あのクソガキが…五体満足で自由の身ならまっすぐ家に帰りやがれ…！）

苛立ちながら、インターフェイス接続回路は人混みを掻き分ける。

だが、休日ということもあってか、大勢の人間が歩く街道で、おまけに目立ちそうな制服も目立たなくなってしまうている。

たちまち、二人の姿を見失う。

（くそっ、どっこ…）

最悪の可能性がよぎった瞬間、腕に何かがぶつかった。いや、張り付いた。

「こんなところで何しているのー？ってミサカはミサカは意外な人物の登場に驚いてみたり！」

…そう、確かこの少女と初めて出逢ったときも、こんな感じだった。

「…何してるの、じゃねえぞクソガキ…」

一発げんこつを食らわしたい欲求に駆られるも、彼は己を制して拳を下げた。

とりあえず目的は達成した。なんとか先に打ち止めを保護できたようだ。

「おい、さつきオマエと一緒に居たガキはどうした」

気になって、インターフェイス接続回路は尋ねてみた。ラストオーダー打ち止めはぐいぐいと彼の黒いTシャツを引っ張って、

「そのカフェでパフェ食べてるって言ってたよ、ってミサカはミサカは報告してみる。あっちの喫茶店でもらえるキーホルダーが欲しくて別れたの！ってミサカはミサカは状況報告しながらついて来るように促してみたり！」

「ああ？おい、ちょっと待」

ぐいぐいと引っ張られつつ、それならそれで安心だとインターフェイス接続回路は息を吐いた。いつまでも打ち止めと一緒には居ては、あの女子中学生まで垣根や『スクール』に狙われかねない。

ラストオーダー彼は打ち止めに引っ張られて、再び雑踏の中へと入っていった。



\*

垣根帝督は第七学区の繁華街を歩いていた。

彼の手にするシルバーの携帯には、10歳くらいの少女の姿が表示されている。

赤みのある茶髪と、頭頂部から跳ねた立派な毛。幼いながらも整った顔立ちに、空色のキャミソールに男物のYシャツを羽織っている。

彼女こそが、垣根帝督が目的を果たす上で、より優位に立てるカードだ。

『アイテム』を第二学区で撃破　　といっても戦闘不能にしただけだが　　してから、彼は一度新しい隠れ家に戻っていた。『使える』メンバーにだけ教えておいた、学園都市の目を盗んだ小規模の施設だ。

そこで垣根は早速『ピンセット』による解析を行った。

能力で一定範囲の空気を集め、そこに『ピンセット』を突っ込んで調べてみれば、予測は笑い話にできそうならに的中していた。

アレイスターは街中に、素粒子レベル、細菌よりも小さいのではと思われるサイズの機械を散布させていたのだ。それも空气中を漂い、自家発電から信号の送受信までを行い、ネットワークの形成すら可能とする、科学の粋を集めても納得しがたいナノデバイスを。

さすがは学園都市の最暗部、紙幣のICチップなんかとは比べ物にならない機能性だ。

しばらく調べてみて色々と感心させられたが、結局アレイスターと対等に渡り合えるようなものでもなかった。  
知恵を絞って『ブロック』を利用した甲斐がなかったと、妙な徒労感に見舞われたものの、意外とすんなり認められた。

(ま、予想の範疇だったからな)

垣根は笑って、携帯を閉じる。

思えば、一番手っ取り早い方法を残していたのだ。そして結局、その方法しかなくなった。

アクセラレータ  
一方通行を殺す。

あまりに単純明快で手っ取り早く、リスクだけが大きい方法。

面倒でも確実に進歩する方法を選択したのが悔やまれる。

とはいえ。

『ピンセット』を手にしたことで、アクセラレータ一方通行に対抗する条件が揃ったとも言えるのだ。

あの面倒な方策も決して無駄骨ではない。

さっきから『ピンセット』を見て周囲の人間が奇異な目を向けて

くるが、垣根は構わず歩を進める。

彼の視線の先には、ひとつのオープンカフェ。

彼の瞳が映すのは、そこで大きなパフェを食べ進める一人の少女。

少女の名は初春ういはる飾利。

ラストオーダー  
打ち止めを連れて、街を散策していた女子中学生。彼女の二の腕には、緑色の腕章。

ジャケット  
風紀委員の証が巻かれている。

傍に目的の少女は居なかったが、まあ良い。垣根はゆったりとした足取りで初春に近付いた。

「失礼、お嬢さん」

愛想の良い笑顔を意識して、こちらを向いた初春に微笑む。

「えと…どちら様ですか」

当然の反応かもしれない。警戒しているのか、決して自然体ではない声で尋ねてくる。

垣根は笑顔で、

「垣根帝督。人を捜しているんだけど」

言いながら彼はポケットから携帯を取り出し、簡単に操作して彼女に見せる。

「こつこつ子が『どこへ行ったか』、知らないかな。最終信号ラストオーダーって呼ばれているんだけど」

初春は考えるように黙り込んで、携帯に表示された画像に注目する。

「こちらをちらと伺うので、「どうかかな？」と優しく微笑む。彼女は一瞬眉根を寄せて、首を横に振った。

…は。

「さあ。残念ですけど、『見ていない』ですね」

初春はごく平然と告げた。垣根は胸の奥で、何かが湧き上がるのを感じていた。

「そうか。『見ていない』、か」

「ええ。なんなら『アンチスキル警備員』の詰め所に届け出を出されたらどうでしょう」

いかにも<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員らしく、初春が提案する。垣根はにつこりと笑い、

「…そうだね。その前に自分で捜してみるよ。ありがとう」

垣根の笑顔を見て、初春が「いえいえ」と人の良い笑顔を見せてくる。

初春に背を向け、歩き出す。

(……)

初春の笑顔を見て、尚更胸の奥で負の感情が増幅された。

幼さの残る顔立ちが作る笑顔を見て、気分を害する者など、普通はない。

しかし、すべてを知る垣根に、その『普通』は通らない。

そう。

そんな笑顔も、自分と同様、偽りの笑顔なのだから。

故に、垣根は踵を返す。

「ああそうだ、お嬢さん。言い忘れていた事があるんだけど」

優しい口調で、パフェにスプーンを差し込んだ初春に呼びかける。

「はい？」と、キョトンとした幼い顔が、こちらを向く前に。

「ラストオーダー テメエが最終信号と居た事は分かってんだよ、クソボケ」

優しさの欠片もない言葉と共に、垣根は拳を振り抜いた。

垣根の目の前で、少女の体が倒れ込む。倒れる際に振り回された彼女の足が、椅子やテーブルを倒し、彼女がつついていたパフェはその甘味を辺りに撒き散らす。

背後から息を呑む声、悲鳴、決して安穩としたものではないものが聞こえてくる。

構わず、垣根は起き上がろうとする初春の右肩に、彼の長い脚を振り下ろした。わずかに身を起こしていた初春を再び地面に倒れさ

せ、痛むであろう右肩を踏みつける。

「思い出せ。俺は最初テメエになんて尋ねた？テメエの出した答えは『見ていない』だ。俺の尋ねたことの答えになってるか？俺はこう尋ねたよな。『どこへ行ったか分かりませんか』って」

低い、淡々とした声でそう言うと、垣根は初春にかけた右足に体重を掛ける。

「あぐつ…！」

そう経たないうちに、彼女の右肩は不穏な音を立て、わずかだがその形を変えた。

関節を外したのだ。

必死にのたうち回ろうと力を込めるのがわかるが、特殊な訓練を経ている垣根の前には、そんな行動は無意味だった。

「テメエが俺の動きに気付いて最終信号を『逃がした』訳じゃねえのは予想できる。俺は見てくれ通りの外道だが、それでも部外者を巻き込むようなつもりはねえ。だから協力さえしてくれりゃ、こんな風に暴力を振るおうとは思わない」

周囲はもはやざわつく事すらない。静まり返って、各々の目的のために通り過ぎていく。

彼女がただの学生なら少しは状況が変わったかもしれないが、生憎彼女の腕には風紀委員の腕章がつけられていた。

よく知らない人間からすれば、風紀委員とはエリート学生、即ち上位クラスの能力者と考える者がほとんどだろう。

それが敵わない人間に、どうして立ち向かう者が居るだろう。

「…だがな、俺だって聖人君子じゃねえんだ。万人に優しくできるほど器用じゃない。テメエが最終信号ラストオーダーを庇って俺の目的を阻害するってんなら、俺はテメエを痛めつける」

容赦なく踏み込み、外れた骨の隙間に靴底を食い込ませる。

時に絶叫を上げ、小さな悲鳴を繰り返し、初春の呻く声が辺りを満たす。

「最終信号ラストオーダーはどこだ。それだけ教えれば良い。それでテメエを解放してやる」

彼女は何を思っているのだろう。痛みと矜持の狭間で揺れているのか。

不意に、踏みつけられている少女の口が開かれた。

震える唇が、途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

垣根は目を見開いた。

「…な、に…？」

眉をひそめ、込めた力も弱まり、痛みに呻いていた少女の瞳を見る。

「聞こえ、なかったんですか…」

引き絞るような声で、ジャッジメント 風紀委員、初春飾利が言葉を紡ぐ。

「あの子は、あなたが絶対に見つけられない場所に居る、って言ったんですよ。嘘を言った覚えは…ありません」

初春が馬鹿にするように、舌を出す。

垣根は頭が真っ白になるのを感じていた。

この女は…今、なんと言った。

『あなたが見つけられない場所居る』…だと？

確かに、質問の答えにはなる。

だが、それはテストなら部分点すらもらえそうにない、答えには曖昧すぎる、結果の枠組みだけを示したようなものだ。

垣根は静かに、

「…いいだろう」

食い込ませていた足を上げ、初春の肩を自由にすると、今度は彼女の頭に靴底を向けた。

その覚悟を、認めてやる。



「見上げた覚悟だ。尊敬に値するな。馬鹿げた治安維持なんてするだけのことはある」

初春が目を閉じる。自ら犠牲になってまで、最終信号を守るつもりその度胸を、垣根は高く評価する。

彼は振り上げた足に力を込めた。

その目は据わっていて、激情は感じられない。

「だったらここでお別れだ」

思い切り振り下ろし、能力の後押しを受けた脚が初春の頭を踏み砕く。はずであった。

ガゴオン！！という轟音が、辺り一帯に響き渡る。

垣根の足が初春の頭を砕いた音ではない。衝撃波に近い強烈かつ膨大な烈風が、辺りの壁やガラスを粉々に砕いて渦を巻き、凄まじい速度で垣根帝督に激突したのだ。

バランスを崩し、悲劇を起こさんとした右足が、初春のすぐ傍の地面を踏む。

一瞬呆然とした垣根だが、その正体に気付くと不敵な笑みを小さく浮かべる。

「…ったくよオ、シケた遊びでハシャいでンじゃねエよ。三下」

通りから歩み寄ってくる、細身の人影。

白い髪に白い肌、爛々と輝く深紅の瞳に、退屈な色を宿している。

かつては『最も使える仲間』として、重宝していた灰色の少年にそっくりな、学園都市最強の超能力者<sup>レベル5</sup>。

悪魔のように鋭い眼光が、薄く笑む垣根帝督に向けられる。

「もっと面白エ事して盛り上がるオぜ。悪党の立ち振る舞いってのを教えてやる」

5 - 7

矜持

ジャッジメント

(後書き)

どうも、櫻井です。

いよいよ次回から僕も大好きな第一位VS第二位の戦いです。

今回の話はちょっとグダグダだったかもしれませぬ…。

というか暴力シーン長くしすぎたかも…Sとかではないはずなんです…(汗)

とりあえず原作では打ち止めがどうしてるのか疑問だったので接続回路に保護させました。一応戦闘に関わりますが、アクション担当は一方通行と垣根にやってもらうのでド派手なアクションはない…つもりです。

それでは次回、お楽しみに

5 - 8 未元物質へダークマター（前書き）

「主人公なのに出番少ないのね」

暗部の研究員にして常盤台中学の保険医

夕凧志乃

「…原作踏んでんだからしかたねえだろ」

学園都市最高峰の超能力者にして『スクール』への反逆者  
インターフェイス  
接続回路

「一方通行」アクセラレータ：「テメエの方から出向いてくれたか」

浴びせられた衝撃をもともせず、垣根は攻撃を放った少年を見た。

「はっ、なんだよその台詞ア。俺と戦うのが怖くてハンデを求めたチキン野郎が、何余裕ぶってんだ？」

一方通行は挑発するような声音で、垣根の瞳を見返した。アクセラレータ

「バツカじゃねえの。そいつは保険だよ。誰がテメエみてえなクソ野郎相手に五分五分の勝負なんか仕掛けるか。テメエにそれだけの価値があると思ってるのか」

こちらにも負けず劣らず侮蔑したような声音で返す。アクセラレータ 一方通行が鼻で笑った。

「どオやら獲物は狐じゃねエな。無様に喰われるだけのブタだったか」

「笑えるな、犬野郎が。そうやって弱者守るために戦ってるや、善人になれるとも思ってるのか？だとしたらとんだお笑い草だが」

「…分かってねエなア…」

アクセラレータ 言いながら、一方通行が手にした杖を適当に放る。首に手を当て、凝った首にするような動作に紛れて、自然な動きでスイッチを倒す。

「たまには教師になってみんのもいいかもな。悪党にも種類がある  
ってことを教えてやる」

「そいつは楽しみだ」

冗談のような会話から一点、両者から強烈な殺気が放たれ、呼応  
するように爆音が響く。

刹那、ベクトルを操作した一方通行と、アクセラレータ法則を歪めた垣根帝督が、  
真正面から激突した。

轟音が響き、激突したエネルギーは衝撃波となって辺り一帯を薙  
ぐ。ガラスは砕け、ビルはきしみ、地は裂けて人を薙ぎ倒す。

バゴオツ!!という爆音が響き、垣根帝督が後方へと吹き飛ばさ  
れる。

凄まじい速度で彼は空を切り、延長線上にあつたカフェの中へと  
突っ込んだ。

破ったガラスは舞い散り、設置されていた机や椅子に突き刺さり、  
垣根の体で真っ二つになる。

異常事態に、店にいた客や従業員が悲鳴を上げるのが聞こえる。

喧騒の巻き起こる店内で、垣根の体は白い繭のようなものに包ま  
れていた。吹き飛ばされている最中に作り上げた、ダイクマター未元物質の塊。  
まるで痛みを感じなかったことに彼は小さく笑うと、外へ向かっ  
て声を張り上げる。

「テメエは、今この場にある全ベクトルを制御する能力者だ」

立ち上がり、破った窓から外へ出る。

「だから全てのベクトルを集めても動かせないほど巨大な質量をぶつけば何とかなるかも思ったが、やっぱりダメだな。俺自身のベクトルも操作されるんじゃない」

店を出て、全身を覆っていた繭を開くと、一方通行が眉をひそめた。  
アクセラレータ

「似合わねエな、メルヘン野郎」

彼がそう言うのも無理はない。

開かれた繭は、幻想的な6枚の翼へと形を変えていたのだから。

垣根帝督は静かに笑う。

「心配するな。自覚はある」

言葉を発するのと同時に、垣根は渾身の力で地を蹴った。  
アクセラレータ

一方通行もまた、垣根の突進に対抗するように、脚力のベクトルを操作して突っ込んでくる。

再び二つの力が衝突するかと思いきや、垣根は翼を使って直角に横へ飛ぶ。

衝突寸前だった一方通行が垣根の脇を抜け、身を翻して大きく腕を振る。  
アクセラレータ

掴み取り引き裂いた空気がベクトルを変換され、烈風となって垣

根を襲う。

横移動の末に壁面に足を着けた垣根が、翼を動かしてそれを避ける。数瞬と間を置くことなく、第一位の烈風は垣根の居た壁面を抉った。

空中に出た垣根が、お返しとばかりに正体不明の爆風を一方通行へと解き放つが、彼はそれすら引き裂いて、新たに烈風を放つてくる。

垣根の翼がそれを防御し、再び翼を広げたとき、一方通行は目の前に迫っていた。

突き出された右手が、再び防御態勢をとった翼の一枚に突き刺さる。

垣根は意図的に、破られた翼をバラバラに散らして攻撃による衝撃を無力化した。

ズザツ、という地面を擦る靴音は、わずかな風圧でバランスを崩した垣根が、路面に着地した音だ。

数メートル離れた路面に着地した一方通行に、垣根は言う。

「知ってるか。この世界は全て素粒子によって作られている」

「ああ？」

突然喋り出した垣根に聞き返しながら、一方通行は襲い掛かる。瞬時に翼を再構成した垣根は、彗星のように迫る一方通行を翼で受け止め、

「そいつは分子や原子よりもさらに小さい粒だ。その種類は原子に



比べて少ないが、大概はいくつかの種類に分けられる。この世界は組み方こそ違えど、元をたどれば数える程度の素粒子によって構成されている。テメエにそっくりなガラクタが操る空間だな。…だが」

しならせた翼を振るい、矢を放つように一方通行を吹き飛ばす。

吹き飛んだ一方通行に飛行して追い付き、空中の彼の真上に移動する。

「俺の『未元物質』<sup>ダークマター</sup>に、常識は通用しねえ」

真上からの烈風が、一方通行の体を路面に向けて急降下させる。

「学者の語るチャチな理論じゃ暴けない、俺だけが把握する空間』  
それを具現するのが、俺の『未元物質』<sup>ダークマター</sup>だ」

尊大に、垣根帝督が言い放つ。

物理法則を無視する異世界の翼を有す少年を前にしながら、一方通行は薄ら笑いを浮かべていた。

そう。ベクトル変換能力を前に、素材の良し悪しは関係ない。

万物を破壊する絶対的な力。

それを有する一方通行は、最強の名に恥じない余裕を見せる。

「オーケー。クソと一緒に埋めてやる」

空中で体制を立て直し、侮蔑の言葉を発しながら、アクセラレータ一方通行が飛び上がる。

手を伸ばし、優雅に翼をはためかせる垣根の心臓を狙う。

だが。

「分かってねえな、テメエ」

アクセラレータ一方通行が言った台詞を、垣根は失望したように吐き捨てた。

「あ？………ッ！？」

アクセラレータ一方通行が迫る中、垣根の翼が輝いた。凄まじい光が、細身の少年へと降り注ぐ。

（なんだ…これはッ！？）

焼けるような痛みを感じ、アクセラレータ一方通行が垣根から距離を取り、近場のビルの壁に張り付く。

そこで彼は気付く。

絶対的な防御力を誇るアクセラレータ一方通行が、『外部からの影響を受けた』。

アクセラレータ驚愕する一方通行に、垣根は淡々と言い放った。

「今のは『回折』だ。能力の応用だな。日焼けで死ぬ気分はどうだ」  
「…物理の勉強が足りてねエよオだなボケ。いくら『回折』を利用したって、太陽光を殺人光線に変えられるはずが」  
「それが普通の物理ならな。言ったはずだぜ？『未元物質』<sup>ダークマター</sup>は既存の法則に従わない、理論の通らない新物質だ。法則を狂わす俺の能力なら、テメエに無理と言わしめる変化すら実現させる。異物ってのはそういうもんだ。たった一粒の微細なイレギュラーで、世界をガラリと変えちまうんだよ」

言いながら、垣根は翼を羽ばたかせ、ビルに張り付く一方通行に向けて嵐のような突風を放つ。

一方通行は『反射』<sup>アクセラレータ</sup>でそれを押さえつけるが、大きく目を見開いた。

「逆算、終わるぞ」

「ッ！！」

危険を悟ったか、一方通行が回避行動をとろうとする一瞬前に。

垣根の翼は動いていた。

飛行するためではない。

風を巻き起こすわけでもない。

それは第三の攻撃形態。

どの手段よりも短絡的な、純粋な破壊力を伴う一撃。

振るわれた翼は、撲殺用の凶器として、細身の少年に襲いかかった。

確かな手応えと共に、翼に跳ね飛ばされた一方通行が、『反射』も適応できずに高速で空を切り、数十メートルの高さからビルの外壁を抉って隣のビルへと突っ込んだ。

おそらく、ビルにぶち当たったりしたダメージはないだろう。だが純粋な翼の打撃は、あの少年の体に強烈なダメージを与えているはず。

薄ら笑いを浮かべて、垣根は高度を落としていき、一方通行の突っ込んだ窓の高さでホバリングする。

何かのオフィスだったららしいそこに人間はいない。

室内に一方通行の姿を認めると、垣根は薄ら笑いを浮かべた。

「一方通行。アクセラレータ テメエは全てを『反射』するって言うてるが、そいつは正確じゃないな」

垣根が言う中、一方通行が窓から出て、こちらを静かににらみつける。

垣根はゆっくりと翼を伸ばした。音もなく、6枚ある内の一対を、20メートルもの長さに伸ばし、危機を察知して飛び上がった一方通行に直撃させ、その細い体を叩き落とす。

「…音を反射すれば何も聞こえない。物体を反射すれば何も掴めない

い。テメエは無意識の内に有害と無害のフィルタを組み上げ、必要のないモノだけを選んで反射してる」

口から血を吐く一方通行が、大型のパーキングエリアの屋上から横に回避する。彼が動いて一秒も経たない内に、垣根の翼が刃となつて、パーキングエリアを引き裂いた。

再び空中に躍り出た一方通行に、垣根が烈風を放つ。一方通行はそれを防御し、舌打ちしながら垣根を見返す。

「今の烈風と太陽光には、それぞれ25000のベクトルを注入しておいた。後はテメエの『反射』を分析して、フィルタを通り抜けるベクトル方面から攻撃を加えれば良い」

淡々と、垣根が語る。一方通行が打開策を見つけようと思案するのを見て、彼は勝ち誇つたように告げる。

「これが『未元物質』」

湧き上がる優越感に浸り、垣根は6枚の翼を構える。

「異物の混ざつた空間。ここはもうテメエの知る世界じゃねえんだよ」

垣根に対抗するように、一方通行は四本の竜巻を背中から発生させ、強風を巻き起こしながら垣根帝督へと突撃する。

巨大な二つの能力が、再び激突する。

能力と能力は鏝迫り合い、接触と同時に衝撃波を生じさせ、周囲の空気やビルをきしませ悲鳴を上げさせると、互いに相手の脇を抜ける。

一方通行の竜巻が翼を破り、垣根の翼が竜巻を吹き消す。

交錯した両者が向かい合い、衝突する寸前に平行移動して、互いにビルの外壁を削りながら双方の能力をぶつけ合う。

高速で空中を駆け巡り、衝突と分析を繰り返しながら拮抗した能力を交錯させる。

「おおアアアアアッ！！」

一方通行が腕を振り上げ、掴み上げたベクトルを垣根へとぶつけた。はずだった。

何が起こったのか。

垣根へと放ったベクトルの束は、彼に到達する前に消失した。

「な……ッ！！」

「塗り替えられた法則の中で、既存の法則が役に立つと思うなよ」

垣根の放った殺人光線が、一方通行の居た空間を焼き尽くす。ビルの窓が溶け落ち、壁面には黒々と焦げ跡が残る。

あれが光線の真価なのか。はたまた異なる変化を加えたのか。

知り得るのはこの『世界』を作り出した少年のみ。

5 - 8 未元物質へダークマター（後書き）

どうも、櫻井です。

一話丸々戦闘シーンでしたね。

相変わらず主人公が空気で（汗

直接加勢したりはしませんが、ほんの少し手伝う感じになると思います。

今までで一番原作寄りの話だったかと。

ヒロイン（？）も空気だしちょっとオリジナル色が薄いですよね  
…。なんとかしていきたいと思えます。

それでは次回、お楽しみに

5 - 9

境界

越エラレナイ壁

(前書き)

「次章からは主役を張れますよ、とミサカは落ち込むあなたを励ましてみます」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「別に落ち込んだじゃいねえ。ついでに、今だって一応主役だ……」  
学園都市最高峰の超能力者(レベル6)

インターフェイス  
接続回路



「アイツら……！」

インターフェイス  
接続回路は上空で激戦を繰り広げている二人の能力者を見上げていた。

まさに電光石火の攻防を目で追うことは、容易な作業ではない。現に気を抜いて見てみれば、壁やガラスがひとりでに崩れているように見える。

「ねえ、インターフェイス。あそこに、あの人はいる？ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

逃げまどう人々の波に流されそうになりながら、インターフェイスの杖を掴んで打ち止めが言う。

「……………」

無言で、インターフェイスは周りを見渡した。

冷静さを失った学生達が我先にと地下街に逃げ込み、地上も逃げる人間で一杯だ。

往来の真ん中で立ち止まっている二人は明らかに邪魔であり、時折転ぶ者の姿も見える。

「……………。チツ」

彼は舌打ちして、傍らの打ち止めを見た。

尋ねてきたものの、確信を持った瞳で上空の戦闘を見つめている。

そして再び、混沌とした周りの状況に目をやる。

(ガラじゃねえが…やるしかねえよな…)

\*

学園都市上空で、その頂点二人の能力者が互いの能力をぶつけ合う。

一方通行が放つ竜巻が、垣根帝督へと迫っていく。見る見る威力の衰えるそれを垣根は翼の一振りですれらを一蹴する。

二人の体が交錯し、一方通行がビルの壁面を踏み砕き、生じた破片を垣根へ向けて蹴り飛ばす。

通常であれば大した意味もなさない行為だが、一方通行が蹴った破片は『超電磁砲』をも上回る速度で突き進み、凄まじい空気摩擦で破片が消滅してもなお残る衝撃波が垣根に襲い掛かる。

爆音と共に周囲を破壊しながら迫る衝撃波を、垣根は翼に渾身の力を込めて拡散させる。

「アレイスターとの直接交渉権」

「なに？」

体を交錯させ、互いに能力の織り成す現象をぶつけ合う中、一方通行は呟いた。

「オマエはそいつを狙ってこの俺を殺すつもりらしいが、オマエはそいつを掴み取ってどオするつもりだ？」

アクセラレータ  
一方通行の空気振動からなる高熱の波動を歪めた法則で無力化しつつ、垣根は薄ら笑いを浮かべる。

「調べはついてたか。その価値にも気付かぬえテメエに話したところで無駄だろうがな」

翼を介して放った殺人光線を、空气中に散布した未元物質ダイクマターで乱反射させ、一方通行を襲わせる。

「安心しろ。別にこの街を潰そうってんじゃねえ。この街は利用できるからな。テメエが後生大事に扱ってるガキや妹達にも危害を加えるつもりは無い」

襲い来る未知のベクトルを既存のベクトルで逸らしながら、垣根へ向け破片を巻き込んだ竜巻を放つ。

「オマエみてエな格安の悪党の台詞、イチイチ信用すると思ってるのかア？ 仮にオマエの言うことが事実だったとしても、知りもしねエクソ野郎にアイツらを任せるつもりはねエよ」

翼の浮力を利用して、垣根が竜巻をかわしつつ、彼は翼を刃に変えて、一方通行に襲い掛かる。

「テメエの許可なんか求めちゃいねえよ」

集めたベクトルを翼にぶつけ、羽が舞い散る中、垣根は淡々と言

つてのけた。

「そんで？アレイスターの『本命の核』に居座るこの俺を叩き潰して、代わりにオマエがそこに入り込むってか。ハッ、哀れな野郎だな」

再び交錯する二人の体。高速で交差した二人の体から、それぞれ深紅の鮮血が散る。

垣根は脇を抜けていった一方通行を振り返る。アフセラレータ相手も同様に振り返った。

「悲劇の使い道は色々だ。胸に抱えるもよし、語って聞かせるもよし、人生の指針にするもよし。オマエは胸に抱えた拳句に勝手な判断でブツ壊そうとしてやがるな。そのために無関係なガキ共まで巻き込もうとしゃがった。ご大層な理由があれば一般人を殺してもイイなんて考えた時点で、オマエの悪はチープ過ぎる」

「説得力に欠ける説教だな」

急降下して互いに能力の刃を鏢迫り合いながら、垣根は興味なさそうに言った。二人は街の一角、大型のスクランブル交差点へと降り立つ。互いに全力を伴った能力の衝撃波を撒き散らし、交差し交錯し力を振るう。あつという間に、降り立った交差点は傷だらけになっていく。

「俺だって好き好んで一般人を狙うつもりはねえよ。気分次第では悪党だろうと格下なら見逃してやる。だがそいつは命張ってまでやるようなことじゃねえ。テメエにしても、今こうして俺と戦いながら野次馬や通行人を叩き潰してんだ。飛び散った破片は間違いない。下の連中を襲っただろうし、放たれた衝撃波は奴らを薙ぎ払った。」

こうしてる間にも、この街は死人が増えていく」

「……………」

「ラストオーダー最終信号を狙ったのもその保護者らしきガキを狙ったのもそういうことだ。自分を柵に上げて説教たれてんじゃねえよ、人殺し。俺もテメエも同じだ」

強烈な翼の一撃でアクセラレータ一方通行は吹き飛ばされ、二人は数メートルの間を空けて向かい合った。

「三下だな」

「あ？」

糾弾されたアクセラレータ一方通行は、何故か笑っていた。垣根が眉根を寄せて訊き返す。

「美学が足りねえからそんな台詞しか出てこねえんだよ、オマエは。そもそも、何で俺とオマエが第一位と第二位に分けられてるか知ってるか」

垣根はそれに答えなかった。何を言っているんだ、という怪訝そうな目を向けるばかりである。

そんな垣根を愉快そうに眺めて、アクセラレータ一方通行は血のにじむ両手を緩やかに広げる。

「その間に、絶対的な壁があるからだ」

その立ち姿や言葉があまりに不愉快で、垣根の頭は沸騰しかけたが、不意に彼は気付いた。

今まで意識しなかった、周囲の状況に。

アクセラレータ  
一方通行と垣根帝督の戦いは、第七学区という戦場で行なわれた。

全体ではないにせよ、かなりの範囲を駆け巡り、互いの能力を衝突させた。

見ても、ビルのガラスは割れ、あちこちの壁はひび割れ傷つき崩れており、人々の道しるべとなる標識や信号機は折れ曲がって窓に突き刺さり、地下に根を張る街路樹はビルを抉って突き刺さっている。

これだけの事が起これば、あれだけの一般人の一人や二人、いや、何十人何百人と死んでいておかしくない。

にも拘らず。

死体はどこにも転がっていない。

驟雨のようにガラスが降り注いだはずだ。嵐のような突風が吹き荒れたはずだ。

なのにどこにも、死人はおろか怪我人の姿が見えない。

(…ま、さか……………！)

垣根の瞳が、吹き荒れる風を映した。

それはガラスを巻き込んで、どこかへと吹き飛ばしている。

垣根の瞳が、宙を舞う看板を映した。

飛び回り、瓦礫やガラスから人々を守っている。

垣根の喉が、干上がった。

「守ったって、いつのか…？」

信じられないという表情で、彼は正面に立つ<sup>アクセラレータ</sup>一方通行に目を向ける。

考えてみれば、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は烈風による攻撃を繰り返してきた。最初の一発目にしろ、不意打ちともなればもつと強烈な一撃をくらわすことも出来たのに、彼はそれをしなかった。

『ご大層な理由があれば一般人を殺してもいいなんて考えた時点で、オマエの悪はチープ過ぎる』

<sup>アクセラレータ</sup>一方通行の言葉を思い出す。

これが彼の、学園都市最強の超能力者レベル5の、生き様だとも言うのか。

未知の能力に手間取っていても、彼は間違いなく自分と対等に渡り合っていた。

お互いに血を流して、お互いに傷を作っていた。

互角だと、思った。

だがこの推測が正しければ、一方通行は一般人を守りながら戦っていたことになる。

ならば彼は、全神経を集中して、全演算能力を以って、自分と戦っていないかったというのか。

持てる全てをこの垣根帝督にぶつけていたのではなかったのか。

奴は7割程度の力で、全力の自分と互角に渡り合ったというのか。

「ふざ、けんなよ…俺はテメエの周りにだって『ダイクマター未元物質』をばら撒いた！テメエの計算に無いベクトルだって生み出していた！その上でこんな真似ができるわけが…！」

喚く垣根に、アクセラレータ一方通行は退屈そうに応じる。

「そオだな。確かに俺一人なら、もっと別な方法を探ったはずだ」

「なに……」



「第一位と第二位。能力の壁は絶対的ってほどでもねエ。だがオマエと俺の間には別の分厚い壁が存在してんだよ」

一方通行の向く方向を、垣根は呆然と見上げた。

そこに居たのは、灰色の髪をもつ少年。

「接続回路……？……！！……まさかお前らは……！」

垣根の頭の中で、全てのピースが一致した。

未元物質ダークマターによって風のベクトルの通り道を狭め、広範囲に影響を及ぼせないようにした。これで一方通行アクセラレータは自分に対し放てるベクトル量が限られ、威力も衰える。

それは未元物質ダークマターに満ちた空間の「外」も同一であり、中に居る一方通行アクセラレータは「外」への影響力が衰え、このような状況を作ることアは難しい。

にも拘らず、巻き起こる風は人々を守り、今も守り続けている。

つまり。

『接続回路インターフェイスが未元物質ダークマターの「外部」で風を生み出し、一方通行アクセラレータがその「向き」だけを操った』

ベクトルという概念を必要としないで単一方向への直線的な風を起こせる接続回路インターフェイスと、ベクトルという概念をもって自由な方向に風向きを変えられる一方通行アクセラレータ。生み出す者と操る者で起こした、風を

利用した奇跡。

「ムカついたかよ、チンピラ」

信じられないという表情で、こちらを睨みつける垣根へ向け、一方通行は蔑むような瞳で、くだらなそうに言った。上で未だに『作業』を続けている少年を一瞥して、告げる。

「これが『悪党』だ」

聞こえたのか、接続回路はその言葉を受けて静かに笑った。

対して、『能力者』としても、『暗部の人間』としても、『悪党』としても、『チーム』としても、『美学』としても、圧倒的な『差』を見せ付けられた垣根帝督は、ついにその頭を沸騰させた。

「ツツツ！ー！テメエに…！テメエらに酔ってんじゃねえぞ、一方通行  
アアアアアアアアアアアア！ー！」

激昂して、垣根の翼が長さを変える。

変わったのは長さだけではない。質量を変え、性質を変え、未知の殺人兵器へと変貌して、引き絞られた弓のようにになると、その照準を一方通行の急所六箇所へと機械よりも精確に定める。

接続回路は眼中に無い。まずは目の前の標的を潰そうと、その刃は瞬く。

それを見ても、一方通行は笑みを絶やさない。『守る』ことはもう一人に任せて、全力を以って垣根に言い放つ。

「来いよ」

「余裕だな。テメエの『反射』の有害と無害のフィルタは把握済みだ。インチキ臭せえその防御能力も、こいつには通用しねえ」

さらに翼に力を込めて、垣根が言った。

「確かにこの世界にやオマエの操る『未元物質』<sup>ダークマター</sup>なんてものは存在しねえ」

気をもめる垣根に、彼は人差し指を誘うように動かした。

「そいつに教科書の法則は通じねえし、それに触れた光波や電波、それだけじゃねえあらゆるベクトルが普通ならありえねえ変化をしまつ事もあんだろよ。だからまア、この世界の理に従ってベクトル演算式を組み立ててたんじゃない『隙間』<sup>ギャップ</sup>ができまつのも無理はねえが」

挑発するような一方通行の行為に、<sup>アクセラレータ</sup>垣根の殺意が膨張する。それを見越した上で、一方通行は告げる。

「だったらそいつも含めて演算し直せばいい。この世界は『未元物質』<sup>ダークマター</sup>を含む素粒子で構成されていると再定義して、<sup>オマエ</sup>新世界の公式を暴けばチエツクメイトだ」

勝ち誇ったような彼の宣言を受け、垣根はかつて無いほどの憤りを感じていた。双方の殺意が、向き合った二人の間に垂れ込める。

「俺の『ダークマター未元物質』をも……テメエのベクトル変換で操るだ……？」

「できねエと思うか？」

「ハッ。俺の底まで掴み取るつもりか」

「浅い底だ」

「ッ！！」

平然と告げられた言葉に、とうとう垣根が地を蹴った。翼を構え、全力で一方通行アクセラレータへと突進する。

一方通行アクセラレータは動かない。蔑むような、憐れむような、そんな見下した視線を、高速で襲い来る垣根帝督へと向けている。

垣根の六枚の刃が一方通行アクセラレータを突き刺す寸前に、彼はぼつりと眩いた。

「悪リイが、わざわざ掴むまでもねエよ」

言葉から一瞬と経たない内に、地面を揺るがすような爆音が、傷だらけの交差点に響き渡った。



どうも、櫻井です。

なんだかくちやくちやくちになってしまった感があります(汗

なんとかして接続回路を絡ませたくて四苦八苦した結果、こんな形になってしまいました。

原作では能力と生き様による絶対的な壁を見せ付けられた垣根ですが、本作では生き様と目的を共有する存在の有無という壁を突きつけられた感じですよ。

多分垣根の賛同者というのは居ても積極的ではないというか、身を危険に晒してまで共闘するような人物は居ないと思います。そこで一方通行と接続回路という、共通した目的と意志を以って行動する二人を見て、そういった存在がいなかったことを思い知らされ、逆上したと。

個人的には垣根が壊れた理由は対人関係のような気がするのですが、彼に無いものを見せ付ける、という能力者以前に人間としてのレベル差を実感させた感じですよ。

無理矢理感が漂うのは接続回路が風を生み出して一方通行がそれを操る、というシーンですね。

状況として、垣根が未元物質を張り巡らせ、一方通行が掴み取れるベクトル量を狭めて竜巻や烈風攻撃をほぼ無力化させたため、一方通行は接続回路の生み出した既に出上がったベクトルの「向き」だけを操作して上手く瓦礫等を吹き飛ばしたという状態です。

接続回路は圧縮して解放する、もしくはA地点からB地点まで粒子を移動させることで風を副次的に作っているの、細かい向きの操作までではできないので、協力しなければ完璧には守りきれません。

周りを覆う未元物質のベクトル妨害という原作ではなかった要素を組み込んで、無理矢理接続回路を戦いに加えました。

こんな強引展開を用意する作者ですが、どうか最後まで読んでいただけると嬉しいです。

それでは、次回はついにアレが登場します。お楽しみに

5 - 10 刃

黒イ翼

(前書き)

「この章長えな…」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「出番ないからってふてくされないの」

超能力研究機関の研究員にして常盤台中学の保険医

夕風志乃



爆音の響いた交差点は、奇妙なまでの静寂に包まれていた。

どこかから飛んできたらしい松葉杖を拾い、アクセラレータ一方通行はモードを切り替える。

「……………」

彼の背後には、一人の男の姿があった。

ゴールドブラウンのセミロングの髪に、どこかの学校のブレザーらしい衣服を身に着けて、交差点の真ん中に伏している。

彼の体の周りにはさながら魔法陣のような血痕が飛び散り、倒れている男が重傷であることを物語っている。

学園都市第二位の『ダークマター未元物質』を有する超能力者、垣根帝督。

そう呼ばれていた男の無様な姿だった。

傍に、あのお節介な灰色の少年はいない。

逃げまどいながらもこちらを見ていた野次馬の数は、ざっと百人から五百人。来た道を辿れば、その数倍の数にはなるはずだ。

瓜二つな人間が並んで、民間で妙な噂が立つのを防ぐためだろう。隠れることに慣れているだけあって、次に彼の居た場所を見たときにはその灰色の髪は見えなくなっていた。

つまりは、垣根帝督の処理をこちらへ委ねたと言うことだ。

振り返り、一方通行は哀れな第二位の少年を見た。

全力の、渾身の力を翼に込め、ただ第一位を屠るために作り出された異界のベクトル。

その未知のベクトルを解析され、自ら生み出した莫大なベクトルを反射され、彼は自分の渾身の力を自ら受けた。

彼にとって『便利な兵器』だった6枚の翼は、主を貫き消失した。

だが、まだ未元物質<sup>タークマター</sup>は死んでいない。

一方通行は無表情で、引き抜いた拳銃を垣根へと向けた。

そう。

彼は『悪党』であり、『ヒーロー』ではない。

ましてや第一位を倒すために、その弱点となる打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>や一般人を狙ったこの少年を、生かしておく道理はない。

たとえその始まりが悲劇で、この少年も悲劇の犠牲者だとしても。

如何なる理由があろうとも、この少年のとった選択は間違いだ。

そう。

自分はあの忌々しい『善人』とは違う。

自分は彼のように『導き手』になるつもりはない。

間違いは正すのではなく、撲滅する。

やり直せなんて甘い言葉は与えない。

与えるのは『死』。

罪を償うという行為の中で最も短絡的で簡素、しかしいずれの  
法よりも重い『罰』。

自分にそれを執行するだけの権利があるかと言われれば、間違い  
なく『無い』。

権利も持たぬ者が罪人を粛清する。

本来であれば理不尽な行為だが、『悪党』である自分には関係な  
い。

既存のルールや常識に囚われない『一方的』な業。

それこそが『悪党』。

『善人』との違いはそこにある。

一方通行は親指で拳銃のハンマーを押し上げた。

「あばよ、三下」

気絶した垣根の頭部に狙いを定め、引き金に指をかける。

過程を無視し、結果によって未来を紡ぐ悪の道。

迷いなどない。

感情を排除し、冷酷にして非情たる結末を生み出し、その先にある平穏たる世界を掴み取るために、結果を作り出すトリガーを引

「待つじゃんよ、一方通行!!!」

視界外、静寂の中、聞き覚えのある大声が響いてきた。

無感情なまま、一方通行は静かに目を向ける。

野次馬の壁から飛び出してきた、見覚えの、見知った顔。

ナンセンスとしか言い様のない緑色のジャージに、色気のない、意志の強そうな瞳を持つ女性。

学校の教師であり、治安維持組織「警備員」の一員という顔を併せ持つ、かつてはこの自分を保護すると言ってきた馬鹿な女。

黄泉川愛穂。

わずかに表情を変えた一方通行に、アクセラレータ彼女はまっすぐ走り寄ってくる。

「…今までどこへ行ってたかは知らない。今この状況が何を示しているかも多分理解できてない。今のお前にまつわることの、一つだつてわからない。…でも、これだけは言えるじゃんよ。…その銃を、こつちに渡せ。そんなもの、お前には必要ないものじゃんか！」

必死に叫ぶ黄泉川。

彼女はなんの武装もしていない。

ただでさえ全身に凶器を纏う一方通行に、アクセラレータ身一つで訴えかける。

この様子を見て、沈黙している野次馬たちは何を思っているだろう。

馬鹿と笑うか。

無謀と罵るか。

黄泉川自身、している事の危険性は理解しているはずだ。

戦闘で街を滅茶苦茶に破壊した暴走能力者を相手に、丸腰で訴えかける女。

自殺行為という言葉さえ甘く感じられる、論理的とは世辞にも言えない愚かな行為だ。

そんな黄泉川の姿を見て、一方通行は無表情のまま口を開く。

アクセラレータ

「俺は悪党だ」

故に、彼女の否定は適応されない。

「それなら私が止める」

黄泉川も譲らなかつた。その意志を瞳に込めて、まっすぐにこちらを見据えてくる。

「本気で言ってるのか」

理解ができない。彼女の掲げる意志を汲み取れない。

「止める以外の選択を、私は知らないじゃんよ」

きつぱりと、黄泉川が言い放つ。一方通行が眉をひそめた。

アクセラレータ

倒すではなく、止める。

それこそが彼女の生き様だった。

一方通行アクセラレータという少年が、悪党の道を選んだように。

彼女もまた、正しい道で子供たちを守る事を選んだ。

こちらを見つめる黄泉川の瞳を、正面から見据える。

そこに妥協という意味は見られない。

馬鹿馬鹿しい、そう吐き捨てられるような、絵空事の行動指針。

そんな道に光を見出し、体を張って訴える黄泉川。

「一方通行アクセラレータ。お前が善人か悪人かなんて関係ない。お前がどんな世界に浸っているかも関係ない。大切なのは、そこから連れ戻す事じやんよ。どれだけ暗い世界にしようが、どれだけ深い世界にしようが、どれだけ悲しい世界にしようが、私は絶対に『お前』を諦めない！絶対にお前を、必ずお前を、そんな世界から引きずり上げてやる」

二者は相容れない存在のはずだった。

悪の道と正義の道。

決して交わらない、根本から異なる平行線。

だがそれは、『立ち塞がれない』わけではない。

道は違えど、両者が立つ世界は同じ。

黄泉川愛穂は続ける。

「だから…私は立ち塞がる。守るべき子供のために。愛すべき平穩のために。それは…『お前』がいて、『ラストオーダー打ち止め』がいて、『あの子』もいて、みんなが笑って暮らしている風景だ。多分お前と同じ事をしてるあの子がこの場にいないのが残念だが、その未来のためには、その武器は必要ないものじゃなか」

相容れない道を進む者が話す絵空事。

そんな『甘え』に満ちた道へと、引き戻そうとする女。

アクセラレータ一方通行はしばらく沈黙した後、その銃口を黄泉川へ向けた。感情の失せた深紅の瞳が、自分を救おうとする『善人』を映す。

彼女の『優しさ』は、アクセラレータ一方通行の道を阻む『障害』となる。

たとえそれが真心から来るものであるうとも。

たとえそれで自分が幸福になれたとしても。

断ち切らなくてはならない。

道を阻む者は切り崩す。

『悪党』として。



引き金にかけられた指に、力が込められる。

この道から救うと決めたのだ。ラストオーダー 打ち止めも、シスターズ 妹達も。

この道から守ると決めたのだ。ラストオーダー 打ち止めを、シスターズ 妹達を、芳川桔梗を。

そして、黄泉川愛穂を。

ならば冷酷にならなくてはならない。

それが世界を、守るべき者すらも敵に回す事になるうとも。

そうして救うと決めたのだから。

「無理だ」

「…っ」

気がつけば。

黄泉川愛穂は目の前に居た。

アクセラレータ 一方通行の手を、黒光りする拳銃ごと、優しく包み込んでいた。

「…お前は、その程度の悪党なんかじゃないじゃんよ」

気付けば、黄泉川の手には拳銃が収まっていた。

アクセラレータ一方通行が手にしていた刃は、いつの間になくなっていった。

いつの間にか、自分は銃を手放していた。

(……………な)

理解、できなかつた。

いや、理解するだけの働きを、脳がしようとしていないのだ。

呆然と、働かない脳でこの結果について考えながら、驚き丸くなつた目を掌から黄泉川へ向ける。

彼女は一方通行アクセラレータの拳銃からマガジンを抜き、銃身に収まっていた弾丸を取り除き。

アクセラレータ一方通行に、微笑みかけ。

その顔を引きつらせた。

\*

「は………？」

表情が変わった黄泉川を見て、アクセラレータ一方通行が目を見開いた。

彼の瞳は、彼女の腹部に据えられた。

脇腹から飛び出す、刃物のような翼の先端。

数秒と経たない内に、彼女のジャージに、深紅の液体が染み出してくる。

時間が経過することに、濃さを、広さを変えて、大きくなっていく赤い染み。

「………！」

黄泉川はそれを見て、アクセラレータ一方通行に何かを言いかけた。

だが、それだけだった。

「な………」

ばたりと、黄泉川の体が地面に崩れる。

そして、その存在に気付いた。

倒れた黄泉川の向こう側。

6枚の翼を背から伸ばし、血の滴る片腕を抱えて立っている、一人の少年。

鈍い粘着質な音を立て、少年の翼が黄泉川から離れた。

垣根帝督。

たった今葬られようとした、道を違えた超能力者。

「……どれだけ暗い世界にしようが、どれだけ深い世界にしようが、どれだけ悲しい世界にしようが、必ずそこから連れ戻す、だと……？」

俯いて、垣根は低い声で言った。

自分は一方通行アクセラレータに敗れた。

そして今、その勝者の手によって、審判が下されようとした。

納得など行かない。

だが、敗者となったからには、勝者の審判には従わなくてはならない。

それは構わない。

全力を以って戦い、敗れ、その果てに死することになることは厭わない。

それが『負ける』ということなのだから。

だがこの女はなんと言った？

その勝者によって敗者が葬られるというのに、それに割って入り、拳句に勝者を『救い出す』？

戯言にもほどがある。

審判を下させずに、無様に生き恥を晒せと言うのか。

邪魔でしかない。その行為は『救い』でもなんでもない。

故に、垣根はその『邪魔者』を攻撃した。

「……できる訳ねえだろうが。そんな簡単なわけねえだろうが！今更やり直せるはずねえだろうが！これが俺たちの世界だ。これが闇と絶望の広がる果てだ！さんざん上から説教垂れて、偉そうなこと言っというて、最後の最後でくだらねえモンにすがりやがって！！ふざけんじゃねえよ！それが teme の語る『美学』かよ！！」

故に、叫ぶ。憤る。くだらない感情に飲まれてくだらない結果を叩き出したくだらない超能力者を、感情のままに糾弾する。怒りと悪意が支配する思考の生み出す支離滅裂な罵声を、ただただ発していく。

「言ったとおりじゃねえか！結局 teme は俺と同じだ！誰も守れやしない。これからもそうだ。数え切れねえ量の人間が死んでいく。俺みてえな人間に殺される。ははっ！そうだろ一方通行。今までだつてこんな風に大勢の人間を殺してきたんだろが！！」

ゆっくりと、垣根は脚を引き摺って歩みだした。

その目は一方通行を向いていない。血まみれな体を無理矢理動か

し、『邪魔者』へと向かっていく。

意図を察したのか、アクセラレータ一方通行が口を開く。

「や…、めろ…」

震える声で、アクセラレータ一方通行は言った。だが垣根は止まらない。

黄泉川の傍まで来て、彼女を睨みつける。

「聞っこえねえよ」

黄泉川からする鈍い音。

彼の持つ『未元物質』やいはが、その体を圧迫する。

「やめろ！！」

アクセラレータ一方通行が叫ぶ。

だが垣根は止まらない。

黄泉川とアスファルトの隙間から、深紅の液体が漏れてくる。

「聞っこえねえつつつてんだろおがよおおおおおお！！」

垣根の怒号が空間に響き、深紅の液体を広げていく。

「あてられてんじゃねえよバーカ！何を会話で解決しようとしてんだ！違うだろうが。そんなのは『悪党』じゃねえだろうが！テメエ

の『美学』じゃねえだろうが！俺たちのやり方じゃねえだろうが！  
！」

女の体が痙攣した。与えられた重圧は、確実に彼女を死へと追い込んでいく。

「動きを止めたきや殺せばいい。気に食わなけりや壊せばいい！悪つてのはそういう事なんだよ！救いなんて求めてんじゃねえよバカが！へらへら笑って流されようとしてんじゃねえ！テメエみてえなクソ野郎にそんなもんが与えられる訳ねえだろうが！んな権利があるはずがねえだろうが！おら！見せてみるよ！俺に認めさせてみるよ！ベラベラ語ってやがったテメエの悪つてやつをよおおおお！」

垣根の叫びに、アクセラレータ一方通行は俯いた。

垣根はそれを鼻で笑う。

「言い返せねえじゃねえか！ははっ！ざまあみるクソ野郎が！所詮テメエなんてその程度かよ。その程度だったのかよ！俺を倒しといてなんだよそりゃあ！！ああ！？そら、さっさと……」

罵詈雑言を放つ中、垣根は何かを感じ取った。

(あ………?)

アクセラレータ俯く一方通行が、小さく何かを呟いた。

垣根が眉をひそめた直後。

アケセラレータ  
一方通行の背中から、黒い何かが飛び出した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおッ！！」

飛び出した何かと共に、少年の咆哮が響き渡った。

その背から噴射する、翼にも見える何か。それは爆発的な速度で展開され、辺りにそびえるビルの外壁を大きく削り、辺りを揺るがす。悪意の集合にも見えるどす黒いそれを見て。

「は…はは…」

垣根の口から笑いが漏れた。

そして、理解した。

自分が今の今まで扱ってきた異界の素粒子、『<sup>ダークマター</sup>未元物質』。それは一体なんだったのか。どこから引きずり出してきたものなのか、何を意味していたのか。わかってみれば、何だ単純だな、と嘆息したくなるようなモノだった。

「スゲエな……。スゲエ悪だ。やりやあできんじゃねえか、悪党。  
ははっ…確かにこれなら『<sup>ダークマター</sup>未元物質』は『<sup>スベアプラン</sup>第二候補』だよ。第二位になっちまって当然だよ」

素直な賞賛だった。純粹に、その翼を前にして思った。



「ただ…そいつが勝敗まで決定するとは限らねえんだよなあ!!」

垣根の叫びに呼応するように、その三対6枚の翼は爆発的に展開された。

アクセラレータ  
一方通行の黒い翼に引けをとらない、数十メートルもの長さ到達し、無機質でありながら神秘的な光をたたえ、見る者を魅了するような輝きに包まれる。

さながら神や天使が用いる兵器のように、莫大な力を内包して。

グアツ!!という翼のはためきに呼応して、既存の空気が悲鳴を上げる。そう、まるでその存在を捻じ曲げられることに対し抵抗するように。しかし垣根の操る『ダークマター未元物質』はそれを許さない。

両者が抱えるのは、既存の法則に無い有機と無機。

この世界とは異なる世界の有機と無機。

神にも等しい力の片鱗を振るう者と、神の住む天界の片鱗を振るう者。

この条件ならば、勝負は互角。

そして垣根はアクセラレータ一方通行のように暴走していない。

清しい気分だった。

かつてこれほどまでに自分の力に自信を持ち、同時にそれを操る

だけの自信が沸いたことがあつただろうか。

体中で暴れる『ダークマター未元物質』を、その全てを。

底の底、奥の奥まで、掌握しているという自覚がある。

これで学園都市における第一位と第二位の順位は逆転した。

虚勢でもなければ負け惜しみでもない。勝ち負けに固執するが故の感情論は適応されない。

単純にして率直、ただ無意識のうちに出てきた感想。

気分が高揚する。

今の自分ならば、世界中の軍隊を相手にしても、学園都市に居る全ての能力者と同時に敵対しても、外にいるらしい妙な連中が相手でも、無傷で打ち勝つ自信がある。

「ははははははっ！あははははははははははははははははははははははッ！！！」

高揚する気分は高笑いとなって垣根の口から飛び出した。

地を蹴り、真の覚醒を遂げた6枚の翼をアクセラレータ一方通行へと振るう。

そこに不安の色は無い。わずかな敗北の可能性すら頭に無い。

故に、アクセラレータ一方通行は眼中に無かった。

湧き上がる自信を、絶対的なまでの力を。

ただ目の前に居る実験台モルモットで試したい。

もはやその程度の理由だった。

振るった翼がアクセラレータ一方通行に迫る。

『勝った』。

そんな言葉が頭を過ぎった瞬間、垣根は世界が傾くを感じた。

「1」………ッ!？」

気がつけば、自分の体は地面にめり込んでいた。

仰向けに倒れ、強固なアスファルトに無理矢理体が食い込んでいく。

理解が出来なかった。

絶対的な確信が崩れ、垣根は状況の把握を急ぐ。

目に見えない何かが、垣根の全身に莫大な圧力をかけている。

一方通行アクセラレータはあの黒い翼を動かしていない。

ただ、感情の感じられない瞳でこちらを見て、その細い腕を静かに振るっただけ。

それだけで、ただそれだけの行動で、絶対的な確信を持ち絶対的な能力を手にし絶対の地位に君臨していた垣根帝督は敗北し、無様な現実を突きつけられていた。

不意に、焼けるような激痛と共に、ブチブチという音が聞こえた。

『ピンセット』を装着していた右腕が、肘の辺りから千切れていた。

(が……ば、ア！！な、何が、一体何が      ツ！?)

痛みと共に混乱する頭で、現状について整理しようとするも、いくら思考してもこの結果に結びつかない。

『一方通行アクセラレータ』はあらゆるベクトルを操る能力だ。しかし、この世界を構成する全てのベクトルを注ぎ込んでも、これだけの現象を引き起こせるとは思えない。

この自分が。

垣根帝督が。

『未元物質ダークマター』が、負けるとは思えなかった。

そこに理屈がないことを悟った。

理解が及ぶはずがないと悟った。

一歩一歩、黒い翼を広げた白い少年が、こちらへと近づいてくる。

それは自分の『死』へのカウントダウンなのだと、垣根は知覚した。

与えられる謎の力が、感覚器官すら狂わせる。

痛みはもうほとんどなかった。

ただ、わずかな未練か『死』への恐怖が蓄積されていく。

アクセラレータ  
一方通行が、最後の一步を踏み出した。

「は…は、はは…」

力ない笑いが喉から漏れた。

「 y j r r p 悪 q w 」

「ちくしょう。………テメエ、そういう事か！！テメエの役割は  
ッ！？」

アクセラレータ  
一方通行の拳が振り上げられ、自分の視界が埋め尽くされる。

それが、垣根の見た最後の『世界』だった。



どうも、櫻井です。

心理描写満載の10話をお送りしました。

これで垣根とお別れと思うとなんか寂しくなりますね。

思った以上に膨らんでしまって、過去最高の文字数(？)になってしまいました。最後まで読んでいただけに本当にありがとうございます。

今回の話の主演は垣根なので、垣根の意識が飛んだと同時に終わらせました。次回はちよつとウチの主人公にも出番があるかな？

次回で暗部編は最終話です。

それでは次回、お楽しみに

5 - 1 1 願

確力ナ信頼

(前書き)

「一体誰なのでしょう、とミサカは疑問を口にします」  
シスター・ドリアルナンバー  
妹達識別番号 10412号  
エクスプローラ  
多重観測



大地を揺るがす轟音は、あの戦場となった交差点を離れた接続回インターフェ路にまで届いていた。

言い聞かせ待たせていた打ち止めと共に、音の方角を振り返る。

(……この音)

研ぎ澄まされた感覚は、その音の発生源を正確に特定した。

強固な構成物が崩れる音。

そしてもうひとつは、まったく聞き覚えのない音だった。

漠然とした表現とするなら、スペースシャトル等に用いられるエンジンが噴射する音に似てはいるものの、それとは異なる。これまで生きてきて破壊音は一通り聞いた気がするが、その中で一度も聞いたことのない音だ。

ただこの『噴射の音』が平穏なものでないことは確かだ。

(状況から鑑みて、垣根の野郎が出してるモンじゃねえだろうが…  
一方通行の能力でこんな音が…)

できないことはないかもしれないが、こんな音が出る攻撃に心当たりはない。

既に辺りは日が陰り始め、わずかだが太陽の光が赤みを帯びてき

ている。そうかからず茜色の空が広がりそうだ。

行くべきか行かざるべきか考えていると、不意に足元の打ち止めラストオーダーがぐいぐいと彼の黒いシャツの裾を引っ張った。

「あん？」

怪訝に思い、その行動をとった少女を見る。彼女は普段の天真爛漫な表情ではなく、思い詰めたような大人っぽい表情で、

「お願いがあるの、ってミサカはミサカは真摯な瞳で見上げてみる」  
声のトーンも、いつもより低い。

彼女の言いたいことは、大体わかった。接続回路インターフェイスは頭を掻き、

「…アイツに会いに行きたいってか」

「うん、ってミサカはミサカはあなたの憶測に頷いてみたり」

当然のように、打ち止めラストオーダーは言葉通り頷いた。接続回路インターフェイスはすぐには答えない。

彼女の安全を優先するのであれば、未だに戦闘が続いているかもしれない空間に連れて行くのは好ましくない。このまま彼女を連れて、冥土ヘヴンキヤンセラー帰しの病院にでも黄泉川とやらのマンションにでも行った方が賢明な選択なのは間違いない。

だが。

(このガキの意思を無視するってのはどうなんだ?)

安全な道ばかりが正しい選択とは限らない。

例えば夕凧志乃。

彼女は『スクール』に関して話したとき、ほんの少しだが声音を変えた。

あのお節介な世話好き女は、インターフェイス接続回路の意思を尊重したのではないだろうか。

黄泉川愛穂と芳川桔梗、その二人を呼んでおいたのは暗部の話を極力にくくするためだったのではないだろうか。

現に一方通行が居ないという<sup>アフセラレータ</sup>ことを芳川が言ってから暗部の話を<sub>ア</sub>出してきたし、あのまま話が流れればのほほんとした『これからよろしくお願ひしますムード』になったことだろう。

彼女は本当は、インターフェイス接続回路を『スクール』なんかに関わらせたくない<sub>ア</sub>かったのかもしれない。

もっとも、代償が代償だからいずれは話さざるを得なかっただろうが。

ならば、この小さな少女のために、自分がしてやれることはなんだ。

数秒の間をおいて、彼は馬鹿馬鹿しい、と苦笑した。

「インターフェイス接続回路? ってミサカはミサカは呼びかけてみる」

彼女の声を聞いて、インターフェイス接続回路は小さく笑った。  
無論、いい笑顔ではないのだが。

「……そうだな。オマエが決めることだもんな」

そう言って、彼は静かに歩き出した。

\*

グシャッ、グシャッ、と、生々しい音が響いていた。

その音源は黒い噴射の翼を聳えさせ、しきりに腕を振り上げては振り下ろしている白い少年。

彼の目の前には、何かが横たわっていた。横たわっているという表現も相応しくない。

より正確には『横たわっていた』だ。

ひび割れたアスファルトの中に食い込んでいる何かからは深紅の液体が漏れだし、すぐ傍には妙なグローブのはめられた右腕が転がっている。

それは垣根帝督と呼ばれていたモノだった。

今でも『人型』こそ保っているが、アスファルトの隙間に埋め込まれていくそれは『人間』には見えない。

「ああアアああああああ！！ああああアアアあああ！！」

そんな状況を作り出している悪魔が、空気を揺るがす咆哮を上げた。

どんなに獰猛な獣より恐ろしく、どんなに凶悪な魔物よりもおぞましい叫び。

地獄絵図のような光景を、野次馬たちはただ見ていた。

ただの虐待なら『惨い』と評し、数に気を高めて当事者を糾弾しただろう。

だがこれはそんなレベルの問題ではなかった。

ただ殺すよりもはるかに惨い、『原型を失う』という事象。

彼らはその原型を失っている少年のしたことを見ていた。

無防備な女に妙な翼で傷を付け、拳げ句に妙な力でその傷を広げた少年。

それも十分に惨いことだった。

許せないとも思った。

だが、そんな人間でも哀れに思えてしまうほど、その光景は圧倒的だった。

見えない何かか肉を打ち、その存在を食い荒らす。

確実に絶命してもなお続けられる殺戮に、彼らは為す術もなければ動くことすらできなかつた。

そんな中、血まみれの女が警備員に助け起こされた。女は翼の少年を指して何か叫んでいる。

「放せ、私はまだ　　ッ！！」

「駄目です、黄泉川さん！！」

諭すような警備員アンチスキルの声が聞こえたかと思えば、空から新たな音が加わった。

バタバタと空気をたたく音。見上げてみれば、そこには黒い攻撃ヘリが旋回していた。

赤みの出てきた空を、切り裂くようにして移動するヘリ。

それに目を奪われている間に、この傷ついた交差点には警備員アンチスキルの部隊が集合していた。

完全武装した警備員アンチスキルが翼の少年を包囲し、駆動鎧や装甲車パワードスーツがさらにその周りに展開し、野次馬はあつという間に交差点の外へと追いやられてしまう。

「銃を下ろせ！一方通行を『アクセラレータ』  
説得』するのに、そんなものは必要ない！！」

腹から血を流しながら、女が叫ぶ。

「誰に銃を向けてる！あれは私達が守るべき子供じゃんよ！！なに……」

女が叫ぶ中、翼の少年はその体を仰け反らせ、天に向かって咆哮した。

噴射の翼の勢いが増していく。

「オオオおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

翼の少年の叫びと共に、大地が、空気が、大きく震え、その場に居た全員が青ざめた。

少年の拳が振り下ろされ、アスファルトに埋まる肉塊が生々しい音を響かせ、アスファルトそのものにさらなる亀裂が刻まれる。

その敵意の矛先がこちらに向いていないことはわかる。

だが、その圧倒的なまでの破壊の様は、見る者に恐怖を植え付けた。

今でこそあの哀れな少年に矛先が向いているが、それがこちらに向かないとは限らない。

『暴走』という言葉はそんな生易しい可能性を示すほど安寧たる

モノではない。

空を舞う戦闘へり。

目の前を通り抜けていく駆動鏡。パワードスーツ

銃を構える警備員。アンチスキル

その武器で何とかできるなら直ちにその悪魔を潰してくれ。

そんな結論が、野次馬たちの頭をよぎった刹那。

アンチスキル少年を囲む包囲網の外から、ちよつとした突風が吹いた。一瞬、警備員を含む人々の目が、風の吹いてきた方角を映す。彼らは場違いな光景を目にした。

とてとてとその小さな体で精一杯に駆ける十歳くらいの幼い少女。肩まである淡い茶髪に、瞳の大きな活発そうな顔立ち。空色のキヤミソールはその容姿にマッチしているが、その上には不釣り合いな男物のワイシャツを羽織っている。

彼女は突風でわずかに開けた野次馬の隙間を抜け、多方向から発生する不自然な突風に狼狽える警備員アンチスキルの包囲網をぐり抜け、渦中の翼へと走り寄る。

思わず唾然とする彼らは、彼女がどんな存在なのか検討もつかない。好奇心に駆られた子供のように思えたことだろう。だが彼女は、この場に居る誰よりも、この状況を打破できる可能性を持っていた。



殺戮の地獄に舞い降りた最後の希望。ラストオーダー

「見つけたよ、ってミサカはミサカはゆっくりと話しかけてみる」

\*

突風を生じさせていたインターフェイス接続回路は、交差点傍の空中通路に立っていた。

正直なところ状況はさっぱりわからなかったが、インターフェイス接続回路は迷わなかった。

あの化け物じみた黒い翼を広げる少年と、あの幼い少女を再会させる。

それがあの少女の願いであり、彼女の願いに応えることが自分の役目のひとつだった。

ならばなにを悩む必要があるだろう。

インターフェイス接続回路に関わってきた人間の多くは、『なんでそんな綺麗事を』と小馬鹿にするだろう。

実際、昔の自分ならこんなことはしなかった。

彼女に手も貸さないし、そもそも事態に関わらない。

だが今は違う。

あの研究熱心なクソ野郎共に返す言葉が見つかったのだ。

そう。

『理由なんかねえ』と。

愚直すぎるがそれが真理だ。

人間の感情や心境にわざわざ理由を付けていては埒が明かない。

人間が人間に対し『何か』を願い、それに応えてやることに、『理論』は必要ない。

そして。

あの少女にはその『先』を叶えるだけの意志がある。

あるいは翼の少年にも。

些細な不安もなかった。

あの二人の間に生じているモノが、それらを踏みにじるはずがない。

少女の呼びかけに、翼の少年がゆっくりと振り返る。

風の唸る轟音が炸裂した。

噴射の翼が空気を引き裂き、莫大な威力を込めて少女へと振りかぶられる。

下の野次馬から息を呑むような声がしたのを、インターフェイス接続回路は聞き取った。

あの翼が、少女をどうしてしまっかなど一目瞭然だった。

ビルを破壊するような翼が、少女に向けて、それも大きく振りかぶられる。

あの小さな体がバラバラに、あるいはもっと酷い状態になって路面に飛び散る光景が浮かぶことだろう。

対して、インターフェイス接続回路の瞳は静かだった。

わずかな不安もそこにはない。

ガギイイ！！という凄まじい轟音と共に、噴射の翼は打ち止めのラストオーダー目の前で停止した。

ふっ、と。

インターフェイス接続回路が微かに笑う。

一方通行の漆黒の翼は、ラストオーダー打ち止めからわずか数センチの位置で震えながら停止している。

まるで見えない壁でもあるかのようには。

その壁の正体を、インターフェイス接続回路は察していた。

学園都市第二位ですら太刀打ちできない黒い翼。頂点に最も近い存在に止められずして、果たして何に止められるだろう。

ラストオーダー打ち止めにはそんな能力はない。

非公式たる自分にもない。

仮に止められる者が居るとすれば。

それは力を生み出す本人しかない。

ラストオーダー打ち止めを守ると誓い、そのためにさらなる血を浴び続ける道を選んだ、学園都市最強の超能力者<sup>レベル5</sup>。

アクセラレータ一方通行しかない。

震える翼はギチギチと音を立て、ラストオーダー打ち止めから少しずつ離れよう

としている。

こんな状況でも、当の打ち止めは恐怖など微塵も感じていない。

インターフェイスインターフェイス、一方通行を信頼しているのだ。

その様子を眺めていると、不意に、バアンツ！という銃声が当たりに響いた。

初めて、接続回路は目を見開いた。

一人の警備員アンチスキルが発砲したのだ。

おそらくは、打ち止めを一方通行から守るために。

だが一方通行はそれを間違つて認識したらしい。噴射の束のようだった翼が枝分かれし、鋭い羽となって発砲する警備員アンチスキルに迫る。

どうしようもないことはわかっているが、思わず接続回路は空中通路の手すりに足をかけ。

「ストップ、ってミサカはミサカは忠告してみる」

そんな声が聞こえると同時に、警備員アンチスキルの喉元まで迫っていた羽の先端が、ピタリとその動きを止めた。

思わず呆然としてしまう。

「大丈夫だよ、ってミサカはミサカは手を伸ばしてみる」

言ったとおり、彼女は一方通行アクセラレータにその小さな手を伸ばした。

まるで抱っこを求める子供のようだが、その雰囲気は泣き叫び暴れまわる子供を宥める母親のようだった。

「もうこんな事しなくても大丈夫だよ、ってミサカはミサカは正しい事を伝えてみる」

アクセラレータ  
一方通行が、両手で頭を抱えた。

苦悩するように叫びながら、ラストオーダー打ち止めの言葉を振り払うように黒い翼を振りかぶり、再び彼女へと叩きつける。

だが、またしても翼は寸前で停止し、ガギイン！！という鈍い音だけが辺りに響く。

喚くように咆哮し、頭を抱えながら背中の翼を振り回す。

だが、やはり翼は打ち止めの寸前で停止し、やはり抑制する音だけが響き渡る。

そこには苦悩があった。

何を思っているのかまでは、インターフェイス接続回路にはわからない。

だがそこには明らかな葛藤があった。

「あああああああああッ！！がアアあああああああああああッ！！」

咆哮が炸裂する。何度も何度も、翼を打ち止めに振り下ろすが、

それは一度として悲劇を生み出さない。

どれほど時間が経っただろう。

もう空は茜色に染まっている。

それを背に同じ行動を繰り返す一方通行アクセラレータからは、もう殺意は感じられない。

動作そのものに変化はないが、明らかな感情の変化が感じられた。

小さな子供の駄々ラストオーダーのようだと思った。

そして打ち止めラストオーダーはそれを宥める母親のように思えた。

翼が目前に迫っても、その柔らかな笑顔を崩さない。

確かな信頼が、そこにはあった。

一際大きく翼が振り上げられ、渾身の一撃が打ち止めに振り下ろされる。

それが少女の手前でピタリと止まると共に、一方通行アクセラレータの動きも止まった。

俯く彼の表情は、ここからでは見えない。

おそらく野次馬にも、警備員アンチスキルにも。

見えているとすれば、彼の目の前に立つ打ち止めぐらいだろつ。ラストオーダー

刹那、彼の翼に変化が生まれた。

翼が付け根の方から、夕空に溶けるように消えていく。

消えきると共に、アクセラレータ一方通行から力が抜けた。

慣性に従い、重力のままに倒れようとする。

目の前に立っていた打ち止めが、ラストオーダーパツと顔を輝かせ、アクセラレータ広げた両手に一方通行を迎え入れた。

抱えきれず、ラストオーダー打ち止めが背中から地面に倒れるも、その両手はしつかりとアクセラレータ一方通行を抱き締めている。

その小さな体に少年の体重を受けながら、彼女は幸せそうに少年の耳元で囁いた。

「良かった、ってミサカはミサカは言ってみる」

それを見届け、インターフェイス接続回路は小さく笑うと、そのままその場を後にした。

\*

『垣根帝督の謀反…か』



薄暗い部屋の中、巨大な円柱型の水槽の中で、総括理事長アレイスターは呟いた。

逆さまに水槽に浮かんでいる彼は、槽内に表示されている情報に目をやった。

『やれやれ、また少し計画を変更しなくてはならないようだ』

「日常茶飯事では？」

水槽の外に人影がある。アレイスターは特に気にした様子もなく、『そうだな。これだけの事を成すには、思うようにはいかないものな』

「はあ」

人影は適当な相槌を打った。愛想の良い相槌だ。しばらくの沈黙の後、アレイスターは槽内のモニターを閉じ、改めて人影と向かい合った。

と言っても、相変わらず逆さまの状態なのだが。

『……さて、妙なイレギュラーのせいで長居させてしまったね。君の働きには本当に感謝している』

「こちらこそ。あなたのお役に立てて光栄です」

人影が笑う。アレイスターは満足そうに笑み、

『では…これからもよろしく頼むよ、  
非公式の超能力者』  
シークレットナンバー

暗い室内に、男の声が反響した。

どうも、櫻井です。

長い長い15巻の内容がようやく終わりました。

正確には土御門による『ドラゴン』のコード発見シーンが残っています。まあ原作でも山の後の下り坂、後日談のようなニュアンスだったので次章に回します。

打ち止めで終わりという手もありましたが、伏線回収をやっておきました。

接続回路の代わり、現役の『非公式の超能力者』ですね。

オリジナル要素だったので大事に大事に扱ってきました。

能力は相変わらずチートな感じですが、まあ厨二気味な作者と思  
って…(笑)

次章はそんな新キャラが見え隠れしたり、一息ついたコメディ主体だったりの予定です。

本日中に解禁予定の章末特典はちょっとしたSS、9月30日の多重観測のお話です。勝ち組云々の会話シーンですね。紹介するキャラクターがいなくなっちゃったんで…(汗)

打って変わって描写が軽くなると思います(笑)

それでは次回、お楽しみに

章末特典 SS? 妹達の昼下がり

9月30日。

第七学区のとある病院の廊下には、不思議な光景が広がっていた。

「さて、今日から君たちは少しずつリハビリを始めるわけだが…」

カエルのような顔をした医者が、年配らしい落ち着いた声で話す。

「外出着は全員常盤台中学の冬服でよかったのかな」

そんな彼もちよつとした笑いの種になるが、それよりもはるかに奇妙な光景が、彼の目の前に広がっている。彼の目の前には茶髪の少女。その数は6人。全員が同じ顔だった。

「問題ありません、とミサカ10032号は返答します」

「サイズもみんな一緒だが」

医者が言つと、先ほどの少女の隣の少女が口を開く。

「計測するまでも無く全員一致です、とミサカ13577号は即答します」

「サイズの違いなど生じる余地はありません、とミサカ10039号は補足します」

さらに隣の少女も、口を開く。

「ただ、10412号は一度測定をする必要があるかと思われます、とミサカ10511号は指摘します」

そのまた隣の少女が言った。医者はふむ、と顎に手をやり、

「どうなのかな？多重観測」

彼は左端に立っている少女に目をやった。彼女は一瞬考えるように目を閉じて、

「問題ないと思いますが、とミサカは私見を口にします」

ミサカ10412号、通称多重観測。エクスプローラ

絶対能力進化実験の中止と同時に、多重能力進化実験へと回され生き残っている唯一の個体である。

彼女を含む200の個体の内199体は、当時実戦演習に参加した非公式の超能力者、接続回路によって殺されている。

とある少年の介入によって中止になった実験の後、彼女は他の妹達と共にこの病院で調整を受けていたのだった。

「そうかい。でも念のため、後で測定を受けておいてね。他には…」

「…」

医者が続けようとする中、右端の少女がおずおずと口を開いた。

「ミサカは…」

その表情は少し他の個体よりも豊かで、恥ずかしそうに頬を染めている。

医者は表情変化が豊かな理由は把握していた。

この19090号は、ある人物から感情データをインストールされているのだ。

「どうかしましたか、19090号、とミサカは……ん？」

怪訝に思ったらしい隣の10032号が、何かに気付き。

ベスト越しに、19090号のスカートとお腹の隙間に指を突っ込んだ。

「あ……」

恥ずかしそうにしていた19090号は、今度こそ困ったように妙な汗をかき、スカートが下がらないよう手で押さえる。だが10032号の探求は止まらない。

「指が二本入るほどの隙間があります、と、ミサカ10032号は緊急報告します」

報告を受け、その隣で様子を見ていた13577号が疑惑の目を19090号へと向ける。

「全てのミサカは同一であるはずなのに、とミサカ13577号は驚愕を露にします」

「バストその他はどのようなのですか、とミサカ10039号は精密検査を提案します」

「ミサカ10511号も同意します」

多重観測を除くミサカ達の中で、妙な空気が漂いだした。何故そこまで突き詰めるのか、多重観測にはよくわからない。

「まあ、食事や運動によって個体差は出るからねえ」

目の前のちよつとした事態を鎮めようと思ったのか何なのか、医者はそのなことを口にした。早い話が『19090号だけ生活パターンを変えていた』という解決結果になるが、それはミサカ達の間では地雷に等しい。

10032号が指を引き抜き、詰問ムードの漂うミサカ達を振り返る。

「つまり、他のミサカに内緒で世に言う『ダイエッター汚い真似』なるものを実行していたという事ですか、とミサカ10032号は追求を続けます」

「…そういえば、19090号が女性週刊誌を読み耽っていたところを見かけたことがあります、とミサカ13577号はにわかには出しません」

「言われてみれば、19090号のベッド脇の引き出しに、その週刊誌に載っていた髪飾りが入っていたと、ミサカ10511号は報告します」

「その際、好きな男性から貰った指輪を左手薬指にはめれば勝ち組



との情報を、極秘に入手していました、とミサカ10039号はこぞとばかりにリークします」

口々に情報を出し合うミサカ達。

特に興味も無く言うべき情報も持ち合わせていない多重観測はそれを横目で眺めている。それもそのはず、彼女には状況記憶としてミサカ達の好意の対象を知っているが、実質の感情記憶は持ち合わせていない。絶対能力進化実験前後の記憶が曖昧なのである。

「指輪……………勝ち組……………」

ぼそり、と10032号が呟く。

「ミ…ミサカは……………」

思わず後ずさる19090号。

そんな空気の中、こういった事にはやや疎い医者はさらなる火薬を供給する。

「君達も、19090号さんと同じことをすれば、同じ変化が得られるんじゃないかなあ」

医者言葉と共に10032号が振り返り、他のミサカも鋭い目を19090号に向けた。

殺気にも似た意識の波が、19090号へと注がれる。

「ミ、ミサカは、自身の危機管理能力に従い逃亡します…！と、ミサカはあっ……………！」

と言いながら駆け去る19090号を、多重観測以外のミサカが追いかけていく。

それを不思議そうに見ながら、医者は小さくため息をついた。

「……何か間違えたかな」

「指輪……」

困ったようにミサカ達の消えた廊下の先を見つめる医者とは別に、多重観測は自分の左手薬指を眺めて呟いた。感情の向かう先は異なるものの、入手した情報にはちよつとした興味が沸いている。

その頬は、微かに赤い。

章末特典 SS? 妹達の昼下がり(後書き)

どうも、櫻井です。

苦し紛れのSS。まあこの時まで多重観測は幸せだったんでしょ  
うね。

接続回路の安否は分かるし色々情報も仕入れられて(笑

数時間後にはその接続回路に呼び出されて打ち止めを保護する役  
目が回されるわけですが。

また新キャラ紹介できるだけの余裕が無かったら、ちょっと短め  
でライトな文章をお届けできるかなと思います。

それでは次章、お楽しみに

6 - 1 不穩 新夕ナ動キ (前書き)

「同じ妹として興味があるのですが、とミサカは彼女の妹について  
考えます」

シスター・多リアルナンバー  
妹達認識番号 1 0 4 1 2 号

エクスプローラ  
多重観測

10月9日、PM8:00。

インターフェイス接続回路は『スクール』の隠れ家に居た。

彼の目の前には、たくさんのディスプレイが設置されている。カタカタというキーをたたく音だけが室内に響く。

「最初から裏切るつもりだったわけ？」

不意に、背後から声がした。若い…女というよりは少女の声だ。わずかにディスプレイを見る目を細める。

「何がだ」

インターフェイス接続回路は静かに聞き返した。

「あなたが『グループ』のアクセラレータの一方通行と結託して垣根を謀ったんでしょ」

「どうだかな。オマエこそどうなんだよ。最後まで垣根に付き合っ  
気だったのか？」

少女の問いには答えず、インターフェイス接続回路は問い返す。

「質問してるのはこっちなんだけど。そうね、命に危険が及ばない程度には」

「そうか。なら俺はまず根本からオマエらと違えよ」

椅子から立ち上がり、インターフェイス接続回路が振り返る。

『メジャーハート心理定規』、ドレス姿の少女だった。

「俺は『スクール』の任務なんざ興味ねえ。ここで動いてんのは、それで俺の目的が果たせるからだ」

メジャーハート心理定規は黙ってこちらを見ている。

「貸しがあんのは垣根じゃなく、学園都市そのものだ。だから『スクール』がそれに刃向かうってんなら、そいつを鎮めんのが俺の仕事だ」

淡々と、インターフェイス接続回路は言い放った。なるほどね、とメジャーハート心理定規は笑う。

「ふーん…それじゃ、無理もないわね」

あっさりと、彼女は言った。意外そうに、インターフェイス接続回路は彼女を見る。

「随分折れんのが早えな。ここらで一発やらかすかと思っただが」

杖をつき、インターフェイス接続回路が歩み寄る。

「まあね。そうしても良かったけど、あなたはアクセラレータ一方通行並みにリスク高そうだから。それに失敗した作戦のことゴネたって仕方ないでしょ」

平然と言つ心理定規。メジャーハート 接続回路が眉をひそめる。インターフェイス

「あのクソ野郎に協力したつつーこたあ、オマエもこの街に不満があんだろ？そんな簡単に諦めきれぬモンなのかよ」

インターフェイス 接続回路とて特力研の事は今でも根に持つてはいる。だが妹達シスターズの平穩を守るためには、学園都市に荷担するのが最良の選択だった。故に今は特力研云々は頭の隅に追いやっている。

「こつちの事情まではノータッチでお願いね。垣根の話に乗ったのは、目的を果たす上で近道になりそうだったからよ。だから私にとつては失敗しても別に問題なかったの」

メジャーハート 心理定規の話聞いて、インターフェイス 接続回路は舌打ちした。

「裏切り者扱いしてる割には随分と口が軽いじゃねえか」

「一応あなたも『スクール』の生き残りだからね。私も生き延びたからには、あなたと関わることも多いでしょうし」

きつぱりと言いつ切る心理定規。メジャーハート

「…くつだらねえ。大体、上からすりゃオマエは裏切り者だろ。俺はともかく、オマエは殺されても仕方ねえんじゃねえのか」

吐き捨て、インターフェイス 接続回路は彼女を見返した。色素異常の緋色の瞳に、メジャーハート 心理定規の姿が映る。

「私もそう思つてビクビクしてたんだけど」

彼女は軽く肩をすくめ、懐から紙切れを取り出した。  
受け取り、インターフェイス接続回路が目を細める。

それは10月9日18時時点の、暗部組織の生死情報だった。

『グループ』は土御門元春、海原光貴、アクセラレータ一方通行、結標淡希と全  
員生存の印がつけられているが、他はほとんどが死亡確認だ。

（『アイテム』 麦野沈利は生死不明か：あの後一人でどこかへ移動  
したのか？）

同じく『アイテム』の『AEMストーカー能力追跡』は無能力者の少年と一緒に逃  
がしておいたためか、『搜索中』となっている。

『メンバー』も一人を除いて全滅、『ブロック』も壊滅している。

「暗部同士の潰し合いで、せつかく作った役割配分は総崩れ。差し  
当たっては残りのメンバーかき集めて新組織を組むつもりらしいわ  
よ。『グループ』を除いてね」

「なるほどな。俺やオマエもそこに加えられるってことか」

インターフェイス接続回路は納得し、メジャーハート紙切れを心理定規へ返す。

「どこ行くのよ」

渡しながら通り過ぎていったインターフェイス接続回路を、メジャーハート心理定規は目で追った。

「帰んだよ。とっとと戻らねえと抜け殻になっちまうからな」



振り向くことなく、インターフェイス接続回路は口を開いた。軽く首のスポーツネツクレスのような装置に触れる。  
アクセラレータ一方通行の補助をしたりして、麦野戦を終えて4分足らずだった能力使用モードは1分もなくなっている。  
通常モードでも、後2時間程度しか保たない。

学園都市最高峰の元非公式の超能力者シークレットナンバーは、今や電気で動く人形のようなものだ。

\*

同時刻、夕凧志乃は第七学区の病院に居た。

親友である黄泉川愛穂が暴走能力者の攻撃で重傷と聞き、駆けつけたのだ。

「志乃……！」

待合室には、芳川桔梗の姿があった。志乃がそちらに歩み寄る。

「愛穂はどっ？」

「命に別状はないですって。私もさっき話を聞いて来たばかりなんだけどね」

「そう……」

ほっ、と志乃は胸をなで下ろした。どうやら二度と会えないなん

て事は免れたらしい。

消灯時間が近いせいか、病院内に患者の姿は見られない。みんな自分の病室に戻っているのだろう。

そんな事を考える志乃の目が、待合室のソファに寝そべる少女を映した。

ラストオーダー  
打ち止めだ。

「あら。その子、ちゃんと家に帰ってたのね」

少女を見ながら、志乃が言った。昼間にインターフェイス接続回路から連絡を受け、ずっと気になっていたのだ。芳川が嘆息する。

「帰ってきたのは荷物だけ。タクシーを途中で下りて、ジャッジメント風紀委員の女の子に保護してもらってたらしいわ」

「らしいわって、あなたそれでも保護者なの？」

呆れたように志乃が言うと、芳川は決まり悪そうに頬を掻き、

「うーん…朝は…ねえ？」

「変わってないのね…」

志乃が苦笑いすると、不意に携帯がポケットで震えた。取り出し、表示を確認する。

やや切れ長の瞳が、わずかに細められた。

「誰から？」

「妹よ」

言いながら、志乃は返信画面に映り、細い指をキーに走らせる。

「そういえばそんなことも言ってたわね。歳の離れた妹が居るって」

「まあね。曖<sup>あい</sup>昧<sup>まい</sup>って言うんだけど。あの子が10歳になる頃には、もう研究所の方に入っていたから会うことなんて滅多にないんだけど」

これはなかなか踏み込みにくい話をしたか、と芳川が少しうろたえる。

「えーと…妹さんも学園都市に住んでるのよね？」

そんな適当な質問が、芳川の口から出て行く。

「常盤台中学の三年生よ。研究員と保険医を兼ねてるのは、そういう事」

早い話が、まともに会ってやれなかった妹のために、常盤台の保険医を買って出たということか。芳川は納得し、少し肩の力を抜いた。

「どうやら、最悪の状態ではないようだ。」

「そ、そう。仲良くしてるのね」

「年頃が年頃だから、円満ってほどでもないんだけどね。それなりには接してるわ」

ボタンと携帯を閉じて、上着のポケットに仕舞うと、彼女は芳川へと目を向ける。

「常盤台中学ねえ……って、そこ名門校じゃない？その生徒って、あなたの妹は一体どんな能力を……」

「いい能力じゃないわ。あの子もそれで悩んでるんだもの」

芳川が言い切る前に、志乃が掻き消すような声で言った。あまり見ない志乃の様子に芳川が戸惑っていると、志乃は軽く時計を見て、「夜通し手術になるかもしれないわね……また明日来るわ。愛穂のこと、宜しく」

「え？…ええ」

すたすたと歩いていく志乃の後ろ姿を見て、芳川は怪訝そうに眉をひそめた。

6 - 1 不穩 新夕ナ動キ (後書き)

どうも、櫻井です。

章の始めなただけだって地味な内容です。

色々伏線も投入しましたが、だんだんと明かしていききたいと思  
います。

ソレでは次回、お楽しみに

6 - 2 奇襲 限ラレタ時間ノ中デ (前書き)

「みんなは彼みたいに連続してON・OFFしちゃ駄目よ」

暗部の研究員にして常盤台に妹を持つ一人の姉

夕凧

志乃

## 6 - 2 奇襲 限ラレタ時間ノ中デ

インターフェイス  
接続回路は第七学区の空中通路を歩いていた。

眼下のスクランブル交差点には何人かの警備員アンチスキルがおり、その破壊の跡に佇んでいる。

『スクール』の隠れ家を出て約20分。杖をつくインターフェイス接続回路はどうしようもないもどかしさに駆られていた。

蝉脇牽掛との一件以降、装置がなければ意識すら保てない体になって、今や限界時間まで後2時間程なのである。かつてはその能力を自由に使えたというのに、今や普通に動き回ることすら48時間に限定されてしまった。

(とは言え……)

能力使用が限られたからこそ、能力の応用についてさらに追求するようになったのだが。

ついさつき『スクール』のパソコンを調べていたのも、学園都市に存在する能力を参考にするためだった。麦野にしてやったように、応用次第では他人の能力と同じ結果を得られる場合もある。

『分解』という強力な武器を有するインターフェイス接続回路だが、身体自体は極々平凡、むしろやや弱いくらいだ。逃げるだけならまだしも、生身で喧嘩になれば敗北することだろう。

故に、直接的な打撃力を高める必要もあると彼は踏んでいた。次いで、未知の物質や人工的に難解な組み方をした物質に対応するた

めの防御力も。

そんな考えから大いに使えそうな応用方法を発見したものの、バツテリー残量の関係で明日に保留という事にした。

(猿真似と言われりやそれまでだが……そういう能力だからな。できんのにやらねえのは最悪の選択だ)

割り切って、インターフェイス接続回路が歩いていると、不意に妙な気配を感じた。

( あん？ )

軽く振り向くが、そこには誰もいない。

そもそも、9時近いこの時間帯に出歩いているのは無能力者レベル0の不良くらいだ。

道行くインターフェイス接続回路の前方にも、人の姿は見られない。

( 気のせい……いや )

インターフェイス接続回路が装置に触れる。ほんの一瞬モードを切り替え、再び通常に戻す。

( なるほどな…… )

『インターフェイス接続回路』という能力は知覚能力としての一面を持っている。認識範囲内の物体の位置情報からその構成粒子に至るまで、一度記憶した素粒子を使用していれば意思次第で瞬時に把握することができるのだ。

特に、今のような冷静な状態ならば把握スピードも向上する。



彼が拾った情報は、『刺客』の存在だ。

人数は10名。1ヶ月ほど前にもこれくらいの人数に勘違いで襲撃されたが、今回の相手はもう少し賢いようだ。

(どうする…。こんな連中、片っ端からブツ潰すこともできるが、バッテリーの残りもわずかだ。精々50秒動くのが限界だろうし、奴らは前の連中みてえに分かりやすく攻めてこねえ。適当に能力ブツ放して勝てる相手でもなさそうだな)

能力使用モードなら50秒、通常モードなら2時間前後。  
ここから病院まで、普通に歩いて40分ほど。

(最悪40分ぶん残しときゃ、あの医者目の目に留まる場所までは行けるか…)

ざっと計算して、能力使用モードを使えるのは30秒程度になる。  
インターフェイス接続回路は軽くポケットに手を当てた。

(武器は『メンバー』の下部組織らしい野郎から奪った、8発ぶんの銃だけか。ハッ、面白えじゃねえか)

ニヤリと、インターフェイス接続回路の唇が歪む。一瞬でも気配を見せたということは、ここらで仕留めるつもりなのだろう。

病院まで逃げ切れそうにもない。

そしてこちらも無様に逃げるつもりはない。

なら相手になるまでだ。

（『スクール』に恨みのある奴か……垣根が仕留めたつっうスキルアウトの残党か？辰滝の一件、まだ根に持ってやがんのかよ）

フウと息を吐き、インターフェイス接続回路は足を進め、薄暗い路地へと入っていく。

視界の悪い空間だ。果たしてどう出てくるのか。

むしろ楽しみだった。

「さあてと……出てこいよおクソ野郎共オ！！いつまでもチキンやってねえでさっさと面ア晒しやがれ！！」

返答はなかった。

代わりに銃声が響いてくる。

インターフェイス接続回路は笑ったまま、銃声と同時に装置を作動させる。彼を貫くはずだった銃弾は、彼に触れると同時に火花を散らして空気に混ざる。

「そこかあ！！」

モードを切り替えながら、インターフェイス接続回路が引き金を引いた。倉庫のような建物の窓を貫くと共に、窓の向こうから悲鳴が聞こえる。

「はっ、いいねえ…最高だなあ！」

不気味に笑いながら、インターフェイス接続回路が路地を進んでいく。

能力使用モード、残り49秒。

余裕だな、と思う。

カツカツと杖をつく音が、先ほど刺客の居た倉庫の中にこだまする。

どこかの大型デパートの食料保管庫らしく、鉄製の棚の中にはダンボール箱が積み重ねられている。奥には肉類を保存する冷凍庫の姿も見えた。

そしてモードを切り替え。

「オラア！！」

踏みつけた地面を砕き、烈風で巻き上げて倉庫棚ごと刺客を潰す。

再びモードを切り替え、振り向きざまに引き金を引く。

割れるような銃声と共に、飛び出した弾丸が後ろの棚から飛び出した刺客の胸元を、正確に射抜く。

悲鳴と共に、人間の倒れた音がした。

笑いを絶やさず、また一瞬だけ切り替えて、残りの位置を解析する。

後7人。拳銃の残弾は6。能力使用目安は後26秒。

「ハヒヤッ！ちよろいもんだなあ！！簡単過ぎて欠伸が出そおだわ！！」

笑いながら、インターフェイス接続回路は歩を進めた。それほど余裕もないのだが、余裕を見せていた方が向こうも警戒するだろう。もつとも、バッテリーが少ない今を狙ってきたということはこちらの事情も把握しているかもしれないが。

(…ん？待て。つーことは相手は何だ？たかがスキルアウト風情が俺のデバイスの事まで知り得るか？しかも正確にバッテリー残量まで計算して？…オイオイまさか相手はもつとデケエ連中か？)

思考しながら、インターフェイス接続回路はダンボールの海を前にしていた。

大小様々な大きさのダンボール箱が散乱しており、棚が倒れた際に破損したのか、穴の空いたダンボールからは缶詰めが飛び出しているものもある。

『人がまるまる入りそうな箱』も、転がっている。

インターフェイス接続回路が嘆息した。

一部どころか中身がごっそり飛び出している、それはそれは大きなダンボールから、間抜けにも服の端が見えていたのだ。

調子狂うな、と頭を抱えて、彼はモードを切り替

「がっ  
！」

頭に強烈な痛みが迸った。能力使用モードのまま床に倒れ込む。鈍器で殴られたと気付くまでに、そう時間はかからなかった。

「チツ…クソつたれが！」

立ち上がった時には、既に相手の姿はなかった。髪の中で蠢いて

いた生暖かい液体が、彼のこめかみから頬、顎へと伝う。

モードを切り替えてからも十数秒経過している。

慌てて通常モードに切り替えると、彼はその場に膝をついた。

杖が奪われていたのだ。

幸い銃は奪われていない。バッテリー切れさえ起こさなければ勝機はある。

彼は周囲に警戒しながら倉庫の床を這いずり、杖の代わりになりそうなものを探す。

棚の陰から辺りを見回し、インターフェイス接続回路は警戒を強めていた。

いくら無能力者の状態だったとは言え、真後ろにまで来ていた敵にモードを切り替えるまで気付かないなど普段の自分ならあり得ない。

相手の内一人は何らかの能力者が特殊な訓練を帯びた者と見ていだろう。

(まさかとは思うが、スキルアウトだけじゃなく暗部のどっかからも狙われてんじゃねえだろうな)

たかだかスキルアウトにあそこまでの事ができるとは思えない。

(チツ…俺は一体何と戦ってたんだ)

頭から流れ出てくる血が忌々しい。能力の制限さえなければこんな傷はすぐに修復できると言うのに…。

(ア…ちくしょう。頭がグラついてきやがった。能力使用は帰りの

分を考えたら後10秒くらいが限界だ。さっきの通りなら相手の数は後7…。クソが。一気に分が悪くなっちまったじゃねえか)

さっきの殴打の狙いはバッテリーのロスと足を奪う事だったらしい。

してやられた事に歯噛みしたくなるが、そんな余裕もない。

(能力が使えねえわけじゃねえ。やろうと思えばこの倉庫ごとブツ潰しちまうって手もあるが…)

まずは杖の代わりを探さないことには、仮に勝ったとしても病院まで戻れない。最悪、携帯で救急車を呼ぶこともできるが…。

(そうだ…杖…杖の代わりを…)

だんだんと視界が濁ってきた。

まるで赤ん坊のように四つん這いで移動し、倉庫の隅に置いてあったパイプを掴み取る。

あまりに掴みにくいそれを杖にして、よろよろと立ち上がった。

出血しているせいか頭がうまく働かず、足元もおぼつかない。思うより強力な鈍器を使ったのか。

(残り10秒じゃ大掛かりな手は打てねえな…。能力使用モードは連中の居場所特定にだけ使うしかねえか…いや…)

壁を背にして、モードを切り替える。

カツ！と目を見開いて、相手の位置情報を確認する。

(あ……?)

解析結果に、彼は目を丸くした。

どうも、櫻井です。

コメディ主体とっておきながらまた戦闘シーンを入れた約束破りの作者です(汗)

折角バッテリー危ない状態なんで利用させてもらいました。10月9日は事件で一杯ですね(笑)

前書きで夕風さんにも言わせましたが、今回はやたらとモード切り替えが多かったですね。節約です。

杖を奪われる、というシーンも今後の展開に必要な、いわばキットカケです。

約束破りではありませんが、ちゃんと次々回辺りにコメディ入ってきます。何だかんだで空気化してしまっている大切なヒロインに出版を…。

それでは次回、お楽しみに



6 - 3

進歩

小悪党ノ末路

(前書き)

「ああー死ぬかと思っただあ」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「夕方に真っ直ぐ帰っていれば、襲われずに済んだのでは?とミサ  
力はあなたの不注意を指摘します」

シスター・デジタルナンバー  
妹達認識番号10412号

エクステンローラ  
多重観測

(後10秒か…)

薄暗い部屋の中で、パーカーを着た少年が時計を見た。

彼の名は足南たりなという。

薄汚いドアから広い倉庫を見渡す彼の瞳は、暗く笑っている。

ドアの向こうから聞こえる息遣いやカチャカチャという音は、彼の『攻撃目標』が弱っていることを表していた。

(ははっ、大能力者レベル4とか聞いてちっとビビってたが、大したことないな)

少年がニヤリと笑う。

彼は所謂『殺し屋』のような立場にあった。

より正確には、契約金次第でどんな仕事でも引き受ける便利屋の方が近い。まあ、能力の関係上、任されるのは暗殺や情報収集がほとんどなのだが。

『スケルトン  
透明人間』。

それが彼の能力名だった。

名前そのままの、見る者に彼を視覚させない能力である。

実質足音や気配までは消せないが、長年の経験からそう言った『

欠点』すらカバーし、今や暗殺のエキスパートと名高い裏世界の大能力者だ。

そんな足南の今回の標的は、『インターフェイス接続回路』レベル4』という大能力者の暗殺だった。

自分に触れた分子を結合・分解するという一風変わった能力らしいが、脳に何らかのダメージを受け機械に頼らなければ自立もできず、能力使用も20分が限界という話を聞き、彼はすぐに対応策を練り上げた。

依頼主から貰ったファイルから目標の能力使用の限界直前を襲撃し、頭を殴って思考を乱し、頼りの杖を奪い、今に至る。

(さてと、もう一発殴ってくるかな。同じところを狙えばもっとだけダメージが期待できるし)

ゲームをするような気分で、足南は再び倉庫の中へと躍り出た。息を潜め、忍び足で移動する。

散らかったダンボール箱を見て、ふっと笑う。

人が入りそうな大きなダンボール箱。そこからはみ出た薄汚れた上着。何とも分かりやすいダミーである。

こんな手に引っかけかかってくれるとまでは思わなかったが、お陰でより安全に背後に回りこむことができた。

(馬鹿な能力者で助かったぜ)

もつとも、床を砕いてショットガンにするような相手だ。油断しすぎれば命が危ない。

(まあ、俺を攻撃することがまず難しいわけだがな)

久しぶりにやり甲斐のある仕事で、彼はたまらないスリルにやや興奮気味だった。マゾヒストと呼ばれても反論しないし、大体自ら名乗ろうと思うほどの自覚がある。

呼吸する音が近づいてきた。棚の向こう側だ。

(ひひっ、汎用性の高い能力だからって調子に乗りやがって。ま、そのくらいの方が突き落とし甲斐があるってもんだがな！)

洗練された無駄のない動きで、彼は棚の陰で武器を構える。気配は近い。

(ほら！もう一発　　ッ!?)

棚と棚の間に躍り出た足南は、思わず目を見張った。

そこにいたのは例の大能力者<sup>レベル4</sup>ではなく、さっき奴の弾丸に倒れた仲間だったのだ。

(な……え?どういっ…)

思考が混乱する。その瞬間、彼は後頭部に妙な感覚を覚えた。

ゴツッ、と、硬い何かが押し付けられている。

「ハァーイウジ虫クン。優越感のプールは楽しかったかなあ?」

「ッ!?!」

少年の低い声。この声には聞き覚えがある。というか、ついさっき聞いたばかりの声だった。

「なっ、なっ、なっ……お前、何で俺の位置が…ッ!？」

かつてない恐怖に上擦った声が、口から出る。突きつけられている物が拳銃であることは、すぐに把握できた。

「そうだな。正直な感想だが、テメエの姿は今も見えちやいねえよ。まあ簡単な話だ。テメエも十分理解してるとは思うが、俺の能力は知覚能力でもある。テメエが『人間の目に映らない能力』の持ち主だったにしろ、発散される体臭や音、『存在』自体は消せねえだろ？ 目には見えて無くても、居場所くらいは把握できる」

「そ、それで何で俺だって分かったんだよ。俺を除いて6人も仲間が、居るつてのに…」

足南が言うと、インターフェイス接続回路は小さく息を吐いた。

「どこまでナメられてんだかなあ……テメエの仲間はその間に転がってる死に損ないと向こうで棚の下敷きになってる野郎、それと上の階で心臓に穴ア空けて死んでるヤツだけだろうが」

それを聞き、足南は欠片のような自信が崩壊していくのを感じていた。策が見破られている。

「な、なんで…お前の知覚能力は、分子の位置情報くらいしかわからないはず…」

「ああ？まあ確かに、テメエに見せたような程度の時間じゃその程度しかわからねえよ。けどなあ、ほんの倍の時間かけるだけで、原子や素粒子の動きまで精確に把握できんだよ。7人も居て分が悪いと思ってるじゃ、テメエを除く6人は全員死体だったとはな。ったく、クソくだらねえダミーを用意しやがって。テメエ一人とわかりやあ、『節約』もそこまで慎重にしくたつていいからなあ。そこで息吐いてる野郎の傷をふさいで、『呼吸音』のダミーを用意すりゃ、テメエの背後に回り込むことなんざ造作もねえことなんだよ」

インターフェイス  
接続回路の音が、倉庫に響く。足南はガクガクと震えていた。  
震える膝が折れ、ぺたりと地面に座り込む。

演算が出来なくなったのか、彼の姿はじわじわと『世界』に浮かび上がってきた。

「まっ、ままま待ってくれよっ！俺っ、俺はっ！頼まれたっただけで……」

もはや隠れる気はなかった。とにかく自分の命が助かりそうな道を選択する。震える声で言う足南だったが、インターフェイス接続回路の表情は変わらない。

「頼まれたあ？誰に」

反応を聞き、足南はほんの少し安堵した。情報を渡せば、命が助かる可能性はある。

「せ、瀬良ウレつてやつだ！フルネームはわからないけど、ヤツはそう名乗ってた！お、俺はこっちじゃそれなりに有名な暗殺業をやってたがっ、まま、前金はたんまり貰ってたし、それなりに金がある

ヤツなんじゃないかつ!？」

「瀬良…ねえ。幾らの契約だ?」

対して気のない声を、インターフェイス接続回路は返してきた。少しでも逆らえば一瞬で殺しをしそうな雰囲気醸し出している。大量に噴き出てくる冷や汗を感じながら、足南は続ける。

「ま、前金だけでも5000万!成功報酬は2億もくれるってんだ!こここんな額前にして、出てかねえヤツなんかいないだろ!？」

そうだな、なら仕方ねえか、なんて甘い返事が来るとどこかで思っていた。

だが、目の前の悪魔は嘆息し、

「……俺の命ってなあ、いつからそんなに安くなっちゃったんだろうなあ。どこの誰だか知らねえが、勝手に人を特売品にしゃがって」

何を言っているんだこいつは、と足南は耳を疑った。

前金や成功報酬のレートを知らないのかと思った。

2億5000万という多額、いち学生が持つにはあまりにも大きすぎる。

にも拘らず、この少年はそれを『特売品』と断じた。

意味が分からなかった。

「まあ、ちったあ参考になった」

ジャカッ、という音と共に、黒光りする銃口が足南の額に押し付けられる。

「なっ、ま、待てよっ！助けてくれよっ、命ぐらい助けてくれよっ！ちゃんと、ちゃんと情報だつて渡したじゃんかよ！！」

恐怖で身動きがとれず、ただただ喚く。接続回路は無表情だ。

「悪いいな。生憎、テメエみてえな三流以下の小悪党をむざむざ見逃してやるほど心ア広くねえんだよ。まあ、見逃す理由もねえし、さっさと潰しちまった方が『今後』のためだろうからなあ」

目の前で、引き金にかけられた指が静かに動く。

「じゃあな、格下」

二度目の銃声が、倉庫内に響き渡った。

\*

少年の死体を前に、インターフェイス接続回路は静かに嘆息した。

（ちつと危なかったな……）

軽くスポーツネットクレス型の装置に触れる。能力使用モードの残



り時間は、21秒。  
ギリギリ病院まで帰り着ける残量だ。

相手の詰めが甘くなければ、あるいは帰り着けなくなっていたかもしれない。

(しかし、俺がバッテリーを節約すると踏んでの作戦か。まあ、2秒もサーチに使うことなんざそうそうねえからな。お陰で能力の研究が進んだが)

こきこきと首をならし、インターフェイス接続回路は取り戻した杖をつき、歩き出した。明日この小売店の業者がこの惨状を見たときには事件になるだろうが、そんなことは知ったことではない。むしろ、あちこちに死体を転がしたこの小悪党の方が問題だろう。どの道、『悪党』でインターフェイスある接続回路にはどうでもいい話だ。

(バッテリーを極力節約しなくちゃならねえ身としては、頼みの杖が奪われんのは好ましくねえな。なんか対策を練らなくちゃならねえか。それに、あいつの言ってた『瀬良』ってヤツも気がかりだ)

自分を狙う人間。暗部に浸っていれば命を狙われることなど別段珍しいことでもないが、こつも本格的な暗殺行為を受けると無視もできない。

能力の探究と瀬良という人物の調査。

それがさし当たったの目標になりそうだ。

(チツ……さすがに疲れたな。さっさと戻って寝るか)

一度小さく欠伸をして、インターフェイス接続回路は足を進めた。

どうも、櫻井です。

明日は更新が難しそうでしたので、本日更新させていただきます。

足南という名前は「足りない」というなんとも可哀想な由来です  
(笑)

あっさり死んでしまいましたが、人間やカメラから『認識』されないというそれなりに強い能力です。ただ詰めが甘かったがために敗北してしまいました。

実績から高をくくって調子に乗った拳句に失敗する、典型的な駄目人間タイプですね。

19巻の内容、10月17日に入るまでの七日間は完全オリジナルストーリーで展開されていきます。ほのぼのだったりシリアスだったり色々詰め込んで頑張っていきたいと思います。

それでは、次回の更新は月曜日です。どうぞお楽しみに！

6 - 4 鈍感 気付カナイデハナク気付ケナイ (前書き)

「ま、よくあるケースよね……」  
インターフェイス  
暗部の研究員にして接続回路の理解者 夕凧志乃

6 - 4 鈍感 気付カナイデハナク気付ケナイ

10月10日、第七学区某病院内。

インターフェイス  
接続回路はボサボサになっている頭を軽く掻いて、拳を握ったり開いたりしながら、体の具合を確かめていた。

病院に帰り着き、ベッドに寝そべったところでバッテリーの補給作業をするために電源を切られたので、約10時間ぶりに目を覚ましていた。異常が無いことを確かめると、彼は一度、僅かしかついでいない筋肉を軽く動かして、硬直した身体をストレッチする。

(そついや、昨日は結局風呂入ってなかったな)

一通り体をならすと、彼は立てかけておいた杖を手に取り、ベッドから立ち上がった。

\*

時を同じくして、多重観測は無表情ながらも拳を握りしめ、なんらかの決意を露わにしていた。

普段見ないその行為に、隣のベッドの10511号はすいと顔を向けてくる。

「どうかしましたか、10412号、とミサカは拳動不審なあなたに疑問を投げかけます」

「拳動不審とは心外ですね、とミサカはあなたを睨みつけます」

「突然拳を握りしめ、ガッツポーズをキメているのを不審と言わずして何を不審と言うのでしょうか、とミサカは不条理にも睨みつけてきたあなたに睨み返します」

う、と多重観測<sup>エクスプローラ</sup>は身を引いた。ほぼ無意識な行為だったため反論したが、聞かされてみれば確かに不審だ。

「そうですね、確かにこの場合はミサカに否がありそうです、とミサカは渋々負けを認めます」

そう言う多重観測<sup>エクスプローラ</sup>の手には、一枚のチラシが握られていた。

『ハンディアンテナサービス受付最終日』

そんな文面が紙面に踊っている。

「まさか10412号、こういったサービスはひとつの端末につき一度だけと知らないとは言いませんよね？」とミサカは9月30日の一件を思い出します」

はて、と多重観測<sup>エクスプローラ</sup>は小首を傾げ、9月30日の出来事を思い出す。個体自身の記憶が優先的に掘り起こされるため、黒ずくめの集団から逃げていた記憶が出てくるが、気にせず記憶を探る。

そして。

「……何か勘違いをしているようですが、ミサカはあの少年とどう

「こうしようとは思っていませんよ?とミサカは念のため断っておきます」

「?...?...?...?それでは、あなたは誰とそのサービスを結ぶつもりですか?とミサカは尋ねます」

首を傾げて、10511号が尋ねてくる。

先ほどの妙な気迫は感じられない。

「...さて、誰なのでしょう、とミサカは適当にはぐらかします」

因みにこれについては最上位のプロテクトをかけているため、探り出せるのは打ち止めぐらいのものである。<sup>ラストオーダー</sup>

\*

一方、シャワーを浴びて部屋に戻った<sup>インターフェイス</sup>接続回路は志乃と回線を繋げていた。

『「瀬良」?』

「ああ。昨日俺を襲ったヤツが言った。その瀬良ってヤツに金で雇われて俺を襲ってきたらしい」

数秒おいて、志乃の声が聞こえてくる。

『...聞いたこともない名前ね。それだけ隠蔽された人物なのかし』  
『う』

「……オマエでも分からねえか。こいつぁ、なかなかデケエのに狙われたみてえだな」

苦笑するインターフェイス接続回路。

『でも変ね。あなたはじきに「スクール」の残党として、新組織に配属されることになってるのに。上層部側にあなたを狙う理由なんてないはずだけど』

「確かにな。そいつは俺も気になってるトコだ。まあ同じ暗部でも、考え方なんつーのは各々の認識によるからな。俺を潰してえと思う奴なんざザラにいるだろ」

『……。そうね』

少し不服そうに、同意する声が聞こえてきた。

『事情は大体分かったから、こつちでも探りを入れてみるわ』

「ああ。頼む」

言つて、インターフェイス接続回路は回線を切った。しばらく携帯の画面を見て、眉間に皺を寄せる。

(……)。これ以上は夕凧も巻き込まねえ方がいいか……?)

『同じ泥沼に浸っている以上、最後まで付き合ってもらおう』とは言ったものの、そろそろ危ない気もしてきた。



なんだかんだで、志乃には色々な面で助けて貰っていた。

蟬脇のような外道だらけの研究員の中、彼女だけは自分の身を案じてくれたのだ。当時は荒れに荒れていたから辛く当たってしまったが、今思えば彼女の存在は大きかったように思える。

光の道への標を立ててくれたのは多重観測だが、人間らしい感情を教えてくれたのは他でもない夕凧志乃だった。

故に、多重観測や妹達同様、彼女は守りたい、守らねばならない人間の一人だ。

ハッキング等の腕は間違いなく彼女の方が上なため頼ってしまうが、本当ならそんな真似はさせない方がいいだろう。

（はっ、随分とバカバカしい考え方をするようになったな、俺ア）

自重気味に笑い、接続回路は携帯を閉じ たところで、コン

コンと、扉をノックする音が聞こえた。  
顔だけをそちらに向ける。

「誰だ？」

と言っても、大方見当はついているのだが。

『多重観測です、とミサカは答えます』

扉越しの声に、やっぱり、と接続回路は嘆息した。

「入れ」

応えると、ガラガラという音を立てて多重観測が入ってきた。

常盤台中学の冬服に身を包んだ彼女が、接続回路の座るベッドの脇に立つ。

「どうした、なんか用か？」

ぶっきらぼうに、そう言った。彼女が相手だとしてもやりにくい。志乃と違って業務会話と言うわけにもいかず、上手い言葉が見つからないのだ。

対して、当の多重観測はそわそわとせわしなく手指をいじりながら、

「今日は、お願いがあつて来ました、とミサカは緊張気味に申告します」

「お願いだあ？」

予想外というか、意外というか。思いもしない内容に、目を丸くする。しかし多重観測は真剣というか何というか、無表情なりに妙に鬼気迫る表情で続ける。

「はい。実は……これなんです、とミサカはチラシを指し示します」

彼女の取り出したチラシを見て、接続回路は意味が分からない、と頭を抱えた。

『ハンディアンテナサービス』。そう書かれたチラシの文面をざっと読んで、多重観測が入会特典のストラップが欲しいと言うことま

では分かった。

だが、それをさせてやるにはどうしても足りないものがある。

「……こりゃ、無理だろ」

「な、何故ですか、とミサカは不安げに尋ねてみます」

なんだか本当に不安そうに見えて、事実を告げるのもいい気がしないが、こればかりは仕方がない。

「オマエの持つてる携帯、そいつは研究所の関係者から貰ったモンだろ？なら契約はその研究所の方で手続きしてんだ。俺アタ風のヤツが用意した身分証があるが、オマエはないだろ？そいつがなければ、まず契約出来ねえんだよ」

理解しやすいように説明すると、

「そう、なのですか……とミサカは……」

「……ッ」

ほんのわずかではあるものの、眉を下げた姿を見て、よく分からないが「まずい」と感じた。

だが下手に期待を持たせてから落胆させるよりはマシではないのか。

（ああ、くそ。最善の選択じゃねえのか？……つか、何なんだこの変な感じはッ！）

イマイチこういう人間の感情に関係した事は分からない。志乃から学んだと思っていたが、学んだのは『優しさ』だけだ。こういう状況を打破するような便利な知恵はつけられていない。

(……いや待て。こいつが欲しいつつつてんのはあの滅茶苦茶美化されたカエルのストラップなんだろ。だったら契約なんかしなくたって買えんじゃねえのか)

時計を確認する。10時ジャスト。大体の商業施設が稼動し始める時間だ。

「……チツ」

今日は昨日頭に入れた能力の応用をより本格的に実行するためにどこか目立たない場所で実践するつもりだったが、守る守ると誓っておきながらその守るべき者の要望ひとつ応えてやれないのは好ましくない。それに実践なんて言うのはこれからいくらでも機会がある。むしろこういった事柄に時間を割くこと自体が難しくなることだつてこの先あるだろう。ならば今日この機会にこういった事柄を済ませてしまったほうが心置きなく闇に沈めるといふものだ。無理矢理自分を納得させ、彼はベッドから立ち上がった。

「外出されるのですか？とミサカは突然立ち上がったあなたに尋ねます」

感情の感じられない瞳が、インターフェイス接続回路を映す。彼はその瞳を見返して、

「オマエも来んだよ。そのやたら美化されたカエルの飾りが欲しい

んだろ。んなモン契約なんざしなくたって手に入る」

「はい……？いえ、その、そうではなくてですね……とミサカはどう説明すればいいのか戸惑います」

エクステローラ  
多重観測の本命は別なものだったのだが。インターフェイス  
接続回路は構わず歩き出した。

「他に何があんだよ。おら、行くぞ」

「え……？いえ、だからですね……とミサカは……」

混乱しながらも、インターフェイス  
接続回路に続く多重観測。

病院の廊下に杖をつく音を響かせて、インターフェイス  
接続回路は嘆息した。

今日は、らしくない一日になりそうだ。

どうも、櫻井です。

書いていて思いました。ラブコメは苦手っばいです(笑

まあキャラクター二名の性格によるところも大きいですが、どちらかといえば夕凧とのコンビの方が書きやすくはあります。まあこの場合は恋愛云々ではなく信頼関係に過ぎないわけですが。

本編でも接続回路のデレが始まっては居ますね。男の癖にツンデレです(笑

実質ヒロインは多重観測、保護者的なのが夕凧、というのが接続回路を巡る女性関係ですね。心理定規とは何も起こりませんし起こしません。ただヒロイン候補はひとりか二人増えるかもしれないです。

というか今のヒロイン人気あるんだろうか?とやや不安になります。

アクセス数見ると多重観測より夕凧さんの紹介の方が多かったりするので心配です。別に構わないんですけどね(汗

次回も、こんな調子でひねりのないラブコメ展開していきます

それでは次回、お楽しみに

6 - 5 進展 新夕ナ一面 (前書き)

「 ..... ハア」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

6 - 5 進展 新夕ナ一面

10月10日、AM11:45。

第七学区のショッピングモールで、インターフェイス接続回路は舌打ちした。

彼は今、吹き抜けの二階部分にある休憩所で砂糖をたっぷり含んだコーヒを啜っている。見かけに反して甘党の彼は、注文時に受け取ったミルクと砂糖に加えて追加注文した砂糖を入れており、もはやコーヒ本来の苦味はほとんど感じられないレベルにある。

普通の人間ならあまりの甘さにむせるようなチョイスだが、対して気にしている風も無く、彼は真正面に位置するアクセサリーショップのショーウィンドウに見入っている少女を瞳に映した。そんな姿を見て、ぼんやりと、『アイツも女なんだよな…』と改めて実感している。

(何やってんだかな……俺)

つい12時間前まで、得体の知れない刺客と戦っていたのが嘘のようだった。能力で応急処置を施しておいた頭に触れて、それが事実だったことを確認する。

(……まあ、これを守るためにやってんだから仕方ねえよな)

因みに例のカエルのストラップなのだが、未だに発見できていなかった。『ゲコ太』とかいうマスコットという情報くらいしか拾えていない。というか、こんな事に何で時間と頭を使っているんだろうと、馬鹿馬鹿しくもあつて嘆息する。……今日はこれで何度目だろう。



そうしている内に、ショーウィンドウを覗いていた多重観測が戻ってきた。

「何見てたかは知らねえが、ああいう店にはあの手の飾りは売ってねえと思っぞ」

「いえ……私が見ていたのは、その、ゆ、指……」

「は？指？なんだそりゃ」

いつになく挙動不審な姿に、インターフェイス接続回路は怪訝そうに聞き返す。

「な、何でもありません、とミサカは頭に思い描いたビジョンを削除します！」

「……今日のオマエ、変ってレベルじゃねえな」

変を超えて理解不能、そんな空気を醸し出していた。言いながら、飲み干したコーヒーをブースのゴミ箱に放る。杖を掴んで立ち上がり、エクストローラ多重観測へと歩み寄る。

「そう、でしょうか……とミサカは自分の胸に手を当てて反目します」

「……。ま、どうでもいいんだけどよ。さっさとあの飾り探し出して帰るぞ」

考えてみれば、平日の午前中に常盤台の学生が街を歩いていっているのだろうか。まあ、こんな程度で一般に存在が知れ渡るようなら

とうの昔に大事になっているはずだからいいのだろう。

\*

今日はどうも調子がおかしい。

杖について前を歩く少年を見ながら、エクスローラ多重観測は思った。

今日彼の病室を訪ねて、何をどう解釈されたのかゲコ太ストラップを求めてこうして街を当ても無く歩いているわけだが、どうにも落ち着かない。そもそもその目的は接続回路インターフェイスとの直接的な連絡手段の確保だったのだが、今回はそれを飛び越えての新展開が起こっていた。

こっそり19090号の引き出しから得た情報。

この状況はそう、所謂『デート』というものではないだろうか！？

と、シスターズ妹達の中で唯一のデュアルスキル多重能力者である少女はやや興奮気味に思考していた。

こんなことならもう少しスポットの情報等集めておいた方が良かっただろうかいや今からでも遅くはないネットワークを介して19090号の持っている情報を引き出しなんとこれまた嚴重なプロテクトがあああっ！！

頭をかきむしってプロテクトの解除を急ぐも、なかなか破れない。仮にもレベル4の『エレムオブザーヴ科学観測』を有し一般个体よりもいくらか演算能力は高いはずなのだが、どういうわけか19090号のプロテク

トが解けない。

「……なあ、オマエ本当に大丈夫か？」

「は、はい？とミサカは急な呼びかけに声を上擦らせて反応しますっ！？」

気がつけば、前を歩いていたはずのインターフェイス接続回路が隣にあり、呆れたような視線をこちらへ向けている。とっさに反応したせいか、思考が追付いて行かない。

「なんつーか、オマエは普段から変わってる感はあるんだが、今日はいつになく変だよな。薬品の副作用かなんかか？」

「いえっ！なんでもありません、とミサカは断じます！」

「……ああそう」

言っても無駄と判断されたのか、彼は嘆息すると正面を向いた。

正直自分でも分かっているのだが、どうにも上手くいかないのだ。思考が安定しないというかなんというか、絶えず心臓は高鳴っているしこれは彼の言うように薬の副作用なのではないだろうか。しかし今までに一度もこんなことはなかったし、信憑性は低い。

ぼんやりと答えは出掛かっているようにも思えるのだが、この気持ちや感覚の正体がどうも理解できないのだ。

しばらくゲコ太ストラップを探して歩いていると、エクストラロー多重観測の腹から『ぐうう』という音がした。慌てて手で押さえるが、音は間隔を開けて鳴ってしまっ。

ちよつとした動物系アクセサリーの店先でゲコ太ではないカエルのストラップを物色していた接続回路インターフェイス 恐ろしくシユールな光景だ が、音を聞き取ったのかこちらを振り向いた。

彼は携帯のサブディスプレイで時刻を見た後、フウと息を吐いて向き直る。

「……どっかその辺で昼飯にするか」

そう呟いて、手にしていた何故か赤色のマスコットガエルを元に戻し、カツカツと杖をつけて歩き出した。それに続いて、多重観測エクスプローラも歩き出す。そのぶつきらぼうな態度とは裏腹にちゃんと店を選んでいるところが、なかなか……。

妙な心地よさに、また、頭がオーバーヒートしそうになった。

\*

「……つまり、未だにオマエはミサカネットワークに完全に同期したわけじゃねえってことか」

注文したナポリタンを適当な仕草で口に運びながら、接続回路インターフェイスが尋ねた。

「はい、ミサカは多重能力進化実験の際に他の個体とは異なる薬品等を使ったので、他の個体とは多少の成長差や演算能力レベルも異なり、『欠陥電気レディオノイズ』の具合も同様ですので、大体87%程度しか同期できていません、とミサカは改めて言い直します」

ハンバーグをぎこちない手つきで切りながら、エクスプローラ多重観測がそれに  
応じる。不味い病院食と比べて数段美味しいはずなのに、ナイフと  
フォークの正しい使い方がわからずぎこちない結果に終わっている。

「それであるガキ……ラストオーダー打ち止めとかと会話できてんのか？」

「はい、個体同士の通信に支障はありません、とミサカは端的に答  
えます」

さっきの異常ぶりから大分回復したようで、インターフェイス接続回路は小さく安  
堵のため息を漏らした。残りわずかになったナポリタンを普通に箸  
で拾い、口の中へと運んでいく。別に食べ方には拘らない。

「ふーん……ならいいんだがな」

あのくだらない実験のせいで、エクスプローラ多重観測が他と異なる異端者のよ  
うな扱いを受けていたらさすがに気分も良くないが、まあ心配なさ  
そうだ。

最後の一口を済ませたところで、インターフェイス接続回路の携帯が振動する。

(……夕風か)

どうやらメールではなく電話らしい。内容はおそらく頼んでいた  
ことについてだろう。まさか平日の昼間にファミレスに来ている  
なんて思わないだろうから、それについて文句は言えない。

(白昼堂々あんな話するわけにやいかねえよな……メールで頼むか)

回線を切り、改めてメールを返信する。

怪訝な瞳でこちらを見ている少女に気付かず、彼は慣れた手つき

でキーを操作し、志乃への返信を完了させる。

「……誰からですか？とミサカは尋ねてみます」

ハンバーグを切る作業を中断して、エクスポローラ多重観測が言った。

「あ？夕風だよ」

何の気なしに答えた所、エクスポローラ多重観測は妙に鬼気迫る表情で、

「な、何故その人からこんな時間に電話が来るのですか？とミサカは続けて尋ねます」

「何でも何も、仕事の話だしな。時間は関係ねえだろ」

「前々から思っていましたけど、夕風という方とは随分親しいようですね、とミサカは立て続けに質問します」

「まあな。つつても、実験台と研究員つつう最悪の関係だがな」

それ以上に依存してしまっただけなのだが。

「本当にそれだけですか？とミサカは彼女の容姿を思い出しながら詰問体勢に入ります」

「他に何かあるってんだよ……っと、メールか」

エクスポローラ振動した形態のディスプレイに目をやり、インターフェイス接続回路が言った。エ多重観測がまだ訳の分からないことを言っているが、気にせず内容に目を通す。

『特力研のデータベースを見て回ったら、削除されたデータの中にそれらしい人物が出てきたわ』

そう前置きされている。彼は文面をスクロールした。

瀬良 惻皇

能力：『反射物質』

ただそれだけ記されていた。

（反射物質……？なんだそりゃ。夕風の性格考えりゃ、書き漏らしな  
んざしねえだろうしな。これしか情報が残ってねえってことか）

とはいえ、充分な成果だった。

彼は再びキーを操作して返信する。自嘲気味に笑って、携帯をポケットに戻し。

「……………」

「……………？」

正面を向いたとき、いつもの通り無表情な多重観測が、無表情な

のに妙なオーラを発散してこちらを見ていた。

「……………。行きますか、早く目的を達成して帰りましょう、とミサカは冷たく言い放ちます」

決して恐怖感などはないのだが、どこか、どこか男という生物を圧倒するような、インターフェイス接続回路をもつてしても悪寒が走るような雰囲気、気圧される。

「……………何で、機嫌悪くしてんだ？オマエ」

珍しく弱気な声でインターフェイス接続回路が言い、杖を忘れて危うくすっ転びそうになりながら、歩いていく多重観測エクストラローラに続く。

瀬良という人物の新たな情報を得たと同時に、エクストラローラ多重観測の新たな一面……………いや二面を垣間見た、インターフェイス接続回路であった。



6・5 進展 新夕十一面 (後書き)

どうも、櫻井です。

まず最初に。ド下手で申し訳ありませんm( ) ( ) m

ラブコメのつもりで書いたのでニヤニヤして頂ければ嬉しいです  
が、どうでしょう？

苦手なりに頑張ってみたんですけど…。

というわけで、どうせラブコメが駄目なら伏線投下と新情報を入  
れました。本人が出てきたらまたお話ししますが、この能力はかなり  
楽に考え付いたものです。そのくせ結構強くて接続回路が苦戦しつ  
つも勝てそうな感じになったので、採用しました。あの人物の演算  
パターンを参考にしています。

それでは次回、お楽しみに

6 - 6 予兆 動き出す思惑 (前書き)

「一方通行にも相談してみっかな」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターネット  
接続回路

6 - 6 予兆 動き出さ思惑

常盤台中学。

人口230万人を誇る学園都市の中でも五本の指に数えられる名門校である。

『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』と名を馳せる御坂美琴は、今日もゆったりとした気分  
で朝食を済ませ、徐に携帯電話を取り出した。

むむ…と眉間にしわを寄せ、叫ぶ！

「なんで出ないのよっ！」

彼女がそう言うのも無理はなく、せつかく結んだ『ハンディアン  
テナサービス』だと言うのに、9月30日を境にほとんど通じた試  
しがないのだ。

『お掛けになつた電話番号は、電波の届かない場所にあるか、電源  
が入っていないため、掛かりません』やら、『error メール  
を送信できません』やら！

たまに通じたときだって、『悪いな御坂、今取り込み中だからま  
た後で』という旨の返事ばかり。

（何よ取り込み中って…いつもいつもアンタは一体何に取り込んで  
んのよ！夜にかけても取り込み中だったし…？…？…ツ！まさかあ  
いつ、夜にツ！？）

勝手な妄想が膨らみに膨らみ、もはや夫を寝取られた妻のような

気分がわなわなと震え出す。

視界の端でこちらを見ている生徒の姿も見えるが、気にせず美琴は妄想を真実のように思い込んで不機嫌オーラを霧散させた、とここで。

(あれ……)

彼女の瞳が、窓際の席に座った少女を映した。

深い色の茶髪に、雪のように白い滑らかな肌、人形のように整った美貌。

一見して女子中学生とは思えない、大人っぽいオーラを放つ少女。

物静かな佇まいで、ハムとキャベツを挟んだサンドイッチを口に運んでいる。

色々な意味で美琴と正反対の属性を持つ彼女だが、二人の間にはひとつの共通点があった。

名門校・常盤台中学に在籍する二人のレベル5、『レールガン超電磁砲』と『メンタルアウト心理掌握』。

あのどう見ても歳誤魔化してますよねーと言わざるを得ない風格を漂わせる少女こそが『メンタルアウト心理掌握』と呼ばれる超能力者なのだ。

いつもは何人かの取り巻きと一緒に居るのだが、今回は一人だけのようだ。

(……どーしようかな)

普段なら特にアクションを起こす気もないのだが、今の美琴にはすべきかせざるべきかを迷う理由がある。

珍しくあのツンツン頭：上条当麻から何故か国際電話で連絡が来た際、なんか独特な喋り口の男と上条の会話が聞こえてきて、彼が記憶喪失であると分かったのだ。

『メンタルアウト心理掌握』は最強の精神系能力であり、精神に関係する操作ならば何でもできる、と言うようなとんでもない能力。彼女なら上条の記憶を取り戻すこともできるかもしれない。

(…とは思っただけど)

知り合いは知り合いだが、ルームメイトの白井黒子とは違って

黒子もある意味信用できないところがあるが　よくは知らないため、仮にも知り合いを頼むほど信用できない。

精神系能力の特性上、望みもしない『オマケ』を付けられる危険もある。

(……やっぱやめとこう。下手なことされてもアレだしね)

ハアと小さなため息を漏らして、美琴は席を立った。

たった今視線を向けていた少女の瞳が、こちらを映したことに気付かずに。

\*

病院の自室で、インターフェイス接続回路は設置されているテーブルの上に大きめ

の方眼紙を広げていた。

そのすぐ横には新品の消しゴムと製図用のシャープペンにコンパスなどが並べられている。

テーブルに見合った背もたれのない椅子に座り、彼は模型を眺めるかのような拳動で医者から支給されたトンファアのような杖を見ていた。

10月9日の夜、インターフェイス接続回路は姿を消す能力者と戦闘になった。

相手はこの杖を奪い取り、インターフェイス接続回路の動きを制限した上での奇襲を敢行しようとしてきた。もし相手がもう少し頭の回るヤツだったら、間違いなく行動不能にされていたか、殺されていたことだろう。

この一件で、杖が思うよりも重要であることに気付き、今こうして改造の計画を立てようと言うのだ。

(奪えないようにして、尚且つ戦闘中に邪魔にならないように……か)

実際、戦闘中杖は邪魔になってしまったため、アクセラレータ一方通行もしていたようにその場に放り捨てざるを得ない。

だが、それで杖を奪われればモード切り替え後に立つことができず、窮地に陥ることになる。

(手に持ったりや邪魔んなるし、こいつ結構長えからなあ。銃とは違ってポケットにも突っ込めねえしどうしたもんか)

どうせ改造するなら便利な機能を付けたいところだが、とりあえずはコンパクト化が必要だ。

(コンパクト……ねえ)

眉間に手先を当て、考えるような仕草をする。

今まで嫌と言っただけで見てきた学園都市製の兵器から市販のポケットティッシュまで、一度目に移した物体を反芻する。

ざっと数万にも及ぶそれらの中から、目的に見合つ性質を備えるものを選抜する。

(……アンチスキル警備員の特殊警棒)

数万の中からの選抜結果。ラジオのアンテナのようにスライドさせて伸び縮みできるアイテムだ。あのスライド部分を参考にすれば、条件のひとつである『コンパクト化』が実現できる。

(仕組みは分かっちゃいるが現物があつた方がいいだろうな)

まあ『スクール』のルートを使えばそんなものはいくらでも手に入るのだが。

と、不意に。

(……ん?)

ベッド脇のダッシュボードに置いてあつたオニキスブラックの携帯が、初期設定のままの呼び出し音を奏でた。

(こんな時間に誰だ……?)

作業 インターフェイス と言つてもまだ杖を眺めていただけだが インターフェイス の手を止め、接続回路は席を立って携帯をつかみ上げ、サブディスプレイ

の表示を見た。

そこには『登録6』という無味乾燥とした文字が示されている。

気だるげだった顔つきを少し引き締め、通話ボタンを押して回線を繋げる。

「こんな真昼間に何の用だ？」

面倒くさそうに、インターフェイス接続回路が言った。

『すみませんね。本日10月14日22時より、新組織のまあ、顔合わせとでも言いましょうか。それを行ないます』

妙に癪に障る猫なで声で、電話の相手が応えた。『スクール』の時とはまた違う人間だ。

『21時にあなたの病院の傍に車を停めておきますので、それに乗るようお願いします』

インターフェイス接続回路は作業途中の方眼紙に目をやって、フウと小さくため息をつく。

「わかった。午後9時に病院前だな」

『ええ。それでは』

満足そうな猫なで声を聞いて、インターフェイス接続回路は一方的に回線を切った。ベッドの上に携帯を放り、太陽が真上に来て明るく照らされた都市を眺める。



(顔合わせ……ねえ。あちこちの組織の残党を集めるらしいが、どうなることやら)

5日間の休暇はここで終わりのようだ。もともと、この『休暇』は妙に疲れさせられるだけだったのだが。

こきこきと首をならし、インターフェイス接続回路は再び方眼紙の前に座った。

\*

「ぎゃあああああああッ！！！」

夜の帳が下りた学園都市に、大きな悲鳴がこだました。

場所は第一学区。

都市の行政が集中する区域である。

「あまり大きな声を出さないでくれないか？」

悲鳴を上げた初老の男の前に、栗色の髪をなびかせた少年が立っている。

腕と腹から血を流している男の状況とは不釣り合いに、少年の口元は笑みを刻んでいた。

「はあっ……はあっ……ぐっ……！」

使える腕だけの力で、薄汚い施設の廊下を男が這いずる。その手には安手のライフルが握られている。

対して、少年の方は優雅にも歩いてその後を追っていた。むしろ歩調を男に合わせているように見える。

「無様に醜態を晒すことを止める気はないが、そろそろ無駄だと悟れ。付き合うこっちの身にもなってもらいたいな」

「ふっ…ふざけるなっ！私はっ、私はこの都市のために全身全霊を以って尽くしてきた！それが何故っ！こんなところで潰されなくてはならないっ!?!」

擦れた血の跡を床に残しながら、男が叫ぶ。少年はハア、と心底呆れたようなため息をつく。

「その全身全霊が良い方向にばかり解釈されると思っていたら大間違いだ。邪魔と思われたからこうして僕が現れた。お前の頭でもそれくらいは理解できるだろう」

「馬鹿なツ！そんなはずはないっ!!!」

男が少年にライフルの銃口を向ける。暗い廊下でぼんやりとしか居場所がわからず、さらに片手で撃つしかないという縛りがあるのにも構わず、錯乱した様子で男がその引き金を引く。

刹那、男の喉下にライフル弾が突き刺さった。

「ぐぼおッ……!!」

「いい加減学習してくれないか？死に急ぎたいというなら話は別だが」

「…あ…っ…か…!!」

喉元を貫かれた男は、感覚の残っている手で喉に手を当てた。

「ついさっき自ら放ったショットガンを自ら喰らったばかりじゃないか。どうやら僕の能力について、露ほども理解できていないようだな」

笑みは絶え、少年は静かな表情でそう言った。

「い…あ…かつ…え…!」

まともに発音できない喉で、男が何かを言っている。少年はさてと、と再び微笑んで、

「もういいか？これ以上はさすがに不憫に思える」

微笑んだ、そう、暗がり慣れた目が認識した刹那、少年の背から発光する何かが生えた。

「…え？…がつ！…あっ！」

その『何か』に対して感覚的に危機感を抱いたのか、男は焦ったように手を振り、まともに動かない手足すら使ってその場から這い出そうとした。

しかしその刹那、男性の体は不自然に宙を舞うと、天井にぶつかったところでグシャグシャに潰れた。

もはや原形を留めない肉塊がべしゃりと血のついた床に落ちると、少年はフツと笑い、踵を返した。

階段を下りつつ学生服のズボンから携帯を取り出すと、回線を繋げて耳に当てる。

「終わったよ」

まるで宿題を終えたことを母親に報告する学生のように、少年は言った。

『ご苦労。処理はこちらに任せてくれ』

電話口の合成音声が、少年の耳に届く。

「わかった。僕は待機していればいいのかな？」

『ああ。また命令が下ったら連絡する』

それだけ言って、回線が切られる。

少年は携帯を閉じ、街のネオンに目を細めた。

栗色の髪に紫色の瞳を持つ、整った顔立ち。

全開の学ランから覗くカーディガンは6つあるうちの上から4つのボタンが閉められているが、ワイシャツの裾はズボンから出て紐のベルトの余りが垂れ下がっている、真面目なのか不真面目なのか判断のつきにくい風貌。

瀬良 悧皇。

学園都市最高峰の超能力、スーパー『反射物質』リフレクターを有する、シークレットナ非公式の超能力者。

彼は静かに歩き出した。

とてもたった今一人の人間を惨殺した人間とは思えない、静かな笑顔を浮かべながら。

どうも、櫻井です。

コロコロ場面が変わって申し訳ありません(汗)

未だに新組織の名前が決められないでいますが、なんとか次回までに決めたいと思います(笑)

さて、珍しく御坂視点で始めました。これは単純に書きやすい恋愛模様を書きたかったのと、本編ではほとんど触れられていない心理掌握を登場させるのが目的です。常盤台といえば御坂だろう！という単純な思考でした(笑)

心理掌握、個人的には結構好きな能力で、早く本編に出てこないかなと思っていましたが、どうなのでしょう(汗)

最大派閥の女王サマとのことですが、理由なくそれはどうかと思うので勝手にこちらで辻褄を合わせていくつもりです。

接続回路の工作(笑)

能力に縛りをおきたいと考えましたが、割とアクセラロッドが好きなので是非描きたいなあと思って杖にしたという情けない理由もインターロッドは少しギミックが異なっていたり機能が追加されていたりしますのでお楽しみに(笑)

さて、最後の視点は瀬良君のお仕事風景です。殆どの人は瀬良!!

非公式の超能力者とお気付きだったと思います。そうなんです(笑)微妙に垣根つばい雰囲気を持たせつつ一人称や喋り方で独特な感じを出したつもりです。というか禁書のキャラで『僕』と言ってい

る人は海原エツアリぐらいしか思い当たらないのでそれだけで特徴になったかと。

能力の詳細はまだ先にします。

それでは次回、お楽しみに

6 - 7 突入 幕開ケ (前書き)

「またアイツか……！」

学園都市最高峰の超能力者にして残党組織の一員

タイフェイス  
続回路

接<sup>イ</sup>



## 6 - 7 突入 幕開ケ

10月14日21時35分。

インターフェイス  
接続回路は無機質な廊下を歩いていた。

(……かけた時間から考えて、第七学区と隣接した学区の境目つてトコか)

指示された時間に病院前に止まっていたワゴンに乗り込み、とある地下空間についたところだった。カチャカチャと杖をつく音が、無機質な廊下に響き渡る。

顔合わせ、とは言うものの、そもそもそれが必要なことなのか、彼には疑問に思えた。『スクール』の時には特にそういった面倒はなく、いきなりリーダー直々に施設を案内された程度で、他のメンバーと顔を合わせたことはほとんどない。せいぜい心理定規メジャーハートくらいのものだ。

大体、『グループ』以外の組織を纏めるというが、一度は命のやり取りをしていたような者たちが一同に介すというのはどうなのだろう。

インターフェイス メジャーハート  
特に接続回路と心理定規は反旗を翻した組織の一員だ。仲良くやれ、とは言われないにせよ、どうもやりにくくなるのではないだろうか。

(……ま、どうでもいいか)

気だるげに首をならし、インターフェイス  
接続回路は考えるのをやめた。

最初から馴れ合うつもりなどないのだから、ギスギスしていようがいまいが関係ない。

それよりも、例の『リフレクター反射物質』の方が気になる。

(瀬良……あの夕凧が探っても名前と能力名しか出てこないような人間……いや待て、それほど隠蔽された人物……まさかとは、思うが……)

「あら。来たの」

俯いて思考している最中に、不意に前から声をかけられた。

反射的に顔を上げたとき、目の前には起伏のない体つきの割りに大胆なドレスを着込んだ少女が立っていた。メジャーハート心理定規だ。

「意外か？」

顔の距離数cmまで迫っていたのにも拘らず、インターフェイス接続回路は平然と告げた。とはいえ、とりあえず距離を置く。

「てつきり無視して引きこもってると思ったけど」

「こちらも気にした様子はない。」

「そうしても良かったんだがな。オマエだけか」

「今のところはね。そのうち来るでしょう」

「ふーん……」

適当に返事を返して、インターフェイス接続回路はメジャーハート心理定規の向かいの壁に背を預け、杖を立てかけて腕を組む。

(……こつこつ癖にも対応させねえといけねえな)

特にすることもないので、彼は頭の中で杖の改良点をメモしていく。  
すると。

「ねえ、知ってる?」

「あ?」

少し退屈そうな心理定規が、口紅をしているらしい唇に軽く手を当てて、

「人の目の前で腕を組む人って、相手に対して警戒心を持っているらしいわよ」

しばらくして、彼女が自分の仕草を見て言っているのだとわかった。彼はハン、と鼻で笑い、

「信用してるとでも思ってたのか? 悪いが、俺アオマエや今日会う連中と馴れ合うつもりはさらさらねえぞ」

「それは分かってるわよ。ま、参考程度に話してあげただけよ。精神操作系の能力者としてね」

「そうかい。暇潰しなんざ一人でやれ」

そう突っぱねて、インターフェイス接続回路は再び思考作業に戻る。少なくとも、この少女と話しているよりは有意義な作業だと思う。対して、少女はといえばやれやれとでも言いたげに肩をすくめている。夜の病院のような絶妙な明るさ、不安感を煽る程度の明るさの廊下で、一組の男女が無言で向かい合い、互いに互いには目をやらず、ただただ沈黙している。

と、そこに。

「……………?」

カツカツと、靴音が廊下に響いてきた。わずかに、インターフェイス接続回路が顔を上げる。

音の聞こえてきている方向に目をやると、そこには見覚えのある顔があった。

「オマエ……………」

「……………何?」

冷やかな、静かな声。小差はあれど、その声はある人物によく似ている。

深い色の茶髪。雪のように白い肌に、人形めいた整った顔立ち。エクスプローラ多重観測と同じ、常盤台の冬服に身を包んだその少女。

髪型こそショートボブだが、その顔つきや佇まいは、彼の良く知る人物にそっくりだった。

「夕、凧……………?」

頭の中にある名前を言うと、少女は小首をかしげ、眉をひそめた。

「……確かに、私は夕凧って苗字だけど。どうしてあなたが私のことを知ってるの？」

\*

「ふああ……」

欠伸をしながら、夕凧志乃はパソコンの画面に目を走らせていた。

その明晰な頭脳を買われて新組織の下部組織にそのまま取り込まれることとなった彼女は、上に言われたとおりの雑務　　つまりはデータバンクの整理　　をこなしていた。

(……… 退屈ね)

今まで多くの能力開発機関を点々とし、さまざまな光景と共に難解な作業をしていた彼女にとって、この程度の情報処理は片手間あればで十分なものだった。

もっとも、罪もない子供たちの遺伝子を組み換えるような仕事から切り離されたのは幸いだが。

そんな状態なので、彼女の脳は自然と別なことを考え出す。

つい4日前、インターフェイス接続回路から送られてきたメール。

てつきり『わかった。オマエはそのまま調査を続ける』なんて生意気な返事が来るものと思っていたのだが。

(まさかね……エクストラローラ多重観測に会ったりするうちに、あそこまで変わるなんて思わなかったわ)

口元が緩んでしまうのを承知で、志乃は作業を続行する。

『わかった。後は俺が調べる。オマエはもうこの事は忘れておとなしくしてろ』

危険と判断して、この一件から遠ざけることで守るつもりなのだ。手に取るようにわかってしまう。自惚れなどではなく、彼の性格を熟知した上で、だ。

(ホント、優しいんだから……)

不思議と胸が暖かくなるのを感じながら、志乃が作業を続けていると、パソコンメールを受信した。

「……？」

上司、だろうか。ついさっき連絡が来たばかりだし、パソコンメールでやり取りをしたケースはない。

志乃は静かに、眉をひそめた。

メールボックスを見てみると、『無題』と記されたものがぼつりと、並べられた受信履歴の一番上に表示されている。

(……………ふうん)

それを見て、志乃は表情を戻す。いつもの含みのある笑みを浮かべて、椅子の肘立てに頬杖をつく。

まるで、メールの中身を見通したような顔つきだ。徐にデスクの引き出しから拳銃を取り出し、弾丸を装填して白衣のポケットに入れる。

(知りすぎた……ってことかしら)

確認するまでもない。

このメールが良いものでないことは、その差出人を見ればわかった。

そう。

忘れもしないその名前。

『蝉脇 栗掛』。

かつて多くの子供達を実験の犠牲にし、インターフェイス接続回路という一人の少年を完膚無きまでに傷つけた、悪魔のような男。

そんな人間から送られてくるメールの中身など、確認するまでもない。

『やつほー。元気かなあん？志乃ちゃあん』

パソコンのスピーカーから、そんな言葉が飛び出した。どんな細工をしたのだろう。

「……………」

『あつはつはあ！！ごめんごめん、驚かせちゃったかなあ？』

おそらく上層部経由で施設の監視映像を横流しさせているのだろう。となれば、盗聴器も設置されているはずだ。

「久しぶりね。いったい何の用？」

極力平静さを保ちながら、志乃が言った。

『おおう、居た居た。いやなあ、ちよつくら協力してほしーのよお』

相変わらずの妙なテンションで、蝉脇が返す。志乃が適当にキーボードを叩くが、反応がない。組織のホストコンピュータからプロテクトをかけたのだろう。

「協力？昔からくだらないジョークは聞かされていたけれど、一番面白いわねそれ」

『ははっ、本気なんだよなあ残念ながら。あの接続回路インターフェイスつつうガキ仕留めなきやならねーのよ』

「……………ッ！？」



志乃が息を呑む。

『あのクソガキ、メンタルブツ潰してやったのに懲りずに復活しやがるんでね。まあ？非公式シークレットチャンネルの超能力者は代わりもいるし、さっさと殺しちまいたいわけよ』

「……あなたの独断で？彼は上にとっても重要な存在なんじゃないかな。……たかしら。新組織に引き込んでまで使おうとしているのよ？」

『あー、そーだな。まあ必要なのはあいつの「能力」だしねえ。」「未元物質」みたいにこっちの思い通りに操れた方がいいっしょ？』

この男は何を言っているのだろう。

志乃は本気で理解ができなかった。

この男は接続回路インターフェイスのことなどまるで分かっていない。

正しい道を追求して、今も誰かのために行動しているあの少年。

こんな闇に染まった女のことさえも守ろうとしてくれるあの少年に。

どうして、どうしてそんなにも無情になれる？

大切なのは能力チカラじゃないだろう。

評価すべきなのはそこではないだろう。

あるいは自分がおかしいのかもしれない。

「こちらの世界では、蟬脇の方こそ正しい存在なのかもしれない。

それでも。

「ぶざ……けないで」

『あい?』

それでも、私は。

握りしめた拳に力がこもる。

「ぶざけないですよ!! どうしてそんな事が許されるの!?! あなた達は何も分かってないわ! あの子のことを!! 能力能力って……それにしか価値がないみたいにつ!!」

普段の彼女からは想像もつかない怒涛の叫びが、無機質な研究室にこだまする。

『……はあ。うるせえなあホントに。まあいいや』

そんな面倒くさそうな声が聞こえた途端、研究室が大きく揺れた。

「……………!!」

姿勢を低くして、志乃がその揺れに耐える。

「この音は、爆発音だ。」

「とりま、お前をとっ捕まえるかブツ殺すかして回収することになってるんで。幽霊なんかより怖いお兄さん方が今入ってるよ。あははっ、美人相手にムラムラ来てるかもなああいつら」

つまりは顔写真の類が配布されているわけだ。別人を装ってやり過ぎするような真似は不可能ということか。

「…あら、そう？お褒めに預かり光荣ね。でもこの分じゃ、体が保たないかもしれないわね」

特殊端末から施設の監視カメラを見て言う。無骨な装甲服を来た男達が、マシンガンやら何やらを手に入り口から入ってきた。確認できるだけでも20人は居る。

ホストコンピュータが向こうの手の内なら、隔壁の操作もできないはずだ。

「おやおやエロ発言で誘惑しちゃってるつもりかあ？オトナの女は怖い怖い。ほいじゃまあ、怪我したくなかったらおとなしく捕まっちゃいな」

ブツッ、という音が立ち、蝉脇の声が途切れた。

警報が鳴り響く室内。

志乃の臉が一度閉じられ、再び開いたときには、そこには決意の色が宿っていた。

(捕まったら、ただでは済まなそうね)

蝉脇の話信じれば、バックに居るのは学園都市の上層部。一筋縄ではいかないはずだ。

だが、蝉脇を止めることができれば、多少なりとも計画を歪めることができる。最善策を講じてきたのなら、別のルートは何らかの問題、不安要素を含んでいるはずだ。

ならば、より慎重に行動させられる分、あの少年を助けるための手数が增える。

考えながら、志乃は部屋をそのままに駆け出した。

アンチスキル  
警備員を目指した研究員と、プロの特殊部隊。

勝ち目がないに等しいことはわかっている。

でも。

それでも、私はあの子を守りたい。

6 - 7 突入 幕開ケ (後書き)

どうも、櫻井です。

一気に展開してまいりました。

インドア研究員の夕凧と蟬脇揮下の特殊部隊。

超能力のドンパチではなく無能力者同士の戦いになります。何だかんだで強かったりします夕凧さん(汗)

して、接続サイドでは夕凧と同じ苗字の常盤台中の生徒が出現。やや早めの伏線回収になりましたね。何より日数の関係で…(汗)

それでは、また少し不穏な話が続きますが、どうぞお楽しみに

6 - 8

姉妹

研究員ラシク

(前書き)

「……最近のシリアス編ではいつも外野なので、とミサカは愚痴を零します」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクストローラ  
多重観測

「……確かに私は夕凧って苗字だけど。どうしてあなたが私のことを知ってるの？」

静かな声で、少女が言った。 インターフェイス 接続回路はしばらく考えるように間をおいて、

「……オマエにそっくりな奴が知り合いに居てな」

同一人物でないとわかると、彼も静かな声で応じる。同時に、この正体不明の夕凧と名乗る少女に警戒心を持つ。そんな自分が腕を組んでいることに気付くと、心理学もバカにできないな、と嘆息した。

「…え、なに？あなたに女の子の知り合いなんていたの？」

物々しい空気の中、 メジャーハート 心理定規が口を挟む。 インターフェイス 接続回路は軽く頭を掻いて、

「まあな。こんなガキじゃなく20過ぎの女だが」

「へえ…年上好きだったの」

「あ？」

「いいえ、なんでもないわ」

「ちょっと待って」

二人の間で妙な会話が繰り広げられていた中、茶髪の少女が口を挟んだ。

「20過ぎの女って……それ、姉さんのことじゃないでしょうね」

表情こそあまり変わってはいないが、声からは不安や疑惑の念が感じられる。

「……夕凧志乃ってヤツだが」

控えめに接続回路インターフェイスが応えると、少女は頭を抱えた。その姿を見て、目を細める。

「間違いねえのか」

「……ええ。なんであなたと姉さんが知り合いなのかしら」

\*

少女は夕凧ゆうなぎ 曖あいと名乗った。

常盤台中学に通うレベル5の第五位、『心理掌握メンタルアウト』とも。

何故それがこんな暗部組織に、と疑問に思ったが、それを聞けばこちらも話さなくてはならない気がして、それについては触れなかった。

夕凧志乃は彼女の姉で、常盤台中学で保険医をしているという。

初耳だったこともあり、顔にこそ出さないが接続回路インターフェイスは驚いてい



た。

暗部の研究員と名門校の保険医。違いすぎる。

「……それで、どうして暗部組織で素性を隠してる八人目のあなたが、姉さんと知り合いなの？」

一通り曖昧の話した後で、彼女は話を切り替えた。接続回路が眉根を寄せる。

正直な話、どう答えたものか考え物だ。

彼女は志乃が非人道的な研究に携わっていた。今もかもしれないが、ことを知らないかもしれないし、教えてしまえば隠していたことが露呈して二人の間に亀裂が生じるかもしれない。

と、言う旨を考えてしまっただけでも、この超能力者は読みとってしまうかもしれない。

そう考えると、『メンタルアウト心理掌握』はある意味差最強の超能力だな、とわずかだが感心する。

「……オマエ、俺の頭ん中覗き見してんじゃねえだろうな」

「……『まだ』してないわ。一応、プライバシーの配慮くらいはしてるもの。覗けって言うなら話は別だけどね」

さらりと、曖昧は言っただけだ。接続回路が舌打ちする。

「……アイツにはオマエの知らねえ顔があんだよ」

「超能力研究機関の一員……だったかしら」

なんだ知っていたのかと、変に気を遣ったことを後悔する。

「知ってんじゃないか。そこまで分かっつてりゃ、俺とアイツの関係  
なんざ予想出来たる」

「まあね。でもそれはあくまで『予想』でしょ？あなたの口から直  
接聞いた方が確実に考えたのよ。ま、その様子だとどうやら私の推  
測で間違いないみたいだけど」

(……こいつ、本当に中3か？あいつの一族ってなあこんな早熟し  
たヤツばっかなのかよ)

少し夕風家の事情が気になったが、その思考は老化に響くアナウ  
ンスで打ち切られた。

『インターフェイス インターフェイス、メジャーハート、メンタルアウト  
接続回路、心理定規、心理掌握。お待たせいたしました。3番の  
エレベーターを使用し、B4階へお越しく下さい』

あの時の猫なで声だ。

内心苛つきながら、インターフェイス接続回路は立てかけておいた杖を取り、二人  
の精神操作系能力者と共に歩き出した。

\*

「ハアツ、ハアツ……」

息切れしながら、志乃は施設の廊下を走っていた。先ほどから警報が鳴り響き、白々とした無機質な廊下を赤く照らしている。

超能力研究機関の所員は志乃一人ではない。大半は6、7時で退社しているが、今だって10人くらいの研究員が施設には残っている。一応公的な研究機関であるこの施設は、大型の病院ほどの広さがある。構造を知り尽くしているとはいえ、20人もの特特殊部隊を相手に無傷で逃げおおせることは難しいだろう。

(まずは相手の居場所の確認が必要ね……)

ひとまず物陰に隠れ、専用の携帯端末を取り出す。

さっきのようにハッキングをかければ、監視カメラの映像から少しは彼らの居場所が確認できる。

(……逆探知は…されるわよね)

覚悟の上で、端末を操作しディスプレイに映像を映す。そこには、さっき走っていた廊下を駆ける特殊部隊員。

(十中八九、ここに入ってくるわね。さてと?どうしようかしら)

こちらに向かっていているのは3人。拳銃には8発の弾丸があり、7発入りのスペアマガジンが1つ。弾丸は全部で15発。

射撃の訓練は受けているし腕にもそれなりに自信があるが、どこまで通用するか。

(真正面から攻めれば蜂の巣になるのは私ね……)

そこまで考えて、彼女はフツと笑った。

逃げ込んだ部屋は様々な薬品が並ぶ薬品庫。大体の薬品が、ここには揃っている。

(……面白いじゃない？ 研究員なりに頑張ってみましようか)

\*

『こちらF4。ターゲットの情報端末からのハッキングを確認。逆探知に成功。7階、薬品庫です』

「こちらB1、了解。B2、B3と共に捕縛に向かう。B4、B5はここで待機」

『了解』

ヘルメットに内蔵したトランシーバーからの通信を受けて、B1は警報の鳴り響く階段を駆け上がる。

今回投入された人員は24名。内8人は建物の外で見張りを担当し、内4人が電波解析、残りの12名が10階立ての施設内を回っている。

(施設の研究員、夕凧志乃の捕縛、あるいは殺害後回収…か)

小部隊の隊長であるB1は、今回の作戦の目的を再確認した。上

層部直々の命令で、ターゲットの捕縛理由などは一切聞かされていない。

だが、彼らにはここから先を求めるつもりなどない。

上からの命令に忠実に従い、目的を達成することが、彼らにとっての最終目標なのである。

駆け上がり、6Fの表示を確認して、三人はフロア内に入り込んだ。

気味の悪い廊下が、数十メートル続いている。

「いいか。目標の装備は7発入りのCC-47。お前たちも知っているだろうが、あらかじめ銃に1発装填しておけば装弾数は8発となる。8発とスペアのマガジンをいくつか持っているかと仮定して拘束する」

「了解」

「わかりました」

確認を済ませ、彼らは洗練された無駄のない動きで、薄暗い廊下を駆けていく。

突き当たりの角部屋に、『第7薬品庫』との表示を見つける。

(ここだな……)

B1は目配せし、部屋の扉に手をかけた。どうやら電子ロックが掛けられているらしい。

「電子ロックか……。管制室から開けられないか？」

「我々は所詮実行組織ですからね……。施設の電子系統は別の施設にあるホストコンピュータで管理されているので、上からの解錠は不可能でしょう。それとも、少々時間をかけて上層部に申請しますか？」

「さすがは施設の所員、電子ロックのパスも通り抜けられるとは」

B2が感心したように言う。B1はフン、と鼻で笑い、

「なに、直接解錠できないわけではない。こんな逃げ場のないところに逃げ込むなど、馬鹿な女だ」

言うて、懐から取り出した解析装置をロックに当てると、電卓のような装置のディスプレイを、0から9の数字がスロットのように高速で表示されていく。16桁にも及ぶパスワードが、数分のうちに解析され、やがて答えが表示される。

『6033514902631963』

表示されたとおりに、扉のキーを叩く。

ガチャリ、という錠が外れた音が、警報の鳴り響く廊下にこだまする。

彼らは警戒しながら、『開』と書かれたスイッチを押した。

(行くぞー！)

全員が身構え、部屋に入った途端、彼らの視界は真っ白に染まった。

ゴーグルとマスクをしているものの、粉のようなものが口の中に入ってくる。

「ゴツ、ゴホツ！なんだこれはっ！」

「スモーク……！？」

三人が咳き込んでいると、タァン、タァン、タァンッ！と三度、銃声が室内に響く。

途端に足を激痛が走る。

「おッ……うがあああああっ！？」

「ど、どこからッ！？」

装甲服の隙間、膝の関節を精確に狙い撃たれたことに驚愕しながら、三人が呻く。ごろごろとのた打ち回っていると、澄んだ女性の声が聞こえる。

「ごめんなさいね。その程度の出血量なら死ぬことはないでしょうから、安心して寝てていいわ」

「なっ、きっ、貴様……！」

B1の目の前に、白衣の女性が姿を現す。黒いガスマスクで顔を覆っているが、その髪型や華奢な体つきは資料で見た夕風志乃ターゲットのものだった。

床に転がった自分達の武器を取ろうとするが、相手の足に蹴られて遠ざけられてしまう。極力傷をつけないように、ということだったので使えそうな装備がない。

「この、スモークはッ…!？」

「色々混ぜてるわよ。ま、害はないようにしておいたから。じゃあね」

いかにも余裕です、とでも言いたげの口調で志乃が言う。

無様に呻く彼らの目の前で、固い扉が閉ざされる。

ピーッ、という、電子ロックが掛けられた音がした。激痛に悶え転がる彼らは、装置まで届かない。

「くそっ、あの女……こちらB1!女は薬品庫から移動!」

『何があつた!?監視カメラが停止させられているんだが…!』

管制室の焦つた声を聞いて、B1は目を剥いた。激痛に耐えながら、腰のベルトにあるケースを探る。

(端末がない…!?)

隊長に与えられる監視カメラの確認用端末が、なくなっている。

(まさかあの女……この1分ほどの間に俺の端末からクラックして、ホストコンピュータに細工を…!?)

信じられない。とても人間業とは思えなかった。



しかし。

それこそが、夕凧志乃という一人の女性が、暗部に染まった理由なのだ。

\*

10月14日、22時14分。

エクスプローラ  
多重観測は病院内の自販機コーナーに居た。その体を覆うのは病室着。就寝時間を過ぎているためであろう。いつも頭になっているゴグルはなく、その姿は御坂美琴と瓜二つ…というか同一である。

ガコンツ、という音と共に、購入したジュースが取り出し口に落ちる。

『ハバネロりんご』。

そんな不穏な文字が躍っている。さすがに病院だけあって、『まともな』自販機もあるにはあるのだが、新入荷されたそれがどうにも気になり、購入してしまったのである。

4日前、インターフェイス接続回路と居たときの豊かな表情はそこにはなく、むしろこれこそが平常運転、ザ・無表情がある。

彼女は踵を返して、パタパタとスリッパの音を立てながら廊下に出る。さすがに消灯時間過ぎということもあり、そこは月明かりと

非常口の表示くらいしか明かりがない。それも病院生活をしている身としては当たり前の光景であり、特に驚くようなことでもない。彼女は手にした缶をなんとなく眺めながら、暗い廊下を歩き出

刹那。

「っ……!？」

突然、強い力で拘束され、口元にハンカチを押し付けられる。

それが背後から何者かによって為されたことと気付くまでに、その時間はかからなかった。

(な、なにが……)

能力を発動させようとするが、そうする前に意識が遠くなる。

最後に目に映ったのは。

薄ら笑いを浮かべた、白衣の人物。

6 - 8

姉妹

研究員ラシク

(後書き)

どうも、櫻井です。

接続サイドと志乃サイドの内容が極端過ぎでしょうか。  
後の展開のために今はお許しください。

さて、次回ついに新組織の名前が公開になります。さんざん悩んでこれかよ、と思うかもしれませんが、それなりに理由もあるので  
(汗)

しかし蝉脇が関わると碌な事がないですね(笑)

それでは次回、お楽しみに

「私のことでしょうか、とミサカは呼ばれて飛び出てみます」

シスター・デジタルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「オマエは多重観測だろ。観測しかあってねえじゃねえか」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「……あん？」

辿り着いた空間で、インターフェイス接続回路は呟いた。

「……誰もいないの？」

その横で、メジャーハート心理定規が口を開く。彼女はキョロキョロと周りを見渡している。その後ろに居る曖も同様で、眠いのか欠伸をしながら周りを見ていた。

そこは大学の講堂のような空間だった。たくさんの椅子が立ち並び、扇形に部屋が展開している。眼下、大学の講義中なら教授が立っている場所に、人影がある。

見る限り、椅子に座っているようだが、座っている背もたれ付きの回転椅子は扇の柄にあたる方向、即ち接続回路たちと同じ方向を向いていた。

「…おい、オマエ」

インターフェイス接続回路が尋ねると、人影の座る椅子はぐるり、と三人の方へと回転する。

「………？」

曖が小首を傾げる。それもそのはず、人影は黒いスピーカーのついたマネキンだったのだ。三人が怪訝そうな目を向ける。数拍の間を開けて、

『ようこそ、「ユニオン」へ』

甘ったるい猫なで声が、広い空間に響き渡った。

『本当はここに、「メンバー」のシヨチトルと「アイテム」の絹旗最愛も招く予定だったので。両者共に暗部闘争の負傷により治療中のため、とりあえずあなた方に集まっていたいただきました』

それじゃ顔合わせの意味がないだろう、と全力で突っ込みたいところだが、隣の心理定規メジャーハートがつついと肘で小突いてくる。

「男はあなただけみたいね」

「……だからどうした」

「普通だったら喜んだりするものじゃないかしら？」

「自惚れんのも大概にしるアバズレ」

きっぱりと、接続回路インターフェイスが言い放った。心理定規メジャーハートが何か言っているが、意図的に聞き流す。

「んで？顔合わせとか言っつといて三人しか集まってねえが、俺たちはこれから何すりゃいいわけ」

『事前説明会、とでも言っておきましょうか。とりあえずはすぐに使える即戦力のあなた方にお話しておこうと思ひましてね』

猫などで声のトーンが低くなる。接続回路は目を細め、

「『使える』ねえ……面ア晒してりゃ耳を引きちぎってやるトコだな」

『そうならなかったためにこうして姿を見せていないわけですがね。話は簡単ですよ。「ユニオン」の役割は、かつて4つの組織で為されていた役目全てを請け負うこと……つまり、あなた方にはより一層多岐にわたる仕事をお任せすることになるわけです。まあ、以前の組織とは規模が違いますので負担はさほど変わらないでしょうが』

聞いたとき、インターフェイス接続回路は淡々とした口調で、

「テメエら、俺との契約の中身を忘れてねえだろうな」

妹達の身の安全、安息の地の確保。

それと引き換えに、接続回路は再び『役目』を負う道を選んだ。

『勿論。契約はお守りしますよ。「スクール」の時と条件は変えていませんので』

胡散臭い返事だった。

信用できるかと言われれば、できない方に傾く。

だが、『外の脅威』とやらの存在に都市が脅かされているのなら彼らの言いなりにならざるを得ない。

これはあくまで確認だ。

「……なら断る道理もねえ」

『ありがとうございます。お二方も、ご承諾いただけますね？』

メジャーハート  
心理定規と曖が、静かに頷く。

どついう契約なのかは知らないが、彼女らも何かと引き換えにここに居るのだらう。

\*

『では、続きはメンバーが揃ってからに致しましょう。お疲れさまです。8番のエレベーターを使用し、各自解散してください』

結局、説明内容は『スクール』とさして変わらなかった。

担当する役目とその規模が大きくなった、程度の変化である。

地下街の入り口から外へ出て、インターフェイス接続回路は忌々しそうに舌打ちする。

大した内容も無いくせにわざわざ出向かせるな、そんな文句を頭に浮かべて、彼は夜空を見上げた。

星は、見えない。

無論、見えないだけで存在はしているのだらうが、都市のネオンなどで照らされ夜ながら明るい空から星の輝きを見つけるのは難しい。



傍に心理定規の姿はない。何でも別件の用事があるとかで、そそくさと別のルートで帰って行った。

かと言って彼が一人というわけでもなく、その後ろには相変わらぬの冷めた表情で歩く夕風曖の姿がある。特にこちらから話すことも無いので、少々心地の悪い空気が漂っていたものの無視して彼は歩いていたが。

「……姉さんのことだけど」

数十分ぶりに、後ろの少女が口を開いた。

出てきた話題は、予想通りで。

「なんだよ」

特に感情を伴わない平坦な声で、インターフェイス接続回路は聞き返した。

\*

(やっぱりエレベーターは使えないか)

7階のエレベーターホールで、志乃はランプの消えた表示板を見ていた。

てつきり誰か見張りが居るものと思っていたが、そこには誰もいなかった。

理由は簡単。逃げられないようホストコンピュータからエレベーター

ターを停止させたのだろう。

つまり、自分も相手も階段を使うしかないというわけだ。

もつとも、今やホストコンピュータにハッキングをかけ、掌握している志乃からすればエレベーターを蘇らせることなど造作もない。

ただ…。

(彼らにもそれは伝わっているでしょうね……)

完全に銃しか手持ちの装備がなかった時は階段にしか見張りを置いておかなかつただろうが、エレベーターも呼び出せる今は各階のエレベーターホールに人員が割かれていてもおかしくない。

(さて、どうしようかしら)

エレベーターホールとは言うものの、大型デパートの片隅にあるような感じで、扉は三つだけ。

各階に一人置いておけば充分だから、この推論でいけば6人は固定される。

正確な人数が分からないことには何ともいえないが、やはりそんな希望的観測は好ましくない。

「……上手く行けばいいけれど」

そう呟いて、彼女はエレベーターを呼び出した。

\*

一方、B1に待機を命じられていたB4とB5は、7階の廊下を

駆けていた。

各班に指示を下すFグループより、B1、B2、B3が負傷の末電子ロックで閉じ込められたという話を聞き、下の階に展開していたCグループの数名と共に7階の廊下を走っている。

施設自体は広大だが、その構造はさして複雑でもない。二手に分かれて円を描くようにフロアを回れば、ターゲットの捕捉は容易である。監視カメラが停止させられたという不安要素はあるものの、電子処理班がそれを復元するのも時間の問題だ。

『こちらC2。B1、B2、B3が閉じ込められている第7薬品庫に辿り着いた。嗅覚センサーを使用する』

「こちらB4、了解。警戒しつつそちらへ向かう」

床を蹴るたび装備が音を立てるのを感じながら、B4は頷いた。

「B5、行くぞ」

後ろに居たB5に言うと、B5はささやくような声で、

「おい、エレベーターが動いてないか？」

「なに？」

見てみれば、確かに表示板の文字が光っている。階数表示を見れば、ひとつは上へ、ひとつは下へ、もうひとつはこの階でそのまま停止している。

「……確か、ターゲットはB1の端末を奪って設備の一部を掌握している可能性がある、とのことだが。エレベーターを使って移動す

るなんて普通なら考えられないな。おそらく俺たちを攪乱するための作戦だ。下に行ってるのは間違いないくダミーだろう。一度上に行つて作戦を立て直すつもりなのかそれとも……」

B4はニヤリと笑つて、この階で停止しているエレベーターへと向かつていく。

「そう見せかけてのその場しのぎだったり……！」

と、エレベーターの『開』ボタンを押すが、中は空っぽだった。

「……………」

「……………」

何ともいえない空気が、二人の間に垂れ込める。さんざん語つた拳句にこれでは、あまりに格好悪い。

「ゴホンッ。すると上の方に乗つて体勢を整えるつもりなんだろっ！」

B4は軽く咳払いしてそう言った。

「……………。じゃあ、念のために上も見てみるか」

B5が呆れたようなため息をついて、司令部に報告しながら歩いていく。その後を、やや小さくなったB4が続いた。

\*

「……なんとかなつたみたいね」

ゴウンゴウンと音を立てる極太のワイヤーの横で、志乃は端末を見て呟いた。

その後、エレベーターの中に設置してある緊急用のタラップ  
即ち脱出用の縄梯子　　を使い、彼女は下降しているエレベーターの天井上に座っていた。因みにタラップはもう自動の収納作業を終了しており、仮にエレベーターを確認しても異常がないように見える。万が一、それに気付いたとしても、この狭い天板からこちらを狙い撃つことは難しいし、仮に出来てもその前にこちらが発砲する。

(これで何人撒けたかしら)

監視カメラを確認する限り、7階を未だに搜索しているのが5名と、見当ハズレの8階を搜索しているのが2名。下に展開しているのは後何人だろうか。

と、その時。

(……っ！)

ブツッ、という音を立て、奪った端末の画面が黒く染まる。

これは即ち……。

(………ホストコンピュータの方からこの端末とのリンクを絶たれた………)

同時に、ガクンツ、と体を大きな揺れが襲う。  
エレベーターが急停止したのだ。

(いかにもダミーっぽいこのエレベーターだけでなく、他のエレベーターまでまとめて停止させたのね…)

まあ、一番手っ取り早い方法ではある。試しに足元の天井を外して中を見てみると、そこは真っ暗だった。

(……さて？どうしようかしら。エレベーターの速度と経過時間を計算して…ここは大体2階か2階と1階の間ってとこね)

後者であれば、なんとか逃げ切れる。薬品を搬入する裏の出口を利用すればいい。大型のトラックが入れるように巨大なシャッターで閉じられているが、確かあそこには手動で開閉するシステムがある。外の見張りも、この広大な施設だ、気付いて2人程度のもの。しばらく逃げたところでタクシーでもヒッチハイクでも使えばとりあえずは逃げられる。

刹那。

漆黒のエレベーター内に、シャフトからの光ではない、『外側』からの光が差し込んだ。

( … )

志乃は慌てて天井を閉め、息を殺した。

エレベーターのドアが開いたのだ。

3 基それぞれの確認に来たのだろう。同時に停止させたなら、それぞれが停まっているのは別の階のはずだから、確認の人数は少数と考えていい。だが、できることなら血を流させたくないというのが志乃の理想であり、傷つけずに済むならその方がいい。埃のたまった天板に耳をあて、会話を聞き取るうとする。

『……せんね』

『ああ、……………るう』

声音から察するに、「いませんね」「ああ、他はどつだろつ」という旨の会話だと思われる。

志乃は胸の内で、静かに安堵のため息を。

『ピリリリリリッ』

「!?!」

つこうとした途端、ポケットの携帯電話の呼び出し音が、シャフト内に響き渡った。

『…んだ!?!どじ!?!…!?!』

まずい。

そんな単語が頭に浮かぶ。

念のために確認してみれば、『曖』という文字が表示されている。

(あの子、こんな時につ！)

今更どうしようもない。彼女は携帯の電源を切ると、天板を外してエレベーターの中へと降り立った。

2 mもの高さから降りたせいもあり、踵から膝にかけて強烈な痛みが走るが、構わず彼女は開いたドアの向こうに立つ二人の男に発砲する。

狙い目はやはり膝。

崩れた片方を飛び越えて、もう片方に発砲しながら廊下を駆ける。背後から「ぐあああ！」という声がしたかと思えば、志乃の肩にも焼けるような痛みが走る。

「くっ……!!」

相手が倒れたことを確認して、エレベーターホールの表示板からここが1階であることに気付く。

そうとわかれば、もはや迷いはない。

袖口から漏れてくる深紅の血を振り切るようにして、彼女は暗い廊下を駆けていった。





どうも、櫻井です。

新組織の名前は『ユニオン』に決まりました。

もともとの組織ネーミングが集団を表すものが多かったので、新組織は集団の集団、連合、ユニオン、というつながりです。

生き残りでなんとなく働いてくれそうな人を考えたらシヨチトルくらいしか思いつかず、そして彼女は19巻まで入院中、でもこのあたりで新組織名は出しておきたい、と考えていたらこんな形になってしまいました。読みにくかったらごめんなさい。

さて、最近メインになっている夕凧志乃、今回はエレベーターを利用していただきました。随分前に取り上げましたが、彼女は「優しい」性分なのでどうしても希望的観測をしてしまうんですね。それが長所でもあり短所でもあるわけです。

妹からのメールで窮地に陥る、というのは随分前に考えたシチュエーションです。

今回は一応、この場面の解決編みたになります。

それでは次回、お楽しみに

6 - 10 救援 終ワラナイ企ミ (前書き)

「あなた、ツンデレ？」

学園都市第五位の超能力者（レベル5）

夕風 曖

「オマエ、クーデレ？」

学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「……変ね、切れたわ」

地下街の入り口傍のバス停に座り、曖が言った。

「繋がらねえのか？」

その前に立つインターフェイス接続回路が、彼女の様子を見て尋ねた。曖は首を横に振り、

「一応繋がりはしたんだけど、突然切れたのよ。こんな事、今までなかったんだけど」

携帯画面に目を落として、曖が言う。

インターフェイス接続回路は無言でその姿を見て、顎に手をやって考える。

聞くところによれば、曖は幼少時既に学園都市で生活しており、両親と会ったことがないという。それでもちゃんと仕送りはあると言っし、電話口での声なら何度も聞いたことがあるとか。

直接会ったことのある肉親は志乃だけと言っ点から推測するに、この少女は姉に対して相当依存していたことだろう。

メールや電話をしてもすぐに応えてくれたと言っことは、志乃も曖の気持ちに配慮し、大切にしていたとわかる。

ならば。

(確かに、『切られる』ってなあおかしいよな)

電話会社側のトラブルでもない限り、勝手に回線が切断されることはまずない。

志乃が意識的に切ったと見て間違いないだろう。

(大事にしてる妹からの電話を切るような状態…とすりゃあ…)

インターフェイス 接続回路の頭に、数日前危惧した事が浮かんでくる。

彼の瞳が、鋭さを帯びた。

「どうかしたの？怖い顔して」

見かねて、曖がこちらを見上げてくる。志乃をそのまま幼くしたような、そんな顔が目映った。

インターフェイス 接続回路は舌打ちし、

「……ちつと手エ貸せ」

\*

志乃は搬入口傍の廊下を走っていた。

今のところ追っ手の姿はない。ただ、出血の影響が意識が朦朧と  
してきている。

(後……少しっ……！)

状態が状態なので、大きな反動を受ける発砲を行なうのは難しい。かと言って、奪い取った端末が意味を為さないため、施設のセキユリティを利用して戦うこともできない。

わずかな可能性にかけて、走ることしかできないのだ。

頭の中にある施設の地図と、赤い警報機の明かりだけを頼りにただ走る。

もしかしたら、搬入口には見張りが居るかもしれない。いや、居ると見て間違いないだろう。

志乃を捕らえるつもりでいるなら全ての出入り口を閉鎖している可能性の方がずっと大きい。

ふっ、という笑みが、唇の端から漏れた。

『全然作戦になってない』。

走りながら、彼女は自重気味の笑みを漏らす。

結局は相手も同じ人間だと。

そこには良心があり、たくさんの甘さや優しさが内包されていると仮定しての、あまりに不確実な作戦。

どうしてあんなに自信があったのか、自分でも分からないし、笑えてくる。

『優しさ』なんてものが役に立つのは日常だけで、こんな非日常の中ではただの妄言に変わってしまう。

ましてや、大した能力もなければ活動的でもない、自分には。

それでも、天は彼女に味方してくれたのか。

たどり着いた搬入口には、敵の姿はなかった。

大型トラックが三台ほど並べられそうな開けた空間。

息切れする志乃の瞳が、大きなシャッター傍の壁面にある手動装置に向けられる。

あれを操作すれば、脱出できる。

少し安堵したのだろうか。彼女はじわじわと波打つ痛みを思い出し、一度顔をゆがませて、小走りに装置へと向かっていく。

装置は電気が通らなくなった場合に備えられたもので、レバーを回転させる仕組みになっていた。ほとんど力の入らない左腕と右腕だけで回せるのか不安だが、迷っているだけの余裕もない。

ほんの40cmほど、地面に倒れ伏して這い出る程度上げればいいのだ。

それだけならなんとかなるかもしれない。

後ろを確認しながら、レバーを掴む。

「ぐっ………！！」

左腕に力を込めると共に、感じたこともない激痛が走る。思わず手を離し、弾丸の残る傷口を押さえ、呻くが。

「……………!!」

志乃はキツと顔を上げ、再びレバーを両手で掴む。

蝉脇は、『生死を問わず回収する』、と言っていた。  
だが、接触した男達の装備は、思ったよりも軽装だった。

ということは、『なるべく生け捕りにしろ』という指示が下されているのだろう。

考えながら、志乃はレバーを回していく。波のように走る激痛に失神しそうだが、それでも一周、二周と回数を重ねる。

つまり、これ以上抵抗しなければ殺されない可能性が高い。ただ生き残るのならば、その方がはるかに楽な選択のはずだ。しかし、蝉脇はこうも言っていた。

『あの接続回路インターフェイスってガキをブツ潰す。脳と心臓さえあればいい』と。  
ということは、再び接続回路インターフェイスの精神を破壊するつもりなのだ。

彼自身の過去で駄目なら、彼と親しくしている人間を目の前で殺すなり、無残な死体を晒すなりして。

つまり、ここで捕まって寿命を延ばしたところで、いずれは蝉脇に殺される。

ならばわずかでも利用されず、蝉脇の目論見を邪魔できる道を進むのが最善。



それがわかったら、選択肢なんて存在しない。

「ふっ……く……はあっ……！」

九周ほどして、志乃はレバーから手を離した。

大体40cmほど、通り抜けられるだけの隙間ができたのだ。後はあそこをくぐり抜ければ活路が見える。

志乃が走り出す。

たった6m程度の距離だった。

必死に廊下を走っていた時なら、あっという間に過ぎた距離。全力で走っている今なら、2秒も掛からず到達できる距離だ。

それが長く感じられたのは、その価値によるものなのか。

一步一步、確実に近づいていく。

なんとかできた。ひとまず安心できるところまで辿り着けた。

そんな思いが顔を覗かせる。

が。

(え

?)

パンツ！という乾いた音が、開けた空間に響きわたる。

志乃が目を見開いた。

「……………っ……………？」

時間が止まったような感覚から一転、太股から噴き出した液体と、焼けるような激痛が走り、志乃はその場に倒れ込んだ。

「……………つく……………ああああああっ！！」

あまりの痛みに、悲鳴を上げる。

さっきの被弾とは違い、弾丸は志乃の太股に入り込み、開けられた節穴からは赤い液体が漏れ出してくる。

開けられたわずかな逃げ道との距離は、後2mほど。

向かおうにも、弾の残る太股の激痛が、意識を揺るがし体を動かすことを拒んでいる。

「……………こちらこそ。目標の足止めに成功」

倒れた志乃の傍にやってきた装甲服の男が、事務的な、機械的にも言える口調で告げる。

「はぁ……………はぁ……………うぐ……………っ！」

痛みに呻きながら、志乃は首だけを動かして周囲を確認する。

男は一人だけではない。  
彼の後ろに3人、さらに志乃が入ってきた通路を使って、また3人の装甲服が入ってくる。

これだけの人間が相手で、立つこともできないこの状態では、勝ち目なんてない。

チエツクメイトだった。

「目標の損傷は左腕部及び右太股。これより回収を開始」

男が告げると共に、その後ろに居た者たちが動き出す。

(……ああ)

それを見ながら、志乃は小さく笑った。

もう、駄目なのか。

頑張つては見たけれど、所詮自分の限界はこんなものなのか。

彼らに捕らえられて、インターフェイス接続回路の前で無様に殺されて。

こんな自分を姉として慕い、愛してくれている妹を独りにして。

こんな自分でも親友と呼んで、助けしてくれた二人の友人に別れも告げられず。

こんな汚い闇に染まった女すら救い出そうとしてくれた少年を、  
幸せにしてあげることができなくて。

願ってばかりで、頼ってばかりで、役に立とうとするばかりで、  
何ひとつ成し遂げられなかった。

ごめんなさい。

そんな言葉が、関わった人々に向けて、頭の中を巡った刹那。

バゴオツ!!という爆音と共に、彼女のわずか数cm上を、弾丸  
のような速度で何かが通り過ぎていく。

（ え? ）

「ぐがああつ!!!?!」

悲鳴が聞こえる。

気付けば、彼女の前に立っていた男も、拘束具を持って走ってき  
ていた男もいなくなっていた。

代わりに広がるのは、わずかに開いておいたシャツターが、面の  
延長線上の壁に激突し、そこから何者かの血が漏れている光景。  
もしシャツターを開いていなければ。

倒れ伏していなければ。

自分も、彼らのように押しつぶされていたかもしれない。

巨大なシャッターの延長線上に居なかった男達が、何かと狼狽えている。

志乃にも何が何だかわからなかったが、答えは背後から聞こえてきた。

「……っーかよお」

若い、低い声が、倒れる志乃の背後、目指した出口から聞こえてくる。

「なんだあ？このアホみてえな連中ア。女一人に大した人数だなあオイ」

靴音に紛れるカチャカチャという金属音。

志乃が顔をそちらに向ける。

夜月に照らされる灰色の髪。

痩せ形の体躯に、白く滑らかな肌。

首にはスポーツネックレスのようなモノがあり、緑色のランプが輝いていて。

血のような緋色の瞳が、凶暴な輝きを放っている。

「いつ…インターフェイス接続…インターフェイス回路っ!?!」

反対側から、怯えたような声がする。

現れた人物が、ニヤリとその顔に笑みを刻む。

「ピンポーン。大正解」

笑いながらそう言っていると、インターフェイス接続回路は杖を放り。

代わりに首元のランプが、瞳と同じ、凶暴な赤い輝きを発する。

「つーわけでお仕置きだ。バラツバラにしてやんよ、三下共」

\*

「……………」

気がつけば、志乃は6人乗りのファミリーカーに座っていた。肩と太腿の被弾箇所には、白い包帯が巻かれている。

「……………お姉ちゃん」

横から聞こえた声に、志乃はハツとしてそちらを向く。

そこに居たのは、自分にそっくりな顔をした少女。ほんの少し、涙目になっているのがわかる。

「……曖」

その姿を認めると、今度は前から声がかかった。

「……目エ覚めたか」

意識が飛ぶ前に聞いた、若い低い声。インターフェイス 接続回路。  
助手席に座る彼は、こちらを向くことなくそう言った。

「あなたが……」

助けてくれたの？と続けようとすると、

「シスコンの妹に感謝すんだな。そいつがオマエに電話しなけりや、多分間に合わなかった」

「ちょっと、シスコンって……」

曖が抗議の声を上げる。

この二人はいつの間に親交があったのだろう。少し気になるが、志乃は彼の背に向け微笑んだ。

「……でも、あなたも助けてくれたのよね？」

インターフェイス 接続回路はこちらに表情を見せることなく、静かに、呟くように口を開いた。

「……昔の借りを返したただけだ。オマエのお陰で、俺アちつとばっか、人間の感情みてえなモンを知ったからな」

わずかだが、声音が暖かいと感じたのは、志乃だけではないだろう。隣の暖も、やや呆れたように笑っている。

「でも、お姉ちゃん…姉さんを狙った部隊って、誰の命令で動いていたのかしら」

「ッ！」

暖の一言で、志乃の頭にこの一件の首謀者の顔が浮かび上がる。

「インターフェイス接続回…」

志乃が言いかけた途端、携帯の着信音が鳴り響いた。

味気ない、初期設定の着信音。

音を聞いて、『インターフェイス接続回路が』ポケットから携帯を取り出した。

「非通知……？」

表示された内容に小首を傾げて、回線を繋げ耳に当てた瞬間。

『いよう！元気い？インターフェイス接続回路ウ！！』



目を剥くインターフェイス接続回路の耳の中を、陽気な声が駆け巡った。

6 - 10 救援 終ワラナイ企ミ (後書き)

どうも、櫻井です。

ようやく夕凧を救出…ですがまたあいつからの電話。

本章、とうとう最終決戦です。

何話使うかはまだ明確には決めていませんが、手に汗握る展開に出来たらなあと思います。

それでは次回、お楽しみに

6 - 1 1 裏表 車上ノ戦イ (前書き)

「なんか俺、噛ませつぽくね？」

学園都市の暗部に染まる研究者

蝉脇 雫掛

「足南君よりマシなんじゃない？」

接続回路インターフェイスの理解者にして曖の姉

夕凧 志乃

「蝉脇……！」

携帯を耳に当てた状態で、インターフェイス接続回路が奥歯を噛み締める。

「……なるほど？夕凧の一件は全部テメエの差し金かあ蝉脇クン？」

『おうよ。ははっ、どーだ、驚いたか？』

まるでサプライズプレゼントでも見せた後のような口調で蝉脇が言った。

ハン、とインターフェイス接続回路は吐き捨てて、

「少しはなあ。まあ、テメエのカワイイ部下は返り討ちにさせてもらったから？馬鹿面下げた負け犬報告でも楽しみにしてやがれ」

『おやおやあゝ…志乃ちゃん助けちゃったかあ。いやあ失敗失敗。どうしたもんかねえこの先』

そうは言うものの、敗北感を感じているようには聞こえない。むしろそこには優越感のようなものが感じられた。不愉快そうに、インターフェイス接続回路が眉をひそめる。

『ああゝ、そうそう。志乃ちゃんから話は聞いたか？』

「あ？話だと？」

主語を伴わない問いに、インターフェイス接続回路が聞き返す。

『襲撃理由だよ。聞いてないかなあ？』

「聞かされちゃあいねえなあ。今日エ覚めたばっかだよ」

インターフェイス接続回路が後ろの席をバックミラーから確認する。よく似た顔が並んでいて、大人の方が何かに気付いたように顔を上げる。

インターフェイス「接続回路！多重観測が！！」

『お前をブツ潰すためだよ。なんでその女を狙ったか、わかるよな？』

志乃と蝉脇。

二つの情報が、同時に脳に入ってくる。

インターフェイス接続回路を潰すための作戦。

狙われたのは、親しくしている夕凧志乃。

『潰すための作戦』。

『親しくしている』人物。

エクスプローラ『多重観測』。

「まさか……………」

目を剥き見開き、インターフェイス接続回路は至った結論から呆然と眩く。  
電話の向こうが騒がしくなった。

『あぎやははははっ！！気付いたあ？気付いたかあ！？おっせいおっせい！！』

勝ち誇ったような狂笑が、耳に響く。

『志乃ちゃんを狙った作戦はダミー！！本命はお前のたあい切な乱造品の改造品だよ！！あんまり間抜け過ぎてこりゃあ笑うしかないねえオイ！！』

そんな蝉脇の罵声は、右から左へと抜けていった。

頭の中が真っ白になっていた。

『エクスプローラ多重観測が、蝉脇に捕らえられた』。

その事実だけが、重く重くのし掛かってくる。

「テ…メエ…！！」

震える声が、喉元から這いだしってくる。携帯を握る手に力がこもり、ミリミリと音を立てている。

『まー安心しな。こいつはお前の前でブツ壊すことに意味があるからな。まだ壊しやしねーよ』

壊す。

そう、まるで機械でも前にしているかのような表現。

ギリツ、という歯に圧力をかける音が、口から漏れる。

「テメエ……そいつを何だと……ッ!？」

叫ぼうとした刹那、パリンという音を立て、運転席の窓ガラスが割れた。

『メンタルアウト心理掌握』で洗脳して運転をさせていた襲撃者の体に、割れたガラスが降り注ぎ、その頭に弾丸が突き刺さる。

車は制御を失って、左右に大きく揺れながらスピンを始めた。

「夕凧妹!夕凧を守れ!」

言つて、インターフェイス接続回路は首の装置のモードを切り替え、助手席の扉を破つて屋根に出る。

風のレールを作り、ある程度車の動きを制御して、発砲された方向を見ると。

そこには、反対車線を逆走する一台のトレーラーがあつた。

荷台のコンテナ壁に阻まれ肉眼では見えないが、能力のレーダーはそこに6人の人間が居ることを示していた。おそらく蟬脇の手の者たちだろう。

スピンする車を風の力で制御し、ある程度平常運転ぐらいの状態に戻したが、新たに弾丸を撃ち込まれればどうなるかわからないし、下の二人も危ない。

なんとかして向こうの連中を倒さなくては。

『あはつ、楽しんでるみたいだな。実はまだ移動中なんでねえ。時間稼ぎだ。一般人とかの命ってやつを物好きに守るなりしてたっぷり苦労しちゃってくれ』

それを最後に、蟬脇の通信が途絶える。

「……クソつたれが。さつさと終わらせてやるってんだよ」

23時を過ぎた今でも、車は結構走っている。

再びスピンしたり、向こうからの流れ弾が一般車両に当たったりすれば、ただでは済まない。

逆走している向こうの車線が空いている分、まだマシというものだ。とはいえ、逆走する車を全ての車がかわしていけるはずもない。

インターフェイス  
接続回路は頭から血を流して息絶えている運転手を無理矢理窓から引きずり出して、歩道の植え込みに放り投げる。

「夕凧！オマエ運転くらいできるな！？」

運転席の窓から中に呼びかける。

「無理よ！姉さんは撃たれて……」

曖が声を張り上げるが、当の志乃は頷いて、

「……ちょっと痛いけど、それくらいならできると思っわ」



「……悪イな」

インターフェイス 接続回路が言い、念のためにシートに落ちたガラスを分解してから移動してきた志乃を座らせる。

彼女がハンドルを握ったのを確認し、

「今から風の補助を解く。それで駄目なら別の手を考えてやる」

「え、ええ………うあっ!!」

夜の街道に、再び銃声が響いた。

正確に運転席の志乃を狙い撃ったようだが、インターフェイス 接続回路が窒素の壁を作って弾を弾き、同時に風による補助を解いて運転席を覗き込む。

「……いけるか」

「ええ…大丈夫」

毅然とした表情を志乃がする。

それを見て、インターフェイス 接続回路は立ち上がった。

(誰かを守るために…か。ハッ、面白え！やってやるうじやねえか  
!!)

そうした時、不意にトレーラーとの間に、大型のバスが現れた。中に乗っているのは数十人の学生。合宿か何かの後のようで、眠そうな顔が見える。向こうの連中は、おそらく一般人を巻き込むことも視野に入れている。このバスのタイヤでも狙って大事故を起こし、一般人ごと志乃や自分を殺そうとしてくるだろう。

ああは言ったものの、蟬脇は志乃を殺すことで精神的に追い詰めるという手は捨てていないのだ。

(チツ……)

インターフェイス  
接続回路は極力志乃に負担がかからないよう飛び上がり、並行して走るバスの屋根へと飛び移った。

着地と同時に、ガン！という音が足元に響く。車内がどんな風になったのか、気にしているだけの余裕はない。ライフルの銃身が、バスに向けられている。

インターフェイス  
三度目の発砲が響くと同時に、接続回路は巻き起こした突風で弾丸の軌道をねじ曲げ、硬いアスファルトの上へとそれを落とす。トレーラーのコンテナ壁に空けられた狙撃用の穴から狙いをつけているのが見えた。

不意に。

「危ない！」

下から曖昧の聲がした。何事かと顔を動かせば、進行方向上にあつたらしい空中通路が、目の前に迫ってきていた。大型のバスの上とということもあり、うつ伏せにならなければ通路に激突する。通路を分解してもいいのだが、そこには残業帰りらしい大人たちが歩いている。

「ッー！」

インターフェイス  
接続回路は足下の空気を爆発させ、天高く飛び上がった。通路を歩く人々がこちらに目を向けるが、構わず滑空を続け。

横幅15mほどの通路を飛び越えつつ、反対車線を逆走するトレーラーの真上に移動する。

そのままコンテナの上に着地して、その屋根の一部を剥ぎ取り空気に溶した。

「なっ……っ！」

四角く切り取った屋根の隙間から、息を呑む声がある。装甲服だ。一度啞然としていたようだが、すぐに臨戦態勢になって持っていたバズーカをこちらへ向ける。

あんなものが発射されようものなら、このコンテナはおろか破片が道路に撒き散らされる。

察すると、インターフェイス接続回路はかき集めた空気を風の奔流へと変換して、コンテナの隙間へと注ぎ込んだ。それに混じって、自分もコンテナの中へと入り込む。強烈な烈風に押し潰された男の持つバズーカを、中のミサイルごとただの粒へと変換して、再構成した破片を烈風で吹き飛ばした。それらは確実に、相手の装甲服に突き刺さる。

続けざまに、銃を構える男たちを電流で麻痺させて、分解公式を叩き込み、頭蓋骨を破裂させた。

「この化け物オオオっ！！」

ふと、背後から声がする。コンテナに居る最後の一人だ。蟬脇に持たされたモノなのか、彼も装備していた現代的なグローブを拳にはめて、走ってくる。かつては分解が追いつかず、手も足も出なかったその装備。

だが、インターフェイス接続回路に触れた瞬間、男の腕はバキボキと音を立てて変

形した。

「ぐぎゃあああつ!!!?!」

メチャクチャに折れた手首を押さえて、男が転がる。

この場で動けるのが彼だけだと確認すると、インターフェイス接続回路はそこらに転がっていた機材を杖に変換し、通常モードに切り替えた。

「あの馬鹿に持たされたのかは知らねえが、いつまでも同じ手が通  
用すると思ってるのか？」

静かな声で、インターフェイス接続回路が言った。男は呻きながら、

「ど、どうしてっ……」

「『オフエンスアーマー窒素装甲』つつう能力を参考にさせてもらった。テメエは弾丸  
弾き返すような壁に全力で殴りかかったってわけだ」

その辺に転がっている襲撃者の拳銃を引き抜いて、腕を抱えてい  
る男に向ける。

「ひ…ひい…っ」

腕を抱えながら後ずさる男を、裁きの鉛弾が貫いた。インターフェイス接続回路は  
銃をそのままポケットに突っ込むと、代わりに携帯を取り出し電話  
をかける。

相手は曖だ。

『……終わった？』

年不相応な落ち着いた声が、電話口から聞こえてくる。

「この連中はな。適当な場所に車止めさせて救急車を呼べ」

「あなたはどつするの?」

「このトレーラーの運転手を使って蟬脇の野郎の所まで行く」

曖の問いに、インターフェイス接続回路はきっぱりと答えた。  
すると彼女はらしくもない不安げな声で、

「……一人で?」

「今は一分一秒が惜しいからな。それにこいつは俺とあのクソ野郎の問題だ。オマエやオマエの姉を巻き込むわけにはいかねんだよ」

確かな決意を込めて告げる。曖はしばらく無言になって、

「姉さんに代わるわ」

そんなことを言った。

またあの世話焼きのありがたい言葉を聞くことになるのか。

……暖かい、優しい言葉を。

「……代わったわ」

一応弾丸を摘出したとは言え、被弾した人間とは思えない澄んだ

声が、耳の中に入ってくる。

「……無理させたな。あの医者のもとでじっくり  
インターフェイス  
接続回路」

こちらの声を遮って、志乃が声を発してくる。その毅然とした声  
音に、思わず黙り込む。

『必ず多重観測を助け出さない。あなたに踏み出す勇気を与えて  
エクスプローラ  
くれた、あの子をね』

「……ああ。分かっている」

志乃の言葉に、接続回路は人知れず頷いた。  
インターフェイス  
まったく、どうしてこうも、彼女の言葉は響いてくるのか。

『……それと』

しばらくの間を空けて、再び澄んだ声がする。接続回路は黙って、  
インターフェイス  
その続きに耳を傾ける。

『……必ず、帰ってきて。私も曖も、みんなあなたを待ってるから』

思わず、目を見開いた。

驚きでもなければ怒りでもない、純粋な心の動きで。

『みんなあなたを待つてるから』。

かつて孤独のどん底に居たインターフェイス接続回路が、何より欲した思いがそこにはあった。

蝉脇によって否定された、生まれにして人殺しという最低な始まり方をした自分に、こんなことを言う人間が居る。

心のどこかで諦めていたモノが、もたらされる。

インターフェイス接続回路がふつと笑う。

「……ああ。必ずな」

志乃の返答を待たず、インターフェイス接続回路は通話を切った。

その時既に、先ほどの暖かい感情は表情ごと抜け落ちていて、無表情な顔だけが残されている。

通常モードと能力使用モードを切り替えるのと何ら変わらない、スイッチを倒すだけで為されるような早さで、彼は気持ちを切り替えていた。

向かう先には、トレーラーの運転席がある。

ここから先は悪党だ。

暖かい言葉を受けて、帰り甲斐のある世界を見せられて、確かな喜びを感じた自分は閉じ込めて。

破壊と殺戮によって結果を紡ぎ出す、悪党たる自分を呼び覚ます。

助手席の後ろまで歩いて、能力で壁をこじ開けると、そこには震える装甲服の姿があった。

仲間を皆殺しにされて、そうとうキているようだ。曖が居れば、洗脳というあまりに簡単に修復も可能なある意味平和的な手があるが。

自分のやり方はそうではない。

助手席にすくとんと座り、手を銃のような形にして震える男に突きつける。

インターフェイス接続回路がただの人間なら、こんなのは何の意味も為さない行為だが。

ただの人間でない彼は、首のスイッチを押すだけで、男の運命を決められる。

「はっ……はっ、はっ……」

まともに話すことも出来ていない。インターフェイス接続回路はふうと息を吐き、ドスの利いた声で静かに告げる。

「蝉脇のトコまでだ。死ぬか生きるか、テメエで決めろ」





6 - 11 裏表 車上ノ戦イ (後書き)

どうも、櫻井です。

GWということで三連続投稿になります。

今回は車上の戦いということで(笑)

一度は書きたいなあと思っていました。空中通路を飛び越えるのは映画の「スパイダーマン」のワンシーンを凄いと思って描写しました。スピード感のある戦闘はまだこの先あるのですが、多分車の上で戦うなんてのはこの先ないと思ったのでここぞと(笑)

夕凧が運転するのは道路交通法的にどうなのか、自分でもちよつと考えました。前回の夕凧の心理描写であった「役に立とうとする」というのをここでも使った次第です。志乃さんゴメン(汗)

運転手、洗脳された拳句に放り捨てられましたが、植え込みがクツションになって一応原形は留めてます。いつもならバラすところですが、役に立ってくれたということで接続回路なりの配慮です。邪魔した方はちゃんと殺すんですけどね(汗)

さて、次回は蝉脇の根城へ。

どうぞお楽しみに！

6 - 1 2 未知 手も足も (前書き)

「どうして新参のあなたが私より人気があるのですか？とミサカは  
出番の多さを比較して疑問を提示します」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 1 0 4 1 2 号 エクストラローラ  
多重観測

「私に言われても分からないわよ…」

学園都市第五位の超能力者(レベル5) 夕凧 曖

志乃と曖は街道脇のコンビニに停車していた。

逆走するトレーラーの事もあり、結構な混乱に陥っていたが、幸い怪我人はひとりもいなかった。強いて言うなら、数キロ後ろで仲間に撃たれて植え込みに埋まっている男くらいだろう。

「……量産型能力者計画……ふうん、あの噂、本当だったのね」

エキスプローラ  
多重観測に関する志乃の説明を受けて、曖は納得したように頷いた。あまりにあっさり納得するものだから、志乃も目を丸くする。

「知っていたの？」

「常盤台の情報網は馬鹿にならないから。まあ、その被験者が御坂さんってというのは初耳だけど」

そう……と志乃が複雑な表情になる。

「……余計な心配をさせてしまったらどうか。とはいえ、今更どうしようもないことだ。」

「でも変ね。お姉ちゃんの話通りなら、その冥土ヘヴンキャンセラー帰しや上位個体が誘拐に気付きそうなものだけだ」

「……多重観測は多重能力進化実験で唯一残った完成個体なの。ネットワークに障害が出ないように、一時はリンクを絶って、現

在でも87%程度しか同期できていない。高いように感じるかもしれないけど、他の個体より10%以上の誤差があるから、少し細工をすればネットワークから隔絶、あるいはダミーを滑り込ませることも可能なのよ。蝉脇は多分、彼女を拘束する前後に処置を施してネットワークに異常が生じないようにしたんでしょね」

長々と志乃が説明しても、曖は聞き返すことはしない。第五位の頭脳は伊達ではないのだ。

「……それができると見越しての計画……でも、手間やリスクはすごく大きい……。その蝉脇って人は、インターフェイス接続回路に恨みでもあるの？」

尋ねてみると、志乃の表情が陰った。

「……恨んでるのはあの子の方なんだけどね。ホント、何様のつもりなのかしら、彼」

忌々しげに志乃が言う。

普段見ない志乃の表情に、曖は思わず黙り込んだ。

\*

トレーラーで『案内』された先は、第19学区だった。

再開発に失敗し急速に寂れてしまった、外の世界に一番近い環境とも言える区域である。

そこに建つ巨大な工場施設が、蝉脇の根城らしい。

「……ここで間違いねえんだな？」

インターフェイス  
接続回路が、運転席で未だに震えている男に尋ねる。男はこくこくと頷いて、

「あ、ああ。あ、あの夕凧って研究員をとっ捕まえたら、こゝこゝへ運んでくるよう言われてた。多分、ここかこの近辺に……」

「ここで引き渡して別なルートを使って運ぶとも考えられるがな。  
…まあいい」

そう言って窓の外に目をやってみると、日付が変わった深夜の暗がり広がっており、トレーラーのライトがなければ施設の輪郭しかわからない気がする。

インターフェイス  
接続回路の細い指が、彼の首元の装置に伸びた。1秒間の解析を終え、インターフェイス接続回路は嘆息する。

「相変わらず土ん中に潜んのが好きだなあアイツあ」

そう言って、彼は扉を開けて外に出た。

「お、おい。お、俺はどうなるんだ」

中から聞こえた震える声に、インターフェイス接続回路は静かに答える。

「このままこの世界に塗りつぶされてくか、ちっとでも遠い場所に行って罪を償おうとするか…どっちか選べよ。どうせやり直せやしねえだろっからな」

月に照らされて銀色に輝く髪が、夜風に揺れる。それが獲物に飛びつく寸前の逆立つ狼の毛並みに見えて、男はぶるぶると顔を横に振った。少年はフン、と鼻で笑うと、

「まあ、もしまたこんな風に会うことがあれば…今度は背骨を引き抜いてやる」

吐き捨てるように言うと、彼はカチャカチャと音を立てて建物を目指した。

\*

建物の中は完全に『停止』していた。

かつては目に付く作業機械が動いていたのだろうが、今ではただの鉄の塊と化している。

そんなことをぼんやりと思いながら、彼は足下に目をやった。

先の分析で、蟬脇がこの地面の下に居ることは分かっている。

この寂れた区域で地下十数階もの施設があり、尚且つそこに電気が通っていると知れば、誰もが極秘施設だと悟るだろう。

インターフェイス  
接続回路の知覚能力でもなければ、よもやこんな場所にそれがあるとは思わない。

(能力使用モードは後10分くれえか…)

ざっと計算した後、インターフェイス接続回路は地面に触れ、物体レベルにそれを

崩す。

人工の光で照らされた地下一階を認めると、その中へと入り込んだ。

「さあてえ？ドオコに居んのかなあ 蝉脇くん」

\*

「インターフェイス接続回路の侵入を確認しました」

装甲服の男が、白衣の背中に向かって報告する。相手は一点、何やら大きなメスシリンダーのようなモノを前にして、静かに笑った。

「りょくかい。んじゃあお前さんは部下と一緒に先に例の部屋へ行っててくれ。アレの調整もしなくちゃならんしな」

軽い調子で白衣の男、蝉脇隼掛は手を振った。その飄々とした態度からは想像もできない驚異的なスピードで、ノートほどの大きさの端末に命令を打ち込んでいく。

「あの…… 蝉脇さん」

「ん？どしたー？」

おずおずとした男の声に、蝉脇は適当に対応する。



「本当に実行するんですか？……こんな少女を」  
「……あ？」

蝉脇がぴくりと反応し、鋭い視線を男に向ける。男はビクツと肩を震わせ後ずさる。

「……それはどういう質問かなあ？上の言うことに意見するわけ？」

先程の飄々とした雰囲気はそこにはなく、冷酷な顔がこちらを向いていた。

「い、いえ。もちろん、任務は遂行しますよ。ですが、インターフェイス接続回路を  
始末するのに、その少女を……あぐつ…ああああああッ！！」

男が思わず顔を両手で覆った。蝉脇の手にはコップほどの大きさのビーカーが持たれていて、その中身は濡れているものの空っぽだ。

元は硫酸が入っていたビーカーである。

のたうち回る男を踏みつけ、蝉脇は言う。

「あのガキ潰すにや物理的にじゃ駄目なんだよ。あのバカ、能力制限が付いたからって能力の応用の研究をしていやがる。前に俺が使った戦法ももう通じないし、あるとすればヤローのメンタル、心つてヤツを攻撃するっきゃないのよ。わかるかい？」

あれほどの硫酸を浴びた男のゴムマスクは溶け、溶けた隙間から爛れた肌ただが覗いている。ゴーグルやヘルメットを引き剥がせば、ポロボロの顔が見られることだろう。

もちろん、知っていてこうしたのだ。  
下手に殺すよりこちらの方がずっと効く。

「熱い！熱い！！熱い！！！！！！」

もがく男を蹴っ飛ばし、震えて見ていた別な装甲服に運ばせると、蟬脇は作業を継続した。たった今、一人の男に取り返しのない惨劇を与えたばかりだと言うのに、蟬脇の頭にはさらに滅茶苦茶にしてやりたい少年の姿が浮かんでいる。

\*

カチャカチャという杖をつく音だけが、明るい通路に響いている。

かれこれ十数分歩いているが、敵の姿は全くない。

これなら能力使用モードに切り替えて一気に攻め立ててもいい気がするが、多重観測エクストラローラの居場所も状況も把握できていない今、それをするにはできない。蟬脇のことだ。木原数多が打ち止めにしたように、ウィルスを注入している可能性もある。とするなら、それを直せる装置もしくはデータが無ければ話にならない。

（行動を起こしてきたことは、蟬脇は俺に対して有力なカードを用意しているはずだ。それが多重観測エクストラローラだけならいいが、また妙な装備を使ってくる可能性もある。そもそも、このタイミングで俺を潰すつても変な話だ。上層部がそれをするにしても、今までにくらでも機会はあったはずだ。このタイミングにする理由……俺への新しい対応策の準備に時間が掛かったのか？）

考えながら、インターフェイス接続回路は一度息を吐く。

(クスプロードアイツの言葉を信用すれば、俺がヤツのところ<sup>エ</sup>に辿り着くまで多  
重観測は殺されねえ。死んでさえいなけりゃ、あの医者が何とかす  
る)

結論を出し、インターフェイス接続回路は装置のスイッチを押した。

急速に入ってくる周囲の情報。

周囲を囲む壁の材質や空気中の粒子、果ては地下深くで待つ『敵』  
の血流まで、正確に頭に入ってくる。

(地下26m、北西方向斜め65°)

頭に入ってきた情報を残し、今度は周囲の原子から電子を剥ぎ取  
り、極太の光線へと変化させ、情報どおりに地面を引き裂き、最短  
ルートのトンネルを作り出した。

そこに滑り込み、あっという間に目的地へと辿り着く。

特力研を彷彿とさせる開けた空間。かつてそこで行なった殺戮の  
記憶を思い出しながら、インターフェイス接続回路は目の前の光景を見て裂けるよう  
な笑みをその顔に刻んだ。

「久あしぶりだなあ蝉脇クン。今日のご招待アリガトウ」

少し離れたところに、蝉脇の姿があった。黒いスーツの上に羽織  
った白衣、長い髪をオールバックにし、うなじの辺りで結んだヘア  
スタイル。そして顔には陽気な笑顔を浮かべている。

「ちょっと見ないうちに成長してくれちゃったなあお前は。ははっ、父性本能から歓迎するわあ」

「テメエのお陰でこちら随分な目に遭ってよあ。あんま長々と話してらんねえんだ」

軽く首の装置に触れると、蝉脇は興味深そうな声を上げて、

「……ミサカネットワークから受ける電気信号によってようやく脳を動かしてるってトコか。ふーん、冥土帰しも結構なモン用意したもんだな。……んで、聞いとくけど。ここが地下深かぁーくなのは知ってるな？」

ほんの少し、蝉脇の声のトーンが下がる。接続回路は鼻で笑って、インターフェイス

「ハッ、電波の届きにくい状況じゃ能力が使いにくいってか？潜ってたかが26mだ。この程度なら何の支障もねえってんだよ。もっと深く潜るんだったなあモグ脇ケン」

少年の指が装置に伸びる。蝉脇は黙ってそれを見るだけで、何の行動も起こさない。一瞬訝しげに眉をひそめた接続回路だが、インターフェイス構わず装置のスイッチを押した。

能力使用モード、残り9分。

余裕だ。

不敵に笑うと、いつものように大型トラックすら吹き飛ばす強烈な烈風を、蝉脇とその周りの装甲服に向け放。

「……………あ？」

蝉脇に向け振るった腕が、虚しく宙を掴んだ。呆然と、  
インターフェイス  
接続回路  
が目を見開く。

(……………どう……なってる……………)

首の装置を確認するまでもなく、自分は両足で立っている。  
傍らに放られた杖もそのことを証明している。

なのに。

(なんで風が使えない……………?)

現状に戸惑っていると、蝉脇の後ろに立っていた兵士がライフル  
を構えた。

防御しなくては。

全身に銃弾の分解公式を働かせる。

これで放たれる銃弾はその役目を遂げられない。

そう思っていた。

ダァンツ！という銃声と共に、弾丸がインターフェイス接続回路に迫っていく。  
肩に向かって突き進んでくる鉛の矢。

それは彼に触れることなく、その寸前で火花を散

「あぐっ……！？」

肩口に激痛が走る。

思わず痛む箇所をもう一方の手で押さえるが、その指の隙間から、  
深紅の液体が漏れてきた。

（分解が……できない……！？）

再度、ライフルの引き金が引かれようとする。

分解できないなら、窒素で壁を作っ

「があっ………！」

今度は脇腹に、弾丸が突き刺さった。

ここへ来て、焼けるように鋭い痛みが襲ってくる。

「うがあああああああああああつ……！？」

あまりの激痛に、インターフェイス接続回路は倒れこんだ。

被弾した二箇所をそれぞれの手で押さえて、地面で呻く。

風も操れない。簡単な分解もできない。窒素を操ることもできない。  
い。

当たり前のようになってきたことが、通用しない。

新たに学習した事も、通用しない。

(どうなって……やがんだ……ッ!?)

どうも、櫻井です。

何故か能力が使えない接続回路。初めて弾丸に貫かれ、理解不能の現状に呻く。

そんなシメにしたのはこれより伸ばすとどうしても切りが悪くなってしまうからです。

蝉脇が用意していた「アレ」が複数あるのですが、接続回路がこうなっているのもその内のひとつが原因です。ヒントは原作にも本作にもありません。

話は変わって前書きについて(笑)

感想とは別に、読者の皆さんから時折メールが来るのですが、夕凧について言われる方が最近増えていまして。出番の増量、接続回路との絡み、SSで夕凧姉妹ネタを、などなど頂いております。夕凧姉妹の人气が結構あるので、ちょっと多重観測の気持ちになつて書いてみました今回の前書き(笑)

まあ、不自然にならない程度に要望には応えていきたいと思います。

それでは次回、お楽しみに



6 - 13 停止 乱レル思考 (前書き)

「何回倒れば気が済むのよ…」

学園都市第五位の超能力者(レベル5)

夕凧 暖

## 6 - 13 停止 乱レル思考

「まー、及第点ってトコかなあー？」

広い空間に、蝉脇の嘲笑が響いた。

呻くインターフェイス接続回路に、堂々と歩み寄ってくる。

「テ…メエ…！一体、何をしやがった…！！」

能力使用モードなものにも拘わらず、全く能力が行使できないというかつてない窮地に、インターフェイス接続回路は歯噛みする。

そんな様子を見て、蝉脇はさも面白そうに笑っていた。

「種明かししてほしいか？なあ？んん？」

「チツ……！！」

とりあえずは状況の整理が必要だ。

まず、拡大した意識や杖なしで立っていられたことから、能力使用モードに切り替わっているのは間違いない。異様なのは風の操作ができないことと、窒素の壁を作り出せないこと。そして銃弾の分解ができなかったことだ。

いずれも能力使用モードならば可能なはずなのに、何故か発動しなかった。

最も有力な可能性は、『攪乱の羽』チャフシードを利用した場合。  
それを使えば電波を攪乱することができ、インターフェイス接続回路がミサカネットワークから受ける電波を妨げ、能力を抑制しているとも考えられる。だが。

(だが、仮にそうなら知覚能力も使えねえはずだ)

攻撃能力並びに防御能力は使えないが、知覚能力だけは変化がない。もしチャフを利用してゐるのならば、そちらにも支障が出るはずだ。

現に、肉眼で金属膜は確認できないし、何よりその知覚能力にチャフを構成する物質の反応がない。血流を把握できて空気中の金属膜が把握できないなどあり得ない。

「色々考えてくれちゃってるみたいだけど、多分どれも違うと思うぜ？」

思考作業を続ける中、蝉脇の声が挟まった。

「俺たちは、『インターフェイス接続回路がどうあがいてもどうにもできない』システムを作り出そうとした。無駄な努力が大好きなお前が、『オフエンスア窒素装甲』イマーや『マルチタウナー原子崩し』、その他様々な応用を用意してやることは予想できたからな。まあ、ここはお前の能力の本質を考えてやりやあい」

蝉脇の声を聞きながら、インターフェイス接続回路は自分のポケットに意識を向けた。

そこには『案内』のトレーラーで手に入れた、6発入りの銃がある。

「『インターフェイス接続回路』はありとあらゆる物体から素粒子までを自由に結合・分解できる能力だ。だがお前が対象を認識・把握した上で演算式に当てはめなきゃならないってコトがネックになる。計算式を記憶しているも肝心の材料、Xが分からないことにはどうにもならない。生憎お前はこの地上に存在する原子を記憶してやがるから、俺らにはせいぜい複雑に組み合わせた装備で演算終了までの時間と触れながら分解するまでのタイムラグを利用するくらいしか手が無いわけだが」

蝉脇との距離はほんの2m程度。知覚能力で正確な座標まで導き出せるこの状態なら、蝉脇を殺すことは可能だ。だが多重観測エクスプローラの状況次第では蝉脇から情報を引き出すかデータを奪い取らなくてはならない。蝉脇の性格を考えれば、自分しか把握できないような状態にしている可能性の方が高い。

迂闊に殺せば取り返しがつかなくなる。

「んで、色々応用について勉強してくれちゃったお前に対して、とうとう俺たちも対応策がなくなっちゃったわけだ。だからまあ、考えんのをやめたんだよ」

ぼりぼりとこめかみの辺りを搔いて、蝉脇はあっさりと言った。  
意味がわからず、インターフェイス接続回路が眉根を寄せる。

「どついう…ことだ……」

そんな言葉が口から出た。

言った後で、聞き返すことしかできない自分を齒痒く思う。

蝉脇はニイツと口端を吊り上げ、

「『既存の物質』は全てお前の掌の上。なら、つい最近使えるようになった『未知の物質』を使えばいい。よおーく知ってるはずだよな？『スクール』に居たお前なら」

「ッ！！」

蝉脇の声を聞いて、ゴールドブラウンの髪を持つ少年の姿が、脳裏に浮かび上がった。

かつて『スクール』のリーダーとして行動し、学園都市に反旗を翻した学園都市第二位の超能力者<sup>レベル5</sup>。

インターフェイス<sup>インターフェイス</sup>接続回路を初めて打ちのめし、そしてわずかな間共闘した、『未<sup>ダ</sup>元物質』を冠する反逆者<sup>イクマター</sup>。

垣根 帝督。

「そんな……ならまさか、この現象は……!!」

目を剥いて、周囲の空間を見回す。

一見何の変哲もない地下室だが、ここには数え切れないほどの素粒子が存在する。

『結局テメエは知ってることにしか対応できない。先代の偉人が見

つけてきた法則に縛られちまってんだ。……そして、俺の「未元物質」にそれは該当しねえ。そういうことだ」

垣根の言葉を、思い出す。

「まー、色々あってアイツは生きてるよ。『超能力を吐き出す塊』になってな。この室内には、アイツに作らせた色々な種類の未元物質がばら撒かれてる。風を操れないのは空気中の物質に本来存在するはずのない物質が含まれてるからだな。『窒素装甲』にしても、窒素そのものに未元物質が混在しているから操れないってわけだ。弾丸も垣根工場の特注品だからお前は分解できないし、物理的な痛みを与えてお前の動きを封じることまでできるってわけよ。ははっ、簡単な話だろお」

蝉脇の嘲笑が目に映る。

だが、自分を嘲るそれよりも、垣根の状態の方に怒りを覚える。

あのまま死なせれば良かったものを、その高い能力から無理矢理『命』だけを助けたというその事実。

特力研で、高い能力があったがためにその限界を追求され、殺された挙句に『能力』だけを残した事実と、全く同じだ。

虫唾が走り腸が煮えくり返り、蝉脇への怒りが蓄積されていく。

「……クソつたれが。結局は垣根の能力に頼らなくちゃどうにもで

きねえってわけじゃねえか。ハツ、クズだな。テメエは。本気で俺を潰そうってんなら、そのイカれた頭で懸命に考えて同じ土俵で戦いやがれ」

嘲笑を刻んで、インターフェイス接続回路が言い放つ。

蝉脇の肩が、ぴくりと動いた。

「機械が無けりや何にも出来ない小僧がほざくなよ。そいつがなけりや、テメエなんざ人間未満の下等生物だろうが。まあ、いいか。どうせまともに動けねえんだ、メインディッシュのお時間だな」

そう言つて、蝉脇が後ろ手に合図を送ると同時に、傍観していた装甲服が動く。

メインディッシュ。

その比喻表現の示すものが何なのか、予想がついてしまう。

装甲服が部屋を中心にぼつりと立っている端末に手を伸ばし、何らかの命令を打ち込むと、モーターが動く音が辺りに響いた。

「……………!?!」

倒れ伏した状態で、耳の感じ取る音の正体を解析する。

(これは…まさかッ……………!!)

粒子という情報でその形を知ると同時に、部屋の中央から何かかせり上がってきた。

2 mほどの筒型の水槽。

培養液のようなものに満たされた槽内に浮かぶ、人型の物体。

知覚こそしていたものの、実際に視認した瞬間に、時間が止まったような感覚に囚われる。

「オ…マエ……」

一糸纏わぬその姿。痛々しい傷跡が、彼女の全身に刻まれている。彼女を、彼女たちから見分けることなんて不可能に近いが、それが誰なのかは、一目瞭然。

呆然と、インターフェイス接続回路の口が開かれる。

「エクスプローラ多重…観測……」

水槽の少女は答えない。

ただ槽内に浮いて呼吸しているだけだ。

頭の中が、真っ白になる。





ただでさえ鞭で打たれたようなミミズ腫れと、ナイフで切りつけられたような切り傷で弱っているように見えたのに。追い討ちをかけるかのごとく、彼女の体を青白い電流が這い回る。

「いやあ、苦しそうだなあ、オイ。まあ、ある程度電気には耐性があるようだから、こんなんじゃないと思うけど」

そんな姿を見ても、蝉脇は嘲笑を崩さない。目に映るさらに電流の数が増え、長さが、太さが大きくなる。接続回路インターフェイスが拳を握り締め

た。  
「……何なんだよ」

「ん？」

少女の絶叫を耳にしながら、血が滲むほど拳を握りしめる。

「何でコイツが巻き込まれなきゃならねえんだよ！！何でコイツがこんなに傷つかなきゃならねえんだよ！！テメエらの狙いはこの俺だろうが！！対策も練ってきたろうが！！垣根に作らせた弾がありやあ、俺を殺すことなんざわけもねえはずだろうが！！なのに何で…何でコイツを巻き込んだよ！！」

接続回路インターフェイスの叫びが、室内にこだまする。蝉脇ははっ、と笑って。

「何でつて……これはお前の精神をブツ潰すための戦いだぜ？そりやあお前なんてブツ殺したくて仕方ないけど、殺したんじゃ折角の『接続回路インターフェイス』を不意にしちまうからなあ。上に怒られて収入減んのもごめんだし？つかさ、『コレ』を病院から掻っ攫うときとか、情

報を見たときも思ったけど、何でお前はそんなに『コレ』が大事なわけ？」

電流が停止し静かになった室内で蝉脇は両手を広げ、さもどこかの宗教の教祖のように尊大な調子で続けた。

「あんなのただの『モノ』じゃないかよ。お前が守りたがってた実験台より価値のない、ただの出来損ないの乱造品だぞ？まあ、『コレ』は強化改良型らしいけどな。自然に生まれたわけでもないただの人形のために、どうしてもそんなにバカになれる？こんなの、スイッチひとつでいくらでも増やせんだよ。尊い命なんて偽善者の言葉とは程遠い、ただの人形さ。これがお前をブツ壊す材料になる理由がさっぱり分からねえよ」

何なんだ、コイツは。

接続回路は蝉脇の姿を見て、ぼんやりと思った。

自分もかつては、そう、非公式の超能力者として多重能力進化実験に参加したあの時点では、同じことを思っていた。

人工的に作られた人形。

心があるといっても、それは何者かによってプログラムされたものであって、人間と同じ生物ではないと、その存在を否定していた。わずかにその境遇を憐れむことはあっても、決して同一に扱おうという気はなかった。

自分に潰されるために。

自分が強くなるために。

ただ、ただそのためだけに、彼女の仲間を199人殺した。

それ以前にも、一万をも越える人間を殺してきた。

そんな人間が今更『誰かを守りたい』と思うことなど、ただの綺麗ごとでしかない。

でも。

だからと言って、目の前にある壊れかけの命を、みすみす散らせていいはずがない。

「……出来損ないだと」

震える声が喉から這い出る。

「……ただの人形だと」

自分の一部なのかすらわからなくなってきた足で、無理矢理に動かす。

「……スイッチ一つで……いくらでも増やせるだと……?」

ふざけんじゃねえよ。

「……確かに出来損ないかもしれないねえよ。いつの間にか人の部屋でガキと騒いでるようなワケ分かんねえやつだったよ。…けどな。そいつは俺達なんかよりもずっと人間らしい奴なんだよ。どこまでも甘ったれで、苛つくことだってあった。でもそれでも、俺にとってそいつは守らなきゃならねえ奴なんだよ」

不意に、蝉脇が目を見開いた。

確かに両足に弾丸が突き刺さっているはずなのに、その両足で立ち上がったのである。

「理由が分からねえとか言ってたなあ……なら教えてやる」

よろよろとおぼつかない、素人の操り人形のような足取りで、インターフェイス接続回路が歩を進める。

「人間が人間を守りてえと思う感情に、理由なんか存在しねえ。三下のテメエにや理解できねえかも知れねえが、理由なんか無くたって、ただ思うだけでも俺は前に進めてんだよ」

一歩一歩向かってくるインターフェイス接続回路に、蝉脇はわずかに後ずさった。距離さえ離れていけば、インターフェイス接続回路は何も出来ない。そう思っているのだが、謎の危機感が蝉脇の脳の中まで蠢いていた。

「……理由を伴わなくちゃ納得できなかった俺に、それを理解させ

たのはそこにいる多重観測だ。エクスプローラだから俺はテメエをブツ潰す……ハッ、テメエがそいつにウイルスとか薬品を投与してねえと分かれれば、テメエなんかにはねえ」

ポケットから引き抜いた、黒光りする拳銃。蝉脇の表情が青ざめた。

知覚能力から座標を算出し、蝉脇零掛の脳天を狙う。

「お、おいつ！何してんだ早く撃てっ！」

インターフェイス動きさせ封じられればいい。あの手に輝く拳銃さえ使えなければ、インターフェイス接続回路に勝機は無くなる。

慌てたように、蝉脇が部下に命じたその刹那。

「  
がっ」

不自然な声を上げて、インターフェイス接続回路が倒れこんだ。

6 - 13 停止

乱レル思考

(後書き)

どうも、櫻井です。

いつまでも引っ張って申し訳ない(汗)

本当は13話で終わらせるつもりでしたが、もう一話使います。

色々な意味で驚かれるかと思いますが、どうかお付き合い頂ければと思います。

提出期限も遵守したいですね(汗)

それでは次回、本章最終話です。

楽しみに

6 - 1 4 覚 醒

鮮血ノ双翼

(前書き)

「このテの人間はみんな似たような末路を辿るのね」

常盤台の保険医にして曖の姉

夕凧 志乃

「どっちのと言ってるの?」

常盤台中学の生徒にして志乃の妹

夕凧 曖



6 - 14 覚醒 鮮血ノ双翼

「……………あ……………!……………」

突然倒れた接続回路インターフェイスの口から、言葉とは言い難い『音』が漏れた。

殺される寸前だった蝉脇は、しばらくその姿を呆然と見て、徐々に笑みを作っていく。

「あ…ははははははつ。アハハハハハハハッ!!んだよそりゃあ!!なんだよそりゃあ!!ギヤハハハハハハッ!!」

ひきつった顔が完全に嘲笑へと変わったとき、口から飛び出したのは高笑い。

「なんだよオイ…ふひつ。やべ、ツボ入ったわ」

ダークマター 未元物質を両足に食らい、立てはしないと高をくくっていて立ち上がった時は驚いたが。

「ギヤグだなギヤグ!下手な漫才よりずっと面白えわ!!なにお前。こっぱずかしいあの子を守ります宣言の後に正義に目覚めました宣言したかと思えば電池切れかよ!?!ぶはっ、いやあ面白えわ!!」

微動だにせず、目を見開いたままの接続回路インターフェイスの顔面に、渾身の蹴りをぶち込んで、その頭を何度も踏みつける。

「なーんも成長しちやいねえなお前!口先だけで何にもできてねえじゃんなあ!!痛いったらねえよカツコつつけのクソガキが!!アハハハハハハッ!!」

罵声とともに、ただ呼吸するだけの人型の物体を痛めつけ、もう一度高笑いを上げて。そんな行為を数分続けて、蝉脇は疲れた息をもらしながら、傍観していた装甲服たちを振り向いた。

「ハア…ハア…んぐっ…回収だ。どうせ動かねえから適当に袋に詰めて持って帰るぞ」

「妹達シスターズ10412号はどうしますか？」

「ん……」

その質問に対し、蝉脇は少し考えた。

多重観測は多重能力進化実験の完成個体。9770体の妹達の中で唯一の多重能力者。エクスポローラ デュアルスキルソフト  
デュアルスキル

非常に希少な個体ではあるものの、データは研究所にあるし、バックアップは上層部が管理している。それに、確か今は別な計画が始動したばかりと聞く。

「いいや。処分するよ」

決断は早かった。

「処分してもよろしいのですか？確かこの個体は……」

ある程度事情に詳しい装甲服が言った。

いつもなら硫酸なり何なりをぶっかけてやるところだが、今は気分がいい。

「いいのいいの。だってコレ、ボコボコにした時言ってたっしょ？  
『あの人をこれ以上傷つけないでください』ってさ」

「はあ…」

「そんな失敗作は要らないって。どっち道今進んでる計画が最終段階に入りやみーんなお払い箱だ。今殺そうが後で殺そうが同じだろ？」

あたかも食事中に品物を食べる順番を気にしないことを語るように、軽い口調で蝉脇が言った。

「…了解」

一瞬逡巡した装甲服だが、口答えした後の地獄を想像して頷いた。

\*

そこは漆黒の世界だった。

手足の感覚はおろか、自分が生きているのか死んでいるのかすらわからない、思考するぼんやりとした声が聞こえている、そんな状態だ。

(……バッテリー…切れか……?)

感じたことのない奇妙な感覚に、インターフェイス接続回路の思考はそんな答えを導き出した。

重力すら感じず、かと言って浮いているような感覚でもない。

(……蝉、脇は……)

自分は引き金を引けたのだろうか。引けていれば、かろうじて相討ちにはなるのだが。

だが、すべての感覚が失せたのは、『引き金を引く』と思った瞬間。

つまり……。

(ちくしょう……)

何も見えない、何も聞こえない。何も感じず何もわからない。

ただ、自分の思考する声が巡るだけ。

聞こえていると言うよりは、意識のある中で考え事をしたような、直接脳内に入ってくるような、そんな不思議な感じだ。

(……やっぱ、ただの自己満足だったのか?)

誰かを守る事で、過去を断ち切ろうとした。

悪党という言い訳を用意して、その道で善人を救う決意をした。  
だが、結果はこのザマだ。

やはり、罪を犯して生まれてきた自分には、誰かを助けることも、  
幸福を与えることもできはしないのか。

(……無駄だな)

ここでどんなに願って求めても、体が動かなければ何もできない。

接続回路インターフェイスという人間の魂だけが、存在しているだけのここでは。

おそらく、次に目覚めることはない。

『彼ら』と同じように、脳と心臓だけの『材料』か、垣根のよう  
な『道具』にされてしまうのだろう。

(……もう、駄目だ……)

『いいや。処分するよ』

!?

…聞こえた。

何も聞こえなかったはずなのに、確かに『聞こえた』。

(処分……?)

意識を拡大する。

一瞬間聞こえた、その感覚を反芻して。

続きを聞こうと意識する。

『ボコボコにした時間いたろ?』あの人をこれ以上傷つけないでください『って』

それが蝉脇の声だと、気付く。

そして、その言葉の意味も。

(そうか……)

確信して、インターフェイス接続回路は頭の中でふっと笑う。

(エクストラローラ多重観測は……まだ俺を必要としてんのか)

彼女を守ると誓った。

彼女が幸せになれる世界をと求めた。

彼女だけではない、夕凧姉妹を始めとする、自分とは違う道を行く者達にも。

そうだ。

誓いは守らなくてはならない。

生きている以上、可能性がある以上。

まずは蝉脇から、多重観測を救い出す。

エクスプローラ

今なら分かる。

あの少年の言っていた、言葉の意味が。

強くなるための、本当の鍵が。

既存のルールを白紙に戻せ。

可能と不可能を組み直し、新たな可能性を導き出せ。

全ての条件をリスト化し、その境界を取り払え。

『作業』を終えたその瞬間。

魂が揺らぎ、膨張して内側から何かが這い出たような感覚と共に、  
それに塗りつぶされていく。



刹那、再び世界が拓いた。

\*

「……………ん？」

装甲服が頷き、出口へ駆けていった時、視界の隅で何かが動いた。怪訝に思いそちらを向けば、そこには倒れ伏した接続回路インターフェイス。

電池切れを起こした、馬鹿な超能力者レベル5の姿があった。

その指がびくりと動いたように見えたのだが、あれから5分ほど経っているし、絞りカスのバッテリーすら残っていないはずだ。

それが動くはずがない。

(……………気のせいかな？)

そう思い、蝉脇はかつかつと多重観測エクストラローラの水槽へと近付いていく。その傍に立つ端末に指を走らせ、設定を変更する。

この水槽は元々、特力研にあったものを改良した　少なくとも蝉脇はそう思う　ものだった。

10月4日に接続回路インターフェイスと再会した時、研究室に設置していた悪魔

のゆりかご」。

アポトーシスという細胞の機能を異常に促進させる培養液が入った装置だ。

これは水に溶かした薬品によって効果を得られるもので、<sup>インターフェ</sup>接続回路次第では目の前で<sup>エキスポローラ</sup>多重観測をバラバラにすることも視野に入っていた。

まあそうする前に無力化できたのだが。

端末のモニターに表示される水槽内にもたらす効果を、『高圧電流』から『Texamin』に変更する。

この『Texamin』が、例の薬品だ。

「ま、悪く思うなよー、お嬢ちゃん」

そう言って、蝉脇がかって多くの子供達にしてきたように、躊躇なくEnterキーを押そうとしたその瞬間。

ゴオオッ！！という轟音が、蝉脇の背後から響いてきた。

「っ！？」

思わず、蝉脇が振り向くと。

倒れ伏す少年の背中から、何かが飛び出していた。



のあるモノだが。

その背で暴れる血のような翼は、見たことも聞いたこともないモノで。

小馬鹿にしていた憎悪の瞳に、かつてない恐怖を覚える。

「な…な、な…」

震える口から零れる言葉は形を作らず、虚しく恐怖にかき消される。

「うわああああああっ！！」

動けずにいると、待機していた装甲服が、手にしたライフルを斉射した。

ダークマター  
未元物質の弾丸が、少年を目掛けて空を切る。

よくやったと、蝉脇が思ったその瞬間。弾丸は少年の2m手前で碎け散り、血色の火花が空気に溶けた。

(えっ………?)

どうあがいても『インターフェイス接続回路』が超えられない能力、『ダークマター未元物質』。

その弾丸が、火花を散らして空気に溶けた。

理解、できない。

最後の希望を失い、装甲服が立ち尽くす。蝉脇同様、目の前の恐怖に動けない。

少年の腕が、装甲服たちに向けられる。照準を合わせるように指先を向け、掌を返して拳を握りしめた瞬間。

装甲服たちの体が、多方向から圧力をかけられたようにひしゃげ、ブチブチと千切れる音を上げながら、ただの肉塊へと姿を変えた。

残るは、蝉脇一人。

「あ…あははははっ」

力無く笑いながら、蝉脇が後ずさる。

たった今日にした、目にしている光景に、頭がおかしくなる。

「あははははっ、ははっ……」

少し下がったところで、ぺたりと蝉脇は尻餅をついた。

翼を生やした化け物が、ゆらりゆらりと近付いてくる。

「ひゃ…100点だ。100点満点だよー、インターフェイス接続回路。あははっ、昔あそこで、こうして、話したよな」

あと、8歩。

「怪物と自分との距離はたったそれだけ。」

「使えないガキ、使ってさ。お前の、能力、色々、試したよな」

恐怖に心臓が暴れ、しゃくり上げながら言葉を紡ぐ。

「90点とか言ったら、お前、嬉そーな顔、してよ。あの時は、そう、思ったんだ、けど、よ」

あと、4歩。

「あれ、嫌がつて、た、んだな。俺が、嫌い、な、笑顔つて奴、を見せて、俺、に、反発、してた、んだな。だ、から、よ」

悪魔のような笑みを刻む接続回路インターフェイスを見上げて、蝉脇は続ける。

「100点、だよ。あの時の、お返しだ」

「…q b d m 親 j x o」

ノイズの混じった言葉と共に、首を掴み上げられ謎の圧力と共に首が干切られる。

(……ああ)

干切れたという感覚から、落下する感覚に陥った瞬間、彼は『それ』を目にした。

(あの話、本当だったんだな……)

ぼんやりとそう思ったと同時に、視界が黒く染まっていった。

\*

(……………う)

全身を包む痛みと痺れに顔を歪め、エクスタローラ多重観測は目を開けた。

筒型の水槽に、浸されている。

優しく体を包む培養液の感覚に身を委ねて、辺りを見回した。

見覚えのない広い空間。

そこに転がる、惨たらしい肉塊。

思わず目を逸らして、水中で振り向いた時、エクスタローラ多重観測はハツと目を見開いた。

(…この人は)

水槽の表面に手を当てて、俯いている少年。その背中からは、翼のようなものが伸びている。

外の音はこちらには聞こえないが、俯いた唇が動いていた。

(インターフェイス接続…回路……………)

多重観測エクスプローラが思わず、接続回路インターフェイスの触れている水槽のガラス壁に、内側から触れた。

端から見れば二人が手を合わせているような状態で、俯く少年を見つめる。

『今助けてやる』

そんな言葉が聞こえた気がして、多重観測エクスプローラは再び目を閉じた。

優しく体を包まれるような感覚と共に、じわじわと蝕む痛みが消えていく。

彼が直してくれたのかもしれない。

そんな想いが、胸を過ぎった。

\*

作業を終えると同時に、接続回路インターフェイスの翼が根本から先端にかけて、溶けるように消えていった。

水槽を背にして、擦り落ちながら座り込む。



もう体は動かない。

自分でもよく分からないが、至った作業を行った途端、意識が覚醒したのを覚えている。

後は本能のままというのか、浮かぶビジョン通りに動いたら事が成せた。多重観測エクストラローラの応急処置も済ませた。後はあの医者任せれば何とかしてくれる。

(……チツ。体だけじゃなくてコツチまで停止しそうだな)

こんな状態で意識が朦朧とする、というのも変な話だが、確かに意識が消えかかっているのがわかる。

(……まあ、『ユニオン』かどっかが回収すんだろ。多重観測エクストラローラのネットワーク接続も修復しといたし、後は……)

そこまで考えたところで、フツと意識が途絶えた。

\*

「……やれやれ、蝉脇までやられたか」

窓のないビルの屋上で、栗色の髪が風になびく。

瀬良は徐に立ち上がり、眼下に広がる学園都市を見下ろした。

「まあ、予想はしてたけどな。どんなに相手の事を知っていても、無能力者なんてその程度だし」

その端正な顔に柔和な笑みを浮かべて、今度は空に散らばる星々を見上げる。

「やはり僕でなくては駄目だな……同じ超能力者レベル5の、僕でなければ」

まだ始まったばかりだ。

闇夜に浮かぶ星空の下で、少年は静かに笑みを消した。

6 - 1 4 覚 醒 鮮 血 ノ 双 翼 ( 後 書 き )

どうも、櫻井です。

ややイメージの伝わりにくい文章だったかと想います。

学園都市の上二人が翼持ちなので、是非我が主人公にもと考えて覚醒させました。実は本作構想段階の時点で予定していた展開ではありません。当時は漠然とした設定だったので詳細に辻褃を合わせるのは大変でしたが、なんとかここで持つてくることができました。

蝉脇の最後の言葉は、二つの解釈ができるつもりです。片方は劇中で垣根が言っていて、もう一つは覚醒回路の台詞から想像できるかと思っています。そこは明確には書きませんので独自の解釈でOKです。

多重観測とガラス越しに手が合わさる演出は、思いつきですがいい絵になるかと思って盛り込みました。ヒロインらしいところも見せなくては(笑)

さて、次回から新章に入ります。1 - 7から引つ張ってきた代わりの非公式の超能力者との戦いになりますが、その前に一服というかややコメディを混ぜていこうかと。シリアス続きでは肩が凝ってしまいますしね(汗)

それでは次回からの新章、どうぞお楽しみに！

## 章末特典 キャラクター紹介？ 夕凧 暖

年齢：15歳

身長：160cm

体重：44kg

血液型：AB型

来歴：

常盤台中学の三年生。夕凧志乃の妹である。

常盤台最大派閥の頂点に君臨する女王様として知られており、その能力からも高いカリスマ性を誇る。

人材補強のために『ユニオン』に招待された。

容姿関連：

姉と同じく癖のある深い茶髪で、髪型はショートボブ。姉をそのまま幼くしたような外見で、年齢の割には美人型の顔つきをしている。

性格関連：

普段は冷めた態度で素っ気無く、少々毒舌。しかし、姉が絡むとやや感情的になり、普段は余り使いたがらない洗脳のような事すらやってのける。

レベル5ということもあり優秀な頭脳を持っていて、研究職につき志乃の専門用語からなる説明も理解でき、中学生らしからぬ大人

の風格を漂わせ、美琴からは『歳誤魔化してる』と評価されるほどの成熟ぶりである。

姉と違い幽霊は平気だが……。

能力：

レベル5の『メンタルアウト心理掌握』。

記憶の読心・人格の洗脳・念話・想いの消去・意志の増幅・思考の再現・感情の移植など、精神に関係する事柄なら何でも出来る精神系能力の最上級。

能力の行使は、相手との接触レベルによって効果や操作範囲、行使できる種類が変化する。

一方的に相手を視認すると、表層心理の解読程度しか出来ない。

こちらが相手を認識し、相手もこちらを認識すると、深層心理の読心、念話が出来るようになる。

握手などの物理的接触を行なうと、全ての操作が可能になる。

尚、肉親や親友など、相手を良く知っていればより高い効果を得ることが出来る。

章末特典 キャラクター紹介？ 夕凧 暖（後書き）

CVイメージ：早見沙織

7 - 1

読心

見透カス少女

(前書き)

「 ..... ! ..... ! ? ..... (怒) ..... ! ! ! ..... 」  
シスターズリアルナンバー  
 妹達認識番号 10412号  
エクスプローラ  
 多重観測

7 - 1 読心 見透カス少女

(何で私がこんなことを……)

インターフェイス  
接続回路の病室の前で、曖は腕を組んでため息をついた。

昨晚、蝉脇雫掛という男の起こした事件に巻き込まれ、彼女の姉である夕凧志乃が二カ所被弾する怪我を負い、手術後入院生活を余儀なくされたため、曖はその見舞いにやって来たのだが。

『あの子の部屋、片付けてあげてくれる？自分じゃ全然やらないか』

などと言われて、今に至る。

改めて、自分は姉に弱いと思うが、どこかの口の悪い少年の言うシスコンなどでは……ない。

(でもまあ…恩人は恩人だし)

姉を救い出してくれたという意味では、少なからずあの少年に感謝している。こんな事で借りが返せるなら、安く済んでいると見ていいのだろうか。

もやもやと考えながら、彼女は一応ノックしてから中に入った。

そして目を見開く。



ベッドの上に、たった今頭の中に居た少年が寝そべっていたのだ。

なんだか呆けたような顔をして、ぼーっと虚空を見つめている。

「……何してるの？」

話しかけずには居られなかった。

彼はちらとこちらを向いて、

「…妹の方が。姉の方は問題ねえか？」

質問には答えず、少年が尋ねてくる。まあ、あれが意味のある行為には見えなかったけど。

「おかげさまでね。しばらく安静にしてないと駄目みたいだけど。あなたこそ、いつの間に戻ってきてたの？」

「さあな。蝉脇ブツ潰して、エクストローラ多重観測のネットワークの復旧と簡単な治療やった辺りから覚えてねえ」

ふうん、と曖は感心したように相槌を打ち、部屋を見回した。

片付ける、とは言われたものの、この部屋にはほとんど物が無い。趣味がありそうには見えないが、もう少し何かあってもいいんじゃないかと言うくらいの白紙の空間だ。

となると、あの姉は何を思ってあんなことを言ったのだろう。この少年の病室がこれほど殺風景なことは知っているはずなのに。

「んで？オマエは何だっってここへ来たんだ」

「……え」

呼びかけられ、曖は思わずそちらを見た。気怠そうな緋色の瞳が、曖の茶色い瞳に映る。

……何と言えはいいのだろう。

この片付けられた空間を前に、『片付けると言われて来ました』  
というのか？嘘ではないが、嘘に聞こえるのではないだろうか。

(……って、何でもうでもいいことを本気で考えてるのよ)

自分に対して、呆れたように笑う。

「姉さんに代わりにココを片付けるように言われてね。取り越し苦  
労だったみたいだけど」

「…ハナっから片付けるモノなんざねえんだが。あいつ、とうとう  
勝手な妄想で世話焼こうって段階まで来やがったか」

口ではそう言うものの。

『まあ、悪イ気はしねえがな……』

『メンタルアウト心理掌握』を有する曖の頭の中には、そんな声が届いていた。  
その顔に、悪戯っぽい笑みが浮かぶ。

「ふうーん……」

「……勝手に人の頭ん中覗いてんじゃねえぞコラ」

「私から隠すつもりならもっと深い所で考えるのね。表層意識に出してたらうつかり見ちゃうこともあるんだから」

姉譲りの余裕の笑み。不快そうな顔で、インターフェイス接続回路が舌打ちする。

「イチイチ付き合ってらんねえ……」

そうぼやくと、傍らの杖を掴んで立ち上がった。

曖が再び目を見開く。

てっきりどこかに怪我をしたものと思っていたのだが、どこにも包帯を巻かれていないし動きにも全く異常がない。

「……よく、無傷で帰ってきたわね。それとも能力使って治したの？」

彼の能力を応用すれば、そんな夢のような事もできるはずだ。驚きながら尋ねてみると、彼はすいと目を細くする。

「……まあ、そんなトコだ」

と言ってカチャカチャと杖をつき始めた。

「どこ行くの？」

無傷とはいえ昨日の今日、ほんの、ほんの少し心配になっていたりする。

「どこへ行くところが俺の勝手だろ。オマエも、姉から言われたような

理由しかねえならもう戻れ」

うざったそうに言う接続回路<sup>インターフェイス</sup>。その態度に、少し腹が立った。

「……姉さんを助けてもらったから、少しは恩も感じてはいたけど。もう少し言い方とか考えつかないわけ？」

部屋を出て行く接続回路<sup>インターフェイス</sup>を慌てて追いながら、曖が言う。ジトリと半目にした目を相手に向けて。

「オマエの周りには優男しか居ねえのかよ。生憎オマエが期待してよような解答ができるほどマトモな人生送ってねえんだよ」

「あなたが苦労して生きてきているのは知ってるわ。でも少しはこっちの気持ちも考えてみなさいよ」

「ならオマエも俺の気持ちってヤツに配慮しておとなしく戻りやがれ」

「あのねえ……心配してあげてるのがわからないの？……あ。……ね、姉さんが！」

あまりに鈍いのでつい本音が出てしまった。慌てて言い直す曖。  
そんな姿を見てか、接続回路<sup>インターフェイス</sup>は立ち止まり、面倒臭そうに頭を掻く。

「……姉妹揃って世話焼きの血イ引きやがって」

バレたことは覚悟していたが、性格柄認めたくなくて目を逸らす。

どうしようもなく、居心地が悪い。

「……悪かったわね」

目を逸らしたまま言い返す。 インターフェイス 接続回路は嘆息して、

「調べモンに行くだけだ。オマエの姉からも聞いてんだろ？」

ようやく返ってきた答えに、ようやく目を相手に向ける。顔つき  
変わらず無愛想だが、ほんの少し目の感じが柔らかい。

だからどうという事もないが、まあ、悪い気はしない。

「あなたを襲撃して来た能力者をけしかけた人ね。瀬良って言った  
かしら。…姉さんが調べてみたらしいけど」

「ああ。オマエの姉はもう巻き込めねえからな。蝉脇だけじゃなく  
瀬良にまで目エ付けられたら、今度こそ殺されかねねえ。だからま  
あ、野郎にたどり着くにや自分で動くしかねえんだよ」『あいつが  
ああなつたのは俺が原因だ』『これ以上あいつを巻き込むわけには  
いかない』『あいつを失ってたまるか』

互いに目を合わせているからだろうか。

覗くつもりはなかったが、聞こえてしまつ。

(姉さんも姉さんで入れ込み過ぎだと思っただけど……)

後から後から聞こえてくる心の声が、まるで自分みたいで。

(こつちもこつちで結構なものね)

お互い、夕凧志乃という人物に対して抱く想いが似ていることに気付くと、曖はフツと笑みを零した。なんとなく、親近感というか同族意識が湧いてくる。

「フーわけだ。分かったらさっさと戻れ」

再び声音を戻して、インターフェイス接続回路が促してくる。曖は小さく笑って、

「いいえ。私も行くわ」

「あ?」

意味が分からん、とでも言いたげな視線がこちらに注がれる。曖はかつかつと歩み寄り、

「姉さんから頼まれてるのよ。』自分の代わりにあなたを手伝ってやってくれ』って」

決して嘘は言っていない。しばらく役に立ってやれないことを情けなく思うような、そんな発言をしていたのだ。

「お断りだ。オマエ分かってんのか?俺と一緒に居るところを見られりゃ、オマエまでクソ暗部に狙われるかもしれないぞ」

インターフェイス接続回路は低い声で、脅すように言った。曖はひるまない。

「これから『ユニオン』で動こうって女に関係ないと思うけど。どの道、そこでの任務であなと一緒にいることぐらい幾らでもある

でしょうし」

「……………本気か」

「ええ」

確認されたことに、曖は躊躇なく頷いた。接続回路インターフェイスはハアと嘆息した後、踵を返して背中を向ける。

「……………好きにしる。ただし、ちつとでも邪魔アしたり足手まといになると思ったら、無理矢理突っ返すからな」『まあた厄介なやつが増えやがった』『ガキのお守りばっかだな』『守る側の事考えてんのかねえ』『しかしまあ、「心理掌握メンタルアウツ」はそれなりに使えるからメリットがないわけじゃねえな』

ただ漏れ。曖の頭の中にそんな単語が浮かんできた。彼女は接続回路インターフェイスに続きながら、意味深に笑ってみせる。

「言つとくけど、守られるばっかじゃないわよ？私」

「まずはその悪い手癖から修正した方がいいみてえだな……………」

少年の気苦労の絶えない一日が、始まった。





どうも、櫻井です。

今回は曖視点の話でした。

基本的に多重観測がモヤモヤくる話が続きます(笑)

この二人は恋仲というよりは同族意識というか仲間、方面に発展していきます。かつては多重観測もこの枠に入るところでしたが、思いのほか「か弱いヒロイン」になってしまつて(笑)

曖は対照的に「強いヒロイン」です。接続回路と互角に言い合う展開が多くなります。瀬良編、19巻編に至つては一時的に曖がヒロイン的な位置に向かうかもしれません(笑)

接続観測派の方々申し訳ありません(汗)

接続掌握も楽しんでいただければと思います。

次回は出てくる人たちのこともあり、やや賑やか(?)な内容になります。ヒントは「超電磁砲」です。

お楽しみに

7-2 当惑 ニツノ顔 (前書き)

「心理グラフに異常が出ているようなんだが、心当たりはあるかい？」

第七学区に病院を構えるカエル顔の名医 冥土帰し)  
へヴンキャンセラー》

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号  
エクストラローラ  
多重観測

目覚めて真つ先に医者を訪ねた。

聞くところによれば、回復したネットワークから逆探知し、『ユニオン』が自分と多重観測<sup>エクストローラ</sup>を運び出したのだと言う。

多重観測<sup>エクストローラ</sup>に外傷はほとんどなかったが、脳波を乱されたり培養液の成分の関係もあり療養の必要があるのだとか。

部屋に戻って久しぶりにのんびりしていたら、今度はお節介女の妹が訪ねてきて。

今はそのお節介女（小）と街を歩いている。

（なんつーか…ツイてねえな）

慣れた手付きで杖をつき、<sup>インターフェイス</sup>接続回路は嘆息した。

姉の方はまだ面識があるというか付き合いも長いからまだいいものの、妹の方は会って24時間経っていない。単純に会話した時間なら1時間にも満たないのに、どうしてそれと二人で調査しなくてはならないのか。

かと言って、ここから別々に行動して志乃の二の舞になるのもいだけない。

「それで？調査とは言っけど、どういう経由で調べるつもり？」

呼びかけられ、インターフェイス接続回路は「ん」と目だけを向ける。

「『ユニオン』のデータベースにハッキングをかけて情報を集める」  
きっぱりと告げて、赤信号を前に立ち止まった。曖も隣で車が通  
るのを見ながら口を開く。

「そんな簡単に見つかるなら、とっくに姉さんが見つけてそうだけ  
ど」

「調べるルートが違えんだよ。信号機のサインを色から感じ取る生  
物的な本能で直感するか、確かな知識を持って理解するかの違いと  
同じだな」

名前と能力名。たった二つしか情報の出ない人物。そんな人間の  
存在を、彼自身がよく知っている。

だが、この分かりやすい『記号』は、知る者を危険に晒す凶器。  
極力心の奥底で考えるよう意識する。

「そう？目処が立ってるならいいんだけど」

覗かれていないかなどいちいち気にして居られないが、やはり気  
が休まらない。なかなか厄介な手合いだ。

しばらく歩いて、不意にインターフェイス接続回路が足を止めた。「どうかした？」  
と聞いてくる曖も無視して、目の前に広がる公園を見渡す。

エクスポローラ  
多重観測と出逢った公園とは違うものの、その雰囲気はそっくり  
で思わず見てしまう。

公園という空間は、インターフェイス接続回路にとって特別な意味を持っているの

だ。

物思いに耽っていると、少し顔を強ばらせた曖がずいと顔を近づけてくる。

「ねえってば」

「……………」

「ひょっとしてあなた、ロリコン？」

「……………なんでこんな時は頭ん中覗かねえんだよ」

気にはしないものの、確かな破壊力を持った質問に、さすがに意識が曖に向く。大体、「はいロリコンです」なんて答えはまずないのではないだろうか。まあ、偶然ここから真つ直ぐ先にあるのが幼い子供の遊ぶ砂場だったのは認めるが。

と、その時。

「あ……………一方通行!？」  
アクセラレータ

「あん？」

聞き覚えのある名前に、インターフェイス接続回路が振り向いた。そこには四人の少女の姿。振り返った曖が、わずかに表情を曇らせる。

「……………と、『メンタルアウト心理掌握』……………え?なんで、あんたらが一緒に居るの?」

スキルそう言う少女の顔は、とても見覚えのある顔で。どこかの多重能デュアル

力者にそっくりだ。その後ろには同じく常盤台の制服を着たツインテールの少女と、学校名はわからないがセーラー服の少女が二人。内一人が、インターフェイス接続回路を見てパツと顔を輝かせる。

「あつ！えと、その節は助けをいただいて、ありがとうございます。ありがとうございましたっ！」

飴玉を転がしたような声。頭に咲き誇る（？）花飾り。見覚えがまるでない。

最初に大声を上げてきた御坂美琴は間違はなく勘違いしていると、こちらの少女も一方通行アクセラレータの絡みだろうか。

反応に困っていると、隣の曖が念話で話しかけてくる。：便利な能力だな。

『10月9日に第二位にやられてたところを第一位に助けられたみたいよ』

『なるほど。だが調べられても困る。正直には名乗れねえぞ』

『それじゃ、第一位のフリして、たっぷりお礼でもしてもらおう？』

『……そいつもいい気分じゃねえな』

『その辺律儀なのね。で、どうするの？』

『……無能力者レベル0を決め込む』

『はいはい』

一秒足らずで会話を終え、インターフェイス接続回路は嘆息してから口を開いた。

「人違いだ。10月9日は学区外に居たからな」

「ええっ！？そうなんですか？でもすごくそっくりなんですけど……」

「人違いは人違いだ。ついでに、俺はアクセラレータ一方通行ってヤツでもねえ」

花飾りの少女から美琴に視線を移し、きっぱりとそう言うと、美琴はむむ…とこちらを見定めるように凝視する。と、そこにツインテールの少女とロングヘアのセーラー少女が口を挟む。

「あの一、お姉さま？こちらの殿方と何かご面識が？」

「あたしはそれよりそっちの綺麗な人にキョーミあるなあ」

今度は曖に、少女たちの視線が集中する。思わず困ったように腕を組む曖。警戒しているのだろうか。

「今度はオマエの番みてえだな」

「あら、私のこと綺麗だなんて思ってるの？」

「その恐ろしいぐれえのポジティブさは見習いてえもんだな」

「ま、あなたに想われても困るけど。人に意識が回った途端に随分な態度ね。さっきまで困ってたくせに」

『別に困っちゃいねえ。どの道、ああ答える以外になかったんだからな』

『素直じゃないわねー。ま、私の方は顔も名前も知られちゃってるから、隠し様も無いんだけど』

「あー、えっと。この人は『心理掌握』メンタルアウトっていうレベル5で……」

「れっ、レベル5っ!?!?」

「すごい！御坂さんと同じじゃないですかあ！」

「ういはるかぜり、と花飾りの少女初春飾利とさてんロングヘアの少女佐天涙子が曖に詰め寄る。面倒にならないうちにインターフェイス接続回路が横にズレ、曖は一步後ろに下がった。鼻息荒く興味深々なセーラー少女二人組に、さしもの曖もたじろいでいた。

「うっわー、近くで見たらホント美人！」

「すごいです！イメージ通りのお嬢様ですっ！」

「ちよっとー。ふたりともー」

「『心理掌握』メンタルアウトってどんな能力なんですか？」

「今からお茶しませんか!?!?」

「おーーっ！っ!?!?」

美琴の声に、ようやく初春と佐天が振り向いた。「いやあ、すい



ません興奮しちゃって」なんて声をぼんやりと聞いて、インターフェイス接続回路はとりあえず少女たちから距離を置く。また面倒な事になるのはゴメンだ。

(このままあいつ置いて、一人で行くか……)

この少女たち、特に『レールガン超電磁砲』の傍に居れば、最悪の事態は回避できるだろう。そう判断し歩き出したとき、インターフェイス接続回路の前にさっきのツインテール少女が現れた。

「初めまして。わたくし私お姉さまの露払いをしています白井黒子白井黒子と申しますの」

「……………」

言葉遣いこそ丁寧だが、どこか挑戦的というか、敵意を感じさせる口調だった。

「先ほどの会話を聞く限り、お姉さまとご面識があるようですが……」  
いや、ない。会話するのは今回が初めてだ。似たような顔のヤツなら何回も見ているけれども。

「見たところ、同年代でいらっしやるようですよ……一応、忠告だけはさせていただきますわ」

忠告？何を言っているのだろう。まるで分からない。  
ただその言葉の意味について考えていると、白井はずいっと顔を近づけ、

「金輪際、お姉さまにはお近付きにならないようお願いします。何か間違いでも起こして、お姉さまの貞操が汚されるようなことがあれば、あなたを串刺しにして差し上げることにも視野のうちですよ？」

にっこり笑顔から凄みのある顔をする白井。なんとなく悟って、  
インターフェイス接続回路は嘆息した。

「わざわざ忠告されるまでもなく、あんなガキに欲情なんざしねえつてんだよ」

そもそもそうだった事にまず興味が無い。というか、ついこの間まで一人孤独に生きてきた接続回路にはまだその感情が理解できない。

「それならば結構ですわ。まあ、あちらの女の方：夕凧さんとお德基になられているようですし、念を押す必要もないかもしれません」  
「やっぱり夕凧さんはあの男の人とそういう関係なんですか？」

二人の少女が、数m離れたところで同時に言葉を発した刹那。

「「いや（いいえ）、それはねえ（ないわ）」」

不愉快そうにした二人の男女が、寸分違わぬタイミングで、同じ答をそれぞれ発した。

遠く離れた病院の一室で、少女が得体の知れない不快感に襲われ

ているとも知らず。

\*

「おい、瀬良。聞いているのか」

正午になったばかりの暗い部屋。通信用の大型端末の前に腰掛け  
ていた男性が、ヘッドセットに向かって尋ねる。

「…妙だな。さっきまで繋がっていたんだが」

男性が計器類をチエックしてみるが、異常は全くみられない。ア  
ンテナの不調かと男性が疑うが、答えは背後から聞こえてきた。

「よお。元気かな？榎野さん」

「!?!」

男性 榎野が振り向くと、そこには栗色の髪を揺らす少年の  
姿。

「瀬良…何故、ここが!?!」

「簡単な話だ。携帯や通信機器の電波は波の形をしているが、その  
流れは直線方向。通常そいつをアンテナや人工衛星がキャッチして、  
個々の端末に届けている。だがアンタたちは空气中に漂わせた『滞  
空回線』（アンダーライン）を介して同じことを行なってる。一般の回線には絶対に紛  
れ込まないためにな。そいつを利用して通信するのは暗部組織か僕

ぐらいのものだから、逆探知は容易だ」

かつかつと、瀬良が歩み寄ってくる。槇野は後ずさり、

「そんな馬鹿な……そもそも、『アンダーライン滞空回線』の解析には『ピンセツト』がなければ……」

「そんなモノは必要ないさ。わざわざ『アンダーライン滞空回線』を解析する必要はないからな。僕は携帯のアンテナ部分に『リフレクター反射物質』を仕込んで、反射した電波の流れを解析すればいい。そして今日、10月15日に活動している組織は『グループ』と僕だけだ。直接携帯端末と行なう通信はさらに限られるから、周波数さえ記憶してしまえば僕が出るまでコールして来るアンタの居所を突き止めるのは造作も無いことなんだよ。さて、理解できたかな？」

瀬良の脚が振るわれる。思わず構えた槇野だが、腹部を守った腕は軽々と折られてしまう。

「あッ、があああああッ!?!」

だらりと垂れた腕を掴んで、槇野が呻いた。

「今のは『オフエンスアーマー窒素装甲』と同じ原理だ。『リフレクター反射物質』を含ませた空気は僕の腕に掛かる衝撃全てをアンタに注いでくれる」

「まっ、待て!どうしてこんなことをするっ!」

支離滅裂な現状に、槇野が叫ぶ。瀬良はフツと冷めた笑いを漏らし、

「アンタの不手際に憤っているんだよ。『上』も僕もな。だから処分に来た。どの道上から指示が下りたんだろうが、それを待っているほど僕は気長じゃない」

そう言つと、瀬良は指揮者のように腕を振つた後、ズボンのポケットに手を入れて、槇野を見下す。

「じゃあそういうことだ。少しの間だったが、世話になったな」

「何…?」

踵を返して部屋を出て行く瀬良に、槇野は呆然とその背を見つめた。

見逃してくれたのだろうか。

そんな甘い結論を浮かべながら、立ち上が

「がつ…!?!」

腰を浮かせた瞬間、頭に割れるような激痛が走った。

たまらず前のめりに倒れこもつとすれば、今度は顔面にさらに強い衝撃が加わる。

「ぐおっ…!?!」

その勢いに押され後ろに傾けば、さらに強い衝撃が後頭部から背中に襲いかかる。

「ぐあつ……!？」

まるで見えない壁にでも囲まれたように、衝撃があちこちに発生する。

(なんだっ……これはっ……!?)

そんな衝撃を浴び続ける内、いつしか頭から生暖かい液体が漏れ出してきた。かつてない激痛を引き連れて。

(待て……まさか、これが瀬良の扱っ……!)

先ほど瀬良が、大袈裟に腕を振るつたのを思い出す。あれは演出や彼の癖などではなく、『何か』をばら卷いた動きだとすれば。

これは、ばら撒かれた『リフレクター反射物質』から衝撃を受けているということなので……。

朦朧とした意識の中、頭かち割られたような感覚と共に、一気に意識が遠退いていく。

(やれやれ……隠蔽せねばならんものがまずない、前の少年のままならば、こんなことにもならなかっただろうにっ……!)

割れた頭蓋と肉の裂け目から、生々しいモノが飛び出した。

反射の壁はそれすらも跳ね返して、槇野の顔面にべちゃりと張り付く。そうして、立ち上がることも倒れることもできなかった槇野の体が、ようやく床の上に転がった。滅茶苦茶になった骨格や裂けた肉から這い出たモノが、人間らしい形を崩している。

かつてインターフェイス デュアルスキルソフト接続回路に多重能力進化実験で指示を下していた、槇野という人物の最期だった。

\*

正午ジャスト、瀬良は携帯電話を耳に当て、柔らかな笑みを浮かべていた。

「ええ。済ませました。片付けの方はそちらにお任せしていいんですよね？」

ほんの数百mも離れていない場所で人間を殺害したにも拘わらず、彼は雑踏に紛れて繁華街を闊歩する。

「…はい。それで、漏洩した情報はどの程度のもだったんですか？」

先ほどとは違う、愛想の良い笑顔と柔らかい口調。表情ひとつとっても、同一人物とは思えない。

「そうですね。まあ、顔が割れていなければ大した弊害にもなりませんよ。…ええ。槇野さんですか？彼なら問題ありません。いい夢を見ていると思いますよ。…はい。では、後はお任せします」

パタンと携帯を閉じ、ズボンのポケットに入れた瞬間、瀬良から表情が抜け落ちる。柔らかな笑顔はそこにはなく、悪人たる邪悪な笑みがそこに残った。

(名前と能力名……お前はどこまでたどり着いた？インターフェイス接続回路)

呪詛にも似た冷たい感情が、瀬良の胸を満たしていた。



どうも、櫻井です。

コメディだけで一話丸々使うことが出来ない作者をお許しく下さい(汗)

本話は『とある科学の超電磁砲』の主要キャラ四名に出てきてもらいました。個人的には黒子暴走をさせたいのですが、上条さんほどのフラグ持ちでもなく接点もない接続回路には無理だったので忠告だけです(笑)

接続掌握のハモリ否定は絶対作中で書きたいと思ったので盛り込みました。接続観測だと片方はどもってもう片方は否定も肯定もしないので、この二人にしかできないシーンでした(笑)

そして瀬良でシメたわけですが、あれは『反射の檻』を作ったわけです。衝撃は反射物質と接触する度に倍々に増えていくので大袈裟に動くと尚更ダメージを受ける仕掛けです。痛みと衝撃の大きさで動いてしまうのでどうしようもないのですが。これは前にテレビで見た怖い女の話で、刃のついた狭い檻に閉じ込め一度傷つけさせ、もがけばもがくほど体が切り裂かれてしまう、という恐ろしい話からヒントを得ています。

本話副題の通り、瀬良は相手次第で態度や口調を変化させる世渡り上手な狡猾キャラです。イメージ的には『DEATH NOTE』の夜神月辺りが近いかもしれません。CVをおくとしたら宮野さんですね(笑)

次回もややコメディ気味です

お楽しみに！

7 - 3 検挙 罪人トシテ (前書き)

「……嘘じゃないってば」

学園都市第五位の超能力者（レベル5）

夕凧 暖

「本当ですか？とミサカは4度目の確認に入ります」

システムリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号 エクストラローラ  
多重観測

『あー、そういえばそんな噂聞いたことあるなあ。でも女王様って…ドS、だったたり?』

『常盤台の女王様あ…はうう、すごい…尊敬する…羨ましい…』

公園傍のカフェでコーヒーを呑む曖は、セーラー少女二人の心の声を聞いていた。意図的に、である。

曖に近寄る人間の属性は、大きく分けて三つに分けられる。

ひとつは、夕凧曖という人物の持つ能力に惹かれ、取り入って利用しようとする者。

全体で考えればこれが4割。

二つ目に、夕凧曖自身の外見や性格などに惹かれた者。

中にはアブないタイプの人間も居るが、純粹に友好関係を築きたいという者がほとんどだ。これが大体4割。

残りの2割が、第五位『メンタルアウト心理掌握』が頂点に立つ常盤台最大派閥に入ること、常盤台における権威拡大を企てる者。

と言った具合に、夕凧曖を取り巻く同年代の人間関係には極端な表裏が存在する。

故に、他校の彼女らや隣に座る美琴や白井に対して初めから心を許すことはせず、あらかじめ内面を調べているのだ。

悪い癖かもしれないが、こういうことに不器用な曖にとって、必要な行為なのである。

「しかし、お邪魔してしまったのではありませんか？先ほどの殿方と真つ昼間のお楽しみをしていたのでしょうか？」

そう。セーラー少女たちの勢いに押されつい承諾してしまった途端、インターフェイス接続回路が先に行ってしまったのだ。

「…だから、さっきから言ってるでしょ？彼とはそんなロマンチックな関係じゃないって」

などと言いつつも、別行動する羽目になったことを悔いる自分がいる。

「あー…、使用人、みたいなの？」

佐天が口を挟む。あれが使用人…まあ面白くはあるけれど。

「それも違うわ。知り合い以上友達未満ってところね」

女王様などと言われているのは知っているが、ここまでネタにされる筋合いはない。

だが何だかんだで姉よろしくお人好しの曖は冷たく突っぱねることもできなかつたりする。

「ねえ、あいつ、本当にアクセラレータ一方通行じゃないの？」

嘆息していると、美琴が突然口を開いた。曖はその目を真っ直ぐに見つめる。

「…見た目だけで判断するのは良くないんじゃない？」

「はあ?」『何言ってるのよ、こいつ』

心を読んで、曖はフツと笑みを零した。

(この人は本当に表裏がないわね…)

食堂などで目にする度に少々気になっていたが、こうして目を合わせ少し深くで見ても、美琴の発言と相反する感情がまるでない。

実に珍しい人間だった。

コーヒを啜り、カチャツ、という心地よい音を立て、微笑みかける。

「確かに彼は第一位にそっくりだけど、別人よ。彼も色々とワケありだから、下手なことはしない方がいいわ」

『ワケあり』。美琴はこれを聞くと、「そ、そう…」と引き下がった。彼女は彼女で問題を抱えているようだし、これで迂闊に調べようとはしないだろう。

「ほええ〜……」

正面から聞こえた声に反応すると、そこにはウツトリとこちらを見る初春の姿。

「なんか……オトナですね、夕凧さん」

その隣の佐天も、初春ほどではないにせよ似たような視線を向け

ている。

「……そうかしら？」

と言って、最後の一口を飲み干し、慣れた動作でカップを置く。それだけで沸く、少女たちの感嘆。

「動きのひとつひとつが上品です……白井さんとは違いますね……」

初春の発言で、美琴の隣の白井がむ、と目を細めた。

「色っぽいなあ……夕凧さんって。お嬢様とかそういう以前の大人の魅力を感じますよ」

ウツトリと語る佐天。『大人』という単語に、美琴がびくりと反応する。

「……？」

それが気取っているわけでもなくデフォルトの曖には、イマイチ他との違いが分からない。ただ、彼女たちの口から出る言葉が世辞や煽りではなく、心からのものだから驚きだ。

初対面でここまで心を許せる彼女たちが信じられなくもあり、羨ましくもある。

「……初春？確か今日の目的は破損したというPC部品の購入ではありませんでした？」

惚けた瞳で曖を見ていた初春に、白井が気づいたように言った。

ハッ！と大袈裟に反応する初春。

「わわわっ！そうでした！お昼前に注文する予定だったんです！」

ガタツと席を立ち、「じゃあ行きますかー」と佐天が言い、曖は彼女達と別れ……。

「…………え？」

てつきりここでお開きかと思っていた曖。

だが、その手は佐天にしっかりと握られ、4人組に連れられて歩いていた。

「…佐天さんって言ったかしら。この手は何？」

「何って、夕凧さんも来るでしょ？」

「私、行くなんて一言も…」

「あぁっ！駄目ですよ！夕凧さんの声で『イク』なんて言ったら悶絶ものです！」

初春がすこし赤くなりながら言い放った。

いや…そういう意味じゃ…。

だが悪意のないお誘いには、何だかんだで乗ってしまうのが夕凧曖という少女である。

\*



一方、インターフェイス接続回路は首の装置のスイッチを押していた。

だがこれは『開幕』ではなく『閉幕』のサイン。

杖を拾って立つインターフェイス接続回路の足元には、愚かにも襲いかかってきたスキルアウトの姿がある。一応死なないように加減はしたが、壁に叩きつけたせいも全員気絶していた。アクセラレータ一方通行の身代わりか、はたまた辰滝の件の因果か。まあどちらでも構わないが。

(夕凧と離れといて正解だったな…)

そんな青年たちの姿を見て、ふと思う。

まあ、彼女の場合、人質に取られようが銃を向けられようが、心から攻めて応戦できそうなものだが。

(しかし、昼間っから仕事熱心だよなあ)

ちよつとした裏路地のさらに路地から出て、インターフェイス接続回路は人の行き交う大通りに戻ってきた。ほんの100m程度移動してこの変化。ここにいる人間の一人として、あの陰の世界を知らない。

そう思うと笑えてくる。

しかしまあ、民間がそれを知らずにいるのはいい傾向だ。罪もなければ縁もない平凡な一般人までがそんな闇の存在を抱える必要はないのだから。

(イレギュラーはあったが、当初の予定通り…)

次にすることを頭に浮かべながら、インターフェイス接続回路が歩道に沿って歩き出。

「ひつたくりよ！！誰か捕まえて！！」

そんな中年女性の声が聞こえ、振り返る。

そこにはこちらへ向かってくる帽子にマスクをしたいかにもな格好をしてバッグを荒々しく掴む男。その後方には、数人の人ばかりと地面に座り込んで叫んでいる太った女性。

静かな瞳で、インターフェイス接続回路は走ってくる男を見ていた。

「どけええええ！！」

手にしたナイフをバッグを持たない左手で構え、男が迫る。

「いけない！避ける！」

杖をつくインターフェイス接続回路の姿を見てか、女性に駆け寄ってた20歳過ぎくらいの男性が声を張り上げた。ナイフまでの距離、6m。

インターフェイス接続回路は嘆息して、軽く首のスイッチを押した。

「……ツマンネ」

そうぼやいたインターフェイス接続回路の胸に、男のナイフが突き刺さる。見ていた野次馬が思わず目を背けた。

が。

「……え？」

呆けたような声は、灰髪の少年のものではない。

ナイフの柄だけを手にし、斜めに地面をついた杖に引っかかり宙を浮いている、ひったくりの男のものだ。

男はそのまま慣性に従い、鈍い音を立て舗装された固い地面に倒れ込んだ。接続回路インターフェイスがそのまま、男のスポンの一部と上着の一部を軽く踏む。

「テメエ、なにしやがっ……！？」

男が立ち上がるうとするが、体が起こせない。まるで服が地面に張り付いたように、どんなに力を込めても動かないのだ。動くのは手先と首だけである。

「まあ、ちつと地面に磔にしてやったってトコだな」

男の傍に転がったバッグを掴み上げ、淡々と説明する。

「そこで無様に這い蹲って、『警備員アンチスキル』なり『風紀委員ジャッジメント』なりを待つんだな。服を切り開きでもしなけりゃ動けねえから、いい笑いモノになれんだろ」

つまり、拘束されるときはパンツ一丁もしくは下着だけというとか。想像したのか、男の顔に嫌そうな汗が一筋垂れた。

「あっ、ありがとうございますっ！」

さっきの太った女性が駆けて来た。接続回路は<sup>インターフェイス</sup>適当にバッグを渡し、踵を返す。すると女性は慌てたように、

「ちよつと待ってください！是非お礼を…」

「必要ねえ」

振り返ることもせず、きつぱりと短く答える<sup>インターフェイス</sup>接続回路。お礼が云々よりも、この磔男の傍に人間が集まってきているのが問題だ。無視してとつと立ち去ろうとすると、さっき声を上げていた男性に杖をついていない手を掴まれる。

「まあ待ちなよ。この人は君に感謝をしてるんだ。素直に気持ちを受け取ること大事なんだよ？」

「触れんな優男。必要ねえつつつてんに無理矢理押し付けんのは迷惑とは違いなのか？」

強引に男性の腕を振りほどいて、<sup>インターフェイス</sup>接続回路は静かに告げた。男性は呆然と、振りほどかれた腕を見つめている。構わず、<sup>インターフェイス</sup>接続回路はかつかつと歩き出した。

（人殺しの悪党が礼なんか受け取れるか）

そんなのは自分を倒し実験を止めたあのツンツン頭や、何かと噂のある『<sup>レールガン</sup>超電磁砲』が受ければいいのだ。たとえ地球の危機を一人で救ったって、そんなものは受け取らない。これはあくまで贖罪であり、当然の行動なのだから。

\*

「何だったんだ？今の子……」

「いい人って感じでも無かったよな」

「でもひつたくりからバッグ取り返したのは事実でしょ？」

「そりゃ、そうなんだけど」

「ていうか、誰か風紀委員が警備員呼ばなきゃ駄目じゃね？」

ざわつく人混みの輪の中心には、涙目になって地面に縫い付けられた男。『風紀委員』、『警備員』という単語を聞くだけで、この先に待ち受ける今以上の屈辱が目に浮かぶ。誰も自分には触れていないが、きつと心のどこかでこんな姿の自分を侮蔑しているのだろう。そして後で半裸になった自分に対してさらに侮蔑を込めた視線を投げるのだろう。

そんな事がぐるぐると頭の中を回っている。すると。

「すみません。今灰色の髪で杖をついた僕くらいの人を見かけませんでしたか？」

柔らかい優しげな声が、蟹股に開かれたまま固定された足の方から聞こえる。

「ああ。居たよ。この男を捕まえてバッグを取り返してくれたんだ。でも、こんな風にする能力なんてあるのかなあ」

確か、服の一部を踏まれたかと思っただら、そこから動けなくなっただと思う。服に触れることに意味があったのだろうか。

「へえ…そうだったんですか。確かにこれはまた、珍しい能力ですね」

視線がひとつ増えたような気がする。

（ちくしょう。なんだって俺がこんな目に。いや、ひったくりやっただからだろうけど、ここまでされる筋合いなくね？これオーバーキル行ってんじゃね？とんでもねえ公開処刑じゃねーかよっ！）

くうう、と悔しそうに声を漏らすが、それ以上に羞恥心が湧き上がってくる。

「おやおやこれはまた…随分な状況ですわね」

フォンツ、という音と共に、ツインテールの少女が突如として現れた。ぼんやりと、空間移動系能力者だと認める。位置的にはスカートの中身が見えそうなところだが、そんなことよりも重要なのはその腕に巻かれた緑色の腕章。

「『ジャッジメント風紀委員』ジャッジメントですの。強盗致傷未遂で拘束致しますわ」

嗚呼、終わった。

ぼんやりと男が思う。『ジャッジメント風紀委員』の登場でギャラリーがざわつく中、男の耳に、さっきの柔和な少年らしい声が入ってきた。

「…まったく。こんなことで責任逃れできるつもりなのか？あいつは」

自分に対しての言葉だったのか。よく分からないが。

その声の持つ重圧に、背筋が凍るような気がした。

どうも、櫻井です。

前章が前章なので小さな事件を入れてみました。

襲ってきたスキルアウトがどういった者達なのかは皆さんの解釈にお任せします。

少し不自然かな、と思うのは初春と佐天さんの惚けっぷり（笑  
オリキャラ至上というわけではなくて、心理掌握の肩書きや初春  
から見ての曖の「お嬢様ぶり」は直接目にするのが少ないレアな  
ものだと思ったので、これくらいいいよね、という程度の気持ちで  
す。不快に感じられた方はごめんなさい。

接続回路のターンは『衣服』と『地面』の結合を行なっただけの  
簡単な応用でしたね。杖に引っ掛けるのは彼らしいかなあと思って  
入れた次第です。黒子が現場に来たので次回は…？

次回は瀬良が急接近…するかもしれません。予定変更の可能性が  
あるので断言はしません。

お楽しみに



7 - 4 対峙 出現スル好敵手 (前書き)

「テメエの名前面倒なんだよ」

学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「そつか？」

非公式の超能力者

瀬良 悧皇

7-4 対峙 出現スル好敵手

インターフェイス  
接続回路は地下街を歩いていた。

15日現在、明確に稼働していることがわかっていて、『ユニオン』の施設は、曖昧と出会い通達を受けた地下施設しかないからである。車両など使わずとも、暗証番号さえ分かっていたら直通のリニアレールを利用できるため、つい昨日曖と歩いた通路を辿っていく。

(夕風は瀬良の情報を特力研の被験体データから見つけたと言っていた。…ってことは、瀬良も俺と同じく蝉脇の手にかかってんのか?)

もし、仮説通り瀬良がかつての自分と同じ『シークレットナンバー 非公式の超能力者』だとすれば。

蝉脇の方の特力研は、『シークレットナンバー 非公式の超能力者』に選抜する前提で組織された可能性が高い。

(俺の『インターフェイス 接続回路』に野郎の『リフレクター 反射物質』……俺の代用品になってるってことあ、『インターフェイス 接続回路』と同等の能力と見ていいだろう)

『シークレットナンバー 非公式の超能力者』は一人で暗部組織ひとつ分の働きをすることもあるポストだ。全盛期の『インターフェイス 接続回路』のような、他を圧倒するほどの能力である必要がある。

自惚れかもしれないが、インターフェイス 接続回路は自分の能力そのものには自信を持っているのだ。

(まあ、実際に『シークレットナンバー 非公式の超能力者』方面から探りを入れれば解決するか)

一筋縄で行かない相手ということくらい、先刻承知だ。

\*

(ここだな)

しばらく歩いて、工事中のシートが張られている区画にたどり着いた。ここを抜けた先に、『ユニオン』の施設に通じるリニアレールがある。

シートに手をかけ、中に入ろうとすると。

「お待ちせ」

やや高めの澄んだ声が、背後から聞こえた。舌打ちして、一応振り向く。

「……あのガキ共と居たんじゃねえのかよ」

協力してくれることを拒む気はないが、進むのはあまりにも危ない橋。できることなら巻き込みたくないという思いは未だにある。

「あの中の二人が『ジャッジメント風紀委員』の子でね。ひったくりがどうとか言っつて飛んでいっちゃったから、お開きになったのよ」

疲れたように嘆息して、夕風曖が報告する。言われてみれば、アブノーマルなタイプらしい白井とか言う方と頭に花畑をくつつけた少女には緑色の腕章が付けられていた気がする。

「ああそう。んで、またもしつこく俺についてきたってのか」

工事用の簡素な扉を開け、曖と共に中に入る。工事とは言うものの、こんな大それた隠し方をするようなものではない。結局は『ユニオン』への侵入口を隠す目的だろう。網膜照合も必要としない扉に、大した意味があるなんて誰も思わない。

「私の能力はそれなりに役に立って、さっき思ってたじゃない。不服？」

「居る以上は利用させてもらうさ。お荷物にならなけりゃな」

「ふうん。素直じゃないわね」

「……その悪趣味な覗き癖をいい加減修正しろ」

「はいはい」

互いに言い合いながら、『非常口』と書かれた扉を開ける。

そこに現れたのは、三つの扉が待つエレベーターホール。

見た目こそエレベーターホールだが、実はこれこそが秘密のリエレールの入口だ。

エレベーターの水平移動版、とでも言うのだろうか。地下鉄のように、第七学区の端にある施設まで繋がっている。その証拠に、扉の傍の壁には階数を示す表示版がなく、代わりに暗証番号の入力装置が設置されていた。

前に使用したときに連絡された番号を入力し、乗り込む。  
反対側にも扉がある以外、普通のエレベーターとの違いはない。

扉が閉まり、わずかに水平方向のGがかかるのを感じながら、曖  
が口を開いた。その目は接続回路インターフェイスの掴むトンファアのような杖に向  
いている。

「その杖、大分古いみたいね。新しいのに換えてもらったら？」

「あ？……いや、その必要はねえな」

確かに、垣根の反乱に始まり『透明人間』スケルトンの襲撃、志乃の救出と、  
やたらと激しい環境にあったせいも、前腕を覆うような部分はボコ  
ボコで、足の下端もすり減っている。

「どうして？」

「新しく作んだよ。色々あってこの杖じゃ都合の悪いことに気付い  
たからな」

「ああ、あなたの部屋にあった方眼紙、その設計図だったのね」

納得したように曖が頷く。接続回路インターフェイスは嘆息して、

「なかなか機会がなくてパーツも集まらねえがな」

「そう。頑張つてね」

気のない返事が発せられた。正直、どうしても手伝つと言つなら  
危険のないパーツの入手の方を任せたい。

(このまま20分密室かよ……やりにくいつたらねえな)

「密室だからって変な気起こさないでよね」

また勝手に読まれたらしい。接続回路はインターフェイスどうでもよさそうに、

「自惚れんなマセガキ」

「ガキってほど歳離れてないでしょう」

暗部の人間二人が話す内容は、想像するより人間的だった。

\*

シートに包まれた工事中の空間。そこで、栗色の髪が揺れていた。少年は薄ら笑いを浮かべて、その奥のエレベーターホールのような空間に入り込む。

三つある扉を準に見て、彼は軽く首をならした。

「『ユニオン』への糸口だな。さすがに組織への干渉は問題になるか。ま、こんな時のための保険だが」

瀬良は携帯をポケットから取り出し、『協力者』へと回線を繋げる。

「首尾はどうか？」

柔らかい優しい声音が、整った口元から飛び出した。相手はくぐもった声で、

『大丈夫だ。問題はない。すぐにやれるがどうする？』

「構わない。実行に移してくれ」

躊躇うことなく、瀬良はあっさりと言い放った。『了解』という返事を聞いて、瀬良が謎の爆発で扉をひとつ破壊する。

（『ユニオン』に逃げ込まなければ問題ない。このシャフトの中で仕留めればセーフだ）

中の箱型の機体を壊して、シャフトの中に躍り出る。

瀬良は少し考えるようにして、靴底と地面、足下の気体に『反射物質』を展開する。彼が適当な動作で地面を蹴ると、彼の体は爆発的なスピードでシャフト内を滑空した。反射に反射を重ねることで数倍になったエネルギーを、前進する動きと共に地面と空気の『反射物質』を消滅させることで、莫大な推進力を得たのである。

滑空しながら、瀬良は余裕の笑みを漏らす。

（向こうが足止めしてる間に辿りつけばいいんだがな）

\*

「ッ!?!」

ガクンッ、と、二人の乗るリニアレールは大きく揺れて停止した。思わず倒れそうになりながらも、壁に手を突いて体勢を整える。

「……どうしたのかしら」

訝しげに、曖が停止した機体を見回す。接続回路は顎に手を当て、

「……停電ってわけじゃねえようだ。どうやらオマエの貧乏クジだな」

首のスイッチを押して、施設方向の扉をこじ開ける。

「……あなたに付いて来たがために、一緒に狙われてるってこと?」

「察しがいいな。俺に付き添うってなあそついうことだ」

シャフトへと降り立ちながら、接続回路インターフェイスが言った。整備用の明かりがあるのは幸いだ。

「相手は誰かしら」

同じく下りてきた曖が、接続回路インターフェイスに続きながら尋ねてくる。

「アレを停止させたところを見ると、『ユニオン』側に俺を潰そうと考えるヤツが混ざってんだろ。そいつの仕業だな」



だが、仮にそういった者が居たとして、リニアレールを停止させる必要はどこにあったのだろうか。停止させたからには、取りあえずどちらかの方向に向かうしかないインターフェイス接続回路を仕留める『何か』が用意されているのだろうか。

(いや待て……いくら俺を潰そうと考えたって、今までの事から雑魚を回してくる可能性は低い……となると、俺を仕留める『何か』  
つてのは……！)

キュイイイン、と。

100mほど進んだところで、インターフェイス接続回路は妙な音を聞いた。

モーターの駆動音だ。

「ちょっと、ヤバいんじゃない？」

隣の曖が、後ろを向いて言った。インターフェイス接続回路も振り向く。

目に映るのは、こちらへと向かってくる扉の開いた鉄の箱。

「……これに懲りたら、俺なんかと一緒に来ねえことだ」

「……結果によつてはそうしようかしら」

「下がってる」

インターフェイス接続回路が曖の前に出て、嘆息した曖がその細い体に隠れた。

ピッ、という音と共に、インターフェイス接続回路の首の装置から赤い輝きが放た

れ、その周囲から現れた青白い光条がリニアレールへと突き刺さる。穴だらけになり減速したそれを見て、今度は三重に窒素の壁を形成する。それにまともにもぶつかったリニアレールは、破片を撒き散らしながら停止した。

「最初の光線でモーターだけ壊せば良かったんじゃない？」

背に隠れていた暖が、ひよいと隣に移動する。接続回路は嘆息して、

「どんな能力者がバツクに居るかわからねえ。電磁波なんか操れるやつがいりゃあ、こいつを生き返らせるなんざ容易いだろうし、この方が向こう側まで見通せんだろ」

「…まあ、あなたの知覚能力も普段は使えない！？」

そう暖が呟いた刹那。

バゴオン！！という轟音を立てて、シャフトの壁が爆発した。

無意識に暖を庇うように前へ出て、爆炎を睨みつける。

現れたのは、栗色の茶髪を持った高校生ぐらいの少年。

「おや、お邪魔だったかな？インターフェイス接続回路」

フェイス薄ら笑いを浮かべた端正な顔。どこか垣根を思わせる風体。インター接続回路が口を開く。

「テメエ……何者だ」

尋ねたものの、返ってくる答えは予想できた。この相手を侮蔑するような雰囲気も、神経を逆撫でする冷たい瞳も。

かつての自分によく似ている。

少年はフツと笑って、

「瀬良悧皇。知ってるだろう？お前の探してる『シークレットナンバー非公式の超能力者』だよ」

少年の告白に、インターフェイス接続回路は息を呑んだ

7 - 4 対峙 出現スル好敵手 (後書き)

どうも、櫻井です。

ついに瀬良とご対面(笑)

『反射物質』を利用した高速移動の方法はやや無理があるかもです(汗)

他に思いつかなかった…。

勉強不足ですね…説得力のある応用ができなくて申し訳ない(汗)

早くも超展開気味ですが、どうぞお付き合いください！

それでは次回、お楽しみに

7 - 5

撤退

立テ直シ

(前書き)

「受けとか攻めとか…妙な旗立てないでよね」

学園都市第五位の超能力者（レベル5）

夕風 曖

「ミサカも同意します…とミサカはよからぬ結末になるのではと危  
惧します」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「…オマエら、何の話してんだ？」

学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「ようやくご本人の登場かよ…ハッ、探す手間ア省けたな。調子こいたレベル4差し向けた時から気になって仕方なかったんだよお」

名乗った少年を前にして、インターフェイス接続回路が不適に笑う。瀬良は瀬良で、その様子を面白そうに眺め、

「そう言つて貰えると光栄だな。まあ、できることなら初めから僕が相手したかつたんだが。『スケルトン透明人間』は最初から処分する予定だったんだが、どうせなら使えるカードは使っておきたいからな」

あつさりと言う瀬良。その超然とした態度から、確かな自信と余裕が感じられる。

インターフェイス接続回路はまるで動じなかったが、隣の曖は信じられないとも言いたげに目を見開いていた。

「……………どうして……………」

そう呟いて、後ずさる。瀬良はその姿を認めると、得意そうに微笑みかける。

「『オフィシャルナンバー公式の超能力者』ナンバー5、『メンタルアウト心理掌握』の夕凧曖だな。僕の心理を読めないことに疑問を抱いているのか？」

「何…？」

瀬良に言われ、インターフェイス接続回路が確認するように曖に目を向ける。

『……読めないのよ。彼の心理。接触レベル的には深層意識まで読み取れるはずなのに……』

直接頭の中に送られてくる曖昧の声。はははっ、という瀬良の爽やかとも取れる笑い声が、耳の中に入ってきた。

「僕の『リフレクター反射物質』はありとあらゆるベクトルとそれに伴う事象を任意に反射する能力だ。お前のAIM拡散力場が僕のAIM拡散力場に干渉する前に、その『干渉する力』を反射したわけだな。まあ物理的なベクトルではないからダメージ自体は与えられないが、実質『メンタルアウト心理掌握』を無力化できたから及第点ではある」

ありとあらゆるベクトルとそれに伴う事象を反射する。

能力の概要を簡単に頭に収めて、インターフェイス接続回路は一步前へ出た。

「なるほどなあ……テメエが俺の優秀な代用品なのは解った。クソつたれの蝉脇が面倒見ただけのこたあある、ひねってくれた能力じゃねえか」

「手放して賞賛とは恐縮するな。……さて、お喋りはこの辺りにしておこうか」

言った瞬間、瀬良から殺意が発せられる。思わずインターフェイス接続回路が身構えるが、彼はハツとして背後を見た。

そこには茶髪の少女の姿。

(コイツが居たんじゃ……!)

自分一人ならまだしも、曖昧も守りながら戦わなくてはならない。

しかも相手は『シークレットナンバー 非公式の超能力者』。

そしてハンデを与えるような余裕はこちらにない。

「何を戸惑っているんだ？」

再び瀬良を向いた時、彼はこちらへ迫ってきていた。反射的にスイッチを入れ、窒素の壁で瀬良の蹴りを何とか防ぐ。

「チツ……！」

たかが蹴りでも、『リフレクター 反射物質』を使ったそれは恐ろしいまでの破壊力を秘める。幾重にも張った窒素の壁で、ようやく防げるほどにその殺傷能力は高い。

「勝ちたければ切り捨てる。他を贄にせず結果が得られると思ったら大間違いだ」

次に振るわれたのは拳。特に筋肉質というわけでもない瀬良の殴打は、インターフェイス接続回路の『壁』を砕いていく。インターフェイス接続回路は後ずさりながら、鼻で笑う。

「確かになあ。だが、俺アそんな安い選択はもうしねえって決めてんだよ。テメエみてえなヘタレにやお似合いの考え方だがなあっ！」

刹那、インターフェイス接続回路の周囲から4条の光線が放たれた。瀬良は動じることなく、余裕の笑みも崩さない。

「わざわざ解説してやったんだ。それを活かすくらいのこととはして



ほしいな」

瀬良に届く数cm手前で、青白い光線が跳ね返される。

剥ぎ取られた原子核に再び電子を戻すことで反射された光線を防ぎ、その軌道や速度を見て、インターフェイス接続回路は勝ち誇ったような嘲笑を刻んだ。邪悪な表情を瀬良に向け、裂けるように笑んだ口を開く。

「なあるほど。『リフレクター反射物質』ってモンの仕組みはよく解った」

「ん」

「アクセラレータ一方通行とはちつと違うな。テメエを狙ったのだけじゃなく、テメエの周りを狙ったモンまで跳ね返って来やがった。…つまりテメエはテメエ自身に限らず、任意の分子に『リフレクター反射物質』を仕込むことであらゆるモノに反射機構を生じさせられるってわけだな？」

言つと、瀬良は打って変わって柔和に微笑み、

「ご明察。謎が解けて良かったな。だがお前が圧倒的不利なことに変わりはない」

徐に手を挙げ、瀬良が思い切り腕を振るつ。

生じたのは、強烈な烈風。

「くっ………ッ！」

防御しようと演算を始めるが、インターフェイス接続回路は足元の空気を爆発させて後退する。進む先には、曖の姿がある。

「え……」

「伏せろー!!」

怒鳴り、曖が伏せたのを確認して、迫る烈風に掌を向ける。烈風は周囲の空気ごと圧縮され、その場に散った。

感情に任せて解放しても、そのままこちらに跳ね返されてしまうのだ。

「……つまらないな」

距離の離れた瀬良が、こきこきと首を鳴らしながら歩み寄る。

「その女がいる以上、真面目に戦ってはくれないか。折角僕に匹敵できそうな相手に全力を出させず潰すというのは、興が乗らない。……が」

迫る瀬良から曖を庇うようにして、インターフェイス接続回路が立ち塞がる。瀬良は笑みを深くしていき、

「生憎そこに拘り続けるほど楽観的でもないんでな。どうしてもと言っなら止めはしないが、僕は手加減なんてモノはしない」

殺意の拳が空を切り、『リフレクター反射物質』の宿る風の刃が、二人に襲いかかる。

「チツ！ああああッ！！」

インターフェイス接続回路は曖の腕を掴み、シャフトの壁をくり抜いてその中に放り込んだ。

「ちょー！」

壁の向こう側に落ちた曖が、開けられた穴の方を見るが。ドゴォン！という音とともに、穴から噴煙が漏れてくる。

「…やれやれ。全く馬鹿げた頭してるなお前は」

呆れたような瀬良の声が、噴煙の向こうから聞こえてくる。

「ま、構わないけどな。先にお前を料理した後で、第五位も葬つてやる」

「ゴアッ！！という空を裂く音が聞こえ、漏れ出していた煙が払われる。

「クソつたれが。俺を倒す前提で話を進めてんじゃ、 temeエはあいつに指一本触れられねえよ」

力と力が衝突する音が響き、インターフェイス接続回路の体が凄まじい速度で滑空する。それを追うようにして、瀬良も爆発的な推進力を生み出してシャフトの中を駆け抜けていく。

「そいつはどうか。手の下しようによっては、隣のリニアレールを動かして第五位を変わり果てさせることだって可能だ」

インターフェイス接続回路の拳を反射し、窒素の壁を破砕する。痛みに顔を歪めながら、インターフェイス接続回路は吐き捨てた。

「あいつも馬鹿じゃねえ。 temeエがこのシャフトのリニアを利用し

た時点で、他のシャフトも同様に使って来るくれえの推測は立つてる」

「ふーん：なるほど。こうして第五位と僕との距離を離して、その際に逃がすって寸法か？…いや、ここから入口までの距離も距離か。僕を倒した後で合流でもするつもりなのか？」

『インターフェイス 接続回路』が烈風を放ち、『リフレクター 反射物質』がそれを反射し、『接続回路』が空気に散らす。

一進一退ですらない、五分五分のやり取りが行われる。

「見てわかるだろうが、お前の攻撃は一切の意味を成していない。僕はただ『リフレクター 反射物質』をばらまいているだけだ。とてもじゃないが、お前の劣化した『インターフェイス 接続回路』で『リフレクター 反射物質』は倒せない。このまま時間ばかりを消費して、バッテリーが切れたところで仕留められる。そして『シークレットナンバー 超能力者』の存在を知った第五位も始末する。どの道お前の望む結末になんてなりはしない」

「……チツ……そいつはどうだろうな」

言って、『インターフェイス 接続回路』は首のスイッチに触れた。

瞬間、空気の爆発による高速移動を行っていた『インターフェイス 接続回路』の体が、その場で立ち止まる。

「？」

突然の行動に、瀬良は訝しげに眉をひそめた。演算を中止し、『インターフェイス 接続回路』の十数m先に降り立つ。と同時に、『インターフェイス 接続回路』は再びスイッチを入れ、変換公式を地面に働かせた。

出現する、鉄の防壁。隣のシャフトや地中の砂鉄などを強引に寄せ集め、瀬良との間に十数mの『壁』を作り出す。

寸分の狂いなく、計算どおりに形成できたことを確認すると、タイフェイス接  
続回路は曖の元へと加速していく。

（今は逃げるしかねえ… 『シークレットナンバー非公式の超能力者』なら公には行動できねえはずだ。一般人を盾にすんのは性に合わねえが、夕凧だけでも安全な場所に連れてかねえと…！）

尻尾を巻いて逃げ出すなど自分でも納得行かないが、このまま戦ってもジリ貧なのは目に見えていた。

能力の詳細を引き出せただけでも上等だ。

今は体勢を立て直し、曖を無事に帰すことの方が重要だ。

そう自分に言い聞かせ、数百m後ろに置いてきた曖の元へと急いだ。

\*

相手の姿が見えなくなって、チツ、と瀬良は舌打ちした。

「『リフレクター反射物質』による破壊力を持ってしても一撃で破壊できないように、か。フン、くだらない時間稼ぎだな」

ここがもつと広い場所ならより効果的な方法があるが、これでは『形成』するだけの条件が欠けている。かと言ってシャフトの上はしばらく土だらけ、隣のシャフトも『インターフェイス接続回路』によって一部の原子を失い、土でせき止められていることだろう。ちまちまと壊していくしか手はないらしい。

(今からそんなことをしたところで逃げられるな。『外』に出られたら手の出しようもない)

瀬良は徐に携帯を取り出し、『登録4』とあるアドレスに回線を繋げる。

「そつちはどういう状況だ？」

『さすがに気付かれたようだ。私からアクセスしたという履歴は削除しておいたが、リニアールの操作はもう不可能だ』

相手は先ほどの『協力者』。瀬良は小さくため息をついて、

「仕方ないな。あんたはもういつもの業務に戻ってくれ。後はこつちで何とかする」

『了解した』

返事と共に、回線が切れた。瀬良はボタンと携帯を閉じて、踵を返した。

(『シークレットナンバー非公式の超能力者』の事はインターフェイス接続回路の方から口止めするだろう。それが表沙汰になり、間抜けな一般人に広まることは、あいつ自身が避けたいはずだ)

時刻にして14時52分。

こうして、『インターフェイス接続回路』と、『リフレクター反射物質』という、『シークレットスキル非公式の超能力』の戦いが、幕を開けた。

どうも、櫻井です。

今回は『反射物質』について取り上げるためだけに設けたような、そんなお話でした。少々グダグダ気味だったかもしれませんが（汗

基本的に『反射物質』とはひとつの原子で、対象に結合する量などで反射する範囲が変化し、一粒の『反射物質』に強烈なパンチを繰り返せば、その一粒の範囲にかかる圧力全てが集中してなおかつ倍になるので、パンチを反射してその腕に穴を開ける、ような真似も可能です。

今回接続回路は独自の『窒素装甲』でガードしているので目立った外傷はありませんでしたが。

ただ瀬良が快樂殺人者のような一面を持ち、ジワジワと攻めていく性格なので一転集中系はあまりやらなかったり（笑

本章も大分長くなる予定です。

それでは次回、お楽しみに



7 - 6 逡巡 求メタ『チカラ』ヲ前にシテ (前書き)

「……なるほどね」

夕風 曖の姉にしてインターフェイス接続回路の良き理解者 夕風 志乃

「な、何よ」

学園都市第五位の超能力者(レベル5) 夕風 曖

インターフェイス  
接続回路と夕凧暖は第七学区の病院に戻っていた。

あの後瀬良の追撃はなく、何とか逃げおおせたのである。

時刻は15時47分。

大体あれから1時間と言ったところだ。

インターフェイス  
接続回路は自室の丸椅子に暖を座らせ、自分はベッドに座っていた。やや赤みを帯び始めている日の光が、窓から入り込んでいる。

「……常盤台の学生寮には戻らねえ方がいい」

厳かな口調で、少年は言った。暖は小さく頷いて、

「今度は私を狙ってくるかもしれないってわけね」

「ああ。『シークレットナンバー  
非公式の超能力者』は目立たないように行動しなくちゃ  
ならねえが、情報漏洩の火種になるようなヤツなら容赦なく狙う。  
たとえ『学舎の園』ってのの中に居ようが、奴らの前じゃ何の保証  
にもならねえ。オマエが一人になった時点で、野郎は仕掛けてくる  
はずだ」

淡々と、インターフェイス  
接続回路が説明する。今では随分丸くなったが、かつて  
は彼も瀬良のような立場にあったのだ。

昏い色を帯びた緋色の瞳からは、後悔にも似た感情が感じられる。

「……じゃあ、その間私はどうすればいいのかしら」

わざわざ詮索することもない。曖はあっさりと話を進めた。

「今からあの医者に話をする。アイツは『シークレットナンバー非公式の超能力者』の事を知ってるからな。オマエの姉の部屋にでも居られるように手配させる」

曖の質問に、インターフェイス接続回路はきっぱりと答えた。

…何となく、今は能力を使わない方が良い気がする。

つい数時間前にはない緊張感に息苦しさを感じて、曖はかまをかけるように、

「お医者さんを顎で使うの？」

「頼まなくなつてあの医者はそうしようとするんだろ。今のあいつの患者にとって、オマエは必要なモンだからな」

それが姉を示していることは、能力を使わずとも解る。

だが。

「それってあなた？」

気の迷いなのか何なのか。答えとは違う答えを提示した。いまいち、自分が何を考えてそうしたのは分からない。

何を思ったのか。相手の返事は舌打ちだった。

「…自惚れんな。オマエを必要としてる患者なんざ、オマエの姉ぐ

れえのモンだ」

「朝に覗いた時は必要としてくれてなかったかしら」

「オマエの『能力』をな。オマエが何の力もねえただの夕凧妹なら、そもそも付いてこさせやしねえよ」

言いながら、インターフェイス接続回路が立ち上がる。彼は肩越しに曖を見て、

「俺はあの医者に話をつけてくる。オマエは姉んトコ行って一部始終伝える」

「え…ええ」

曖の返事を待たず、インターフェイス接続回路は杖の金属音を立てながら部屋を出ていった。一人になった他人の病室で、曖は「はあ」と息を吐き、肩の力を抜く。

…肩の力を、抜く？

何気なくした自分の行動に、曖は妙な違和感を感じていた。ぼんやりと窓の外を見て、小首を傾げる。

(何で緊張してたのかしら、私)

しばらく考えた後、彼女は部屋を後にした。

\*

「瀬良悌皇か……」

一部始終を話し終わると、冥土ヘウンキヤンセラ帰しと呼ばれる医者**は**ぼつりと咳いた。

壁に背を預けていた**接続回路**は、怪訝そうに眉根を寄せる。

「知ってたのか」

「君の代わりの『非公式の超能力者』だという事はね。そんな大胆な行動に出るとは思いもしなかったが」

こちらに顔を向け、医者が言った。**接続回路**は舌打ちし、

「…奴の『反射物質』つつう能力は予想以上だった。一方通行みてえな『自衛』だけでなく、任意の座標に『反射の壁』を構築できる『窒素装甲』のシステムを応用してなけりゃ、今頃血まみれだったかもしれねえ」

憎々しげに唇を噛む。逃げ出すしかなかったことが不甲斐ないのだ。

そんな姿を見て、医者はふむと顎に手をやり、何やらカタカタとキーボードを叩き出した。

その背中を、**接続回路**が無言で見つめる。

「**接続回路**。君は『暗闇の五月計画』というものを知っているかい

「？」

突然の問い。接続回路インターフェイスは少しの間記憶を漁り、

「『置き去り』チャイルドエラーのガキ共使って、一方通行の演算パターンを埋め込んだっつうアレか？」

「そう。『窒素装甲』オフエンスアーマーの絹旗さんという子も計画の被験者なんだが……もしかしたら、その時実行機関が残っていたパターンのオリジナルデータが役に立つかもしれない」

「オリジナルデータだと？」

接続回路インターフェイスが聞き返す。医者は頷いて、

「一方通行アクセラレータの思考演算パターンを一定の公式に置き換えたものだ。『窒素装甲』オフエンスアーマーを独自の公式で展開した君なら、この演算公式を再現できるかもしれない」

低い声で告げられる。

それは接続回路インターフェイスがかつて追い求めたものだった。

無意識下で外敵から身を守る、絶対的な防護壁。

多重能力進化実験デュアルスキルシフトに参加したのも、元はと言えばその強さを手にするためだった。

「……その公式ってのは、無意識下に能力を行使する公式か」

気がつけば、尋ねていた。冥土<sup>ヘヴンキャンセラー</sup>帰しは頷く。

「端的に言えばね。一方通行は『必要なベクトル』と『不要なベクトル』という二つの概念を持って能力を行使している。君の『接続<sup>インターフェイス</sup>』に置き換えて考えれば、『必要な粒子』と『不要な粒子』と区分けして、『不要な粒子』をオートに排除することができるはずだよ。最も、『反射物質<sup>リフレクター</sup>』にどの程度対応できるかは分からないから、さし当たっては『窒素装甲<sup>オフエンスアーマー</sup>』のオート使用化による意識演算量の削減を図るのが目処になるけどね」

普段ならこんな説明は苛立つところだが、今回はまったく苛立ちを感じなかった。むしろ喉から手が出るかと思った。

求めていた力が目の前にある。

垣根との戦闘の少し前、兩粒の自動分解が可能になった喜びとは比べ物にならない喜びが、彼の胸中を支配した。あの時は曖昧だった『誰かを守る』想いは生きる理由にすらなった。その『成長』は、さらに強い『守る力』の渴望へと繋がっていた。その力を前にして、心の奥底に沈んでいた想いが湧き上がる。

だがそんな喜びとは別に、自力で成さなくてはならないという矜持も渦巻いている。

「俺は……」

取れば一步先に進める。

拒めば時間を浪費する。

「……………」

かつて一方通行アクセラレータと間違われる度、遺憾に思っていた。

そいつと自分を一緒にするなど、同一に扱われることを拒んだ。

自分は彼をも超せる素養があると、勝ち続けていたがための自惚れを抱いていた。

第一位を超えたいと、心のどこかで思っていた。

だがそれ以上に。

プライド以上に、守らなくてはならないモノが今はある。

握り締めた拳が震えた。

「……………やめておくかい？」

見かねたのか、柔らかい年配の声が耳に入ってきた。

もしも誘いを断れば、どうなるのか。



しばらく逡巡するように俯いて、インターフェイス接続回路はゆっくりと顔を上げた。

毅然と医者を見つめて、口を開く。

「俺は…あいつらを守らなくちゃならねえ。俺一人の力じゃ、瀬良に指一本触れられなかった」

医者は黙って耳を傾けていた。

「もし…アイツの、『アクセラレーター一方通行』を参考にしてあいつらを守れるんなら、俺はプライドなんざ捨ててやる」

インターフェイス接続回路は歩み寄り、ヘヴンキヤンセラ冥土帰しに目を合わせた。

「…公式を教える。後は俺次第なんだろ」

答えにもう迷いは無かった。

利用できる道は最大限に利用する。

それが彼の性分なのだから。

「僕でもなかなか理解が及ばないけどね」

微笑みながらそう言って、医者がパソコン画面を少年に見せた、その刹那。

ガラッ、という音を立てて、院長室の扉が開いた。「おや」と医

者が声を上げる。

「安静に、と言っておいたはずだけど？」

医者の口調は穏やかだった。来客が来ようがおかまいなしの接続回路フェイスだったが、扉に目を向けたところで、驚いたように目を見開く。

「申し訳ありません。でも、どうしても会いたかったです、とミサカは正直に告げます」

点滴パックのぶら下がった車輪付きスタンドを持って、ゆったりとした病室着に身を包んだその少女。

無表情な顔を綻ばせて、こちらを見つめる見慣れた瞳。

「……オマエ……」

それはほんの数十時間前には目にした存在だった。

だが、こうして自力で立ち、こちらにぎこちなく笑いかけるその姿は、何日ぶりのものだろうか。

「また…会えましたね、接続回路インターフェイス…とミサカは心から微笑みかけます」

少女の呼びかけに、接続回路インターフェイスは目を見開いたまま、その口を開いた。

「多重…観測……」

その少女は、少年を変えたきっかけ。

7 - 6 遼巡 求メタ『チカラ』ヲ前にシテ (後書き)

どうも、櫻井です。

今回はあまり動きのないお話でしたね。『暗闇の五月計画』云々を話題にしたくて書いた次第です。

瀬良は今回フェードアウト。また今度瀬良単体のお話があったりします。

コメディとは言いがたいかもしれませんが、今回はちょっとほのぼのできるお話にする予定です。嵐の前の… (笑)

それでは次回、お楽しみに！

7-7 火花 少女達ノ出会イ (前書き)

「ワケわかんねえんだが」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「ホント、こういう事には疎いわよね」

夕凧暖の姉 夕凧 志乃

「まだ調整中なんだけどね。まあ蝉脇の培養液からの汚染も大したものではなかったから、半日でここまで治せたよ」

どこか誇らしげな医者。接続回路は「インターフェイスそうか」と小さく呟いて、

「…この分なら、明日にや完治できそうだな」

「はい、とミサカは同意します」

お互い、エクストローラ多重観測の皮膚に傷がないことには触れない。あの日起こった謎の現象。それには触れない方が良い気がしたのだろう。無論、インターフェイス接続回路も口には出さない。

無言の二人を見るや、医者は軽く咳払いして、机から何かを取り出した。

最新型の携帯ゲーム機にも似た、特殊な端末。一緒にメモリーデバイスも差し出す。

「これはさっきの『内容』だよ」

それが医者なりの配慮であることは、すぐに分かった。インターフェイス接続回路が端末を受け取る。

「……悪いな」

彼はデバイスと一緒にそれをポケットにねじ込むと、エクストローラ多重観測と部屋を出ていった。

医者はふふ、と笑って、

「変わったね、彼も」

\*

院長室を出た二人は、片方はカチャカチャと、もう片方はガラガラと音を立てながら夕暮れの廊下を歩いていく。

「…どうして傷が治ったのでしょうか、とミサカは不思議に思います」

部屋を出ての第一声はそれだった。あの培養液に浸けられる前に受けた暴行の記憶は残っているのか。

「さあな。俺に聞いたって解りやしねえよ」

ぶつきらぼつに、灰色の少年は答えた。実際、あの日の現象は自分でもよく分からないのだ。

「ですが一応、お礼を言っておきたいのですが、とミサカは確認を取ります」

ちら、とその姿を見れば、いつも頭にあるゴーグルがない。だからというわけでもないだろうが、やや髪が伸びた気もする。

「礼を言われる筋合いなんかねえ。…むしろ、俺のミスだからな。オマエが危ねえって事ぐれえ、早くに気付くべきだった」

目を伏せ舌打ちするインターフェイス接続回路。

「でも、あなたは私を助けてくれました。この事實は、私がおあなたに感謝する立派な理由になると思います、とミサカは敢えてにこやかに応じます」

練習でもしたのだろうか。完璧とまでは言い難いが、ちゃんと『笑顔』が作れている。

いや、肉体が追いつかないだけで、彼女は前々からこんな感じだったか。

インターフェイス接続回路は顔を背けて、

「…勝手にしろ」

「では改め」

そんな姿に苦笑らしい声を漏らしながら、エクスプローラ多重観測が感謝の言葉を発しようとした瞬間。

「……………あ」

差し掛かった自販機コーナーから、そんな声…というか一音が聞こえた。

インターフェイス接続回路とエクスプローラ多重観測が、思わずそちらに目を向ける。

そこには柔らかかそうな茶髪があった。

常盤台の制服に身を包んだ、少し憂いを帯びた顔立ちの少女。



「話は終わったの？」

購入したらしいシリーズ型新商品、『ハバネロみかん』を手に歩み寄ってくる。

…何故そのチョイスなのか、疑わずにはいられない。

「ああ。一応話は纏まった」

気にせず、インターフェイス接続回路が曖昧に答える。

曖昧は胸の前で腕を組み、

「そう。病室の売店に下着とか売ってたかしら？」

「俺が知るか」

面倒くさそうに眉根を寄せる。この女が自分をどんな人間と思っているのか、少々気になるところだった。

と、そんな二人を白けたジト目で見比べる、病室着の多重観測が、こちらにも不満そうに眉間にしわを寄せる。

「…こちらはどなたでしょうか？とミサカは確認します」

少し声が低くなったことに、インターフェイス接続回路は全く気付かない。

「ああ、夕風の妹だ」

「…もう少しマトモな紹介はできないの？えっと、あなたが多重観測エクスプローさんね。話には聞いてるわ」

見れば見るほど御坂美琴にそっくりで、曖は少し驚いていた。まあ、クローンという経緯を知っているから、受け止めるのは容易いのだが。

「私は夕風曖。あなたのお姉さんと同じ、常盤台中学の生徒よ」

「…第五位、『メンタルアウト心理掌握』ですね。あなたの噂は耳にしています、とミサカはメモリから情報を引き出します」『どういった経緯で、彼とこの人は交友関係になったのでしょうか…』

インターフェイス 接続回路と話している時とは違う、出会った当時の淡々とした声。どこか違う、と思いき小首を傾げるインターフェイス 接続回路とは対照的に、曖は納得したように「へえ」と声を出した。

「案外名前が広まったのね。地味な能力だし、序列も五位って微妙なところだから意外だわ」

敢えて、彼女は見えた心理には触れなかった。別に人のそういう感情を詮索する気はないし、詮索する理由もない。

「少なくとも俺よりは知られてんだろっが」

二人の会話に、インターフェイス 接続回路が口を挟む。曖はそちらに目を移した。わずかに表情が変わった事に、灰髪の少年は気付かない。

「あら、あなたは第一位じゃなかったかしら」

悪戯っぽい口調と表情で、言う。美琴に間違われていた事を思い出している発言である。インターフェイス 接続回路は舌打ちして、

「うざってえこと抜かしてんじゃねえ」

「気にしてたの？それじゃ失礼」

「……チツ」

カチャカチャと杖をついて、インターフェイス接続回路が傍らのトイレに入っていた。二人、その姿を目で追って初めて、トイレ傍で話し込んでいたことに気付く。

男性用トイレの直ぐ傍で会話する女子中学生。

一度そこから離れてみれば、老人や中年の男性が急いだ様子で駆け込んで行った。

…どうやら邪魔になっていたらしい。

「どうして気付かなかったのかしら…」

はて、と首を傾げる曖に、エクストローラ多重観測は隣から、

「単刀直入にお聞きします、とミサカは前置きします」

…随分力んでいるな、と少し不思議に思いながら、曖は友人にするそれと同じ微笑みを彼女に向けて、

「あら、何？」

さっきの心理からある程度の推測はついてしまっが。

「あなたは彼の事をどうお考えですか？とミサカは解答を迫ります」

(…やっぱり)

聞いて、ふうと曖が嘆息する。まあ、ある程度他人と距離を置く自分からすれば、彼とのとりとめのない会話回数がギネスレベルなのは間違いない。意識する以前に親身に話していたから、それを感じ取られたといったところか。だが、結局あそこまで話せるのは姉の命の恩人であったり、姉が信頼する人物であるからであって、決してそんな見るも素敵聞くも素敵な話ではないわけで、こういう質問に対する答えなど迷う余地などないのだが何故かモヤモヤするのは何故なんだろう。

コホンと小さく咳払いして、曖は改めて多重観測<sup>エクストローラ</sup>を向いた。

「どつって言われても。お姉ちゃんを助けてくれた恩人兼仕事仲間Aって感じかしら」

自分で言っけしっくりこないが、下手にしっくりさせると下手なことになりかねないので頭に浮かんだとおりに発言する。多重観測<sup>エクストローラ</sup>は目を細め、「ほー」と疑うような声を漏らした。

「先ほどのやり取りを見る限り、いささか意識なさっているように見えたのですが、私の思い過ごしでしょうか？」

「え…」

曖が目を見開く。

そんなはずはない。自分は普段から極力カーフェイスを保っていたはず。感情の揺れを他人に感知されるような事は一度もなかった。だが記憶を辿ってみれば、そうだった気がしない事もなく、余計に気になってしまう。

少し顔が熱くなったのは気のせい…なのだろうか。

「その反応で確信しました。やはりあなたは…」

「オマエら、ここに居たのか」

「なっ…！」

多重観測の推論と同時に現れ声をかけてきた接続回路。その先をインターフェイス言われることに何故か危機感を感じ、思わず慌ててその口を押さえた。

「…何してんだ、オマエ？」

「な、なんでもないわ。一種の遊びよ」

さすがに多重観測の口を慌てて押さえる姿は異様に見えたのか、インターフェイス接続回路が尋ねてくる。曖は火照る頬が早く冷めるよう念じ、しばらくしてから手を離れた。

「…大変遺憾ではありますが、そのようです、とミサカは適当に話を合わせます」

(それを言っただけにするのよ…)

「ああ？」と細身の少年は軽く首を傾げたが、どうやら関わると

面倒そうだと判断したらしい。適当な動作で髪の上から頭を掻いている。

「……まあどうでもいいんだけどよ。夕凧は売店行くなり行くで行って来い」

「え、ええ」

なんとか危機を脱せたことに安堵する。その後ろで、何故かガツツポーズをする多重観測。接続回路は目を向けて、

「オマエもだ。現段階での面会時間はもう過ぎてるってよ。早く治したきゃとつとアイツんトコ戻れ」

聞いて、エクスプローラ多重観測はポカンと硬直した後にキメた拳をゆるゆると下げ、「は、はい……」と落胆した様子で言った。

今度は曖が、「フフ」と笑みを零して、スタスタとその場から去っていく。それをジト目で見送った後、エクスプローラ多重観測もガラガラと音を立ててその場を後にした。

一人残った接続回路は、インターフェイス「？」と疑問符を浮かべるばかりだ。

(……まあ、打ち解けてんなら問題ねえか)

ある意味正解な結論を出して、彼は凝った首をならしながら自室を目指す。

ポケットの中の新たな力に、その胸を高鳴らせて。



7・7 火花 少女達ノ出会イ (後書き)

どうも、櫻井です。

今回はラブコメ(?)のつもりでした(笑)

相変わらず下手な描写しかできず申し訳ない(汗)

まあ対決できるので多重観測単体だった頃よりいくらか楽にはなりました(笑)

次回は徐々に頭角を現してきているあの人が主役です

お楽しみに!



7 - 8 排除 神への冒瀆 (前書き)

「どこかで見たとようなシチュエーションだね」  
『<sup>ヘヴンキヤンセラ</sup>冥土返し』の異名を持つ名医 カエル顔の医者

7 - 8 排除 神への冒瀆

10月15日23時18分。

第12学区の一角、仰々しい翼のついた石像が立ち並ぶ聖堂前の開けた道には、たくさんの人間が集まっていた。

手には聖書のような書物を持ち、神への賛美を口にしてている。ギリシャの流れを汲んでいるのか、時折ギリシャ語が入り混じる言語不定の神への祈り。

50人近くが集い輪を作っているその様は、学業の一環と言うよりはむしろ新手の宗教集団のようだ。

人通りの作業を終えたのか、輪の中心に居た大学生くらいの女が、静かに手にした分厚い書物を閉じて、その胸に抱く。

「……まだ、足りません」

一同が彼女に注目する中、彼女はぼそりとか細い声で呟いた。

「たったこれだけの祈りでは、神は私達を見ては下さらない。もっと人が必要です。我々のような新興宗教に人々が関心を寄せて下さらないのは、仕方のないことなのかもしれません」

蠟燭に照らされた面々が、わずかに眉を下げた。それを見た後で、女は「ですが」と強調する。

「我々の考えは正しい。間違っただけではないのです。今はまだ教えを理解してもらえていませんが、必ず人々が我々に賛同する日がや

つて来ます」

彼女は尊大に手を広げ、頭上の満月を仰ぎ見る。

「今は耐えねばならない。いずれは皆が等しく平等に扱われる、素晴らしい世界が誕生します。我々はそれを実現するために、より多くの人々に教えを広めねばならないのです」

「妄言だな」

突如、聞き慣れぬ声が話って入った。

女はすいと目を細め、声の方角に目をやった。

49人の作り上げた輪の外。

月明かりと西洋風の街灯だけが照らす道沿いに、少年が立っていた。

「全くくだらないな。僕は神なんてものの存在は認めないが、アンタのやってることは神への冒瀆と言えるんじゃないか？」

かつかつと靴音を立てて、少年が輪に近付いてくる。

外向きに跳ねた後ろ髪。こめかみ周辺の髪が長く、もみあげの先端は顎をも超えている。

普通にしていれば甘いマスクだが、こちらを睨みつける瞳はナイフのような鋭さを帯びていた。

どちらかと言えば不良っぽい着崩した制服姿は、この空間にはあ

まりに不釣り合いだ。

「冒涇？あなたは何を言っているのですか」

一瞬表情を変えた女はすぐに元通りの、超然としたものへと戻す。彼女は真つ直ぐに少年を見て、

「我々は神の教えに従い、ここ学園都市を起点として、人類を新たな段階へと導こうとしているのですよ？ここにいらっしやる方々も、我らが神の存在を認め、従い救いをもたらそうと集っているのです。何が冒涇だと言つのでしよう」

女の歌うような口調に苦笑して、少年は口を開く。

「精神操作系能力、『リテネンター思想誘導』。会話した相手の意思に関係なく、任意に信仰心を植え付ける…まあ早い話が洗脳する能力だ。心当たりはないかな？ペテン師教祖」

「な………！！！」

女が目を見開いた。こぼれるように開かれた両目の間を、汗の滴が伝っていく。

「へきながらいな碧永禮拿。この名前にも心当たりはないか？僕が探してる女なんだが」

「……………ッ………！！？」

明らかかな動揺。表情だけでなく、体までがビクリと動いた。

少年が、ニヤリと笑む。

それは勝ち誇ったような嘲笑だった。

「能力で強能力者<sup>レベル3</sup>と大能力者<sup>レベル4</sup>を味方に付け、上への反逆を企てたらしい。ついでに金儲けにも利用していたらしいが…さてと、本当に分からないか？僕の言った事のひとつとして」

女が奥歯を噛み締める。

手は震え、抱えていた聖書がドサリと鈍い音を立て、ルネサンス調の様子が施された暗い地面へと落ちた。

(何なの…こいつ…ッ!?)

焦燥と恐怖が胸を満たす。

順調だった計画に、鉛のように重い問題が食い込んできた。

その事実が、信じられない。

「ふ…ふふ。馬鹿なヤツねえ、あんた」

この少年は全てを知っている。そう認めると同時に、女は口調を本来のものへと変えた。

碧永禮拿という、大能力者<sup>レベル4</sup>の姿へと。

「黙ってれば良かったのに…私と会話してしまった時点で、あんたはもう私の掌中なのよ!」

『思想誘導』<sup>リードシート</sup>が牙を剥く。

ここにいる49人にしたように、少年の頭の中を掴み取って引き寄せるようなイメージを構築する。

碧永禮拿という教祖に付き従う、奴隷と言つ名<sup>な</sup>の教徒が誕生する。

「……………え？」

呆然と、少年を見据えるが。

訪れるはずの変化が、いつまで経っても訪れない。

(どっぴ……………いつ……こと…?!)

失敗…したのだろうか。49もの成功例があるのに。

ぐるぐると要因について考える碧永を、少年は嘲笑う。

「『思想誘導』<sup>リードシート</sup>を行使する上で、何故相手と会話しなくてはならないのか。アンタは知ってるよな」

「そんなの…」

明確な説明が浮かんで来なかった。

イメージのみでやって来た彼女には、理屈など分からない。

少年はやれやれと肩をすくめ、

「会話は最も単純にして効果的な情報交換の手段だからだよ。相手の声音や口調、抑揚などからは、メールや手紙にはないリアルタイムの『感情』を感じ取ることができる。人間によつて差はあるが、生物には相手の声から感覚的に大まかな感情を読み取る力があるんだ。占い師やカウンセラーなんかは特別その能力が高いわけだな。それができるのは、会話する際に相手と自分の間に意識のネットワークを形成するからだ。『思想誘導』<sup>リフトソート</sup>はそのネットワークを通じて独自の信号を相手に送信し、洗脳を行なう」

ペラペラと説明する少年に向け、碧永は目を剥いた。

「だから何なのよっ！ インテリ気取つて人の能力の解析してんじやないわよっ！ 私のがなんであなたに効かないかなんてわかんないけど！ こつちには49人も能力者が居るんだから！ あんたなんて一網打尽よっ！ ！」

混乱した頭が紡ぎだす怒声が、静寂に包まれた聖堂前に響き渡る。少年はこれまた小馬鹿にしたように鼻で笑い、

「僕の能力は『反射物質』<sup>リフレクター</sup>。ありとあらゆるベクトルを任意の地点で反射する能力だ。僕は会話を経てアンタから放たれた『思想誘導』<sup>リフトソート</sup>の信号を反射した。勿論、アンタ自身にアンタを崇める信号を跳ね返したところで、アンタには影響はないけどな。まあ、49人全員にそれぞれの能力を反射して自滅させてもいいんだが、数が数だしレベルもレベルだ。潰してしまえば何を言われるか分からない」

「な、何に拘つてんのか知らないけど、その甘えが命取りね！ さあ、あなた達！ 我々を貶める痴れ者を排除するのです！ 」

再び教祖の声になった碧永が、細い指を少年に向けた。いつも通りなら、この49人は少年に飛び掛るところだった。

だが、これまた訪れるべき変化が訪れない。

それどころか。

「あれ…俺、こんな時間に何やってんだ…？」

「うえっ！？おいおいヤベエよこんな時間じゃ寮官に殺される！」

「え…何っこ、あたし確か第三学区に居たはず…」

口々に、洗脳した者たちが自らの意思を取り戻していた。

「な……っ」

怒りに歪んでいた瞳が、今度は驚きの形をとる。意思を取り戻した者たちは、自らの目的を思い出し蜘蛛の子を散らすように駆けていく。

呆然とする碧永の目の前まで、少年が歩み寄った。

「『任意の地点で反射する』そう言ったよな？アンタの可愛い奴隷たちとのリンクも絶たせてもらったよ。定期的に集めてくれない祈りを捧げさせていたのは、一定時間で洗脳効果が切れてしまうからだろうか？まあ、宗教という形をとったことまでは褒めてやるよ」

「何で…なんで、私の邪魔をするの！？上層部の犬が！！あんだだっけ知ってんでしょ！？一般人に隠れて、上がどんな動きをしているのか…！」



後ずさりながら、碧永が喚く。少年は楽しそうにじりじりと間合  
いを詰めていく。

「知っているさ。疑問に思うことだってある。でも構わないんだよ」  
少年が緩やかにその細い腕を動かした。

「それに付き従うのが僕の…『シークレットナンバー非公式の超能力者』の使命だから」  
碧永が言葉の意味を理解する前に、修道服にも似たデザインの衣  
服から、深紅の液体が漏れ出した。

次の瞬間、その腸が零れ落ち、バタリと碧永が倒れ込んだ。

\*

10月16日0時9分。

仕事を終え、瀬良は第七学区の自宅に戻ってきた。

独りで住むにはやや広い一室。そのくせ家具はベッドと小さなテ  
ーブルだけで、無駄としか言い様のない空間が広がっている。

瀬良は学ランとカーディガンをハンガーに掛け、倒れ込むように  
ベッドに転がった。

手にした携帯の待ち受け画面を見て、日付が変わったことを確認  
する。

（……インターフェイス接続回路の居場所も第五位の居場所も上が突き止めている。全く、病院とはなかなか卑怯な手を使うな。まあ、僕が言えたことじゃないが）

茂田からの報告を思い出し、瀬良は小さく笑った。自嘲気味の笑いだ。

（……思ったより疲労が溜まってな。シャワーは朝に回して、今は睡眠をとった方がいいか）

横向きに体を動かし、シーツを強引に引き寄せて体を覆う。

間もなく微睡みが訪れ、心地よい世界へと導いてくれるだろう。

あの時のように。

7 - 8 排除 神への冒瀆 (後書き)

どうも、櫻井です。

筆がノるので三連続投稿になります(笑)

約束どおり、今回は瀬良オナリーのお話です。

『思想誘導』のシステムは洗脳専門型で劣化版ですね。洗脳の仕組みが意思疎通によるネットワークによるものでなく効果時間も無制限ならもう少し頑張れたかと(笑)

魔術編になかなか触れられないので宗教的なモノを書きたくて碧永教祖を考案しました。決して善人ではありません(汗)

前書きで冥土帰しさんにも言ってもらいましたが、本話は1 - 1の瀬良版です。見比べてみると面白いかもしれませんね。

二人とも『非公式の超能力者』なのだという共通点を見せるためには分かりやすいかと思ひまして。

今回の内容は決戦への導入になります

お楽しみに！

7 - 9 出撃 覚悟ノ上デ (前書き)

「いよいよ佳境に入ります、とミサカはここぞとばかりに前書きを占拠します」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクストローラ  
多重観測

7・9 出撃 覚悟ノ上デ

10月16日AM9:10、インターフェイス接続回路は院長室を訪れていた。

その手には、医者から渡された端末とメモリが握られている。

「もう記憶できたのかい？」

差し出された端末を受け取り、医者は緋色の瞳を見返した。瞳の主は舌打ちして、

「ナメんな。その程度の公式、覚えるだけなら5分ありや充分なんだよ」

「なるほど。上手く作用するかも夜中に試してきたわけだね」

相変わらず話の早い医者だ。インターフェイス接続回路は心の中で感心した。

「黙ってたって夜に出歩いてりやカモがかかってくるからな。いつも迷惑してんだ、たまにや利用させて貰っても構わねえだろ」

あつさりと言つてのけるインターフェイス接続回路。医者は曖昧に笑って見せた。今朝方、骨が折れたと尋ねてくる若者が何人か訪れていたからである。

「それで、上手くはいつたのかな？」

受け取った端末をデスクの引き出しに押し込んで、医者はにこやかに尋ねた。

「『オフエンスアーマー窒素装甲』のオート演算の方はな。『インターフェイス接続回路』に応用するならあのままの公式じゃ無理だ。もうちつと頭捻んねえとな」

少々悔しそうに、少年は言った。

「一晚の成果としては充分だとは思うのだが、自らの能力ですぐに使えないのが気に入らないらしい。彼はがしがしと雑に頭を掻きながら医者を向いた。

「『副作用』の方はどうにもならねえのか」

それが何なのか、医者には手に取るようにわかった。彼は曖昧に笑って、

「元が元だから仕方ないね。端から見れば不自然ではないと思うけどね」

「聞くなり、インターフェイス接続回路は小さな溜め息を漏らした。

「オマエも言ってくれんじゃねえか。絹旗つてのもああなんなら、相当目立つんじゃないか」

「彼女の方は能力使用中で尚且つ興奮状態に限りだからね」

「要は『植え付け』による行使か『再現』による行使かの差であるう。しかしデメリットという副作用でもないし、言うほど気にもしていないのだが。」

「ところで、エクスプローラ多重観測の方はどうなってる」

いつまでも言っていては仕方がないので、インターフェイス接続回路は適当に話を切り替えた。医者はうむ、と頷いて、

「乱された脳波による平衡器官の異常は修正できたよ。彼女が妹達シスターズだったことが幸いだね。しっかりしたデータがなければ、まだ立てなかつたんじゃないかな」

聞いて、インターフェイス接続回路は何かを考えるように天を仰ぎ、

「平衡器官の異常はつてこたあ、まだ何かあんだな？」

「ああ。実は…」

「いや、言わなくてもいい」

医者をして、インターフェイス接続回路は出口へと向かっていった。

「どこへ行く気だい？」

いつもなら深く追求してくるはずなのに。

普段とは違う様子に、医者は思わず尋ねた。少年は肩越しに振り返り、

「クソつたれの『シークレットナンバー非公式の超能力者』を潰しに行くんだよ」

「居場所が分かるのかい？」

「さあな。『シークレットナンバー非公式の超能力者』つつう性質上、どんな場所で仕事すんのか程度の目処しか立つちゃいねえが」

「なら……」  
「けどな」

医者が口を開いた瞬間、インターフェイス接続回路の音が被さった。閉口した医者  
を振り返って、インターフェイス接続回路は告げた。

「そうしねえと、オマエらまで被害を被るかもしんねえんだ」

重く吐かれた言葉に、医者は目をすつと細める。

「……どういうことかな？」

「10月9日の襲撃でのターゲットは俺。そして昨日の襲撃でも、夕風妹を狙うと言っておきながら、そっちを先に攻撃しようとはしなかった。俺を足止めした上で夕風を殺すこともできたつてのにな。瀬良は最初から、俺一人を狙って行動してやがんだ。ここでオマエらを守って立てこもったつて、野郎の狙いが俺である以上、痺れを切らして病院ごと始末したつて不思議じゃねえ」

最悪の可能性が、脳裏に浮かんだ。

「……だから、いち早くここから離れて決着を付けに行くんだね」

顔をしかめて、医者は言った。

その選択が接続回路にとって最善だということは分かっている。彼は自分のために他人を巻き込むことを良しとしない人間だ。どの道戦うことになるなら、少しでも大切な人々や守るべき者達から離れたところで戦うことを選択する。

黙って出て行くこうとするインターフェイス接続回路に、医者は「待つんだ」と言葉



をかけた。

「それが君なりの『優しさ』だと言つことは分かる。でも勘違いしないでくれ」

ピタリと、インターフェイス接続回路の動きが止まった。それを確認した上で、医者は椅子から立ち上がり、少年の細い肩に手をかけた。

「その選択をしたからには、必ず戻ってくることだ。今更かもしれないが、君が思うよりも、君の事を必要としてくれている人は多いんだからね」

インターフェイス接続回路は少しの間俯いて、

「……わかつてる」

小さな声でそう言うと、彼は院長室を出て行った。

\*

(何を躊躇つてやがんだ……)

エクスプローラ多重観測と夕凧姉妹の居る病室から遠い通路を歩きながら、インターフェイス回路は片手で頭を抱えた。

瀬良といち早く決着をつけなければ、この病院に居る者達全員が危ない。そして瀬良への対抗策となる公式も使える段階まで解析した。

攻め入る覚悟は十分なはずだった。

だが、心のどこかで、もう二度と彼女らに会えないのではという不安も渦巻いていた。

『リフレクター反射物質』は簡単に勝てる能力ではない。

瀬良も本気になれば、あの『スケルトン透明人間』などとは比べ物にならない強さのはずだ。昨日の戦闘などとも、比べ物にならない…。

そこまで考えて、インターフェイス接続回路はチツ、と舌打ちした。何を考えているのだろう。

(ハナっからこんな逃げ腰でどうすんだよ……バカか)

俯いていた姿勢を戻し、正面を向く。

そうした時、見知った顔が目映った。

柔らかそうなセミシヨートの深い茶髪。色白の肌に、モデル顔負けの端正な面立ち。

病室着で車椅子に座るその姿は、少し見慣れないが、それは間違いない…。

「夕凧……」

「おはよう。どうしたの？浮かない顔して」

柔らかく微笑んでくる女性。夕風志乃。  
色々あったせいか、その姿が妙に懐かしく感じる。

「別になんでもねえよ。オマエ、もう動けんだな」

極力感情を押し込み、インターフェイス接続回路はぶつきらばうにそう言った。志乃は頷き、

「誰かさんのお陰でね。お医者さんの腕が良いのもあるけれど」

「…そいつぁ良かったな」

できるだけ声音を柔らかくするよう心がける。途端に、志乃の顔から笑顔が消えた。

「これからどこへ行くのかしら？」

いささか詰問するような口調。もしかしたら曖の一部始終を聞いて、インターフェイス接続回路がどう行動するのか見越しているのかもしれない。なら、他の誰よりもインターフェイス接続回路という少年を知るこの女性に、嘘は意味を成さない。

インターフェイス接続回路は少し躊躇い、

「……瀬良と決着を付けに行く」

低い声で、そう告げた。

予想できていたのか、志乃は驚かなかった。だが、「そう…」と言う返しの言葉は、どこか悲しそうな響きを持っていた。彼女もインターフェイス接続回路同様、ひとつの可能性を危惧しているのかもしれない。

お互い数秒の間、黙り込む。

この間にお互い何を思っているかなど分かりはしませんが、志乃のそれが『行きなさい』という合図なのはすぐにわかった。

インターフェイス  
接続回路は車椅子の志乃の横を、無言で通り過ぎ

「……言つとくがな」

志乃の真横で、呟いた。「え？」と、思わず志乃が彼を向く。

「約束はまだ死んじやいねえ。もし多重観測やオマエの妹が俺の事を尋ねてきたら、オマエから適当に誤魔化しといてくれ」  
エクストラローラ

「え、ちょっと……」

歩いていく接続回路インターフェイスに手を伸ばすが、それは虚しく空を掴んだ。

(約束は死んでないって……)

正面玄関の扉が閉まり、少年が外に出たことを静かに表す。志乃は呆然とそれを見て、言葉の意味について考える。

『…必ず、帰ってきて。私も曖も、みんなあなたを待ってるから』

自分の言った言葉が思い出される。そして、少年の返答も。

『……ああ。必ずな』

エクスプローラ  
多重観測や曖にこの事を知らせないのは、余計な心配をかけたくないからだろうか。もしも彼の思考を先読みしてここで待っていないければ、自分にも気を遣って、黙って出て行ったのかもしれない。あまりに不器用で不安定、そして後に残された者を傷つける優しさだった。

(言ったからには…必ず戻ってきなさいよ、インターフェイス 接続回路)

志乃は拳を握り締めると、慣れない車椅子を操って自室を目指した。

少年に託された、『役目』を全うするために。

7・9 出撃 覚悟ノ上デ (後書き)

どうも、櫻井です。

少々退屈(?)な会話回です。

次回からはとうとうお待ちかねの非公式同士の対決。今回は退屈でしたが盛り上げて参りますので、どうぞお楽しみに！

それでは次回、お楽しみに

7-10 激突

景色ノ意味

(前書き)

「守られるヒロインとは総じて待つ事が多くなるのです、とミサカは語ります」

システムリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクストラローラ  
多重観測

「守られるばかりじゃヒロインとしては物足りないんじゃないかしら」

学園都市第五位の超能力者(レベル5)

夕風 曖

「はいはい二人ともそこまで」

インターフェイス  
夕風曖の姉にして接続回路の良き理解者

夕風 志乃

7 - 10 激突 景色ノ意味

窓際のベッドに腰掛け、エクスプローラ多重観測は掌を開けたり閉めたりしながら体の具合を確かめていた。動作はバッテリー充填後のインターフェイス接続回路の真似である。

ようやく体が自由に動くようになり、表情にこそ出さないが意気揚々としているエクスプローラ多重観測。傍らのダッシュボードの上に置かれたゲコ太時計 インターフェイス接続回路と外出した帰りに福引きで当てた を見てみれば、時刻は10時を回っていた。

(もう、行ってもいいですよね…)

朝早くに行って寝顔を眺めるのも密かな楽しみ 悪趣味なのは自覚してます なのだが、さすがにデリカシーがないとは思われたくないのでもうずうずしながらこの時まで待っていたのだ。

断じるやいなや、エクスプローラ多重観測は常盤台の制服に手を伸ばす。

「……………む…」

ピタリと、ハンガーに伸ばした手が止まった。

制服を目にした瞬間、ある人物の姿が浮かんだためである。

『どつって言われても。お姉ちゃんを助けてくれた恩人兼仕事仲間Aって感じがしら』



柔らかかそんな茶髪に美人面のレベル5。

かまをかけてみれば随分と分かり易い反応をしていた少女。

仕事仲間とか言っていたが、どう考えてもそれ以上に親しく彼と話していた気がする。

(仕事仲間…10月初めからずっと仕事仕事と言っていました、  
もじゃ……)

自分が病院で平穩に過ごしている間、インターフェイス接続回路はあの女と何かあったのではないだろうか。

何があつた？何をされた？男と女で何か……など。

(モヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤモヤアアアアアア  
ーッ!!!?)

胸に波のように押し寄せてくる不快な感情。

それはもはや夫の寝取られ・浮気が発覚した妻の心境に同義！  
自分がまだまだそんな段階でない上にインターフェイス接続回路がそんな人間でないことなど分かっているが、一度浮かんできた妄想はまるで現実のように彼女を苦しめる。  
遺伝子とは受け継がれるものなのだ。

(こつしてはいられませんっ……!!)

嫉妬の炎に駆られた少女はある意味培養液の電撃を浴びた時より

も苦しい思いをしながら、ブラウスに袖を通しスカートを履きリボンを結びブレザーを羽織って大急ぎで病室を出て行った。

\*

一方、曖は志乃の病室で読書に耽っていた。

活字の羅列を速読し、その意味だけを吸収しながら、わずかに結んだ口の端を上げる。

(どうしちゃったのかしら、私)

それは自重の笑みだった。

彼女の頭の中には、昨日の多重観測との一件が浮かべられている。  
エクスプロラ

『その反応で確信しました。やはりあなたは…』

本当に、見破られたのだろうか。自分でもよくわかっていないというのに。

他人の感情を読み取れ、挙げ句に操り食い潰すことすら可能な能力を持つていても、自分の感情までは解析できない。

それが本当に理解できないのか、何かのストッパーが理解を妨げているのかは分からない。

ただ、これが感じたことのないものであることは確かである。

(ちょっと待って…それは、確かにお姉ちゃんを助けてもらった恩は感じてるし、少しはお姉ちゃんを信頼してる人ってことで親近感も沸いてるけど、別に、意識してるわけじゃ…なくもないかもしれ

ないけどそれはお姉ちゃんを大切に作る気持ちの延長線ではないわけ、異性としてどうこうってわけじゃないし、彼は彼である多重<sup>エクス</sup>観測<sup>プロラ</sup>さんのことが…あ、でも、多重<sup>エクス</sup>観測<sup>プロラ</sup>さん側から攻めてるようにしか見えなかったし、まだチャンスがないわけじゃ…ニヤニヤ…って、チャンスって何よ何考えてるのよ私っ…！！）

最近の自分はどこがおかしい。常盤台の女王様などと呼ばれている表の顔とは別に、自分が思うより年頃の女の子らしい感情も秘めていたことは薄々感づいていたが、ここまでそれが顔を出すとは思っていなかった。

クールビューティなんて表現をされたこともあるが、今の自分はとてもそんなものではないはず。

新しい自分の発見と言えば聞こえはいいが、素直じゃない性分の彼女にとっては認めたくなかったりするのである。

「どうしたの？ 曖。本読んだままニヤけたかと思えば頭抱えたりして」

「へっ…？」

突然かけられた声に顔を上げると、そこには志乃の姿があった。目を瞬かせて、引きつった笑顔を浮かべている。…そんなに変に映ったんだらうか。

曖は平静を取り戻し、

「別に何でもないわよ。お姉ちゃんこそどこ行ってたの？」

追求されたくなくて、問い返す。無能力者<sup>レベル0</sup>ながら姉は勘が鋭いだ。

「ちょっと入院してる友達のところだね。もう退院するって言っから」

「ああ、黄泉川さんって言ったかしら。良かったじゃない、治ってパタンと本を閉じ、志乃の後ろに立って車椅子を押しやる。ベッドに上がるのを手伝うと、志乃がこちらに目を向けた。

「もう少し素直になってもいいんじゃないの？」

「え？」

前触れもなくそんなことを言われて、曖が目を丸くする。志乃はクスクスと笑って、

「まああっちもあっちだから、簡単じゃないでしょうけど。狙ってるのはあなただけじゃないしねー」

「…？何の話？」

思わず首を傾げるが、志乃は見透かしたように笑うばかり。

「あら、てつきり誰かさんの事で頭が一杯だと思ったんだけど？」

「な　　！」

ようやく理解した。

少し前まで何より好きだった姉の笑顔が、憎たらしく見える。

「そ、そんなわけないでしょう？大体私は女王様とか言われてる女よ？そんなのがそんな事に興味」

「母さんから聞いたんだけど、曖の幼稚園の夢ってホント」  
「幼稚園の話でしょうっ!？」

すっかり冷静さを欠いた曖の声が、病室内に響き渡った。

\*

「ああ、また仕事で出ているよ。彼は重宝されているからね」

院長室を訪ねた多重観測に、エクスプローラ 医者は笑顔で応じた。

「そうですか：わかりました、とミサカは納得して見せます」

実際は納得などしていない。

明確に何をしているかもわからないのに、納得などできるはずがない。

あれから病室を訪ねてみれば灰髪の少年の姿はなく、その辺りのことを把握していそうな医者を訪ねてみれば、また『仕事』。

最近はいつも置いてきぼりで、ちゃんと話すこともできていないし、お礼だってまだ言えていない。

気がつけば帰ってきていて、その時には志乃が、曖が居た。

自分の知らない『仕事』の世界の少年の顔を、彼女たちは知って

いる。

彼の生きている世界が、自分とは違うような気すらする。

殺戮だけの孤独に立っていた少年。

その姿を知っていて、その苦悩も知っている。

でも、それは志乃も同じ。もしくはそれ以上に、彼のことを理解している。

醜い感情なのかもしれないが、これだけは譲れなくて、悔しい。

そんな事を考えていると、医者が歩み寄ってきて、ポンポンと頭を軽く叩いた。

身長が低い医者そのの仕草は、どこか可笑しい。

「…ひとつ、お聞きしても良いでしょうか、とミサカはあなたの瞳を真っ直ぐに見て、断りを入れます」

「何だい？」

顔上げると、医者は触れていた手をゆっくりと下ろした。

「あの人は…また、帰って来ますよね？」とミサカは質問します」

不安げに尋ねると、医者は数拍置いて微笑んだ。

「彼が戻ってこなかったことが、一度としてあったかい？」

\*\*\*

10月16日、PM17:40。

第七学区内中央電波塔の展望台屋上で、瀬良惻皇は眼下の街を見下ろしていた。

夏ならばまだまだ太陽の姿が見えるであろう学園都市の空も、10月にもなるとほとんど藍色に染まっている。

『シークレットナンバー非公式の超能力者』として活動し始めてから、約1ヶ月。この間に、自分はどれほどの命を屠ってきただろうか。数えるのも馬鹿馬鹿しいハードスケジュールだったことくらいしか覚えていない。

だが、忙しいことが嫌だとは思わない。

『役目』があり、生き甲斐があるということは何より素晴らしいことなのだ。

殺戮だろうが環境保護だろうが、その点に関しては変わらない。

(……そうだ。僕にはこれしかないんだから……)

手すりから拳を握り締めたところで、瀬良はその顔に笑みを浮かべた。

「まさかお前の方から来てくれるとはな」

夜の帳が下りようとする街を背に、瀬良は振り返った。

そこには、杖をつく少年の姿がある。

「随分分かり易いところに居んじゃねえか。あんまり分かり易すぎて、来んのが最後になっちまったが」

低い声で、少年 インターフェイス 接続回路が言った。瀬良はフン、と鼻で笑い、

「お前も現役時代はここに居たってことか。ここへ来ると再認識できるからな、自分の立場が」

インターフェイス 接続回路が眉をひそめる。

瀬良の推測が的中しているからだ。

「『シークレットナンバー 非公式の超能力者』は、存在そのものが認められていない『役割』。この街を見下ろす塔に立てば、自分が高みに居て尚且つ民間人とは違うことを思い知らされる。そしてこんな場所に立つ人間なんて居やしない。街を歩いたりして、ほんの少し求めた救いを払拭するには最適の」

「馬鹿か」

瀬良の語りを、インターフェイス 接続回路が遮った。

「んな見方しかできねえテメエが憐れで仕方ねえよ。立場と視点が変わってみりゃ、この景色の味つても大きく変わる。テメエが知



らねえだけで、この場所はいくらでも変化すんだ」

インターフェイス 接続回路の指が、首の装置に添えられる。

それを確認すると、瀬良はポケットに入れていた手を出した。

「おめでたい奴だな。残念だが、僕にお前の見方は理解できない。そんなものは各々の考え方に準ずるからな。かつては『シークレット非公式の超能力者』だったという事実が嘘のようだ」

「そいつあ最高の褒め言葉だ。……んなクソツたれの『役割』、何の意味もねエツて事を今からテメエに教えてやる」

インターフェイス 接続回路の細く白い指がスイッチに触れると同時に、その抑揚が変化した。

そう、アクセラレータ 瓜二つの少年に良く似た抑揚に。

瀬良はそれを聞くと、侮蔑したように笑う。

「『暗闇の五月計画』のデータを参考にしたか。はっ、なかなか面白い発想だな。少しは楽しめるようになったわけか？」

ハン、とインターフェイス 接続回路は鼻で笑い、手にした杖を放った。カランカランと音を立て、転がっていくそれを追うことなどせず、鍵爪のように指を曲げ、構える。

「ああ、ちツたア楽しませてやれそオだア。あんまり楽しくツてそのまま地獄に落ツこツちまうくれエにはなア！！」

インターフェイス 接続回路が風に晒された床を蹴る。瀬良も薄く笑って、同様に床

を蹴った。

学園都市上空で、『シークレットナンバー非公式の超能力者』同士の闘いが幕を開けた。

7-10 激突 景色ノ意味 (後書き)

どうも、櫻井です。

本話の半分はラブコメです(笑)

曖がギャグ担当になるのは作者としても予想外でしたが、年頃の女の子らしい部分もあるのだという事を感じていただけたら幸いです。

多重観測はコメディ方面、シリアス方面両方で多重 接続を際立たせました。19巻の内容になる次章では出番が減ってしまうので今のうちに。

そしてとうとうぶつけました本作の両雄。

中央電波塔は東京タワーかスカイツリーのようなものと思ってください。オリジナルの建物です。

接続回路の言っていた『副作用』、一方通行語(?)が初登場です。能力使用モードでの台詞はこの口調がほとんどになります。

ア・イ・ウ・エ・オ・ンにプラスして『ッ』があります。これは本物と区別するためこれも『再現』による誤差です。

次回からは激闘を繰り広げさせます。

どうぞお楽しみに！

7-11 反射物質ヘリフレクター（前書き）

「私の出番が超ないというのに能力ばかりが超一人歩きしているのはどうかと思うんですがね」

元『アイテム』の構成員にして『オフエンスアーマー窒素装甲』を有する大能力者（レベル4） 絹旗 最愛

「それより上でバチバチ言ってるんだけどアレなんだよ？」

元『アイテム』の下部組織の一員 浜面 仕上

## 7-11 反射物質へリフレクター

ゴオツ！！という轟音が、藍色の空に響き渡った。

インターフェイス 接続回路は空気を、瀬良惺皇は『リフレクター 反射物質』を、それぞれ炸裂させて相手に向かって突撃する。

(ここでツ！！)

瀬良と激突する寸前で、インターフェイス 接続回路は瀬良の斜め左へとステップし、空気中の原子から電子を剥ぎ取ると、バチバチと音を立てるそれを相手に向かって解放する。

だが、『リフレクター 反射物質』のフィールドの前には、電撃など何の意味も為さない。

放った電撃はそのままこちらに跳ね返ってきた。

「ッ！」

『オフエンスアーマー 窒素装甲』越しに電撃を分解し、塔のアンテナを蹴って再び電撃を放つ。それを再び反射しながら、瀬良は余裕の笑みを漏らした。

「拍子抜けだな。くだらない実験まで持ち出してきたから少しは期待してみたが、思った以上に学習していない」

「さてなア」

交錯しながら、電撃の形成と分解を繰り返すインターフェイス 接続回路。

怪訝そうにしながらも、瀬良は繰り出される攻撃を反射する。そこで、彼は何かに気付き、笑みを漏らして地を蹴った。恐ろしい速度で上昇し、あっという間に接続回路インターフェイスに接近する。

「オゾン…か。電撃の反射の具合から僕の散布している『反射物質』リフレクターの位置を把握しつつ電気分解を行っていたわけだな。危うく引つ掛かる所だった」

舌打ちする接続回路インターフェイスに、『反射物質』リフレクターを宿した拳が迫る。

デフォルトで演算された『窒素装甲』オフエンスアーマーが、その強烈な一撃を軽減する。とはいえ、腕を鉛で打たれたような激痛が襲う。接続回路インターフェイスは歯を噛み締め、足下に公式を働かせた。

結合と分解、彼だけの『自分だけの現実』パーソナルリアリティを以て、瀬良の足元に穴を作り上げる。

「…っ、と」

穴が口を開けた瞬間、瀬良は足元に反射の床を出現させそれを蹴り、天高く跳躍した。

接続回路インターフェイスも足下の空気を爆発させ、舞い上がった瀬良へと迫り傍らの塔に触れる。

突如塔の一部が形を変え、刃となって上昇する瀬良の体を襲う。

「足止めのつもりか」

反射のフィールドに接触した瞬間、死神の鎌にも似た鉄の刃がグシャグシャに歪んだ。

「あまりに華が無さ過ぎてつまらないな。…だから僕が華を与えてやるよ」

瀬良は尊大な調子で両の手を広げ、目を瞑り、見開いた。

「……？」

接近しながら、インターフェイス接続回路は眉をひそめる。

動きの止まった瀬良が、空中で何かを呟いている。

その意味を理解する前に、それは出現した。

瀬良の背から眩い光が発生し、光が一つの形をとる。

6枚の翼。

正確には、一人一人ほどの大きさもある巨大な三対の羽根。

おぼろげに姿を現した月を背にして、それによく似た幻想的な羽根が姿を現した。

インターフェイス接続回路は吐き捨てる。

「神秘的とでも言ッて欲しいのかよ？メルヘンは一人居りや十分だ」

「そのメルヘンとは第二位ダイクマターのことか？彼にも感謝しなくてはな」

反射の羽根を広げた瀬良が、上昇してきたインターフェイス接続回路に向けて言った。広げた羽根がしなり、羽ばたきながら烈風を放つ。

『リフレクター反射物質』入りの烈風を。

「ぐツ… あアツ!？」

烈風に混ざるリフレクター反射物質が、弾丸のように降り注ぎ、『オフエンスアーマー窒素装甲』越しでも激痛を発生させる。

とつさに空気爆発による飛翔演算を再開し、空中で体勢を立て直す時、そこには既に瀬良の脚が迫っていた。

バゴオツ!!という、反射のフィールドと窒素の壁が激突する音が響き、インターフェイス接続回路は大きく吹き飛ばされ、塔の上から都市の上空へと躍り出る。

「最初からこいつを使っても良かったんだがな。あの密閉された空間では色々と都合が悪かったんだよ」

再び『リフレクター反射物質』の弾丸がショットガンのように放たれる。

インターフェイス接続回路は烈風の射程範囲から離れ、笑う瀬良を睨み付けた。

「ハッ、垣根のパチモンがデケエ口叩いてンじゃねエよ」

「そういうお前は第一位のフェイク、だな。能力の応用として最適化された演算公式は垣根帝督のパターンだったらしくてな。お前が解雇されてすぐに教え込まれたのがこいつだよ」



瀬良は笑いながら、羽根を羽ばたかせて迫る。接続回路は気体を集め、強烈な烈風を瀬良に放った。瀬良に反射される前に、集合を解いて霧散させる。瀬良はその意図を察するや、反射の翼で接続回路によって集合固定された空気を吹き飛ばした。

「フン、姑息な攻撃だな。ベクトルさえなければ反射できないと踏んで、酸素や二酸化炭素の密度が異常に濃い塊を停滞させてきたよ。うだが…僕にそんな攻撃が通用すると本気で思っているのか？」

跳ね返された空気の塊を分解し、接続回路は嗜虐的に笑う。

「『幻想御手』で楽しんでやがった無能力者共じゃ通じたからよ」

「…舐められたものだ」

余裕を持っていた瀬良の笑みが消え、憎憎しげに眉間にしわを寄せた。

爆発的な推進力で、尚且つ羽根による加速も重ねた強烈な脚蹴りが、それを防ごうとする接続回路の腕を襲う。

「……ッ！…！アッ……！…！」

想像を絶する激痛が腕の末端神経から脳を含む中枢神経へと響いてくる。

激痛に呻くと同時に、発生した莫大なベクトルは接続回路の体を突き落とし、その体は人々で賑わう都市へと向かって吹き飛ばされる。

「チイツッ！…！」

体勢を立て直し、数十メートル下った地点で安定飛行に入り、都市の空を滑空する。瀬良は面白そうにそれを眺め、先ほどと同じように反射の羽根を飛ばたかせ、細身の少年の姿を追う。

「逃げ腰だな。構わないが、追い甲斐のある逃げっぷりで頼む」

反射の羽根が瞬き、高速で射出された反射物質が、それに触れる全てのベクトルを接続回路インターフェイスに向けて迫ってくる。

それを降下することかわすと、接続回路インターフェイスの居た空間の後ろにあったビルの窓が蜂の巣のように穴を開けた。

(あんなモンを何度も放たれたら、無関係な連中が……ッ！)

歯噛みし、接続回路インターフェイスは急速旋回して瀬良の懐に殴りかかった。向かってくるその姿を見て、瀬良が嘲笑う。

「馬鹿か？お前」

見下したように停止して、接続回路インターフェイスの拳が迫るのをただ見つめる。

自分の周囲に張り巡らせた反射の壁に拳が触れ、拳自身が弾かれる。

「ッ！！」

息を呑んだのは、自殺行為を犯した接続回路インターフェイスではなかった。

わずかに後ろに飛ばされたのは、今まさに反射の壁を展開していた瀬良悋皇。

(なん……だと……?)

痛みは全くないのだが、確かに自分は飛ばされた。

吹き飛ばはずの接続回路インターフェイスは、そのまま殴りつけた地点を浮遊している。

全てを跳ね返す壁が、破られた……?

「……ははっ」

数瞬の間思考した後、瀬良は声に出して笑った。

「なるほど、木原数多の研究か。まったく、どこからでも方法を引っ張ってきやがって」

それなりに品のあった瀬良の口調が、わずかに砕ける。接続回路インターフェイスは身構えて、

「可能性は何でも試す主義でなア」

「……………」

アクセラレータ  
一方通行とは違い壁との距離が離れていたからダメージこそ与えられなかったものの、瀬良は一瞬でも作り上げた垣根を乗り越えられた事に苛立っていた。

万物を跳ね返す絶対の壁。

そう誇っていた自らの矛に泥を塗られたことは、プライドの高い彼にとって許されない事。

彼はパチパチと拍手して、

「よくできました。100点満点だ。だが僕は一方通行アクセラレータとは違っていて事はお前だつて分かつてるだろう」

「そオだな。一度破られたとなつたら、今度は壁を二重三重にして俺が越えられねエようにすんだろオよ」

「……チツ」

瀬良の羽根が瞬いた。強化した『リフレクター反射物質』を身に纏い、ミサイルのように襲い来る。

二人は高層ビルの間を縫い、背の低い建物の密集する区画に移動し、その上空で互いの能力を激突させる。交差し交錯し反射と結合、破壊と分解が鏝迫り合う。

大きく腕を振るい、インターフェイス接続回路を弾き飛ばす。瀬良がそれを追撃し、膨大なベクトルを注ぎ込んだ一撃をインターフェイス接続回路の窒素の壁を揺らがせ、背中の羽根をしならせ殴打した。地上18mほどの地点で、二つの力が交錯する。

「テメエが俺に固執する理由はなんだ。こないだの戦闘、俺を後回しにしてサツサと夕凧を殺すこともできただろオが!!」

結合・分解を繰り返し、高熱を伴った空気を作り上げ、それを烈風として解き放つ。反射の壁越しに感じる熱気に舌打ちして、瀬良はそれを跳ね返した。

「……分からないか？ 僕が『シークレットナンバー非公式の超能力者』のスペアだったという情報だけでも、真実を導き出せるだろうにっ！！」

インターフェイス 接続回路に渾身の脚蹴りを食らわせ、大きく吹き飛ばす。

吹き飛ばされたインターフェイス接続回路はそのまま滑空を続け、瀬良から再び距離をとった。

それを追って、反射の羽根が羽ばたく。

二人は交錯しながら能力をぶつけ合い、時に受け止め時に跳ね返しながら学園都市を横断する高架橋の下をくぐり、その柱をそれぞれかわしながら交差する。

能力が鏝迫り合い、発生した衝撃波を利用して高架下から列車の走る高架橋の上へと躍り出て、再び互いの能力を衝突させる。

「これは醜い感情なんだろうな。端から見ればくだらない拘りに過ぎないかもしれない。だが、それでも僕はお前を潰すことだけを考える」

線路に沿って滑空し、通過する列車をかわして激突する。吹き飛ばされたインターフェイス接続回路の体が、列車の屋根に転がった。列車の屋根がポコポコに凹むなか、わずかな突起につかまったインターフェイス接続回路の前に、羽

根を広げた瀬良が降り立つ。

それを睨み返ししながら、インターフェイス接続回路は口を開いた。

「それはそれは……テメエは一体どんな逆恨みをやらかしてんだ？」

聞くなり、降り立った瀬良は目を伏せた。風圧で揺らぐ前髪の間から見える瞳は、殺気と同時に哀愁を漂わせ、舌打ちしてから口を開く。

「…お前は、知らないだろうな。僕が、お前の存在によって12年もの歳月を失ったことを」

聞いて、灰髪の少年は目を見開いた。

## 7-11 反射物質へリフレクター（後書き）

どうも、櫻井です。

非公式対決一話目。筆がノるのでまさかの三連続投稿です。

次回は瀬良の過去を明かしつつの戦闘になります。

御坂妹の戦術だったり木原の戦術だったり対一方通行の戦術が出てきて、ある意味総決算みたいな形になったかと（笑）

一応反射物質は移動中『壁』として展開できないのである程度穴があり、瀬良は相手の攻撃の当たる地点を逆算して反射物質をばら撒いています。

接続回路が『激突』できるのはそういった穴を狙い、跳ね返ってくるエネルギーを軽減しているからで、厳密には接続回路の方のジリ貧です（笑）

最終的にはその最大の弱点を突くわけですが、ヒントは一方通行ほど近い位置に『壁』がないことです。

接続回路にしかできない方法です。

それでは次回、お楽しみに！

7-12 因果

棄テタ者ト求メタ者

(前書き)

「ちつと間抜け過ぎねエか…?」

学園都市最強の超能力者(レベル5)

一方通行  
アクセラレータ

「丸くなりすぎるのも問題だな」

学園都市への叛逆者

垣根 帝督



7-12 因果 棄テタ者ト求メタ者

「12年を失っただと……？何の話だ」

瀬良を見上げて、尋ねる。

だが、返ってきたのは質問への答えではなく、しなった羽根の一撃だった。

「ごぼアツ……！？」

数倍の威力を内包した羽根の一撃が、列車の屋根の一部を剥ぎ、それごと接続回路を吹き飛ばす。

パソコンベコンと音を立てて転がる接続回路が線路に落ちたのを確認し、瀬良は着地してその首を掴み、思い切り地面に押し付けた。

「……元々僕が、最初の『シークレットナンバー』の超能力者』となるはずだった」

片手で首を絞め、6枚の羽根がしなつて接続回路に先端を突きつける。

「……それを、お前がっ！！」

刃のように鋭い羽根が、接続回路の顔面に迫る。

だが、接続回路は視界の隅に、高速で迫る二つの発光体を認めた。

二人が倒れる線路を通過する列車だ。

このままでは、反射物質を展開している瀬良と室素の壁を形成し

インターフェイス  
ている接続回路に引っかけかかって、大事故が引き起こされてしまう。

「チツ！」

列車との距離は100mもない。あらゆるベクトルを跳ね返す瀬良を無理矢理どかすこともできないこの状況で、手があるとすれば……。

「ッ！」

思わず瀬良がよろめいた。インターフェイス  
接続回路が直径2mほどの穴を路面に開け、自らその中に落ちたのだ。よろめいたせいで、6つの刃が空を突く。

空中で瀬良と入れ替わり、足を伸ばして分解した部位を元通りに修復する。

そんな離れ業を成し遂げた数瞬後、薄暗い高架下に列車が通過する轟音が響く。心の中で安堵して、再び瀬良へと目を移す。

「……ハッ」

つまらなそうに吐き捨てて、瀬良は手を離し距離を置いた。お互い空中で体勢を立て直しながら、向かい合う。

「俺がどオしたツて？」

インターフェイス  
接続回路の掌から、バチバチと電流が迸る。リフレクター  
用に放たれているものだ。

その『穴』を見つけ出し、その一点に圧縮した烈風を解き放つ。

ワイヤーのように細く圧縮されたそれは、空気の槍となって瀨良に迫る。だが、即座に張られた新しい壁にぶつかり、空気の槍はいつも簡単に跳ね返された。

ぼつぼつとある電灯しか明かりのない高架下の暗がり、着地した瀨良は口を開いた。

「……僕は、置き去りだった。瀨良悞皇というこの名も、親がつけたのか研究者達がつけたのかもわからない。気がついた時には既に、僕は特力研に居た」

言いながら瀨良は駆け、インターフェイス接続回路に殴りかかる。反射によって数倍の威力を伴う拳を、窒素の壁へとぶつける。インターフェイス接続回路は反動でわずかに後ろに下がったが、何とか持ちこたえ瀨良に目をやった。

「僕の能力は希少だった。だから研究者たちは僕を賞賛し、僕に優しくしてくれた。彼らが僕の能力しか見ていないことは容易に想像できたが、それでも彼らから貰える言葉は救いだ。だから僕は、親代わりだった彼らの役に立てるようにと努力した」

もつと展開する範囲が広がるように。

もつと効率的な演算ができるように。

インターフェイス接続回路の解き放った竜巻が、瀨良の手前で霧散する。反射されたのではない。自ら消し飛ばしたのだ。呆然と、自分のしたことに目を丸くする。…何を躊躇ったのだろう。

それを見届けながら、瀨良は再び迫ってくる。

「だが：5歳になった時、研究者たちは僕に見向きもしなくなつた。  
…僕よりも興味深い素体が見つかったことで」

聞いて、インターフェイス接続回路は一瞬目を見開いた。その刹那、瀬良の強烈な  
一撃がその体を吹き飛ばし、高架橋の巨大な柱に叩きつけられる。

「あぐツ！………そいつが、俺ツてわけか？」

「そつだ。元より『シークレットナンバー非公式の超能力者』として調整されていた僕は  
他の用途には転用されず、『シークレットナンバー非公式の超能力者』の予備として扱わ  
れることになつた。…幽閉という形でな」

「……ッ！」

殴打をかわすと、背にしていた柱に瀬良の拳が当たり、その頑丈  
なコンクリートに巨大なヒビが刻まれた。

震える拳に込められた負の感情。

全身から殺気を放つ瀬良は、攻撃をかわしたインターフェイス接続回路に回し蹴り  
を叩き込み、その体を薄汚い地面へと転ばせた。

「お前に分かるか？12年もの間、誰とも関わることのできなかつ  
た僕の感情が。ただただ孤独と虚無感、そして無力感に苛まれた僕  
の気持ちだ。お前はいいよな。『シークレットナンバー非公式の超能力者』を解任された  
今だって、その価値を認められて『役目』を与えられているんだか  
ら。僕とは違い、幾らでも道があるんだからな。閉ざされた空間で、  
選択肢すら与えられず存在意義すら見出せない時間を過ごした僕と  
は違つて。……12年も待ち続けて、どんな形で『役目』が明け渡  
されるかと思えば無能力者レベル。に敗北したから、だと？……ふざけるな

よ

瀬良が胸ぐらを掴み上げ、端正な顔を歪ませる。

「なら何故もつと早くに渡さなかった。僕をあんな目に遭わせておいて、そんなくだらしない敗北をし、何故なにも考えちゃいないクズ共と戯れている!？」

支離滅裂な怒号と共に、瀬良の殴打が顔面を襲う。

再びべしゃりと地に倒されても、何故か抵抗ができなかった。

彼が歪んだ原因が、自分にある……。

「僕は幸せだったんだよ。お前が嫌ったこの道でもな。なのにお前は居座り、都合の良い道を見つけたらそちらを選び、この道を取り戻そうともしなかった。…その程度で。その程度の思いで!お前は僕の唯一の道を12年もの間奪い続けてきた!！」

瀬良の背の6枚の刃が、彼の心に同調するように禍々しい輝きを増していく。接続回路インターフェイスはその神秘的とも形容できる羽根を見て、顔をしかめた。

「…だから僕はお前が許せない。殺さなくては気が済まない。逆恨み?構うものか。お前があの日、あんな風に現れなければ、僕の人生はもつと満たされていたはずなんだよ!!！」

羽根の長さを増し、はるかに射程範囲の広がった『リフレクター反射物質』の弾丸が、機関銃のような速度で断続的に放たれる。

とつさの判断で接続回路インターフェイスは足下の空気を爆発させ、空中で制御しながら高架下を飛び出した。

が、瀬良も弾丸を斉射したまま追いつがる。

「逃がすと思うのか？」

放たれた弾丸が雨あられと襲い掛かる。笑う瀬良とは対照的に、接続回路インターフェイスは空中で吹き飛ばされながら呻いていた。たまらず再び空気を爆発させ、上昇することで斉射をかわす。だが羽根の生えた少年はそれに接近し、強烈な蹴りを接続回路インターフェイスの頭に炸裂させる。

「ぐがッ……!!」

窒素の壁で押さえきれない絶大な衝撃は、その体を弾丸のような速度で飛ばし、少年の体をビルの壁へとめり込ませる。

激痛に呻いて目を開くと、眼前には高速で接近する6枚の羽根。

「弱すぎるな！これなら悪知恵の働く無能力者レスレにしてやられても仕方がない！」

瀬良の嘲笑が聞こえる。

だが、その内容は接続回路インターフェイスの頭には入ってこない。

延々と、先ほど言われたことが頭の中で渦巻いていた。

(俺の存在で、人生が狂った人間……)

たくさんの人間を殺してきた。

それは家族がいる者がほとんどのはずだ。そう言った意味では、自分は既に何万という人間を不幸にしている。

例えばそれが悪人だとしても、その家族にとってはかけがえのない存在なのだ。

そしてこの瀬良は、インターフェイス接続回路の存在によって、孤独と言う生き地獄に放り込まれた。

恨まれても、仕方ないと思う。

そして、気付く。

この少年は、夕凧志乃や多重観測エクストラローラに出逢えなかったもう一人の自分だ。

志乃のような研究者に出会えず、多重観測エクストラローラのような特別な存在に救われることもなく、ただただ壊れ続けてしまった人間だ。

境遇を呪うことしかできず、それを糧にする術も知らない。

彼をそんな境遇に追いやった一因が、自分にあるのは間違いない。

だが。

(じゃあ、こいつのやったことはどうなんだ?)

何人殺したかなど知らない。

だが『シークレットナンバー非公式の超能力者』である以上、彼はたくさんの人間を屠っているはずだ。

自分と、同じように。

もしも彼が誰も殺していなくて、以降も殺そうとしていなくて、インターフェイス接続回路という存在だけを抹殺しようと言うのなら、あるいは、命を差し出したかもしれない。

(こいつは今までに、何人も殺したはずだ。そしてこの先も、クズ共のために殺して殺して殺しつくす)

自分に彼の行為を非難する権利などない。だが、それが間違いであることは確かなのだ。

間違いは、正さなくてはならない。

たとえ、自分にそんな権利がなかったとしても。



顔を上げると、そこには瀬良の羽根が迫っていた。刃のような羽根の先端が、顔を貫こうと高速で迫っている。

その輝く羽根を見て、インターフェイス接続回路は『それ』に気付いた。

「……そオかよ」

ぼつりと呟いて、インターフェイス接続回路は首を傾け、向けられた刃を寸前で退ける。そのままめり込んだ壁を破壊し、6枚の羽根の死角に入り込むようにして、生まれた衝撃波と共に瀬良の胸倉につかみかかった。

「ッ……!!?…ぐっ、がっ…!?!」

瀬良の顔に、驚愕の色が浮かんだ。インターフェイス接続回路は顔を近づけ、何故か呻いている瀬良に語りかける。

「俺のせいでテメエが辛い思いをした事は、認めるし悪イと思う。…だがなア」

掴み引つ張り上げた瀬良のYシャツのボタンが弾け飛ぶのにも構わず、インターフェイス接続回路は大きく腕を振りかぶった。

「…クソツたれの言いなりになツて、恨みもねエ連中まで傷つけた時点で、テメエにや俺に復讐する権利なンざねエンだよ!!」

かつての自分に、瀬良を重ねて叫んだ。

刹那、オフエンスーマー『窒素装甲』で絶大な破壊力を伴ったインターフェイス接続回路の拳が、瀬良の顔面に炸裂した。

「ッばッ……ぱアッ……ッ!?!?」

殴り飛ばされた瀬良の体が吹き飛び、隣接していたビルの上、巨大なヘリポートに転がった。ガラガラと鼻から血が出て、口の中を切ったのか金臭い味が口中に広がっている。

(ば、馬鹿な……)

鼻と口を両手で押さえて、痛みに呻きながら瀬良が思考する。その背後に、灰色の影が降り立った。瀬良は怒りを露にして、その影を睨みつける。

「お、前……一体、何をしたっ!!?」

「簡単な事だろオがよ」

いつの間にか輝く羽根が消えていて、瀬良の姿はただの傷ついた少年にしか見えなかった。

インターフェイス  
接続回路が歩み寄り。

「リフレクター「インターフェイステメエの『反射物質』は、あらゆるベクトルを任意の地点で反射する能力、だツたな?こいつだけ聞いたらトンでもねエ能力だが、インターフェイステメエの能力には絶対的な穴がある」

インターフェイス  
接続回路が歩み寄り、指揮者のように腕を振るった。

強烈な烈風が渦巻き、瀬良に向かって迸る。

「ッ!……っ!?!」

いつものように反射の壁を展開したが、妙な息苦しさと共に瀬良

の体は烈風に吹き飛ばされ、無様にヘリポートの上を転がった。信じられないというように、瀬良が目を見開く。接続回路は続けた。インターフェイス

「テメエの能力はあらゆるベクトルを反射する能力だ。任意に操れるのは反射する座標だけ。どのベクトルをどの程度反射するかまでは操れない。反射の壁にわずかな穴があつたのも、呼吸するだけの空気を取り入れるため。もしベクトルまで選べりゃ、テメエは皮膚そのものに仕込んで壁以前に自分自身を反射物質にしちまうんだろオがよオ。んなことしたら、全身の体内電気が逆流しちまうからな俺の首を掴んだ時に『反射物質』リフレクターをねじ込まなかつたのも同じだ。触れてるテメエにまで影響が出るかも知れねエからなア。そオいつた危険を踏まえると、まア空気に混ぜるのが一番楽だろオから、テメエの周りを一瞬真空状態にして壁を一度取り払ってやりゃ、『反射物質』リフレクターも脅威じゃねエ」

空を背にして、インターフェイス接続回路が言った。

瀬良は呆然と目を見開いて、ぺたりとその場に座り込んだ。

「は…はははっ」

その口から、乾いた笑いが漏れる。

「…何だよ。最初から、勝てない戦いだっただっていつのか」

インターフェイス接続回路がその盲点に気付けたのは、この戦いを通じて、だ。

それがわかっているからこそ、この短時間で解析されてしまったことが悔しい。

「…分かつては、いたのにな。あの研究者たちがお前に鞍替えした時点で、僕よりも優れていることは分かり切っていたのに」

ぺたりと両手をついて、うなだれる。

インターフェイス  
接続回路はその姿を静かに見て、ヘリポートの隅にあつた誘導用のスティックランプを引き抜き、それを杖にしてモードを切り替える。

「……………」

嗚咽を漏らしうずくまっている瀬良を見て、インターフェイスの拳が震えた。

いつもの自分ならさっさと殺してしまうところなのだが、そんな気にはならないのだ。

彼をこうしてしまった一因が自分にあり、彼も最初から望んでこなかったわけではない。

犯した罪は重く、許されるようなものでもない。だが、それは接続回路とて同じなのだ。

もしも、まだ自分のように取り返しがつくのなら。

しばらく逡巡した後、躊躇いながら口を開く。

「……………オマエには、本当にその道しかねえのか」

少年の低い声が、風に晒されたヘリポートに響く。瀬良がわずかに顔を上げた。

「何……？」

「俺は、もう何万つて人間を殺してきた。『シークレットナンバー非公式の超能力者』として活動してた時にはな。その時は俺も、その道しかねえと思ってた」

瀬良は顔を上げはしなかった。だが、嗚咽するのをやめ、インターフェイス接続回路の言葉を聞いていた。それを見て、インターフェイス接続回路は続ける。

「オマエほどじゃねえが、俺もずっと独りだった。だから、俺を頼りにしてくれる上の連中に、少しでも認めてもらえるように努力した。…そうしてる内に、いつの間にか俺の手は他人の血で染まっていた」

一際大きな風が吹き、二人の髪や衣服をなびかせた。

「その時はそのままがいいと思ってた。それが必然だと納得してた。…そうしたら、例の無能力者レベルが現れた。そいつは俺に、『他人を守ること』が強さに繋がると教えた。最初はワケ分かんなかったが、今なら分かる」

インターフェイス接続回路は片膝をついて、瀬良を見た。うなだれ前髪が垂れた姿からは、表情は読めない。

「…そいつは立派な生き甲斐になんだよ。『役目』を失って、どうしていいかも分からなかった俺にとつて、そいつは目的になった。クソつたれの言いなりになって殺した分を、取り返せるとは思えね

え。だが、そうして守りたい誰かのために力を使うことは、ただ振り回すより何倍も意味があんだよ。…ただ死ぬだけじゃ逃げでしかねえが、こいつは償いになる」

ゆつくりと、インターフェイス接続回路が瀬良に手を差し伸べた。

「オマエも変われ。この世界には、オマエが変われる道があるはずだ」

それが、出した結論だった。自分が変わった以上、瀬良も変わるのではないだろうかという、何の保証もない推測だったが、瀬良の過去から鑑みれば、まだ不可能ではないと感じていた。

「僕が…変われる…だと？」

顔を上げ、瀬良が震える声で言った。インターフェイス接続回路は頷かない。

「断言はしねえよ。だが、まだ間に合うかもしれない。オマエも

「インターフェイス接続回路」

インターフェイス接続回路の声を、瀬良の声が遮った。彼は柔和な笑顔を浮かべて、

「お前は、筋金入りの馬鹿だな」

刹那、ズシュツ、という音とともに、インターフェイス接続回路の脇腹に、鋭い痛みが襲いかかった。

どうも、櫻井です。

非公式決戦二話目。如何でしたでしょうか？

前書きで頂点二人にも言ってもらいましたが、優しくなりすぎた果ての不覚です。最近接続回路がいい人になりすぎた感があったので、現実を再認識させる意味でもこのような形になりました。

まだまだ不安定と言うか、完成されていませんね(笑)

反射物質はあらゆる物質に忍び込ませることができませんが、それが無いと八方塞になってしまう弱点がありました。色々な意味で一方通行の反射より劣っているんですね。任意の座標に配置できるという以外は弱点の塊でした。

ある意味瀬良も間抜けだったかもしれませぬ(笑)

次回辺りで本章完結…のつもりですが、一応は未定です。

次回、お楽しみに

作中の『真空』は量子論による真空です

7 - 13 悪夢 通ワ又想イ (前書き)

「主人公ばかりが活躍すると思ったら大間違いです、とミサカはミサカ達を代表して宣言します」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号

エクストラローラ  
多重観測



「ッ」

脇腹を襲った鋭い痛み。

インターフェイス接続回路は呆然とした目で、ゆっくりと視線を下げていく。

すると、そこには輝く刃が突き刺さっていた。

(……な)

インターフェイス理解が遅れている内に、もう一方の羽根が鈍器として襲いかかり、  
接続回路の体がヘリポートの上に転がった。

瀬良は立ち上がり、血まみれの顔を晒しながら笑う。

「何が『他人を守る』だよ！ハハッ！笑えるな糞野郎。自分一人守り切れない馬鹿が何をほざいてんだアア！？」

そこに、いつもの口調はなかった。インターフェイス接続回路に通じる汚い言葉が、  
血まみれの口から出てくる。彼は軽く袖で血を拭くと、背中の羽根を大きく展開した。

「手え差し伸べてんじゃねえよ馬鹿が！何様のつもりだ？いつからお前はそんなに偉くなったんだよ！僕を憐れむ権利がお前にあると思ってるのかあ！？」

「……ぐ……お……」

インターフェイス  
接続回路の指が装置に伸び、そのスイッチを切り替える。

目を見開いて、空気を分解しながら瀬良に迫る。

瀬良は飛行回避しながら真空状態の空間を避け、指揮者のように腕を振るって反射の弾丸を解き放った。

影響範囲を逆算した接続回路インターフェイスがそれらすべてを叩き落とし、滑空しながら瀬良を追う。

「僕に勝つ術をお前が持っていることはわかった。それは認めてやる。だが僕はお前の見つけ出した生易しい下等な生き方は望まないし、かと言ってむざむざ殺されるつもりもない。…そうさ、今からじっくりと教えてやるよ。お前の下したあまりにくだらない選択の果てをなあ！！」

瀬良は羽根を霧散させようと大気に穴を開け続ける接続回路インターフェイスを回避しつつ、『目的の場所』へと向かっていく。高速で移動する二人を目で追うことは難しく、ビル内にいる人間達は通り過ぎる二人の余韻、吹き荒れる強風しか認識できないことだろう。

完全に接続回路インターフェイスを撃破することを諦めた瀬良は、持てる反射物質リフレクターのエネルギー全てを移動に使っていた。こちらも全力で空気圧による高速飛行をしているが、それでも羽ばたく度にエネルギーが倍増する瀬良の速度には追いつけない。

日の落ちた藍色の空を、二つの影が駆け巡る。瀬良を打ち落とすことを諦め、接続回路インターフェイスは瀬良と同様に意識演算全てを移動に割く。

1分も滑空した後、接続回路インターフェイスが目を見開いた。

つい先日、買出ししか何かで目にした派手な看板が、目に入ったの

だ。

(…………まさか)

インターフェイス 接続回路の頭の中で、最悪の可能性が打ち立てられる。

インターフェイス 接続回路を倒すことを諦めた瀬良が、自らの敗北を認めた瀬良が、  
インターフェイス わずかでも接続回路を追い詰めようと画策する手段。

『勝ちたければ切り捨てる。他を贖にせず結果が得られると思った  
ら大間違いだ』

瀬良の言葉が蘇る。そんな瀬良の価値観から推測される、手段な  
ど…………。

至って、インターフェイス 接続回路は歯を噛み締めた。

見えてきたのは、一際大きな白い建物。

\*

PM17:52、エクスプローラ 多重観測は妹達に設けられた6人部屋の病室で、  
床に屈みこんでいた。

彼女の手の中には、飼育ケースから解放された子猫の姿がある。そしてその対面とせめんには、同じく黒猫を抱えた全く同じ姿の少女。

シリアルナンバー  
認識番号は10032号。絶対能力進化実験レベル6シフトに参加し生き残った唯一の個体だ。

二人の手の中の猫同士が、互いの存在を認めると、肉球のついた手を伸ばしあう。

それを10032号と向かい合っで見つめ、二人同時に顔を綻ばせる。残り4人の妹達は、個々の目的に従って、リハビリをしに外へ出ていたり、冥土ヘウンキヤンセラー帰しの元で調整を受けていたりする。

そのため、ここには多重観測エクスプローラと10032号、そして割りと仲良くしている10511号しかない。彼女は彼女で、何故かベッドの上で体育座りをしながら猫同士のコミュニケーションを見つめている。

床に下ろすとどんな暴挙に出るか分からないので、拘束させてもらってはいるが。

「その猫の名前は決めたのですか？」とミサカは尋ねます」

10032号が、こちらを見て尋ねてきた。確かそっちの黒猫も名前が決まっていなかったはずだが…候補が候補なので決めかねているらしい。というか、もっと別な名前を考え出そうとは思わないのかと疑問にも思う。

「決定はしていませんが、白虎と命名しようかと思っています、とミサカは考え得る最良の名前を口にします」

同じ猫科…というか、白虎は伝説の動物のひとつだが、ホワイトタイガーなんて品種もあるくらいだし全然問題ないだろう。白虎、いい名前。

「見る限り、茶、黒、白の三色の毛並みのようですが、それでもその名前が通用するのでしょうか、とミサカはツッコんでみます」

「少なくとも、歴史上の人物の名や猫にとっての禁忌たる研究者を名前にしようとするあなたよりは　　っ」

エクストローラ  
多重観測の声が途絶えた。怪訝そうにするミサカ達。

「どうかしたのですか？ミサカ10412号、とミサカは念のため確認します　　」

言いながら、10032号はエクストローラ多重観測の視線を追った。

すると、そこには手を伸ばしあった結果、両手を合わせている二匹の猫の姿があった。

パシャッ！というシャッター音が端から聞こえ、そちらに目をやると。

「大丈夫、この光景はミサカがきっちり記憶媒体に収めておきました、とミサカは報告します」

カメラ片手に親指を立てる10511号。だが、エクストローラ多重観測は口をつむいだまま、今度はポカポカと手を振り回し始めた猫達を見ていた。どうやら先ほどの光景をフィルムに収めるために動きを止めたわけでもないらしい。

「……………」

たった今日にした、猫が手を合わせている光景。

『今助けてやる』

渦巻く翼を背にして、水槽に手を当てていた少年。そして、ガラ  
ス越しに彼と手を合わせた自分。

二つの光景が重なり、あの時の記憶がフラッシュバックした。

(……………インターフェイス接続回路)

今彼は何をしているのだろう。

猫と戯れて忘れかけていた不安が、再び蘇ってきた。

(あなたは今、どこで何を……………)

刹那。

耳を劈くような轟音が、響き渡った。

「!?」

エクスポローラ シスターズ  
多重観測を含む妹達三人が、窓の方を向いた。

そこには、眩い輝きを放ち6本に枝分かれした巨大な光。

反射的にエクスポローラ  
切り替え拡大した。  
反射的に多重観測は額のゴーグルを目に装着し、赤外線モードに

光の付け根で狂気的笑みを浮かべ、何かを叫んでいる茶髪の少年  
と、その周囲を縦横無尽に駆け巡る灰髪の少年。

思わず、エクスポローラ  
多重観測は息を呑んだ。

唇が震え、目を見開いて。

叫ぶ。

「インターフェイス  
接続回路っ!!!」

数十メートル離れた空で戦っている彼に、この声が届いていると  
は思えない。

だが、エクスマローラ多重観測は窓から身を乗り出して、高速で飛び回る少年に目を凝らしていた。その後ろで、シスターズ妹達も動く。

そんな姿が見えたのか、はたまた偶然だったのか。

ゴーグル越しに少年と目が合ったその瞬間、振るわれた巨大な羽根の一撃が、細身の少年を弾き飛ばした。

\*

「ぐぼアツ……!!」

先ほどよりも太さと長さを増した羽根の一撃が、激痛と共にインターフェイス接続回路を吹き飛ばす。

痛みに耐えて吹き飛ばされている方向に空気の固まりを形成し、それに激突する寸前で爆発させ、瀬良から受けたベクトルを相殺する。

相殺するや否や、インターフェイス接続回路は痛みを省みず瀬良の居る場所へと向かっていく。

瀬良はただ、笑っていた。

「あははッ！どうしたんだあインターフェイス接続回路！急に余裕が無くなったな！」



笑いながら、瀬良は腕を軽く振り、見えざる攻撃を展開する。

今までのケースから『リフレクター反射物質』の座標を逆算し、局地的に分子を追い出すことで無力化するが、真空を作るという複雑な演算で隙の生まれた一瞬に、瀬良の羽根が襲いかかってくる。

瀬良の羽根も無論『リフレクター反射物質』の集合体なのだが、あれは無意識下の演算によるものらしく、一瞬真空を作るだけでは何の意味も成さない。ほんの一瞬の消失の後、自動演算の羽根は再構成されて襲いかかってくるのだ。

インターフェイス接続回路として自分の周りを真空にしては窒息してしまう。

ほんのわずかでもインターフェイス接続回路の体表と真空空間とに隙間があれば、大なり小なり羽根の影響を受けてしまうのだ。粒子による遠距離攻撃が無力化されることを見越してか、しつこく使ってきた『リフレクター反射物質』の機関銃も放つてこない。

瀬良はもはや確実にダメージが通る羽根による打撃しか使っていなかった。

「クソツたれがッ!!」

インターフェイス接続回路が毒づいた。

接近しようにも振り回される羽根に阻まれ、近付けても瀬良の方から距離を置かれてしまう。

病院から遠ざけようにも、新たな『リフレクター目標』を設定し直した瀬良は絶対に離れようとするしない。

何とかこの場で仕留めるしかないのだが、真空という欠点を除いては一進一退が限度である。今でこそ瀬良は必死になるインターフェイス接続回路を

見て楽しんでいるが、いつあの病院に狙いを移すか分からない。  
こうして思考している間にも、バッテリーの限界は迫ってくる。

一瞬以上真空状態を続けることは危険であり、常に真空のフィールドを展開することも不可能。まさに八方塞だった。

「これがお前の慈悲の果てだよ！情けなんてかけるから僕のような人間に窮地に立たされる！！ほら、よおく見ておけッ！！」

一際大きく振りかぶられた発光する羽根が、眼前に迫ってくる。  
インターフェイス接続回路は緊急回避を試みるが、想像をはるかに超えたスピードで襲い掛かった羽根に捉えられ、弾丸並みの速度で弾き飛ばされる。そのまま病院の屋上フェンスにぶち当たり、それを破って広大な屋上に転がった。

「ぐ……がッ……」

びりびりと体が痺れ、度重なる攻撃で受けたダメージが体の中で暴れまわり、体が思うように動かない。

そんな様子を察してか、瀬良はククッ、という乾いた笑いを漏らして、30メートルほどの長さになった6枚の羽根を引き絞る。

「改造量産品のミサカ10412号に第五位、そして親交の深い研究者……ハッ、第五位を匿ったのが仇になったな」

場合によっては面倒な手段だが、神はどうやら瀬良に味方したらしい。

ジワジワと攻めるのもいいが、一度に奪い取るのもいいだろう。

これ以上ない喪失感というヤツを一気に与えてやる。

かつて自分が味わったように。

裂けるように笑みを刻んで、『リフレクター反射物質』が解き放たれた。

7 - 13 悪夢 通ワ又想イ (後書き)

どうも、櫻井です。

結局7 - 14までかかることになりました(笑)

VS瀬良の終わらせ方には色々ルートが浮かんでしまって、うまく話とつなげるにはどうしたものかと四苦八苦していました。で、まあ一番マシといいますが、どこかのクーデレさんが言っていた台詞を伏線としたルートに決定しました。

次回で本章、即ち作者による完全オリジナルの最終話となります。8章からは再び原作に絡んでいきますので、どうぞお楽しみに！

それでは

7-14 再臨 守り守られ (前書き)

「やってくれたね、まったく」

学園都市の誇るカエル顔の名医

ハウンキャンセラー  
冥土帰し

解き放たれた『リフレクター反射物質』が、驟雨の如く病院の壁面に降り注いだ。

窓ガラスが割れ、それらを囲う壁が崩落し、建物の外観を大きく変えていく。倒壊とまではならないものの、瀬良が攻撃した面はロボロに崩れていた。

だが瀬良はつまらなそうに目を細め、

「……やはりこの程度では崩れないか」

この病院に居るのは間違いないが、正確な病室の位置までは把握していない。確実に『大切なモノ』とやらを奪うには崩落させるのが一番手っ取り早かったが、さすがは武器を持つスキルアウト対策も施された施設。通常の倍程度の速度と破壊力を持つ弾丸でも何とか持ちこたえたようだ。

やれやれと肩をすくめ、瀬良はインターフェイス接続回路が倒れているであろう病院の屋上へと目をやった。この高さからでは見えないが、彼が突き破ったフェンスのひしゃげ具合から、その衝撃は想像できる。

「……ああ、なんだ。動けないあいつごと壊せばいいんじゃないか」

頭が落ち着いてくると、瀬良は気付いたように口に出した。確かに『リフレクター反射物質』を攻略されたが、だから勝てないというわけでもない。現に今のインターフェイス接続回路は蓄積されたダメージで虫の息だ。羽根をハシマーのように扱えば、病院ごと彼を押し潰すこともできる。

自暴自棄になってこんな行動に出たが、思ったより事態は変容していない。

「くだらない慈悲の果てに、自分の命すら助けられない…か。フン、やはりお前の道とやらは間違いだらけだったようだな」

大きく羽根をはためかせ、瀬良は病院へと急接近する。5階ほどの高さから、急上昇し屋上へ一行こうとしたその瞬間。

何気なく病室に目を向けた時、瀬良は目を見開いた。

反射の弾丸で蜂の巣になった壁面。窓から覗いていた明かりは消え、まるで無人の空間のように見える病院。

瀬良の中ではそれは多くの悲劇による末路であり、そこには多くの人間の死体が転がっているはずだった。

だが、実際はそうではない。

本当に、そこには誰も居なかったのだ。

(何…?)

呆然と、瀬良は崩れた壁から中を覗いていた。一部屋だけではない。他の病室も見てみるが、一人も患者が見当たらない。

どう考えても異常だった。ヘヴンキャンセラー冥土帰しと言えば、言わずと知れた学園都市の名医。彼の手に掛かれば、どんな難病も治りどんなに酷い傷を負っても必ず元通りになると評判なのだ。

エクストラローラ多重観測や第五位なら事前に逃がされていたとも考えられるが、

人一人見当たらないというのはおかしい。

(これは一体……)

瀬良が訝しんだその刹那、背後から空気を切り裂く音がした。

「ッ!?」

振り向こうとした瀬良の頭ががしりと掴まれ、崩壊せず残っていた壁に押し付けられる。直接見ることはできないが、そこに居るのが誰かはすぐにわかった。

曇天のような灰色の髪を持つ、華奢な赤い目の少年だ。

「お、前……!まだ、動けてっ……!」

器用に羽根を動かして、密着している少年を引き剥がそうとするが、突き立てた羽根は一瞬のうちに砕け散った。

理解ができない。

いくら真空空間を形成できると言っても、あの多方向から突き立てた長大な羽根をすべて同時に消失させるなど不可能なはずだ。

しかも羽根は弾丸や壁とは違い自動演算によるもので、真空で崩されてもすぐに再生するはず。

そのはずなのに、あれから4秒ほど経った今でも反射の羽根は形成されない。

意識的に『リフレクター反射物質』を作りだそうとしても、いつもの『生み出した』感覚がしない。



能力が完全に封じられているのだ。

(何がどうなっている…！奴の『インターフェイス接続回路』で、ここまでのことが…)

その瞬間、押しつけられていた瀬良の体が脆くなった壁を破り、中の病室へと転がった。

拘束から逃れ、瀬良が体ごと外を振り返る。

するとそこには、螺旋状に渦巻く赤黒い翼を背にした灰髪の少年の姿があった。まるで血のようにも見えるその一对の翼は、18時を過ぎた藍色の空に向かって奔流となって伸びている。

建物の中からは、その先端部分は見えない。ただただその圧倒的な姿を見ていると、少年の唇が静かに動いた。

「e o p g g 止 b x v k …！」

ノイズ混じりの声が、翼を生やしたインターフェイス接続回路の喉から這い出した。瀬良はわけがわからず、立ち上がって後ずさる。

「な、んだ…？それは…。そいつは一体、何なんだよっ！？」

残された最後の武器である羽根も生み出せず、今やこの悪魔に対して何の意味も持たない反射粒子すら作り出せない。能力を絶対の力と過信していた瀬良にとって、この状況は何の装備も持たずに戦場の最前線に放り込まれたようなものだった。

病院には誰もおらず、この化け物から身を守る人質も存在せず、傷を負った体しか『手段』がない。

恐怖を感じないはずがなかった。

虚無に対してこれ以上ないトラウマを抱える瀬良なら尚更に。

「d p e a x m e h j m u 救 p r f z h v o w a x : ツアアアアア  
アアアあああああッ！！」

悲鳴にも似た咆哮を上げて、インターフェイス接続回路が頭を抱え出した。

\*

止まれ。

インターフェイス接続回路は叫んだ。

だが、彼の下した命令は、まるで意味を為さなかった。意識と体が引き離されているようだった。

確かに自分の目で見ているのに、当の体は自分の望まぬ動きをしている。

救ってやらねえと。

そう体に訴えるように叫ぶと、稲妻のような衝撃が意識の中に流れ込んできた。それは激痛という形をとって、インターフェイス接続回路自身に襲い掛かる。

コイツハ俺カラ全テヲ奪オウトシタ。

自分に似た低い声が、頭の中にこだました。

これが、『体』の導き出した答え。

蝉脇によって停止させられた『体』が、瀬良を救おうとする道を拒んでいるのだ。

いや、あるいはそれによって起こるかもしれない『母親の殺害』に並ぶ衝撃を回避し、『精神』を守るうとしているのかもしれない。

俺はどうしたい？

瀬良を救いたいのか。

多重観測<sup>エクスプローラ</sup>たちを救いたいのか。

天秤にかけるまでもない。

瀬良ハ手ヲ取ラナカッタ。俺ヲ拒ンダ。ナラバ必ず、

アイツラノ幸セノ障害ニナル。

俺が守りたいのは、アイツらだ。瀬良は自らあの道を望み、その道を選んだ。

至つて、インターフェイス接続回路は抱えていた頭を放した。

…何をバカな考えに浸っていたのだろう。

自分は悪党だ。

破壊と殺戮によつて結果を紡ぎ出す悪党だ。

悪党ならば、自ら悪に堕ちた男を救う必要などない。

多くを望んだところで、あるのはありがちな幕引きだけだ。

エクスプローラ多重観測に志乃に曖、そして無関係な一般人。

自分が守るべきは、そう言った人間たちだ。

壊れ果てた<sup>レベル5</sup>超能力者などに、慈悲を与える必要などない。

誤差が修正される。

精神と肉体が、共通した目的を持って、その背に秘めた莫大な力

を行使する。

殺す。

再び世界が拓いた時、目の前にあったのは、恐怖を露にした顔で立ち竦む少年の姿だった。

守るために、殺す。

その刹那、栗色の髪の少年に渦巻く翼が襲いかかった。

\*

目が覚めた時、そこは見慣れぬ天井だった。

(……「」は)

妙にデジャヴを感じながら、インターフェイス接続回路は身を起こした。そこは簡素なベッドの上。

定期的に振動しているところを見ると、インターフェイス病院車の中らしい。十床のベッドが並んでいるが、インターフェイス接続回路以外は皆眠りについてい

るようだ。

「どうやら、上手くいったらしい。」

「……ちよつと？気付いてる？」

横から、澄んだ少女の声が聞こえた。接続回路インターフェイスがそちらに目を向ける。

「……ああ。ちゃんと伝わったみてえだな」

こきこきと首を鳴らして、ぶっきらぼうに言った。

澄んだ声の少女……夕凧カガリは、やれやれとでも言いたげに嘆息する。「外が騒がしいと思って見てみたら、あなたと変な羽の生えた瀬良が戦ってるんだもの。パニックに陥った患者さんたちを避難させるの大変だったんだから」

腕を組んで文句を言う曖。彼女はちら、と運転席へと通じるドアに目をやって、

「冥土ヘウンキヤンセラ帰しが9月30日の事件を受けて緊急時の対策を練っていたから、一人残らず避難させられたけど。あなた、ちゃんとそこまで考えてたの？」

「あの医者から直接、その辺の事ア聞いてたからな。後はオマエがちゃんと俺の思考を読み取るか、その下の病室から顔出してた多重エクス観測フローラが勘を働かせるかに賭けてた」

掌を開けたり閉めたりしながら、インターフェイス接続回路が言った。エクスクローラ多重観測と言ったとき、曖がわずかに眉根を寄せたことには気付かない。彼はすいと目を細め、

「……俺が倒れてた病室に、瀬良は居なかったか」

言われて、曖は少し考えてから、

「…本人は居なかったわ。すごい量の血が飛び散ってたけど。今はそれをDNA鑑定してるところよ」

「…そうか」

ということは、生死不明。

確かに作り出した『現象』が瀬良を貫いたように思えたが、曖昧な記憶しか残っていない。

ただ、『精神』と『肉体』の二つの意識が衝突し、インターフェイス接続回路自身が最初は瀬良を救う道を選択していたのは覚えている。

瀬良の境遇の一因が自分にあると思つての考えだったが、今思えばどうしてあそこまで彼に感情移入したのだろう。一因とはいえ、瀬良をそうした直接の原因は研究者たちだろうに。

インターフェイス接続回路は自嘲気味に鼻で笑い、沈黙が心地悪いのか目を逸らしている曖を見た。

「どうやら俺は、すっかりオマエらに毒されちゃってたみてえだな」

「…は？何の話よ」

目を瞬かせて、曖が言った。接続回路インターフェイスは取り合わず、瀬良に貫かれた脇腹に触れる。

…やはり翼を出した後は、傷が浅くなっている。

前回『未元物質ダークマター』に貫かれた時は完治していたのだが、傷の大きさや深さに関係しているのだろうか。

(このチカラについても、まだまだ疑問は残るな。前は動けねえ状態で蝉脇を倒そうと思って出てきて、今回は瀬良を倒すにはこいつしかねえと思ったら発動した。かと言っていつでも自由に使えるわけでもねえ。こいつに関しても、もう少し分析してえところだな)

一方通行と接続回路アクセラレータ。形や色は違えど、よく似た二人からよく似た現象が巻き起こった。

これは何を意味しているのか。

しばらく思考した後少年は考えるのをやめ、もう一度ベッドに寝そべった。



7-14 再臨 守り守られ (後書き)

どうも、櫻井です。

ようやく一区切りですね。病院を壊してしまったのは申し訳ないですが、日常編にもある程度の緊迫感が欲しいなと思っての展開です。

表向きはテロか何かのせいにしてくれるであろう上層部(笑)

本作での冥土帰しは原作よりも苦勞人です(汗)

翼は少し伏線を込めての登場です。というか、ヤケになった瀬良を打ち破る手段が翼しかなかったというのがあります…。

さて、次回からは19巻の内容に入っていきます。『ユニオン』での初任務やちよつとだけ挟まる小さな嵐(笑)やら盛り込んで、原作における『新部隊』の立場を作者の想像で書いていきたいと思っています。そのままじゃつまらないので若干違う部分もありますけど(笑)

それでは次章、お楽しみに！

**章末特典 キャラクター紹介？ 瀬良 惺皇（前書き）**

こいつは存在自体ネタバレになるので先に読まないようお願いします

章末特典 キャラクター紹介？ 瀬良 俐皇

年齢 17歳

身長 180cm

体重 61kg

血液型 A型

来歴：

3歳の頃に置き去りとして学園都市に入り、特力研にて調整を受ける。この時点で、計画の一役を担う『シークレットナンバー非公式の超能力者』とする予定が組まれていた。

4歳頃になると、『リフレクター反射物質』を扱えるようになり、不安定な演算ではあるものの小規模の反射シールドを形成できるようになったが、その強化途中に接続回路が入ってきたことで、『シークレットナンバー非公式の超能力者』の枠から外されてしまった。

以降は独房のような空間で食事とAIによる簡素な調整を受け、『インターフェイス接続回路が』シークレットナンバー『非公式の超能力者』を解雇されるまでの12年間、自身の人間と関わることなく過ごすこととなる。

容姿関連：

栗色の茶髪。セミショートの後ろ髪を跳ねさせており、もみあげが長い（初期一方通行を参照）。

アイドルばりの端正な顔立ちをしている。肌は接続回路ほどではないが白い。彼も接続回路同様薬物投与の影響を受けていて、目の色

は紫である。

性格関連：

上司や味方には優しく振る舞い、無関係な一般人にも同様だが、一度敵に回ったり邪魔と判断すれば冷酷に対応する。インターフェイス接続回路に対して凄まじいまでの憎悪を抱いており、彼には特に容赦がなくなる。自らの能力に絶対的な自信と矜持を持っており、そのためか達観したような口調が目立つ。

趣味・趣向

『シークレットナンバー非公式の超能力者』として上に従う以外には拘りが無く、彼の自宅にはベッドとテーブルしか存在しない。

能力：

レベル5の『リフレクター反射物質』。

ありとあらゆるベクトルを任意の地点で反射する能力。

そのため反射粒子に触れて自らを傷つけてしまうという危うさを秘めているが、能力に目覚めていく度にある程度のベクトル選択を可能としたようで、反射粒子は光を反射することはない。

反射粒子は原子クラスから自由に生成でき、既存の分子に組み込むことでその効果を発揮する。

『シークレットナンバー非公式の超能力者』として活動する裏で夕凧志乃の所属していた超能力研究機関にて演算公式の刷り込みが行われており、垣根帝督のデータが植え付けられている。

そのため『リフレクター反射物質』で翼（彼の場合は羽根）を展開でき、それはあらゆる攻撃を跳ね返し負荷を倍にして攻撃できる最悪の凶器となる。

弱点は『周囲に原子がない』状態。所謂真空空間では能力が展開できず、無力化されてしまう。

章末特典 キャラクター紹介？ 瀬良 俐皇（後書き）

CVイメージ：宮野真守

瀬良は作者としては主役にしたかったぐらい好きなキャラです。名前も他のキャラより頑張って考えました。

『瀬良』はアクセラレータの『セラ』からとり、『俐皇』は垣根の名前の帝督と合わせて『皇帝』になるようにしたり。思い入れのあるキャラでした。

8 - 1

疑問

不可解ナ情報

(前書き)

「ちつたあ休ませろってんだよ」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)にして『ユニオン』

の構成員

インターフェイス  
接続回路

8 - 1 疑問 不可解ナ情報

10月17日、AM3:18。

第三学区の片隅にそびえる高層ビルで、8人のスーツ姿の男たちが会議室に入っていた。

それは重役のみの最上位会議が行われるような豪華な作りをしており、事務的な印象を与えながらも確かな価値を感じさせる。

中心がくり抜かれた円卓を囲み、男の一人が口を開く。

「『外』との連絡はつきましたか？<sup>さみや</sup>峻宮」

呼ばれて、男と向かい合う位置に座っている眼鏡の男が、「ええ……」と頷いた。

「つきそいな、段階ですがね。まあ、意外にも我々の協力者は多いので。『あちら』も着々と準備を進めているようですよ」

峻宮がカタカタと円卓に設置されているキーボードを叩き、8人全員の目の前にあるディスプレイに情報を表示する。

それに簡単に目をやった所で、峻宮の右隣の若い男が息を吐く。

「装備品の提供をしてやった甲斐があったな。彼らの方は我々に協力する形なのか？」

「いえ、彼らは彼らで目的があるようです。まあ、我々は彼らのスポンサーのようなものですからね。早ければ今日にでも、作戦を決定できるでしょう」



俊宮はきつぱりと言い、眼鏡をクイ、と上げる仕草をした。テンプレートな動作ではあるが、知的な彼がそれをするのはなかなか絵になる。

「ああ…なんだったか、『ドラゴン』だったかな？彼らの目的というヤツは。そちらの調査は進んでいるのかね」

俊宮の左隣の初老の男が尋ねる。俊宮は首を左右に振り、

「調べてはいますが、何とも。まあ、彼らの目的が達成されたときに開示されることでしょう」

二人の会話が途切れるのを待つて、最初に発言した男が口を開いた。

「……では、概要を確認しましょう。皆さん、こちらのスクリーンをご覧ください」

\*

同時刻、同ビル内管制室。

そこに居た数人の社員らしき者たちは、カタカタとキーボードに指を走らせていた。

「くそ！どこからのクラックだ！」

「防壁破られました！セキュリティの管理ベースに侵入されます！」

「これはまさか……『上』からの……!？」

彼らは今現在上の階で行われている機密会議を知る者達である。どんな会議が行われているのかも知った上で、彼らに協力する構成員。つい先日まで順調に行えていたことが、突然崩れだしたのである。さすがの彼らも異常事態に焦燥を隠せない。

慌てた会話が行き交う中、不意に背後のセキュリティ扉が開いた。男が振り向く。

目に映ったのは茶髪の少女。見覚えのある制服に身を包み、年齢にそぐわぬ大人っぽい笑みを浮かべている。

「な、なんだね君は？学生が何故こんな時間に……」

責任者らしい男が前へ出る。少女は笑ったまま歩み寄り、そっと男の頬に触れた。

「夜のお仕事」

「はっ……?」

蠱惑的な口調で言う少女。その刹那、男はくると部下に振り向き、手にした銃を発砲する。

それらは確実にそれぞれの急所に命中し、管制室から人氣が失せる。男は最後に自分自身に発砲すると、無表情のままバタリとその場に倒れ込んだ。

少女は操作端末の前まで来て、じっと見た後キーを叩く。すると、監視カメラの映像がひとつまたひとつと消えていき、完全に端末が停止した。

少女は携帯を取り出し、

「第一管制室は占拠したわ。そっちはどう？」

『こつちも終わったとこ。あつちはどうしてるのかしら？』

電話の向こうも少女だった。茶髪の少女、夕凧曖はふむ、と顎に手をやって、

「慣れないポジションでぶそくってるかもね」

\*

そんな二人の少女が施設を制圧している中、すぐ傍のビルの屋上で少年は寝そべっていた。

耳が丸々隠れるほどの、男にしては長めの髪。その色は雨雲のような灰色で、肌は滑らかで白い。整った顔は曖の予想通りの仏頂面。

（なんだって俺がこんな裏方なんだ？）

現在の『ユニオン』で実質直接的な攻撃力を持っているのは接続回路のみであり、いくら高性能な精神操作系能力者二人だからと言って弾丸は弾けないし二人とも女だ、相手が戦い慣れた男ならば赤子の手をひねるがごとくやられてしまうことだろう。

…まあ、『心理掌握』の方は触れた瞬間に自滅命令を発信できるから心配ないとしても、だ。

彼は起き上がり、ちらと目標のビルに目をやった。

見たところ深夜のビルらしい閑散とした雰囲気だが、今まさに中では『ユニオン』による制圧作戦が決行されている。

総括理事会の下位機関、『協議会』のメンバーが内部情報を外部に流出させる準備をしているとして、殲滅命令がオーダーされたためである。

殲滅とくれば、蝉脇や瀬良、あの少年のような例外を除いて無類の強さを発揮する接続回路の出番のはずだ。

だがどういいうわけか、与えられた配置は施設を制圧した後での協議会メンバーの殺害。

接続回路はスイッチを押すだけでビルを消失させるような事すら可能な超能力者<sup>レベル5</sup>。それ故に、納得がいかないのだ。

一人不満を募らせていると、初期設定の素っ気ない着信音を上げて携帯が振動した。

表示番号は094番。

『ユニオン』における曖との専用回線だ。うんざりした調子で回線を繋げ、耳に当てる。

「首尾は」

『制圧完了ってとこね。「協議会」は気付いてないみたいだけど』

「そいつぁ都合だ」

インターフェイス  
接続回路は適当に応え、首のスイッチを軽く押した。警告を示す赤い光が、緑の光を塗りつぶす。

「つうこたア、もオ突ツ込ンじまツて構わねエンだな？」

インターフェイス  
接続回路は首をならして、ビルの縁に足をかける。電話の相手は小さな溜め息を漏らし、

『ええ。私とあの子は下で待機してるから』

ブツツ、と回線が切れたのを確認して、インターフェイス  
接続回路は携帯をポケットに突っ込んだ。

縁にかけた足に力を入れて、全身を空中へと投げ出し、足元で圧縮した空気を爆発させる。

刹那、細く白い少年の体はロケットのような速度で撃ち出された。

深夜の空を切り裂きながら目的のフロアの防弾ガラスを足蹴りすると、強固なガラスは粉々に砕け、その破片と共に華奢な少年が室内へと入り込む。

突然の襲撃      実際には数十分前からだが      に、何も知らない『協議会』は席から立ち上がって慄きながら、入ってきた少年に注目する。

「な、何者ですかっ！」

眼鏡の男が震えながらこちらを指差した。インターフェイス  
接続回路は薄く笑い、

「一足早エハロウインだ。菓子があツても悪戯トリックになツちまうがなア」  
その異様な立ち姿に恐怖したのか、男たちが揃って唯一の出入り口に向かう。だが、本来彼らを守るためのセキュリティが邪魔し、びくともしない。設定したはずのパスワードを入力しても『error』の表示が出るばかりだ。

「く、くそ！おい！開ける！緊急事態なんだっ！」

男の一人が携帯を取り出した。おそらく回線の向こうはふたつの管制室のどちらかだろう。

ともすれば、あのホステス女と女王様がまともに取り合うはずはない。

「生憎、テメエらがタノシイ世間話に花を咲かせてる間に、ビルのセキュリティは掌握させてもらったんでな。そんなに逃げ出したけりゃ俺が開けといてヤッタあっちから出てけ」

背後、砕け散って夜風が吹き込む窓を示す。

「く、くうっ！」

怯えていた男が突如動いた。手にしているのは黒光りする大型の拳銃。『スマートウェポン演算銃器』。赤外線を使用して目標の材質や硬度、そこまでの距離などを正確に計測し、即興で目標を撃破するのに最適な火薬を調合、合成樹脂の弾頭を形成する学園都市の誇る高性能銃器である。

「ほオ」

それを見て、インターフェイス接続回路が感心したような声を漏らす。さすがは総括理事会の下位組織。こんなインテリ集団でも物騒なモノを持っている。

引き金を引く相手の指を、インターフェイス接続回路は面白そうに眺めていた。

避ける仕草も、恐れる様子も見せず、ただただポケットに手を突っ込んで嘲笑っている。

数瞬と経たない内に、男の銃から弾丸が飛び出した。

本来であればインターフェイス接続回路の細い体をひしゃげさせるであろう弾丸。

だが、それは少年のわずか手前で弾かれ、その場で小さな爆発を起こしながら虚しく大理石の床に転がった。

『オフエンスアーマー窒素装甲』。

イス空気中の窒素を集め鉄壁の防御壁を展開する能力。その『インターフェイス接続回路』ならではの応用。

「な、な…っ!?!」

「さアて」

目を見開く男とその仲間達に対し、インターフェイス接続回路は爛々と輝く瞳を剥いた。

「ンじゃ、始めるとすツかア」

恐怖に顔を歪める男たちに、少年の形をした悪魔が襲いかかった。

\*

AM3:56、インターフェイス接続回路、夕風曖、メジャーハート心理定規の三人は救急車に偽装した『ユニオン』の車両に乗っていた。

日付変更と同時に集合した彼らは少々眠そうに欠伸びながら談笑とは言わないまでも世間話などをしている。『ユニオン』正式メンバーの内唯一の男性であるインターフェイス接続回路は、女精神操作系能力者二名の会話に耳を傾けることもなく、おそらく最後の付き合いになるであろう現代的な杖にもたれていた。

今日中には、兼ねてより計画していた高性能な杖を完成させられるだろう。

「それにしても、こんな夜中に集められても困るわよね。夜更かしは肌が悪いつて事知らないのかしら」

「今に始まった話じゃないでしょ？『スクール』って辰滝だかつて人を抹殺した時は4時頃活動してたらしいじゃない」

「私はその時非番だったから。垣根つて知ってるでしょ？彼とインターフェイス接続回路の二人だけよ、それをやったのは」

二人の少女の目が、同時にこちらに向けられた。

そして彼女らの目に映る、目元に刻まれた隈。不眠症というわけでもないのが、いつも彼の目元を飾って(?)いる。

「あー」、「そういえば」なんて言葉が聞こえて、インターフェイス接続回路は



舌打ちし、

「『協議会』のメンバーを皆殺しにしろっつう命令だったが、奴らの目的は結局『外』に機密を漏らすことだけだったのか？」

曖と心理定規は管制室から盗聴器で会議室の様子を盗聴していたはずだ。接続回路は事前説明時の話しか聞かされていない。ただそれだけの目的ならわざわざ自分たちが足を運ぶこともなかったのではと思うのである。つまりは、都合の悪い情報を伝えまいとする上層部の判断ではないかという疑惑だ。

曖と心理定規は顔を見合わせて、

「『協議会』自体の目的はそれだけだったみたい。『外』の取引先とのビジネスらしいわ」

心理定規が答えた。聞いて「そうか」と返そうとすると、曖が「ただ」と口を挟む。

「彼らと協力関係にあるって組織の目的は、また別にあるみたいだったわ」

「って事ア、オマエらはその中身を聞いたわけか」

少年の問いに、少女二人は頷いた。

「詳細までは分からないけど。何かのコードか、彼らはこう言ってたわ」

『ドブロン』

。

曖昧の口から出た聞き慣れぬ単語に、  
接続回路はインターフェイス眉根を寄せた。

どうも、櫻井です。

余裕があつたので1 - 1、1 - 2以来の同日連続投稿になります。次回の投稿は5 / 31日です。

本章からは19巻の内容に入るので、手始めに『ユニオン』の活動を描きました。原作の内容に入りましたら絹旗も少し出てきます。接続回路も『ドラゴン』の存在を知っておく必要があると思つたので今回はやや強引ですが『協議会』という組織を登場させました。最近最初の冷たい感じが抜けてきた曖の『心理掌握』の恐ろしさを取り上げた次第です(汗)

接続回路が最初裏方だったのはお節介女(小)のお節介によるものという裏話があったりします(笑)

何気に仲良くやってる『ユニオン』ですがどうぞよろしく願います。

今回は前々から話には出していたアレがついに登場します。

それでは次回、お楽しみに！

「昆虫の足と鳥の足。どっちがいい？」

夕風 曖の姉にしてインターフェイス接続回路の理解者

夕風 志乃

「鳥っ！絶っつ対に鳥ッ！」

レベル5の『心理掌握』を有する常盤台の女王様(他称)

夕風 曖

## 8 - 2 改造 変化する環境

10月16日、PM17:00。

第三学区の一画にあるホテルに、インターフェイス接続回路は居た。

昨日の一件を受けて、ヘウンキャンセラー冥土歸しの病院の患者は全員この建物に収められていた。緊急時の病室代わりに手配したもので、最高級とは言わないまでもそれなりの設備が整っており、半壊した病棟が修復されるまで代わりを担える施設である。

彼は弾力性の高いゴムのシートを床に敷き、その上で『作業』を進めていた。

彼の手の中にあるのは、現在使用している現代的な杖の盾のようなパーツに似た機材。貝殻のような流麗なフォルムのそれは、ライトグレーを基本色に、デザインの凹み部分にダークグレーの塗装がされており、その裏側には血圧計のそれを思わせる腕輪のようなパーツが取り付けられている。これで腕と杖とを固定するのだ。

そして別に組んでいた棒状のパーツを組み込み、念入りに固定する。その下端は槍頭のような形状をしており、とても杖の一部には見えない。

かれこれ30分ほど経過すると、インターフェイス接続回路は完成したそれを眺め、早速装着作業に入った。二つの腕輪に腕を通すと、それは辛くない程度に彼の腕に密着する。

普段は倒されている手の形に沿ったグリップを掴むと、ジャコンツ！という音を立ててスライド式の足部分が飛び出した。と同時に、肘の部分までの盾部分がスライドし、肘を丸々覆うほどの装甲が現れる。これは防弾素材を使用しており、サブマシンガンの攻撃程度ならある程度まで耐えられるようになっていて、不意打ちをされた

場合に関節を守るための処置だ。飛び出した槍状の部分が、『標的』として置いておいたダンボール箱を難なく貫く。打突用には十分な威力だ。相手の装備によっては刺突用にもなるかもしれない。彼がそのままグリップの頂部にあるスイッチを押すと、今度は槍頭の形をしていた下端のパーツが三方向に均等に開き、猛禽類の爪のような形をとった。

彼は立ち上がって、新たな『足』の調子を確かめた。爪の内側部分には調合した特殊なゴム性磁石が取り付けてあり、杖の内部に仕込んだ小型の重力感知センサーと合わせて爪が自動で地面を掴んで支えてくれる。

(まあまあだな)

満足そうに、インターフェイス接続回路は部屋の中を歩きながら継続して杖の調子を確認する。改造は思った以上に上手くいった。この他にもいくつかギミックがあるのだが、とりあえず必要な点は揃ったと言える。今度はベッドに座って、足部分と盾部分の収納作業を検証する。グリップのスイッチをもう一度押すと、ジャカント！と音を立てて足部分と盾部分がスライドし収納される。こちらも問題はなさそうだ。

そして彼は次に首にしたスポーツネットレス型の装置に意識を向けた。

実は瀬良との戦闘時にバッテリーが破損し、今装着しているのは今までのものとは違う新しい装置だった。形状こそ今までのものと変わらないが、その性能は大きく変化している。

以前は能力使用モードでは20分、通常モードでは48時間だったが、強化されたこれは能力使用モードの時間こそ変わらないものの、睡眠中などの脳の稼働率が低い時には『充電モード』に自動で切り替わり、1時間で通常モードの30分ぶんのバッテリーが回復

する。それに準じて能力使用モードもわずかだが延長できるようになったのだ。システムとしては睡眠中にも発生している体内電気の余分をこちらに流しているらしいが、学園都市の技術と前置きされなければイマイチ信用に足らない。

任意に切り替えができないのが欠点だが、単純計算で6時間眠れば通常モードの3時間、能力使用モードの1分弱が充電されると考えれば不便とも言えないだろう。これならばらく冥土ヘウンキヤンセラ帰しの元に戻れなくても問題ない。

時刻は18時近く。作業しっぱなしだったせいか、すっかり喉が渴いてしまっている。

(…確かロビーの端に何台か自販機があったな)

ぼんやりとそんなことを思いながら、少年は新しい杖について部屋を後にした。

\*

(……………退屈です)

病棟代わりのホテルの地下駐車場、病院車の傍で多重観測は見えざる敵と戦っていた。その手には妹達専用のライフルシンスターズが握られている。  
る。

昨日、10月16日に接続回路インターフェイスと謎の人物との戦闘に際し、病院内の患者や職員を退避させるのに尽力した彼女ら妹達はその後、6

人でローテーションしながら病院車の警護に当たっていた。

病棟代わりと言ってもホテルはホテル、中に本格的な手術設備などはない。そう言った処置が必要な患者のために、病院車は必要なのだ。

(……暇です)

と言っても、今は夕刻が近いとはいえ昼間。そんな時間にライフルを持って周囲に目を凝らす仕事など退屈以外の何物でもない。

『ミサカ13577号より伝達します、とミサカは交代の時間をお知らせします』

そうしていると、頭の中に直接声が入り込んできた。ミサカネットワーク経由で発信されたものだ。10月14日の誘拐事件後、二度とあのようなことがないように冥土帰しの手によってネットワーク同期率を強化されたため、今は95%まで上がっている。

『了解しました、とミサカは伝達内容を承認します』

エクスプローラ  
多重観測はネットワーク上に眩くと、銃身部分をスライドさせ、ライフルを鞆に押し込んだ。

さて、これからどうしようか。

常盤台の制服に身を包んだゴーグル少女の意識は、生きて帰ってきた少年へと向いていた。



\*

「……………んだあ？こりゃ」

インターフェイス

接続回路はロビーの端の自販機前で見た光景に、思わず呟いた。

自販機の数は一、二台。そのうち片方が、所謂『おでん缶』に占領されているのである。

別にまさかのおでん缶ブームが到来していることを避難するつもりはないが、こういつた宿泊施設の顔ともいえるロビーの端に、粹なフォントの『おでん缶各種取り揃えています！』との文字が躍っているのはどうなのだろう。というかその『各種』というのが問題で、学園都市製ジュースの代名詞ともいえるある意味完成されたセンスにおける『各種』なのだ。

早い話が、『待てその組み合わせは禁忌だろう』と万人に言わしめるであろう内容だ。

そんな物凄いインパクトを放つ古風なカラーリングの自販機をスルーし、隣の比較的まともな自販機の前に立つ。こっちは第七学区の自販機より幾分マシなラインナップだというのにどうしてこの自販機の隣人はあんなとんでもない十字架を背負ってらっしゃるのだろう。

彼はちらとおでん自販機に目をやって、

(……………『馬鹿な、何故皆私を無視するのだッ』)

再び正面のまともな自販機に目をやり、

(『お隣さんが滅茶苦茶なお陰で俺の売り上げがうなぎ上りだぜ！』……………って、何やってんだ俺は)

ついこの二台の自販機の気持ちについて考えてしまった。…台詞方式で。

くだらないと思いつながら小銭を放り、ミルク紅茶のボタンを押して出てきたそれを拾い上げた　その瞬間。

『おおッ！ついにッ！ついに私の魅力に気付いてくださる御人がッ！…！』

隣の自販機に人が立ち、出てきたモノを拾い上げたことで、自販機の歡喜が聞こえた気がした。

（オイオイ、居んのかよ）

まさかこの奇跡の現場に立ち会えるとは思わず、甘党少年インターフェ接続回路イは立ち上がり隣の人物を見た。

肩までの明るい茶髪に白い肌、少々無気力な印象を抱かせる大きな瞳。

そして、頭に装着した黒光りする軍用ゴーグル。

バイザーの色は鮮やかな紫色だ。

と、いう事は。

「……オマエ、どういう味覚してんだ」

「こちらこそ、イメージの斜め上に行くあなたの好みにミサカは意外と評します」

ミサカ10412号、エクストローラ多重観測だ。二人はとりあえず自販機たちの脇の壁に背を預け、購入したドリンク(?)を飲みながら(食べながら)語らう。

直接会うのは2日ぶりだが、随分と昔の事に感じてしまう。それほどまでに、このところは記憶に残る事件が連続していた。

「シスターズ妹達は病院車の警備してたんじゃないか?」

装置を交換した際に受けた医者からの状況説明を思い出して、インターフェイス続回路は尋ねる。本当は部屋かどこかで食べさせるべきなのだろうが、エクストローラ健気にも多重観測は器用に箸を使いこなしておでん缶の中身を口へと滑り込ませている。もとの病院での影響か、『ハバネロおでん』というチョイスだ。こう見えて辛いものが好きなのだろうか。

「いえ…モグモグ…必要な車両に限定しますと…ずじゅるっ…ミサカ達は2人居れば十分と判断され…んぐっ…現在学園都市に居るミサカ達6人で…ごくっ…」

「分かった。食い終わってから話せ」

言ってみると、エクストローラ多重観測は素直にそれに従い、食べることに専念し出した。難なくハバネロまみれのおでんの具を食べ進めていくその姿は、インターフェイス甘党の接続回路からすれば信じられない光景だった。場所によってはこれも普通の姿になるのだろうか。

だがまあ、妹達の警備シスターズというのが6人でローテーションハンキヤンセラされているものだとすることは理解できた。冥土帰しがそう判断したのならまあいいだろう　と、その刹那。

ホテルに入ってきた3人組を目にして、接続回路インターフェイスは目を見開いた。

一人はサングラスをした金髪の高校生。

一人はブレザーを肩に引っ掛け、目のやり場に困るようなコーデ  
イネートの少女。

そして三人目。

白と灰の縞模様の長袖シャツに、接続回路インターフェイスのものと良く似た杖を  
ついて歩く、彼と瓜二つの白い少年。

アクセラレータ  
一方通行。

どうも、櫻井です。

ついに完成しました改造杖。

一方通行が漏らしていた『武器になるかもしれないエ』を実装した接続回路の杖。まだもうひとつギミックがあるのですが、それはお楽しみにします。

いささか強引な装置の改造。これは後の展開を納得のいくものにするための処置です。ヒントは原作。

体内電気のくだりについては、先日テレビで目にしたため使いました。これまた無理がありますが学園都市のトンデモ技術ということでご勘弁を(汗)

自販機の会話を想像した接続回路。一方通行の猫会話予想より異様ですがお気になさらず(笑)

多重観測は病院車を含む病院の現状確認のために出てきました。勿論接続回路とからませるためでもあるのですが。

シヨチトルや滝壺もホテルに居ます。『グループ』の登場はそのためですね。今回はそんな『グループ』視点から始まります。

それでは次回、お楽しみに！

「ミサカの扱いについて作者はどのようにお考えなのでしょう」と

「ミサカは腹の中で密かにボイコットの計画を立てます」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号

10412号

エクスプローラ  
多重観測

「今回は重要なお知らせがあるから後書きは必ず見て頂戴」

レベル5の『心理掌握』を有する『ユニオン』の構成員

夕風 暖

第七学区の病院が半壊した。

そんな話を一方通行が耳にしたのは、召集を受けてキャンピングカーアクセラレータに乗り込んだ時だった。

今は打ち止めも居ないため焦ることはないものの、一度は治療を受け世話になった施設が壊れたというのは気分のいいものではない。

そんな第七学区の病院には『メンバー』の構成員にして海原光貴うなはら みつきのかつての同志、シヨチトルが入院している。彼女の見舞いに行っているであろう海原を追って、一方通行と『グループ』は病院が避難したホテルを訪れていた。

「まさか、病院が丸ごと狙われるとはな」

キャンピングカーから降りながら、金髪サングラスの少年土御門つちみかど元春もとはるはホテルを見上げて呟いた。

サングラスに阻まれてその瞳は見えないが、きつと眉をひそめているのだろう。

「どこの仕業かしら？ 特定の人間を狙うなら、ここまで大掛かりな手は避けるはずなのに」

それに続きながら、肩にブレザーをかけ長い髪を後ろで二つに結んだ少女、結標淡希が私見を口にする。

その後ろで二人の話を聞いていた一方通行は、胸の内でも同意した。

これほどの規模の破壊ができるのは暗部の人間以外には考えられ

ない。そしてもし暗部が動くとするなら、目標の人間だけを狙って行動する。他を巻き込み事を荒げるような手は打たないはずだ。

(コイツは連中のやり方じゃねエ)

一方通行はそう睨んでいた。と言つても、前を歩く二人も同じように考えているのだろうが。

「ま、全員無事に避難できたようだし、気にしなくていいだろ。今は海原拾う方が先決だしな」

土御門が言い、ピカピカに磨かれたエントランスの自動ドアをくぐる。一方通行もそれに続き、何気なくロビーを見渡した。

どちらかと言えば、作りはビジネスホテルに近い。特に目立った調度品もなく、おそらく元はオレンジ系の暖かい光を使っていたのだろうが白い蛍光灯に変えられている。移動させられた患者たちに少しでも早く慣れてもらうための処置だろう。

本来はチェクイン・アウトを行なうためのカウンターも、居るのはホテルの従業員ではなく看護師だ。土御門がそちらに向かつていき、シヨチトルの病室について尋ねるのを横目で見て、一方通行がロビーのソファにもたれようとした　その時。

(あれは……)

目に映ったのは、頭にゴーグルを装着した茶髪の少女。  
服装こそ見慣れぬ冬服だが、その姿は間違いなく妹達だった。

……自分が10031回殺した姿だ。

そういえば打ち止めが学園都市に居る妹達について、頼んでもい



ないのに説明した時に聞いたことがある。あのカエル顔の医者から、短い寿命を延長するための調整を受けているのだと。

となれば、このホテルに彼女が居ることは何も不自然ではない。

一方通行の目に留まったのは、そのゴーグルのバイザー部分だった。

10031回彼女らを見ているが、覚えている限りバイザーのカラーリングは緑だったはずだ。だがこの個体のバイザーは鮮やかな紫。2万体を同時に生産して、途中から装備品の規格が変わるというのも妙な話である。

疑念を持った一方通行の思考は、17日前へと遡る。木原数多と獺犬部隊を相手にしたあの日。

医者はあの自分と瓜二つの少年から、打ち止めを保護させるために妹達の一人を寄越すよう命じられた。つまりその妹達は打ち止めと一緒に居たはずだ。

そして打ち止めの電話からかけてきた男は、『常盤台中学の茶髪の女』と一緒に逃がしたと言い、それが空間移動系の能力者であるとも漏らしていた。

時間から考えて、打ち止めと一緒に逃がした茶髪の少女とは、接続回路が冥土帰しに寄越させた妹達に違いない。

空間移動系能力者の妹達。

にわかには信じ難い話だが、仮にそんな特別な個体なら他との区別がされていてもおかしくはない。

という事は。

(あの妹達があの日打ち止めを保護した個体…)

思わずじつと妹達シスターズを見てみると、彼女はこちらに気付き、彼女の傍アクセラレータにあった柱と一方通行とを見比べ始めた。

あまりに分かり易い挙動に、一方通行アクセラレータは嘆息する。

「うーん、やっぱり最強はメイドさんだにゃー。だがお若いナースさんというのにも底知れぬ文化と魅力を感じるぜい」

「…ほどほどにしとかないと面倒なことになるわよ…って、どこ行くのよ?」

二人の進行方向とは違う方向へ進む一方通行アクセラレータを見て、結標は声を上げた。白髪の少年は振り返ることなく、

「定刻までに車に戻りや問題ねエだろ? オマエらはさっさと海原探し出して連れてこい」

ぶつきらぼつにそう言った。「どうしたのかしら」、「まあ構わないだろ」などという会話が聞こえ、二人がエレベーターに乗ったのを確認すると、一方通行アクセラレータは柱の傍で立ち止まり、その陰に向けて口を開いた。

「も才出てきても構わねエ」

言っと、陰に立っていた人物が、死角から現れる。

灰色の髪。緋色の瞳。白い肌。

髪の色と長さ、服装と隈の有無を除いては、一方通行アクセラレータとそっくり

な少年。

インターフェイス  
接続回路。

「何だつてこんなトコに来た。それも『グループ』と」

インターフェイス  
接続回路の第一声はそれだった。一方通行は舌打ちし、  
アクセラレータ

「ウチの構成員を回収しに来た。オマエこそ、どオしてここに居る？」

質問に答えながら、問い返す。最後に直接言葉を交わしたのは10月9日。お互いの現状等、確認することは山ほどある。インターフェイスは辺りを見回して、

「とりあえず動くぞ。ここじゃ誰に話を聞かれるか分からねえ」

彼に続いて、一方通行は歩き出した。それとなく離れていく妹達  
アクセラレータ  
シスターズ  
に、訝しげな目を向けながら。

\*

「……つまり、こオいうことが」

『非公式の超能力者』とデュアルスキルシフト  
アクセラレータ  
多重能力進化実験、そして瀬良との戦い。  
その一通りの話を聞いて、一方通行は要約する。この状況に直接関

わる、瀬良との戦いに関して。

「その瀬良はオマエと同じ『シークレットナンバー非公式の超能力者』で、オマエの存在により長期に渡って閉じ込められ、そんな境遇に追いやったオマエを憎んでいた。そしてそれを知ったオマエは、敵だと判断したそいつを救おうとして、ココの連中を避難させざるを得ねエ状況に持って行っちゃまった」

インターフェイス  
接続回路は頷いた。

「……どうやら勘違いしちまってたようだな。最初は自分のことで精一杯で、他人の事なんざ考えられなかったんだ。そして、段々他人を守ることを知っていくうちに、瀬良も救えるんじゃないかと思つた。クソつたれだった俺をブツ倒した無能力者レベル0みてえにな」

その無能力者というのが誰なのか、アクセラレータ一方通行には分かる気がした。おそらく、自分の道も捻じ曲げた、あの少年だ。この少年は、その少年のようになろうとして、敵と思つた相手を救おうと考えた。他でもない、憎悪の核に居るといふのに。

「…クソ野郎が。甘エんだよオマエは」

敢えて、アクセラレータ一方通行は吐き捨てた。黄泉川を垣根に貫かれたあの日、同様にその道を歩きかけたからこそ。それによつて、大切なものを傷つけられたからこそ。インターフェイス接続回路は静かに目を向けた。赤と緋が、互いの色に混ざる。

「『悪党』なのか、『英雄』なのか。ハッキリしやがれ。つっても、俺たちはどオ足掻いたって前者しか道はねエがな。一人も死人が出てねエ以上どオこ言つても仕方ねエが、こつから先オマエがまた

同じように『悪党』を曲げる時があったら、その時は俺がオマエを撃つ。んな甘えに縋っちまう野郎に、妹達あいつらを守る片棒なんざ担がせらんねエからな」

「んなこたあ分かつてる。身を持って実感したからな。甘えやくだらねえ『優しさ』なんつうもんが、こつちの世界じゃ何の役にも立たねえことは」

腰掛けていた窓枠から下りて、インターフェイス接続回路は改めて一方通行と向き合った。アクセラレータ一方通行は部屋に取り付けられている時計を見て、

「もオ話すことはねエな」

覚悟を認めたのか、それとも単に時刻が迫っているからなのかは分からないが、白髪の少年が踵を返した。ドアに手をかけようとす  
る彼の背に、灰髪の少年の声がかかる。

「……『ドラゴン』」

「……！」

アクセラレータその単語を聞いて、一方通行の動きが止まった。それを見て、インターフェイス接続回路が言葉を続ける。

「『ユニオン』で仕入れた情報だ。この単語について何か知ってることはねえか」

アクセラレータ一方通行はしばらく間をおいてから、

「…さアな。俺たちも調べてるトコだ」

「そうか」

そんな短いやり取りを境に、一方通行が部屋から出て行った。

アクセラレータ

と同時に、携帯電話が震えだす。

たった二回だけのコール。

『召集』の合図だ。

ふっ、と、少年の口から笑みが漏れる。

（タイミングが良すぎるなあオイ。共同戦線なんつうことあねえだろうが、こりゃ何か大事でも起こってんのか？）

インターフェイス  
接続回路は扉に手をかけ、邪悪に笑った。

アクセラレータ

一方通行に言われた事と、自分自身で決めた覚悟。

二つを胸に秘めて、殺戮を生む引き金に手を添える。

（今度こそ守りきって見せる……この道から！）

誓いを胸に、灰髪の少年は扉を開けた。

華奢な少年から血みどろの悪党へと姿を変えて。

どうも、櫻井です。

今回は嵐の前のシリアス(?)で、悪党の道を行く一方通行から  
厳しいお言葉を頂いた次第です。再び完全な『悪党』を目指す接続  
回路にどうかご期待ください。

次回からはとうとうお待ちかねの19巻戦闘シーンですが、その  
前に一言。

実は昨日で中間テスト1週間前になりました、高校2年の身とし  
ては本気で掛からないと痛い目を見る状況です(汗)

ですので、テスト終了の6/10日(金)までは更新を停滞させ  
ざるを得なくなりました。こちらの勝手な事情で申し訳ありません  
が、6/10日以降は通常通りの更新に戻す予定で居ますので、ど  
うかが勘弁をm(――)m

以上、重要事項のお知らせでした。

次回も宜しく願います

8 - 4 序幕 始動スル組織 (前書き)

「ハハツ！テスト終りよおおおおう！！！」

自由を取り戻しハイになっている』とある化学の接続回路』

の作者 櫻井 亮介



インターフェイス  
接続回路、夕凧、メジャーハート心理定規の3人は『ユニオン』のチャンピオン  
グカーに乗って移動していた。

車内には例の男の猫なで声が響いている。

『今回はあなた方に、テロリストの処分をしていただきます』

単刀直入な言い様に、メジャーハート心理定規は小さく笑った。

「分かり易い話。それで？一体どこで何をしたのかしら」

『現在進行形で元気にテロ活動中ですよ。我々と同じ裏側の組織、  
名前は「スパークシグナル迎電部隊」といいます』

「スパークシグナル迎電部隊？」とメジャーハート心理定規が首を傾げて疑問符を浮かべる中、隣の  
曖が口を開いた。

「端的に言えば、中の情報を外部に漏らそうとする人たちを処分する  
専門部隊よ」

『彼女の言うとおりです。まあ、元々学園都市は外壁から妨害電波を  
発している中から外へ通信する手段は外部接続ターミナルを介さなくては  
不可能なのですがね。その隙間を縫って外と連絡をとろうとする者も勿論居る  
わけです』

なるほどね、とメジャーハート心理定規が頷いた。声は続ける。

『そして、今回その迎電部隊スパーキングナル…いえ、元迎電部隊スパーキングナルが少々厄介な占拠事件を起こした訳です。勿論、小火騒ぎ程度の立てこもりとは違いますよ。彼らは学園都市の持つ世界最大の粒子加速装置、「フラフープ」を占拠しているのです』

声がその名を口にすると同時に、テーブルが光を発し、そこに学園都市の地図が浮かび上がった。プロジェクターの類が見当たらないところを見ると、光源はテーブル面そのものらしい。

無味乾燥とした白と黒の地図だが、学園都市の外周、すなわち都市を囲む円形の壁が赤く色づいている。

『「フラフープ」は都市の外壁をなぞるように、地下200メートルの位置に構築されています。彼らは同じく地下にある制御装置を制圧し、リミッターを外した状態で装置を稼働。現在は陽子を光速の30%まで加速させています。想像はつくかと思いますが、彼らが遺憾に思えば臨界オーバーまで出力を上げ、装置もろとも都市の三分の一に放射線をばら撒くでしょう。爆発の地点までは分かりませんがね』

一通り話を聞いて、苦虫を噛み潰したような表情になる少年。彼はスピーカーに顔を向け、

「…ってこたあ円の中心、都市の中心部以外の全ての地域に居る人間に、被害が及ぶってわけか」

『そうなります』

「チッ」

あっさりと言う猫なで声に、インターフェイス接続回路は舌打ちした。

「でもこの加速装置、規模や活動から考えて相当電力を使うはずよね？直接発電施設から供給を断つことはできないのかしら」

その正面に座る曖が、テーブルの地図を見ながら言った。

『緊急停止の際にも対応の電力を消費しますからね。そのために自家発電施設も完備しています。元迎電部隊スパークシゲナルはそちらのルートで加速装置を動かしているんですよ』

話を聞きながら、心理定規メジャーハートはコンビニのビニール袋からペットボトルを取り出し、一口飲んで口を挟む。

「その元迎電部隊スパークシゲナルって、施設を制圧はしたけどそれから特に動きがないのよね？となると、何か『要求』があるんじゃない？」

そこまで言っつて、心理定規メジャーハートは曖と顔を見合わせた。

今朝の『協議会』の事件で、彼らが漏らしていた『ドラゴン』という単語。

そして、『あちら』という武器を提供していたという組織。

(タイミングといい何といい、『協議会』の話に出てきた組織と合致し過ぎている…)

それに接続回路インターフェイスも気付いたのか、隈の浮かぶ瞳を細めてやがて口を開き、

「要求があるにしろないにしろ、俺たちのやる事は変わらねえ。と

つとと済ませねえとより追い詰められんのは目に見えてる」

そう断じた。

二人の精神操作系能力者も頷くが、『おっと』という猫なで声に遮られる。

『……どうやら情報に誤りがあったようですな。申し訳ありません』  
「なんだと?」

『彼らのとつた人質は課外授業を行う予定だった小学生30人と引率の教師、運転手のみだったのでそちらは「グループ」に任せようと思っただけです…』

やはり『グループ』もこの件で動いていたようだ。 インターフェイス 接続回路は一人納得する。

『彼らはそれとは別に、学区全てを通過する地下鉄もジャックしているようです。こちらの人質は学生・職員など50名にも及びます』

三人が目を見開いた。声は続ける。

『車両は内部から自動操縦に切り替わっていて外部からのコントロールは不可能。要求を飲むまでの間、時間経過と共に人質を殺していくつもりでしょうね。全く異なる場所で人質を殺せる状況を作れば、片方が阻止されている間にも交渉を続けられる』

学園都市の地下鉄は外壁のそれと同じように円を描く形で線路が敷かれている。つまり、終点が存在しない。本来であれば深夜に規

模の大きな駅などで燃料を補給しなくてはならないのだが、被災時のために予備のバッテリーが積まれているため燃料切れを起こしても2日ほどの間は周回し続けられるのだ。もたもたしては、あの秘密主義の上層部がどんな強行手段に出るかも分からない。

「…………クソつたれが」

インターフェイス  
接続回路は忌々しそうにそう言うと、窓から見える夜の街に目をやった。慈悲を与えるなんて選択をする余地のないクズが、まだ居るのだ。

彼は向かい合ったソファに座る二人の少女に目を向けて、

「…………虫酸が走んな。馬鹿馬鹿しい茶番は早えトコ終わらせるぞ」

\*

二つの組織がひとつの暴走を鎮めるため奔走しようという時、インキヤンセラー冥土冥帰しはホテルの一室 仮の院長室でキーボードを叩いていた。

彼は手にした固定電話の子機を耳に当てる。

「…………どうして彼をこちらへ渡さなかったんだい」

彼にしては珍しい、怒りのこもった声だった。電話相手は動じない。

『彼の能力は学園都市の「調整」よりも外での「調整」の方が効果的だと判断されたからですよ。そもそも、心臓もまともに機能しない人間をどう治すと言つのですか?』

「関係ないさ。むしろ僕は君たちのやり方の方に異を唱えるね。間違っているよ。彼は人間だ。君たちが興味本位で弄り回しているものじゃない。それもそんな不確実な方法ではね。ただ治すことが目的なら、僕のところへ」

『治る治らないの問題ではないのですよ。今のまま息を吹き返しても意味などない。重要なのは、さらなる段階にシフトできるかです。あなたの手でできるのは精々現状維持ですが、我々の手法なら段階のシフトすら可能なのですよ』

「確率は未知数なんだろう?彼の能力を重要だと言つのなら、そんな方法は諦めて今すぐ日本に戻せ。失敗しては元も子もないんじゃないのかい?」

『構いませんよ。所詮彼は「必要」なのではなく「あれば得をする」程度の存在です』

減らず口、と表現すべきなのだろうか。電話の向こうの合成音声はいともあっさりと言つて退けた。

医者という立場にあり、人の命を何より優先する年配の男はわずかに眉間にしわを寄せた。

「:『彼女』を連れ戻したのも君たちなんだろう?」

『ええ。念のために、ね』

「失敗作と放り出しておきなから?」

『「必要」になりましたから。そんなものですよ。コンピュータが0か1でしか物事を図れないのと同じです。「必要」なら持つておく。「不必要」なら放っておく。「彼」は今のままでは「不必要」ですが、処置の結果次第では「必要」にもなるでしょう。「彼女」に至っては存在だけで武器になる』

「…時々、君たちが同じ人間なのか疑いたくなる時があるよ。命は玩具でもなければ道具でもない。君たちの決定は…」

『失礼。こちらも例のテロリストのせいで忙しい。医者であるあなたがどう思おうが構いません。余計なことは考えず、あなたはおとなしく一般人の命でも守っていて下さい』

あまりに適当な言葉を最後に、くぐもった声がピタリと止んだ。あちら側から回線を切断したのだろう。

ツー、ツーと虚しく響く余韻に、冥土ヘヴンキヤンセラー帰しは静かに目を閉じ受話器から耳を離れた。

（彼女達には知らせない方がいいんだろうね。『彼女』が見つかっただなんて……）

小柄な医者は震えていた。

『上』に対して、訴えかけることしかできない自分の非力さに。

どうも！櫻井です！

一週間のご無沙汰、如何お過ごしだったでしょうか！

とまあ、とある名パーソナリティのお言葉と前書きにて我らが世紀末帝王のお言葉をお借りしつつ、久方ぶりの自由を謳歌しています作者です（笑）

さて、今回から『迎電部隊』編に入ります。久しぶりの執筆だったのでいきなり大暴れ、とはせずまずは説明&伏線の回になりました。

僕としては楽しい原作へ絡める作業ですが、今回は原作での『フラフープ』内の人質立てこもりとは別に地下鉄にも迎電部隊を向かわせました。

ツッコミどころが多いかもしれませんが、これからも隔日更新もしくは連投もしていきますのでどうか広い心でお付き合いください  
(汗)

それでは次回、お楽しみに！



8 - 5

鎮庄

感ジル前ニ失ツタモノ

(前書き)

「狭エな。戦いにくいつたらねエよ」

『ユニオン』の構成員

インターフェイス  
接続回路

PM19:20、インターフェイス接続回路は地下鉄のホームで携帯を耳に当てていた。

「…今着いた。奴らの声明みてえなモンはまだ出てねえのか？」

インターフェイス接続回路の抱える悪いニュースとは裏腹に、ジャックされた地下鉄と逆の下り路線のここは普段と変わらぬ姿を見せている。電話の向こう、おそらく腕組みをしているであろう曖の澄んだ声、が耳の中へと入ってきた。

「ないわね。ま、火種を潰してしまうに越したことはないわけだし。あなたはそのまま手筈通りをお願いね」

「わかった」

通話を切つて、インターフェイス接続回路はたった今停車した下りの地下鉄に目を向けた。動くのはこの場に居る人間が全員乗り込むのを確認してからだ。

(…『協議会』の言つた組織がスーパーシゲナル迎電部隊のことだとすれば、奴らの要求は『ドラゴン』に関する何かだ。上手くすれば、連中からそいつを導き出すこともできるかもしれないねえが……)

インターフェイス寮やマンションに戻ろうと疲れた顔でなだれ込んでいく人々。接続回路は柱の傍からそれを見て、目を細めた。

(…クソつたれを野放しにしとくのは性に合わねえな)

扉が閉まるのを確認して、灰色の少年は動き出した。

\*

同時刻、上りの地下鉄の内部は極度の緊張状態にあった。

50人の乗客は4両の車両の吊革と乗降口付近の手すりに目隠しをされたまま固定され、それぞれの車両には覆面を被った男たちが手にした銃をちらつかせて立っている。

既に本来停まるべき駅を3つも過ぎ、男の一人が時計を確認する。

「時間だな」

先ほどもう一班の方が『穏便な』交渉を行ってから10分が経過した。この乗客はその『交渉』の中身など知りもしないが、大方の予想はついているのだろう。言った途端に、震えの大きくなった学生が居る。

「想定内ではあるが、一言も言ってこないとはな。いつ俺たちが早まった行動に出るかも分からんと言っのに」

嘆息しながら男が言った。さて、と適当にセーラー服の少女に銃を向ける。銃が向けられているのが分かったのか、少女の食いしばられた歯がガチガチと小刻みに音を立てた。

「始めるぞ」

男が言うと、彼の部下らしい男が懐から携帯電話を取り出した。その端子部には細長いケーブルが刺さっており、それは銀行強盗が使いそうな黒い大きなバッグに繋がっている。

男は耳にしたイヤホンから聞こえる『向こう』の様子に意識を向けた。

『アンチスキル警備員の詰め所を経由し、総括理事会へのホットラインも確立できました。合図一つでライブ中継可能です』

(……よし)

その作業はもう一班の仕事だったためそちらが済むまで始められなかったのだが、どうやら問題なく運んでいるらしい。交渉が済んだら列車を急停車させ、トンネルの天井を破って脱出、地上を目指す。この時間帯の地下一階は仕事帰りの職員に学生などが行き来しているため、途中で着替えを済ませ人ごみにまぎれれば迂闊に手は出せなくなる。

頭の中で逃走経路を確認し、男は言い放つ。

「送信開始だ」

携帯電話を介して『過激な』交渉が開始された。

\*

『インターフェイス接続回路。彼らが動いたわ』

耳に当てた携帯から漏れる少女の声は、今の接続回路インターフェイスには酷く聞こえにくかった。

「ハッ。ちつとばつか早えじゃねえか」

等間隔に設置された電灯が、少年の姿を薄暗いトンネルの中に映し出す。ビュオツ、という風を切る音が連続する。上りと下りの路線を仕切る壁の、2 m程度の間隙から吹き込む風だ。

『言ってる割には準備万端のようね』

悪戯っぽい声が聞こえた。とてもこれからテロリストを皆殺しにしようという組織とは思えない口調だ。接続回路インターフェイスは首の装置に指を伸ばして、そのスイッチを切り替える。

「黙ツとけ」

彼はその場で立ち上がり、能力のレーダーを起動する。頭の中に、壁の向こう天井のはるか上地下深くの情報インターフェイスが分子単位で入り込んでくる。それを物体単位に修正し直して、接続回路は体を支える第三の足を収納した。

彼が立つのは列車の上。強烈な風圧も、少年は物ともしない。

『それじゃ後は任せるわ。私たちは上が馬鹿な事言い出す前にジャミング作業しておくから』

「わアツた」

携帯を閉じ、インターフェイス接続回路はしばらく目を瞑り、今まさに『取引現場』と化している上りの列車へと意識を向ける。

(残り、130m)

逆算し、彼は目を見開いた。

タイミングを図り、移動する車両から跳躍して、わずか2mの間を潜り抜ける。

彼が上りのトンネルに飛び出すと、目の前に光々とライトを輝かせる上りの列車が姿を現した。

運転席には運転士と覆面の男。

全身に窒素の壁を展開した少年は、高速で接近する列車の窓を蹴破り、そのまま驚愕している男の鳩尾へと蹴り込んだ。

「ぐっ…ばあ…!？」

覆面の口元から赤い液体が染み出した。男の巨体が倒れ込み、運転席と客席とを仕切る扉を破る。刹那、強烈な突風が客席の方へと吹き込んだ。

通常であれば、その場にいた乗客も被害を受ける状況だろう。

だが、乗客は突風が直接吹き荒ぶ通路の隅でテロリストによって『拘束』されている。

故に。

「ぐっ…おあ…!？」

少女に銃口を向けていた男がよろめき、撮影をしていた男が倒れ込む。そこに襲い掛かる、灰髪の少年。

倒れた男の背中を踏み砕き、よろめく男に右腕を突き立てる。

ビチャビチャという汚物が飛び散る音が響く中、銃を構えた男がこちらの車両に入ってきた。

「貴様っ…!!」

インターフェイス  
接続回路は男が刺さったままの右腕を銃を構える男に向けて、改造した杖を展開する。

男の数m手前で、虚しく爪が開かれた。

「ははっ！何のつもり……ッ!？」

向けられた猛禽類のような足を見て、男は小馬鹿にしたような笑いを上げた。

しかし、それは脳天に突き刺さった激痛に阻まれ飲み込まれ、血を吹き出して倒れ込む。

インターフェイス  
杖の下端、三方に伸びる爪の midpoint から、細い煙が上がっていた。接続回路は突き刺さっている男を払って、二人の男と共にその場へ転がす。少年の指は、展開された杖のグリップ部分に添えられていた。

（上オ出来だな）

煙の上がる杖を収納し、インターフェイス接続回路は頭の中で確認作業を終了する。

本当はA I Mジャマーなどを使用された際の武器として搭載していた対人ライフル。試しに使ってみたが、思ったより役に立ちそう  
だ。

彼はそのまま、残りの『標的』を目指して進む　　が。

「動くんじゃないえッ!！」

「あア?」

発せられた大声に、インターフェイス接続回路は動きを止めた。目に映ったのは、  
覆面の三人組。その手には、2歳くらいの子供が居た。

「やめてっ! その子を放して!！」

後ろ手に手すりに縛り付けられた母親らしい女性が叫ぶが、男た  
ちは銃口を女性に向けて黙らせる。男の一人がこちらを向いた。

「俺たちの邪魔をするな第一位。このガキを殺されたくなけりやな」  
「やめてえっ!！」

涙を浮かべた母親が叫ぶ。インターフェイス接続回路はちらとそれを見て、男に対  
して鼻で笑う。

「三下が。そんな手使ッてる時点で、オマエらは上と交渉なンざで  
きねエよ」

「ふん。そんな挑発に乗ると思うのか? そら、セーフティの外れた  
拳銃がガキの頭に突きつけられてるぞ? この手を外して貰いたかつ  
たら、向こうで逝っちまってる連中のバッグと携帯を持って来い」

カツカツ、と男が訳も分からずにいる子供の頭に軽く銃口を当て



た。少年が舌打ちする。彼はちら、と背後に目を向けた。目線の先には、強風に耐えつつ運転席からこちらを伺う運転士。

「人違いばかりかパシリにしよオツてか？ハン、馬鹿馬鹿しいッたらねエな」

「言ったはずだ。ガキの命か機材を持つてく

」

男が言い終わるその刹那、50人の乗客を乗せた列車が大きく揺れた。

急ブレーキがかけられたのだ。

「な　　！？」

ギキイイイ！という甲高い音が、外から響いてくる。その最中、慣性に従いバランスを崩した男の手から、捕まえられていた子供が飛び出した。

接続回路は空気圧で急加速しながら小さな体を抱きとめると、流れの動作で男たち三人にまとめて回し蹴りを叩き込む。その慣性の方向に即興で窒素の壁を作り上げ、衝突させると少年は昏く笑って跳ね返ってきた三人を殴りつけ、その頭の中身だけを破壊する。

ドタツ、バタツ、という鈍い音が、車内に響いた。

「ひっ、ひいひい……」

少年の緋色の瞳に、奥で震える男を映す。手にしたライフルに指をかけ、こちらへと向けている。

「う、動くな！動くなっ！動い、動いたら…乗客、殺すっ！！」

ガタガタと震える声を聞いて、インターフェイス接続回路は嘆息した。抱えた子供を一瞥して、男に再び目を向ける。

「……動かなけりゃ、いいんだな？」

「な、なん」

男が聞き返そうとした瞬間、彼の足は車両の床に貫かれた。正確には、形と性質を組み替えられ、刃となった物体に。

「じっ、アアアアアッ！？」

混乱する男を見たまま、インターフェイス接続回路は子供を抱えていないもう一方の手で手すりを掴む。触れた物質を変換する『インターフェイス接続回路』を行使し、吊革を吊るすステンレスを捻じ曲げ、男の脳天に突き刺した。

「かつ…」という、悲鳴ともいえない断末魔と共に、ズルズルとステンレスの槍からずり抜け男が倒れる。

そこに残ったのは、閑散とした無音の空間。

能力のリーダーは目的の達成を明示していた。

目つきの悪い少年の腕の中には、キョロキョロと周りを見ている小さな命。彼は嘆息すると、後ろ手に縛られている母親の縄を裂いて、自由になった両手に赤ん坊を抱かせた。

「あ…ありがとうございますっ！ありがとうございますっ！」

目隠しをされたまま母親は何度も礼を言った。接続回路はそれを無視して、杖を展開しモードを切り替える。消費時間は2分と言ったところか。

何となく、インターフェイス 接続回路は我が子を抱える母親の姿を一瞥した。

愛おしそうに、小さな体を抱きしめ泣いている母親と、目を見開いてこちらを見ている子供。肉塊から這い出た赤い液体が、そんな二人に近づいていく。少年は一瞬だけモードを切り替えると、血を分解して男たちの傷を塞いだ。

彼は踵を返し、運転席の方へと歩いていく。

「上出来じゃねえか」

インターフェイス 接続回路は賞賛の声を漏らした。意識の先には、落ち着いた顔の運転士。彼は「いやいや」と笑った。

「『ユニオン』の方から連絡が回りましたね。危険だと言ったのですが、あなたが居るから大丈夫だ、と」

「そうか。どこの馬鹿なんだかな」

そうは言うものの、インターフェイス 接続回路は指示を飛ばした人間が誰か分かる気がした。車内の監視カメラをジャックしていそうな、何を考えているか分からない女。

「ここに居る下っ端はオマエだけか？」

聞くと運転士は小さく頷き、

「ええ。たった今連絡をしたところです。そのうち私と同じ下端が処理にくるか」と

「わかった。一応連中の生臭えニオイは消しといたが、客共にも音は聞こえてただろうからな。パニックにならねえように落ち着かせとけ」

少年の指示に、男は頷いた。少年はもう一度、客席側を振り返る。

突風に煽られたり急停車の慣性に流されたりと散々だったせいも、パニックと言うよりは皆グッタリしている。目隠しをされていても、その顔に浮かぶ疲労感は隠せない。

(吊革組に腕え引っこ抜けそうな年寄りが居なかったのが幸いだな)

インターフェイス 接続回路は破った窓に足をかけ、そのまま線路へと降り立った。

少し歩けば非常口の扉があるはずだ。

カチャカチャと杖をついて歩きながら、少年はふっと鋭い目を細めた。

男を貫いた冷徹な表情でもなく、運転士に向けた無表情でもない。

わずかに眉を下げたその瞳は、伏せられている。

「……………くっだらねえ」

薄暗いトンネルの中、少年は消えゆくような声で呟いた。

ふと、思ったのだ。

母親に抱き締められた子供を見て、そうされる道を自ら壊した自分と。

その親子に男の血が迫っていくのを目にして、それを汚されたくない<sub>と</sub>防いだ自分から。

それこそが、自分が求めたものなのではと。

非常口の扉に手をかけて、インターフェイス接続回路は舌打ちした。

どうも、櫻井です。

本日二回目の更新ですね。

割とあっさりしすぎだった地下鉄事件。調子出すための大暴れ回でしたが、如何だったでしょう。回し蹴りの後の窒素の壁は乗客を守るためのものでした。頭の中身だけを破壊、というのは『人間』という物体を対象として、それを形成する粒子の配列をバラした次第です。外見には無傷ですね。外傷を残さず殺害する、という今までにない殺し方を実践しました。

仕込み銃ですが…8割趣味です、ごめんなさい(汗  
強度とかに無理があることは分かっていますが、そこはラノベと  
いうことで…こればかりで申し訳ない(^^;)

さて、早くもひと段落してしまいましたが、次回もまだまだ迎電  
部隊の脅威は消えません。

次回もお楽しみに！

8 - 6 一員 モウ一人ノ構成員 (前書き)

「テロで避難つて…滝壺は大丈夫なのかよ」

元『アイテム』下部組織構成員

浜面 仕上

「お疲れ様」

地上に出て停まっていたキャンピングカーに入ってみれば、そんな声が聞こえてきた。

インターフェイスインターフェイスの接続回路はガシガシと荒っぽく頭を搔くと、赤いドレスの少女に目を向ける。傍に柔らかそうな茶髪はない。

「…一人か？」

だからどうというわけでもないのだが、何となく尋ねてみると少女は「あら」と面白そうに笑った。

「だったらどうするのかしら。ムラツとくるにはちょっと時間が早すぎない？」

「……………」

「…冗談の通じないやつ。メンタルアウト心理掌握ならコンビニよ。『あなたの格好じゃ目立つから』とか言ってるね」

要は買い出しに行ったわけか。一段落ついて緊張が緩んだように思える。

「ああそう。んで？コツチの様子をコソコソ盗み聞きしてやがったオマエらは何か掴んだのかよ」

反対側のソファに寝そべって、インターフェイスの接続回路が尋ねた。メジャーハート心理定規は「



「そうねえ」と天を仰ぎ、

「『グループ』の方からはそれっぽい話があったわよ。あなたとそっくりな第一位が暴れてる時の断末魔の中にね」

「……そいつは、『協議会』の話の裏付けになるような話か？」

「『明察』」

おどけたように言う心理定規。インターフェイス 接続回路はふむと顎に手を当てた。

「予想は付いちゃいたが。重要機密の『ドラゴン』の情報を拾って、そいつを外へ流そうって腹だったのか……」

そう言った事件を鎮める組織が、そう言った事件を起こすとは思えない。それを逆手に取った形だろうか。

「まあ結局、他にはめばしい収穫もナシなんだけど。乗客が全員無事なら良かったんじゃない？」

スジャーハート 心理定規はどうでもよさそうに言った。接続回路は胸の内インターフェイスで同意し、時計を確認する。

19時40分。そろそろ『解決』としてあの鼻につく猫なで声が聞こえてくる頃だが。音源となるスピーカーになんとなく目を向けたところで、ビニールが擦れる音が聞こえてきた。

「あら、帰ってきてたの」

いちいち確認するまでもないポブカットの少女。適当に買ってきて

たらしいコンビニ弁当が、ディスプレイにもなるテーブルの上に並べられた。

インターフェイス  
接続回路は起き上がり、目の前に置かれた弁当の蓋を開ける。

「…油モンかよ」

中身は唐揚げ弁当だった。特別嫌いと言っわけでもないので、口の中に肉汁の染み出る感覚はあまり好きではない。それも、気を利かせたつもりなのだろうが温められているので尚更ジユクジユクしそうだ。

「あなた痩せすぎなのよ。少しくらい脂肪つけた方がいいわ」

そう言う自分は野菜とシーフードのヘルシーな弁当をチョイスしている。

(…オマエだつて似たようなモンじゃねえかよ)

簡単に折つてしまえそうな腰回りや手足を見ると、能力の後押しもないぶん彼女の方が太るべきな気がしてならない。

「……それとこれ」

「？」

おとなしく唐揚げに口を付けようとした接続回路が顔を上げる。

そこにはいつもの冷めた顔つきの少女があり、手には見るからに甘そうなフルーツポンチの容器がある。

それを唐揚げ弁当の横において、彼女は心理定規の隣に座った。

「…俺が食つのか？」

「あなたそういうの好きでしょ？」

だからなんだ、と言いたくなるが、実際悪くないと感じる自分が居る。メジャーハート心理定規が「あら以外」と笑っているのを軽く睨んで、インターフェイス回路は唐揚げに口を付け始めた。

『おや、お食事中でしたか？』

まだ一口しか口を付けていないのに、猫なで声が聞こえてきた。

「…上手くいったのか？」

うんざりした様子でインターフェイス接続回路が言った。猫なで声は『ええ』と肯定し、

『元迎電部隊スパークシグナルの片付けをした後、警備員アンチスキルに全員を保護させました。縛られた際の擦過傷程度の傷はあるようですが、全員無事です』

「…よかつたわね」

正面に座った曖が笑いかけてくる。インターフェイス接続回路はどうでもよさそうに目を逸らす。

『ただ、まだ仕事は終わっていませんよ？』

「あ？」

『実はまだ彼らの残党が居るようでした。放置していたらまた何か

よからぬ事を企てるとも分かりません。総括理事会も彼らの殲滅を望んでいます』

総括理事会という単語を聞いて、心理定規はハアとため息をついた。  
メジャーハート

「そんなの名前を出されてもね。言っとくけど、それセールストークにしちゃ最悪よ?」

『ははっ。それもそうですね。あなた方に言ったところで大した意味にはなりませんか』

まあ、どの道指示には従うわけだが。  
曖はスピーカーに目を向け、

「それで?その可哀想なネズミさん達の居場所は掴めてるの?」

『こちらの情報網で掴んでいますよ。「グループ」の方にもあちらから連絡が回っています。その前に、あなた方には紹介しておかなくてはならない方がおりましたね』

\*

(ここに合ってるはずですけど…)

第一学区の地下で、毛先の跳ねたボブカットの少女、絹旗最愛は薄暗い空間を見渡した。

元『アイテム』の構成員にしてあらゆる攻撃から身を守り絶対の壁を形成する能力、『オフエンズアーマー窒素装甲』を有する大能力者である。レベル4

しばらく歩いていると、黒服の男達が待ち構えていた。中学生くらいの彼女に屈強な男たちが寄っていく図は、なにも知らない一般人なら通報していてもおかしくない光景だ。

だがこの少女は恐れ気もなく男たちを見回し、眉をひそめたその瞬間。

ピリリリッ、という携帯の呼び出し音が鳴り響き、絹旗はそれを取り出し耳に当てた。

『やーご苦労さん』

(……………?この声…)

聞き覚えがあるような気がした。というか、数秒と置かずその正体に思い当たる。

『この前の戦いで「アイテム」「スクール」「ブロック」「メンバー」って壊滅したよね、こいつときたら』

(……………)

予想通り過ぎて予想していたというのに肩透かしを食らった気分だった。この声も口癖も、よく、よく覚えている。

『そいつらの残存勢力集めて新チーム作るから、昔殺し合ったお仲間同士仲良くしてねー』

「……………は？」

突拍子もない最悪な思い出話に始まり、それを思い出させた上で、その一因の連中と仲良くしろ、と。

常識で考えれば有り得ないことだった。

『まああたしにとっても「スクール」の連中は特に気に食わないんだけどねー。お偉い様の決定だし仕方ないでしょ？』

「…あのですね。直接関わらないあなたが超他人事超対岸の火事と思うのは分かるんですけどね。実際に会って話すこっちの身にもなっつて」

『わかったわかった。時間がないから早いとこ向かっちゃってねー』

ブツツ、と一方的に回線を切られてしまう。

絹旗最愛は手の中の携帯を握り潰したい衝動に駆られたが、何とか抑え込んで目の前の男たちに向き直った。

「……………。とりあえず案内してもらえますか。超有り得ないとは思ってますけど」

\*

同時刻、『グループ』は迎電部隊スーパーシゲナルの残党狩りに動き出していた。

第三学区駅前の地下街には、土御門元春と海原光貴の姿がある。ちなみに白い髪の超能力者レベル5は地上で待機、赤い髪の大能力者レベル4は離れ

たところから攻撃の機会を伺っている。

公的に許可された外部からの客を招くためのこの学区は、基本的に造りが豪華であり、置いてある賞品も最高級のものばかりだ。故に、一般的な高校生が入るには少々勇気のいる場所でもある。土御門たちが居る区画はスポーツブランドの衣類を取り扱うテナントが集まっているが、特に興味もない人間からすれば『…桁、ひとつ多くね?』と思わせるようなものが並んでいた。

「……いるいる。装備は片手で使える軽量低反動マシンガン……だが、わざわざ重たいグレネードを取り付けて台無しにしているな。この分だと、思ったより簡単に終わらせられそうだ」

不敵な笑みを浮かべる土御門。それに対し、海原は小声で、

「……一応、密閉された空間でグレネードを使われる可能性を考慮してあげるべきでは?」

「……そうされる前に仕留めるさ。結標、ポイントBBEで標的を発見。そっちで確認できるか」

携帯を取り出して、土御門は赤い髪の大能力者へと回線レベル4を繋げる。

『さっさと全員ブチ抜きたいところよ。合図出してもらえないかしら』

焦れつたそうな声が聞こえ、土御門は懐から拳銃を取り出した。

「カウント5で始めるぞ。外周から潰していけ」

そうして携帯を仕舞うと、20人の迎電部隊は薄暗い通路を進んでくる。土御門と海原が胸の中で4秒を数え、飛び出そうとしたその瞬間。

トンツ、という静かな音と壮絶な絶叫と共に、テロリストの一人が倒れこんだ。

その肩からわずかに見える、金属製のコルク抜き。

結標淡希、『座標移動』の攻撃だった。

「な、なんだっ！？どうし……あがつ！」

また一人、『座標移動』に貫かれる。一人また一人と激痛に倒れる中、土御門と海原は通路から飛び出し、混乱するテロリスト達に発砲する。

パンツ！！パンツ！！と暗闇を引き裂く閃光と弾丸がその銃口から飛び出し、倒れこんだ内の二人を正確に貫く。どこからどのよう  
に攻撃されているかも分からなかったテロリスト達だったが、土御門と海原の登場によって後退を始める。銃弾という攻撃手段は、突  
如出現するコルク抜きよりかはるかに分かりやすかったからだろう。  
こちらへと発砲しながら後退するが、そうしてる間にもコルク抜き  
と銃弾は襲い掛かり、彼らの数は半分にまで減っていた。

その刹那。

テロリスト達の指が、もう一つの引き金、グレネードのトリガーへと伸びた。



「っ！」

発射される前にと狙いを定めるが、それよりも先に10の爆発物が飛び出した。10人のテロリストが、同時にグレネードを放ったのだ。

「跳べっ！」

土御門が叫び、通路横のウィンドウを叩き割ってその中へと飛び込むが、海原はそれに倣わなかった。

「…ッ！」

壁際にあるボタンへと走り、勢いよく叩くようにしてそれを押す。その瞬間、防火用のシャッターが勢い良く下りてきて、通路を仕切る。

壁の向こう側から、轟音が鳴り響いた。

無傷で済んだ海原だが、割れたウィンドウから土御門が飛び出してくる。

「馬鹿野郎！！テメエで攻撃する機会を減らしてどうする！向こうに時間を与えれば、それだけ反撃の火力を高めるだけだぞ！！」

怒鳴りながら、「すみません」と言う表情の海原と共にシャッターを回り込むが、たった数秒のタイムラグは、戦局を大きく変えていた。

回りこむ最中に聞いた、新たな爆音。怪訝に思いながら回り込んで彼らの目に映ったのは、砂煙の中ぼっかりと開けられた天井と、

崩れ落ちた瓦礫の山。

そして、無人の空間。

本来であればいるはずのテロリストが、一人として残っていないかった。

「クソッ！」

階段のように積み上げられた瓦礫の山を見て、土御門は毒づいた。

まんまと逃げられたのだ。

彼は携帯を掴み取り、地上で待機する少年へと回線を繋げた。

どうも、櫻井です。

今回はようやく、絹旗と『ユニオン』を絡めるための前座となりました。前書きの世紀末帝王は今回描くことができなかったので(汗 滝壺も接続回路や多重観測が生活しているホテルに入院しています。こんなことなら浜面サイドにもオリキャラを作っておくべきだったと反省しています。何らかの形で浜面は出したいと思っていますが。

原作では語られなかった絹旗の召集 心理定規と会話 逃走のくだりをやりたいと思います。後半の『グループ』は次回への伏線です。

今回は『ユニオン』と絹旗の絡み、及びどこかの超能力者と迎電部隊の戦いをお届けしたいと思います。

それでは次回、お楽しみに

8 - 7 逃走 結果次第デ (前書き)

「あ、あれ？さっき助けてくれたのはどっちだったけ…」  
学園都市の高校生 本名不明

連れてこられたのは、薄暗い駐車場だった。

一定間隔に立てられた1メートル四方のコンクリートの柱の伸びる先には、むきだしのバルブや金属パイプがごちゃごちゃと並ぶ汚い天井がある。辺りを見回しながら歩いていくと、一台の大型車両の姿が見えた。

鈍い色のキャンピングカーだ。

その前には、二人の少女の姿がある。おそらく新組織のメンバー……『スクール』や『メンバー』の構成員だろう。絹旗はすたすたと歩んでいき、二人の少女から2メートルほどの距離で立ち止まった。そして、眉をひそめる。

「……『スクール』の……」

瞳に映ったのは『心理定規』<sup>メジャーハート</sup>を冠するドレスの少女。どうやら、『電話の女』の話は本当だったらしい。絹旗の胸の中で何かが湧き出す中、ドレスの少女はくすりと笑った。

「お久しぶり。最後に会ったのは第三学区<sup>三</sup>のレジヤ<sup>二</sup>ー施設だったかしら」

「……！」

10月9日の暗部闘争にて、『スクール』が『アイテム』を襲撃

した時のことを話しているのだ。

あの時を境に、『アイテム』は壊滅状態に陥った。

滝壺理后は浜面仕上を守るために『体晶』を使い、もう二度も能力を使えない体になってしまった。

麦野沈利は激情に駆られ、滝壺理后を食い潰してでも垣根帝督を殺すことを選び浜面仕上に仕留められた。

フレンジーセイヴェルンも『スクール』に寝返ったことで麦野によって殺害された。

『アイテム』を取り巻く変化のほとんどは、『スクール』が根幹にある。もちろん、その核に居たのがこの少女ではなく、第二位の『未元物質』<sup>ダークマター</sup>だと言うことはわかっている。この少女に怒りをぶつけても何にもならないこともわかっている。

だがだからと言って、それなりに、『仲間』と呼び合えるほどには親しくしていた自分達を引き裂いた組織の一員と、仲良くできるはずはない。

絹旗は衝動を抑え込んで、握った拳を静かに開いた。落ち着くように体に促しながら、口を開く。頭の中ではもう、新たな行動を起こす計画が練られている。

「……そうですね。あなた達だけなんですか？新チームのメンバーって」

<sup>メジャーハート</sup>心理定規から目を逸らし、見覚えのない茶髪の少女に目を向ける。どこの組織の人間だろうかと少し疑問に思うが、今の絹旗には関係

ない。突然話を振られたからか、少女は少し目を泳がせた後にくこりと笑いかけてきた。

「ホントはもう二人居るんだけどね。実戦力の一人は先に『仕事』に向かったわ」

「スーパーシグナル迎電部隊っていう連中を超皆殺しに行ってるわけですよ？  
そういう事なら私も超サクツと行ってきてしまいたいんですけどいいですかね」

ずいつ、と曖へと詰め寄る絹旗。詰め寄りながら、キャンピングカーのサイドミラーで背後を確認する。案内してきた男達はいない。絹旗の回収をこの二人に任せただろう。そうと分かれば話は早い。

「え…いや、これから私達も行　　ってちょっと、絹旗さん!？」

茶髪の少女が身を引くのと同時に、絹旗はぐるりと体を半回転させてもと来た道へと駆け出した。「どこ行くのよっ!？」という少女の声を置き去りにして、ダダダダッ!!と走っていく。

そんな絹旗と少女を見てから、心理定規は片手をメガホンのようにして、

「浜面仕上によろしくねー」

とだけ言ったのが、猛ダッシュで切り裂いた空気を通じて耳に入ったのを境に、絹旗は広い駐車場から消え去っていた。

\*

「ちょっと、追わないの？」

駆け去っていく少女を平然と見送る心理定規に、メジャーハート 曖が言った。心理定規は「何が？」とでも言いたげな目をこちらへ向けて、

「別に構わないですよ。向こうも迎電部隊を相手取る気で見ただし、下手にギスギスしてる中で適当に働かれるよりか効率的だと思っわよ？」スパークシグナル 『アイテム』の『電話の女』経由で連絡もとれるわけだし」

まあ、正論ではある。だが曖としては、場合によっては絹旗が窮地に立たされる可能性も考慮せずにはいられない。

「命令では『回収』だったけど？」

「まあね。そこは絹旗最愛次第でしょう。結果オーライでちゃんとやってくればどうにでもなるし」

「……楽観的ね」

「ポジティブって言うてくれない？」

言い合いながら、キャンピングカーへと乗り込む二人。運転手へと合図してから、ソファへと腰かける。いつもなら灰髪の少年が寝そべっている向かい合わせのソファには、メジャーハート 心理定規が座っていた。どこか不満そうに目を細めて、曖は背もたれに寄りかかる。

(どうせこうなるんなら、最初から彼に付いて行くべきだったかしら)



今頃は残党達と対峙しているのだろうか。

ゆっくりと、キャンピングカーは暗い駐車場から動き出した。

\*

(絹旗最愛…)

夜の第三学区を歩きながら、インターフェイス接続回路はぼんやりとその人物について考えていた。

『オフエンスアーマー窒素装甲』を操るレベル4大能力者。インターフェイス接続回路の自動演算公式のベースになった『暗闇の五月計画』に参加していた少女。かつては『アイテム』に所属していたとのことだ。

(そういや、『ユニオン』の顔合わせん時に説明されたな。それとショチトルだかつてのも一応メンバーらしいが…)

そちらは『メンバー』の構成員であるという以外に情報がなく、どんな能力を使うのかも知らされていない。居場所すらインターフェイス接続回路には分からない。改めて、まともに活動できる有力な戦力が女しか居ないことに嘆息する。

(さてと、そいじゃ……)

インターフェイス  
接続回路は足を止め、さしかかった大通りを見据えた。そこに見えるは、黒煙を上げて裂けた地面から現れる黒ずくめの男たち。

スパークシゲナル  
迎電部隊。

『グループ』によって地下街から追い出されたテロリスト。

少年は氷のような無表情で、首のスイッチに手を伸ばした。その身に宿る悪魔スケルの力を呼び覚まし、拡大した意識の中で一般人の位置を把握する。爆発が起こったのもあって、皆テロリスト達から距離を置いていた。

好条件だ。

(始めるとすツかア……！)

ゴアッ！！という轟音が響き、少年の体は烈風と共に突進し、黒煙を払って男たちの前に飛び出した。驚愕する男たちに、青白い電流が襲いかかる。

「ぐがあっ!?!」

不意を打たれ、男の一人が悲鳴を上げた。焦げ目のついた覆面を焼き切り、露わになった肌へと指を差し込んで分解公式を作用させる。

その瞬間、男の首が不自然な方向に折れ曲がり、蒼白な顔で固いコンクリートに倒れ込んだ。

「なに……!?!?くっ!」

その様子を見た別な男が、懐から手榴弾を取り出した。高速で迫る接続回路インターフェイスに、素早く投げつける。それは接続回路インターフェイスの体にぶつかり、刹那の閃光と共に熱と破片、そして爆炎を撒き散らした。

普通の人間であれば即死。もしくは皮膚が抉れて瀕死の状態になるところだが。

学園都市最高峰の悪魔はそんな攻撃も物ともせず、空を切つて男の体を吹き飛ばし、数メートル先にあるバス停の看板に叩きつけた。

緋色の瞳が照準を合わせるように、新たな標的を映し出す。

「ひっ……」

ドァッ！という音と共に、爆風が発生し少年の体を押し出すと、彼は瞬く間に男の目の前に迫っていた。

そこには冷酷な表情があった。躊躇のようなものは感じられず、男が恐怖に縛られている間に細い腕ごと拳が振り上げられる。強烈な殴打は男の顔面を潰し、そのまま後頭部へと突き抜けた。動作の流れで振り回された少年の脚が、向かう先に居た男の膝を薙ぐ。

「ぐぎゃあああつー！」

文字通り『切断』された男は血と悲鳴を撒き散らしながらドサリとその場に『落ちる』。

腕を男から引き抜いた少年は、サブマシンガンを構える男に目を向けた。

「う、う……」

覆面に阻まれて読むことの難しい男の表情。しかし、震える体と声からは、確かな『恐怖』が感じ取れる。接続回路インターフェイスが踵を上げ、地面との隙間に誘い込んだ空気を爆発させる。それを見る前に、男は駆け出していた。向かう先には、集まってきた人だけがある。

(…クソ虫が)

胸のうちに毒づいた接続回路インターフェイスは、思い切り地面を踏みつけた。向かう意識はコンクリートの地面全体だ。

(裂けるー!!)

少年の頭の中で組み上げられた公式が、脚から地面へと伝わっていく。

その刹那、少年の右足から男の走る先にかけて、まるでケーキが何かにナイフを入れるようにすんなりと、地面が裂けた。

「なっ……!!?」

足場を失った男が、地面の裂け目に落ちる。脇から上だけが地面から出ている状態で固定される。恐る恐る振り返る頃には、灰色の髪は目前に迫っていた。

「……クソツたれの三下が」

苦虫を噛み潰したような表情で、接続回路インターフェイスが吐き捨てる。『裏』の人間が『表』の人間を盾に取るなど、彼は許さない。無表情のまま

ま、彼は杖を展開しその鍵爪で男の頭を掴んだ。

「な、なにをぶがあっ!!」

男が言う前に、少年は引き金を引いた。三方向に伸びる爪の midpoint から放たれた弾丸が、男の側頭部から脳の中へと入り込む。開けられた風穴から得体の知れない液体が流れ落ちるのを確認して、インターフェイス接続回路は意識を男から周囲に向ける。

(上がったきた連中はこれで全部か? いや…)

倒れているのは6人。猫なで声の報告では、地上に脱出した迎電スパーク部隊は10人とのことだが…。

見れば、そこには結構な野次馬が居た。攻撃を開始した時点ではここまで多くなかったのだが、どうやらひと暴れたのが災いしたらしい。それを見て、インターフェイス接続回路は結論を出す。

(群集に混じって晦ましやがったか…。チツ、一度逃がすと面倒臭エ…)

彼は『ユニオン』との通信回線を開き、単刀直入に尋ねる。

「残りはどこだ」

『野次馬に混じって逃走したようですね。全く、少しは隠蔽工作をするこちらの身にも…』

「さっさと連中のトレースを済ませろ」

耳を貸さず、インターフェイス接続回路は踵を返して殺戮の現場から離れていく。

『盗難車を使って12号線を北上しています。そちらに我々の車両を先ほどお送りしましたので、それにお乗りください』

「…わかった」

顔を上げると、丁度キャンピングカーが停車した。そして、静かに意識を後ろへ向ける。

「オマエも乗るか？」

振り向かずに放った言葉が誰に向けられたものか、第三者が見ればわからないだろう。だが、それでも声は返ってきた。

「『盗難車を使って12号線を北上』…それで十分だ」

「そうかよ」

返ってきた言葉に応じて、インターフェイス接続回路はキャンピングカーの扉に手をかけ、横目で歩道を見てみるが、そこには誰も居なかった。彼はフツと小さく笑うと、二人の少女の待つ車内へと入り込んだ。

どうも、櫻井です。

今回は絹旗・曖サイドと接続サイドでした。

原作では残念ながら簡単な描写だけでしたが、こんな感じだったのではと僕なりに構築してみました。イメージと違っていたらごめんなさい。

新約見るに絹旗は麦野のこと悪く思っては居ないみたいですし、やっぱり『アイテム』での日々は大切なものだったんだろうなと思いながら書きました。で、そうなってくると当然湧き上がるものも湧き上がるわけでして。

「浜面によるしく」の下りはどういう文脈にしようか本当に悩みましたが結局この形になりました。心理定規がこう言ったのは『ユニオン』の手は借りない絹旗が手を借りる人物として浮かんだのが浜面だったからですね。能力で浜面との間に絹旗が設定している距離を知ったからなのかはご想像にお任せします。

接続回路は残り少ない迎電部隊を荒削り。杉谷と一方通行が出逢うために4人残しました。次回はサロンの戦いになるのかな…？

次回、お楽しみに！

8 - 8 二手 不審ナ動キ (前書き)

「なんか俺、やっとまともに登場できた気がするな……」

元『アイテム』の下部組織構成員 浜面 仕上

「オマエはアイツと接点ねエからな」

『グループ』の構成員 アクセラレータ 一方通行



『ユニオン』のキャンピングカーは夜の街道を突き進んでいた。

二つのソファが挟むディスプレイにもなるテーブルに、現在彼らが進んでいる12号線を中心にした地図が表示される。カーナビを想像すると分かり易いだろう。

「…当てもなく動いてるようには見えねえな」

中心の二等辺三角形の形をしたアイコンの数cm先、縮尺を無視すれば100メートル先にある赤いアイコンを見て、インターフェイス接続回路が呟いた。

「そうね。心理状態から推測すれば片端から角という角を曲がって振り切ろうとしそうなものだけど、彼らまったく道を変えないわ。何か策があると見ていいわね」

口に手を当てて曖が言うと、メジャーハート心理定規が口を開いた。

「どこかに本拠地があるってことかしら。もしそうなら、逃げ込まれる前に仕留めたいところだけど…」

「そいつをするには一般人の車が邪魔になるな…」

その時である。

三人の耳が、バラバラバラバラッ、という羽音を聞いたのは。

「…」の音」

メジャーハート  
心理定規が顔を上げる。インターフェイス 接続回路は地図に目をやりながら、キャンピングカーのサンルーフから空を見た。下校時刻を過ぎた深い藍色の空に、溶けるような黒塗りの物体が高速で車の上空を過ぎていく。

眉をひそめた。

「あいつア確か、H S A F H - 1 1 だな…」

聞いて、曖も怪訝そうに眉をひそめる。

「『六枚羽』…？スパークシグナル 迎電部隊を狙っているの？」

『六枚羽』は学園都市製の最新鋭無人戦闘ヘリで、都市の防空部隊が管轄している。最新鋭というだけあって、あの型はマツハ2.5、時速3000kmくらいは出せる代物だ。装備もあつという間にビルを倒壊させてしまうようなものが揃っている。

「いや。方向からするとそうじゃねえ。あの『六枚羽』、バイパスの方に向かってやがる」

言いながら、インターフェイス 接続回路は地図へと目を戻す。目を向けるのは、12号線のはるか後方を横切るようにして存在する高架道路。

「あんな大それたもの使うような大事が、ここ以外でも起こっているってことよね？」

メジャーハート  
心理定規が二人に目を向けた。インターフェイス 接続回路も曖も顎に手をやって考

えるが、やがてほぼ同時に手を外した。黙って、インターフェイス接続回路はサンプルをこじ開けて車の屋根へと移動する。

「オマエらはこのまま連中を追え」

分かり易い指示だった。メジャーハート心理定規は立ち上がり、サンプルを見上げる。

「ちょっと待って。あなたどういふつもり？それに今は……」

「もオ一人俺みてエな馬鹿が連中を追ッてる。連中ブツ潰せると判断すりゃ奴が動くはずだ。俺もすぐに戻る」

それだけ言い残して、少年が跳躍した。

そんな彼を見送って、ドレスの少女が嘆息する。

「…本当に連帯行動ができない人ね」

見上げたままそう言うと、隣の曖はノートパソコンを立ち上げ、なにやらコマンドを打ち込み始めた。

「今に始まった話じゃないわよ。それより……」

「？」

メジャーハート心理定規が視線を戻すと、そこには不敵な笑みを浮かべる曖が居た。彼女の目の前のパソコンには、何やら上空から見た第三学区の映像が映し出されている。画面の隅には『LIVE』の文字。重要なように表示されているタブには、同じく第三学区の地図が映し出されており、交差点や道の途中には緑の点が表示されている。

「やるだけやってみましようか、彼らがどこかに逃げ込む前に」

ドレスの少女が小首を傾げる中、曖はパソコンのEnterキーを押した。

\*

「うおおおおあああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああっ!?!」

第三学区に入ったばかりのバイパスで、一台のファミリーカーが峠の住人さながらのドリフト（のようにも見える動き）で、バイパスの別れ道へと入り込んだ。

ギャキキキイイツ! ! ! と、無理な注文に激怒するが如く甲高い音をタイヤが振りまく。それをなだめるようにして、叫んだ茶髪の少年が強引に引き上げられたハンドブレーキのレバーを戻した。少年は卓越した状況判断能力をフルに使い、見事なハンドル捌きで車を安定した状態に戻すと、助手席に向かって声を荒げる。

「何がしたいんだお前! ! !」

少年の名は浜面<sup>はまめ</sup>仕上<sup>じあげ</sup>。かつては『アイテム』の下部組織構成員として活動し、さらに遡るとスキルアウトのリーダーをしていた男である。

「超生き残りたいに決まってるでしょう。浜面、この大通りを直進。

片側三車線の大きな道ですが、極力車線変更もしないで超真っ直ぐ進んでください」

浜面の大声も物ともせず、助手席に座る少女はあっさりと言ってのけた。浜面は言われた通りにしながらも、涙目になりたいのを抑えて口を開く。

「ひよつとして俺、知らない内にまたヤバい事に首突っ込んでないか？なあ」

彼がこう言うのも無理はない。10月9日の暗部闘争から入院していた『アイテム』の構成員の一人、滝壺理后が本日めでたく退院することになり、その退院祝いパーティを開こうと決めた懐かしい2時間程前。新組織結成がどうたらで第三学区で合流するはずだった少女絹旗最愛が30分と経たず帰ってきた30分前。

そして今は、おそらく命令無視で回収される羽目になっている絹旗最愛に協力という形で巻き込まれ、武装したへりに追いかけて回されている。

そんな不条理の渦に飲み込まれている浜面だったのだが。

「超いつもの事じゃないですか。とにかく超真っ直ぐです」

主犯絹旗最愛は真剣にけろりと言ったのけた。その通り、その通りなのだが。

「大丈夫なのかよ。こりゃ無駄を承知で蛇行運転して狙いを逸らそうとした方がいいんじゃない？……ん？」

考えながら浜面が道なりに直進していると、バックミラーに『六枚羽』が映り込んだ。

(……変だな)

先ほどより高度を落としたことに疑問を抱くが、その正体はすぐに分かった。

第三学区に入り、高層のホテルなどのビル群にさしかかっているのだ。おまけに壁面に設置された看板などの障害物や浜面たちの走る高架道路と交差するさらに上の高架道路があることから、空を飛ぶ『六枚羽』は低空飛行せざるを得ない。

だが逆を言えば、『六枚羽』のAIも早急にカタをつけようとしてくるはずだ。

「おい絹旗、やばいんじゃないのかこ　　れっ!?!」

ちら、と助手席に目をやった浜面だが、彼は自らの目を疑った。

目に映ったのは、助手席から身を乗り出して　　もはや足以外を車外に出した箱乗りのような状態で　　拳銃を後ろに向けている絹旗の姿。

そんな彼女は、車と同じスピードで空を切っている訳で、それはそれは相当な風圧をその身に受けているわけで……。

「すごっ!すごっ!これはすごい!すごいパンツ!絹旗!お前それはチラッとかヒラッてレベルじゃないけどパンツどうするっ!?!」

思わず高らかに叫んでいた。すると、浜面の鼻先を弾丸のような

スピードのまさしく弾丸が通過し運転席のガラスに穴を開ける。

「……。超ひたすら前を向いて運転に集中してください」

「イエス！！でもパンツ！！」

変なテンションになった浜面は急に元気になって前を向いて運転し始めた  
その刹那。

「絹旗っ！！」

バックミラーに見えたモノを見て、浜面は叫んでいた。

『六枚羽』から、追尾型のミサイルが放たれたのだ。

「わかってます！！」

それを見た絹旗も少々上擦った声で返事をしながら、狙いを定め銃弾を放つも、追尾型ミサイルはまるで狙いを逸らすように不規則に動き出し、放った弾丸は虚しく空を切っていく。ミサイルとの距離はもう2メートルとない。

「浜面駄目です！脱出

！？」

諦め、そう叫びかけた瞬間。

視界の端から、灰髪の少年が飛び出した。

(な　　?)

思わずそちらに目を向けると、少年は高速で道路を横切るように移動し、ファミリーカーとミサイルの間に入り込み、その手でミサイルに触れる。

その刹那、爆発すると思われたミサイルが跡形もなく消え去った。

絹旗が呆然としている間にも、少年は動く。

低空飛行していた『六枚羽』に組み付き、そのプロペラをもぎ取って飛行能力を奪い取り、そのまま道路を滑走させる。確かに火花は散っているはずなのに、翼をもがれた戦闘ヘリは形をそのままに滑り続け、やがてその場に静止した。

あれほどの装備のヘリならば、いや、例えツアーか何かの一環のヘリコプターだったとしても、爆発炎上しているはずである。

一体どんな能力をどのように使えばあんな風に爆発させずに無力化できるのだろうか。思わず考えにふけりそうになった絹旗だが、我に帰って運転席の浜面に叫ぶ。

「浜面！」

浜面もその様子を見ていたのか、信じられないという顔でいながらも、力強く頷いた。近くの駐車スペースに車を止め、プロペラがない以外はほぼ無傷にの『六枚羽』へと走っていく。本当ならこのまま逃げた方が効率が良いのだろうが、確認せずには居られなかった。

バックミラーで確認できた程度の小さな姿ではあったが、あの灰色の髪には見覚えがあったのだ。

(ひよっとしたら、あの時……)



10月9日、『アイテム』を引き裂いた個室サロンでの戦いで、手負いの滝壺を助ける手助けをしてくれた少年も灰色の髪だった。そんな色の髪を見間違えるはずもない。

（あの時の……！）

駆け寄ってみれば、少年はへりの中に腕を突っ込んでガチャガチャと何かを弄っているところだった。

横顔しか確認できないが、間違いない。

間違いない、それはあの時の少年だった。

どうも、櫻井です。

今回はサロン編への導入と、まさかの世紀末帝王との接触。次回では言葉を交じえます。

随分昔の事になるので忘れていらっしゃる方もいらっしゃるかと思います  
が、実は接続回路、浜面に一度会っているんですね。5・6と6  
- 1に伏線らしいものが転がっているのでお時間があれば見直してください。

当時は主人公空気の流れだったので描写しませんでした。浜面と滝壺の逃亡の手助けをしています。

パンツの下りはシリアスが続いていたので少し挟んだ次第です。  
あのようなシーンであのような反応の出来る浜面が大好きなんです  
ごめんなさい(汗)

なんで『六枚羽』を追ったかは次回本人視点で明かしたいと思います。  
前回ラストの声の正体、まあ予想通り過ぎましたね(汗)

それでは次回、お楽しみに！

8 - 9

激震

各々ノ進ム道

(前書き)

「あら、こんな夜中にどうしたのかしら？」

常盤台中学の保険医にして曖の姉

夕凧 志乃

曖がEnterキーを押した瞬間、タブの光点の色が切り替わった。

同時に、はるか前方に見えていた信号が青から黄、そして赤へと切り替わる。

その瞬間、テーブルのディスプレイと曖のパソコンの中の迎電部隊<sup>ナル</sup>の光点が、斜めに動いた。二つ車線を変更したのだ。そのまま直進を続け、信号を無視し交差点を通り抜けていく。

本来であれば右折してきた車と鉢合わせになるところだが、そのような事態にもならない。今動いている車は、迎電部隊<sup>スパークシゲナル</sup>の車だけだった。

「これって……」

<sup>メジャーハート</sup>心理定規が何かに気付く中、曖はパソコンを持って立ち上がり、車外へと飛び出した。赤信号に変わったという事もあり、キャンピングカーの隣の車線には信号待ちの車が何台か停まっている。曖は隣の車線の車を見渡して、ひとつのワンボックスに目を留め、

「追っわよ。ついてきて」

と一言言って駆け出した。反射的にそれに続くと、彼女は目を留めたワンボックスのドアをノックする。窓がスライドし、30前後の男性が顔を出した。

「ちょっと君、いきなり飛び出したりして…」

注意の声を上げる男性だったが、曖がその頬に手をやると同時に言葉が止んだ。彼女は厳かな声で告げる。

「急いでるの。乗せて」

「ああ、どうぞ」

運転手はにこやかにそう言うと、あっさりとスライドドアを開けてくれた。曖は躊躇いなくその中に入り、メジャーハート心理定規もそれに倣う。曖は運転手の肩に触れ、

「車線をずらしてそのまま直進。いいわね？」

「ああ、わかったよ」

男は頷いて、言われたとおり信号を無視して車を出した。信号待ちの車のない車線を選んで進みながら、咎めるような目を向けている者たちの横を通り過ぎる。ほどなくして、300メートルほどの先に動く車を発見した。

「エグいわね、あなた」

それを見て微笑むメジャーハート心理定規。曖はパソコン画面を見たまま口端をわずかに上げた。

「あなたには言われたくないけど。まあ、こつという能力なんだから仕方ないわね」

曖のパソコンに表示された地図が、真っ赤に染まっていた。その正体は、第三学区の道路に転々と配置されている赤い光点。

そう、この光点とは信号機。曖は第三学区全体の信号を赤にすることで交通を麻痺させ、自分達以外に移動できる車を迎電部隊スパークシゲナルに絞ったのだ。

「後は、下部組織の別働隊を向かわせて挟み撃ちにすればいいわ。車の流れは信号機周辺に限定されるから、ライフルか何かで狙撃しても人的被害は免れる」

簡単に説明して、曖が下部組織に連絡を回そうとしたその瞬間。

スパークシゲナル 迎電部隊の車両に、どこからか現れた白い少年が組み付いた。

「ちよつと、あれ………！」

隣の心理定規メジャーハートが言う中、100メートルほど先を走っている車がスリップした。おそらく、屋根の上の少年の攻撃だ。大きく揺さぶられた車がスピンを始めたとき、その顔が目に入る。

髪型と服装こそ違おうが、インターフェイス 接続回路とよく似た顔の少年だ。

そんな人間は一人しか浮かばない。

曖が再び男の肩に触れると、二人を乗せたワンボックスは道の真ん中で急停車した。植え込みに激突した迎電部隊スパークシゲナルの車からは、50メートル程度しか離れていない。

「なんで一方通行アクセラレータがここにいいのかしら。『グループ』も彼らを追っただってこと？」

駆け出す心理定規。メジャーハート 曖は少し考えて、

「インターフェイス接続回路が即断即決できたのは、こういうことだったのかもね」

走り寄ると、白い少年は車からテロリスト達を引きずり出していた。

その細い腕のどこからそんな力が出るのかと疑わざるを得ない華奢な体が、屈強な男たちの体を放り捨てる。

見れば、男たちは既に絶命していた。

内側から肉を破れられたような無惨な体から、赤黒い液体を飛び散らせて。

思わず呆気にとられてしまいが、曖は少年に声をかけ

『こちらD班。目標施設の制圧に成功した。そっちも至急こちらへ向かってくれ』

どこからか、そんな声が聞こえてきた。

交通の麻痺した大通り、曖と心理定規、メジャーハート一方通行以外に人の姿はアクセラレータない。

音源は、男の一人の肩口に装備された無線機だった。

(まさか、まだ別な部隊が……！)

曖は駆け寄り、解析機械を無線機と接続する。通信の発信源の特

定に、その時間はかからなかった。機械のディスプレイに表示されたのは、第三学区内のある建物。

「……チツ」

覗き込んだ一方通行が舌打ちし、タンツ、と地面を踏みつけると、彼は天高く飛び上がっていった。

それを見て、心理定規が尋ねてくる。

「どうするの？別働隊なんて聞いてないけれど」

曖は解析装置に表示されたデータを保存し、ヒツチハイクしたワ  
ンボックスへと引き返しなが、心理定規に微笑んだ。

「決まってるじゃない。人質を助けに行くのよ」

\*

(さすがにデータは消されているか……)

『六枚羽』の中にあつた端子と『ユニオン』で支給された携帯ゲ  
ーム機のような解析装置を繋げて、接続回路は舌打ちした。

高架道路のど真ん中だが、車の通りは今のところない。あるいは、この『六枚羽』の行動が一般に漏れないよう、裏で規制か何かをしているのかもしれない。そんなことを考えながら、ケーブルを切り離して立ち上がる。



当初は追っていた迎電部隊スパークシグナルを囮とし、脱出しようとしている『協議会』のような上位組織を排除するためのものだと思っていた。もしもそうなら、追跡中の迎電部隊スパークシグナルはどこからか追っているであろう一方通行と曖昧たちに任せ、自分は『六枚羽』の援護をしようと思っただが……。

思いの外、狙われていたのは『ユニオン』の絹旗最愛だった。

厳密には車を運転している運転手もだが、その顔を見た時点で考えは180度変わった。

仮に狙われているのが絹旗だとして、その理由があるとするれば命令無視の単独行動。一応曖昧と心理定規メジャーハートが黙認しているとはいえ、上層部がそれを良しとしない可能性はある。だが、結果として彼女のとった行動は『反逆』ではなくあくまでも『別行動』。迎電部隊スパークシグナルの残党を殲滅するという目的は合致している。こういった場合、上層部ならば結果が期待できる方を選ぶし、連れ戻すとしてもこんな大物を使う必要はないはずだ。

そして運転手の方は、『アイテム』の構成員を必死に守ろうとしていた少年だった。手を貸してやった時にも、暗部の人間にしては珍しい反応をいくつかしていた。そんな彼を見て、心のどこかで賞賛したのも覚えている。

だから。

馬鹿らしい話ではあるが、この二人を『六枚羽』が狙う正当な理由が浮かんでこなかったのだ。

そんな思考をしていた時である。

「な、なあ 안타」

視界の隅から聞こえた声。接続回路インターフェイスはスイッチを切り替えながら向き直った。

「何で戻ってきた」

わざわざ逃げる時間を与えてやったというのにと、苛立ちながら相手の顔を見る。

「あ…悪い。あの時は、急いでて礼も言えなかったからさ。また助けられたな」

10月9日の事を言っているのだろう。敢えて、接続回路インターフェイスは吐き捨てた。

「んな事はどうでもいい。それよりも、オマエは何でこんなモンに狙われてんだ」

「えーと、多分それは」

「あなた、何者なんですか？」

浜面の声を遮って、絹旗が口を挟んだ。「あ？」と聞き返す接続回路インターフェイスを見ながら、絹旗は続ける。

「最初は一方通行かと思いましたが、あの人の能力では『ミサイルを破片も残さず消し去る』ことなんてできませんからね。そしてそんな能力に私は心当たりもないですし、書庫バンクで見た覚えもありません」

一方通行という名前を聞いて、浜面が少し顔をしかめた。接続回路は二人の顔を交互に見て、

「……そこまで考えただけでも珍しい方だな。馬鹿はそのまま俺を一方通行だと思い込んでしまっただけだよ。俺は接続回路をつわれてる」

「インターフェイス  
接続回路？」

人間の名前とは言い難いが、一方通行の一例もあってそれが通りの類であることに二人が気付く。接続回路は一度目を閉じ、

「……早々で悪イが、オマエらは早えトコと消えとけ」

そう言うと、彼は後ろを振り返って首の装置に指をかけた。小首を傾げる浜面たちだが、接続回路の視線の先、数百メートル先に大型の軍用トレーラーが現れたのを見て、二人同時に目を見開く。

「どうやら連中はよっぱどオマエらを潰してえらしい」

「待ってくれよ！ 絹旗は新組織だかとは別行動をとってるだけで、あんなモン持ち出されるような筋合いは……！」

抗議するが、接続回路に言っても仕方ないと思ったのだろう。浜面は言葉を飲み込んだ。

「……………チッ」

舌打ちと共に、灰色の髪が夜風に揺れる。

「ここから500メートルくれえ進んだところに緊急時用の非常階段がある。そこから下に逃げる」

「下につて…そんなことしても奴らは追ってくるんじゃないのか？」

「つべこべ言わずにさっさと行け」

「待てよ、あんたは…どわっ!？」

浜面の体を、烈風が吹き飛ばした。と言つても、危害を加えるようなものではない。転ばない程度、走つて逃げる上での追い風になる程度だ。それを見て、絹旗がこちらへ目を向ける。

「どついつつもりなんですか？私達を逃がしたりして、あなたに何か利益があるとは思えないんですが」

こちらの少女は高架道路と言う名の、この場における『敵』が作り出した『行動しやすい空間』から脱出することの重要性を察したらしい。

「そオだな、こいつアボランティアだ。つツても、オマエにはそのままクソツたれのテロリスト共片付けに行ツてもらうけどなア」

あつさりと言つて、インターフェイス接続回路は踵を上げた。

「…なるほど、茶髪女が言っていた『もう一人』ってというのはあなただったわけですか」

「だろオな」

それだけ言うと、インターフェイス接続回路は踵に集めた空気を爆発させ、向かってくるトレーラーへと突っ込んでいく。

(……まったく)

高速で接近し、数百メートルは離れていたトレーラーの目の前で迫ったとき、インターフェイス接続回路は自嘲気味に笑った。そして、その拳を振り上げる。

(どこまで毒されたんだかな、俺は)

次の瞬間、拳に貫かれたトレーラーの後部から、青白い閃光が飛び出した。閃光はトレーラーを抜けると同時に拡散し、その膨大な熱量と光量を大気に散らす。巨大なトレーラーは横転すると、停止した軍用ヘリへと突っ込み、爆風と爆炎、そして黒煙を放出した。火力の塊とも言うべき『六枚羽』と、これまた重武装の兵士たちが乗っていたであろうトレーラー。立ち上る爆炎は数十メートルにも及び、生じた爆風が表示板をなぎ倒し高架道路を震わせる。

計算された破壊は、周囲に被害を及ぼさない程度に留められていた。

「ちツと派手にやり過ぎたか……？」

爆発の跡、破片の散らばる高架道路を何事もなかったかのように歩きながら、インターフェイス接続回路はスイッチを切り替えていた。これで絹旗と浜面が逃げるだけの時間は稼げただろう。

そのままその場を後にしようとする、不意にポケットの携帯が振動した。

表示された名前は『夕凧 曖』。

(…催促か?)

そんなことを考えながら携帯を耳に当てると、きびきびとした曖昧の音が聞こえてきた。

『インターフェイス接続回路。すぐに戻ってきて』

\*

浜面と絹旗は夜の第三学区を走っていた。

完全下校時刻を過ぎているということもあり、学生の姿はほとんどない。

「結局あの『六枚羽』とかトレーラーとかは何だったんだ? 『ユニオン』のアイツが逃がしてくれたって事は、命令違反とは関係ねえってことだろ?」

「……そうですね」

浜面の問いに、絹旗は眉をひそめて考えた。むしろ、その方が分かり易くて良かったように感じる。しばらく黙り込んでから、絹旗は浜面に顔を向けた。

「浜面、別行動をとりましょう。私はあの超不審なヘリとトレーラーについて調べますから、浜面は滝壺さんと合流して下さい。その後三人で落ち合うという事で」

「待てよ。それはいいけどお前一人で大丈夫なのか？」

スクランブル交差点の曲がり角で立ち止まり、浜面は別れようとする絹旗に問いかける。絹旗はふうと嘆息して、

「超・浜・面・よ・りは・大・丈・夫・で・す。滝壺さんと合流したらメールして下さい」

それだけ言うと、絹旗は角を曲がって走っていった。どこか心配な浜面だが、今は滝壺と合流するのが先だと言い聞かせる。

「……………」

信号が変わるのを待つが、一向に変わる様子がない。キョロキョロと、無人の通りを見渡す。

(車も通ってないし、状況も状況だからな。許せ交通ルール！)

そんな風に断って、横断歩道に踏み込んだその瞬間。

上着のポケットに入れてあった携帯が呼び鈴を鳴らした。表示は非通知。

「……………？」

怪しげではあるが、傍受される可能性を考えた絹旗かもしれないなどと思いつつ、電話に出ると。

『あらお久しぶり。「心理定規<sup>メジャーハート</sup>」って言えば、顔ぐらいは思い出し

てもらえるかしら』

相手は意外な人物だった。確か、この女も『ユニオン』の構成員の  
はずだ。

「……………何で俺の番号を知っているんだ……………？」

『いちいち説明して欲しい？でも面倒だからやめておくわ。それより質問があるんだけど、そっちに絹旗最愛はいない？本人に連絡入れても全く通じないので困っているわ』

変だな、と浜面は思った。絹旗は『ユニオン』の差し金でないことは分かってしている様子だったし、連絡が通じないと言うのは……………。

「なあ。あれは結局、お前達の仕向けたものじゃないんだな？」

『？』

念の為、鎌を掛けるつもりで言ってみたが、相手の反応は凶星と言っよりはキョトンと疑問符を浮かべている感じだった。

『言っている意味は分からないけど。ともあれ、絹旗と連絡がつくようなら伝えておいて。「あなたが一人で作るって言うから放置しておいたけど、例の迎電部隊スパークシグナルのテロリスト達が第三学区の個室サロンを占拠しちゃった」って。もうギブアップして私達と合流してもらえると嬉しいんだけど』

一応要約して伝えられるよう聞き耳を立てるが、浜面は耳に入ってきた単語に目を見開いた。



「第三学区の……個室サロン……だって？」

呻くように呟いて浜面は記憶の海を辿っていく。

確か。

確かそれは、退院祝いパーティを開くため待たせている、滝壺理  
後の居る施設ではなかっただろうか。

『そうよ。…というか、あなたどうしノ』

相手がまだ何か言っているのにも構わず、浜面は通話を切った。

急がなければ。

（滝壺が、危ない！）

焦燥に駆られ、浜面仕上は個室サロンを目指して走り出した。

どうも、櫻井です。

1時間もオーバーしてしまった…隔日更新の鉄則を破ってしまったアアア (泣)

というのも、まあ、今日は家族ぐるみで東京まで行ってきまして。昨日の内に書くだけ書いておいた8 - 9を、たった今細かい編集をして投稿している次第です。

今回は曖&心理定規、接続回路&浜面&絹旗、浜面&絹旗の三視点でお送りしました。

曖の作戦は無理ありすぎだと自分でも突っ込みを入れたくなりますが、活躍、させたかったんです。でも実際全ての信号が赤になってそのまま停止したら大通りを闊歩することもできる…はずです。思いつきり迷惑ですが (笑)

地味に心理定規さんは垣根に言われた事を同じく精神操作系能力者の曖に言ってます。

因みに今日の曖さんはヒッチハイクというかハイジャックをしたわけですが、そういう能力なんだし仕方ないんです (汗)

一方通行とも初絡みで何とかサロンに繋がられたぜ…結構頑張ってます。考えました、これ。

接続回路編では再び浜面の手助け。何気に彼に同族意識を持つてます接続回路 (笑)

最後は世紀末帝王でシメ。一話くらいいいかなと思ひまして。

ふう、接続回路乱入でこじれた原作の状況を何とか修正できました。結局原作ありきでやっているので本筋はブレてほしくないんですよね。二次創作の面白みが欠如していて申し訳ない。

さて、次回は今日飛び上がったあの人の視点が多くなります。

次回、お楽しみに！

8 - 10 勇壮

『チカラ』ガ無クテモ

(前書き)

「なんか、最近俺出番多くないか？いや、嬉しいには嬉しいけどなんか視線が痛いというか……」

一人の少女のために主人公になれる男

浜面 仕上

「……………」  
シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「……………いいのよ？気にしなくて」

夕風曖の姉にして接続回路の理解者

夕風 志乃

個室サロンの一室には、7人の男が集まっていた。

それぞれがサブマシンガンに短銃、アーミーナイフに手榴弾と一通りの武器を装備しており、彼らの身を包む獵犬部隊ハウンドドッグにも似た黒づくめの装甲服は全員で統一されている。

彼らは地下鉄をジャックした班の生き残りだった。彼らの班は実質的な戦闘部隊ではなく、どちらかと言えば裏方、サポートに回る班であり、戦闘に関しても死亡が確認された別班には及ばない。一度装甲服を脱ぎ捨て、一般人の団体客に偽装して施設を占拠したまではよかったが、籠城を行なうには人数としても心許ないところではある。

極度の緊張状態にある彼らの耳が、パン！という銃声を聞き取った。鼓膜を揺さぶる音の波が、脳に危険信号として伝達される。人間は甲高い音を聞くと危険と判断する傾向があるというが、あながち嘘でもないのだろう。誰を狙うでもなくどこかしらに発砲し、人間の動きを止めるドラマのような展開も、あり得ない話とは言い難い。

(……今の銃声は)

自分たちの使用している銃器とは違うものであることはすぐにはわかった。ここに生存したメンバーが残っていることから味方の発砲でないことは分かるし、そもそも折角人質という手を使っているのだ、無闇やたらに銃を撃つのは好ましくない。場合によっては、早急に始末すべく人質を無視して突入してくる暗部組織が出てくる

とも考えられる。

テロを起こした彼らにとって味方と言える存在はひとつまみ程度もおらず、今では彼らを味方として重要視してくれる組織も居ない。つい昨日までは『協議会』といういい取引先、クライアントが居たというのに。

「屋上には要求どおりヘリが来るかどうか、様子を見に行っている班がいたはずだが……」

状況から鑑みて、撃たれたのは自分たちの味方だろうか。だとすれば、人質に『新たな条件』を付け足すという選択も止むを得ない。

「ステファニーとはいっ合流する？あいつの出方次第では、予定変更という事も……」

ステファニーとは彼らと提携を結んだ傭兵だ。金髪の外人女だが、凄腕と知られている。味方につけるべき優秀なカードと重宝していたが、実際、今現在動向が確認できない状況にある。

「動いているのは『グループ』と『ユニオン』だったな。なら、『グループ』の空間移動系能力者についても対策を練った方がいいんじゃないか？」

一番の脅威はそれだった。あの学園都市最強の一方通行も、視認ハケモノできるだけ対応の使用があるが、空間移動系能力者に限っては、姿も見せずに攻撃をすることができる。いつの間にかやられてしまった、では話にならないのだ。

上から聞こえてきた銃声も気になるが、それが本当に自分たちの味方を撃つたものとも限らない。場合によってはそれは罠で、まん

まとやって来た自分達を一網打尽にする作戦ともとれる。  
数秒置いて、リーダー格の男が顔を上げた。

「班を三つに分けよう。一班は屋上の偵察、二班は人質の監視、三班はここで」

男が言いかけたその時である。

轟音と共に窓を破って、怪物が姿を現したのは。

壁一面から夜景を望めるサロンは、一瞬で戦場へと変化した。破られた窓からは高層ビル特有の風が吹き込んでくる。

降り立った怪物は笑っていた。

と言っても、見ていて心が穏やかになるような、そんな『いい笑顔』などではない。

邪悪にして凶悪、引き裂かれたようなその笑みは、恐怖と焦燥しか生じさせない。

(……………につ、28階だぞっ……………！？)

銃口を向けながら、男はそんな事を考えていた。これほどの異常事態を前にしても尚、だ。そうした『余分な思考』も、学園都市最強の超能力者<sup>レベル5</sup>の前には生死を分ける境目となる。

刹那、学園都市最強の怪物、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>が動き出した。

＊

一方、曖からの指示で接続回路も個室サロンの真下に来ていた。

サロンの入口付近には黄色いテープが張られており、その前には武装した警備員が立っている。その黄色いテープの前には、完全下校時刻を遅めに設定されている大学生やおそらく今から帰宅するのであろうスーツ姿の会社員らしき人々が集まっている。

（さすがにテロリストともなりやあ人間も集まるか）

かつて一方通行と垣根帝督の戦いに加勢した時にも、野次馬といふのは後を絶たなかった。事件に首を突っ込むこともなければかといつてさつさと逃げ帰ることもない、接続回路のような人間達からすれば邪魔になる存在だ。

野次馬さえいなければ、一方通行が始末したらしい地下街から逃げた迎電部隊もその場で片付けられたというのに。

（……氣イ遣わなきゃならねえこっちの身にもなりやがれ）

それを差し引いても何とかするのが、自分たちの役目。わかってはいても、苛立ちは生じる。

『インターフェイス  
接続回路。聞こえてる？』

不意に、通話状態の携帯電話から声が出た。接続回路はそれを耳にあて、



「ああ。オマエら今どこに居んだ」

『サロンの地下よ。地下道のルートから壁を破って中に入ったの。下部組織の部隊も一緒よ。心理定規メジャーハートは先に一階の管制室へ行ってるわ。居場所を特定しているわ』

「そりやまた。随分派手なことするじゃねえか」

野次馬から離れたところにある地下道への入口へと目をやって、からかうような口調で言ってみせる。

『派手なことしてるのは浜面って男の方よ。絹旗さんの知り合いだからだか知らないけど、一人で屋上から突入してね。彼のお陰で作戦にも変更が出たわ』

「浜面仕上だと……？」

確か、さつき逃がした茶髪の男もそんな名前だったような気がする。接続回路インターフェイスは一度サロンの屋上へと目をやり、能力使用モードに切り替えた。

頭の中に、周囲の情報が流れ込んでくるが、それを無視してサーチ対象を『屋上付近』へと絞る。数十メートル離れた空間の情報が、精確に頭の中に入ってきた。

浮かんできたのは、白い布を幾重にも重ね作り上げたツリーの一部が、ボロボロに破れている様子だった。

(あの野郎がここまでする理由……まさか)

詳細な位置情報の代わりに浮かんでくる、無気力そうな少女の姿。それを背負い、自分の指示に従って動いた茶髪の少年。考え得る最有力な推論が導き出され、インターフェイス接続回路は舌打ちする。

（あの滝壺だかつてガキも、人質にとられてるってのか）

だとすれば、浜面は冷静さを欠いている可能性がある。同じように大切なものを壊されかけたインターフェイス接続回路には分かる気がした。あの時の自分は完全に蟬脇の掌で踊らされていたのだから。

（妙なことにならねえうちに、突入した方がいいな）

決めて、インターフェイス接続回路は首のスイッチに触れながら携帯に呼びかける。

「わかった。そいつが上から行ったってんなら、俺も上から行ってみる。上手くすれば接触できるかも知れねえからな」

『わかったわ。…気をつけなさいよ』

ほんの少し声音を変えて、躊躇うように曖が言う。

「ハッ。誰に向かッて言ッてんだ？」

少女の微妙な変化には気付かず、レベル5超能力者の少年は静かにその卜リガーを引いた。

\*

（早く早く早く早くッ！！）

同時刻、浜面仕上は焦燥に駆られたままサロンの非常階段を駆け下りていた。その手には、黒光りする拳銃が握られている。ほぼ一直線の非常階段には、身を隠すものもなく装備の整ったテロリスト側に分があるのだ。ついさつき聞いた複数の銃声が、それを証明している。

鉢合わせになれば、自分が死ぬ可能性のほうが高い。

それはそうだろう。

相手は訓練を積んだ特殊部隊で、自分はただのゴロツキ、性質の悪いチンピラに過ぎない。おまけに装備の不利と来た。自分は絹旗最愛や滝壺理后、接続回路インターフェイスのような能力があるわけでもない。

まともな、冷静な頭で思考すれば、それが如何に危険で無謀、馬鹿らしいパワーゲームなのかは浜面自身気付くことができるが。

浜面仕上にとって、そんなことは関係なかった。

命を賭して、滝壺理后を救い出す。

ただそれだけなのだ。

そこに能力や装備による差別は関係ない。

理屈ではなく、馬鹿らしいとさえ思える意志が重要なのだ。

例えるなら、浜面が独力で倒した学園都市第四位の超能力者レベル5である麦野沈利。

彼女は己の慢心と拘りのせいで、本来であれば楽勝であったはずの戦局を覆され、死んだのだ。

何度もラッキーが続くなんて思えるほど、彼は甘い人生を過ごしてきたわけではない。だが、今の彼にはそれだけの行動を起こすだけの自身と矜持があるのだ。

ただそれだけを武器に、訓練された特殊部隊とやり合う。

(……上等だッ！クソツたれ!!)

何度も反芻していた誓いを、強く、強く胸の中に響かせて、銃声のした階の扉を蹴破るようにして屋内へと入り込んだ。

そして、目撃する。

地面に倒れたジャージの少女。

そこに屈みこむ、白髪の少年。

冷静さを失った浜面の脳は、その光景を見て、確証もなく、一つの答えを導き出した。

「……何、してんだテメエ」

「……?」

少年の顔がこちらを向いた。一瞬高架道路で見た少年の姿が浮かんだが、すぐに振り捨て相手を睨む。

浜面の頭の中に、スキルアウトだった頃の記憶が蘇ってきた。たくさんの仲間たちの顔が、まるで流れるように浮かんで過ぎてい

く。最後に映ったのは、決して小さくはない浜面でも見上げなくてはならないほど大柄な、彼らのリーダーの姿。あつという間にそれらを葬った、学園都市の深い闇。

その、死刑執行人の姿が目の前にあった。

故に、浜面の頭は沸騰する。

「滝壺に、何してんだって聞いてんだ!!」

少年の問いに、白髪の少年は眉をひそめた。

どうも、櫻井です。

筆が進むときには一気に書くに限る！というわけで一応同日更新です。全然同日って感じがしませんが(笑)

今回はそれぞれの突入を描いた感じですね。進歩が遅い？すみません頭が上がりません(汗)

杉谷のくだりは次回、白い人の回想にてお送りしたいと思います。

というか、19巻はボリュームがあり過ぎて進行が大変ですね(^^;)

サロンでは戦闘ないので次回できっかり終われそうですが、もう8-10ですよ。浜面サイドは滝壺合流後から少なくなります。ある人とある人の対決があつたりするので。浜面をたくさん出せるチャンスが今しかないんですよね：次章はもうシナリオが詰まってるので(汗)

てか、(汗) ばっかだな僕の後書き。今更かもしれないんですが(汗) 迎電部隊とのケリがついたら話が急加速するのでどうぞお楽しみに(?)

それでは、次回も宜しく願います！

8 - 1 1 格差

最強ト最弱

(前書き)

「……俺がまだ上がったばっかの話だからな」  
『ユニオン』の構成員  
インターフェイス  
接続回路

「……これもアンタの差し金か」

静かに少年を見ていると、彼はゆつくりと口を開いた。

それに耳を傾けながら、一方通行はアクセラレータこの少年の正体について考えるため状況を整理する。

サロンに突入し、作戦の確認をしていたらしいテロリストの半数を潰した時、杉谷と名乗る妙な男が現れた。男がどのような立場にあるのかは不明だが、大型とはいえ拳銃一つで残るテロリストを撃破したところを見ると、訓練を積んだ人間であるのは間違いない。

結果としてテロリストの殲滅が完了したため、『アクセラレータグループ』の役立たず共の後始末を任せ、一方通行は人質のところまでやって来たのだが…。

少年に顔を向けたまま、目だけを動かして目の前でうずくまる少女を映す。

「このテロリストを指揮して一人だけ生き残ったのか、それとも仲間割れでもしてテメエが皆殺しにしたのか…どっちにしろ、闇の底で汚ねえ事をコソコソやりやがって」

少年の言葉を聞いて、一方通行はアクセラレータ眉をひそめた。

自分は倒れていたこの少女の様子を確認しようとした。そうした時に、銃を携えたこの少年が現れたのだ。

少なくともひとつ、この少年は誤解をしている。

そう断ずる間にも、少年は言葉を続けていた。



「スキルアウト壊滅の時は、俺達にも非があったさ。駒場のリーダーだって、覚悟を決めてテメエと最後の戦いに挑んでいた。だからそれについてはもう言わねえ。…本当は、言いたくて言いたくて仕方ねえが、駒場のリーダーのために黙っておいてやる」

ぴくりと、ひそめていた眉が動く。

(駒場……)

その名前には心当たりがあった。

10月の初め、一方通行アクセラレータが初めて「グループ」アクセラレータとして行った大仕事。スキルアウトの集団を排除したあの日、一方通行アクセラレータの前に立ち塞がった大男。  
ハードテレーピングスマートウェポン 発条包帯を体に施し演算銃器で武装した大男は、結標淡希と一方通行ラレータを殺す寸前まで追い詰めた。

その大男の名が、駒場利徳こまば りとく。

それを『リーダー』と称している時点で、この少年がどんな立場の人間なのか推測がつく。限りなく正解に近い推測が、だ。

確信すると、一方通行アクセラレータは再び少年の瞳を真っ直ぐに見返した。

「……ただ、テメエがもう一度。もう一度、俺から大切なものを奪おうって言うなら。…今度は覚悟も何も決まってるねえ、そもそもこれから普通の一般人として暮らしていくつもりだった滝壺の命まで、奪っていくって言うならっ……！」

ぶるぶると振り切るように頭を大きく左右に振ると、少年は手に



対し、浜面は拳銃を構えたままバックステップすると、首を掴むように振るわれた怪物の腕を回避する。

(……おオ)

予想外のキレの良さに、アクセラレータ一方通行はわずかに感心した。

だが慢心はしない。

例え相手はるか下に行く三下だとしても、油断しない。かつてその油断が、彼を二度の敗北へと導いたのだから。

アクセラレータ一方通行は胴を大きく回し、握った拳を振り回した。

ほんの少し指先が触れただけでも、あらゆる生き物を葬るその腕を。

「ッ!!!?」

ラレータ浜面は体を横に振り、怪物の腕をギリギリで避けた。だが、アクセ一方通行も遊びでやっているのではない。

腕が振り抜けた瞬間、アクセラレータ一方通行と浜面の間に強烈な爆風が発生した。

吹き飛ばされたのは浜面一人。

大柄な浜面の体は2メートル以上の距離をノーバウンドで滑空し、豪華な額縁が掛けられている廊下の壁へと激突した。

「じッ…あッ…！！」

痛みに歪む顔。彼が手にしていた銃が、天井に向けて火を噴いた。特に何の意味もない、安全装置セーフティの外れた拳銃故の事象だ。

さて、と一方通行アクセラレータは考える。

(コイツをどオするか)

このまま殺すのは簡単だが、この分だと生かしておいても問題はない。テロリストでもないたかが一人の無能力者レベル0を殺しても、メリツトはひとつもないのだ。

そんなことを考えていると、一方通行アクセラレータの鋭敏な耳が状況に不釣り合いな電子音を検知した。音の方向に目を向けてみれば、そこには数台の警備ロボット。テロリストに纏めて封じ込まれていたものが平常運転を再開したようだ。

その瞬間、銃を手にした浜面が、近付いてきた警備ロボットに発砲した。

何のつもりなのか理解できなかったが、浜面がロボットに開いた穴に手をつ突っ込んだのを見て、全てを理解する。

彼がロボットから引き抜いたのは、それを動かす巨大なモーターだった。

そこからさらに力づくでパーツを剥がしていくと、浜面がこちらへ何かを放り投げる。

永久磁石。

あれほどの大きさならば、大概の電子機器は誤作動を起こすことだろう。

それは一方通行の電極とて例外ではない。

(無能力者のアタマにしちや、上等な方か)

放物線を描いて向かってくるそれを見ても、一方通行は冷静だった。

確かに浜面仕上の行動は、一方通行という名の超能力者に対して有効な手段といえるだろう。

だが、その『弱点』を理解しているのは、浜面と駒場利徳、木原数多だけではない。

他にもない一方通行自身が、何よりそれを理解しているのだ。

それ故に。

永久磁石が電極の数十センチのところへ迫った時、それは不自然な動きで吹き飛ばされた。

「まず……ッ!?!」

浜面が言った。一方通行は動き出す。

ぎこちなく動こうとする浜面の襟首を掴み取り、それを引き寄せ横合いに放り捨てる。たったそれだけの動作だった。

それでも、浜面の体は砲弾のように投げ飛ばされ、サロンの床を無様に転がる。数メートル先でようやく止まった彼の体は、びくびくと痙攣するばかりで動かなかった。

アクセラレータ  
一方通行は伸縮式の杖を伸ばしながら電極のスイッチを切り替え、引き抜いた拳銃を浜面に向けた。ここからなら、いつでも相手を即死にできる。

「仕舞いだ。そこで無様に這い蹲ってる分には放っておくが、起きよオならここでブチ抜く。…とはいえ、こいつはオマエの人生だ。好きな方を選べ」

アクセラレータ  
一方通行としては、情けをかけたつもりではある。相手によっては問答無用で撃ち抜くこともあるのだから。普通の人間なら、ここは前者を選ぶことだろう。だが、この少年は違っていた。

「……………決まつ、ゴボツ……………てん、だろうが……………」

アクセラレータ  
倒れたまま、彼はこちらを睨みつける。一方通行は黙って耳を傾けた。

「……………テメエの方、こそ……………下がる理由なんか、ねえ……………じゃねえかよ……………」

アクセラレータ  
ふと、一方通行は浜面から目を逸らし、その後ろを見た。眉をひそめて、再び浜面へと目を向ける。

「そりゃあな。何も言わずに鉛弾ブチ混ンでやっても構わねエ。こ

の場でオマエをブチ殺しておいた方が、後腐れはねエしな。わざわざ報復のリスクを負ってまでオマエを見逃してやる義理もねエし、サクツとやっておいた方が簡単ではある。…ただな」

面倒そうに付け加えると、わずかに浜面が顔を上げた。一方通行アクセラレータは続ける。

「病人のガキの方が、オマエを守るために立ち上がるオとしてんのは反則じゃねエのか？」

言われて、浜面が首を動かして背後に目を向けた。

そこには、嫌な汗を流して必死に壁に手をつき、少しずつこちらへ向かってくる少女。

一方通行アクセラレータは引き金にかけた指からわずかに力を抜き、

「さてどオする。そのガキを盾に利用して、2対1で続行するってんなら、リクエスト通りオマエを血みどろにしてやるよ。ただ、戦う上でそのガキが邪魔になるってんなら、ここは仕切り直しだ。忌々しいが一度だけ下がってやる。それが悪党の美学ってモンだ」

浜面はしばらく迷うように目を瞑った後、床に転がる拳銃に伸ばした腕から力を抜いた。どうやら後者を選択したらしい。

一方通行アクセラレータは銃を下げ、浜面と少女に背を向けた。

これ以上ここに居る理由はない。

意識を足に向け、脚力のベクトルを操作すると、アクセラレータ一方通行は動き出した。



どうも、櫻井です。

今回は主人公置いてけぼりの一方通行VS浜面仕上でした。

いや、実はこの後に接続回路のシーンがあったりしたのですが、これ以上一話を広げると更新が間に合わないかもしれないかもしれないので次回に回されます。

そこで、皆さんにひとつご相談が。

個人的に隔日更新は皆さんに早く最新話をお届けできるので続けたいのですが、それが原因で自分で言うのもなんですが質を下げざるを得ない場合があります。

まあ元々大した文章でもないのですが(汗

なので、隔日更新を基本として、間に合わなかった場合やまだまだ改良の余地があった場合には、その翌日辺りに回させていただいてもよろしいでしょうか？

現にいくつか自分でも納得の行かない出来のものもございます。

終盤はそれこそ最大の山場ですので、尚更そういった措置を施したいのです。

皆さんのご意見をお聞かせください。

それでは次回、お楽しみに

8 - 1 2 変動

新夕ナ命令

(前書き)

「む……？何なのでしようこの違和感は、とミサカはわずかな体調  
の変化に首を傾げます」

シスター・多リアルナンバー  
妹達認識番号 1 0 4 1 2 号

エクストローラ  
多重観測

夕凧曖はインターフェイス接続回路の指示通り、下部組織の一団と共にサロンを駆け上がった。

「やけに静かだな…ですね」

隣で手頃なサブマシンガンを構えていた男が口を開いた。

『下部組織』と言うだけあって、実質的には曖は彼らの上司ということになるのだが、やはり制服を着た中学生相手ではやりにくいところがあるらしい。

「メジャーハート心理定規が言うには、カメラに彼らの姿は映っていないかったですよ。多分先に突入した『アクセラレータグループ』の一方通行の仕業ね」

「インターフェイス接続回路ではなく？」

「アクセラレータタイミングから考えれば一方通行でしょう。共同戦線を張ったつもりはないけど、結果オーライでいいんじゃないかしら」

曖の視線が、階段傍の階数表示板に向けられた。21階。下部組織の四人はまるで平気なようだが、さすがに疲れてくる。そんな曖の想いが通じたのか否か、制服の内ポケットが電子音を上げた。曖は一度足を止め、端末を耳に当てる。

『スパークシグナル元迎電部隊の始末ができたようですね』

相手は例の猫なで声だ。曖は下部組織員に先に行くよう合図し、

「そのようなね。私が直接やったわけじゃないけど」

『いえいえ、充分ですよ。我々は「グループ」と競争しているのではないのですから。それよりも、各メンバーに通達していただきたい事があります』

ほんの少し、猫なで声の語調が変わったことを感じ取り、曖はわずかに眉をひそめた。

「何かしら」

短く返して、返事を待つ中。

聞こえてきた『内容』に、彼女は目を見開いた。

\*

インターフェイス  
接続回路はエレベーターのシャフトを降下していた。

その手には、銀と黒の拳銃が握られている。

街の外で使われている『ベレッタM92』とよく似た、ダブルアクションの拳銃だ。仕込み銃は威力こそあるものの、装弾数と速射性に優れず、能力使用モードでなければ壁により掛かるか手すりに掴まるなどしなければならぬため、『保険』以上の効果は期待できないのだ。

浜面が倒したと思われる、屋上で倒れていた男から奪い取ったこ

の銃は、以前奪った『ブロック』や蟬脇の部隊のものよりも自分の手にしっくりくる。

(装弾数は10発…ハッ。充分過ぎんだよ)

胸の内でそう言っていると、インターフェイス接続回路はちょうど目の前まで来た28階のドアを蹴破り、フロア内に入り込む。

と、同時に、首のスイッチを切り替え銃を構えた。

エレベーターホールに人の気配はない。

インターフェイス接続回路が杖について移動し、やや大きな扉を開くと、大勢の間が彼を迎えた。老人から幼い子供までの大体300人ほどの人間が、手足を縛られて広い部屋の中に押し込まれている。

(大広間……デケエパーティなんかを開くために設けられたのか)

見渡してみると、さすがは第三学区の高級施設。子供から大人までが立派な装いをしている。あちこちから女性や子供のすすり泣きが聞こえてくるが、見たところ死人は居ないようだ。それを確認しながらも、インターフェイス接続回路は覆面を被り銃を持った人間を探す。だが見渡す限り、居るのは人質だけのようだ。

(……スパークシグナル迎電部隊の姿がねえな。一方通行が仕留めたのか?)

曖曰わく、彼女らより先に一方通行はここへ向かったというから、スパークシグナル仮に迎電部隊が全滅しているとすれば彼が潰したと考えるのが妥当だろう。

(……まあいい。連中が居ねえなら好都合だ)

曖に連絡するため広間から廊下へ出ると、彼の目は廊下の一点に向けられた。

「あんだ…！」

目にした途端、向こうから声がかげられた。よろよると立ち上がる茶髪の少年と、それに寄り添うこれまた健康体には見えないジャージの少女。

浜面仕上と滝壺理后だ。

二人の姿を目にして、インターフェイス接続回路は胸の中で安堵する。

「……生きてたか」

口から出たのはそんな言葉だった。

もっとマシな言い方もあったのだろうが、たかが『あれだけ』の関係なのだからこの程度で充分だろう。

「ああ…なんとかな。あんたは、テロリストの始末に来たのか？」

「そんなトコだ。…俺とよく似た奴を見なかったか？」

アクセラレータ一方通行の姿を頭に浮かべインターフェイス接続回路が尋ねると、浜面は顔をしかめた。

「…さっきまで居たよ。どこかへ行っちゃったけどな」

「…そうか」

確か高架道路で絹旗が彼の名を出したときも、浜面は表情を曇らせていた。理由はわからないが、もしかしたら暗部闘争の時に何かあったのかもしれない。

追及はせず、インターフェイス接続回路は浜面から滝壺へと目を向けた。

「例の『体晶』の影響は、まだ抜けきつてねえみてえだな」

何とか立っている、その表現がしっくりくる立ち姿の滝壺は、タイフェイス接続回路を見ると眉根を寄せた。

「…はまづら。この人…」

「こいつは…味方だよ。前にお前がサロンでぶっ倒れた時に助ける手伝いをしてくれたんだ」

確認するようにこちらを見るので適当に目で応えると、浜面はタイフェイス接続回路に向き直った。

「一度は良くなったんだが、どういっわけかまた調子が悪いみたいなんだ。さつき退院したばかりなのにこんな事になって、無理しすぎたんじゃねえかな」

滝壺が心配しないよう配慮しているのか、浜面は『体晶』のことには触れなかった。

彼の話聞きながら、インターフェイス接続回路は顎に手を当てる。

まだ『シークレットナンバー非公式の超能力者』であった時、超能力研究機関に籍を置いていた志乃から『体晶』について聞いたことがある。



『体晶』は暴走能力者の特殊なシグナル伝達回路から、各種の神経伝達物質を始めとする分泌物質を凝縮し精製したものであり、意図的に能力を暴走させることができる代物で、大概は悪影響を及ぼすケースが多く、使用されることは少ないと言っていた。

だが例外とはどこにでもあるもので、滝壺は少ない確率の方に含まれる能力者なのだろう。

(…分泌物質)

体内で情報を伝達する神経も、結局は粒の塊だ。その中を通る物質すらも、根本には素粒子がある。

自分が時間をかけて分析すれば、滝壺理后を蝕む分泌物質を分解し無害な物質へと変換した後で、体外へ出すルートに持って行くこともできるはずだ。

だがこの作業はテロリストの脳みそを内側から破裂させたのとはワケが違う。

体細胞の隙間、及び内部に浸透しきつっている体内物質だけを、周囲に一切のダメージを与えないようにピンポイントで排除しなくてはならないのだ。

(…んな微細な演算はやったことねえぞ。強いて言うなら、あの妙な『現象』の中で多重観測エクストラプレーを培養液越しに治療したのがそうだが、傷を治すのと体の一部になってやがる毒物を組み換えるのとじゃ話が違え。他に手がないこともないが、このガキは……)

ちらと浜面に目をやって、インターフェイス接続回路は舌打ちした。

医者に治しきれなかったのなら自分かと思っただが、やはりもしものことを考えるとこの場で毒物を取り除くよりは例の医者を訪ねさせた方が確実だろう。症状はあの時にそっくりだが、浜面の言うような些細な体調不良という可能性もある。

彼は滝壺から浜面に目を戻して、

「傍のホテル街に『セピア』つつうホテルがある。第七学区の病院の避難先だ。オマエも話くれえは聞いてんだろ」

「あ、ああ。滝壺がそこに入院してたからな」

浜面が言くと、滝壺はこくりと頷いた。意外と近くにいたのかと思いつながら、接続回路は握った携帯の時刻に目をやった。

まだ22時になったばかりだ。

「なら話は早エ。オマエはそのガキを連れて今言ったホテルへ行け。退院直後だろうが何だろうが、行けばあの医者は最後まで面倒を見る。生憎オマエらをソコまでエスコートする余裕はねえんでな。後はオマエらの知恵で何とかしろ」

「わかった。えと…悪いな、何度も世話になっちまって」

礼を言う浜面から、インターフェイス接続回路は顔を背けた。指示は出したし、もう彼に言うことはない。

何度か礼を言いながら浜面たちが外へ向かうのを確認し、暖に連絡するためエレベーターホールまでやってきたインターフェイス接続回路は、不意にポケットの携帯が震えるのを感じた。

暖からの着信だ。

彼はそれを見るや、黙って回線を繋げる。

『聞こえているわね』

彼女にしては若干低い声だが、電話口から聞こえてきた。わずかに違和感を感じながらも、インターフェイス接続回路は彼女に聞こうとしていたことを頭に浮かべる。

「丁度いい。28階に纏められている人質を」

『そこに浜面仕上は居る?』

こちらの声を遮って、詰問するような口調で曖が言った。

彼女がこのような言い方になるのは、決まって好ましくない状況にある時だ。

「…傍には居ねえな」

『ってことは、さっきまで一緒に居たのね?』

「ああ」

彼はこの時点で気付くべきだったのだろう。

迎電部隊にまつわる一連の事件と、浜面仕上にまつわる事件から。

曖が……『ユニオン』が、何を考えているのかを。

数秒の沈黙の後、再び曖の声が耳に入った。澄んでいる、いつも

とさほど変わりにない声のはずなのに、妙に重厚に響いてくる声が。

『今すぐ彼を殺しに行きなさい。でないと、あなたが狙われるわ』

どうも、櫻井です。

原作に沿って展開しました今日の話。

原作で心理定規があんな行動に出ましたが、それを取り上げていく次第です。

これからは接続回路と時折一方通行、もしくは曖の三視点で展開していきます。多分19巻終盤の浜面の戦いは補完できないと思いますので、続きは原作で(汗

絹旗はダイジェスト的に補完します。

原作19巻で一方通行は中ボス(?)的な杉谷と戦うわけですが、接続回路にも中ボスが出現します。

ココから先はオリジナル展開ですので、皆さんが楽しめるよう試行錯誤して書き進めていきたいと思えます。

それでは次回、お楽しみに！

8 - 13 断裂 二ツノ選択 (前書き)

「逆戻りかも知れねえが、これが俺の進む道だ」  
学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「あいつを消さねえと俺が狙われる、だと？」

突然告げられた命令に、インターフェイス接続回路は確認するように聞き返した。

電話の向こうの曖は初対面の時のそれとよく似た、冷やかな声だ。

「あなた、12号線で通り過ぎた「六枚羽」をバイパスで落としたそうじゃない？あれの狙いは浜面仕上だったのよ」

わずかに、インターフェイス接続回路は緋色の瞳を細めた。

絹旗最愛が浜面仕上、そのどちらかが目的であることは言うまでもないが、絹旗はともかく浜面が狙われる理由は浮かんでこない。

「アイテム」の下部組織の一員だった人間。場合によっては、「ユニオン」の下部組織にそのまま招かれ共に行動するかもしれないかった人間だ。

「……それで、折角あいつを潰せる機会を妨害した俺は上の連中からさらに目エ付けられてるってワケか」

ダダダダッ、という靴音が、フロアの向こうから聞こえてきた。

ガチャガチャという金属音もしているところを見ると、曖と共に来たという下部組織の構成員だろうか。

「ええ。でも今すぐに浜面を探し出して殺せば、今回の件は全て水に流してもらえはるはずよ」

(上の目的は、イレギュラー因子の排除。結果的にあいつを潰すこ

とさえできれば、文句はねえ……と)

整理して、インターフェイス接続回路は嘆息した。視界の隅、廊下の突き当たりに黒ずくめの集団を認めると、灰髪の少年は静かに笑う。

「……………くっだらねえ」

『…っ！？あなた、何を……………！』

さすがは精神操作系能力者の頂点だと、インターフェイス接続回路はふと思った。ほんのわずかな声音の違いで、こちらの考えを読んでいる。

明確な答えは示さず、彼は杖をつきながら手近な個室に入ると、出窓の傍で立ち止まった。いつの間に切り替えたのか、杖をついていながらもその首の装置は赤い光を発している。人質の居る広間ではなくインターフェイス接続回路の居る個室に男達が入ってきたのを見て、確信する。

(答え次第では、俺をこの場で無力化するつもりか)

肩越しに見てみれば、男達はライフルを構えていた。杖をついたままで背を向けているせいか、能力使用モードとは思っていないらしい。

インターフェイス接続回路は小さく息をつく、男達から酸素を奪い取った。

バタバタと倒れる音を聞いて、インターフェイス接続回路は続ける。

「俺はクソツたれの悪党だがよ。生憎俺にも美学ツつウモンがある。前の俺は、それこそクズの言いなりのクソ野郎だったが、今は違エ」



そのまま壁を引き裂くと、インターフェイス接続回路はビル風に髪をなびかせて階下を見下ろした。

下には警備員アンチスキルと未だにビルを見上げている野次馬達。

そして裏通りを走っていく、茶髪と黒髪の男女。

方向から彼らの逃走ルートを推測すると、インターフェイス接続回路はモードを切り替えた。彼らの逃げ道さえ分かっしまえば、能力に頼る必要もない。突入した下部組織の人間は、その都度銃で無力化すればいい。バッテリーの仕様が変わったとはいえ、いざという時に対応できなければ意味がないのだ。

「大した理由もねえ奴を殺すなんざ、俺は認めねえ。ましてやクソ馬鹿の計画に沿わねえなんつうアホみてえな理由なら尚更なあ」

『待ちなさい。あなたわかってるの？あなた自身はそれでもいいかもしれない。けど、多重観測エクスプローラも狙われるのよ？あなたを従わせるための手段として』

「そいつは今も、じゃねえのか？」

『…ッ』

指摘すると、たじろぐような曖昧の声が聞こえた。インターフェイス接続回路は低い声で続ける。

「俺はアイツらが平穩に暮らせるだけの環境がココにしかねえから、上に従ってやってんだ。協力すればアイツらの居場所を守ることが出来るが、逆を言えば、協力しなけりゃアイツらの安全は保証できないっつうことになる。クソつたれの悪党相手にする分にはいいが、

今回の事は割に合わねえんだよ。オマエだって分かってんだろぅが」

口にすると、曖が息を呑む声が出た。彼女もまた、理由があつてここに居るのだ。おそらくは、接触した唯一の肉親である姉のために。浜面が死ぬことで、姉を失うことと同じ苦しみを味わうものが居る。それは命令を聞いた時点で、曖の頭にも浮かんだはずだ。

曖はしばらく間をあけて、

『……お願い、指示に従つて』

先ほどよりは感情的な声が、電話口から聞こえてきた。

それと同時に、背後から物音がする。思わず振り向くと、インターフェ路はわずかに目を見開いた。

「……オマエも連中の犬かよ」

目に映った人物を睨みつける。

まるで曖の言葉に呼応するように、銃を構えるその人物を。

「その言い方は納得いかないけど。そうね、一応仕事熱心な方だと思っっているわ」

わずかな笑みを端正な顔に滲ませた、メジャーハート心理定規を。

「仕事、ねえ。いつだか上に刃向かった割には随分と懐柔されてやがんじゃないかねえか」

とは言うものの、インターフェイス接続回路の胸には焦りがにじんでいた。

能力使用モードでない今、たとえ学園都市最高峰の超能力者<sup>レベル5</sup>と言えど弾丸一発で絶命する。いや、蟬脇の話を聞くに殺されることはないだろうが、動けない状態にされることは明白だ。

「懐柔されたわけじゃないわ。私は割り切っただけよ。垣根と追っただのは『夢』と『理想』。今見ているのは『現実』。異常な世界を見てきた上でこの表現もどうかと思うけど、夢を追うより現実を見た方がずっと楽で合理的なのよ？」

促すような口調で言う心理定規<sup>メジャーハート</sup>を見たまま、接続回路<sup>インターフェイス</sup>は状況を打開するため思考を働かせる。

銃は携帯と引き換えにポケットに突っ込んである。だが、取り出し構えていては既に狙いまでつけている心理定規<sup>メジャーハート</sup>に先手を打たれてしまっただろう。杖をついた今の状態では、約秒速350メートルで襲い掛かる弾丸をかわすこともできない。

（銃を使うぐれえなら、装置のスイッチを押す方が早え。だがどの道、俺が動きを見せた時点でこいつは撃つ…）

冷静な顔で焦りを感じ始めていると、電話口から絞り出すような小さな声が聞こえてきた。

「……あなたが彼を殺したくないのは分かるわ。けどね、私達もあなたを仕留めたくないの。あなたが彼を殺さないで、私達の邪魔もするなら、私達はあなたと敵対しなくちゃいけないのよ？ そうしないと…守れるものも守れなくなるから」

（夕凧……）

杖のグリップを握る手に、力がこもる。

会話は心理定規も聞こえていいるのだろう。彼女の顔から笑みが消え、真剣な表情を向けている。

耳は曖に、目は心理定規に。

それぞれの少女の記憶が頭の中を巡っていく。

馴れ合つつもりはないと言いながらも、心のどこかで信頼していた心理定規。

志乃の妹として、あるいは仲間として、彼女同様守ろうと決意していた夕風曖。

どちらも今となつては大切な仲間であり、彼女たちと敵対などしたくない。

けれど。

「、」

電話の向こうの少女は何と思つただろうか。あるいは、毅然とこちらに銃を向けるドレスの少女も。

たった四音の言葉で、願いを跳ね退けられた彼女達は。

「……間違っただよ。人間の寿命を一人の人間の予定表通りに縮めるなんて、正気じゃねえ。オマエらがまだそんなクソ野郎の言いなりになるっつうなら、俺は容赦しねえつもりだ」

携帯の方からは、もう何も聞こえなかった。目の前に立つ心理定規は無表情で、

「……そう。残念だわ」

その刹那、引き裂かれた壁に向かって、少年の体がよろめいた。

\*

(な　　！)

よろめく少年を目にして、心理定規は目を見開いた。

こちらが発砲する前に、接続回路インターフェイスがよろめいたからである。

自らの意志で、杖を床から離すことで。

それが自暴自棄の果ての愚行でないことは、屋内と屋外の境でこ

ちらへ向けられた猛禽類のような杖の足が物語っている。

そう、確かあの杖の先からは

「!?!」

メジャーハート心理定規の顔のすぐ横を、高速で何かを通り過ぎた。

それは部屋の天井にある火災報知器に命中し、そこから甲高い音が鳴り響く。

(まさか……!)

客の命を第一に考える施設の火災報知器は誤作動という形をとって、プログラム通りに事を運んでいく。

刹那、メジャーハート心理定規にスプリンクラーの水が降り注いだ。

「くっ…!」

目に入り込んだ水滴が視界を遮り、対応が遅れる。メジャーハート心理定規が目を拭い腕で水を防ぎながら、引き裂かれた壁から下を見下ろすも。

灰髪の<sup>レベル5</sup>超能力者は、忽然と姿を消していた。

(逃がした…)

スプリンクラーのせいですぐ濡れになり、肌に張り付くドレスから端末を取り出す。

「夕凧。接続回路インターフェイスに逃げられたわ。彼を反逆者としてルートNから…ちよつと、聞いてるの？」

呼びかけても、返事が返ってこない。心理定規メジャーハートはしばらく考えるように目を瞑ると、踵を返した。

(……慣れていない、か)

彼女にとって、この程度のことは別段珍しいことではない。暗部に沈んでいれば裏切り、離反は日常茶飯事だ。『スクール』では特にそういった問題が発生し、反乱分子として排除することも少なくない。

かつての仲間を敵に回すなど心理定規メジャーハートにとっては慣れたものだが、まだ浸りきっていない曖には辛いのだろう。

「…駄目だったわ」

『そうですか。仕方ありませんね』

連絡先の猫なで声は、大して動揺していないようだった。これも、アレイスターの予測の範疇だとも言うのか。

「夕凧には無理だろうから、彼は私が追うわ。15人ほど人員を寄越してくれるとありがたいんだけど」

『いえ、あなたは夕凧曖と共に浜面仕上の始末をお願いします。接続回路インターフェイスの処理は我々にお任せ下さい』

あっさりと猫なで声が言った。心理定規メジャーハートは眉をひそめる。

「どういう事？あなた、『命令を聞き接続回路が離反を口にした場合、速やかに無力化し拘束せよ』って命令を夕凧に伝えたんじゃなかったかしら」

それが嫌で、曖は彼の説得を試みたのだ。別働隊を使うつもりだったのなら、最初からそれを曖に伝える必要などないだろうに。

『可能性としては低いですが、彼女の説得で接続回路が命令に従うとも考えられましたからね。ああ言えば彼女も本気で説得を試みしてくれるでしょうし、私としては培われた絆のようなモノに期待していたんですが…やれやれです』

残念そうと言うよりは失望したように、猫なで声は言った。一番のショックを受けているのは間違いなく曖だろうに。

だが、心理定規メジャーハートはそんなことをいつまでも考えるようなことはない。暗部に生きる人間ならではの切り替えの早さだが、一般人の主観から見れば『無情』などと言われるかもしれない。

「…それじゃ、私たちは命令通り浜面の始末をすればいいのね？接続回路が浜面と接触していた場合はどうするの？」

『その場合はこちらで一網打尽にします。ああ、その前に絹旗最愛の拘束をお願いしておきましょう。浜面仕上のライフラインは潰しておかなくてはいけません』

「わかったわ」

心理定規メジャーハートは通話を切ると、エレベーターを使って入り口として利用した地下倉庫へと向かった。そこに10人ほどの武装した男女が待機しているのを見て、心理定規メジャーハートは濡れたドレスを軽く絞り、



「命令は伝わっているわね？」

確認するように言うと、黒ずくめの武装集団は一様に頷いた。心<sup>x</sup>  
理<sup>ジャーハート</sup>定規は小さく笑い、

「索敵を急いで。対象は浜面仕上と絹旗最愛。絹旗拘束と同時に浜  
面を追えるように、常にトレースしておいて」

闇に沈んだ少女の声に、迷いや動揺は一切なかった。

どうも、櫻井です。

昨日は更新できなくて申し訳ありませんでしたm( \_ \_ )m

言い訳をさせていただくと、昨日は文化祭の後片付けがありましたて、実行委員の友達の手伝いをしていたら8時くらいまでかかってしまつて(汗)

ド疲れ帰宅をしたところ、寝入っていつの間にか朝になっていた、なんて情けない理由です。本当に申し訳ありませんでした。

さて、今回の内容。題名で大体予想ついた方も居るのでしょうか？

接続回路の『ユニオン』離脱が本話の主題です。

培ってきた矜持をくだらない理由で破らなくてはならない現実を前にしての行動ですが、ちゃんと考えはあつての行動です。次回は逃亡しながらの接続回路がその辺は語ってくれます。

猫なで声は今回かなりダークな一面を出させていただきました。地下鉄の時の人質をなるべく守ろうと指示を下したシーンとのギャップのようなものを目指したつもりです。

今回は曖と心理定規の心理面にも気を配りました。二人とも女性であり精神操作系能力者だけど立場も考え方も違うというのに焦点を当てましたね。

今回は接続回路メインのお話になります。どうぞお楽しみに

8 - 14 危殆 定マル目的 (前書き)

「なっ……ただのショットガンじゃ、ない!？」

『オフエンスアーマー 窒素装甲』を有する元『アイテム』の構成員

最愛

絹旗

「やつほー。絹旗最愛ちゃんていいんですよね？」

学園都市外部からやって来た傭兵のスナイパー

フアニー＝ゴージャスパレス

ステ

## 8 - 14 危殆 定マル目的

接続回路インターフェイスはサロンから少し離れたビルの給水タンクの陰に隠れていた。

日付変更まで残り2時間もないが、車の通りは多い。誰の仕業か、先ほど見かけた信号が全て赤になっていたこともあって、今ようやく動き出した、と言ったところだ。

(まずは浜面とあのガキを助けることから始めねえとな)

学園都市そのものに狙われているというこの状況から考えると、やはり都市の中に潜伏させておくのは危険だろう。外部、特に海外に亡命させることが出来れば、ある程度は生存確率が上がる。しかし、幾ら接続回路インターフェイスと言えども逃避後の浜面たちを警護し続ける等不可能だ。そもそも、彼らの道を選ぶのは接続回路インターフェイスではない。

(アレイスター直々の命令となると、特定の組織をブツ潰してもどうにもならねえしな……)

接続回路インターフェイスが『ユニオン』から離反する決断を下したのは、結局のところ、多重観測エクスプローラを殺されないという自信があったからだ。蟬脇も言っていたが、『接続回路インターフェイス』という能力は上層部から重要視されているらしいし、仮に多重観測エクスプローラを殺すとするなら本当に最後の手段のはずだ。接続回路インターフェイスが浜面に味方したとしても、確実に浜面を殺せなくなるわけではない。『多重観測エクスプローラを殺さなくてはどうにもならない状況』まで、そのカードは残しておくのが定石だろう。

(最悪、こっちから交渉を持ちかけるつつうのも手か。計画に沿わない因子と等価になるような情報をこっちが得られれば、連中も無

視はできなくなる。とするなら……）

ニヤリ、と接続回路は笑みを浮かべた。該当する情報が、ひとつだけある。

『ドラゴン』。

その情報さえ手に入れることができれば、上層部と交渉するだけの権限を得られるはずだ。

（相手は『ユニオン』を含む学園都市全体か……ハッ、上等じゃねえか）

浜面を仕留める部隊と、接続回路を拘束する部隊。直接相手取るのはその二者。こちらの武器は、あらゆるものを一瞬で破壊するだけの力を秘めた超能力と10発入りの拳銃に仕込み銃。バッテリーも、能力使用モードでも十数分ぶん残っている。

勝算は十分だ。

接続回路は立ち上がり、夜空にそびえる摩天楼を見回した。緋色の双眸が、『協議会』が会議室を構えていた建物の方角に向けられる。日中であればここからでもその姿を見ることが出来るのだろうが、さすがに夜闇の中で確認することは難しい。

（確か『協議会』は、総括理事会の下部組織……つまり、総括理事会で決定された案件を直接実行する組織だったはずだ。連中が『ドラゴン』の名前だけでも知ってやがったのは、総括理事会の情報処理みてえな役割も担っていたからだと考えられる。つうことあ、やっぱ『ドラゴン』の情報を手に入れるとするなら総括理事会経由しか

ねえな…)

おそらく総括理事会に一番近いであろう『協議会』よりも情報に迫っている組織など他にはないはずだ。『ユニオン』の猫なで声ほどの程度まで知っているかは謎だが、どの道その線から探りを入れるのは不可能。

その瞬間。

インターフェイス 接続回路の背後の給水タンクが、轟音を立てて爆発した。

「ッ！」

とつさに首のスイッチを押して飛びのくインターフェイス 接続回路。彼の居た空間に、大量の水を撒き散らしながら給水タンクが倒れてくる。その後ろに見えたのは、一台の輸送ヘリから出てくる特殊部隊。

(も才追ッ手か?)

そんなことを思う間にも、黒ずくめの男たちから銃弾が放たれる。能力使用モードの彼からすれば、銃弾など何の意味もなさないはずだったのだが。

(!?)

男たちの放った弾丸は、インターフェイス 接続回路の『壁』に触れる前に、その寸前で爆発した。

炎を伴わない爆発だった。目を見開いていたインターフェイス 接続回路は、その正体に気づいた瞬間に烈風によってそれを部隊の方に吹き飛ばすも、

彼らはものともせずこちらへと走ってきた。

男たちが放ったのは銃弾でもグレネードでもなく、砲弾型の催涙弾だったのだ。

(チツ！コイツら、分解公式を使ッてねエと踏ンで……！)

無論一度この手を使えば、二度は同じ手は使ッてこないだろう。  
インターフェイス  
接続回路ははつきりしない視界の中で大きく手を広げ、

「舐めんじゃねエぞクソツたれがア！！」

怒号と共に、給水タンクから飛び散った水を足で踏みつけた。

その刹那、踏みつけた水は分子配列を変更される。

「……っ！？」

こちらへ走ってきていた男達の数人が立ち止まった。

彼らの足には、月に照らされてわずかに光る氷が張り付いている。

履いている特殊なブーツが、氷によって固定されていた。

「くそっ…っわっ！」

何とか氷のトラップから抜け出そうとするが、その前に強烈な烈風が彼らの体を吹き飛ばす。数人の仲間を巻き込んで、男たちがピルから転落する。その一撃で、人数は半分にまで減っていた。

「ジャミングまだか！？早くしろ！！」

それを見て、催涙弾でわずかばかりの目晦ましをしながら男が叫ぶ。ジャミングという言葉聞いて、インターフェイス接続回路の目は数人の男達から上昇していく輸送ヘリへと向けられた。

「忠告ご苦労さん」

インターフェイス接続回路は男の胸倉を掴み上げ、そのまま地面に押し付けた。グシャリ、という破裂音が、男の腹から聞こえてくる。裂けるような笑みと共に、彼は意識を周囲の空気、その中に存在する無数の原子へと向けた。両手を掲げたインターフェイス接続回路の頭上に、それは形成されていく。

形作られたのは、青白い光を放つ光球。

それは高電離気体と呼ばれるものだった。

大気中の原子核と電子との結合を解き、生じる陽イオンと電子によつて作り出す、第4の物質の形。その眩い光から想像できる熱量は、人体等あつという間に溶解させてしまうレベルのものだ。その破壊力は勿論のこと、そこに新たに電流を流し込めば強力な電磁場を発生させることが出来る。

そう、ヘリから放たれようとしているであろう、ジャミング電波を攪乱する程度には。

インターフェイス現に接続回路は今現在、装置から脳にかけてチリチリと妙な感覚を感じていた。おそらく、攪乱しているジャミング電波の漏れが影響しているのだろう。



(さアて……そろそろ『潰し』にかかるとすツかア)

インターフェイス  
接続回路は周囲への影響を算出し微調整に入ると、新たな公式を組み立てた。

彼の頭上に存在する『高電離<sup>プラスマ</sup>気体』を、へりの向こうの空間へと移動させる公式を。

その刹那。

発光する直径1メートルほどの閃光が、へりのエンジン部を貫いた。

火の玉になった輸送へりの向かう先には、第三学区最大の人工池があった。巨大な公園の一部であるこの人工池は、深さ8メートル面積約100平方メートルもの大きさを誇っている。そこに墮ちるといふことも計算済みだった。

はるか後方で轟音と共に水柱が立ったことを確認し、それを頭の片隅に置いた<sup>インターフェイス</sup>接続回路は部隊長らしき男の無線機を剥ぎ取り、通信履歴を目にして眉をひそめた。

(美濃部<sup>みのへ</sup>……?)

通信回数から考えるに、おそらくこの者たちの上司なのだろう。

(このタイミングで『俺』を狙ってくる…順当に考えりゃ、『ユニオン』が相手と考えるのが妥当だが…美濃部つつうのはあの鼻につく猫なで声の名前か?いや、こんな下っ端上がり程度の野郎の端末に記録が残されてるくねえなら、『ユニオン』の構成員の俺たちに名乗ってるはずだ。つつうことは、この美濃部ってのはあの猫なで声じゃねえ。こいつは一体……)

しばらく考え、肉塊の転がる屋上に彼の舌打ちが響いた。

(考えてても仕方ねえ。とりあえずここから移動しねえとな)

断ずると、インターフェイス接続回路は男たちの死体をそのままに高層ビルから飛び降りた。

\*

「うおおっ!?!」

ドゴオンッ!!という爆音を聞いて、浜面仕上は顔を強張らせた。インターフェイス接続回路に言われたとおり、滝壺が入院していたホテルへと向かう途中、突如として起こった爆音。その正体は何なのかは分からないが、ビルの間隙からわずかに水柱が立つのを目にし、危機感を感じているところだ。

「今度は何なんだ!?!テロリストは『ユニオン』がどうにかしたんじゃないかねえのかよ!?!」

何も知らない浜面は、今日一日の災難はもう終わったものと思っていた。その矢先のあの爆発。勘弁してくれと思うのは当然の事な

のかもしれない。

二人は第三学区の駅近くまでやって来ていた。

地下鉄ジャックに個室サロンの事件などが重なったせいか、付近に人の姿はない。強いて言うなら、24時間営業のコンビニにバイトらしい青年が居るくらいだ。

浜面が何事かと考えていると、後ろで携帯電話を取り出ししていた滝壺がぽんぽんと肩を叩いてきた。

「あん？どうした滝壺？」

「……私の携帯電話に、きぬはたからメールが来てた」

可愛らしいデザインの携帯の画面を、こちらに見せる。浜面はメールの文面を黙読し、軽く頭を掻いた。内容は、『サロン脱出の手引きをするから少しだけ待っていて欲しい』とのことだ。メールが送られてきたのは数十分前。結局二人は自力でサロンを脱出できたわけだが、絹旗はどうしているだろう。

「連絡はつくか？」

「……何度もきぬはたに電話してるけど、繋がらない」

ぼんやりと不思議そうに、滝壺は自分の携帯を眺めている。その姿を見て、浜面はふと思った。

(この滝壺のボーっとした感じは『体晶』の影響なのか…?)

初めて会った時から滝壺はこんな感じだったが、その時には既に

彼女は『体晶』を使っていたし、判断はつかないのだが。

「はまづら。これからどうするの?」

言われて、浜面は気付いたように「ん、」と小さな声を漏らし、

「そつだな…絹旗は俺達よりもよっぽど頑丈な大能力者<sup>レベル4</sup>だし、一応メールも送ってあるんだろ? だったら下手に動かないで、絹旗からの連絡を待った方が」

浜面が言いかけたその瞬間。

二人から離れた地面が、爆音と共にめくれあがり、紅蓮の炎が噴き上がった。

「な　　!」

その光景に、浜面が目を見張る。先ほどの水柱よりも激しい炎の柱が、夜の街を照らしていく。

しかも、爆発は一度ではなかった。

最初の爆発から一秒と置かず、立て続けに炎が巻き上がり、裂けたアスファルトから噴き出したそれらが近くに駐車していた車を呑み込んでいく。見る限り、人が巻き込まれているような様子はないが、浜面は唇を震わせながら口を開いた。

「ふざけんな…滅多な事が起こってんじゃねえか!!」

＊

アクセラレータ

一方通行は黒塗りの防弾車に乗り、第21学区から第二学区を指していた。

彼の隣には、白髪の老女の姿がある。

毅然と背を正し正面を見ている彼女は、

アクセラレータ

一方通行を含む『グループ』

』にとって重要なカードだ。

おやふね もなか  
親船最中。

こうして彼女の顔を見るのは、10月9日の暗部闘争以来である。

個室サロンでの一件から再び集合した『グループ』は、直後に謎の襲撃を受けた。

彼らがその正体にたどり着くまで、そう時間はかからなかった。

彼らに直接コンタクトをとり、

スパークシグナル

元迎電部隊の残党を叩くよう命じ

た総括理事会の一人、潮岸。

彼が『ドラゴン』の存在を知ろうとする者を排除するよう仕向けていたのを見ると、『グループ』は彼にとっての『処分対象』になっってしまったというところだろう。

アクセラレータ

その後、辛くも潮岸の射程範囲から外れた一方通行は、潮岸を叩くために必要なカードとして土御門に言われた通り親船と接触し今に至る。

漠然と、同じ総括理事会の権限を利用するつもりなのだろうと一方通行は考えていた。

(…慣れねエコトするもんじゃねエな)

ここまでこぎつけるのに、一方通行は初めて他人との会話による交渉をする必要があった。交渉自体は成功したが、一方通行自身の力で全てを成したわけではない。

何の力もない子供と、それを受けて決意する老女が居てこそその結果だった。

「……………?」

一方通行が窓の外に目をやり今回の件について考えていると、不意にポケットの携帯が振動した。

思い浮かぶ相手は金髪サングラスの少年くらいのものだが……。

「鳴っていますよ?」と親船が声をかけて初めて、一方通行は携帯を取り出した。土御門が相手なら直接親船と話させようかなどと思いつながら表示を見ると、そこには予想外の番号が示されていた。

(インターフェイス  
接続回路……!?)

それはテロリストを片付け、任務を終えているであろう人物だった。

怪訝に思いながら、一方通行が回線をつなげる。

『……オマエに聞きたいことがある』

繋がった瞬間、切羽詰まった声が聞こえてきた。電話の向こうは不気味なほど静かで、屋内に居ることが推測される。

垣根帝督が打ち止めを狙っている<sup>ラストオーダー</sup>と忠告してきた時に近い声音だった。

「どオした？」

『「美濃部」つつう名前に心当たりはねえか。今はそいつを探してんだ』

聞き覚えのある名前だと、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は思った。記憶を遡る。そう、確か『フラフープ』の件を終えた後……。

『邪推しなくても良いよ。開示されない情報に不安がらなくても、全ては繋がっているからね。君達は君達のやるべき事をやっていれば、じきに情報は集約されるだろう』

ここで、画面が揺れて。

『杉谷クン。美濃部クンも』

「ッー！」

思い出して、一方通行は息を呑んだ。今更だが、個室サロンで遭遇した男の名も杉谷だった。

(アイツは潮岸の部下だったってことか……。『グループ』だけでなく、自分の部下まで迎電部隊の始末に向かわせてたとはな。潮岸の野郎、用心深エって噂は事実みてエだ)

胸の内で納得すると、一方通行は口を開いた。

「そいつはおそらく潮岸の側近だ。潮岸の野郎が漏らしてやがったからな」

『潮岸……総括理事会の……ははっ、なるほどな』

電話の向こうで、接続回路も納得したような声を漏らした。一方通行は眉をひそめ、

「話が見えねエンだが。何でオマエが潮岸の側近なんかを探してんだ」

『色々あつてな。「ユニオン」を離脱した傍から攻めてきやがった部隊の端末ん中に入ってたんだよ』

「『ユニオン』を離脱しただと?」

あまりにあっさりと言う接続回路に、一方通行は眉根を寄せた。ということは、今の彼はバックに何も無い状態だと言うのか。

『ああ、それで…チツ、悪いな。どオやらお喋りの時間はここまでみてエだ』



「ンだと？」

アクセラレータ

一方通行が聞き返した瞬間、電話の向こうから爆音が響いてきた。何事かと耳をそばだてるが、サブマシンガンを連射する音が聞こえたところで回線が切断される。

（状況から鑑みて、今アイツを襲ってるのは『ユニオン』の連中か？いや…）

インターフェイス

美濃部という潮岸の側近が接続回路を狙っているということは、彼もまた『ドラゴン』の情報を集め『処分対象』になったということだ。それに加えて、『ユニオン』の部隊も彼を追っている。

（今のアイツは俺と同じでバッテリーで動いてる状態だ……バックアップもなしにデケエ組織を二つも敵にしてるってのは……）

「『グループ』のお仲間ですか？潮岸と言っていましたか……。銃声も聞こえましたが、助けに行かなくても良いんですか？」

思索に耽っていると、親船がこちらを見ながら尋ねてきた。気付いたように一方通行は目を開けると、今自分がすべきことを思い出さず。

「今はそれどころじゃねエからな。それに、アイツならそう簡単に死にやしねエよ。…行き先も、どオやら同じみてエだからな」

インターフェイス

そう、接続回路の目指す先も潮岸の根城なのだ。今の彼では、自分たちのように総括理事会のメンバーを味方につけることも出来ない。

ならば。

（くだらねエ借りは返させてもらっぜエ、  
インターフェイス 接続回路！！）

夜闇に染まるような黒塗りの防弾車が、  
闇を裂きながら突き進んでいく。

どうも、櫻井です。

色々詰め込みすぎたせいか、文字数が多かったと思います。19巻を前後編に分けて章を二つ使おうかなどと思いましたが、いくつかシーンをカットするとそこまで先も長くなさそうだったのでこのまま続ける事にします。

今回は色々突っ込みどころが多かったかと(汗)

まずはプラズマの件ですね。ジャミングを回避しながら攻撃にも転用できる応用として思いついたのがそれでした。プラズマに一定の電流を流すと強力な電磁波を放出するという話を授業で耳にしたので、それを使わせてもらいました。ミサカネットワークからの電波もジャミングされるのではと思った方がほとんどだと思いますが、そこは僕の私見で説明させていただきます。

まず、ヘリからのジャミング電波はヘリを中心として同心球状に展開されています。これをプラズマによる電磁波で軽減した状態がプラズマを放つまでの状態になります。ミサカネットワークは中心点が存在しないので、全方位から電波が飛んでくることになりました。プラズマの電磁波による影響は双方に影響を及ぼしますが、全体の波の数はミサカネットワークの方が多いので、ジャミング電波を上回る量のミサカ電波を受信していることになり、本来はジャミング電波で多い尽くされてしまうミサカ電波を受信できるだけの隙間を作った、という事になりますね。

一方通行の『借り』とは垣根戦での手伝いの件です。彼の借りの

返し方は、皆さんの想像されたとおりだと思います。杉谷が潮岸の部下だと一方通行が察知したタイミングが原作とは違いますが、どうせなら美濃部と一緒に思い出させたほうがいいかなと少し変更しました。ご了承ください。

さて、この後は中ボスだったり大ボスが居たりと波乱の展開になる予定です。

どうぞお楽しみに！

8 - 15 業火 初メテノ再会 (前書き)

「ここでこれが出るのは早いんじゃないかねえか？」

アレイスターの計画を阻害する因子 浜面 仕上

## 8 - 15 業火 初メテノ再会

心理定規と夕風曖は『ユニオン』のキャンピングカーに乗り、第三学区を走っていた。

キャンピングカーの前や後ろには、猫なで声から『支給』されたハウンドドッグ猟犬部隊が乗っている。0930事件で木原数多と共に一方通行を追い詰め打ち止めにウイルスを流し込んだ精鋭部隊だ。もつとも、一方通行と接続回路、そして妙な『現象』によってその大半は入れ替えられているのだが。

接続回路インターフェイスが居なくなり二人だけとなった現行『ユニオン』メンバーの二人は、テーブルのディスプレイに目を向けていた。

「……接続回路は学園都市の別働隊に狙われているようね」

ディスプレイを見て、心理定規は呟くように言った。目の前の、つい数時間前まで接続回路が寝そべっていたソファには、無表情な曖が座っている。

「『声』の言つてた部隊でしょう。それに彼の事は関係ないわ。浜面仕上の居場所は掴めてるの？」

今朝たわいのない話で接続回路インターフェイスをからかっていた時とは違う声。強いて言うなら、出会ったばかりの頃の曖に戻ったようだった。心理定規は画面に素手で触れると、画面内に浮かび上がったキーを叩く。

すると画面が切り替わり、第三学区の駅周辺の地図が浮かび上がった。

「今は地下街に居るようね。情報によれば、絹旗が何者かと戦闘をしているらしいわ」

曖は考えるように地図を見つめ、

「それじゃ、一気に攻め込んで絹旗の回収と一緒に済ませましょう。私は外で待機しているから、あなたは突入して頂戴」

「わかった。夕風は浜面が逃走に使いそうなルート三つをカバーしておいて」

「了解」

素っ気無い作戦会議を終え、心理定規メジャーハートは携帯電話を取り出した。

\*

絹旗最愛は自らを囲む業火に表情を曇らせていた。

彼女が居るのは第三学区の地下街なのだが、人々で賑わうそれは今や見る影もない。

カップルやら会社帰りの大人やらが食事を楽しむレストランは炎に包まれ、料理の見本が置いてあったショーウィンドウは粉々に割れてしまっている。絹旗が立っている通路も熱気が充満しており、秋だというのにじっとりとした汗が皮膚から這い出て頬を伝っていくのがわかった。

「あはは」

絹旗ではない女の声が聞こえる。長身金髪の女だ。この状況、  
『絹旗最愛に対し有利な状況』を作り上げた張本人。

ステファニー「ゴージャスパレス。

「この分だと、あなたのチカラはどのくらい発揮されるんですかねえ？」

「ッ！」

向けられた銃口に、絹旗は息を呑んだ。

ステファニーがとった手段は単純なものだった。

絹旗の『オフエンスアーマー窒素装甲』は、空气中に存在する窒素を利用して鉄壁の防御を可能とするものだ。その防御能力は『ダイクマター未元物質』の攻撃をもつてしても致命傷を与えられないほど高い。

だが逆を言えば、この能力は窒素が無ければ機能しないという欠点がある。

故にステファニーは、地下街のレストランなどにあるプロパンガスを利用してこの戦場を火の海にし、空間に詰め込まれた条件を歪めようとしているのだ。

(こつなつたら…一か八か…！)

絹旗の意識が、自分の懐に向けられ



「絹旗ッ！！」

ハッ、と絹旗は初めてステファニーから目を離した。

オレンジ色の炎の向こうに見えた、見知った顔。それを処理するのとはほぼ同時に、ステファニーがこちらに向けていた銃口を炎の向こうへと向ける。

「超伏せて下さい！！遮蔽物に隠れるだけじゃダメです！！」

反射的に叫び、炎の向こうで動きがあった一瞬に。

ドバツ！！と、ステファニーの銃口から大量の弾丸が飛び出した。

バリイン！！バギャツ！！という破壊音が、轟々と音を立てる炎に混ざる。こちらからは確認できないが、おそらく射程内の壁や柱をゴッソリ決ったのだろう。

それだけの威力を、あの破壊兵器は持ち合わせている。

炎の向こうに目を凝らしていると、陽炎のようにぼんやりとしてはいるが再び少年たちが動いたのがわかった。わずかに絹旗が安堵すると、災厄を引き起こす銃口が再びこちらに向けられた。

「やれやれ、窒素を使って壁を作っているんだから、空気をどうにかしちやえば封じられると思ったんですけどね。やっぱり空気中の70%を占める気体を完全に追い出すのは難しそうじゃないですか」

垂れ込める熱気に一筋の汗を垂らすことなく、涼しい顔でステファニーは言い、ふ、と鼻で笑うような音を立てた。

「でも、特定の条件を揃えて爆破すれば、一瞬だけ真空に似た状態を作り出せるらしいじゃないですか。と言つても、かまいたちを作るような極めて局地的な……そう、せいぜい数十センチ程度の穴ですけど」

「ッ!？」

狙いが分かり、絹旗は目だけを浜面たちの居る方向へ向け。

「浜面!!超早く脱出を

ッ!！」

全力で叫ぶが。

「その穴から鉛弾を叩き込めば、自慢のシールドは使えないんじゃないですか?」

女の冷笑と共に、二人の間、そしてその周りで、複数の爆発が同時に巻き起こった。自らを取り囲むように発生するそれらは、網膜を焼くような閃光と熱を伴って襲いかかる。

(ぐっ……

ッ!！」

閃光に耐えきれず閉じてしまった瞼を、再び開いたその瞬間。

まさしく『目の前』で、超火力の銃身が向けられていた。

「回避するだけの距離はなく、この一瞬の間は絶対の壁に穴が開けられている。

一瞬、どこからか自分の名を呼ぶ声が聞こえた気がしたが。  
絹旗の瞳は、女の白い指が動く瞬間を目にしていた。  
それから一瞬と経たないうちに。

嵐のような災厄が、絹旗の体に食いついた。

\*

接続回路インターフェイスは第二学区行きの貨物列車に乗り込んでいた。

日付変更までは30分。『ユニオン』を離脱してから1時間と少しといったところだ。

(ここまで来る間に5組か)

コンテナとコンテナの間に座り込んで、接続回路インターフェイスは記憶を辿る。

一番最初に襲ってきた部隊は、美濃部、即ち潮岸が差し向けてきた部隊だった。その後も何度か戦闘を行なっていたが、『ユニオン』の追っ手は2組目、3組目で立て続けに来たきりで、以降は全て潮岸の部隊。3組目の襲撃を受けてから、もう20分ほど経とうとしている。ここから考えられることは……。

(浜面に対してアクションを起こしてねえから、優先順位を下げられた、つつうところか?)

『ユニオン』が恐れているのは接続回路インターフェイスという超能力者レベル5が浜面仕上と合流し、彼を国外に逃がすなりの手助けをすることだ。それを除けば、『ユニオン』が接続回路インターフェイスを狙う価値は大分低くなることだろう。もっとも、だからと言って完全に拘束を諦めたわけではないだろうが。

(浜面を追ってるのはおそらく『ユニオン』を筆頭とする部隊。もし俺と浜面が合流すれば、それだけあいつを追う連中の数は増える)

そう考えると、むしろ合流することでさらに浜面を危険に晒すことになる。勿論合流するなら接続回路インターフェイスは浜面と滝壺を亡命させるまで手伝うが、これからずっと二人を守り続けることも不可能だ。ならば、浜面と直接接触するのは避けた方がいいだろう。問題は、その間に彼らが仕留められてしまいかもしれないことだが……。

(浜面には悪いが、なんとか生き残ってもらうしかねえな。連中がアイツらを仕留めるより先に、『ドラゴン』に辿り着けば道は拓ける)

先ほど一方通行アクセラレータと連絡をとったが、自分が潮岸に狙われているということとは『グループ』も同様と考えるのが妥当だ。あっさりと自分に潮岸の情報を渡したという事は、周りに『グループ』のメンバーは居ないのだろう。つまりは襲撃を受けた後で、各自バラバラに行動している状態。『グループ』の上も『ドラゴン』の情報が漏れることは良しとしないだろうし、一方通行アクセラレータが乗っていた車両は『グループ』のものではないと考えられる。彼らも『ドラゴン』を追っていたという事は、目的地は潮岸の根城だろう。四六時中駆動バードスイッチを

身に纏うほど用心深い男とまともにやり合ったために必要な条件を揃えるとしたら。

気付いて、インターフェイス接続回路はフツと笑った。

(どうやら鍵開け当番は向こうでやってくれるみてえだな。俺ア中のニワトリの世話を手伝うか)

そう思い、インターフェイス接続回路は立ち上がると、銃を引き抜いて引き金を引いた。

パァン!!パァン!!と素早く二発、左右を塞ぐように現れた黒ずくめを撃ち抜いて、インターフェイス接続回路は首のスイッチを押して飛び上がった。

コンテナの上に着地すると、目の前に巨大な砲口が突きつけられた。

「…あア？」

裂けるように笑いながら、インターフェイス接続回路はその砲口を握りつぶし、生まれた爆発の全てを相手の体に叩きつける。

『ぐぼアツ!!』

爆発をまともに受けた男：いや、装甲に包まれたずんぐりした体躯の兵器は、悲鳴を上げて線路の上を転がっていく。

それはパワードスーツ駆動鎧と呼ばれるものだった。『シークレットナンバー非公式の超能力者』だった頃にも、『スクール』に居たときにも相手した事がある。暴走する能力者を取り押さえるためにアンチスキル警備員などにも支給されているものだが、数十メートルの貨物列車に乗りこちらを狙っているそれらは

暗部御用達のチューンナップが行なわれているらしい。装備や形状に若干の変化があるのを、一接続回路「インターフェイス」は認め  
ていた。

「生身の人間じゃア相手にならねエと踏んで、そんなモンまで持ち出してきやがったか。ハハッ、笑えんなアチキン野郎共。どこの部隊だ？『ユニオン』か？潮岸か？……いや、んなこたアどオでもい  
いか」

全身に風を受け、インターフェイス接続回路は笑っていた。

彼は徐に手を広げ、前方からこちらを狙うパワードスーツ駆動鎧を見渡して。

「皆殺しだ。『格』の違いってヤツを見せてヤンよ」

言つと、数体のパワードスーツ駆動鎧から様々な攻撃が放たれた。

弾丸、レーザー、ミサイル、様々な種類のそれが、前方から放た  
れる。

（あアン？あアそオカ。複数の攻撃を同時に行なつて俺の演算量を  
極端に増やすつもりか。さすがにレーザーはオフエンスアーマー『窒素装甲』でも防ぎ  
きれねエからなア）

レーザー兵器を用いてきたのは、その辺りの不意を突くつもりだ  
つたのだろう。立て続けに放たれるそれらを見て、インターフェイス接続回路は嘲笑  
う。

まったく、誰を相手にしているのかと。

その刹那、インターフェイス接続回路は動き出した。

『ッ!?!?』

パワードスーツ 駆動鎧の方から、息を呑むような声がした。次の瞬間には、声を発したパワードスーツ駆動鎧は自らの放ったレーザーに貫かれている。その一瞬後に、インターフェイス接続回路の居たコンテナが爆炎に包まれた。それを突き破り、コンテナを飛び移りながら迫る灰髪の少年。その手には、爆炎から一続きになった業火が『握られて』いる。

「そオラア!!!」

少年が叫ぶと、手の中の炎が数体パワードスーツ駆動鎧を包み込む。パワードスーツ 駆動鎧の強度を以ってすれば、その程度の炎は何の意味も為さないはずだったが。

突如として、炎は勢いを増し、数瞬後には爆発となって列車を震わせる。

『ごがッ…がアアアアアッ!!!』

強烈な爆発は数体パワードスーツの駆動鎧を巻き込みその巨体を吹き飛ばす。おそらく中の人間は火あぶりよりも惨い状態になっていることだろう。そのまま火の玉となったパワードスーツ駆動鎧は、自動車のスクラップ工場らしい敷地の中に転がっていく。

それを横目で見て、インターフェイス接続回路は残る3体のパワードスーツ駆動鎧に目を向けた。

「狙う相手を間違えてたなア、テメエら。俺の演算速度云々ツツウ作戦の根ツこから欠陥だらけなんだよ。さアどオする? アイツらみてエに爆死してエか? それとも尻尾巻いて逃げ出すか? 好きな方選

べ。このままスタコラ無様に逃げるツてンなら、放ツといてやるけどよオ」

言つと、残つた2体のパワードスーツ駆動鎧は顔を見合わせた。やがて頷くような拳動をとると、ブワツ、と浮くように跳躍して貨物列車から飛び降りる。

ハアと嘆息し、インターフェイス接続回路がスイッチを切り替えようとした、その時だった。

「器が広いじゃないか、インターフェイス接続回路」

「ッ!？」

背後からした声に、弾かれるように振り向くと。

そこには妙な人物が立っていた。

パワードスーツ駆動鎧と比べてスマートな、各関節と胴体という最低限の装甲をした戦闘服。その手はパチパチと、賞賛するように拍手を続けている。

だが、それらの情報は大きく印象に残らなかった。

インターフェイス接続回路の緋色の瞳は、その頭部に向けられている。

金と白で彩られ、縦の長さが顔の倍以上あるのっぺりとした異様な仮面だ。

さながら携帯電話のデコレーションLEDのように、複数の光で仮面全体に模様が描かれては消えていく。目や鼻、口といった部分



は見受けられず、表面は顔に沿って曲線を描いてはいるが、凹凸は一切ない。

「……なんだ、テメエ？」

異様な風体の人物に対し、インターフェイス接続回路は端的に尋ねた。相手は拍手の手を止め、あっさりと答える。

「茂田だよ。直接会うのはこれが初めてだろうか？」

聞き覚えのある名前に、インターフェイス接続回路は目を剥いた。

どうも、櫻井です。

今回はまあ、ぐっちゃぐちゃなのは心配するな、自覚はある。と  
いった具合で(汗)

実は夕方までずっと内容について考えていました。絹旗サイド(正確には浜面サイドですが)も取り上げたかったので…ごめんなさい。

さて、今回は割と派手な戦闘にできたかと。絹旗VSステファニー  
ーといい接続回路VS駆動鎧といい炎が良く出てくる回でしたね。

茂田：はい、なんかスゴイことになって帰ってきました(笑)

次回は接続VS茂田となる予定です。

それでは次回、お楽しみに！

8 - 16 真実 仕組マレテイタ運命 (前書き)

「むむ、そういえば本章の特典のSSの内容を考えていませんでした、とミサカは熟考を始めます」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクストローラ  
多重観測

(随分派手にやってるわね)

壁を破り地下街へと入り込んだ心理定規<sup>メジャーハート</sup>は、目の前の惨状に目を向けていた。素肌にちりちりと熱を浴びせかける、周囲を囲う炎。炎が這い回っただけではないであろう崩壊した壁やショーウィンドウ。見れば、数え切れないほどの弾痕らしい穴も見える。

彼女より先に飛び出した獵犬部隊の者達が、炎の中で立膝をつく茶髪の少女を押さえ込み、その後でそれよりも少ない人数が仰向けに倒れる金髪の女を拘束する。

「浜面っ!!」

茶髪の少女、絹旗最愛は、炎の向こうに立っているであろう人物へと叫んだ。その方向に目を向けて、心理定規<sup>メジャーハート</sup>は薄く笑う。

『仲間』という関係は、ここまでのことを起こすのかと。

「超逃げてください!!おそらく彼らの狙いは私ではありません!  
!むしろ本命はあなたの方です!!」

「……………ッ!!」

炎の向こうで、浜面らしき影が何かを叫ぶのが聞こえた。そう、確かに自分たちの目的は絹旗だけではない。浜面の逃げ道をひとつでも少なくするために絹旗を拘束しているだけだ。

浜面<sup>メジャ</sup>がもうひとつの影に引っ張られ走っていくのを見ても、心理定規<sup>メジャーハート</sup>は冷静だった。この場から逃げたところで、地上に出れば曖昧の率いる別働隊が待ち構えている。

メジャーハート  
心理定規はハイヒール特有のカッコツという音を立てて、絹旗の  
視界に入り込む。

「超何のつもりですか」

取り押さえられたまま、絹旗は心理定規を睨み付けた。心理定規  
メジャーハート  
も見下すような冷えた視線を絹旗へと向ける。

「浜面仕上をより効率的に殺すためと答えるのが妥当かしら」

「そうじゃありません。どうしてあなた達が浜面を狙っているんで  
すか」

幼い顔が歪む。詰問するような凄みのある表情だ。心理定規は唇  
メジャーハート  
に手をあて、

「説明してわかるかしら。アレキスターが何らかの『プラン』を立  
案・実行していることは知っている？」

尋ねると、絹旗は眉をひそめた。どうやら、この辺りの情報は独  
断で行動していた絹旗には渡っていないらしい。どの程度説明すれ  
メジャーハート  
ばいいのかを把握した後で、心理定規は続ける。

「上条当麻、一方通行といったイレギュラーな因子は、あくまでも  
アクセラレータ  
その『プラン』の許容範囲内においてのイレギュラーらしいわね。  
だからこそ『プラン』の軸に据えることができるし、彼らが暴れた  
ところで『プラン』の利益のためにいくらかでも応用できる。『プラ  
ン』の中身についてはまったく知らされていないけどね」

そこまで言つて、心理定規は絹旗に顔を近づけた。

「でも、浜面仕上はそうじゃない」

目を見開く絹旗を見て、心理定規はしばらく沈黙した後、口を開く。

「彼は本来、暗部闘争の中で殺されていなければならない因子だったのよ。にも拘らず、あろう事が浜面仕上は第四位の『原子崩し』マルチタワナーをたつた一人で撃破し、今日まで生存している。……さすがのアイスターも、これだけは完璧に計算できなかったようね」

心理定規自身、それらの情報は信じ難いものだった。都市内の人間一人一人の寿命までもを計算し尽くすような男の計画に、唯一沿わず超越してきたイレギュラー因子。垣根帝督の計画に付き添った彼女だからこそ分かるアイスターの性質から、そんなことがあり得ると思えなかった。

あるいは、あの少年の言うような『間違っている』行動であるという自覚が彼女にそんなことを思わせているのかもしれない。

絹旗の瞳を覗き込んで、心理定規はほんのわずかに表情を変えた。

「あなたはどつ思つ？」

口から出たのは、そんな言葉だった。

疑問符を浮かべる絹旗に対して、心理定規は柔らかい口調で言った。

先ほどの淡々とした響きが薄れ、人間的な感触を含んで。

「何の力もなければ役割もない無能力者<sup>レベル0</sup>。その中でたった一人、浜面仕上だけが、自らの力で何かを手に入れようとしている。唯一アレイスターの計画に大きなダメージを生じさせるほどの『新しい真価』をね。だから私達は彼を殺そうとしているのだけれど……あなたは、あの男にそれだけの価値が、『殺さざるを得ない』ほどの価値が、あると思う？」

それはこの少女が、この世界に浸った少女が、初めて抱いた疑問だった。

\*

「茂田…だと？なんで、オマエが……」

目を見開いたまま、インターフェイス接続回路は目の前に立つ人物を見返した。

仮面に遮られ表情は見えないが、仮面の表面を彩る光の流れが時折描く目らしき部分を。

「そうだな…空白の時間を埋める作業からしなくてはならないか」

仮面を被った茂田は腕を組み、ふむと仮面の顎の部分に手を当てた。

「君と別れ、槇野が『シークレットナンバー非公式の超能力者』のエージェントになってからは、私は様々な場所を転々としていたよ。ある時は夕凧志乃君の居た超能力研究機関、またある時は『スクール』と接触し、殺された槇野に代わり瀬良惻皇のエージェントを務めたりとね。同時期

に『ユニオン』に居たこともあった」

懐かしむような口調で言う茂田。接続回路インターフェイスは黙って話を聞いていたが、不意に気付いたように目を見開いた。頭の中で、様々なピースが嵌っていく。

(夕凧の居た超能力研究機関…『スクール』…瀬良のエージェント…『ユニオン』……)

『非公式の超能力者』でなくなった直後、志乃が接続回路インターフェイスを訪ねてきた。

0930事件の最中、『スクール』のリーダーである垣根帝督が『テスト』と称して接続回路インターフェイスを襲撃した。

『ユニオン』へ行くためのリニアールのシャフトで瀬良の襲撃を受けた。

時期を考えると、それぞれ接続回路インターフェイスの『立場』が変化したときに、茂田の居場所も変化している。

まるで、接続回路インターフェイスを追っていたかのように。

顔を上げて無機質な仮面を見ると、それは静かに頷いた。疑惑が確信へと変わる。

「テメエ……まさか……！」



言つと、茂田は組んでいた腕を腰の横で広げる。さながらマジックを披露し喝采を浴びた時のマジシャンのように。

「話が早くて助かるよ。いろいろ手を回させてもらっていたんだ。夕風君に君の現状を話したり、垣根君に君の存在を知らせたり、瀬良君と結託し君を追い詰めたりとね」

あっさりと言つてみせた。インターフェイス接続回路は彼を睨みつけ吠えるように叫ぶ。

「……手を回させてもらっていた、だと？なんだそりゃ。なんでダメがんな事してんだよ！！」

裏切られた、などと思つていゝのではない。彼の言う言葉のすべてが、信じたくない事実で埋め尽くされているのだ。インターフェイス手を回していったという時期がいつからかは分からない。だが、インターフェイス接続回路という一人の人間を変えていった時間は少なくとも、彼によつて導かれたようではないか。

それでは、まるで……。

ただのシナリオじゃねえかよ。

エクスプローラ多重観測に出逢つた事。

志乃に出会つた事。

曖に出逢った事。

冥土ヘウンキャンセラー帰しや浜面たちに出逢った事。

果ては、瀬良に起こった悲劇すら。

全てが仕組まれた、シナリオに沿った舞台か何かのようではないか。

インターフェイス  
接続回路は異様な仮面を睨み付け、その答えを待つが。

「私がアレイスターの『腕』だからだよ。彼の手となり足となり、彼の計画を順序よく進めていくことが私の使命というものだ」

あっさりと、少年の想いは打ち砕かれた。

容易く、砂の城を崩すかのように。

「アレイスターの…『腕』………?」

繰り返すと、茂田は再び頷いた。

「ずっと見守り育てていたんだ。君という、一方通行と双壁アクセラレータを成す『もうひとつの核』をね。君の心を正しく導き能力を覚醒させるためのシナリオだったが、どうだろうか。少しは『人生』めいたモノを感じられたかな?」

『人生』…接続回路は頭を垂れて、記憶を遡った。

茂田の言う話がすべて事実とするならば。

接続回路という『核』を育てるに当たって、瀬良を含む多くの命の行く先を、意図的に奪ったことになる。

接続回路という人間を信頼し、笑顔を向けてくれる者たちすらも、彼らの思惑に騙されていることになる。

そこにあつた想いや感情が真なるものでも、『仕組まれた』舞台の上で作り出された『然るべき』結果と処理されてしまう。

彼らの作り上げた『プラン』によって。

「……ふざけんな」

接続回路の口から、低い、低い声が漏れた。

「何なんだよ。何なんだよその『プラン』。ツツウのは!!何が『もうひとつの核』だ!!何が『人生めいたモノ』だ!!ふざけんじゃねエ。クソにも劣る拘りのために、他人の命をガラクタみてエに扱いやがッて!!」

少年の怒号が響く。高速で走る貨物列車の空を切る音をも上回る大声が、彼の喉から迸る。

「俺たちは生きてんだよ！！一人一人無限に可能性を持つてんだ！中には妥協しなくちゃならねエヤツだッて居る！！思い通りに行かねエツて、塞ぎ込むヤツだッて居る！！誰かと出逢ッて、救われよう！思い通りじゃねエ世界の中でも、その中で少しでも満足できるように努力してんだよ！！それなのに……！！」

少年の拳が、血が出るほどに握り締められた。獣のように鋭い瞳で、目の前の『脚本家』を睨みつけて。

「テメエらは満足が行かねエツてだけで、他人の命を潰そオとしてやがんだ！！」

それは、インターフェイス接続回路がかつて行なっていた行為だった。

彼らに認められたいがために、『満足』するために、罪はあれど無関係な命を片端から食い潰していた。

故に、そんなことを訴える権利が自分にはないことは分かっている。

だから、インターフェイス接続回路自身が踊らされていた事実よりも。

それに付随して、それを完成させるために、多くの人間を利用していったことが許せない。

茂田はしばらく黙っていたが、やがて左右の拳を緩やかに動かした。

「君の憤慨は正しい。いや、当然と…必然というべきだな」

そんな言葉と共に、茂田の仮面の形が変化した。

次の瞬間には、その体はインターフェイス接続回路の目の前へと迫っている。

「……ッ!？」

迫るまでの過程が、全く見えなかった。

頭が混乱する間に、茂田の拳が襲い掛かる。

バゴオツ!!と。

目の前まで迫った拳の直ぐ傍で、不可解な爆発が起こった。

「ぐがッ…!？」

『オフエンスアーマー窒素装甲』を展開するインターフェイス接続回路の前では、そんな爆発も直接的なダメージには繋がらない。だが、解き放たれた爆風はその華奢な体を吹き飛ばし、三両ほど後ろのコンテナの上へと転がした。起き上がりながら茂田を見やると、彼は既に眼前に立ち塞がっていた。

「……!！」

「これが、次の『段落』だよ」

言いながら、茂田はインターフェイス接続回路に向けて拳を振るう。舌打ちしながら、接続回路は分解公式を展開した　　が。

「1じぶん…!？」

振るわれた黒ずくめの拳は、精確に接続回路インターフェイスの顔面を捉えた。転がり、コンテナとコンテナの隙間に落とされる。仰向けの状態から起き上がるうとする、真上から降りてきた茂田に首を掴まれ押さえつけられた。

「今君の頭の中では、様々な疑問が上がっているのだろうね。『茂田の仮面は何なのか』、『先ほどの爆発は何なのか』、『どうしてオフエンスターマー「窒素装甲」も分解公式も破られてしまったのか』……と」

「…チツ!!」

インターフェイス接続回路の腕が、左右のコンテナへと伸びる。刹那の演算の後、鉄の箱は無数の刃となって茂田の背中へと迫っていく。

だが、茂田自身は至って冷静だった。

一切の動きを見せず。

息を呑むこともせず。

次の瞬間には、形成した刃の雨は仮面から伸びた数多の翼にへし折られた。

「な ……!!」

その翼には見覚えがあった。

翼の伸びる仮面を呆然と見てみると、そこに『答え』が浮かび上がる。

『Equ・Dark Matter / test - type』。

「気付いたかな？君と渡り合うためには既存の武装など意味を為さないからね。覚醒した君の前では敗北を期した『未元物質<sup>ダイクマター</sup>』だが、君に唯一対抗できる駒であることは変わらない」

言いながら、茂田は接続回路の胸倉を掴み上げ、零距离で爆発を巻き起こした。吹き飛ばされた少年の体は貨物列車を飛び出し、線路と隣接した工場施設へと突っ込んでいく。

それを見て、茂田は再び仮面の一部を翼を形成すると、鳥のように飛ばたいてその後を追っていった。

\*

浜面仕上と滝壺理后は、手を繋いだまま地下道を駆けていた。

「ちくしょう、何でこんな……」

取り押さえられた絹旗の姿を思い出して、浜面は唇を噛んだ。彼女を置いていかなくてはならなかったことが悔やまれる。立場から考えて絹旗が殺される可能性は低いだろうが、彼女があんな目に遭っていることに憤りを覚える。

(……今は逃げるしかねえ。でも、どうやって？地下に居たってどうせ連中に仕留められ  
(

そう危惧した矢先。

T字路の曲がり角の片方から、黒ずくめの部隊が現れた。

「ッ！！」

浜面が息を呑む。もう銃口は向けられていた。

(やべえ……もう……！！)

握った手の先に居る滝壺を庇うように抱きしめて、浜面は黒光りする拳銃を目に焼き付けていた。一方通行との戦いで、銃弾はもう残っていない。この特殊部隊を相手に戦える便利な能力も、浜面は持ち合わせていない。

『<sup>レベル。</sup>無能力者』という肩書きを、実感した瞬間だった。

どうにかする方法が浮かんでこない。

隠れる場所もない地下道では、麦野を倒したときのような戦略も使えない。

どちらの方が力が強いのか。どちらの方がより優れた『能力』を持っているのか。どちらの方が強力な武器を持っているのか。

そんな大か小かというパワーゲームにしか、ここではならない。

引き金が引かれるまでの一秒にも満たない時間が、とてつもなく長く感じる。



「はまじら……!」

腕の中で、滝壺が絞り出すような声で言った。浜面は歯を食いし  
ばる。

(ここまでだって…言うのかよ。もう進めねえって言うのかよ!こ  
いつを…滝壺を、普通に生きさせてやることもできないで、こんな  
ところで無様に死ぬってのか!!)

懸念するのは、滝壺の事だけだった。

自分のことなどどうでもいい。とにかく、滝壺を助けることしか  
浮かばない。

だが、今の自分に彼女を救うだけの力がないことは明白だった。

(誰でもいいから…誰でもいいから、滝壺だけでも、守って  
!!)

その瞬間。

浜面と滝壺の直ぐ横を、後ろから無数の弾丸が通り過ぎていった。

目の前で、銃を向けていた男達を貫いていく。

(え……?)

バタバタと倒れる男達を呆然と見やっつて、浜面は銃弾の飛んでき  
た方角を振り返る。

そこには、倒れた男達と同じ装備の黒ずくめの集団が立っていて、手にはサブマシンガンを持っていた。

(なんで、こいつら……)

それが同じ所属の部隊であることは間違いない。にも拘らず、彼らはなぜ自分を救ったのか。倒れている男達から感じた殺意は、まるで感じない。銃を下げる男達を見て、浜面は言葉が出せずに居た。

「……どうやら、間に合ったようね」

集団の方から聞こえてきた、澄んだ女の声。男たちの間から、制服を着た茶髪の少女が現れた。まったく見覚えのない、綺麗な顔をした少女だ。

「……あなた、一体……」

「説明している暇はないの」

浜面の問いを、少女はきっぱりと退けた。黒ずくめの男達がそれぞれ目的を持って動く中、少女は浜面と滝壺の二人を見やる。

「生き残りたかったら付いて来なさい。ここに、あなた達の居場所は無いわ」

冷たく突き放すような声が、少年と少女に手を差し伸べる。



どうも、櫻井です。

今回は色々、痛い内容でしたね(汗)

原作より優しくなってる心理定規サイド。

何かラスボス前の会話みたいな接続サイド。

麦野前の襲撃を連想させる浜面サイド。

後悔はないです。

心理定規サイドは本作における心理定規の視点で原作のシーンを書いた感じで。

浜面サイドは曖の葛藤の果ての行動を取り上げました。『ユニオン』、いよいよ空中分解ですね。ですが心理定規も少なからず『間違い』を自覚し始めている様子を示しました。

接続サイドは第一章で茂田が言葉を濁したポストを公開し、色々衝撃事実を。

接続回路の説教はいよいよアレキスター宛のものにまで発展。上条さんの影響を強く受けた彼の思いを羅列した感じですが、人によつては『ウザい』と感じるかも？不快に思われた方はごめんなさい(汗)

それでは次回も波乱の展開のつもりですのでどうぞお楽しみに

それでは(^^)(^^)

8 - 17

凌駕

境界ヲ踏ニ越エテ

(前書き)

「次回は俺の出番だア」

『グループ』の構成員にして学園都市最強の超能力者（レベル5）  
アクセラレータ  
一方通行

「俺の出番はここまでか……」

元『アイテム』下部組織構成員にして原作第三の主人公

浜面 仕上

どうやらここは第二学区らしい。

巨大な作業機械がベルトコンベアに流れてくる部品を整備しているのを見て、インターフェイス接続回路はふと思った。運ばれてくるのは何かの動力基幹のようなパーツで、小型化しているが燃料を搭載するアダプターのような部分が見える。

(さて……ここからどうする)

ポケットに刺さっていた拳銃を引き抜き、インターフェイス接続回路は壁に背を預けた。

当初の目的どおり潮岸の居る第二学区まで来れたのは良いとして、問題は厄介な追跡者が出てきてしまったことだ。蝉脇が『ダークマター未元物質』を含んだ空気でインターフェイス接続回路の能力を実質封じた拳銃、『ダークマター未元物質』の弾丸までもを用いてきたことがあったが、今回の相手はさらに恐ろしい手合いだった。

あの異様な仮面が茂田の持つ能力の『核』であることは間違いない。大概の攻撃はあの仮面から出現した翼によって行なわれている。茂田の殴打が通ったのはスーツ部分にも微量なダークマター未元物質が混ぜられていたと考えれば合点がいく。だが仮面に至っては、翼を出現させる際の変形等から鑑みるに全体が『ダークマター未元物質』なのだろう。まずは『核』を潰す必要がある。

(垣根に使った方法を使うとすれば、とにかく強力なベクトルを生み出す物理攻撃：今なら『オフenseアーマー窒素装甲』で攻撃するって手もあるが、

あの翼がある限り、接近戦は難しいだろうな。法則を捻じ曲げるような能力の前じゃ、この拳銃も役に立たねえし、麦野が垣根に勝てなかったって事ア『メルトタワー原子崩し』も役に立たねえんだろう。物理法則外の能力に対抗するには……)

頭に浮かぶのは、かつて二度の窮地から彼をすくった螺旋の翼。だが、あれに限っては任意に出せるようなものでもない。自分身でも良く分からない力を戦術として取り込むのは安易過ぎ

「見つけたぞ」

背後から、そんな声が聞こえてきた。

壁を背にしているというのに。

「ッ!!」

とつさに前へと飛び退くインターフェイス接続回路。流れの動作でスイッチを押し、防護壁を展開。

数瞬後、ドゴオン!!という轟音を立てて、工場の巨大な壁が一瞬にして剥がされた。自分に当たる部分だけを分解しその先に目を凝らすと、そこには仮面の翼で浮遊している茂田の姿。

背後から、強烈な爆発音が響いてくる。一瞬作業員のことか頭に浮かんだが、無人の工場であることを思い出し、不安要素を取り除



くど。

「さあ、どうかなインターフェイス接続回路。この『段落』、今までのように乗り越えることが出来るだろうか？」

翼を羽ばたかせながら、茂田は腕を組んで尋ねてきた。インターフェイス接続回路はハッ、と笑い、

「もしここでテメエを倒せたら、またテメエらのシナリオ通りなんだろ？俺の成長を描くシナリオツつウなら」

「そうだな。しかし、私に敗北した場合もちゃんとルートは作られている。どの道、君はアレイスターの計画からは逃れられない」

「上等オじゃねエか」

裂けるように笑んで、インターフェイス接続回路は腕を構えた。どうせ逃れられないと言っのなら、より成長し出し抜ける道を選択するまでだ。茂田によって開けられた巨大な出口から空気を集め、足場を破壊しながら莫大な推進力を得る。

向かう先は、茂田の懐。

（どオセジリ貧なのは変わらねエ。一か八か、オフエンスアーマー『窒素装甲』で攻撃を！！）

仮面から伸び変幻自在な杭のような翼を回避し、茂田の眼前まで迫る。あと1メートルというところで、少年の体は突如発生した爆発に吹き飛ばされた。

舌打ちしながら、インターフェイス接続回路は強引になぎ倒された壁に張り付き、

次の手を考える。

（まずはあの翼をどオにかしねエことには近づいても無駄だな。だが……）

ヒュンヒュンと音を立てて迫る『ダークマター未元物質』の鞭をかわし、立てかけられるように斜めに立っていた壁から工場の屋根へと移動する。空気の爆発によってロケットのように急上昇するインターフェイス接続回路に、茂田は容易く追い付いてくる。

「少し難しい注文だったかな？何なら、台本を少し変えてあげてもいい」

目の前で硬質に変化し、打撃用の鈍器へと姿を変えた茂田の翼が、インターフェイス接続回路の体を無理矢理屋根から剥がし、深夜の空へと放り出す。吹き飛ばされながら、インターフェイス接続回路は吹き飛ばされるベクトルを相殺するように空気を爆発させ、強制的に工場の屋根へと自らの体を引き戻した。

再び迫る茂田の翼の軌道上に、屋根を変換した鉄製の壁を形成する。

（既存の物理法則とは異なる新物質…：そいつが『ダークマター未元物質』だったはずだ。つまりそいつは、本来この世にはない物質……）

バゴオ！！という爆音が響き、時間稼ぎにと形成した鉄の壁は、容易く翼に砕かれた。

インターフェイス接続回路は粉々に砕けるそれを空気ごと集め、再度変換し無数の鉄片へと変化させると、強烈な烈風と共に驟雨のように解き放つ。瀬良から受けた『リフレクター反射物質』の弾丸と同じ原理だ。

だが自分とは違い、茂田は何をどうしたのか空気を二つの奔流に

分け、動くことなく退ける。それを見ながら、インターフェイス接続回路は自らの掌に目を向けた。

(俺の『分解』は、既存の物質の中から構成や性質を解析した上で行使される。つまり、俺が対象のそれを認識してなければ能力として機能しない。そして、ダイクマター未元物質は俺が知る由もねエ物質だ。『インターフェイス接続回路』が『ダイクマター未元物質』に勝てねエと言われる理由はそこにある)

だが。

(『暗闇の五月計画』で算出された一方通行の演算パターン……『必要』と『不要』に区分けして、害を為すベクトルだけを排除する、ホワイトリスト方式のパターンを応用すれば……！)

突破口は見えてくる。

瀬良の時には『リフレクター反射物質』という能力の特性上『分解』すらも反射されるのではと危惧し使うことはなかったが、相手が『ダイクマター未元物質』ならばまだ使い道はある。

変換した屋根を器用に使い、時には壁に、時には弾丸に、時には迎撃用の飛び道具として、『インターフェイス接続回路』自体の『パーソナルアリテイ自分だけの現実』で臨機応変に防御と攻撃に展開する。

一進一退、互角の攻防を繰り返しながら、インターフェイス接続回路は『メイン』の公式を構築していく。

(『必要』な物質に、O、C、H、N、Ca、P、S、K、Na、Cl、Mg、Fe、F、Zn、Si、Ti、Sr、Rb、Br、Pb、Cu、Al、Ce、Cd、Sn、Ba、B、I、Mn、Se、

Ni、Hg、Li、Mo、Cs、Ga、As、Ag、Sb、Cr、  
Co、V、Nb、Zr、La、Ga、Te、Y、Ti、Tl、Bi、  
Sc、Ta、Au、U、V、Th、Be、W、Ra、Ar、He、  
Yb、Pd、Ne、Xe、Pu、Gd、Krを指定。対象を『物体』  
と定義し、指定した物質以外の粒子を排除！！）

それは、人体分解の公式の『逆』だった。人体そのものに影響がないよう仕組まれた公式だ。演算終了と同時に、接続回路は回避行動から転じ、『未元物質<sup>ダークマター</sup>』を纏う茂田へと接近する。

再び、茂田の仮面から杭のように形を変えた翼が飛び出した。

真つ直ぐにこちらへ向かってくるそれを、接続回路はかわさない。迫り来るそれが見えていないかのように、空気の爆発による推進力のままに直進する。

「……？」

自殺行為と言える捨て身の動きに、茂田が小首を傾げたその瞬間。

パシィィン、という甲高い音と共に。

軟体動物のような動きで迫っていた翼の攻撃は、一瞬にして砕け散った。

「何……！！」

茂田が初めて息を呑む。接続回路は止まらない。その場に四散す

る翼の破片を吹き飛ばし、驚愕している茂田に迫っていく。

（ いける ）

胸の内で、インターフェイス接続回路は思っていた。素直な感想だ。かつて垣根帝督が、アクセラレータ一方通行に対して抱いたそれに似た感情だった。公式通りに、データクマター『未元物質』が消し飛んだ瞬間、勝利を確信した。後は、このまま茂田の仮面そのものに組み付けば、それだけで『終わる』。

そんな時だった。

『私が今日から君の担当になる。茂田と呼んでくれ』

「……………ッ！」

頭の中に、かつての茂田の声が浮かんできた。

感情の感じられない、無機質も無機質、果ては『無』と表現しても差し支えない、感情の欠片も感じられない合成音声。

大きく振りかぶった腕を、茂田の仮面へと伸ばし。

『よくやってくれた、インターフェイス接続回路。君はよく期待に答えてくれているよ』

『シークレットナンバー非公式の超能力者』となり、孤独を前にした自分に浴びせられた、初めての賞賛。

顔の倍はあろう異様な仮面を、鷲掴みにして。

『いつも電話口に居たのがアンタとは限らねえが…世話になったな』

……。

『似合わない台詞だね』

………！！

頭の中に浮かぶ、かつての自分と彼を映したビジョン。

……いや。

一瞬にも満たない躊躇の後、インターフェイス接続回路は静かに告げる。

「……こいつで積みだ、クソ野郎」

俺は、『悪党』だ。

瞬間、男の頭全体を覆っていた仮面が、空気に溶けるように消失した。

\*

浜面は黒ずくめの集団に守られながら、第23学区行きの貨物列車に乗せられていた。

ここまで成り行きで偽装用の大きなコンテナに乗せられている彼は、傍らに立つ黒づくめの男に声をかける。

「おい、これはどういうことなんだ？ 絹旗が言うには、俺はあんたらの仲間から狙われて……」

「それは夕風曖に聞いてくれないか？ 俺たちは、彼女の指示に従っているだけだ」

「夕風曖って……」

ちら、と浜面は黒づくめの反対側へと目を向けた。そこには、滝壺の小さな傷の手当をする茶髪の少女の姿がある。

この場で『夕風曖』という名前に該当する人物など、彼女くらいしか心当たりはない。

だが、浜面は何となくこの少女が苦手だった。『アイテム』の少女たちも一癖二癖三癖四癖と癖の強いキャラばかりだったが、このクール系美少女は何というか、『何となく無理』感を醸し出しているのだ。

どことなく心理定規メジャーのドレスの女に雰囲気ムードが似ているのも影響しているのかもしれない。

とはいえ、この状況では苦手だ何だと言っていられない。最悪頭の中でバニーにでも変換してしまえば多少の苦手意識も吹き飛ばすはずだ。

「えーと…夕風、さん？」

「何？」

おそらくサロンで擦りむいたのだろう滝壺の傷に手当てを施していた曖は、すいと切れ長の目を浜面へ向けた。

一応年下のようなだが、どうもこの街の精神年齢は高い気がする。

「あんだ、どういっつもりなんだ？俺なんかを助けたら、あんだも連中に狙われるかもしれないんだぞ？それに、この部隊……」

「察しがいいのね。彼らはもともと、あなたを殺すために差し向けられた部隊よ。私も同じ目的」

微笑みながら言う曖に、浜面は目を見開いた。何となく寝返つたらしいことは予想できていたが、実際に口にされると意外に感じる。この少女とは全くの初対面というのも勿論のこと、そうでなくてもこんな高いリスクを負ってまで行動に移す道理はないと思う。

「詳しくは言えないけれど、ある人が居てね。同じ組織で動いてた人なんだけど、あなたを殺す命令が下って、組織から抜けてしまったのよ。その彼が、下された命令を『間違ってる』って言ってね。私も同意見だったから、こうしてあなたを助けてるってわけ」

「はい、お終い」とまくつておいた滝壺のズボンを直しつつ、曖が言った。浜面はしばらく曖の白い顔を見つめた後、思い当たったように尋ねる。

「なあ……あんだ、ひょっとして『ユニオン』のメンバーか？」

え、と曖が目を丸くした。それに確信にも似た手応えを感じながら、浜面は続ける。



「やっぱりな。あんたの言う人に心当たりがあるんだ。そいつは今どうなってるんだ？組織を裏切ったって事は、やっぱり狙われて

ッ！？」

言いかけたところで、彼らの隠れているコンテナが大きく揺れた。同時に、複数の物体がコンテナの上に着地する音が響く。

曖は鋭い表情を取り戻し、

「レーダーに反応がなかった……彼ら、電子的なステルス装備でも持っているのかしら」

「悠長に分析してる場合かよっ！？早く逃げねえと手遅れに……！！」

「大丈夫よ。みんな、衝撃に備えて」

「衝撃……？ どわあっ！」

突然、浜面の体は前方に向かって力を受けた。急停止した列車によるものだ。曖は勢いで飛んでくる浜面をかわし、滝壺の体を支えながらコンテナの鍵を解く。

「カナードとハリスは脱出と同時にグレネードとスモークを撃つて！シュナイツは煙が残っている間に二人を！」

曖が指示を飛ばすと、シュナイツと呼ばれた男がコンテナ壁に突っ込み鼻をさする浜面の腕を掴み、滝壺と曖の居る出口傍まで連れに行く。と同時に、蹴破るように扉を開いたカナードとハリスが、見事にシンクロした動きでグレネードを放ち、数秒遅れてもうひとつの引き金を引いた。

爆音が響くと同時に、扉の向こうが白と黒の煙に包まれる。

ゴドンツ、という重々しい音が、天井から聞こえてきた。放ったグレネードが敵に当たったのだらうか。

「行くわよ。とにかく走って！」

曖が促し、浜面と滝壺、そしてシュナイツが飛び出した。あまり風のない今は、グレネードの黒煙とスモークの白煙が垂れ込めている。

浜面と滝壺の背から列車の上の敵へと目を移し、曖はわずかに目を細めた。

( 駆動鎧にしては小さすぎる。 あれは )

ジュツ、と。

( ツー!?)

肩口を貫いた激熱に、曖は顔を歪めた。見れば、カナードとハリス、果ては列車の上の襲撃者までが、白い閃光に貫かれていく。断続的に放たれている閃光は、彼らの張った煙の壁を易々と切り裂いた。

( あの光…確か、インターフェイス接続回路が……! )

光の飛んできた方角に目を向ける。閃光は、瀬良という隠蔽された能力者の襲撃を受けた時、接続回路が使用していたものに良く似ていた。もはや『敵』という認識である自分達ごと、浜面を守るた

めに攻撃してきたのだろうか。

と、道を違えてしまった少年の顔を頭に浮かべるが。

そこに居たのは、灰色の髪の少年ではなかった。

左腕が肩から閃光に包まれ、空洞となった右目の眼窩から同じ光を発する一人の女だ。

その姿に、いや、その姿の大部分には、曖も見覚えがあった。そう、『ユニオン』のデータベースで暗部闘争についての情報を集めていたときに。

腕を抱えて倒れ込む曖のすぐ前まで来て、女は不気味な笑みを、かつては整っていたであろう顔に浮かべた。バチバチと時折火花を発している閃光の腕が直ぐ傍までやってくる。

目の前に倒れているカナードは、胸に風穴を開けて即死していた。その背中から漏れる深紅の液体が、曖の顔の左半分を染めていく。血の臭いが鼻腔に入ってきて、曖は動こうとはしなかった。

今動けば確実に息の根を止められる。

女との距離は2メートル程度しか離れていないが、並みの特殊部隊程度ならともかくこんな凶悪な超能力者<sup>レベル5</sup>を前に、飛び出して触れて頭の中を設定するような隙はない。

激痛に耐えて息を殺し、死体、少なくとも瀕死の状態を意識する。

(……………!!)

ゆらり、と、視界の隅で女が動いた。

あまりの恐怖に心臓が止まりそうになるが、彼女はまだ生きている。瞳のすぐ横を通り過ぎ、浜面たちの逃げていった方角へと歩いていく。思わず目だけを動かした瞳。女は少しずつ、自分達から距離を離していった。

「……………はーまづらあ……………」

身の毛のよだつような、呪詛に満ち満ちた声を漏らして。

どうも、櫻井です。

随分前に冥土帰しが言っていた公式を役立てる時がやって来ました。これでいよいよ防御能力に関しては跳ね返せませんが一方通行レベルになりましたね(汗)

主人公がどんどんチート化していくのがお嫌いな方は少々不快に感じられるかもしれませんが…(・・;) )

途中にあつた元素記号の羅列は、なかなか頑張つて書きました。人間ってこんなたくさんの物質で出来てたんだなあと感じしつつ、今回は夕風&浜面サイドをシメに。浜面と滝壺、そしてあの超能力者のその後は原作本をお読みください。次回からはもう『グループ』サイドに入ります。後2、3話で本章は終わりです。

あまり実感が沸かない方が多いかと思いますが、接続回路は『非公式の超能力者』となつてからの2年間、茂田としか会話を行なつていません。志乃とは特力研から『非公式の超能力者』までの数ヶ月の間、ごく稀に会話を交わす程度でした。

そう考えると、最後の躊躇も少しは理解して頂けるかと思えます。書き方がドヘタな作者で申し訳ない(謝)

それでは、次回は原作既読読者の皆様ならば予想がつかれるかと思えます、あの方が登場します。

どうぞお楽しみに(^^)

8 - 18 現出 エイワス (前書き)

「本編終了後は別にSSを書く必要がありそうです……」

スランプ気味でどうしようもない作者 櫻井 亮介

「最終章(仮)手前で言う台詞かよ」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「ハア…ハア…：…チッ」

工場前の巨大な駐車スペースで、接続回路は首のスイッチに手を伸ばした。モードが切り替わった途端に、重力をより強く感じる。展開した伸縮式の杖で体を支え、ベルトに挟んでおいた拳銃を引き抜いて。

彼の向かう先には、一人の男が倒れていた。

顔に大きな痣を負った、40近い男だ。ついさっきまで、『未元物質』の欠片を使って接続回路を追い詰めていた、茂田という名の男。

荒い息を立てる茂田は、仰向けの状態でこちらに笑いかけてきた。

「…：…どうせなら、一瞬でカタをつけてもらいたかったな」

新公式を用いての分解を済ませ、茂田の顔に直接触れる瞬間に、自動演算を『窒素装甲』へと切り替えた。彼の顔に痣があるのはそのためだ。接続回路は無表情のまま、茂田に銃を突きつける。

「オマエは一瞬で逝けるほど善人じゃねえよ」

言われて、茂田は小さく苦笑した。肯定するような響きを持ったそれが、夜の冷たい空気に溶けていく。

「オマエが何人の命を操り弄んで、最終的に食い潰したかは知らね

え。だがその数が一人や二人じゃねえことは確かだ。…一発で殺したんじゃ、割に合わねえだろうが」

突き放すような少年の口調に、茂田はふつと笑って見せた。

「そうだな……私やアレイスターは、弄んだ命たちに懺悔して死ななくてはならないか」

どうでも良さそうに、茂田がぼやいた。接続回路はしばらくその顔を見つめ、引き金にかけた指に力をかける。

「俺がオマエに勝つと予想した上で、アレイスターはオマエを差し向けた。オマエ自身の命すら利用するクソ野郎の計画に、何で従ってる？」

「従っているわけではない。詳しくは話せないが、私は彼に命を救われた身でね。命の恩人に始まり、私は彼の計画の虜になっていったんだ。君は私の口から『本意ではなかった』と言わせたいようだが、すまない、これこそが私の本意なんだよ」

「……何の疑問も浮かばなかったってのか」

「浮かばなかったわけではないさ。頭の片隅では、いささか良心の呵責というものを感じていたよ。しかし、それを遥かに凌ぐだけの魅力が、彼の計画にはあるんだ」

インターフェイス  
接続回路は静かに目を細めた。

これほど引き金を重く感じたことはない。明らかな躊躇いが、自分の中に存在していた。この男のしてきたことがまごうことなき」



『悪』であることは、分かっているのに。

インターフェイス  
接続回路や瀬良惻皇だけでなく、多くの人間が数多あるはずの可能性を狭められ、果ては命すら奪われた。アレイスターの計画については、まるで見当がついていない。あるいは、結果として万人が幸福になれるようなものなのかもしれない。

だが、その過程がこれでは意味がない。

破壊と殺戮によって結果を紡ぎ出す。それが『悪党』であり、接続回路もその道を歩んでいた。

しかし、これはインターフェイスの知る『悪党』とは全く違う形なのだ。

知らぬ間に予定表を作られて。

知らぬ間に計画に組み込まれていて。

出逢いも奇跡も運命も、全てが仕組まれていて。

少なくとも自分は、『学園都市』という名の箱庭で、『生きていく』と錯覚させられていた。

「……………」

気が付けば、引き金を引いていた。

心臓のすぐ傍を貫かれた茂田が小さく呻く。体に襲いかかる激痛は生半可なものではないはずだ。しかし、茂田は叫ばなかった。

口から這いだしてくる赤黒い液体。丁度鳩尾の部分に開けられた穴からも、同色の液体が漏れだし男の倒れる地面を濡らす。

それを見て、少年は憐れむような目を男に向けた。

人間は激痛にみまわれた時、その痛みをわずかでも和らげようと声を上げる。つまりこの男は、痛みを誤魔化そうとしていない。

罰をその身に全て受けようというのだ。

黙って立ち去ろうとしていた接続回路は、銃を仕舞いながら歩み寄る。茂田の頭のすぐ横までやって来ると、接続回路は血だまりに片膝をついて、茂田の額に手を当てた。俯いたその顔は、茂田からは見えない。

「……オマエに、感謝しなくちゃならねえことがある」

必死に痛みをこらえている茂田は、青くなりつつある顔に、小さな笑みを刻んだ。

「なに……かな……？」

びくびくと痙攣する茂田の体。間もなく、肉体の死が訪れる。

「……アイツらと出逢わせてくれたことだよ。そこだけは、オマエらのシナリオに感謝してる」

彼にしては珍しい、穏やかな口調だった。パクパクと茂田が何か言うが、それは声にはならなかった。男の顔からは、もう血の気が

失せている。

脈が止まる寸前に、インターフェイス接続回路は消えゆくような声で言った。

「だから最後は、『俺自身接続回路』でとどめを刺してやる」

\*

アクセラレータ一方通行たち『グループ』は、潮岸の要塞となっていたドーム状のシエルターの最深部に居た。

白髪の少年の赤い瞳には、腹に黒曜石のナイフが刺さった老人が映っている。

老人 潮岸を包んでいた駆動鎧は、各パーツごとにバラバラにされて、主の足元に散らばっている。

親船最中の協力で潮岸と直接面会していた海原がそうしたのか、はたまた横槍が入ったのか。少なくとも、腹に刺さる黒い石は海原が用いるものとよく似ていた。

多少気になりはしたものの、今は先にやることがある。

アクセラレータ一方通行は首の関節を軽く鳴らし、杖をついて潮岸に近付いた。

「俺達の身内を守るためにできる事は二つある」

言っと、潮岸は顔を上げた。何とか立っている、そんなフラフラの状態だが、彼を支える側近の類は残っていない。

「一つ目は、『ドラゴン』についてここで知っている事を吐かせる事。二つ目は、この場でオマエの腹に刺さっているナイフを上下に動かして、ハラワタを全部床に撒き散らす事だ」

「……『ドラゴン』、か………」

低い声で一方通行アクセラレータが言っと、潮岸は口の端だけを上げて小さく呟いた。

「推測はできているかね？」

「まさか、『実は私も知らないのだよ』とか抜かすつもりじゃねエだろオナ」

四人が眉をひそめると、潮岸は苦笑し、

「もしそうだったなら、気が楽なんだけどな。生憎と私は知ってしまった。知ってしまったるポジションにいたからな。だからこそ、悩んでいた」

そこまで言っつて、潮岸は脇にあった円柱型の水槽にもたれた。中の熱帯魚が何事かと動き回る中、彼は続ける。

「…あれは人の目に触れてはならないものだ。話せと言われれば応

じるが、私は君たちのために言っておこう。知らない方がいい。これは安っぽい脅しでも、機密主義故の足掻きでもない。純粹に『知っている者』としての発言だ。正直、私は知りたくなかった。心の底から、知らなければ良かったと後悔している」

「『ドラゴン』とは何だ」

忠告を聞いた上で、アクセラレータ一方通行は質問した。他の三人と話し合うこともなく、だ。ここまで来て怖じ気づくような者は、『グループ』にはいない。

「『ドラゴン』ってのは、一体どこにいる？」

潮岸の配下の襲撃を受ける少し前、海原は『ドラゴン』という単語の暗喩的意味に『天使』があると話していた。それだけなら外れだと言ってやるところだが、アクセラレータ生憎一方通行は木原数多の襲撃を受けた日にそれを連想させる光の翼のようなものを目撃している。あるいはその答えなのでも、アクセラレータ一方通行は考えていた。

だが。

「……何を、言っている？」

アクセラレータ一方通行の質問に、潮岸は笑った。

見当違いの馬鹿な答えを自信満々に語る者が、おかしくてたまらないといった調子で。

「居るじゃないか、そこに。ほら見ろ、今は君の後ろに居るだろう

「？」

（ ンだと？）

出血で頭がおかしくなっているのではと、一方通行アクセラレータが思ったその瞬間。

潮岸の指差す方向から、ゴトン、という鈍い音が複数、重なって響いた。

「土御門？」

まさか伏兵かと、一方通行アクセラレータが思わず振り返る。目に映るは、外傷もなく床に倒れている土御門。

「結標？海原？」

続けて二人の名前を呼ぶが、その二人も土御門と同じように倒れていた。微動だにしない三人体。生きてはいるようだが、完全に意識を失っている。辺りを見回しても、伏兵の姿はどこにもない。

どこか、9月30日に見た警備員アンチスキルの症状に似ている気がした。

（どオなってる。これは一体 ！？）

とにかく状況の把握を急いでいた一方通行アクセラレータは、ある一点を見て目を疑った。

それが、見えたのだ。

「ヒューズ＝カザキリではない」

あんぐりと口を開け目を見開いて立ち尽くしている一方通行の耳アクセラレータに、潮岸の声が入ってきた。

「あれは、『ドラゴン』を形成するために用いられた、単なる製造ラインに過ぎない」

言うだけ言うと、潮岸は呻くような声と共に床に崩れ、失血のせいか意識を失った。

しかし、当の一方通行アクセラレータの視線はただ前方に固定されている。

光り輝くような長身と、その身を包むゆったりとした白い布のような装束。

金色の長い髪は極めて女性的であるが、正確な性別はわからない。

喜怒哀楽の全てがあり、それでいて人の持つ感情とは明らかに異質なものを秘める、極めてフラットな顔つきが、この存在を『人間外』だと直感させる。

「『ドラゴン』、か」

存在は人間でいう口の部分を開き、言葉を発した。確かに人の形をしているのに、言葉を用いたという事実には違和感を覚える。

「その呼び名も間違いいではない。天使という記号にも対応はしてい

る。……少なくとも、巷で囁かれる地球外知的生命体や聖守護天使、近代西洋魔術結社群におけるシークレットチーフの真なる者、などという仰々しいものに比べれば、ずっと本質に近い。だが、私という存在は既存の聖書に記述される天使とは概念が異なる。よって、より一層私を的確に表現するならば、以下のような単語を選ぶべきであろう。ここまで喰らいついてくる者も珍しい。そこには私が名乗るべき価値と興味があることだろう。だからこそ、私は君の質問に答えておこうか」

アクセラレータ  
一方通行が、『グループ』が。

そして彼によく似た灰髪の少年が求めた答えが、それ自身の口から語られる。

「かつて、クロウリーと呼ばれた変わり者の魔術師に、必要な知識を必要な分だけ授けた者      『エイワス』、と」



どうも、櫻井です。

前書きに書きましたとおり、筆がまるでノらず大変悩んでいます。後もう少しで最終章だと言うのに…。

何とか…何とか、頑張つてやっていきたいと思えます。後、報告が遅れましたがお気に入り登録数が現在400人を越えまして、こんなにたくさん読者さんが居るのに情けないなあと悪循環に悩み沸騰しております…。

えー、近況はこの辺りにしまして。

今回は接続サイドと一方サイドで進めさせていただきました。一方サイド、特にエイワスの台詞は原作通りでまるで編集しております。これほど情けないことはない。次回からはある程度エイワス絡みでオリジナル要素が入ってきます。

接続回路、いつまで悩んでるんだオマエはと苛立たれた方がほとんどかと思えます。身内のことになるとヘタレってくらいに悩む主人公なので。たくさん人間が弄ばれたと言っていますが、実は一番思い通りに動かされてるのは接続回路なので、最終的には自分の事になって引き金を引きましたね。

最後に能力で葬ったのは、第一話のような感じにするためです。せめても、接続回路自身の手で埋葬しようという接続回路なりの行為です。

さて、先も短くなってきましたが、まだまだ続いてまいりますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします

8 - 19 逆鱗

真実ヲ紡グ者

(前書き)

「そろそろ私の出番だよね」

??????

?????

「……………」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスクローラ  
多重観測

「不思議そうな顔をしているな。私がこうして君の前に現れた事が、そこまで不可解か？」

エイワスと名乗った存在は、相変わらずの読めない表情で言った。

正直なところ、不可解でないはずがない。

アクセラレータ  
一方通行自身、肩透かしを喰らったような気分だった。

もともと彼ら『グループ』は、上層部の人間と対等の交渉を行い、『取引』という形でその正体を暴くつもりでいたのだ。

それがどうして、『ドラゴン』そのものから姿を現すと予想できようか。

エイワスと名乗ったこの存在は、ふむと顎に手を当てた。そんな人間らしい仕草を見ても、この存在からは人間らしさが感じられない。

「君に一定の価値を認め、それによって……ちょっと興味を湧いたから、だよ」

そんなことを言った。

今まさに、アクセラレータ一方通行はこうして彼が現れた理由について考えていたところだった。

そして、たった今アクセラレータ一方通行が尋ねようとした可能性のひとつも、たった一言で否定された。と言うより、エイワスの言葉は今までの

『グループ』の行動を頭から否定しているようだった。子供に出した問題を子供が答えた時、難しく考えすぎだと諭す様子に似ている。「会いたがっていたらどう？この私に。だから私は現れた。それでは不満かね？」

この存在は、『君に』一定の価値を認め、と言っていた。つまり、この場におけるエイワスの興味は、一方通行のみに向けられている。土御門たちが音もなく倒されたのは、単にこの存在に価値も興味も見出されなかったから、とでも言うのだろうか。

(どオする……？)

かつて、木原数多という研究者が居た。彼は一方通行の能力の性質を熟知し、独自の戦法を編み出して一方通行を追い詰めた。

かつて、駒場利徳というスキルアウトが居た。彼は一方通行の電極の仕組みを分析し、『戦場』そのものを利用して一方通行を追い詰めた。

かつて、垣根帝督という超能力者が居た。彼は自らの能力を最大限に活用し、『反射』をすり抜けて一方通行を追い詰めた。

だが、彼らにはまだ『対策』を練ることができた。追い詰められなくても、まだ立ち向かえるだけの可能性があったのだ。

しかしこの存在は違う。

木原数多も駒場利徳も垣根帝督も、殺せばそれで解決に導かれる分かり易さがあつたが、この存在はそうではない。

隠蔽の仕方からエイワスが上層部にとって最も重要な因子であることは間違いないのだから、木原たちと同じようにこの存在も撃破してしまえば上の『計画』に大きなダメージを与えるのは明白だ。

だが、学園都市最高機密のエイワスは、撃破する以上に効果的な使い道があるかもしれない。

それ以前に、エイワスがどんな役割を持った存在なのかも不明なのだ。まずはそれを知らないことには、利用しようにも利用できない。

「おや」

不意に、エイワスは一方通行からシエルターの入り口へと目を向けた。

「どうやら役者が揃つたようだ」

「……？」

その言葉に疑問符を浮かべながら、一方通行は肩越しに背後を見た。カチャツ、カチャツ、と、一方通行ではない杖をつく音が、シエルターの中に小さく響く。それだけで、一方通行はその人物が誰なのか確信した。

再びエイワスを見据え、一方通行は口を開く。

「遅かつたな」

杖をつく人物はゆっくりと歩み寄り、やがて一方通行の隣で立ち止まった。

「……こいつが『ドラゴン』、か」

人物 インターフェイス 接続回路は耳すら覆い隠す灰色の髪を揺らし、落ち着いた瞳でエイワスを見た。それを見て、エイワスはほう、と感心したような息を漏らす。

「君は驚かないのか？」

先アクセラレータの一方通行の反応を見たからこそその感心だった。接続回路はちインターフェイスらと一方通行を一瞥し、

「マトモじゃねえとは思うがな。だが、いちいちオマエが変だ何だと言及してる暇もねえ」

きっぱりと答えた。アクセラレータ一方通行はしばらく接続回路に意識を向けて、再びエイワスへと移した。『役者が揃った』との表現は、接続回路インターフェイスも興味の対象であるという解釈で良いらしい。

そうと分かれば、接続回路を交えて対話するだけだ。この存在を、より効率的に利用するために。

アクセラレータ一方通行は改めて、感心しているエイワスを睨みつけた。

「オマエは何なんだ？何で『ドラゴン』なんてコードで匿われてやがる」

「そこから説明しなければならぬのか」

少し失望したような調子で、エイワスは続ける。

「正体なんて、大したものではない。ちょっとしたh b o i e在a

dというだけなんだが……」

突然、エイワスの言葉にノイズが走った。

異様な現象に二人が眉をひそめるが、それはエイワス自身も同じだった。喉の調子を悪くした人間のそれとよく似た仕草で、怪訝そうに喉に手を当てている。

「……しまったな。この程度の『意味』すらも表現できないのか、この世界は。ヘッダが足りないな。これでは説明するのも苦労する。少々回り道をするが構わないか？直接伝えられれば簡単なんだが、それではw g b u d崩w s r u iが起こってしまつようなのでな」

再び起こる奇妙なノイズと、音のブレ。接続回路インターフェイスは思わず杖をついていない右手で自分の右耳を覆った。ノイズの入る時だけ、不自然に音が広がっている。音源がエイワス自身ではなく、その周囲の空間へと移っているような感覚に陥る。

「君たちはヒューズ」カザキリという言葉を知っているかな？」

「……？」

言われて、接続回路インターフェイスは疑問符を浮かべた。まるで心当たりがない隣アクセラレータの一方通行も、わずかに目を細めた。そんな二人を見て、エイワスは小さく息を吐く。

「一から十まで語るのは流石に手間だ。私の言葉を頭に入れて、後日勝手に検索したまえ。ともかく、あれは人工的な『天使』などと言われる存在だ。性質的には間違いではないが、それはヒューズ」カザキリの本質を突いていない。彼女の正体はこの私、エイワスを



形成するための製造ラインのようなものだ」

エイワスの言うことの大半は理解できなかったが、ひとつだけ引っ掛かるところがある。

(『天使』……か)

9月30日、インターフェイス接続回路は打ち止めが木原数多によって誘拐されたことを受け、統括理事会の一人を襲撃して情報を引き出した。

木原が打ち止めに注入しようとしていたウイルスのコードが『A N G E L』であるという情報だ。ラストオーダー

そして二人は、停止した学園都市の一角から光の翼のようなものが出ているのを目にしていた。ヒューズ<sup>II</sup>カザキリというワードをこの光の翼だと考えれば、エイワスの言うことも多少は理解できる。

まだ何か話そうとするエイワスに対し、「つまり」インターフェイスと接続回路は口を挟んだ。

「オマエはそのヒューズ<sup>II</sup>カザキリとかいうモノを参考にして作られた存在だったのか？」

「厳密には、ヒューズ<sup>II</sup>カザキリの方こそが私を作るために調整された、工場の製造ラインと捉えるのが正解だがね。ともあれ、私がヒューズ<sup>II</sup>カザキリをなぞるように生まれたことは否定しない。生まれたというより u y 顕 i d v i f が正しいのだが、やれやれ、これも駄目なのか。そうだな…生まれたのではなく現出したとも言っておこうか。厳密には違うが、それ以外に表現できない」

エイワスは自分の胸に四本の指を当て、それを腹へとなぞるように動かした。

「アレキスターも回りくどい方法を好んでいるようだが、まあ、私はクローン技術でどうにかできるものでもないからな」

ヒューズ・カザキリという『光の翼』が、この存在を生み出すための製造ライン。クローン技術はバイオテクノロジーの禁忌とされる技術だ。クローンに限らず、学園都市は禁忌の技術を次から次へと開発している。

それを以ってしてもこの目的不明の存在を生み出せないということとは、事実上、この『生き物』らしいモノは生物学と一線を画すモノ、即ち、人間ではないということになる。

荒唐無稽と表現するのが正しいのだろうが、彼を前にしている二人の少年は自然とその事実を受け止めていた。

むしろ。

目の前に立つエイワスが、『私は君たちと同じ生物だよ』などと答えるほうが、より強い違和感を感じたことだろう。

「どうするかね」

黙っていると、エイワスは再び口を開いた。

「興味本位で現れたは良いが、さて、これからどうしたものか。君たちはどうしたい？ 私からの命令を基にアレキスターの野望でも打ち砕いてみせるかね」

「……本気で言つてやがンのか」

声に出したのは一方通行だ。  
アクセラレータ

インターフェイス 接続回路も、エイワスの発言には警戒心を強めざるを得なかった。

「統括理事長の目的は知らねエが、その中心核にはオマエがいる。アレイスターの計画を潰すつてのは、つまり人工的な方法で生まれオマエを再び無に帰すつて事だろオがよ」

どうやら疑問は同じだったようだ。エイワスの発言は、遠回しに自らの死も意味していた。それぞれ共通した目的を持ち、同じように闇に染まって、今まで生きてきた二人の少年にとってそれは『暗部』らしからぬ発言に思えたのだ。

魅力を見出したとはいえ、アレイスターに荷担し彼を信望して散つた男を見ている接続回路インターフェイスにとっては尚更に。

「そうだな…しかし、だからどうしたのかね？」

「何？」

インターフェイス 接続回路は思わず声を漏らした。エイワスはそんな反応を意外そうに（しているように感じる）、

「例えるならそうだな、君たち人間はエコだの環境保護だのと謳つてあれこれ活動しているようだが、君たちが畏れる『危険』とは、既に何度も訪れているものだ。過程は違えど、最終的には一度『滅び』の時期を迎える事になる。紀元前から今まで、人間の歴史など世界という物差しで測れば目視できないほど短い。君たちに『把握』されていないところで、『危険』は幾度となく訪れている。しかし

君たちは今もこうして文化を築き存在しているだろう？星に張り付いている生物が死のうが生きようが、時間という流れはびくともしない。君たちの持つ兵器全てを用いて星の表面を焼き払い、全ての動植物を根絶やしにしたとしても、何万、何十万という時間の中でそれに代わるものが勝手に湧き出てくる」

エイワスは長い金髪を揺らし、手を広げた。

「それと同じ事だよ。まあ、私はこの次元の歴史で語られるべき存在ではないのかもしれないがね。アレイスターという男は性懲りもなく私を利用したいようだが、別にその計画が頓挫したところで困るのは私ではない。それこそ、何万、何十万という時を越えて私はまた別な機会に a s b u 頭 o a g d v : : いや、現出するだろう。それすらも、私にとっては特に価値のあることでもないのだが……さて、どうするかね。ここで一度私を殺して、アレイスターに一泡吹かせてみるのも一興だぞ？もっとも、君たちの全能力で私を殺害できればの話だが」

どうすればいい。

接続回路は改造した杖のグリップを握り締めた。

何をどうすればいいのか、今までの自分なら、その状況から判断し、いくつかの行動を選択することが出来た。それが間違いかもしれないなくても、最善でないとしても、行動を選ぶだけの頭は働いた。

しかし、これは何だ。

この存在をどのように利用するか。

どう利用すれば、浜面たちを助けることができるのか。

それを模索するために、この存在と対話をしたはずなのに。

突破口は愚か、目の前に分厚い靄がかかってしまったのだ。

結果として、接続回路は動かなかった。選択したのではなく、そうせざるを得なくて。

「おや。それで良いのかね。先に言うておくが、君たちが負の意味で実力を信じているアレイスターは、決して完璧な人間ではないというのに」

「何だと？」

一方通行が言った。

「彼の企てる計画には、既にいくつかの綻びが生じ始めているという事だよ」

エイワスはさらりと、人事のように言っただけだ。

「アレイスター自身はイレギュラーな現象が発生するたびに、それを計画へ有利に組み込むことでリカバリーしていると思っ込んでいるようだが、小さな亀裂は少しずつ広がり始めている。このまま進めば、彼自身も予想していない事態に発展することだろう」

ぞわり、と。

インターフェイス  
接続回路は感じたこともない悪寒を感じた。

どこかで感じたことのある感覚だった。

そんなインターフェイス  
接続回路に構わず、エイワスは続けた。

相変わらずの表情で、淡々と。

「そう、私を形作る『陣』の中心点。打ち止めを始めてす  
る、『現出』に用いた材料たちが『崩壊』する、とかね。ま、い  
ずれも単なるクローンなんだから、同じものを作り直せば済む話か  
もしれないが」

エイワスの言葉は、少年二人の引き金だった。

どうも、櫻井です。

エイワスの話は難しいですね：これでも所々工夫して組み替えているところもあるのですが、意味が変わってしまうと困るので大きな変更はしていません。強いて言うなら、最後の『引き金』の台詞が打ち止めだけでなく他の妹達にも向いているくらいですかね。

接続回路は戦闘中に乱入、という方向もあつたのですが、それはエイワスの話も聞けず、ヒューズ「カザキリを始めとする情報も入手できないので。後から一方通行に聞くというのも考えていましたが、幾らなんでも良く分からない相手に正面から突っ込むのはやめさせたかったので(汗)

その結果、なんだかダラダラと説明、会話だけの話になってしまいましたね。

次回はおそらく本章最終話になります。まさか8 - 20を本当に見る事になるとは、自分でも驚きです。内容の詰め方が下手になったのでしょうか：原作本に頼りすぎたのか：反省点だらけの作者で申し訳ありません。

それでは次回も、どうぞよろしくお願いします

8 - 20 道標 三種ノ翼 (前書き)

「長旅になるなア」

学園都市最強の超能力者(レベル5)

アクセラレータ  
一方通行

「オマエ、どうやって連れて来たんだ？」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路



## 8 - 20 道標 三種ノ翼

接続回路はインターフェイススポーツネットクレス型の装置のスイッチを切り替えた。

枷の外れた華奢な体に、チカラの奔流が伝わっていく。

認識したものを『結合』し、あらゆるものを『分解』し、様々な現象を引き起こす、最強に肉薄する学園都市最高峰の超能力が目覚めていく。

枷が外れたのは、インターフェイス接続回路だけではない。

その隣では、学園都市最強の怪物が目覚めていた。

アレイスターの計画に生まれた綻び。

その亀裂が、彼の大切なモノを『崩壊』させ、インターフェイス接続回路自身の大切なモノにも影響する。いや、おそらくは『影響』などという生易しいものではないだろう。

(コイツさえブツ潰せば、アレイスターの計画そのものが大きく揺らぐ。浜面の事がどオでも良くなるぐれエにはなア)

エイワスさえ殺せば、シスターズ妹達に起こるであろう最悪の事態も回避できる。

まずはこの『人間外』の存在を潰せばいい。

目的の定まったインターフェイス接続回路が、足下の空気を爆発させ、前へ出るが。

それよりも速く、白髪の少年が前へ出た。

脚力のベクトルを操作し、力の向きを効率的に操っている一方通<sup>アクセラレ</sup>行は、接続回路<sup>インターフェイス</sup>よりもはるかに素早くエイワスへと接近していく。回避しようとしてもしないエイワスの懐へ飛び込み、未知の存在に腕<sup>アクセラレータ</sup>を突き出す一方通行。

触れるだけで人間を葬り去る、悪魔のようなその腕を。

その圧倒的な破壊力は、闇に染まる者ならば誰もが知っている。

接続回路<sup>インターフェイス</sup>の数メートル先で、その力が行使され

ドバツ！！と。

(な　　！！)

目の前で、華奢な体から夥しい鮮血が飛び散った。

後に続いていた接続回路<sup>インターフェイス</sup>の体に、一方通行<sup>アクセラレータ</sup>の鮮血が付着する。いや、付着、などというものではない。

さながらバケツが何かの水をぶちまけられたようだった。

自動演算を使用している接続回路<sup>インターフェイス</sup>の体に赤い染みはつかないが、目の前で広がり被ったようなビジョンはまさにそんな感覚だった。

「じつ……ば、アアがあああああああああああああああ  
ッ!？」

背後から聞こえる、少年の絶叫。接続回路は広げた掌を握り拳へと変え、エイワスに向けて剥ぎ取った電子の束を繰り出した。

『反射』を持つ一方通行アクセラレータがあればどの傷を負う相手。

畏れたというよりは、学習だった。自分までもが不用意にエイワスの攻撃を喰らっては、状況は不利になるだけだと。

しかし。

未知の存在は、接続回路インターフェイスの予想をはるかに超えていた。

「ッ!」

エイワスの背で何かが光ったかと思うと、視界の隅から赤い液体が飛び散った。目線を下げると、そこにはいつの間にか、巨大な切り傷が出来上がっていた。遅れて、内側から引き裂かれるような激痛が、脳に伝達されていく。

「……っ!……く、アアアアアアあああああああッ!？」

右肩から左腰にかけて刻まれた巨大なかまいたちから、一方通行アクセラレータのような鮮血が噴き出した。激痛なんてものではない。生きていることが耐え難いほどの、死を選びたくなるほどの鋭い痛みだ。

ゴドンッ、ドダンッ!と派手に転がり、俯せになって床を滑る。傷口を抉るような摩擦の熱に、歯を食いしばる。

あつという間に怪物二人を打ちのめしたエイワスは、至って平静に、

「しまった。これはこちらの落ち度だな」

見ると、長い金髪をかき分けるように、エイワスの背中から何かが生えていた。

それは翼だった。

核爆発や水素爆発よりも人体に悪そうな、輝きすぎる輝きを放つ翼。

それは、先ほど接続回路インターフェイスがエイワスの背中に見たその輝きに似ていた。

理解を超えた、現存するどの言葉でも表現しがたいその翼は金色のようにも見えるが、少し違う。配合バランスや用いる種類で無限に変化する絵の具でも、この色だけは再現できないだろう。

青ざめたプラチナ、そんな不可解な表現が中では近いかもしれない。

「アレイスターめ、sn構boz1用ウイルスに何か細工をしたな。  
ラストオーダー打ち止めを経由して私のbeuo顕dnmに自己防衛bseou能gbuを埋め込んだか。いやはやすまない。自殺防止装置のようなものをnb spg加npisrらしい。私をsb g p殺napedvければ勝手に動くnspidh翼gprwsをどうにかしてくれ」

ノイズの混じったエイワスの声は、ほとんど聞こえなかった。

どうすればいいのか。

どうすれば『勝てる』のか。

切り裂かれる瞬間すら目にできないような攻撃手段を持つ者に、  
対抗する方法は？

(ふざけんじゃねエぞ………！！)

何のためにここまで来た。どうして自分はこんな訳の分からない  
存在と戦っている。

守るためだ。

頭の中に、多重観測<sup>エクスプローラ</sup>を始めとする人々の顔が浮かんだ。すべては、  
大切な存在を、守るべき者たちを、理不尽に食い潰されようとして  
いる者たちを、守るために始めたことだ。

かつての、自分だけしか居なかった頃ならば、潔くこの現実を受  
け止め、為す術もなく殺される道を選択したことだろう。事実、自  
分のような『罪人』がいつまでも蔓延っていていいはずもない。今  
は贖罪を、いずれは厳罰を、そう望んで生きてきた。

しかし、彼は贖罪という名の悪を為していく過程で、自らに存在  
意義を見出した。

『必ず、帰ってきて。私も曖も、みんなあなたを待っているから』

こんな醜い『罪人』でも、必要としてくれる『善』が居るのだ。

生まれもって殺人者の烙印を押され、見棄てられた自分でも、大切  
に想ってくれる人々が。

こんなところで終わっていいはずがない。

その『優しさ』に應えるためにも、こんな所で潰れていいはずがない。

(……超える)

施された封印を、限界を超えるための『チカラ』を。

解き放つ。

その刹那。

バオオオッ！と、うずくまっていたインターフェイス接続回路の向こうから、強烈な爆風が発生した。

思わず顔を上げれば、双対の黒い翼が目に映る。

「abeoughaba eougbao 殺wobnowe ufer  
ya……ッ！」

エイワスの翼とは対照的な、吸い込まれるような漆黒の翼が視界全体に広がり、一方通行が何かを叫ぶが。

「 汝の欲する所を為せ。それが汝の法とならん、か」

それを見たエイワスは、わずかに首を横に振った。

「残念ながら、それはr g g時r i代p i r e g jが違つな。君のは所詮、オシリスの頃のr s g力n o p h eだ。その程度ではホルスを生きる私にh o s e f敵q i e r dないよ」

エイワスが言い終わる頃には、黒い翼はその眼前に迫っていた。

轟音が炸裂する。輝き過ぎる翼と、光すら飲み込むような翼。

二つの翼が正面から衝突した瞬間、嵐のような衝撃波が空間を薙ぐ。

ゴツパアアアン！！と、アクセラレータ一方通行とエイワスを中心として爆発が巻き起こった。

「オグツ……がアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

吹き飛ばされたのは、アクセラレータ一方通行だけだった。咆哮にも似た絶叫が響き渡り、頑丈な壁に激突して倒れ込む。核シエルターの試作品と、アクセラレータいうこの要塞の壁に、蜘蛛の巣のような亀裂が走った。

「こんなものか」

血だまりの中心で沈んでいるアクセラレータ一方通行を見つめて、エイワスは簡素な言葉を漏らした。まだ生きてはいるようだが、すぐには起き上がれない。

「む？」

ガギイイツ！！と、エイワスの翼が何かと接触した。

エイワスが振り返ると。

そこには、渦巻く赤黒い翼があった。

「ウウあmtgああああアアアアmdppgppアッ!」

交差した二つの翼から、バチバチと火花が散っていく。虹色の火花だった。ひとつひとつの火粉の残像の中に、七色が輝いている。それはやがて同色の衝撃波となって、インターフェイス接続回路の体を吹き飛ばした。

しかし、赤黒い翼に変化はない。

「これは驚いた」

再び鏢迫り合う二種の翼。轟音が響き、虹色の火花が驟雨のように飛び散っていく。

「君のymxcimd翼gvwはイシスのものようだ。オシリスより前からgexujcgし後になってmwjしたものによく似ている。しかし」

二回、三回と鏢迫り合ううち、DNAの螺旋構造のような翼は綻び始めた。肉離れのように二つの奔流が分かれた時、インターフェイス接続回路の体が大きく後方へ吹き飛ばされる。アクセラレータ一方通行のようにシエルターの壁に亀裂を走らせ、倒れ込むインターフェイス接続回路。伏した床に、金臭い味の液体が広がっていく。

「油断は禁物だな。少し見方を変えなければ、少し影響を受けたかもしれない。とはいえ、思った以上にあっさりしていたな。性質の



差はあれど五分五分というところか。どちらも、この程度の成熟度ではヒューズ「カザキリにすら対応できまい。アレイスターめ、さては『今回も』焦っているのかな？……向こうの二人も気にな

」

バキリ！と。

エイワスは体の中心が細かく砕けるような感覚を受けた。

彼の存在を司る『材料』…… AIM 拡散力場の集合体の結合に、問題が発生している。長い金髪の毛先から、少しずつざらざらと分解されつつある。

「確か……」

背後から、掠れた声が聞こえた。

振り返った先には、いくらか薄くなった血だまりに沈みこちらを睨みつける白髪の少年の姿がある。その言語は、もとの人間のものに戻っていた。

「……オマエは、あの、ヒューズ「カザキリとかいう……光の翼を基に、現出しているン……だったな。そして……それを生み出す、ために、あのガキにウィルスを……ブチ込んだ。だとしたら……」

「考えたな」

髪だけでなく指先までもが分解されつつあるエイワスは、賞賛す

るような響きを持たせて笑った。

「私が向こうに気を取られている隙に、チョーカーの遠隔操作の電波を遮断するためのジャミング装置を、ミサカネットワーク全体に設定し直したか。あのネットワークは、学園都市全体のA I M 拡散力場の塊を誘導するための道標のようなもの。確かに、この空間からミサカネットワークによる干渉を妨げる事は、この場に限って私の『現出』を阻害できるという結果に結ばれるが……」

アクセラレータ  
一方通行は立ち上がっていなかった。顔を上げてはいるが、二本足で立ち上がるようなことはない。

「理解しているか？それは、君たちの命を繋ぎ止めていた命綱を、自ら切断するようなものだという事を」

アクセラレータ  
一方通行から離れたところに、彼のものであろう拳銃が見えた。彼が能力を使えない状況で、唯一『矛』となる残酷な文化の結晶。これでは、エイワスの現出を妨げることはできても一矢を報いることはできない。

「……うる、せえよ」

わずかに残る演算能力で滴る血液を循環させながら、アクセラレータ一方通行は震える唇でそう言った。

「アイツの綱も…一緒に、切られよオとしてン……のは、間違いねエ……だが、な」

アクセラレータ  
一方通行はエイワスを挟んで反対側に倒れ伏しているインターフェイス接続回路へ目を向けた。

バシャッ！という何かが勢良く展開される音が、エイワスに生じている視覚的なノイズに混ざった。

音源           エイワスは、音の聞こえた方向に目を向けた。

インターフェイス  
接続回路の左腕           杖を装着した左腕から、三又に分かれた猛禽類のような形の鍵爪が展開されていた。

その中心点に目を向けて、エイワスは再び笑みを零した。

その武器は、彼らが戦いに用いた超能力でも、それを超える翼でもない。

人間という醜い生き物が、自らの利害のために悲劇を引き起こすための道具だった。

エイワスの揺らいだ頭部の中に、表面が絶えずガシャガシャと動き回る三角柱のような物が見えた。深夜のテレビの砂嵐のようにノイズの走る全身の中で、唯一実体として認識できる部位。

仮にエイワスに脳や心臓のような急所があるとすれば、あの三角柱しかないだろう。

「汝の欲する所を為せ。それが汝の法とならん」

歌うように呟くエイワス。腕は肘まで、脚は膝まで。エイワスの体は少しずつ分解されていく。一方通行のジャミングが働いている

のだ。

確実にその影響を受けている接続回路が、震える左腕をエイワスへと向け狙いをつける。それを見ながら、エイワスは歓迎するように笑い肘までしかない両腕を広げた。

「なるほど。ならば示してみたまえ、汝らの法を」

刹那、割れるような銃声が響き渡った。

\*

「……………っ」

引き金を引き、弾丸が飛び出したのを確認した接続回路は、零れるように床に頭を落とした。直後、水晶が割れたような甲高い音を聞いて、わずかに頬を緩ませる。

(やったか……………?)

一方通行の策に気付いたのは、エイワスがそれについて言及した時だった。銃を落とした一方通行がこの方法を採用したということは、威力の高い仕込み銃を持つ自分に託したのだと直感し、すぐさま思考を切り替えた。

顔だけを動かしエイワスの居た場所へ目を向けると、そこは空気が敷き詰められているだけだった。

消えかけていたエイワスは、完全に『消失』していた。

(……何とか、なったか……)

訳の分からない相手だったが、一方通行の機転アクセラレータのお陰で撃破することができたようだ。

これで、アイツらを……。

「まあまあ、といった所かな？」

( ツ！？ )

聞こえた声に、インターフェイス接続回路は目を見開いた。

絶望は、まだ終わっていない。

先ほどエイワスの居た場所に、再びエイワスが現れた。本当に、いつの間にか。物音一つ立てることなく、AIM拡散力場の塊たる存在は初めて見たときと同じはつきりとした姿で。

「いや、本来ならヒューズ<sup>II</sup>カザキリ同様、私はあそこでダウンしていただろうね。明確に死亡とまではいかなくても、数年は出てこれなかったんじゃないかな。アレイスターの計画は大幅な修正を求められ、君たちはその間に打ち止めラストオーダーや妹達を助け出せたかもしれない。ただ、アレイスターは私が思うより慎重にセキュリティを構築していたようだ」

「……………クソツたれ……………」

離れた場所から、一方通行アクセラレータの音が聞こえた。そちらに目を向けると、白い髪の超能力者レベル5は震えながら必死に床を掴んでいた。

だが、それだけだった。

体から這い出た血液が、それだけの量に達したらしい。

あのプラチナの翼に続き、一体アレイスターは何重にエイワスを守っているのだろう。このままでは、今度こそ自分たちはお終いだ。

(な、にか……手、は………!!)

可能性を追いかける。

AIM拡散力場によって生じているこの存在を、今度こそ確実に、『消失』させる方法を。

だが。

「ここまで精一杯戦ってくれた君たちには悪いんだけどね」

そう言ったエイワスの頭上に、何かが生じた。

それは円環だった。

神話に出てくる天使の輪を連想させる、内部に白い芯を秘めた青ざめたプラチナの輪。

翼と同じ輝きを放つそれは、エイワスの頭の動きに沿って位置を変えていた。

まさしく、体の一部のように。

『天使』そのものであるかのように。

「……どうやら、私には変形機能があるようだぞ?」

刹那。

聞いたこともない未知の爆音と共に、薄れていた意識が吹き飛ばされた。

\*

10月18日、AM3:20。

夕風志乃は松葉杖をつきながら、冥土<sup>ハウンキヤンセラ</sup>帰しと大きな広間にやって来た。

そこには、六台のゆりかごのような形の寝台。ガラス張りで透けているゆりかごの表面からは、同じ顔が六つ、並んでいる。

「これは……!」

志乃は飛びつくようにゆりかごのひとつに近付いた。Misaka  
a-10412と、活字でパネルがはめられている。冥土ハツキョウセンセラー帰しは静  
かな口調で、

「全員が突然高熱を発し始めたんだ。ついさっきまでピンピンして  
いた彼女たちがね。これを見て、何か思い当たることはないかい？」

志乃はこめかみに指を当て考えるが、これがただの風邪などでな  
いことは明白だった。

六人が六人とも一様に同じ症状にかかるなど、ミサカネットワー  
クのシステムを考えればひとつしか思い当たらない。

「上位個体……ラストオーダー打ち止めが、何者かの手に落ちた……？」

口に出すと、冥土ハツキョウセンセラー帰しは顎に手を当て頷いた。冥土ハツキョウセンセラー帰しよりは裏  
の事情に詳しい志乃から、もっと有力な可能性がないか聞き出そう  
としていたのだろう。

その時、志乃の携帯が鳴った。

メールではなく電話。相手は。

「……インターフェイス接続回路!？」

表示を見た瞬間、志乃は弾かれるように素早く通話ボタンを押し  
た。

「もしもし!? インターフェイス接続回路!?!今、大変な……」

『知ってる。どんな状況だ?』



「知ってるって……」

志乃とは違い、インターフェイス接続回路は冷静だった。何とか冷静さを取り戻そうと努め、目をゆりかごへと向ける。

「エクスプローラ多重観測を含む入院していたシスターズ妹達が、個体差はあるけど40度前後の高熱を発しているわ。今は治療用カプセルに入れて何とか上昇は抑えられてるけれど」

『……………』

しばらくの沈黙があった。声が聞こえない代わりに、その周りの雑音がわずかに入ってくる。ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトンという、定期的な振動音が連続していた。数十秒の間、その音だけが聞こえ、やがて聞き慣れた低い声が聞こえ始める。

『……………わかった。そいつらは俺が…………俺達が必ず助ける。それまで、そいつらを頼む』

「ちよっと、あなた今一体」

ブツリ、と。

回線は一方的に切断された。

志乃はもう一度通話ボタンを押そうとしたが、すぐに指を引つ込める。目にかかった前髪を軽く分けて、ハンキョウセラ冥土帰しへと目を移した。

「……………彼はなんて？」

柔らかい年配の声が尋ねる。志乃は一度目を閉じ、静かに口を開いた。

「何か打つ手があるみたい。それまでこの子達をよろしく、ですって」

「そうか……」

聞いて、冥土ヘウンキヤンセラ帰しはふっと笑うと、かつかつと六つのゆりかごを通り過ぎ、モニターが三つあるパソコンラックの前に腰掛けると、それを起動させた。

「なら、僕たちは僕たちで彼女たちのために出来ることをしようか」

\*

暗い空間の中で、接続回路インターフェイスは手にした携帯電話をへし折った。これで、追跡される要因がひとつなくなる。

それには、接続回路インターフェイスが関わった多くの人々とのやり取りが記録されていた。

エクストローラ  
多重観測、夕凧志乃、冥土ヘウンキヤンセラ帰し、夕凧メジャーハート曖、心理定規、垣根帝督。

二度と交わることのない者との記録も、その中には入っていた。

しかし、今から行く先を目指し、そして大切なモノを救うために

は必要なことだった。

呼吸の音はひとつだけではない。

インターフェイス  
接続回路の他にも、二つの呼吸が聞こえていた。

彼の隣にひとつ。

彼らの前にひとつ。

掠れた息と荒い息が、それぞれ聞こえている。

『ロシアに行け』

暗闇の虚空を見つめて、インターフェイス接続回路はぼんやりと投げつけられた言葉  
を反芻した。

『正確にはそこから独立したエリザリーナ独立国同盟か。そこは今、惑星規模の戦乱の中心点へと変貌しつつある。ありとあらゆる文明の知識や技術が、軍事と兵器に鍛えられて集結することだろう。…そう、君たちが見たこともないような、「全く別の法則」もね。禁書目録という言葉覚えておくといい』

そこから先にも、いや、その前にも何か言っていた気がするが、思い出されるのはここまでだった。

じつと、と、隣で少年が動いた。

目の前に寝かせていた少女を抱き起こし、そのまま抱き寄せているのが分かる。

インターフェイス  
接続回路は目を閉じ、少しでも体を蝕む鈍い痛みから逃れようとした。

「……………ロシアへ」

目を閉じた少年の隣で、白髪の少年は小さな、小さな声で呟いた。

どうも、櫻井です。

今回は本章最後という事で、熟考して作り上げた次第です。…あ、いつも熟考していますが、それ以上にとという意味で(汗)

本章の大目玉は、勿論エイワスとの戦いですね。一斉に襲い掛かって一斉に吹っ飛ばされるのもアリかと考えましたが、一方通行が吹っ飛ばされたのを見て冷静に対処しようとしたけど結局吹き飛ばされた、という形にしました。エイワスがそういった戦術論そのものからかけ離れた存在であるという事を表現するために、ですね。

持ち前の能力にしる、翼にしる、杖のギミックにしる、それぞれ交互に出しましたが、これは『接続回路は一方通行の背を追っている』という意味も込めています。

原作で一方通行がカッコ良く銃で狙い撃つシーンを勝手に改竄してしまいましたが、何とか『協力』という形をとりたかったので。接続回路の杖にはジャミング装置はありませんからね。

オシリス、ホルスというおそらく翼の時代を意味する単語ですが、調べたところエジプト神話に出てくる神の石柱、オシリスとその息子ホルスから来ていたようです。なので接続回路の翼はオシリスの妻イシスから持ってきています。

さて、とうとう20巻の内容に入っていきますが、その前にエイワスとアレイスターの会話SSが入ります。ヒーローについて語るやつですね。ウチの主人公が第四のヒーローの形として表現されたり、その意味について語られたり、それなりに意味のあるSSになります。

第9章からは服装も変わり、冬セラレータならぬウィンターフェイスが出てくるわけですが、上手いこと言ったのではとちょっと増長しています（汗）

今まで以上に波乱万丈総決算な内容になっていますので、少しは面白くなるかな、とは思っています。今までほとんど出てこなかった魔術も大いに絡んできますしね。

ばら撒いた伏線の回収にようやく入れるので、作者としてもモチベーションが上がっています。

それでは次回、お楽しみに。応援よろしく願いします！

章末特典 SS? 四種ノ英雄(前書き)

「SSと称して伏線：か。執筆者は何を考えているのだろうか」

学園都市の頂点に君臨する謎多き総括理事長 アレイ

スター!!クロウリー

## 章末特典 SS? 四種ノ英雄

AIM拡散力場で現出しているエイワスは、その超然とした外見からは想像もできないものを手にしていた。

それは携帯電話だった。

建設途中のビルの鉄骨の端に立ち、彼は月を見上げながらありきたりなそれを耳に当てた。

「そんなに不思議かね、アレイスター」

人間らしい動きで、その小さな機械に声を掴ませる。相手は少しの間黙り、やがて中性的な声が聞こえてきた。

「その気になれば、移動に足など必要あるまい。意志の疎通に関しても同様のはずだ。確かに不可解ではある。効率的とは思えない」

感情の読み取れない声が、エイワスの『行為』を否定する。だが、当のエイワスにそれを気にした様子はない。

「二本の足で立ち、文明の利器で会話をする。……それなりに価値の見出せる行為じゃないか。猿人の時代から続いている行為とつい十数年の間に築かれた新たな文化。私としては私が経験するに足るものだと思うのだが、効率優先でガラス容器の中に逆さまで浮かぶ男には解せぬ風情かもしれない」

エイワスは価値を、アレイスターは効率を。



人智を超え超然とした雰囲気を持つ二人を分かつ最大の違いは、そこにあるようだ。

「そうそう。君が五十年以上もかけてこんな酔狂な街を作り、ようやく発現させる事に成功したあの第一位と強化原石だがね」

エイワスは頭の中に、逃がしてやった二人の顔を思い浮かべていた。

『…思った通りには進んでいないという話か』

先を読んだように、アレイスターは言った。エイワスは「ん」と小さく発し、

「まあ、誤差範囲を含めて何とか許容できるんじゃないか？二人とも。とはいえ、思った以上に幼い精神だったな。彼らは自らを悪と蔑んでいたようだが、それは善に対する強烈なまでの渴望の裏返しであると、本人達は気付いていたのかね。…特に第一位の方が。彼が背中を追う幻想殺しは、そもそも善悪に属するから行動しているのではなく、自身の内から湧き出る精神活動に従った行動が、他人からは勝手に善だと評価されているだけなのにな」

エイワスは頭上の月を見上げ、薄く微笑んだ。そして「おっと」とわざとらしく付け足す。

「強化原石の方はむしろ幻想殺しに近付いているようだね。彼は幻想殺しと第一位、両方の影響を受けている。幻想殺しから学んだことの上から第一位の生き方をなぞるように行動している。意識してかは知らないが。ふふ。君が彼に与えようとしている『役割』を担うには、ちょうどいいアンビバレンツさではないかな？イシスの翼

も、それなりの段階までやってきているしね」

『経過としてはな。この先、またどんな事態に陥るかもわからない。精神の育成に関しては専門家を連れ立って行っていたが、あなたの言うように順調そのものだ。イシスの翼が真の覚醒を遂げれば、彼らは我々が望む要素の片方を務められるようになる』

何かを吹っ切ろうとでもしているように、アレイスターが語る。  
エイワスは微笑みを絶やすことなく、

「……もしかして、君は彼らに憧れているんじゃないのか？」

『……、』

エイワスが言うと、アレイスターは黙り込んだ。図星なのは知らないが、彼は饒舌に語り続ける。

「一口にヒーローと言っても、様々な分類がある。……誰に教えられなくても、自身の内から湧く感情に従って真っ直ぐに進もうとする者。……過去に大きな過ちを犯し、その罪に苦悩しながらも正しい道を歩もうとする者。……誰にも選ばれず、資質らしいものを何一つ持っていないなくても、たった一人の大切な者のためにヒーローになれる者。そして、生まれ持った罪と利己的な過ちのために苦悩するが、それと真逆の自分を求め善への道突き進む者。そのいずれもが、何度叩きのめされても自分の足で立ち上がるような者たちだ」

『……エイワス』

制するようなアレイスターの声が聞こえてくる。だが、エイワスは止まらなかった。

「そんな四種の英雄は君の持っていないものを備えているようだ。故に、君が憧れるのも無理はない。……何せ君は『あの時』、崩れ落ちて嘆くことしかできなかったんだからね」

『エイワス』

先ほどよりも強く、アレイスターはその名を呼んだ。

男性にも女性にも、大人にも子供にも。

聖人にも罪人にも見える人間の声色。

それはほんの一瞬だけ、彼らしくない歪な感触を孕んだ。

そんな『異常』を感知しても、エイワスの表情は変わらない。アレイスター同様、中性的なその声も。

『使えるものなら何でも使わせてもらう。それがたとえ、多大な恩のあるあなたであってもだ。あなたは私の作り上げたプランに誤差があると笑うが、ならば私からも言わせてもらおう。……あなたのその絶対的優位こそ、永劫に続く保障などどこにもないのだと言う事を』

二人の間に、いや、正確にはアレイスターからエイワスへ対して、だが。

そこに、ピリツとした空気が生まれていた。

「別に私とて、望んで力を持ち、努力して維持しているわけではな

いのだがね」

エイワスは電話の向こうのアレイスターの姿を想像して、どうでも良さそうにそう言った。

この存在にとっては、この地上で最もエイワスのことを熟知しているであろう人物を前にしても、興味と価値という自らの掲げる行動指標を変えない。アレイスターの静かな感情の揺れすら、エイワスにとっては些細な問題にもならない。

ふむ、と彼は諸々の状況を反芻し、やがて踵を返しこう言った。

「まあ良いだろう。また価値と興味が湧いたその時に、私は再びここへ『現出』しようか」

意志を示すそれすらも、曖昧な響きであった。

## 章末特典 SS? 四種ノ英雄（後書き）

昼間の更新を見ていただいた方は改めまして。夕方から見始め一  
気読みという方はこんばんわ。櫻井です。

本当はこのエピソードも8・20に盛り込むべきなのでしょうが、  
テンポの問題で断念しました（汗

さて、これでとうとうロシアへ向かう準備は万端ですね。

接続回路は一方通行と共に打ち止めを治す方法を探しロシアへ。

倒れてしまった多重観測、力尽きた夕風曖、奔走する冥土帰しと  
夕風志乃。

そして、これから関わる重要キャラクターたち。

本作、とうとうクライマックスです。

ここまで見てくださった皆様、拙い駄文もいよいよ終局を迎えま  
す！

未熟ながら、最後まで全身全霊をもって取り組んでまいりますの  
で、どうか最後までご覧ください！

9 - 1 開戦 大キナ嘘 (前書き)

「ペアルック……？」

超能力研究機関の元研究員 夕凧志乃

## 宣戦布告

これは世界とそこに住む全人類を守るための戦いである。

今日、各地で起こっている温暖化や海面上昇などの環境破壊、石油やその他の化石燃料などの不足問題は、全て学園都市の特異な科学技術が元凶となっている。彼らの無秩序な科学技術の氾濫を食い止めなければ、この惑星に住む生命体は、すべからず絶滅する事だろう。

学園都市は全人類、全生命体の未来のために、速やかに各地で行われているプロジェクトを完全に凍結する必要がある。また、諸処の問題を分析し解決するため、その元凶となった最先端の科学技術を我々に開示しなければならない。

平和を求める我々の提案を拒んだ場合、それは学園都市には世界との融和の意志はなく、ただ己の利権のためだけに、この地球に住むあらゆる生命体を危機にさらす邪悪な存在であると判断する。

学園都市からの返答は、モスクワ標準時間10月19日午前零時まで受け付けるものとする。

それまでに為されるべき返答がなかった場合、戦意ありとして我々は大陸間弾道ミサイルの使用も考慮した侵攻作戦を開始する。

なお、我々は学園都市と特に強い友好関係にあるグレートブリテン及び北部アイルランド連合王国に対しても、同様の判断を行う。己の利権のためだけに他の全ての生命体をないがしろにし、学園都

市から得られる甘い汁をただ求めるだけの存在ならば、我々はこの後の長い未来を歩む子孫のためにも、敵国と全力で戦う必要があるのだから。

10月18日　ロシア

連邦大統領　ソールジエーエークライニコフ

\*\*\*\*\*

10月30日。

インターフェイス　アクセラレータ  
接続回路と一方通行は貨物列車に潜り込んでいた。

連邦横断鉄道と呼ばれる、ユーラシア大陸を横断する世界最大の路線である。本来であれば始発駅から終着駅まで二週間以上を要するらしいが、第三次世界大戦が開戦された今は例外らしい。いち早く戦場に補給物資を届けるため、二人を乗せた貨物列車は安全規定を無視できる限界速度で運行されていた。

(学園都市を脱出して12日……。こいつの速度を逆算すれば、もうロシアの国境をくぐる頃だな)

インターフェイス  
接続回路は左腕に装着している改造杖の具合を確かめた。バシャッ！、ガシャッ！、と、二度ほど展開と収納を繰り返し、傍らの少



年へと目を向けた。

白い髪の長さはインターフェイス接続回路ほどで、その顔つきや体つきは二人をよく知らなければ見分けられないほどよく似ている。白を基調とした防寒服に身を包むその少年の前には、分厚い毛布にくるまれた見た目十歳前後の少女が居た。

ラストオーダー  
打ち止め。

灰髪の少年インターフェイス接続回路と白髪の少年アクセラレータ一方通行がこの列車に乗り込んだ『理由』である。

インターフェイス接続回路もまた、アクセラレータ一方通行と似たデザインのシルバーグレーの防寒を着込んでいた。メーカーが同じだったことを考えると、二着の入っていたトランクは双子の兄弟が何かのために送られたものなのかもしれない。

益々瓜二つの姿になった二人が、ラストオーダー打ち止めの顔を覗き込む。荒い息を吐き、嫌な汗をかいている小さな少女の臉が、ゆっくりと開かれた。

「……ここどこ？ ってミサカはミサカは辺りを見回してみたり」

アクセラレータ一方通行とインターフェイス接続回路を順に見て、ラストオーダー打ち止めが尋ねる。

第三位、御坂美琴のクローン人間であり、ミサカネットワークのコンソールの役を担う彼女は、エイウスという名の怪物を生み出すために多大な負荷をかけられていた。インターフェイス接続回路が想う彼女の下位個体も、遠く離れた学園都市で彼女のように苦しんでいる。

しかし、彼女まで激戦区であるロシアに連れて行くわけにはいかなかった。危険というだけでなく、意味がないのだ。

「列車の中だ」

目を覚ました少女に、アクセラレータ一方通行は静かに答えた。

「ヨミカワやヨシカワは？ってミサカはミサカは質問してみる」

「今はいない。でも絶対にすぐに会える。必ずだ」

ヨミカワにヨシカワ……アクセラレータそういえば、志乃の友人のところでは生活をしていた。一方通行もおそらくは、『グループ』に入るまではそうするつもりだったのだろう。

「そっか……あれ？インターフェイス接続回路、エクストラローラ多重観測は一緒じゃないの？って、ミサカはミサカは続けて質問してみる」

少女の顔がこちらに向いて、無邪気な質問をぶつけてきた。  
インターフェイス回路は一度目を逸らし、接続

「一緒には来てない」

短く、そう答えた。他に答えようもなかった。下手な嘘など何の意味もなさない。

「そっか……二人とも、急に仲良しさんになったんだねって、ミサカはミサカは感心してみたり。ねえ、エクストラローラ今度多重観測も連れてみんなと一緒にごはん食べようよ、ってミサカはミサカは提案してみる」

ダイヨミカワの煮込みハンバーグは絶品なんだよ、と付け足す打ち止ラストオーめ。インターフェイス接続回路はなるべく口調が優しくなるよう意識し、

「そりゃいいな。そうするか」

そう答えた。打ち止めは汗だくの顔で満足そうに笑うと、一方通行へと目を向けた。

「でも、良かった、ってミサカはミサカはホッとしてみたり。やっ  
と、久しぶりに、あなたの顔を見られたから、ってミサカはミサカ  
は手を伸ばしてみる」

彼女はそう言ったが、彼女の小さな手は動かなかった。

身を包む毛布を掴んだ手は動かず、ぴくぴくと震えるばかり。

一方通行はそんな様子に歯を食いしばり、ぎこちなく打ち止めの頭を撫でた。接続回路は顔を背け、打ち止めに見えない右拳を握りしめる。

(クソったれが……どうしてこんなことになる)

この少女は、こんな目に遭う必要はないはずだ。罪人でも何でもない小さな命が、どうしてこんな風に脅かされなくてはならないのか。

その理由は、到底納得するに足らないものだ。

たった一人の人間が、たった一人の怪物を生み出すために「製造ライン」<sup>ラストオーダー</sup>として彼女を利用し、その対価として、何も知らず何の罪もない打ち止めは命の危機に瀕している。

「…………ふざけやがって…………」

アクセラレータ  
一方通行の呟きと、インターフェイス接続回路の心の声が重なった。因果なもので、インターフェイス接続回路がロシアまで来たのは打ち止めがこうなっている直接の『ラストオーダー原因』、エイワスに導かれてのことだった。

ロシアへ行け、という指示と、『エリザリーナ独立国同盟』という名前。ロシアのどこかで活動しているであろうその組織まで辿り着ければ、何らかの成果が見込めるはずだと、エイワスは言った。

あの存在を信用するというのも糺だが、事実、自分たちよりはアレイスターの計画に詳しく、打ち止めの状態についても心当たりがないわけではなさそうだった。

ならば、他に情報がない以上それに賭けるしかない。賭けるだけの価値はあると、インターフェイス接続回路は考えていた。

(何のヒントもないわけじゃねえ…………万策尽くせば、必ず辿り着ける)

そう自分に言い聞かせるように決意した、その時だった。

ベコンッ！！という何かが凹む音が、屋根の上から聞こえてきたのは。

インターフェイス接続回路とアクセラレータ一方通行が、同時に天井を見上げた。

ベコンッ！！、ベコンッ！！と連続して、同じ音が聞こえてきた。

二人の瞳が細められ、そこに鋭い光が宿る。

「あれ……？これ、何の音  
「何でもねエよ」

ラストオーダー  
打ち止めの疑問を、アクセラレータ  
一方通行はかき消すように遮った。ポケット  
からハンカチを取り出して、ラストオーダー  
打ち止めの両目を隠すように置く。隠  
しているのは彼女の目ではなく、彼女から見る『世界』の方だが。  
インターフェイス  
接続回路は鋭敏な耳をそばだて、音源の数を確かめる。

一つや二つではない。

天井だけでなく壁や床下、あらゆる方角から、異様な音は連続し  
て鳴っている。高速で走る列車の騒音にも誤魔化しきれないこの音  
が止んだ後、今度はいくつかの銃声と共に、聞き慣れぬロシア語が  
聞こえてきた。

『な、なんだおま　くぼアッ！！』  
『くそ、ど、どこから　ぎゃあああッ！！』

すぐに悲鳴へと変わったロシア語。インターフェイス  
接続回路は眉をひそめ、首の  
装置に触れた。

12日間の間にとった睡眠で、バッテリーは満タン近くまで回復  
していた。

(……こんなスピードで走ってる列車に飛び移るなんざ、そこらの  
テロリストじゃ不可能だ。　　つう事は)

音の正体は、学園都市からの追っ手と考えると間違いない。

「また、あんな風にケンカしたりしないよね、ってミサカはミサカ  
は聞いてみる」

瓜二つの二人へ向けて、ラストオーダー打ち止めは目を覆うハンカチをどかさずに尋ねた。きつと、この少女は二人のしよつとしていることを分かっている。そしておそらくは、それに対する『答え』も。

「……………あア、約束する」

アクセラレータ一方通行はそう答えた。それが嘘であることは、インターフェイス接続回路にも分かる。ラストオーダー打ち止めの顔が動き、インターフェイス接続回路の方を向いた。こちらの答えを、聞こうとしているのだろう。

決まっている。

「必ず守る」

アクセラレータ一方通行同様、一言だけの大きな嘘。いや、ある意味では正直な答えかもしれないが。ラストオーダー打ち止めが正常な状態なら、二人から能力を剥奪することもできるはずだった。あつても困るが、そんなことは起こらない。あるいは、ラストオーダー打ち止めにそれだけの事をする余裕がなくなっているのだろうか。

インターフェイス接続回路は立ち上がり、徐に天井を見た。固い鉄板をベコベコと凹ませる音は続いている。

「……………」

アクセラレータ一方通行と、顔を見合わせ。

首のスイッチを、同時に押す。

その刹那。

学園都市の怪物二人が、同時に目を覚ました。

直後、バゴオツ！！という轟音と共に。

二人の体は列車の屋根を突き破り、吹雪に見舞われた屋根の上へと着地する。

車両の中から飛び出していた、白と灰の瓜二つの影。

こじ開けた穴を挟み背中合わせになって、怪物二人は襲撃者たちを睨みつける。

そこに居たのは、十体ほどの白いパワードスーツ駆動鎧だった。

上半身は人間のそれと変わらないのに、下半身はひどく肥大化している。おそらくは、機動性特化型の改良を加えてあるのだろう。高速移動は勿論のこと、衝撃緩和や平衡感覚の補助等、より効率的に移動するためのシステム全てを盛り込んでいると考えられる。

長い間深い闇を彷徨っていたインターフェイス接続回路も、この種類は見た覚えがなかった。自分達を回収するためか、戦争の『ついで』なのかは知らないが、上層部はこの新兵器の運用にかなりの予算を費やしていると思われる。

そんな未知の兵器を目にしても、二人の怪物は揺らがない。

むしろ、その眼光をさらに鋭くしていた。

「……ガラクタが」

小さく、インターフェイス接続回路は呟いた。

刹那、灰と白の影は動き、それぞれ瞬く間に一番近くに居たバワード駆動スーツに襲い掛かる。

『じっ……ガッ……ッ……!?!』

その白い機体の胸に腕を突き刺し、風穴を開けて烈風の吹き荒ぶ雪原へと放り捨てる。

その一瞬の出来事に、狙いをつけていたバワードスーツ駆動鎧が身じろぎした。

インターフェイス接続回路はそれを睨みつけ、憎憎しげに言い放つ。

「ゴミ掃除だ。一人残らずスクラップにしてやる」

言葉と共に、再び少年は動き出した。



どうも、櫻井です。

予定より早いです、9 - 1を投下致しました。内容は20巻の一方サイドに接続回路を加えただけです、背中合わせになったりアイコンタクトができたりと、そんなに長い間一緒でもないのに息ピッタリな二人。すみません、思いつきり絵面優先カッコ良さ優先の演出でした(汗)

因みに打ち止めは多重観測を応援してる側なので今回あんな事を言わせて見たり。ミサカネットワークで会話をするとすれば打ち止めが多重観測をからかったりしているのでしょうか：そんなSSも書きたいなあ(笑)

さて、のっけからハイスピードに進行しておりますが、全力で取り組んでまいります！  
次回もお楽しみに！

9 - 2 分散 分岐スル糸口 (前書き)

「あの人の誕生日は何時なのでしょう……とミサカは雑誌を手に  
呟きます」

シスター・ドリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスペローラ  
多重観測

9 - 2 分散 分岐スル糸口

圧倒的、という表現が的確だった。

列車を襲撃した白い機械の兵士たちは、つい先ほどまで、自分たちがそこに居たのだと自分たちを鼓舞する。生身のロシア兵士に対し、まさに圧倒的な戦闘を行っていたはずだ。

自分たちは優位に立っていたはずだった。

しかし、これは何だ。

目の前を、白い影が通り過ぎた。

次の瞬間、仲間はずっと離れた雪原に埋まっていた。

真横を、灰色の影が通り過ぎた。

気付いた時には、自分の腕が途切れていた。

二色の影が現れてから、まだ一分と経っていない。  
なのに。

仲間はもう、どこにも居なかった。

上には上がいる、という言葉がこの世にはある。太古の昔から、

コミュニティを形成する生物には階級が存在し、それは生まれや育ちだけでなく実力にも左右されるものだった。

この新型兵器を着込み、敵を討つと決めたその時には、世界で頂点に君臨する科学技術を纏う自分たちこそが、頂点なのだと言心を抱いたものだ。

最強の超能力者<sup>レベル5</sup>と、垣根帝督のいない今最も警戒すべき超能力者<sup>レベル5</sup>の二人を同時に相手することが、どれほど危険で愚かな行為だったのか、今になってわかった。

「……………こいつで最後か」

そんな声が聞こえた。

その数秒後、白い装甲は粉々に砕け、主は冷たい雪に埋まった。

\*

「……………思ッたより早く片付いたな」

高速で移動する列車からは、叩き落とした駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>は見えない。『暗闇の五月計画』から習得した公式のお陰で、わざわざ敵の『素材』を分析する手間がなくなつたため、蟬脇によって突かれた弱点のひとつは完全に克服していた。

「そオだな」

一方通行アクセラレータが同意する。その手には、手錠付きのトランクが握られていた。

「ンだア？そりゃ」

壁も天井も傷だらけになっているコンテナに入り込んで、インターフェイス接続回路は尋ねた。一方通行は「あア、」と気付いたように言って、

「連中がロシア軍人から奪い取るオとしてたモンだ。こいつの回収も、俺たちの回収と同時に行動しておうとしていたらしいな」

一方通行アクセラレータはトランクを開けて中身を見せた。

そこにあつたのは、とても手錠や嚴重なセキュリティシステムで守られるに足るとは言い難い、古ぼけた数十枚の羊皮紙だった。

見れば見るほど眉唾な、街中にたまにいる占い師が持つていそうな代物だ。ただ、その手の事に露ほども興味も持たないインターフェイス接続回路から見ても、それがインチキ占い師の所有物の範疇でないことはわかる。魔法陣のような模様は生半可なものではなく複雑だし、どの言葉かもわからない呪文の羅列のようなものも心なしか圧迫感のよくなものを覚える。

どちらも、小悪党が小遣い稼ぎのために作るには出来が良すぎるのだ。

と、まあ主観的な推理を展開するものの、中身が何であれ、こんなに嚴重に運ばれようとしていたものが『ただの落書き』でないことは間違いない。

「……ロシア軍人から、つつたか」

接続回路は呟いて、二人を見て腰を抜かしている白人の男に目を向けた。どこから見ていたのかは知らないが、手も足も出なかった機械の兵隊たちを瞬く間に葬り去った二人に怯えているのだろう。純粹に寒いのかも知れないが、ガチガチと歯を鳴らして男はふるふると首を振った。

この状態でこの反応ということは、守秘義務や忠誠心に関係なく、この男はこの羊皮紙について何も知らないのだろう。使えねエ、とインターフェイス接続回路は呆れたように嘆息した。

「オマエこの近辺に軍事施設の心当たりはねエか？それに準ずる施設でもいい」

「ぐ、軍事、施設……？」

ロシア語で尋ねると、男は震えたまま聞き返した。何やら戸惑うような表情に男がなるが、すぐに表情を戻し、

「ウチの空軍基地と……う、ウラル山脈の炭鉱を改造して作られた、軍の研究所がある。空軍基地はもう少し先の平野にあるから、すぐに見つかるはずだ」

男の言葉を聞き取って、二人は顔を見合わせた。ウラル山脈はここからでも見える場所にある。国境に沿ってそびえている山々だ。ラストオーダー平野というともっと内陸部に行かなくてはならない。打ち止めの症状は悪化する一方だし、極力時間はかけたくないというのが二人の総意だった。そして、平野と炭鉱、どちらが安全に打ち止めを運ラストオーダーべるかと言えば……。

インターフェイス  
接続回路は踵を返し、ウラル山脈に体を向けた。足元で絶命して  
いるロシア兵のポケットから無線機を取り出し、肩越しに振り返る。

「研究所の方には俺が行く。オマエは基地の方を頼む」

「わかった」

アクセラレータ  
一方通行が頷くのを見て、  
インターフェイス  
接続回路は足元の空気を爆発させた。

\*

国内のとある一室に、赤い人影があつた。街中を歩いていては明らかに目立つ全身赤の衣服に身を包むその男は、窓の外の景色に目を向けていた。

右方のフィアンマ。

ローマ正教の最深部、秘密組織である『神の右席』のリーダーであり、当然その権力は世界に20億人いるローマ正教徒全てを顎で操るほどのものだった。

しかし、四人居る『神の右席』のメンバーは悉く撃破され、後方のアックアに至っては裏切られるという事態に陥っていた。

これは大きな損失だった。

たかが三人と思う者も居るかもしれないが、『神の右席』クラスの間は一般の魔術師とは比べものにならない価値がある。対比するのも馬鹿馬鹿しい差が存在しているのだ。

故に、フィアンマは己が目的がために、同盟を結んでいるロシア  
成教経由でロシア軍を動かすことにした。第三次世界大戦などと大  
袈裟に言われているが、フィアンマにとってそれは『いい時間稼ぎ』  
程度の事件でしかない。

(……そろそろ向かうか)

フィアンマは窓から目を離し踵を返した。

そして。

「早かったな」

振り返った先にいた人物に、フィアンマは言う。

フードの深い臙脂のコートに身を纏うその人物は、自らの顔を隠  
していた。フードで陰になっているため、端正な口元と無造作に伸  
ばされた髪くらいしか分からない。ただ、顔の左半分にできている  
火傷は、それを隠すように伸ばされた前髪の隙間から確認できる。

火傷の人物はわずかに口の端を上げた。

「あなたのお陰でね」

その声はまだ若い。十代後半から二十代前半ほどの声が、笑みを  
刻む口元から発された。彼は自らの胸に左手を当て、その場で拳を  
握り締める。

「思った以上だった。あなたから貰ったこの『チカラ』は、僕の想  
像をはるかに超えていた」



「そうか」

フィアンマは満足そうに笑い、近くで見ても初めて確認できる相手の瞳を見返した。今でこそ柔らかい形をしているが、フィアンマは怒りと憎悪に歪んだ彼の瞳を見たことがある。この世の全てを呪っているかのような、恐ろしい瞳を。

故に、この男に『チカラ』を与えたわけだが。

「及第点だ。わざわざ連中の病棟からお前を担ぎ出した甲斐はあったようだな」

言いながら、フィアンマは部屋のドアノブに手をかけた。

「次は時間稼ぎのロシア軍に加勢してやれ。俺様はエリザリーナ独立国同盟に向かう」

「了解」

フィアンマが出て行くのを見送って、火傷の人物は室内のソファに腰かけた。

そつと顔の火傷を白い指でなぞって、頭を抱える。

(……あれから二週間)

火傷の人物は抱えた頭の右側に、違和感を感じた。左手で頭を抱えたまま、革手袋をした右手を顔の前に出し拳を作る。五本の指が動くたびに、ウイン、ウイン、と妙な音がした。

指だけではない。

手首を回しても、肘の関節を曲げて、肩の関節を回しても、本来人間の体からはしない音が漏れてきた。耳障りとは言わないまでも、決して心地よくはないその音。触れてみれば、人間独特の弾力はなく、ただ硬い何かに触れている感覚しかない。広く騒がしい場所であれば全く気にならないのだが、静かな室内などに入ると途端に気になってしまう。

それは、この世界で最も進んだ技術によって作られた義手だった。いや、義手というよりも義腕と言うべきなのかもしれない。過去に彼に襲いかかった悲劇によって、彼自身の腕はもぎ取られていた。肺も片方が潰れ、今はごつごつした機械の肺が取り付けられており、その他の内臓もところどころ人の手が加えられている。

(この体にも、少しは慣れたか)

彼は人間らしい左手でもう一度心臓に触れた。定期的な鼓動がしてはいるが、そこにあるのはマトモな心臓ではない。

自分らしいものの大半は、全て二週間前に奪われていた。

怒り、恨み、憎み、絶望し。

今はたったひとつの感情に、全てを注いでいる。

「……ロシア軍の援護、か。相手は学園都市だな」

ソファから立ち上がり、彼は薄く笑った。

奪われたものを取り戻すことは不可能だが、同じ苦しみを味あわ

せることばかり。

「……アイツも、来ていればいいのにな」

憎悪とこころ、感情に。

どうも、櫻井です。

一日遅れの更新、申し訳ありませんでしたm( \_ \_ )m

副題通りの分岐点で、作者もいくつか作っていたルートをどのよう  
に活用するか、本当に悩んだ次第でございます。

結果的に、早々に二手に分かれる二人。ここから先は僕のオリジ  
ナル展開になります。

まさかのフィアンマ。彼と彼を組ませる、というのも兼ねてより  
考えていた展開でした。『神の右席』が欠けてしまったので、彼の  
あの能力にフィアンマが目をつけ何か細工を施した、という次第で  
ございます。

ちなみに義手とフィアンマは無関係で、フィアンマの施しは別な  
ところにあります。本文を見ていれば分かってしまうかと思いき  
すが(汗)

それでは次回もお楽しみに

「あなたのより多いわね」

学園都市第五位の超能力者（レベル5）

夕凧 曖

「数じゃねえんだよ、女にゃ分からねえロマンだ」

学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「全くだ」

学園都市第二位の超能力者（レベル5）

垣根 帝督

「あなたは人の事言えないでしょ……」

学園都市第三位の超能力者（レベル5）

御坂 美琴

「……こいつか」

岩と岩の隙間に隠れるようにあった人工のハッチを見て、インターフェイス接続回路は呟いた。彼から少し離れた岩の上には、失神した白人の体が無造作に載せられている。すべては偶然、良くできた話であり、あの白人がこのこ見回りに出たのを目にしていなければ、当てもなく内陸に面した山脈全体に解析をかけていたことだろう。

(しかし、ロシア軍の研究施設か……)

研究施設と聞くと、どうも血なまぐさい実験の記憶ばかりが蘇ってしまいが、インターフェイス「外」の研究施設とはどのようなものなのだろうか。不思議と、インターフェイス接続回路は「外」の世界にわずかな興味を見出していた。これが初めての国外脱出だからかもしれない。

(余計なことに頭が回ってんな……今はあの羊皮紙について知っている奴を見つけて、全部吐かせるだけだ)

現物は持つてきていないが、相応の見せしめでもしてやれば簡単に吐いてくれることだろう。面倒なのはあくまで目的の人物を見つけるまでだ。

警戒しながら、インターフェイス接続回路は一部が凍っているレバーに手をかけて重い扉を開いた。さすがに入り口付近だからか「それらしい」モノはなく、殺風景な通路がただただ伸びているだけだった。油断せず、ベルトから拳銃を引き抜いて杖をつく。

カチャツ、カチャツ、と、無機質な廊下に杖の音だけが響く中、  
接続回路は『最優先事項』を前に放置してしまった男女のことを思  
い出す。

浜面仕上と滝壺理后。

『ユニオン』を脱出してまで助けようとしたと言うのに、怪物の  
たった一言で忘却の彼方へと投げ出してしまおうとは、何とも情けな  
い話だった。結局エイワスを倒せなかったのだから、浜面に差し向  
けられた悪意をブレさせることもできていないはずである。

(……もしも、これで浜面たちが死んでいたら?)

自分は曖や心理定規の想いを踏みにじるだけ踏みにじって逃げて  
きただけではないか。

そこまで考えて、接続回路はふるふると頭を振った。鋭い目つき  
を取り戻す。

(……関係ねえ。全て多重観測たちを助けるために始めたことだ)

自分に言い聞かせるようにして、彼はようやくT字路に辿り着い  
た。右か左か、接続回路は一瞬だけスイッチを切り替えて確認する。

( 右方向80メートル先に人間6 )

平面距離の半径500メートル以内には、その6人しか存在して  
いないようだ。T字路の左側には人間はいない。接続回路は確認す  
ることもせず堂々と、T字路の分岐点に躍り出た。

左右、両方とも50メートルほど先にセキュリティ扉がある。

(ここは入り口から大体300メートルつてどこか。6人つうことは制御室か何かなのか?)

それにしても、通路が整理されていないように思える。内壁はところどころ凍っているし、地面も申し訳程度に鉄板が敷かれているだけで、通路の両端には隙間がある。仮にも軍事施設なのだから、もう少し整備されていそうなものだが……。

(…いや待て。さっきの解析の内容、人間の数に焦点を当てていたが、計器類は傍になかった。制御室の可能性は低い……つうことは……?)

インターフェイス  
接続回路は扉に手をかけ、眉をひそめた。

さっきまでの扉にはなかった、パスワードの認識装置がある。

(ここにだけロックを掛けなきゃならねえ理由でもあんのか? どうせ付けんなら、入口につけるべきだろうが)

少し迷って、インターフェイス  
接続回路は首のスイッチを押した。

その瞬間、扉の中心から同心円状に、扉自体を破壊しない程度の穴が出現する。下手に認識機械を破壊してしまうと、余計な手間がかかったことだろう。インターフェイス  
接続回路は開けた穴に華奢な体を通し、扉の向こうに移動した。

そこは独房のようなスペースだった。

研究施設で独房。嫌な記憶が思い起こされる。



(どこもやるうとすることは同じってことか?)

そう思いながら、通路を挟むように並んでいる房の片方を覗き込む。生物の死体のようなものは見られない。距離から考えると、生命反応のある6人はこの独房エリアの中に居るはずだ。独房に居るということは、少なくとも自分が期待する人間ではないのだろう。それでも、インターフェイス接続回路は両側合わせて十数部屋ある鉄の檻を眺めて

「ひっ………!」

いると、不意に小さな声が聞こえてきた。

そちらに目を向けると、そこには何人かの白人の男女がひとつの房の中に押し込まれている。老若男女、七十近い男性もいれば打ラスト止めぐオウダーらしいの少女もいる。顔ぶれを見る限り、家族か何かのようだ。

「わ、私たちの、番なんですか……?」

「あん?」

話されたロシア語は、インターフェイス接続回路と状況を共有していない。ただ、彼らが軍属の者でも、研究所員というわけでもないのは、質素な身なりから推測できる。まずは、状況の確認から始めるべきだろう。

「言ってる意味がわからねえんだが。オマエら、何だってこんなところに入ってやがる」

「え……?あなたは、あの人たちの仲間ではないのですか?」

震えながら話す、おそらくは一家の主であろう中年男性。寒さからなのか、彼の言う『あの人たち』の圧力によるものなのかは知らないが、身なり通りの階級であることは間違いないようだ。

「生憎仲間はずっと遠くに置いてきたんでな。オマエの言う『仲間』つつうのとは、繋がりはねえ」

すらすらとロシア語で返すと、中年男性はほっ、と一息つき、

「ではあなたはここへ何をしに来たんですか？…私たちを助けに、とか？」

「そうだな。場合に寄るがそうしてやってもいい。ここはロシア軍の研究施設らしいが、オマエ達は何でここにいる？合わせて、この施設に関する知ってることを話せ。そうすればオマエら全員ここから出してやる」

言つと、独房の中の一家は一樣に期待の視線を向け始めた。中年男性は二度、三度と大袈裟に頷いて、

「私たちはこの近辺の農村に住む者なのですが、一週間ほど前でしようか、突然村に兵隊が入ってきたんです。税はしつかりと払っているし、何の用だろうかと思えばいきなり銃を突きつけられ……。村人全員、ここの独房に押し込まれることとなりました」

話を聞きながら、インターフェイス接続回路は他の房に目を向けた。目を向けるまでもなく、彼ら以外に人がいないことはわかっているが。

「説明は一切なしか」

「……はい。ただ、『ここに入れ』と。命には替えられませんからおとなしく従いました。そしてその翌日から、どういうわけか一日に三、四人、房から出されまして……一週間経ちますが、出された人たちは帰って来ず、今や私たちだけになってしまいました」

話を聞いて、眉をひそめた。

研究施設で労働階級を拉致、監禁、定期的に拉致された人間が一定人数ずつ解放される……。

こんな条件では、ロクな結論には至らない。

インターフェイス 接続回路はわずかに俯いて、鉄格子を掴んだ。

瞬間間に、大人が束になっても壊れない扉は消失した。厳密には見えない粒となってあちこちに散布されただけなのだが。驚く一家を見て、インターフェイス 接続回路は頷いた。

「十分だ。通路を真ツすぐ進んで、途中にある分かれ道を左へ曲がれ。後は直進するだけで外へ出られる。防寒対策が必要なら曲がった先にある個室に入れ。そこに軍人が使うコートが数着用意されている」

「あ……ありがとうございますっ！」

嬉々として、中年男性が頷いたその時だった。

タァンツ！という銃声が、監獄の中に響き渡った。

「……………ッ！」

インターフェイス 接続回路は目の前で飛び散った火花を見て、その先に居た兵士を睨みつけた。房の中では、一家が頭をかかて震えている。それを見て、インターフェイス 接続回路は指をかぎ爪のように構え。

「上オ等じゃねエか」

銃弾が命中したのに怯むどころか笑っているインターフェイス 接続回路を見て、発砲した兵士は固まっている。インターフェイス 接続回路は通路と房の境目に足を踏み込み、床と天井を変換して一家の居る房を強固な壁で覆い隠した。

これで、彼らの扱う兵器からは一家を守ることができる。

そんなマジックのようなものを見せられた兵士たちは、茫然と目を見開いていた。

「何のつもりか知らねエが、テメエらの口から聞かせてもらっぜエ。村一つブツ潰そオとしてる理由ッて奴をなァ！！」

バオッ！！と。

インターフェイス 接続回路の足元で爆発した空気が、コンクリートの地面を砕いて後方へと吹き飛ばす。背後に居た兵士たちに、雨あられと破片が飛び散る中、自身はその逆方向に突進していく。展開している自動分解公式を右手だけ解除し、代わりに『オフエンスターマー 窒素装甲』を展開する。トラックすらもひしゃげさせる窒素の籠手が、装甲服を着込んだ兵士の腹に直撃し、血を吐かせるほどの衝撃を叩き込む。

「じぱッ……があッ!？」

吹き飛んで、中心をくり抜かれたセキュリティ扉へと突っ込んだ兵士。接続回路インターフェイスはくるりと身を翻して、破片の雨を浴びた者たちへと目を向けた。

見たところ、大分弱っているようだが。

接続回路インターフェイスは片手を前へ突き出し、演算を開始した。白い手に集う青白い光。バチバチと甲高い音を立てているそれは、電子の球。よろよろと銃を構え発砲する兵士たちを睨みつけ、接続回路インターフェイスは放たれた弾丸を無力化しながら引き金を引く。

数瞬後、破片の突き刺さった男たちは紫電の奔流に飲み込まれた。

\*

同時刻、ベルリン上空。

第二次世界大戦の戦火は人々のはるか頭上でも巻き起こっていた。

空中戦とは言うものの、蓋を開ければそれはもはや戦争と言うよりは単純なパワーゲーム。学園都市防空部隊に所属する鹿崎という警備員は、自らが乗る機体を化け物と称していた。

超音速戦闘機HSF-00は、系統を同じくする超音速爆撃機、HSB-02のフレームを応用しているため全長は80メートルにも及ぶ。にもかかわらず、現在速度は時速7000kmオーバー。地球の裏側まで2時間足らずで到着できる、速さにおいても体積に

おいても常識的を覆すスペックを誇っている。

周辺を並列飛行する一般サイズの小型機は、『H S A F H - 11』  
六枚羽』と同じくA Iによる自動操作。高度な演算機械を詰め込まれ、背後からの不意打ちにすら対応できるトリッキーな機体だ。H S F - 00が火を噴かずとも、この殺戮兵器たちはロシア空軍の一個小隊程度ならば1、2機で片付けることができる。

オーバーテクノロジーの塊たる機体に乗る鹿崎は、頭の中で嘆息した。実際には、彼の体は微動だにしていない。実際、これほどの機体が人体にもたらす負荷というものは尋常ではない。通常のパイロットスーツ程度では守りきれず、どんなに鍛えられたものであっても簡単に圧殺してしまうほどである。

その対策として学園都市が採ったのは、機体ではなく人体を改造する方法だった。

現に鹿崎の体はマイナス70 で凍結されていて、事実頭で機体を操っているようなものである。モスクワ方面にはあちこちに機体を埋め込まれ負荷を無視して設計された機体に乗っている元無能力者の青年もいるらしいし、まだ人の体のままでいる自分はマシな方かと思う。

(ヨユーだが、マジメにやった方がいいかな?)

片手間でゲームをするような気持ちで鹿崎が意識を動かすと、H S F - 00の機体下部から青いレーザーが放たれた。

単発ではなく数秒間の間照射される閃光が、敵の編隊を薙ぎ払い、味方の小型機が縦横無尽に飛び回りながら放った細かい閃光が虫の息の敵機を撃墜する。

ほづら、やっぱり、と鹿崎は笑つ。

全く退屈な任務を任されたものだ、ため息をつく。

そんな慢心を抱いていた鹿崎に。

悪夢は襲いかかる。

( ん )

ピピピッ、と聞き慣れぬ音が頭に響いた。鹿崎は意識をコンピュータの報告へと向ける。内容を見て、鹿崎は目を剥いた。

( 撃……墜？ )

見れば、先ほどまで並列飛行し時に敵を取り囲みに行っていた小型機が、一機も残っていないかった。いつの間に墜とされたのか。そもそも、時代遅れの戦闘機如きにそんな真似が。

( ツ！？ )

鹿崎の視覚神経に、信じられないものが映り込んだ。

前方に展開していた別働隊のHSF-00が、爆発炎上して墜ちていく。

その黒煙をかわすようにして現れた、『天使』。

六対12枚の翼を広げるそれは、何故そのままの形を保っているのか不思議な臙脂のコートに身を包み、HSF-00に匹敵する速度で次から次へと小型機を墜としていく。

(なんだありゃあ!?あれもロシア空軍の……?)

そんなはずはないが、そうとしか考えられない。不気味な天使は生身の人間には耐えられない速度と温度の中、まるで追尾ミサイルのように追ってくる。

この空域に、味方はもういなかった。

(どっ、どどどどうなってんだよオありゃあアアアア!!?)

初めて戦争に対し確かな恐怖を感じた鹿崎は、生き残るための操作を実行する。

HSF-00のレーザー砲が機体後方に向けられ、主翼の一部が複数個に切り離される。

刹那、切り離されたユニットから青い閃光が放たれた。

天使に向け、様々な角度から照射された全方位攻撃システム。光の速さならば、たとえ超音速飛行をしている翼を生やした化け物が相手でも命中する。そんな、『常識』に塗れながら『常識』に縛られている鹿崎は、再び目を剥くこととなる。



天使に向けて放った攻撃の全てが、ワイヤーで繋がれた小型ユニットに命中したのだ。

『跳ね返』された。

『反射』された。

そんな化け物の翼が振るわれた時。

( え )

気がつけば、鹿崎のHSF-00は主翼を失い、黒煙と炎に包まれ墜落コースに入っていた。

( 嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろおおおおお!?)

死ぬことなど考えていなかった鹿崎は体を包まんとする炎に恐怖した。そんな最中、ノイズの走るモニターの中心に悪夢を見せた天使が現れる。

それが最後の『世界』となった。

薄ら笑いを浮かべる顔に傷を負った少年が、広げた翼から輝く弾丸を解き放つ。

鹿崎玖夾しかさきくきょうは千切れた腕と蜂の巣になった体を目にした瞬間、絶叫と共に炎に包まれた。

\*

天使は12枚の翼を広げたまま、静止して腕を組んだ。この空域に、敵軍の姿はない。

(たわいないな)

生物的な大きな6枚の翼と、やや小さな6枚の翼。それぞれ左右対称に背から生える翼は、生身の人間であれば氷漬けになる高度においても鳥のようにホバリングしていた。天使自身の体もそんな高度にあるとは思えないほど緩やかに動いている。

しばらく雪雲を眺めた後、天使はこめかみに指を当てた。

「Code: reflectorよりvector423へ。こちらの姿を機内カメラで撮影したか？」

『べ、vector423からCode: reflectorへ。自動記録カメラに記録されている……』

「そうか。vector423、並びに現空域に居る全てのロシア

空軍に告ぐ。早急に自動記録カメラを停止させ、記録内容を削除せよ」

ドスの効いた低い声で、天使は言った。頭の中で複数の周波数に繋がった先から、息をのむ声がいくつか聞こえる。しばらくの沈黙の後、

『vector422、了解。貴君の協力に感謝する』

『vector424、了解した。協力に感謝する』

『vector423、了解。貴君の協力に感謝する……ひとつ、お聞きしたい』

「なんだ？」

天使はこめかみに指を当てたまま尋ねた。

『貴君は何者なのか？我々にとって、貴君の存在はにわかには信じ難い。無理にとは言わない、答えられるものなら答えてほしい』

「……………そうだな」

天使はわずかに考える。事実、Code: reflectorという認識コードだけでも彼の存在を象徴するもののだが、たかが空軍パイロットにそれが理解できるとも思えないし、立場上 unknownとして扱ってほしいところだった。

しかしまあ、体の3分の1程度を機械化し、能力においても覚醒を遂げた今ならば、敢えて『名乗る』という選択も悪くはない。どの道証拠も削除されているし、彼らが天使自身の事を酒の席にでも誰かに話したところでオカルトかぶれと思われるだけだ。

故に、名乗る。

「セラ、とでも覚えておけ」

『セラ………？』

名乗られた中身に不思議そうに繰り返すvector423。セラと名乗った天使は身を翻し、

「墮天使だよ。墮ちるところまで墮ちた、救いようのない悪人だ」

そう言って、12枚の翼をはためかせ、音速をも超える速度で空域を離脱していった。

どうも、櫻井です。

今回は前回単独行動に乗り出した接続回路と、もはや隠すまでもない墮天使セラ（笑）の二人のお話となっています。

印象としてはセラに持ってかれた感じですかね。12枚の翼は調べるとわかりますが、なかなか重要な意味を持っています。6枚という説もありますが、それはもう二人の人物にやってもらったので、ド派手に枚数を増やしました（笑）

主人公と同じくいろんな意味で進化している人物ですね。単純に腕などの機械化に加え携帯要らずの改造を施されています。フィアンマから貰ったという力とは直接関係ありませんが。

鹿崎の語っていた別働隊の改造人間は外伝でまたお語りしたいと思います。

さて、村を丸ごと拉致したロシア軍の目的とは？

次回、お楽しみに！

9 - 4 失踪 異界ノ法則 (前書き)

「あの子、まさか……!!」

学園都市に残り妹達の応急処置を手伝う元研究員

夕

凧 志乃

「ぐ…ぼ、ア……」

凍えた床の上で、白人の兵士は呻いていた。

侵入者の常識外の攻撃を受け、全身を麻痺させられているのである。彼にこのような変化をもたらした張本人は、先ほど理解不能のチカラでひとつの独房に施した壁を取り去り、中の村人たちを向いていた。

「大丈夫か？」

少なくとも一人は瀕死の状態にしている悪魔は、彼らに向けてそう言った。中の村人たちが頷くと、悪魔は兵士の方へと目を移す。血のように昏い火色の瞳に冷たい色を宿して、彼は低い声で尋ねてくる。

「どうしてこいつらの村を襲った？他の連中はどこにいる」

兵士は少しばかり考えた。

事実、現状を考えれば話す方が得策だろうことは間違いない。しかし、兵士は兵士で自らに課せられた使命はもちろんのこと、どうしても譲れない、情けない理由がある。

故に、兵士は身を這い回る電流の後味を感じながら、震える唇で応じる。

「……言え、ない。……それをすれば、俺たちは……」

その先を言うことすら、許されない。こんなことなら、下手に防

御行動などとらずに隣や後ろ、はるか向こうでのびている仲間たちのように、気絶してしまいたかったと思う。兵士はあくまで毅然としていたつもりで、緋色の瞳を見返した。感情の感じられない灰色の少年は、黙って上着のポケットに手をつ込み、中から銀と黒の拳銃を取り出した。先ほどよりはるかに分かり易い『敵意』だ。

「できることなら今の程度で済ませて貰いてえんだがな。オマエも無駄に傷つきたいとは思わねえだろ？」

少年の言うことにも一理あった。自分だって、より生き残れる道を進みたいと思う。しかし、自分たちが匿っている『組織』は、場合によっては死んだ先まで蝕んでくる可能性があるのだ。

「その方が、マシだ……。殺すなら、この場で殺せ……」

今まさに銃を突きつける相手も恐ろしいが、それ以上に『組織』が恐ろしい。兵士が告げると、少年は落胆したように嘆息して。

「……そオカよ」

喉に突きつけた拳銃を離し、少年は杖を装着した左腕を前に出すと、白いその手で兵士に触れた。その瞳は先ほどよりも昏く、陰っている。それに臆せず見返しているうちに。

ひやり、と背筋を何かが冷たく撫でた。

「……ぐじっ……！？」

一瞬と絶たない間に、兵士は体に強烈な違和感を感じた。恐る恐



る、違和感が強い箇所

装甲服を纏った腕へと目を向けた。

果たしてそれは何なのか。

腕の中で蠢き、絶えず激痛を催し、グキゴキと変形を繰り返す『  
腕』は。

「ぐぎゃっ、ぎゃっ、いぼあっ、があっ!?!」

真つ直ぐだったはずの腕は、まるで階段のように折れ曲がっては  
絞り切った布のようにねじれ、破壊された骨が皮膚を裂き、特殊な  
素材の袖を貫きわずかに顔を覗かせている。

隙間から漏れだし床に飛び散る、金臭い味の深紅の液体。

「うぐうううう ああああああああああああああああああああああ  
あああああッ!!--」

かつてない、焼けるような激痛が冷え切っていたはずの素肌を伝  
わっていく。表情筋が引き千切られそうなほどに絶叫する。しかし、  
この忌まわしい体は意識と隔絶させてくれない。変化の巻き起こる  
右腕だけが『異常』で、足の先は異様にひんやりと冷たい。

必要以上に覚醒する意識の中、少年の低い声が耳の中に入ってきた。

「もオ一度聞く。何でコイツらを襲った?そして、オマエらが連れ  
出したつつうコイツらの知り合いはどこへやった?」

その間にも、体を蝕む激痛は加速していく。腕だけだった激痛が、  
数を増し、体のあちこちにも狂いが生じてくる。まるで細胞一つ一

つを抉り出され、異物をはめこまれたような形容し難い細かく鋭い痛みが、狭い範囲で複数の箇所を襲っていく。

「アツ、がつ、ぼオオあああああああー!!」

もう耐えられない。

頭の中にそんな言葉が浮かんだ。それをした場合の結果も分かり切っているが、それでも今体を切り裂いている激痛の数々に抗えない。

兵士自身の意思とは別に、体の方が拒絶反応を示している。一刻も早くこの地獄から抜け出すべきだと、正論を囁してくる。

兵士はのた打ち回りながら、絶叫とは違う使い方で大口を開ける。

自分を守るために。

「わがつ、わかつたっ!!話すっ!!話すだから……!!」

「先に答える。解放はその後だ」

静かな少年の声と共に、体の痛みがほんの少し和らいだ。兵士は迷わず、

「ロシア成教だ!!!ロシア成教の指示でっ!!!いけ、生贄として村人を拉致したっ!!!この先に、この先にぐがつ!行けばっ、連中に貸し与えられた研究室に辿りっ、着く……っ」

「『苦勞さん』」

バキボキツ、と、ねじ曲げた骨々が一瞬で元通りになったような感覚を受け、兵士の意識はそこで霧散した。

インターフェイス  
接続回路は杖を使って立ち上がり、拷問の様子を見ていたであろう村人の一家へと目を向けた。

「ここから先までは面倒も見切れねえ。オマエらはさっき言ったルートで外へ出て、できるだけ遠くへ逃げろ」

言つと、一家は頷いてそそくさと出口の方へと走っていった。単に指示に従ったのか、はたまた今の拷問に恐怖したのかは知らないが、逃げ出す踏ん切りがつけられたのなら幸いだ。念の為サーチモードに切り替えて、彼らの進む先に敵が居ないことを確かめる。フウと息を吐いて、インターフェイス接続回路は踵を返した。

（ロシア成教……そんな宗教あったか？まったく、外の世界ってなあサツパリ分からねえな）

いや待て。

（あの羊皮紙……ロシア軍の上層部によって嚴重に運ばれていた。そして、農民とはいえ民衆を生贄にするような宗教……）

仮に。

軍の上層部とロシア成教とやらが繋がっていたなら？

研究施設と言う『立ち入り禁止区域』を提供し、『生贄による利益』という対価を得て、相互扶助の関係が成り立つ。

（生贄つつうのが具体的にどんな利益に繋がるのかは知らねえが、もしもあの羊皮紙がロシア成教に渡すつもりのものだったなら、この先にいる連中がアレの秘密を知っている……？オイオイ急展開過ぎんぞ……一気に進展しちまいやがって）

思ったよりあっさり繋がった。このまま中へ中へと進んでいけば、ロシア成教とやらと交渉できる。少し羊皮紙に関して切り出せばある程度のボロが期待できる。後は見せしめなり何なり、『ならでは』の交渉をしてやればいい。

目的を定め、体が十字路に差し掛かった時。

接続回路インターフェイスは自らを支えていた杖を床から離し、その引き金を引いた。

「っ」

息を呑む声が聞こえ、自らの銃撃の反動で飛ばされながら接続回路インターフェイスは首のスイッチに手を伸ばした。

あらゆる攻撃から身を守る『分解の膜』を全身に展開し、弾丸を放った方角に目を向ける。

すると。

「……？」

接続回路インターフェイスの前に居たのは、数人の男女だった。古めかしい修道服に身を包む男女だ。いつの間にか、接続回路インターフェイスは四方を囲まれていた。まったく気配を感じ取れなかっただけでなく、能力のレーダーも、

何故か曖昧にしか機能しない。訝しげに眉をひそめ、インターフェイス接続回路は取り囲む妙な服装の者たちを見回した。

そして、一言。

「ロシア成教か？」

言つと、一団にわずかな揺らぎがあった。しかし本当にわずかなもので、揺らいだと思つた時には重々しい気配を取り戻している。

「へっぴり腰の正規軍から聞き出したか」

インターフェイス接続回路に一番近い大男が、見た目以上に重たい声を口から出した。

「そんなトコだ。一発地獄を見せてやったら喜んで吐いてくれたよ」

笑つて、インターフェイス接続回路は相手を睨みつける。大男は手にしていた巨大な剣をドズウン！と床に振り下ろした。

生まれた亀裂が、インターフェイス接続回路の足の先で止まる。

剣を振り下ろした大男は顔を上げ、

「やはり無知な者たちに依存するのは間違이었다。いただくのは『場所』だけで充分だったか」

その刹那。

大男が生じさせた亀裂から、紅蓮の炎が噴き出した。

「！」

わずかに、瞳孔が開く。炎など、あらゆる外的刺激物から身を守るチカラを持つ接続回路インターフェイスにとっては恐るに足らないものだが、彼が驚いたのはその原理だった。

順当に考えれば施設の配線やガス管などを破壊することで生じさせたものという線が妥当だが、そのようなものはこの通路の下には通っていない。

ならば、あの炎はどうやって生じているのか？

目の前に迫るそれを見て、接続回路インターフェイスは分析を続

。

「何？」

接続回路インターフェイスと大男の声が重なった。

大男だけが驚いたなら、単に炎が華奢な体を避けるように裂けるのを見て、と考えられる。だが、驚いたのは接続回路インターフェイスも同じなのだ。

炎が自分に触れた瞬間、何故か冷たい霧へと変化した。

(……………んだと?……………)

これまた、まるで理屈が分からない。  
インターフェイス接続回路の分解公式の性質上、インターフェイス接続回路自身に影響する範囲の炎  
が無害な塵に変化するはずだった。

それがどうして、霧になる?

インターフェイス頭の中はそんな疑問に埋め尽くされていた。だが、強引な解釈で  
インターフェイス接続回路は動き出す。

ドバン!!と窒素の壁を二方を囲う集団に叩きつける。吹き飛ば  
される彼らを見て、インターフェイス接続回路は鋭い瞳に敵意を込めた。

「……………なるほどなア」

構えて、インターフェイス接続回路は笑う。

「エイワスの言っていた『異なる法則』の一部ツて訳だな。上等  
だ」

窒素による攻撃は、思いの外通じた。見た目通り彼らは人間で、  
単に使う法則に誤差があるだけ。何らかの条件を作用させなければ、  
学園都市の人間と差異はない。その条件の一部にあの一家を含む『  
生贄』が関係しているのは間違いないだろう。

(用があるのはこの大男だけだ。他は片付けちまツて構わねエ)

断じて、インターフェイス接続回路は着けた床から意識を流し、窒素壁をぶち込ん  
でいない一方の通路へと向ける。インターフェイス接続回路がもう片足に生じさせた

空気圧で飛び出すと同時に、意識を向けた床が割れ、瞬く間に数人の男女を落下させる。

残る大男と二人の人間を睨みつけ、インターフェイス接続回路は左手に空気を集め解き放ちながら大男の衣服を掴んだ。

ドツバアツ！と吹き荒れる烈風。それは二人の教徒の体をはるか後方へと吹き飛ばした。

服を掴まれ烈風攻撃から逃れた大男が、巨大な剣を振るう。それが髪を掠めるのを見てから、インターフェイス接続回路は足先で壁の分子を交換しその形を組み換える。

バツキイン！と、大男の剣は多数の原子を組み合わせた障害物を簡単に打ち砕き、そのまま振り抜けた。

(……威力が半端じゃねエな)

冷静に剣の軌道を読んで、インターフェイス接続回路は腕を振るう。狙い目は大男の剣の表面だ。刃を避けて狙ったそこは、分解公式の右手が触れた瞬間に風穴へと形を変える。

「ッ！」

今度は大男だけが息を呑んだ。インターフェイス接続回路は動作の流れで刃先へ向け腕を動かし、巨大な凶器を真っ二つに切り裂く。その瞬間、剣からまるで血しぶきのように、紅蓮の炎が飛び散った。

狼狽える大男の喉元に白い指先を突きつけて、インターフェイス接続回路は口を開  
い。



「ゴバツ……!!」

「……………」

突如、大男は口から深紅の液体を吐き出した。

インターフェイス  
接続回路はまだ行動を起こしていない。

(次から次へと……どオナツてやがんだ!?)

原理不明の紅蓮の炎に、それを何故か霧へと変えた自分の能力。そして、突如自ら血を吐き出したこの男。思考が乱れる中、次の変化が生まれる。

ダダダダダダッ!!という銃撃の音が、少年の鼓膜を震わせた。

『目標を包囲しました』

そんな声が聞こえたかと思えば、自分を囲んでいたロシア成教の者たちは機械の兵士と入れ代わっていた。その足元には完全に息の根を止められた修道服の集団が倒れている。

(今度はこツちか)

アクセラレータ  
一方通行と二人で相手したパワードスーツ駆動鎧と同じ型の機体だった。見慣れ  
インターフェイス  
ぬ同色のライフルを手にし構えているそれらを睨みつけて、接続回  
路は口を開く。

「目障りだ。20秒で蹴散らしてやる」

\*

同時刻、学園都市第三学区内に位置する病院代わりのホテルで、夕凧志乃は妹達シスターズを寝かせてある一室に向かっていた。

あの異常から約二週間。

志乃は冥土ヘヴンキャンセラー帰しと共に彼女たちの状態を少しでも緩和するために奔走し、今はとりあえず安定状態、熱自体はまだあるものの、言葉を発し杖などの支えを使えばある程度歩けるほどまで回復できていた。とはいえ無理な運動は不可能であるし、平常とはとても言えない状態なのだが。

完治させることはやはりできなかつたが、今可能な最善の状態だと志乃は考えていた。接続回路インターフェイスに頼まれただけの働きはできたのではないかと思う。

そんなことを考えながら、妹達シスターズの個室にさしかかった時である。

ガチャリ、と扉が開き、中から一人の妹達シスターズが出てきた。その胸には、10511という札が付けてある。志乃はそれを見て微笑み、尋ねる。

「あら、どうしたの？喉でも乾いた？」

10511号は足を止め、志乃の顔を真つすぐに見た。彼女はど

「こか心配そつな調子で、

「10412号……エクスプローラ多重観測を見掛けませんでしたか？とミサカは尋ねます」

「エクスプローラ多重観測？」

あの少年を変えた特別な個体の彼女だけの名前。それを聞いて、志乃はわずかに眉をひそめた。嫌な予感を感じながら、10511号を見返す。

「さあ…見掛けていないけど。あの子がどうかしたの？」

なるべく笑顔になるよう意識してそう返すと、10511号はわずかに目を見開いた。

「2時間ほど前に部屋を出て行ったきり、姿を見ないので、とミサカは報告します……」

9 - 4 失踪 異界ノ法則 (後書き)

どうも、櫻井です。

まさかのテスト終了日を一日間違えていたという失態を犯してしまいました(汗)

というわけで、本日更新です。

内容はロシア成教と研究施設の繋がりを示唆し、尚且つその教徒たちとの戦闘、そして入れ代わるように現れた学園都市勢の襲撃、そして多重観測の失踪。

内容としては盛り込みすぎ(？)と言った感じですね。次回の初めは前回の戦闘から皆さんに思い出していただけたらしい男から始まります。

ロシア編は前後篇に分かれ、前篇は大体20巻の内容、後篇は21、22巻の内容と予定しています。

次回もお楽しみに！

9 - 5 悪夢 最悪ノ敵 (前書き)

「ここで潰れてもらっては困るんだがな……」

ファイアンマと結託した非公式の超能力者(レベル5)

瀬良 惻皇

瀬良悧皇という名の超能力者<sup>レベル5</sup>は、消えたと考えるのが妥当だった。

12枚の翼を広げロシアの空を舞う栗色の髪少年は、自らの存在についてそう割り切っていた。

機械の腕と偽りの体、そしてそれに伴い変容した能力も、すべてあの頃のものではなくなっていた。

錯乱した瀬良悧皇が振り回したチカラは既になく、それと性質を同じくする全く異なるチカラが、彼の体を満たしていた。高性能な義手が体に馴染んでいくのと時を同じくして、かつて彼に絶対的な自信と慢心を抱かせていたチカラはカタチを変えていき、今やそれはただでさえイレギュラーな法則からさらに異様な法則へとシフトしている。自分にも把握しきれない強大な力が、胸から湧き出てくるのがわかった。

わずかな意志の傾きだけで、後方から追いつめる音速戦闘機を爆発炎上させる『反射物質<sup>リフレクター</sup>』。真の覚醒を遂げたそれは、かつての欠点こそ変化させられないものの、性能は格段に向上している。

モスクワ上空に展開していた部隊を相手取りながら、瀬良は余裕の笑みを浮かべていた。そんな矢先。

(通信……ロシア成教の者たちか)

瀬良はこめかみに触れ、意識を自分の胸へと向ける。

「どっした」

『ヴァルキュリア』  
「戦女神」現出のために必要な「天使の力」テレスマについてなんですが、  
一つ問題が起こった』

頭の中に響く声を聞いて、瀬良は眉をひそめた。『戦女神』とは、  
ファイアンマの計画の一役を担うひとつのプロセスだ。それに必要な  
『天使の力』テレスマというエネルギーに問題が起こったというのは、瀬良  
にとっても面白い話ではなかった。

「『エデンの蛇』に関連することなのか？それとも、生贄に関する  
ことが」

『後者だ。ロシア軍の協力で我々にあてがわれていた研究施設に、  
学園都市の人間が入り込んだ』

ぴくりと、瀬良の眉が動く。2枚の翼が瞬き、鋭い衝撃波が襲い  
来る巨大な機影を撃墜する。彼の感情の揺れが引き起こした現象だ  
った。

『後6人だったのだが、それらを逃がされてしまったようだ。見張  
りもそれに倒されている』

「……つまり、材料が足りないだけで、術式自体に変容はないとい  
うことが」

瀬良の声に、重々しい響きが加わる。忌々しげに言う瀬良に、相  
手は躊躇うように続ける。

『ああ。しかし、その人間がまだ施設内に居る。今はどういいうわけ  
か、後から来た学園都市製の人型兵器と交戦しているが』

「……味方同士で交戦だと？」

瀬良はわずかに考えてから、再び口を開いた。その目は鋭く、凶暴な輝きを秘めている。

「すぐに場所を移せ。研究所は破棄だ。脱出ルートの途中で生贄を回収し、『エデンの蛇』の儀式場へ運び込むんだ。テストをしている時間はない」

『わかった』

指示を聞いて、相手が頷いたのを確認すると、瀬良は大きく腕を振るった。

その動きに呼応して、衝撃波の奔流が学園都市の爆撃機を空中で爆散させる。乱暴に振るわれた翼が空を薙ぎ、全方位に散布された『反射物質』<sup>リフレクター</sup>があらゆる攻撃を反射しながら相手の機体を貫いていく。

破壊を繰り返しながら、瀬良は邪悪な笑みを刻んだ。

(……ミサカネットワークにノイズが生じている。アレイスターの言っていた『エイワス』が目覚め、その核になっている最終信号<sup>ラストオーダー</sup>に異常が出たと見ていい。とするなら、学園都市の指示を無視し行動しようとする者が二人いる)

かつて都市の上空で刃を交えた灰髪の少年の顔が浮かぶ。

<sup>シスターズ</sup>妹達を守り、それを生きる理由にしたと語っていたあの少年。



瀬良悧皇を打ち倒し、Code: reflectorを名乗る化け物へと変えた最も憎むべき人間が、今まさに、ロシアの大地に降り立っている。

ゾクゾクと、背筋を劣悪な感情が流れていく。

(お前もここへ来たか……決着をつけさせてもらっぞ)

一際大きな爆風が、モスクワの空を赤く染めた。

\*

「うわあああああつー!!」

施設の通路に、若い男の悲鳴が響く。全身に白い機械の鎧を纏った彼は、乗用車をも上回るスピードで炭坑を改造したという通路を逃げていた。その後ろからは、灰色の髪の少年が迫る。こちらは男のような装備もなく、髪の色とよく似たシルバーグレーの防寒服に身を包んでいるだけだった。

しかしその速度は、多数の推進剤を駆使する男性に匹敵する。

まさに疾風のような速度で迫る少年は、取り囲んだ味方全てをあっという間に叩きのめしてしまい、男性も次のプランに移すために

誘導を兼ねて撤退を企てたのだが、聞くよりも遙かに恐ろしい恐怖がそこにはあった。

「おい！まだか！？まだ来れないのか！？」

周波数を調整し、誘導先に居るよう指示しておいた『切り札』へと連絡をする。背後から迫る灰色の腕が、触れるか触れないかのところまで来ている。焦りが加速する中、若い女の声が聞こえてきた。

『ごめ……めん、……そ……ちに向か……ここ。大丈夫……だつて、……サ……の……サーのスピー……知つて……よ？』

「おい！ノイズが多くて聞き取れ　　あが！」

「ちょこまかすんじゃないよ」

少年の声が聞こえた瞬間、高速移動していた駆動鎧は火花を散らして通路を滑り出した。倒されたと気付いた時には、ノイズ混じりの通信回線は破壊されてしまっている。

「テムエのお陰で無駄に時間を浪費しちまった。話くれエ聞かせてもらっぜ」

「話……だと？」

仲間のように有無を言わず殺されると思っていた男は、パワードスーツ駆動鎧の内側で目を瞬いた。

「連邦横断鉄道。そこでテムエらはロシア軍からトランクを奪い取るオとしたな？あの中身について、知ッてる情報を全部吐け」

確かに、自分たちは連邦横断鉄道を襲撃し、第一位の超能力者<sup>レベル5</sup>ア  
クセラレタ<sup>クセラレタ</sup>方通行とこの少年、『ユニオン』から脱走した超能力者<sup>レベル5</sup>接続回路を  
回収するよう命じられていた。しかし……。

「トランクだと……？それは、何の話だ」

\*

パワードスーツ  
駆動鎧から聞こえた声に、<sup>インターフェイス</sup>接続回路は目を細めた。

大した情報は得られないと覚悟した上で尋ねたのだが、まずこの  
男は『情報』を持っていないというのか。

(………つうことは、回収任務はあの中のごく少数の人間にしか伝達  
されてなかったってのか?)

となると、学園都市側から羊皮紙の情報を探るルートは殺してし  
まったかもしれない駆動鎧<sup>パワードスーツ</sup>の一握りから聞き出すしなくなる。

自ら可能性を狭めてしまったことに唇を噛んで、<sup>インターフェイス</sup>接続回路は男の  
各関節に触れ、分解公式を作用させる。とはいえ、これは彼を傷つ  
けるための行為ではない。

「………？な、なにを……」

<sup>インターフェイス</sup>接続回路は黙って立ち上がり、杖を使って辺りを見回した。通路  
の突きあたりに部屋がある。

「パワードスーツ駆動鎧の各関節に搭載されてた慣性制御装置を壊させてもらった。下手に動けば体が潰れんぞ」

「ぐ……」

呻く男をそのままに、突き当たりの部屋へと向かうインターフェイス接続回路。

足を踏み入れて、鋭い瞳をさらに細めた。

(……やっぱりな)

天井の高い長方形の部屋の壁に沿って、かつて蝉脇がエクストラローラ多重観測を収めたものによく似た円筒形の水槽が十数本並べられている。丁度二階に当たる高さには二つの空中通路があつた。ただ気がかりなのは、それを制御する操作パネルの類が見当たらないことである。それも、彼らの持つ法則とやらで何とかできてしまふのだろうか。

(……無理矢理過ぎだな。推論に筋が通ってねえ)

明確な答えがわからず、ただただ仮定していくのにも限界がある。この辺りで何でもいい、新しく確定情報がほしいところだ。インターフェイス接続回路はひとまず他の部屋へと通じているであろう空中通路へと

「ッ……」

ズダダダダッ！と。

機銃の音が耳に入り、インターフェイス接続回路は跳ね退きながら首のスイッチを押した。今まで居た空間に、無数の弾丸が突き刺さる。

（また駆動鎧か？）

パワーダンスーツ

そう思い、来た道を振り返るインターフェイス接続回路。

だが意に反して、インターフェイス接続回路は一度狭めた瞼を大きく見開いた。

目の前に、白い影が高速で迫る。しかし、それはあの足の太い新型駆動鎧ではなかった。

パワーダンスーツ

体にぴったりした、ライダースーツのような白い特殊装備。

顔の目元を覆うバイザー。

そこから覗く、赤みがかった茶髪。

体型から鑑みると女性らしい襲撃者は、何やらスーツと同じ色のスノーボードのようなものに乗っていた。すぐ横を高速で通り過ぎたそれは、地面から数cmほど浮いている。

あれも学園都市の新型兵器だと言うのだろうか。だがそれよりも、インターフェイス接続回路は見覚えのある髪の色に嫌な予感を感じていた。通り過ぎたスノーボードの女は急旋回して再びこちらへ向かってくる。

妙な感覚に慄き身構えていると、女はスノーボードを停止させるのと同じ動きでインターフェイス接続回路のすぐ手前で静止した。

見れば見るほど、嫌な予感が増していく。インターフェイス接続回路は胸に去来する焦燥を押さえ込み、相手を睨みつけた。

「……何者だ」

「あははっ」

返ってきたのは笑い声。まるでこちらの焦りを見越しているかのようだ。女は面白そうにしばらく整った唇をカーブさせていたが、やがて口を開く。

「あなたは良く知ってるんじゃないかな。多分、その辺で転がってる玩具の兵隊さんよりずっとね」

喋り方や声は、少年の危惧する可能性とは異なっていた。しかし、その声が似ていないこともないことに悪寒がする。聞きたくないと思っ<sup>インターフェイス</sup>ていても、接続回路は口を開く。

「何者だッて聞いてンだよ」

「うん？単刀直入に言っちゃっても良いんだ？」

女は笑いながら、目元を覆うバイザーに手をかけた。

「まあ、ミサカ達のことは知っていても、ミサカ<sup>ミサカ</sup>のことは知らないんだろっけどね」

今度こそ、背筋が凍った。

外されたバイザーの中に見た、大きな瞳。

オリジナルの御坂美琴をそのまま成長させたような容姿を持つ彼女からは、今は『恐怖』しか感じない。

「……な……！」

目を見開いて、灰色の体が後ずさる。女はふふっ、と得意気に笑  
い、

「ミサカ00000号、通称『フルチューニング欠番個体』。あなたが殺したって  
う子達より先に生まれて棄てられた、一番最初のミサカだよ」

残酷な決断を迫った。

どうも、櫻井です。

中々納得のいく文章にならず、一日遅れの投稿となってしまう  
したm ( | | ) m

というわけで、今回は伏線の大量投下と新展開です。ずっと前の伏線をようやく回収できましたね。フルチューニングの漢字をどうしようかずっと考えていました。何となく格好いいのがいいなあなんて思ってたのが、『試作零式』。でもこれじゃなんかしっくりこないと考えたのが、『欠番零式』。でもやっぱりミサカ系だしなあと『欠番個体』。で、決定でした。

基本的には『欠番個体』で通り、打ち止めでいう『最終信号』に当たる別名が『欠番零式』ということにしました。

因みに体つきが大人っぽいというのは、再回収後に培養液で能力強化のための成長剤を投与されたからです。番外個体とは違い、眼の下の隈や目つきの鋭さはなく、本当にそのまま大人にしたような感じですね。

明確な感情があるのは多重観測よりも長期間ミサカネットワークに繋がっていないからです。強さ的には限り無くレベル5に近いレベル4、といったところで考えています。

一緒に出てきたスノーボード型のメカニックは次回取り上げたい  
と思います ( ^ ^ )

それでは次回もお楽しみに！



9 - 6 欠番個体へフルチューニング〈（前書き）〉

「ガタツ」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「あら、いい度胸ね」

『ユニオン』の構成員にして学園都市第五位の超能力者（レ  
ベル5） 夕凧 曖

「反応しすぎよあなた達……」

元超能力研究機関の研究者にして曖の姉 夕凧 志乃

## 9 - 6 欠番個体へフルチューニング

フルチューニング  
(欠番個体、だと……?)

その名前には、心当たりがあつた。シスターズ 妹達の量産の前にオリジナルと同じレベル5を作り出そうと素体を極限まで強化された個体があり、それは量産計画外を示す000000号で、『フルチューニング欠番零式』と呼ばれていたと聞く。もしもこの欠番個体がその000000号ならば、『失敗作』と破棄されミサカネットワークからも外され、行方不明だったはずだ。

ということとは。

「オマエは、このためだけに、また連中に拾われた、ツてのか……？」

そうとしか考えられないのが嫌だった。そうでなければいいと願った。「自惚れないでよ」、そんな答えを期待していた。しかし、シスターズ 他の妹達より大人っぽい容姿の彼女はにっこりと笑い、

「うん、そゆこと。ミサカはあなたを始末するためだけに拾われたんだよ」

「……………!!」

言われ、インターフェイス 接続回路は唇を噛んだ。

つまり上層部は、一度失敗作と見棄てた彼女を、『インターフェイス接続回路をより正確に捕らえるため』に、わざわざ呼び戻したということだ。

ミサカネットワークに繋がれておらず、エイワスの現出にも関与しない、『死んでもいい』 個体として。

(ふざけやがッて……)

『失敗作』、『できそこない』、『心の無いただの人形』……彼女たちを取り巻く環境は、彼女たちをそんな言葉で罵ってきた。そしてこの欠番個体<sup>フルチューニング</sup>に至っては、多重観測<sup>エクストラローラ</sup>よりも明確な『感情』がインストールされている。

『失敗作』と言われて棄てられた時、どんな想いを抱いただろうか。

「なんか変な同情みたいなのしてくれてるみたいだけどさ」

接続回路<sup>インターフェイス</sup>の思考は、欠番個体<sup>フルチューニング</sup>の声に遮られた。思わず顔を上げる接続回路に彼女は呆れたような視線を向け、静かな声で告げる。

「そういうのやめてくれないかな。ミサカたち、今から戦うんだよ？ 余計な感情は増幅させないでもらいたい。簡単なことでしょ？ あなたが勝つか、ミサカが勝つか。ただそれだけのことなんだから」

そう言うと、欠番個体<sup>フルチューニング</sup>のブーツと連結されているスノーボード型の機体から紫電<sup>フルチューニング</sup>がはみ出し、弾かれるように白い影が動き出した。想像をはるかに上回る速度で、機体に乗った少女が迫ってくる。

「ッー！」

接続回路<sup>インターフェイス</sup>は身を翻し、突進する機体をかわした。動かずとも、バラバラに分解してやることも窒素の壁を何重にも張って自滅させる

こともできるのだが。

できるはずがなかった。

この少女は、今まで自分が戦ったどの敵よりも恐ろしかった。

自分を変えた黒髪の少年よりも、絶対に勝てない存在だった垣根帝督よりも、自分の弱点を誰よりも知り二度に渡って追い詰めた蝉脇零掛よりも、『リフレクター反射物質』という強力な能力を以ってあるいは死んでいたかもしれない状況まで持ち込み、全てを奪い取ろうとした瀬良悧皇よりも。

対策を立て攻撃することが、まず躊躇われるのだから。

回避に徹するインターフェイス接続回路のすぐ横を、少女の体が通過する。すれ違いざまに、茶色の瞳がこちらを映した。

「これはHq-R2。スノーボード型アンチグラビティ反重力ソーサーって言うんだけど、最大速度は時速200kmくらいになるんだよね。動力にはミサカの発電能力を利用しているから、実際あなたは逃げ切れない。今さらだけど、覚えておいてね」

インターフェイス接続回路の葛藤も気にせず、フルチューニング欠番個体は機体前部に装備された機銃を斉射してくる。インターフェイス接続回路は接触する弾丸を分解しながら、目の前まで迫ってきたフルチューニング欠番個体をかわす  
が。

「逃げてるばっかじゃ勝てないよ」

ぐるん、と慣性を無視した方向転換をするフルチューニング欠番個体。フルチューニング欠番個体自身を軸に回転した機体の前部が動作の流れで振るわれる。当然、そ

これは回避行動をとった接続回路インターフェイスの体への直撃コースだった。

普段なら

「がアツ………!!」

接続回路インターフェイスの体が吹き飛んだ。打撃用の鈍器として使われた機体の力で、円筒形の水槽に激突する。強化ガラスらしいそれはびくともしなかったが、意図的に自動演算を解除してしまった接続回路インターフェイスは激痛に顔を歪ませる。欠番個体フルチューニングはむしろ驚いたように目を丸くして、

「何やってんの？あのままにしておけば、ミサカのソーサーが壊れてあなたの戦略の幅が広がったっていうのに。……にや、ひよつとしてまだ迷ったりするのかな？」

にやにやと笑って、欠番個体フルチューニングはよろよろと立ち上がった緋色の瞳を見返した。灰髪の少年は直接攻撃を受けた腹部を抑えてはいるが、隙だらけの欠番個体に攻撃しようとしなない。その様子を見るや、彼女「ははっ」と前髪を掻き上げた。

「んー、もやもやするね、何だろこれ。出会っ場所次第ではミサカあなたにときめいちゃってたかもなあ」

どうでも良さそうにそう言うと、欠番個体フルチューニングは右腕を上げ、バチバチと電流を散らし始めた。やがてそれは一つの形を取り、体側に構えられる。

それは剣のようだった。

「ま、敵同士だから仕方ないよね」

おそらく磁力線の長さや電圧を調節して、剣の形を作っているの  
だろう。敢えて『剣』という近接武器を模したという点に、彼女の  
意思が垣間見えた。

先ほど、自ら分解の壁に迫ったように。

(まさか…こいつ……)

接続回路インターフェイスがそれに気付いた瞬間、紫電の剣は目の前まで迫ってい  
た。選択したのは、『窒素装甲オフエンスアーマー』。

莫大なエネルギーの激突に吹き飛ばされて、接続回路インターフェイスは空中で体  
勢を立て直し、おそらくは実験監督用に設置されたであろう二階ほ  
どの高さにある空中通路に着地した。Hq-R2の恐ろしさは、そ  
の速度と小回りの利きにある。だがそれはあくまでも平面滑走にお  
いての話だ。先ほど機体の『裏側』を目にしたが、機体下部には推  
進ノズルの類は見られなかった。つまり、あの機体は垂直方向への  
移動手段を持たないのだ。接続回路インターフェイスを追うには、彼女の能力で空気を  
爆発させて上がってくるしかない。その間に、空中通路から繋が  
るルートで。

「見くびらないでよ」

「ッ!?!」

接続回路インターフェイスは思わず目を疑った。背後から空気を爆発させて上がっ  
てくると思っていた彼は、まさしく意表を突かれる形で回り込まれ  
た。

(壁を滑って上がってきただと……！？)

予想外の性能を見せつけられ目を見開く接続回路を、インターフェイス 欠番個体は  
笑う。

「『アンチグラビティ反重力』ソーサーって説明したよね。これはミサ力が流す電氣量に応じて速度、反重力力場を設定できる。だから磁力で壁に張り付いた後に力場の設定を切り替えれば、壁でもスムーズに移動できるの。試したことないけど、多分天井でもいけるんじゃないかな？」

「チツ！」

これでは、彼女の言う通り逃げきれない。細身の胸を、再び焦燥が駆け抜ける。自分の持つ最速の移動手段を用いても、重力に逆らい壁すらも滑走するHq-R2には敵わない。逃げるといふ選択肢は消え失せた。得意げに笑う少女を前に、インターフェイス 接続回路は思考する。

どうすればいい。

ここまで来ても、インターフェイス 接続回路は彼女と戦うという選択を採れなかった。もしも彼女に攻撃すれば、今まで自分が培い『理由』としてきたものを自ら破壊することになる。彼女が妹達の一人である以上。

いや、彼女の顔は学園都市の高度な特殊メイクによるもので、彼女の言う『フルチューニング欠番個体』などという妹達の第一号などではないのではないだろうか。

混乱した少年の思考は、彼をそんな現実逃避にすら至らしめる。

何とかしてこの場を脱したい。

彼女を傷つけずに終わらせたい。

そんな思いが胸を満たし、頭の中を様々な情報が行き交う。能力使用モードによる物質の配置図面ではない。今までの人生で培ってきたありとあらゆる知識が、関係の有無にかかわらず頭の中を行き交い、混沌とした中で状況を打破できる方法を模索する。

受けた言葉が行き交う。

発した言葉が行き交う。

受けた言葉が

。

『ミサカはあなたと戦えません。いえ、戦いたくありません、とミサカは痛む心中を吐露します』

蘇ってきたのは、エクスプローラ多重観測の訴えだった。

デュアルスキルシフト多重能力進化実験で、グズグズといつまでも言っていたエクスプローラ多重観測の一言だ。当時の自分は、少女の訴えをただの『甘え』と断じた。露ほども理解しようと思わず、そこに込められた意味も想いも汲み取ろうと思わずに、ただただ失わないために抗った。それが、今ならばわかる。

エクスプローラ多重観測は、自分を助けようとしてくれたのだ。



本意でない仕事を任せられ、せざるを得ない状況に追い込まれていた、一人の弱い少年を。

(……説得)

それは、瀬良に試みて失敗した手段だった。結果としてその選択は悲劇を引き起こし、多くの患者に無理をさせししまうこととなった。曖や多重観測の協力がなければ、間違いなく死者を出していた選択だ。それが闇の世界では何の意味も為さないことは学んだはずだった。

だが、彼女を傷つけることができない。

傷つけずに解決する方法など、他にはない。

「あ、ごめん」

再び意を決した接続回路の思考を分断する、欠番個体の声。彼女は再び紫電の剣を構えて、高速で向かってくる。接続回路は回避に徹し、時折紫電のみを分解しながら身をひねった。高速旋回し笑みを刻む欠番個体は、自分の首を示して口を開く。

「ミサカの体内には『クラスター』っていうちっちゃい異物が埋め込まれててね。残念だけど、あなたに口説かれてもミサカは上層部の任意操作で殺されちゃうから。むしろ下手に説得させられちゃった方がミサカは痛いかな。だったらあなたの能力で痛みなく死ぬ方が幸せかもしれない」

導き出した方法は、いとも簡単に否定された。

しかし、それは絶望には繋がらない。

絶望するより先に、胸に去来したものがあつた。

怒りだ。

彼女の語る事実は、インターフェイス接続回路の胸に強い怒りを生じさせた。

仮にも命を持つ者を扱っているとは思えない、残酷過ぎる所業。

正気の沙汰とは思えなかった。

そう。

上層部は、棄て去られ『死んでもいい』と思うまで追い詰められていた彼女に、『死ぬしかない』状況を突きつけたのだ。

逃げ出しても殺される。

説得されても殺される。

負けて生き延びていたら殺される。

そして、仮に勝利し生還しても。

彼女に生きていくだけの居場所はない。

「ほら、早く本気になってよ。ミサカとしては早く殺してもらった方が楽なんだから」

インターフェイス  
接続回路は奥歯を噛み締めた。その瞬間、Hq-R2の打撃が襲い掛かり、大きく吹き飛ばされ水槽が並ぶ階下へと落下する。

「バゴオン！と、窒素の鎧を纏う体は鉄の床を凹ませた。思考は変わらず、強い怒りに支配されている。」

（外道が……どオしてこいつらが、妹達シスターズはみんな、こんな目に遭わなくちゃならねエンだよ！！普通に生きて、普通に過ごさせてやることはできねエのかよ！！）

あるいは、自分さえいなくなれば……アクセラレータ一方通行とインターフェイス接続回路が死ぬば、すべて終わるのだろうか。

自分が全力でアクセラレータ一方通行に襲い掛かって、相討ちにでも持ち込めれば、彼らの暴拳は止まるだろうか。

（俺が、死ねば……）

ふざけるな。

死ぬのは逃げでしかない。

妥協でしかない。

今はもう、荒れに荒れていたあの頃の自分とは違うのだ。

必要としてくれる人がいる。

居てほしいと願ってくれる人がいる。

共に歩もうと諦めなかった人がいる。

そして。

(残る道は、一つだけじゃねエ……!!)

降り立ち稲妻を振るう少女を視界に入れ、インターフェイス接続回路は振り下ろされた紫電の剣を床を転がることかわし、先ほどとは比較にならない

い速度で立ち上がる。

フルチューニング 欠番個体は目を見開き、その顔に微笑を映し出した。

「やっとやる気になってくれた？」

言葉と共に、フルチューニング 欠番個体の足からスノーボード型の機体へと、剣と同じ色の放電が見えた。

直後、放たれた矢のようにフルチューニング 欠番個体が動き出した。接続回路はインターフェイス イミングを図り、ボードの先端が触れる直前で回避し、足先でフルチューニング 個体の両足とボードとの接続部に触れる。

刹那、繋がっていた少女とボードは切り離され、他のシスターズ 妹達よりやや大人びた体が宙を舞った。

「……ッ!」

初めて、フルチューニング 欠番個体の顔に焦りが生じた。空中で紫電を瞬かせ、体勢を立て直したその体に飛びかかり、そのまま仰向けに地面へと押さえつける。極力ダメージがかからないようにしたつもりだが、さすがに0にはできなかったらしい。

整った顔が歪むのを、インターフェイス 接続回路は目にした。それにわずかに舌打ちしながらも、思考は一つに集約する。説得に準ずる、この場における最善の選択に。

フルチューニング 欠番個体は引きつった笑いを浮かべ、

「あは、変なの。これ、日常生活ならかなりアブない状況だよな。

……殺してくれるの？」

「その逆だ」

きつぱりと、インターフェイス接続回路は断じた。子供の犯した間違いを正す親や教師のように、厳かな声で。

「助けてやんだよ、オマエを。クソツたれ共の陰謀からな」

## 9 - 6 欠番個体へフルチューニング（後書き）

どうも、櫻井です。

遅れた分を取り返すため、本日投稿させていただきました。

内容は前回導入に入った欠番個体戦。心理描写メインの戦闘シーンですね。そのため戦闘自体は多少お粗末だったかと思えます。

欠番個体のキャラは今回の話でだいぶハッキリしたかなと思います。言い回しがちよっと思わせぶりなところがあるのですが、気付いていただけましたでしょうか？

スノーボード型反重力ソーサーは、番外個体のグライダーを発展させた移動手段であり攻撃手段です。あくまで超低空を浮遊し滑走しているため、地面との間にはたらく摩擦は存在せず、高機動戦闘を可能としています。ブーツとのジョイント部分はパーツ同士による接続だけでなく強力な磁石が取り付けられており、一度離されても磁力線を引くことで引き寄せることができましたり、なかなか便利な代物となっています。接続回路はその磁石ごと切り離しました（汗

さて、次回は欠番個体戦の決着といきたいと思えます。

お楽しみに！

9 - 7

存在

居場所ヲ求メテ

(前書き)

「……何でしょう、納得がいきません、とミサカはこの話の内容に  
対して異議を唱えます」

シスター・ドリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクスプローラ  
多重観測

「奇遇ね。私も手の震えが止まらないわ」

学園都市第五位の超能力者

夕凧 曖

「二人とも、まずは素数でも数えなさい」

元超能力研究機関の研究員

夕凧 志乃



「ミサカを…助けるって…まさか…！」

接続回路インターフェイスの意図を察したのか、欠番個体フルチューニングは大きな瞳をさらに大きく見開いた。欠番個体フルチューニングを説得もできず自らが死ぬことでも解決できないならと接続回路インターフェイスが辿り着いたのは、欠番個体フルチューニングから彼女の言う異物を取り除く方法。

『ユニオン』を離れる直前に、『体晶』に体を蝕まれた滝壺理后を救う手立てとして接続回路インターフェイスが考案し却下した難解な手段である。あの時は危険と判断し専門家に診せることを勧めたが、今回はそうはいかない。この閉ざされた空間にも、外の白銀の大地にも、その先にある街にも、欠番個体フルチューニングを救える場所などない。ましてや体内にある物質を、おそらくは限りなく分子に近いナノデバイスを取り除くことなど外の医学にできるとは思えない。

何より、彼女を救う責任は自分にある。

(上等だ、クソ野郎)

空気という巨大な物体を思うままに操ってきた接続回路インターフェイスだが、ここまで微細な演算は行ったことがない。空気や特定の物体であれば多少の計算ミスがあっても『計算と違う粒子が動いた』、『計算したはずの粒子が動かなかった』で済むが、今から行う演算ではそんなミスは許されない。

決意を胸に、接続回路インターフェイスは欠番個体フルチューニングの首に触れ、そこから意識を彼女の全身へと広げていく。

目で見ている映像に重なるようにして、分子の集合として整理された欠番個体の全体像が浮かび上がる。膨大にして複雑、目が眩むような気さえする情報を何とか掴み上げて、フウと小さく息をつく。

これで用意は整った。

「何、する気よ……」

抑えつけた少女は呻くような低い声で首という彼女の露出した皮膚に触れたことで、その意図に対する疑惑が確信へと変わったのだらう。

「言った通りだ」

フルチューニング  
欠番個体の問いに、インターフェイス接続回路は短く答えた。フルチューニング  
欠番個体の表情が歪む。

「ふざけないですよ。ミサカは、そんなの望んでない！」

振り回された彼女の腕が、脚が、華奢な体を打つ。インターフェイス接続回路は身を襲う痛みに表情を変えることなく、分析を続けた。何とか体を動かして抗おうとする欠番個体を非力な腕力だけで押さえつける。

「ミサカに居場所なんてない！ここから生き残ったって何もなかったらここで死にたいの！！またあんな思いをするくらいなら、死んだ方がいいってミサカの気持ち、あなただって気付いてるでしょ！？」

「……………」

喚く欠番個体に、フルチューニング接続回路は顔をしかめた。びっくりとその眉が跳ね、彼が明らかかな『不快』を表したことにフルチューニングも気付かず、欠番個体は喚き続ける。

「こつちの気も知らないで、勝手に助けようとしてるだけじゃない！ミサカを殺したくないとかいうあなたの勝手な拘りで、ミサカを苦しめて！！本当にミサカを助けたいって言うなら、この場で殺してよ！！」

それが自分を棚に上げた言い分だと言うことはわかる。フルチューニング欠番個体が『助け』ではなく『死』を望むように、インターフェイス接続回路も欠番個体を『殺す』のではなく『助ける』ことを望んでいる。第三者の目から見ると、欠番個体フルチューニングのしていることはただの『我儘』に過ぎない。しかしそれは『殺したくない』とする接続回路にも言えることなのだ。

だから、喚く。訴えかける。

「何も知らないくせに……！！」

望んで生まれてきたわけでもないのに。

鮮明に記憶がフラッシュバックする。

浮かび上がるのは、水槽の外からこちらを覗き込む気弱そうな研究者。

体を弄り回されて、拳げ句の果てに『失敗作』な

んて言われ方をして。

渡されたのは、一枚の毛布。それを体に巻き付けた直後、世界は広がった。

不安と恐怖が支配する、絶望的な『空間』。

出たこともない外の世界に身一つで放り捨てられて。

離れていくトラック。

手を伸ばしても届かず、追おうという気力もなかった。

虚空へ消えゆく自分の呟き。

何度も何度も繰り返した。

何もわからなかった。

怖かった。

守ってくれる人も、一緒に居てくれる人もいなくて。

無限に続くかと思っただけの孤独。

擦り切れた毛布を身にまとい、弱った体を引きずって、  
と一緒なに寝入っていたら、  
野良猫

気付いたときには、また暗い世界に居た。

また目にかけてくれたのか。そんな希望は浮かんでこなかった。

存在を否定した人達のために動くなんて、もうできなかったから。

そうしたら。

拒否する前に、体に異物を埋め込まれた。

どうにもならなかった。

もう逃げることもできない。

逃げたら殺される。

従うしかない。

従いたくなくなかなくても、従うしかない。

つまり。

「死にたくなかったんだろっが」

頭に思い起こした走馬灯に、少年の声<sup>イ</sup>が被さった。さっきよりもずつと優しい響き<sup>イ</sup>が、耳の中に入ってくる。顔を上げると、接続回路<sup>インターフェイス</sup>がこちらを覗き込んでいた。彼は言う。

「死にたくなかったから、寂しい思いをしてまで生きた。生きたいと思ったから、辛い思いにも耐え続けた。そしてオマエは、その状態でも生き続けるために、こんなトコまでやって来た」

「……………っ」

異物は神経細胞を中心に全身に散布されていた。数にして、2914631。

これをピンポイントで原子レベルに分解し、組み替えた上で表皮組織や消化器官に移動させれば、彼女を救うことができる。

「……………生憎わかつちまうんだよ。棄てられる恐怖も、殺される恐怖も。俺の場合は、従わなきゃ『役目』がなくて、生きてる価値が計れなかったからだがな。俺はどうしても居場所が欲しかった。だから誰かに必要とされて、そこに自分の価値が生まれるなら、どんな場所でも構わなかった」

<sup>インターフェイス</sup> <sup>フルチューニング</sup>  
接続回路は欠番個体の顔を見た。

<sup>エクスプローラ</sup>  
多重観測とよく似たその顔を。

そういえば、<sup>デュアルスキルシフト</sup>多重能力進化実験の最終日。自分は<sup>エクスプローラ</sup>多重観測を殺すために、今と同じように地面に押さえつけていた。今は彼女とそっ

くりな少女を救うために、地面に押さえつけている。

行為はほとんど変わらないのに、そこに込められた『目的』はまるで違う。

そして、今から始めようとするところこそが、あの時の自分が持ち得なかった『善』。

言っと、フルチューニング欠番個体は力なく笑った。

「それが『シークレットナンバー非公式の超能力者』？あなたと一緒にしないでよ。あなたはあの学園都市に唯一の超能力を持つ貴重な素体。ミサカは一度棄てられた『ガラクタ失敗作』。あなたは『シークレットナンバー非公式の超能力者』を解任されても、『スクール』にも『ユニオン』にも、果ては平和な居場所さえ作った。ミサカよりずっと高みにいるのに、よくそんなこと言えるね」

当然のように、フルチューニング欠番個体は言った。『失敗作』という一言で、彼女の心は折られていたのだ。強い憤りを感じながらも、インターフェイス接続回路は湧き上がる感情を抑えつける。

「……居場所を作ったのは俺じゃねえよ」

彼は相手の瞳を真っすぐに見て、彼女の首に当てていた手をその頬へと動かした。「え」という小さな声が、少女の唇から漏れる。

「一人じゃ居場所は作れない。それこそ、あの時の俺みてえにただ利用されるだけの居場所でもなければな」

「それ、厭味？ミサカはずっと一人で」

「だから」

フルチューニングの欠番個体の声を、インターフェイスが遮った。彼はフルチューニングの頬に触れ、静かに撫でると、その瞳を真っ直ぐに見た。少しでも、彼女に決意が伝わるように。

「俺が居場所を作ってやる。道具としての居場所じゃねえ、オマエが『人間』として生きる居場所を」

何を、と。

フルチューニングの欠番個体は少年の意図がわからなかった。

自分は失敗作で、誰からも必要とされないガラクタのはずだ。

利用されることはあっても、必要とされることなどないはずだ。

だというのに。

(……………なんで)

頭の中には、疑問ばかりが浮かんでいる。

どうしてこの少年はこんなことを言うのか。

自分なんかに対して、どうしてそんな言葉を吐けるのか。



仮にも妹達シスターズだから？

彼女達と顔が似ているから？

彼が『守る』と誓い、生きる理由にしている存在の一人だから？

暖かい。

胸の中に、感じたことのない、いや、いつかは感じたいと思って  
いたかもしれない感情が込み上げる。

殺しに来たはずなのに。

殺してもらいに来たはずなのに。

死にに来たはずなのに。

（どうしてミサカは希望を貰ってるの？）

込み上げる。

湧き上がる。

求めたい。

感情が揺れ動く。

体の動きが止まる。

「……悪いな」

そんな言葉と共に、妙な感覚が迸る。おそらく演算を始めたのだらう。

黙りこんだのを、『了承』と受け取って。

抗うつもりはもうなかった。

もう一度、素直に『生きたい』と思ったことは事実だから、でも。

「あなた、本当にわかってる？」

残り、2901833。

フルチューニング  
欠番個体は泣き笑いのような表情で、ただただこちらを見上げて  
いる。接続回路はほんのわずかな意識を聴覚に向けた。

「もしこれで、ミサカの体から『クラスター』が無くなっても、ミ  
サカを送り込んだ人達はいなくならない」

残り、2206612。

インターフェイス  
接続回路は頭の中に浮かぶフルチューニングの分子配列図から、慎重に『  
異物』としての物質を除外していく。想像以上に複雑な演算を前に、  
彼はかつてないほどに神経を研ぎ澄ます。

「根っこを絶たなければ、ミサカはずっと狙われる。ミサカネット  
ワークにも繋がってないミサカは、あの人達に必要なとされない。あ  
なたを傷つけるために、ずっとずっと狙われ続ける。それをあなた  
はわかっているの？」

残り、1801369。

フルフェイス  
ただ少年の緋色を見返して、言葉を紡いでいく茶髪の少女。接続  
回路は半数を排除しわずかな余裕を感じながらも、気を許すことな  
く作業を続けた。数秒の沈黙の後、

「……ああ」

と短く答える。フルチューニング  
欠番個体は毅然として、

「ならどうしてあんなこと言ったの？」

残り、1214711。

後少しだ。ごくり、と接続回路インターフェイスの喉が鳴り、額を玉のような汗が伝う。

「必要とされていないミサカを狙う人達は、10412号にするよりも容赦ない攻撃を仕掛けてくる。ミサカを匿うことで、あなたが傷つくことだつてあるかもしれない」

残り、803748。

「もしかしたら一生、ミサカは狙われる続けるかもしれない。それでもあなたは……」

「……そうだな」

残り、635137。

「その時は……」

接続回路インターフェイスは演算を続けたまま、薄い唇を動かした。

欠番個体フルチューニングの顔を。

妹達シスターズの顔を。

多重観測エクストラローラの顔を、真っ直ぐに見て。

残り、319250。

言葉を紡ぐ。

「一生懸けて、オマエを守り抜くだけだ」

聞くと同時に、涙目になっていた瞳から、一筋の雫が零れ落ちた。

「……………あ、はは」

残り、93654。

視界が滲むのを感じながら、感じたままに言葉をかける。

「……………バカみたい、だけど」

残り、57141

壊れかけたただの少女は、初めて少女らしい本当の笑顔を浮かべて、緋色の瞳を見つめる。

ただ率直に、頭に浮かんだ想いをそのままに。

「……………好きだな、そういうバカっぽい台詞」

インターフェイス  
接続回路は最後の最後まで、意識の大半を演算に向けていた。少女の笑顔に応えるようなぎこちない笑みを、白い顔に刻みながら。少

残り、8264。

インターフェイス  
接続回路の腕が震える。

フルチューニング  
欠番個体は目を閉じて、その時を待つ。

6 1 4 0、

5 7 8 2、

5 4 7 1、

5 2 3 3、

4 9 9 9、

4 6 2 1、

4 3 6 2、

4 0 0 0、

3 4 4 4 4 5 5 5 5 6 6 6 7 7 8 8 9 9 1 1 1 1 1 2 2 2 2 3 3 3  
8 1 3 5 7 0 3 5 8 0 5 9 3 6 0 7 3 8 1 3 5 7 8 1 2 5 8 3 5 8  
2、 4、 3、 4、 2、 1、 0、 7、 4、 2、 3、 1、 2、 8、 6、 7、 9、 0、 1、 2、 1、 5、 1、 4、 7、 0、 2、 1、 2、

3 7、 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 3 3 3 3  
2、 2、 4、 8、 5、 1、 6、 1、 7、 0、 6、 4、 3、 9、 2、 1、 2、 2、 4、 6、 7、 9、 0、 2、 5、 7、  
、 、

。



\*

同時刻、ウルル山脈から少し離れた平原に、複数の影があった。ホバークラフトによる滑らかな移動を可能にした最新鋭戦車に、低空飛行する黒い戦闘ヘリ。その武装はいずれもロシア軍のものではなく、既存の科学の粋を集めた人類科学の結晶だ。

この一個中隊クラスの部隊を目にした者は、第三次世界大戦のための戦略の一部、ロシア軍に対する伏兵と思う者がほとんどである。

しかし、彼らの目的は大戦の『終結』でもなければ『勝敗』でもない。

『隊長。欠番零式フルチューニングの突入から15分が経過しました』

他のものより一回りほど大きな車体から双眼鏡を使う精悍な顔つきの男の耳に、そんな報告が入ってくる。男はしばらく雪に覆われた岩壁を見ていたが、やがて双眼鏡を下し無線機へと手を伸ばした。

「現時刻までに、山脈のどこから目標らしい人影が出てきたという報告はないか」

皺のある喉から、低い声が飛び出した。数秒置いて。

『航空偵察部隊、及び衛生からの監視にもそのような者は映り込んでいません。……と、AIM拡散力場を検出。数は二つです』

つまり、目標も欠番零式フルチューニングも、まだ生きている。おそらくは一進一

退の攻防を繰り広げているのであろう。ここまでは、作戦通りだ。指揮官は腕を組み、無線機の周波数を切り替えた。

「『クラスター』を起動しろ」

それは、フルチューニング欠番零式というクローン人間に埋め込まれたナノデバイスだった。彼女の細胞にランダムに埋め込まれたそれには電磁石が組み込まれており、外部から命令を送ることでN極とS極が切り替わる。結果として、彼女の体内電気の流れを『逆流』させることができるのだ。

もとより彼らは、フルチューニング欠番零式に対して期待などしてはいない。彼らに指示を下した『上司』が、フルチューニング欠番零式がインターフェイス接続回路に勝つことができないことをあらかじめ告げていたからである。

要は、インターフェイス接続回路の精神を破壊できればいい。

フルチューニング欠番零式の死ぬ様を目の当たりにさせることは、最終手段でも何でもない、あらかじめ決められたシナリオなのだ。

『了解。命令文、発信します』

故に、誰一人として躊躇わない。

誰一人として、山脈の中で交戦しているであろうフルチューニング欠番零式に敬意を表しようとするしない。

彼らはただ自分の持ち場で、自分の仕事をしているだけだ。

死ぬ、と言っても、相手は所詮作られた人形なのだから。

自分達と同じだけの価値を持つ『人間』でない以上、彼女に哀悼の意を表す意味などない。

つまりは。

『命令文、受信されません』

「わかった。プランBに切り替える」

彼らに、『手段を選ぶ』というハンデはない。

どうも、櫻井です。

昨日は更新遅延、申し訳ありませんでしたm( \_ \_ )m

書いてて恥ずかしくなるような台詞達に時間を注いでいた次第です(汗)

ストーリー小説を書くとした時点でこういう台詞を書くであろうことは容易に想像できていたのに、いざ直面するとなかなか上手くできず…(笑)

というわけで、今回は今までで一番ストレートな台詞になりましたね。鈍感のくせに生意気なと思っていただいて結構です(汗)むしろそれをネタにしてくれと言うぐらいで(笑)

メインヒロインが美琴みたいな遠距離になってしまっているのが一番の悔いですね。そちらの見せ場は最終局面でたくさんありますので、多重観測ファンの方々はもう少しだけお待ちください( ^ ^ ; )

それでは次回、お楽しみに！

9 - 8 疾走 避ケラレナカッタ悲劇 (前書き)

『そこを変わ(r y)』

本作ヒロイン二名

エクスプローラ  
多重観測&夕凧 曖

「冥土歸し(ヘヴンキャンセラー)、鎮静剤。急いで」

夕凧曖の姉にして冥土歸しのサポート 夕凧 志乃

「……っ、はあっ……」

接続回路は冷たい床の上へと転がった。安堵からくる脱力感、とても言うのだろうか。作業を終えたと同時に、全身の力が抜けてしまった。

隣では、たった今呪縛から解き放たれた茶髪の少女が穏やかな表情で気絶している。今になって、接続回路は欠番個体の顔に涙の筋があることに気が付いた。それを拭いながら、脈を取る。

はあ、と大きな嘆息が、少年の口から漏れた。

(どうやら、上手くやれたみてえだな……)

おそらく、AIMの不可視の力で体内物質に『介入』したせいで軽度のショック症状が出ているのだろう。この程度なら、すぐに目を覚ますはずだ。

(さて、これからどうするか)

結果として、収穫は『ロシア成教』なる組織の存在と、彼らの扱う『異なる法則』の体感。そして彼らの扱う『生贄』。整理して、接続回路はボリボリと頭を掻いた。

解決できたことはひとつもない。鍵になりそうと言えば聞こえはいいが、結局は求める情報が増えてしまっただけだ。

当初の目的である羊皮紙の情報はまるで集まらない。

(とりあえずコイツが目を覚ましたら、上の通路の先にも行ってみるか )

その刹那。

「バゴオン!!」と言う爆音が、狭い空間に連続して響いてきた。思わず顔を上げる接続回路<sup>インターフェイス</sup>。天井の送風ファンが、紅蓮の炎に包まれ、揺れは徐々に大きくなっていく。

「フルチューニング  
欠番個体!!」

叫ぶが、気絶した少女は目を覚まさない。舌打ちして、接続回路<sup>インターフェイス</sup>は欠番個体の背中与膝の裏に手を差し込み抱え上げる。欠番個体<sup>フルチューニング</sup>が横たわっていた場所に、焼け落ちたファンがカラカラと音を立てて転がった。

これは攻撃だ。

(さっきの爆発……こんなトコまで響いてくるって事は、『内部<sup>なか</sup>』に仕掛けられていたと考えていい。このタイミングで起爆できる連中なんざ……)

学園都市以外にない。

接続回路<sup>インターフェイス</sup>がここに居ることを知っているのは、さきほど叩きのめしたロシア成教の連中とそれに手を貸していた一部のロシア軍、そしてしつこく付け狙う学園都市だ。

欠番個体<sup>フルチューニング</sup>のナノデバイスを取り除いたタイミングで仕掛けてきたということとは、ここではないどこかで状況を汲み取り動かししている

者がいると見て間違いない。

(俺ごと欠番個体を生き埋めにするつもりか?)

いくら接続回路インターフェイスと言えど、分解公式を使えるのは体表に触れたものだけだ。窒素の壁も崩れてきた岩盤など支えきれないし、何より欠番個体がネックになる。ここまでして欠番個体を付け狙うことに虫酸が走るが、今は四の五の言っている暇はない。

踵を返し、接続回路インターフェイスはいつものように踵と地面の間に空気を

「チツ！」

解放された体をひねり、接続回路インターフェイスは落下してきた天井を回避した。同時に、起爆した者たちの目的を理解する。

密閉された空間において、空気は柱の役割を果たす。段ボール箱の中に荷物を詰めればその強度が上がるように、敷き詰められた空気は『部屋』の形を保つ補助をするのだ。接続回路インターフェイスの扱う最速の移動手段は、空気の集中・解放による爆発力を利用したものであり、それを行するためには限られた量の気体を動かさなくてはならず、当然崩れかけた室内では崩壊を助長する結果となってしまう。

使い慣れた移動手段は使えないと考えていい。

(クソツたれが……どうする、どうやってここから脱出する!)



落ちてくる瓦礫をかわして、インターフェイス接続回路は腕の中の少女に目を向けた。まだ目を覚まさない彼女を見て、再び歯を食いしばる。

(……このままこいつを死なせるわけには……!!)

落ちてくる瓦礫と止まらない揺れに翻弄されながら、インターフェイス接続回路は辺りを見回した。

瓦礫に破壊された強化ガラスの水槽。

目の前に落ちてくる、空中通路。

そして。

少年の瞳に、『それ突破口』は映り込んだ。

\*

絶えず鳴り響く爆発音は、山脈近くに展開していた学園都市の特  
殊部隊にも聞こえていた。

崩れ落ちた雪が次々と施設の入りを塞いでいくのが見える。指  
揮官はそれを見て、ソナーに走るノイズに目を向けた。

電波障害だ。

「ロシア軍か？」

「そのようです。我々を侵攻軍と勘違いしているようですね」

同じ車両に乗る通信士は呆れたように言った。本来ならもう少し慌ててもいいのだろうが、たかがロシアの軍勢など恐るるに足らず、といった調子だった。彼らの手持ちの戦力でも、相手が時代遅れの軍勢ならば中隊クラスは容易い。

「やれやれ、これでは目標のAIMを測定するのにも弊害が……」

少々困ったように呟くが、それを問題と感じる者は少ない。そもそもあの爆発の中、山脈内部の施設は八割以上が崩れていると考えていい。接続回路インターフェイスの最速移動手段を封じた今、彼は欠番個体フルチューニングを見捨て分解の壁で道を切り開くしか手が無くなる。後は暴走した接続回路インターフェイスをAIMジャマーによる相反作用で自滅させ、ポロポロの彼を回収する、というのが上層部から伝達された命令だった。ここに展開する部隊が動くのは、接続回路インターフェイスが出てきてからだ。そのためには、電波状況を明瞭にしておく必要がある。

「仕方がない。航空部隊に迎撃を  
隊長！！」

指示を飛ばそうとした瞬間、無線機から声が聞こえてきた。指揮官はそれを手に取る。

「どうした。何か  
ポイントE-7の入り口より熱紋反応！！速度、220！！」

ポイントEは、山脈の中腹付近、内部施設で考えれば最上階に相当する場所だ。その7区画目ということは。

弾かれるように、指揮官はそちらへ目を向けた。

ポイントE-7は、施設の出入り口のある区画。

望遠カメラをポイントB-7に向け、目を凝らしたその瞬間。

山脈の一部が爆発し、中から小さな影が飛び出した。

あれは　　。

「Hq-R2です!!」

傍らで、通信士が驚愕した様子で報告する。指揮官は通信障害のせいでノイズの走る画面に目をやり、

「フルチューニング  
欠番零式か？」

「いえ、これは……!!」

瞬間、ノイズの走っていた画面がクリアになる。おそらく、攪乱装置を用いていたロシア軍機を友軍が墜としたのだろう。

そして、驚愕は訪れる。

「インターフェイス  
接続回路です!!」

モニターに映っていたのは、茶髪の少女を腕に抱えた、灰髪の少年だった。

＊

(クソツたれ……!! 随分数が多いじゃねエか!!)

目の前に広がる軍勢に、インターフェイス接続回路は毒づいた。みるみる道が塞がっていく中、持ち前の破壊力と電子を操って起動させたHq-R2を駆使しアリの巣のように複雑な施設から脱出したまでは良かったが、よもやこれほどの部隊が待ち伏せているとは思わなかった。

向こうもまさかこんな手でくるとは思わなかったのだろうか。無数の砲火が襲いかかるまでに、わずかなタイムラグがあった。

インターフェイス接続回路は砲弾の着弾地点を逆算して、ジグザグに滑走しながらそれらを回避する。進行方向をずらした数瞬後に、背後で雪の柱が轟音を立てて立ち上った。

何とか彼らの迎撃ラインを突破したところだが、ホバークラフトを搭載した高速戦車Hr-22Zは後退しながら主砲を撃つてくる。豪華な砲身で狙いをつけてくるくせに、その速度は時速100km近い。直進できないせいで距離はなかなか縮まない。

(近くに森か何かは…ねエか。連中を丸ごと潰さねエことには、一安心とはいかねエな)

フルチューニング欠番個体と遭遇してから切り替えていないバッテリーは、後10分あるかないかだ。フルチューニング身一つであればあの程度の軍勢、40秒もあれば片付けられるが、欠番個体を抱えたままではそうは行かない。彼女を守りながら彼らを全滅させる方法を。

「ッ！」

ズダダダダダダッ！と独特の銃声を響かせて、無数の弾丸が驟雨のように降り注いだ。反射的に機体にかける電圧を上昇させて加速し、欠番個体のしたような平行移動で銃撃をかわす。

（『六枚羽』の系統だな……クソが、挟撃なんてありきたりな手を  
使いやがッて）

前からは砲弾が、背後からは銃弾が。

直接誰かを守りながら戦うことがここまで難儀なものだとは。舌打ちしながら、接続回路は扱いに慣れてきたHq-R2を蛇のような軌道を描き、斜面を突き進んでいく。速度はすでに最高速に達していたが、高速戦闘ヘリと名高い『六枚羽』は執拗に追ってくる。大きな柱と小さな柱が機体のすぐ後ろに生じていく中、

「……ん」

どこからか、声が出た。と言っても、この状況で聞こえる声などひとつしかないわけだが。しっかりと抱き抱えた腕の中で、それは蠢く。

「……あれ？て、え！？ななな何これどういう状況!？」

フルチューニング  
欠番個体だ。騒音が、はたまた顔についた雪のせいかは知らないが、気絶から目を覚ましたらしい。ほう、と接続回路は息を吐いて、

「……イイところで目が覚めたな」

「え…う、や、うん、まあ、いいところと言えはいいところだけど  
……」

何故か赤くなつて首に手を回してくる欠番個体<sup>フルチューニング</sup>。まあ、危うく振り落としそうだったのは間違いない。

「お目覚め早々悪いが、オマエに頼みてエことがある」

言いながら、接続回路は抱えていた欠番個体<sup>フルチューニング</sup>を下ろし、自分の後ろ、Hq-R2の後部バーニアユニットのすぐ傍に立たせた。どこか名残惜しそうに首に回した手を離し、肩から脇にかけて襷のような形<sup>フルチューニング</sup>で欠番個体<sup>フルチューニング</sup>がしがみつく。両手が自由になつた接続回路<sup>インターフェイス</sup>は、手始めにすぐ横で空気を爆発させた。

悠長に話している間に飛んできたミサイルをギリギリでかわして、小さな雪崩も回避する。接続回路<sup>インターフェイス</sup>は杖を展開して、そのグリップを握り締めた。

「……後ろのヘリの編隊を墮とせ、とか？」

耳元で、欠番個体<sup>フルチューニング</sup>が尋ねてきた。接続回路<sup>インターフェイス</sup>はハッ、と笑い、

「勘がいいな。話が早くて助かる」

機体性能による機敏な平行移動で、防衛ラインの中央に躍り出るHq-R2に、容赦ない攻撃が襲いかかる。迫り来る砲火を窒素の壁や光線で迎撃しながら、『六枚羽』の位置を確認した。

「欠番個体<sup>フルチューニング</sup>。『六枚羽』のAIの追尾性能はどのくれエだ？」

「ほとんど有人偵察機と変わらない、かな。んと……人ごみの300メートル上空から目標だけを攻撃できるくらい。発射する追尾ミサイルは熱紋を追うけど、機体自体は特定の臭気反応と固有の生命反応をトレースする。ミサカたちはそれに加えてA I M拡散力場っていう便利なもの出しちゃってるから、無能力者<sup>レベル0</sup>を追うよりずっと正確に狙ってくると思う」

「そいつア好都合だ」

何が好都合なのか、<sup>フルチューニング</sup>欠番個体はわずかに考えて、そういうこと、と笑って見せた。

<sup>インターフェイス</sup>接続回路は体をひねり、斜面に対して垂直方向に機首を向けると、斜面と機体の間の空間でありつただけの空気を爆発させた。

「っ!!」

反動で大きく後方に吹き飛ぶ機体。それは後方から攻撃を仕掛けていた『六枚羽』の下を抜け、その後ろにつく。慌てたように、『六枚羽』が後退してくる中、<sup>インターフェイス</sup>接続回路は腕に装着した仕込み銃を『六枚羽』へと向けた。

ダアンツ!!と音をたてて発射された弾丸は、強固な装甲に簡単に跳ね返される  
前に。

「<sup>フルチューニング</sup>欠番個体!!」

「オーライっ!!」

杖から飛び出した薬莢を、紫電を散らして少女が弾いた。

刹那。

葉莢は轟音と閃光、そして強烈な衝撃波を撒き散らしながら、音速の三倍の速度で黒い戦闘へリへと突き刺さった。

第三位の御坂美琴に次ぐ電撃使いエレクトロマスターが放ったレールガンは、悪夢をばら撒く殺戮兵器を炎に包み、彗星のようにして墜落させる。

その先には、本来その殺戮兵器を味方にとっていたであろう学園都市の追撃部隊。

「後退だ！砲撃を中止し、回避行動に移れ！」

「了解！」

そんな会話が聞こえたような気がする。接続回路インターフェイスは墜落していく『六枚羽』を追うように滑走し、敵の配置を確認する。

（戦車の数は7か。上にも連中の航空部隊が居るみてエだな……）

戦車が二手に分かれたその瞬間、とうとう『六枚羽』が冷たい雪原に墜落した。

強烈な爆発が立ち上り、キノコ雲ができる中、接続回路インターフェイスは欠番個フルチューニング体の頭を守りながら演算を開始する。



頭の中で、この広い空をまるごと掴み取るような感覚を意識し、この平原を包み込む気体を操作する。

墜落地点の1200メートル後方から、1200メートル前方へ。

キノコ雲を巻き込む形で、巨大な烈風を巻き起こす。

その瞬間。

ウラル山脈から広大な平原へ向け、巨大な吹雪と雪崩が発生した。

「うっわぁ……スケール違うなぁ」

吹き飛ばされないようにつかまる欠番個体が漏らす中、目の前に立ち上っていたキノコ雲は消し飛び、吹雪と雪崩が部隊の展開していた空間を薙ぎ払う。それを見届けて、インターフェイス接続回路はウラル山脈沿いにHq-R2を走らせた。上空に展開していた敵の航空部隊は、一切の攻撃をして来ない。あんなものを目にすれば、無理もない話だが。

「これも作戦の内？」

「さてな」

適当に答えると、フルチューニング欠番個体は何故かしがみつく腕に力を込めて、

「この後は？」

「オマエから一番遠い妹達シスターズに会いに行く」

「ふうん………てことは、アクセラレータ一方通行のところかな？」

何で知ってる、と尋ねそうになるが、そういえばアクセラレータ一方通行も学園都市から狙われる身だった。こちらへ来るまでの間に、フルチューニング欠番個体にもその辺の情報が伝わっていたのだろうか。

無言で頷くと、フルチューニング欠番個体はファー付きフードの下がる背中に頭を預けて「あー…」と小さく漏らし、顔を上げた。

「急いだ方がいいよ。向こうにも、ミサカみたいなミサカが向かったから」

その刹那。

遙か遠くに、漆黒の爆風が巻き起こった。

どうも、櫻井です。

今回はド派手な脱出編でした。欠番個体が人気出てきているようで、作者としては嬉しい限りです(^^)

というわけで、ここから先しか出番がない欠番個体のために今回は地味なサービスが多かったです。ある意味一番不憫なのは曖だつたり(汗)

最初は雪崩だけだったのですが、起こし方が上手く浮かばなかったので雪崩はおまけ程度の登場でした。敢えて指揮官たちが巻き込まれる描写はしませんでした。後々編集する可能性があります。さすがに二度連続で更新遅延は申し訳なかったので(汗)

それでは、今回は一方通行のもとへ駆けつけ……られるはず。

次回もどうぞお楽しみに!(^^)

「他にどこがある？って、何しやがる」

学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「……その質問はミサカに対する禁句です、と注意を促しつつミサカはライフルを押しつけます」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号10412号

エクスプロラ  
多重観測

「サードシーズ  
第三次製造計画だと？」

謎の爆発を追って連邦横断鉄道の線路に沿うように移動しながら、  
インターフェイスフルチューニング  
接続回路は後ろの欠番個体に聞き返した。彼女は頷いて、

「そう。ミサカの妹達が少しずつ『自我』を確立していく過程で、  
ミサカネットワークの運用に支障が出てきたみたいだね。詳しいこ  
とは分からないけど、上層部：もっと言うならアレイスターかな？  
あの人達にとつて、それは好ましくないことらしいの」

好ましくない理由には心当たりがある。

インターフェイス  
接続回路の頭には、ゆつたりとした装束に身を包んだ性別不明の  
存在が浮かんでいた。どこまでも掴みどころがなく、ただただ絶対  
的な『力』として目の前に君臨していた、AIM拡散力場によつて  
形作られた『天使』。

「だから上層部は、ミサカネットワークを形成する正規ナンバーの  
妹達を廃棄して、新しく妹達を製造しようとしてるってわけ」

「廃棄……」

少年の眉間に皺が寄る。フルチューニング  
欠番個体のみならず、ただでさえエイワ  
スの現出で苦しめられている打ち止めや多重観測たちまで殺す必要  
がどこにあるというのか。

自分たちのくだらない損得感情で物事を決めるだけでも腹が立つ  
というのに、存在する命をまるで機械や道具のように『製造』、  
『廃棄』という言葉で弄ぶ。

その道で使えないなら、せめてもどこかで生きるだけの環境を用意してやるという選択肢を持つとうとしない。

「……やることが変わってねエな、クソ野郎共」

忌々しそくに、インターフェイス接続回路は呟いた。レベル6ソフト絶対能力進化実験も多重能力デュアルスキ進化実験も、全てはそんな研究者たちの歪んだ考えから生じたモノだった。フルチューニング欠番個体は顔をしかめ、

「……それで、一方通行のところへ向かったのが、その第三次製造サイドシー計画の先行試作型の子。識別コードは『番外個体』。新規設計の個体だけど、その子もミサカ同様崖っぷち」

「どオいう事だ？」

「ミサカワースト番外個体には、他のミサカにはない新たなシステムが組み込まれている。ミサカワーストミサカネットワークから負の感情を摘み取るっていうね」

まさか、とインターフェイス接続回路は欠番個体に顔を向けた。彼女はこくりと静かに頷いて、

「ミサカワースト番外個体はネットワークで繋がれたシスターズ妹達の、悪い意味での代弁者。あなた同様、日々シスターズ妹達を守ろうと頑張ってきた一方通行からすれば、ミサカワースト番外個体からもたらされるシスターズ妹達の『側面』は他の誰に言われるよりも辛い苦痛になる。それが上層部の狙い」

言葉が鼓膜を揺らし、それが脳へと伝達され、それを理解する度に、胸の中で苛立ちが加速する。

もし自分に回されたのが欠番個体ではなくフルチューニング番外個体だったなら、自分はどうなっていただろうか。

あれだけ親身に接し、頼り、必要としてくれた多重観測も、心の  
どこかで接続回路を否定していた、そんなことを知らしめられたら  
……。

少しの間考えると、それだけで寒気がした。きっと自分は耐えら  
れない。

だとしたら。

( アクセラレータ  
一方通行は今頃…… )

あの翼。

インターフェイス  
接続回路は二度ほど見たことがあるが、あれが彼から現れた時に  
『異常』でなかった時はない。

もしもあの翼が自分の現象と条件を同じくするとすれば、それは  
翼の持ち主の中で激情が迸った時という考えが今のところ有力だ。

そう仮定した上で、予想され得る状況で、あのだす黒い翼が瞬く  
ことがあるとすれば。

壊れかけている。

もしくはもう、壊れたか。

「……正気じゃねエ」

ぼつりと、インターフェイス接続回路は呟いた。

「……その台詞、とっくに期限切れだと思うけど」

さらりと、フルチューニング欠番個体は言つてのけた。確かに、あの外道としか言いようのない学園都市に今更という気はする。ずっと昔からそう思つていたし、口に出した事も何度かある。だがこの一連の作戦は、今までとはまた異なる醜悪さを秘めていた。

「……オマエは『居た』。番外個体は『居なかつた』。一方通行をミサカワースト殺すためだけに、わざわざ生み出された。初めから使い捨てるために。もつともダメージを与えられるように。どの道殺せる状態にして。そんな個体を使って、アイツの精神をブツ壊す、だと？ 冗談じやねエ」

憎々しげに漏らしながら、インターフェイス接続回路は周囲の空気を掴み上げ、乱暴な仕草でそれを爆発させた。急激な力で横合いに押し出されるH q-R2。彼にしては無意味に見える行為に、フルチューニング欠番個体が小首を傾げたその瞬間。

二人のすぐ横に、ロシア製の戦闘機が墜落した。

「……………は？」

フルチューニ電磁性ソナーにまつたく引つかからなかつたそれを見て、フルチューニ欠番個体は顔をひきつらせる。爆風に煽られながら、インターフェイス接続回路は機体を停止させ雪原へと降り立つと、雪雲が満たす空に毒々しい表情を向け



た。

大したものだった。

ずっと雪雲だと思っていた空の灰は、そんな綺麗なものではなく。

空を埋め尽くさんばかりに展開された、学園都市の軍勢だったのだ。

接続回路は初めて昆虫の擬態能力の意味を知った気がした。あれほどの高度にもなると、接続回路の認識も追いつかず、単なる視覚においては雲の模様程度にしか感じない。墜落したロシア軍機の音がなければ、最後まで気付かなかったかもしれない。どこかで目にしたステルス迷彩のような機能があるのだろうか。

「H m t t - 0 3 - A、『ミラーージュウィザード』」

不意に、欠番個体が呟いた。

「学園都市製の戦闘機だね。速度は他と比べたら遅いけど、一般的な戦闘機の比じゃない。機体表面のセンサーで指定した位置から最も見えにくい色素を秒単位で算出し、装甲の色を変化させる。システム名は『幻影装甲』だったかな。あんなのまで出してくるとはなあ」

感心したような、呆れたような。そんな声音で解説する欠番個体に、接続回路は顔を向け、

「そんなに貴重なモンなのか？」

「逆かな。ロシアの人からしたらトンデモ兵器だろうけど、学園都市からしたらそんなにいいものでもない。本来『幻影装甲』ミラーシユコートは駆動鎧とかに搭載する仕様だしね。でもまあ、コストの関係で生産した数だけは立派だから、物量戦に持ち込まなきゃならないイレギュラーでもあったのかもね」

「物量戦……ロシア軍相手に……」

最新鋭の音速戦闘機を6機使えば、24時間でロシアの大地を半分程まで削り取れる、という話ではなかったか。となると、それを相手に物量戦を行う理由が分からない。それこそ、ロシア軍側に『異なる法則』を用いたトンデモ兵器でもなければ。

「狙いはミサカ達ではないみたいだけど、さっきの襲撃部隊も残してあるしね。いつまでも無関係とはいかないかなあ。どうする？ 逃避するならミサカが『愛』を付け足してあげても構わないけど」

「がばっ！ と顔を近づけてくる欠番個体だが、フルチューニング接続回路は対して気にした風でもなく、インターフェイス

「逃げるよりは壊す方が性に合ってるが、それよりも今は一方通行だ。…バッテリーを節約する。こっから先はオマエが操縦しろ。行先はロシア軍の空軍基地だ」アクセラレータ

「んー？ それはこのミサカにあなたが抱きつくってこと？ それはそれで楽しめそうだけどセクハラの臭いがしないでもないね。正規の子たちと違って掴まるトコに困らないだけに」

「……？ 腕以外に何がある」

まず腹や肩といった選択肢すら存在しない、鈍感少年インターフェイス接続回路。  
欠番個体フルチューニングは呆れたように笑いながら、

「やー、なんでもない。ただそんなあなたがどうしてミサカの体内から『クラストー』を抽出できたのかと疑問が残るだけ。後さつきまでの『男だったらシアワセ展開』に何も感じてなさそうだったことにミサカは自信喪失してみたり」

自惚れとかじゃなく、あそこまで密着すればこの少年でも脳内に何らかのホルモンが分泌されそうなもののだが。ましてや欠番個体フルチューニングは成長剤のお陰である状況においてなかなかの効果が発揮できる段階に達していたはずなのだが。自分が足りないのか単にこの少年が特殊なのか。

一度どん底に落つこちたとはいえ意外に乙女な欠番個体フルチューニングにとっては少々思い悩む要因ではある。

インターフェイス接続回路はぷいと顔を背けて何故か凹んでいる少女を不思議そうに見やり、ボリボリと頭を搔くと、

「ともかく急ぐぞ。どっちかが死んじまってからじゃ遅え」

「これはこれから苦勞するなあ…まーいいや、頑張れミサカ」

ぶつぶつ言いながら、欠番個体フルチューニングはHq-R2を発進させた。

\*

御坂美琴は本格的に学園都市の情報を探る事にした。

第三次世界大戦が始まり、日夜そのニュースばかりが入ってくる中、美琴は『それ』を目にした。

ロシア国内の映像の端に、ツンツン頭の少年を。

このところまったく連絡が取れていない、上条当麻という名の少年を。

(居場所がわかったただけマシってもんだけど)

今までは都市内に居るのか国内にいるのか海外にいるのかさえ曖昧だったのだから、身を案じていた美琴としては安堵するところではある。

だが、今少年の居るその場所は、安堵するには程遠い下手をすれば世界一の危険区域だった。

普通なら驚くところだが、あの少年を知る身としてはそこまで驚きもしない。いつだって、あの少年は勝手に誰かに貸しを作って勝手に水に流して勝手にまた助けてくれるような人間だった。

今回もまた、自分ではない誰かのために無茶をしているに決まっている。

美琴は手の中のPDAに意識を集中させた。

こうして情報の海を漁っていると、あの頃を思い出す。

夏、自分の体細胞クローンである妹達シスターズを守るためにとにかく情報を集め、一方通行アクセラレータと言う名の第一位によって為される凶悪な計画を止めるために奔走したあの頃。

そういえば、あの頃から

「ッ！」

弾かれるように、美琴は背後を振り返った。

電話ボックスから見える街道沿いに、人の姿はない。

だが、第三位の超能力者<sup>レベル5</sup>の認識範囲は常人のそれをはるかに上回るもの。

視界にこそ入っていないが、すぐ傍まで気配は迫ってきている。

(まさか、嗅ぎつかれた……?)

状況から考えれば、その可能性の方が高い。探っている機密レベルは一般人には到底辿り着けないものだ。今まで凌げていたことがむしる珍しいケースなのかもしれない。

ゆっくりと近付いてくる気配に、美琴は神経を研ぎ澄まし、いつでも攻撃できるよう構えた。

(……?)

カチャン、カチャン、と。

足音に混ざる音があった。頭の中に浮かぶのは、脚の悪い人間が使用する杖。足音に混ざっているという点においても、それをつく音と酷似していた。

「……誰？」

だめ元で、美琴は気配に向かって尋ねた。

杖の音は止まらず、気配はとうとう『形』になる。

角から現れた人物を見て、美琴は目を見開いた。

現れたのは裏世界の襲撃者ではなく。

赤みがかった茶髪。

無表情な瞳。

身を包む、常盤台中学の制服。

そして、御坂美琴にそっくりな顔。

シスターズ  
妹達。

それは、ついさっき思い起こした記憶の被害者の姿だった。

「アンタ……どうしてこんなところに」

確か、実験中止を境に学園都市内の妹達シスターズの数は300人程度になり、内200人は新たな実験の犠牲になって、今都市内にいる妹達は10人にも満たないはずだ。居てもまだ細胞老化速度の調整のた

めに施設に居たはずなのだが……。

「お願いがあります、とミサカはお姉様の瞳を真っ直ぐに見て前置きます」

現れた少女の第一声は、それだった。

一見して、あの頃の彼女たちとは違うことがわかる。瞳に込められた意志といい、顔つきといい。初めて出逢った時のような『無』ではない。

人形のようにだった無機質さはそこにはない。

「お願い……？」

聞き返すと、妹達<sup>シスターズ</sup>は一度目を瞑り、毅然とした瞳をこちらへ向けた。

「ミサカに、お姉様のお手伝いをさせて下さい、とミサカは頭を下げて頼みこみます」

どうも、櫻井です。

まさかの4日遅れの更新と、大変申し訳ない気持ちで一杯ですm  
( ー ー ) m  
言い訳はしたくないですが、リアルの事情で、とだけ申し上げて  
おきます。待っていらした方々には頭が上がらない……。

これとは直接関係ないですが、先日静岡中部南、即ち僕の住む地  
域で震度5弱を観測、たまには早く寝ようかと布団に潜り数分後に  
来たものですからいやはや心臓が止まるかと(汗 幸い僕自身は怪  
我などなかったのですが、東海地震を危惧されてるだけあって焦り  
ました。夜に来るのだけは本当に勘弁してほしい…(^^;) )

さて、今回は第三次製造計画に関する解説と、新キャラを活用し  
たラブコメ(他のキャラだと絶対できないタイプの(汗)、そして  
第三位御坂美琴と杖をついた妹達の邂逅を描いた仕上がりとなっ  
ています。

ラブコメ決して得意ではないですが、最近ずっとシリアス続きだ  
ったのでちよつとした笑いが欲しいところで…この二人にしかでき  
ないことなんですこの会話。何がどうい事なのかは大体分かるか  
と(汗)

接続観測、接続掌握、接続反(ry:最後はなかったことに。な  
どなどのファンの方々には申し訳ない。でもそれぞれの組み合わせ  
に出来る形で今後そいつたシーンもありますので、どうぞお楽し  
みに^^ 接続掌握は保証できませんが、『らしい』形にはしま  
すので(汗)



次回は御坂メインになります、どうぞお楽しみに！

9 - 10 変転 確力ナ変化 (前書き)

「もっと描写してもイイだろオがよ」

学園都市最強の超能力者(レベル5)

アクセラレータ  
一方通行

「描写したら楽しみが減るだろうが」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

9 - 10 変転 確力ナ変化

「見えてきた見えてきた、空軍基地」

慣れた挙動でHq・R2を操る欠番個体が口に出した。接続回路はそのフェンスの先へと目を向ける。

寒空にそびえる漆黒の翼。そのすぐ傍には、目の前の少女と同じ色の髪を持つ人影が倒れていた。

「あいつが番外個体……」

ぐったりとしていてまともに動かないそれを見て、接続回路は唇を噛んだ。どうやら少し遅かったらしい。欠番個体は目にしたバイザーのノブを少し回して、

「まだ生きてる。出血もそんなにしていない。ミサカとしては真つ先に番外個体と打ち止めを助けたいとこだけど、あの分じゃ下手に近付くと問答無用で殺されそうだなあ」

まあ、おそらくそうなるだろう。垣根の時も、打ち止めを守るために発砲された弾丸は「打ち止めへの攻撃」と解釈された。下手に連れ出そうとすれば、自分たちは「打ち止めを奪い去ろうとしている」と解釈されて肉塊にされてしまうことは目に見えている。

害をなす物質全てを無害の状態まで一瞬にして分解する防壁を有する接続回路も、あの翼には敵う自信がない。こちらもあの現象が発現してくれば話は別だが、そうそう都合良く出て来てくれるようなものでもない。

「およ？なんかもう一人居るみたい」

「んだと？」

言われて、インターフェイス接続回路は目を凝らした。体から流れる血なんかは装置のスイッチを切り替えなければ認識できないが、人影くらいならここからでも数えられる。数百に枝分かれた黒い翼の隙間に見えたそれを見て、思わず目を見張る。

そこに見えたのは、この最北の大地では見慣れない、東洋系の黒い髪。

その特徴的な髪質や顔つきには、見覚えがある。

(あい、っ……………)

服装こそ違うが間違いない。

名前も知らないが、酷く頭に刻み込まれた顔は確かな記憶として掘り起こされる。

蘇るのは、月明かりに照らされた工事現場。

荒れに荒れ腐りきっていた化け物を、拳一つでねじ曲げた、ヒーロー英雄。

それを認識した刹那。

ヒュオツ、と、空を切る音が脳を中心に流れ込む。

「伏せる！！」

気付けば、欠番個体の頭を掴んで冷たい雪へと突っ込んでいた。  
フルコミュニケーション  
「ふごつ、何す…」と彼女が言い返した直後。

黒い翼が瞬いた。

一瞬で、二人の周りの雪が薙ぎ払われた。聞いたこともない不可思議な爆音が鳴り響き、今度は翼の方角から強烈な爆風が発生する。あまりの風圧に吹き飛ばされそうになりながら、接続回路は杖を展開し鍵爪を雪へと突き刺した。がっしりと爪が雪を掴むも、掴んだ雪が吹き飛ばされて腕が突風に煽られる。目の前まで迫っていたフエンスが吹き飛び、二人の頭上を通過していく。

次の瞬間、インターフェイス接続回路は新たな轟音を聞いた。

それは黒い翼を広げた少年の放つ聞きなれぬ音ではなく、むしろ聞き慣れた音だった。

肉を打つ音。

あまりに原始的な、おそらく人類が最初に行った攻撃行動から為される音。

そして。

インターフェイス  
接続回路の瘦身に、初めて刺激を与えた音だった。

\*

杖をついた妹達は、多重観測と名乗った。型番は10412号で、何でもあの多重能力進化実験に参加して生き残った唯一の個体なんだとか。二人は美琴が以前その多重能力進化実験を食い止めるために利用した小さな施設にやって来ていた。廃棄された無人の施設に無理矢理電気を通すことで、その機能を一時的に回復させている。

「ところだね」

配線がごちゃごちゃしているとある長細い一室で、美琴は隣でハッキング（一応正当性はこちらにあるつもりなのでクラッキングとは言わない）している妹達に声をかけた。

「何でしょうか、とミサカはこんな状況でも会話する余裕のあるお姉様に尊敬の念を抱きつつ聞き返します」

淡白な返事が返ってきた。ちよつと面倒な口癖も含めてまさに今までの妹達にそっくりだが、この多重観測はどこか他とは違うオーラを感じる。

妙に色気付いているというか、自分と見た目は変わらないのに何

となく女っぱいというか、『私、変わりました』感が漂っている。

そんな姿を見た美琴は思わず多重観測エクストローラの両肩を掴み、

「何が、あつたの？」

本当に聞きたかったことも忘れて尋ねていた。一応本来の質問にも通ずるのだが、お年頃の御坂さんの頭には第三学区の個室サロンなどで危惧エクストローラされている問題が浮かんでいる。そんな美琴の心配もよそに当の多重観測はキョトンと小首を傾げ、

「何が、とは具体的にどのような答えを提示すればよいのでしょうか、とミサカは漠然とした質問に対し絞り込み作業を開始します」

「う…え、と、ほら、あれよ！こう、何か変なヤツにとっ捕まって怪しい場所どころ…じゃ、ない！やっぱいいや！」

確か現存する妹達シスターズは全てあの第七学区の病院に居たはずだ。病院にテロリストが侵入し破壊工作を行ったせいで第三学区のホテルを一時的に活用しているらしいが、それでも警備は万全なはずだ、大体彼女らのことだから自衛行為に走って暴徒鎮圧用の装備で叩きめられているという方が断然信憑性がある。自分に言い聞かせ、美琴は落ち着くのを待つてから口を開いた。

「今まで音沙汰なかったのに、いきなり『お手伝いさせてください』とか言ってくるからびっくりしてんのよ。そもそもアンタ達、今は細胞治療の調整中のはずでしょ？」

「ああ、その事ですか」、と多重観測エクストローラはようやく意図を掴んだように相槌を打った。彼女はどこか悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「お姉様の事ですから、ロシアからのニュース映像に移り込んだあの少年を見て調べを進めているのではと思ひまして」  
「ぶふっ!?!」

思わず咳き込んで、配線が繋がれたPDAを取り落とす。というか、彼女の言う『ニュースに移り込んだあの少年』が必ずしも上条とは限らないのに、どうして真っ先に頭に浮かんだのか。……まあ、自覚はあるのだけれど。

「ミサカはミサカで得たい情報があり、より効率的に調査を進めるためにはおそらく同じ行動を取るであろうお姉さまに協力する形を取った方が合理的と判断したのです、とミサカは自分の狡猾さにしてたり顔になりながらどや顔します」

「……うん、残念ながらしたり顔もどや顔も失敗してるけど大体わかった」

さっきの悪戯っぽい笑みなんかは基本無表情な妹達シスターズにしては完成されすぎてきて驚いたが、彼女の挙げた二つの表情はまだまだ未完成だった。ちよっぴり『らしさ』を見出して一安心の美琴は、「いや待て」と冷静になる。

「なによ、アンタがここまでして欲しい情報って」

ここまで変化した个体だ、世俗にまみれて趣味のひとつも見つけておかしくないが、こんなマザーコンピュータ直結の回線を使っシスターズてまで探りたい情報など思い浮かばない。妹達は少しの間黙って、

「先ほど申し上げた通り、対象こそ違いますがお姉様と同じです、



とミサカは端的に答えます。∴おっと、お姉様のお目当てに当たりました、とミサカは報告しつつデータを転送します」

ピピツ、とPDAが小さな音を立てた。

意味深な妹達シスターズの言葉にキョトンとしていた美琴は慌てたように画面を見る。

『ロシア、及びエリザリーナ独立国同盟で確認された幻想殺しイマジンプレイカーについて』

白い背景に無機質に表示される文字の羅列。この幻想殺しというのは、おそらくあのツンツン頭の少年の事だ。夏にあのインデックスとか言う白い修道服のシスターと初めて会った日、そんな能力名を口にしていたのを覚えている。

頭から情報を引き出しながら、美琴は画面をスクロールさせた。いくつかの見知らぬ地図と一緒に、何らかの注釈が細かく書かれていた。地図上には何本もの矢印が引かれている。そこから推測されるのは、この幻想殺しイマジンプレイカーという対象が移動したルートかそれを追うために展開した、もしくは展開する兵器の動きか。

『総括理事長からの通達により、幻想殺しについては通常の対応と異なるものとする』

(通常の対応……)

調べてみると、学園都市の持つ超能力開発技術を外部機関へ漏洩しようとする組織勢力を抑えるやり方らしい。抑えると言っても、手段として『射殺』をも容認した厳しいやり方だったのだが。

ともあれ、この計画書曰わくあの少年には当てはまらないらしい。

最悪の事態だけは逃れられそうだった。

だが、安心するのはまだ早い。

隣で同じように作業している少女を含む2万シスターズ体もの妹達は、DN A提供者の美琴にも知らされずに作り上げられたものだ。彼女達のような事例があるからには、この程度の要素で安堵するのは甘過ぎる。引き続き、美琴は情報の検索を続けて、辿り着く。

『イメージブレイカー 幻想殺しは学園都市全体の中でも、稀少な価値を持つ能力者だ。その稀少性を留意し、できる限り生きてまます回収する事を目標とする。』

ただし、その稀少なイメージブレイカー幻想殺しが学園都市以外の組織に与する事が判明した場合、イメージブレイカー幻想殺しを速やかに襲撃し、第二位同様の処置を施して生命維持装置内に「回収」する事で、これ以上の混乱を最小限に食い止める事を第二目標として設定する。

現在、イメージブレイカー幻想殺しは外部組織の人間と行動を共にしている事は確認している。これが一時的なガイドとして扱っているだけならば処分は保留とするが、それ以上に踏み込んだ場合は第二目標を実行。統括理事長からの承認は得ているので問題はない。その場合、権限の関係で詳細は閲覧不能だが、統括理事長の「プラン」は続行可能と『イメージブレイカー 事』

「……………」

読み終えて、美琴は一度整理するように黙り込むと、今度こそふうとため息をついた。

別にこれを見て安心したというわけではない。勿論驚いているし、会ったこともない第二位と同様の処置と言われてもはっきりしない

が、何となく、そんなところだろうとは思っていた。

おまけのように載せられていた、計画に費やされる人員に装備、作戦などの記載に目を通して、美琴は隣の妹達シスターズへと目を向ける。

「……そっちの捜しモノは見つかった？」

尋ねると、ミサカ10412号はわずかに目を伏せ、さっきの美琴のようにため息をついた。やっぱりな、とでも言いたげに。

「はい。……どうやら、ミサカもロシアへ向かう必要ができたようです、とミサカは検索結果から今後の行動指針を決定します」

「そっか」

美琴は驚かなかった。この妹達シスターズがどの道ロシアへ向かうであろう美琴の下へ来たのは、目に見えない道標のような物を感じ取ったからだと思っていたから。ここへ来たのは人捜しと言うより、その根拠の採集と言ったところだろう。

ミサカネットワークなんて便利なものを持っているのだ、頭に自然と浮かんでくる情報なんてのはザラにあるはずである。

「それじゃ行こっか。アンタ、どうせマトモな冬着なんて持ってないでしょ？」

立ち上がって尋ねると、妹達シスターズは小さく頷いた。頼りないが、一人旅よりはずっと楽しくなりそうだ。

「お姉様の衣服となると趣向方面に少々不安も残りますが、ミサカはこんなミサカにも優しくしてくださるお姉様に心から感謝します、とミサカは微笑みかけます」

「……感動的な台詞に聞こえるけど、一言多いから」

笑って上げた頬をひくひくさせながら美琴が言い、踵を返したその瞬間。

「あら、こんなところに居たのね」

「っ!？」

真正面に現れた人物に、御坂美琴は息を呑んだ。決して広くはない空間で、二人の行く先を閉ざすかのように立ちふさがる少女。

二人とも、計器に照らされたその顔には心当たりがあった。

雪のように白い肌、深い色の短い茶髪、年不相応なまでに整った、人形めいた顔。

身長も美琴とさして変わらない、むしろやや低いその少女は、レディース用にカスタマイズされたグリップの小さい拳銃を携えて、場違いにもこちらへ微笑みかけている。

それは、精神系能力の頂点に君臨する少女。

「探したわよ、二人とも。誰かさんと同じぐらいにね」

夕風暖だった。

どうも、櫻井です。

今回は御坂メインの回でした。今までも何度か登場している彼女ですが、ここから少しの間は準主役級に出番がある予定です。

前書きにも書きましたが上条さんVS一方通行は描写するのが勿体ないというか、原作の二人の積み重ねあつてこそその戦闘シーンでしたので、本作では割愛します。代わりに本作の怪物二人の対決をお楽しみいただければと思います。

さて、今回は多重観測を使って原作で番外個体の言っていた『人間らしくなってきた』を表現したつもりです。オリジナルの御坂との会話は原作の露ミサカとがそうであったようにシリアスに疲れた頭を和ませる方向で時たま挟むつもりでいます。接続回路とか瀬良とか、ほとんど笑わせてくれないんで(笑)

と、まあそんな癒しの御坂コンビもただただ癒し和みというわけにもいかず。早速爆弾を投下させていただきましたクーデレ女王様前章で浜面を逃がしてから出番のなかつた彼女、ここ一番でまた重要な役目を負います。

それでは次回、お楽しみに

9 - 1 1 到達

辿り着イタ手掛カリ

(前書き)

「……手を抜くな」

墮天使を名乗るフィアンマの傀儡

瀬良 惺皇

「……申し訳ない」

『とある化学の接続回路』作者

櫻井 亮介

肉を打つ音から数秒と置かず、雪が潰される音が聞こえた。顔を上げると、黒髪の少年だけが立っているのが見える。

おそらく、あの黒髪の少年の拳が入ったのだろう。よくよく見てみれば、少年の目の前には雪と同じ白づくめの少年が倒れていた。悪意をかき集めたようなどす黒い翼は、その背から消えている。

(止められたか……)

安堵のため息を漏らしながら、インターフェイス接続回路は立ち上がった。隣で突つ伏して フル というか伏せさせ押さえつけたままだった フル 欠番個体へと目を向ける。

「おい、生きてるか？」

「…なんとかね」

むくりと身を起こしながら、フルチューニング欠番個体は全身にこびりついた雪を払いながら立ち上がる。二人から数十メートル離れた位置に、バチバチと火花を散らすHq・R2が転がっていた。

「あーらら、こりやまた派手にぶっ壊れてくれちゃって」

口にしなながら、フルチューニング欠番個体は片足を上げてそこから火花を軽く散らした。すると、Hq・R2は羽でもついたかのように飛び上がり、吸い寄せられるように彼女の片足にくっついた。それを剥がし脇に抱えると、フルチューニング欠番個体は一息つき、



「解決したっばい？」

目の前の光景へと目を向けた。

さつきまで確かに存在し道を阻んでいたフェンスは既になく、滑走路のために舗装されたアスファルトも巨大な亀裂が入り、所々破片となって飛び散っているところもある。

「みてえだな」

短く答えて、インターフェイス接続回路は杖をついて歩き出した。彼はラストオーダー打ち止めに歩み寄る黒髪の少年を見据え、近付いていく。

黒髪の少年はすぐにこちらに気付いたようで、顔を向けるや驚いたように目を見開いた。

「お前は……」

呟いて、少年はまず打ち止めの横に倒れている一方通行を見やり、アクセラレータ見比べるようにインターフェイス接続回路を見た。

<sup>5</sup>双子と言われて初めて合点がいくほどに酷似した白と灰の超能力者<sup>レベル</sup>を。

「デュアルスキルシフト多重能力進化実験の……インターフェイス接続回路？」

「覚えてたのか」

それは素直な驚愕だった。

デュアルスキルシフト多重能力進化実験に現れた時点で、インターフェイス執行者であるインターフェイス接続回路の名前

くらいは知っているとは思っていたが、そういった状況による判断材料もなしに二人を見分けられたのは彼ぐらいの物ではないだろうか。

黒髪の少年、上条当麻は厳しい眼差しをこちらへ向けた。

「どうしてお前がこんな所に居るんだ」

「その第一位と同じだ。このクソガキを助けるためにここまで来た」

きっぱりと、インターフェイス接続回路は答えた。上条は一度驚いたように瞬きして、インターフェイス接続回路から打ち止めへと目を移す。彼はほんの少し笑って、

「……見つけたんだな、お前」

タイフェイスその言葉だけでは、理解できない者がほとんどだろう。だが、接続回路にはその言葉の意味が手に取るようにわかる。

今日まで常に頭に思い浮かべ考え続けてきた事なのだから。

「ああ、見つけた。ひとつやふたつじゃねえ、数え切れねえ量をな」

言っと、上条は「そうか」と短く返した。さっきまでであった敵意のようなものが薄れ、柔らかい響きを持って耳の中に入ってくる。言いながら、上条は右手を打ち止めの額へと伸ばした。ラストオーダー熱でも測ろうとするような挙動。真っ直ぐに伸ばされた腕の先で、ある時は繋ぎ、ある時は武器となり、またある時は後押しする力となる掌が、ゆっくりと少女の額に触れる。

その瞬間。

パキイイインという甲高い音が、まっさらなロシアの大地に響き渡った。

「……………？」

状況と不釣り合いな不自然な音に、疑問符を浮かべる。さっきの『ミラージュウイザード』からしたもののなかと空を見上げたほどだ。だがそんなものはそこには居らず、あるのは真正銘白い空だけ。立ち上がった上条を見て、インターフェイス接続回路は呼びかける。

「何をした？」

「応急処置つてところかな」

言いながら、上条は後ろを振り返って大きく手を振った。遠く離れたところに停車していた車列の中から、数人の白人男性が雪原に踏み込んでこちらへと走ってくる。どう見ても、それはこの東洋人の仲間には見えなかったが、合図で近寄ってきたところを見ると味方と考えるのが妥当なのだろう。

インターフェイス接続回路はそれを一瞥してから、ラストオーダー足元の打ち止めを見た。

『応急処置』という言葉通り、毛布にくるまれた茶髪の少女は先ほどよりも状態が良くなっているように見えた。気持ちの悪い汗が消え失せ、再び出てくるようなことはない。だが、風邪を引いたような息遣いはまだ残っている。

「ちよつとちよつとー」

背後からした声に振り向くと、そこには満身創痕の番外個体を背負った欠番個体フルチューニングが、よろよろと危なっかしい足取りで歩み寄ってくる姿があった。

「少しは手伝ってほしかったんだけど。このミサカを口説いた責任くらいとってよね」

何か勝手なことを言っているが、もう二メートルほどまで近寄ってきていたので気には留めなかった。しかし、驚いている者もこの場にはいる。

「み、御坂！？お前なんでここに……いやっ！あの御坂美琴にしてはだいぶ……」

「おー。誰か知らないけどよく見ときなさいインターフェイス接続回路。これがあなたのすべきだった反応」

上条の視線がわずかに下がっていったのと欠番個体フルチューニングに模範と示されたことがどう合致するのかまるでわからないが、ともかく話を進めることにした。

「こいつは欠番個体フルチューニングつつう妹達シスターズだ。その後は番外個体ミサカワースト。オリジナルは多分学園都市に居るはずだが」

簡単に紹介してやると、上条は動揺した様子で「そ、そうかそうだよな変だと思ったんだ、うん。あれ？でも御坂妹にしたってあまりにも……」と何とか納得したらしい。インターフェイス接続回路はそんな上条を怪訝に思いながらも、少しずつ近づいてきている白人男性に目を向け、

「あいつらは何だ？」

「ああ。あの人はまあ…俺の仲間みたいなものかな。バックアツプって言った方がいいかもしれない。エリザリーナ独立国同盟って聞いたことあるか？」

今度こそ、インターフェイス接続回路は驚愕に目を見開いた。

ただの偶然や幸運では片付けられない何かが動いているような気さえた。

その国こそ、エイワスが口にした手掛かりだったのだから。

9 - 1 1 到達 辿り着イタ手掛力リ (後書き)

どうも、櫻井です。

今回は少し短め、上条さんとの再会編でした。前回の投稿から今日まで、パソコンに触れる機会がなくなりたいぶ内容が薄くなってしまったことはお詫び申し上げます。一応20巻の内容で九章は終りのつもりでして、主人公のターンは一度終わります。

ここからは学園都市の多重観測視点が多くなるので、どうぞお楽しみ。

それでは次回も、どうぞよろしくお願いします

9 - 1 2 謀略 進△理由 (前書き)

「で？アンタの理由も聞かせてもらいましょうか」

学園都市第三位の超能力者（レベル5）

御坂 美琴

「妹達のお守り」

学園都市第五位の超能力者（レベル5）

夕凧 曖

「嘘だツ！！とミサカは凶暴な表情を向けてみます」

シスターリアルナンバー  
妹達認識番号

エクストラローラ  
多重観測

「探したって…どうしてアンタが」

目の前に現れた少女に、美琴は身構えた。彼女はただここに現れたのではない。その手に握られた黒光りする拳銃を目にすれば、単に『味方』と判断するのは早計過ぎる。曖はふむと形のよい唇に手を当てて、

「そうね…単刀直入に言わせてもらうと、あなた達を捕らえる必要性が出たから、かしら」

「は…！？」

あまりにあっさりと言う曖に、美琴は一瞬言葉の意味が理解できなかった。彼女は下げていた銃を美琴に向け、

「…と言っても、あなたの決定次第だけだね。今あなたが手にしたイマジンプレイカー<sup>エクスプローラ</sup>の幻想殺しの情報、そして、多重観測」

曖は美琴からその後ろの多重観測へと目を移した。呼ばれて、多重観測は無表情な瞳に非難するような色を持たせ、曖の瞳を見返す。そんな視線を受けても、曖はポーカーフェイスだった。

「あなたが手にした接続回路の情報も、あなた達が手にしたところ<sup>インターフェイス</sup>で何の意味もないものだけけど、それを『外に持ち出す』となれば話は別よ。もしもこのままロシアへ向かうと言うなら、私達はあなた達を捕らえなくてはならない」



二人が睨みつける中、彼女は軽く銃をひらひらと動かして、悪戯っぽく微笑む。

「……っていうのが公式オフィシャルな建前ね」

言いながら、暖はゆっくりと銃を下した。『公式オフィシャルな』と言うことは、彼女にはこれとは別に目論見があるというのだろうか。虚を突かれたように目を丸くして、「どうということ？」と美琴が尋ねた。暖は銃を持ったまま胸の前で腕を組み、

「あなた達はロシアで会いたい人に会って、どうなるか考えた？」

「え……」

二人の声が重なる。さっきの脅迫じみたものとはまるで内容の違う質問だ。

「ロシアは今や激戦区。学園都市の最新兵器が飛び出していることを考えれば、その危険度の想像くらいつくでしょう？ そんなところへ向かって、運良く彼らに会えたとしても、素直に再会を喜んでもらえるかしら」

「……っ」

暖の言葉に、多重観測エクストラローラは息を呑んだ。

行き先も告げずにいなくなってしまった少年。彼は自分を守ってくれていた。そのために必死になって、自分自身が傷ついても、不器用な優しさを与えてくれた。

そんな、『誰かを守るために動いている少年』が、その『誰か』

の一人である人間が危険地帯にやって来ることを、良しとするだろうか。

「少なくとも、エクストラローラ多重観測の知るインターフェイス接続回路はそんな人間ではない。

今まで自分がインターフェイス接続回路という少年のことを、何も知らずに、分かんずくにいたのは、彼が守ってくれていたからなのかもしれない。今のインターフェイス接続回路の立場や状況を知って、エクストラローラ多重観測が傷付くと思って。

エクストラローラ多重観測は目の前の、夕風暖と言う名の、『少年の仲間』を見つめた。

『メンタルアウト心理掌握』の名を冠する、学園都市第五位のレベル5超能力者を。

「ひとつ、お聞きしても良いでしょうか、とミサカは確認を取ります」

「エクストラローラ多重観測……？」

思わず、美琴は一步前へ出たエクストラローラ多重観測を見やった。その声音が、かつて『空っぽの人形』と研究者たちに嘲笑われていた少女たちとは明らかに違う、威圧感を持っていたからだ。

口調も外見もほとんど変わらないのに、そこに込められた感情は確かな形を採っている。

暖も少し驚いたように目を広げ、やがて促すように頷いた。

「……あなたは以前、彼のことを『仕事仲間』と言っていました。ならば、あなたはミサカの知らないあの人の事を知っているはずですよ。あなたは彼が悩み苦しむ、ミサカには見せない姿を見ていたはずですよ、とミサカは指摘します。『メンタルアウト心理掌握』という能力を持つあなた

なら尚更に、彼の事を理解できていたのではないですか？とミサカは言及します」

言われて、曖はわずかに眉をひそめた。覗こうと思って覗いたのではないが、見えてしまった、聞こえてしまったことはある。

決して顔に出さず、口にも出さず、自分の中に全てを抑え込み背負い込もうとする少年の苦悩が。

エクストラローラ システクス  
多重観測や妹達を守ることを生甲斐としていて、こちらがもやもやするくらいに大切に想っていたことも知っている。

だからこそ。

「だから尚更あなたをロシアへ向かわせるわけにはいかないのよ。彼が何度も傷ついて守り抜いたあなたを、そんな場所に

「ミサカは」

曖の言葉を、エクストラローラ多重観測が遮った。無表情な瞳に意思を込めて、少女は続ける。

「あの人がまた傷付くの見たくありません。そして、ミサカたちのためにあの人が、インターフェイス接続回路が全てを背負って悩む姿も見たくありません。ミサカはあの人に会って、あの人の悩みを分かち合って、あの人をその重荷から、少しでも助けてあげたいのですと、ミサカはその旨を宣言します」

少女の声が、仄暗い室内に響き渡った。瞳にはわずかな揺らぎもない。まるでインターフェイス接続回路同様、それだけが生き甲斐かのように、はつきりと告げられる。

エクストラローラ曖も美琴も、その剣幕に気圧されたように言葉を失って、エクストラローラ測を見つめた。

何が彼女をここまで突き動かすのか。『守られるだけのお姫様』ではなく、『守ろうとする女戦士』にでも昇華したとすら思える。

そんな姿を見て、曖は「フフツ」と笑みを零した。

「……なるほどね。ただ会いに行きたいなんていう我が儘じゃなくて、彼を助きたい、か……」

納得したように、曖はさっきとは違う柔らかい笑顔を見せた。

美琴は多重観測エクストラローラの顔を見たまま、目を瞬いている。そんな姿を見て。

「それで？御坂さんはどうなのかしら」

「え？私？」

気付いたように、美琴は曖へと顔を向けた。曖はさっきとはまた少し違う意地悪な笑みを浮かべて、

「幻想殺しイマジンプレイカーを追うっていうけど、まさか『ただ会いたいから』なんて理由じゃないわよね？」

「う……あああたり前でしょ！！」

とは言うが、少し顔が赤かったり滑舌が悪くなったりしている。多重観測エクストラローラは美琴へと顔を向け、

「お姉様、これは所謂試練です。あの少年への想いを語ればいいだけですが、とミサカはどまっているお姉様を励まします」

「おおお想いつて！別にそんなあいつが特別どうこうってわけじゃないわよ！？えと、そう！あいつには何かと助けられっぱなしだから、今回は私があいつを手伝ってやるうって思っただけ！！そう、それだけ！！他には、何も、にやいっ！！」

あ、噛んだ。美琴を除く二人が心の中で呟いて、そのうち一人が懐から携帯電話を取り出した。曖は口端を上げながら、指先でそれを操作し耳に当てる。

「深<sup>みれい</sup>怜さん、プラン変更。『<sup>みれい</sup>学び舎の園』の噴水まで来て頂戴」

『……了解』

呟くような小さな声が、ほんのわずかに鼓膜を揺らす。曖は通話を切ると、美琴と多重<sup>エクスプローラ</sup>観測に向き直った。

「ロシアへ行くためにはいくつかルートがあるわ。物資補給のための鉄道、艦船、航空輸送機の三つね。まあ、スピードを考えれば航空輸送機で決まりでしょうけど」

「ちよつと待った！」

何やら勝手に話を進めている曖に、まだ熱が抜けきっていない美琴が口を挟む。

「なんか勝手に私達に協力する流れで話進めてるみたいだけど。上層部のことに詳しいってことは、あんた裏の人間なんでしょう？さつき言つてた情報漏洩のこととか、私たちにその気がなくなつて、協力なんかしたらあんたは……」

「ただでは済まない？」

見透かしたように、曖が言った。先に言われて、言葉に詰まる美琴。曖は少し苦笑しながら、

「いいのよ。元々上からの命令なんてどうでも良かったしね。ここへ来たのは、あなた達が生半可な考えで無鉄砲に外へ飛び出さないか、真意を確かめるためだったし。……誰かさんを助けてあげたいっていうのも同意できるしね」

言いながら、曖は多重観測へと目を向けた。視線を受けて、多重観測がわずかに笑う。一時は敵意すら抱いた曖だが、今は話題のベクトルこそ違えど味方だ。だが、姉の遺伝かすぐに表情を改め、クール系茶髪少女をジト目で見る。

「やっぱりあなたもあの人のことが気になっているのですか？とミサカは念のため確認を取ります」

「さあ、どうかしら。信頼はしているけどね」

さらりと流して、曖は美琴に顔を向けた。接続回路に関する話題では置いてきぼりの美琴は、想像以上に社会勉強していそうな多重観測に怪訝そうな視線を向けている。

「……ありがとう。礼は言っとくわ」

普段が普段だからか、少し堅い調子で美琴が言った。曖はそれこそ普段見ない美琴の姿に笑いかけ、

「それは無事に脱出できたらね。仲間を待たせてあるから、急ぎましょっ」

＊

同時刻、学園都市内某所。

軍事施設のような景観のその場所は、第二学区、かつて接続回路インターフェイスと一方通行が学園都市の生み出した怪物と戦った区画のすぐ傍だった。巨大なトレーラーのような装甲車の中で、白衣を着た長身の男がディスプレイに向かっていている。

「欠番零式フルチューニングが懐柔されただど？」

「はい。ウラル山脈内部に建造された研究施設での交戦中、作戦通りの時間に「クラスター」を起動する信号を発信したところ、受信されず。おそらくは、「接続回路インターフェイス」によって端末そのものの排除が行われたものかと」

これは予想外の結末だった。偶然が重なり過ぎた結果と断じている。

万が一説得されても「クラスター」がある限り欠番個体を殺すことは可能だし、まずあの死にたがりの欠番個体フルチューニングが生き残ろうとするとも考えにくかった。

能力の隙を突いた蝉脇雫掛。

能力の許容を超えていた垣根帝督。

接続回路インターフェイスは新たな公式を用いることで、二人が突き付けた「能力

の穴』を克服し、『未開の力』でそれらを凌駕した。

故に、自分たちは能力方面からの攻略を諦め、彼の感情を揺さぶる作戦に出た。

フルチューニング 欠番個体という接続回路にとつて『攻撃できない敵』を突きつけ、インターフェイス 八方塞がりの状況を作り上げた上で、確保できる環境を取り付けた。

その結果がこれだ。

「……とはいえ」

男が呟く。彼はトレーラーの中で鎮座しているマシンに目を向けて、

「我々の思惑とは違うが、統括理事長のシナリオ通り、彼は確実に『役目』へと向かっている。おとなしくプランを切り替えるとしよう」

『リフレクター 反射物質』の方も気になるところですが』

「ああ。スペインに運んでから消息を絶っていたというのは気掛かりだが、本命の進捗状況を見る限り問題はない」

かつかつと革靴の音を響かせて、男はマシンの表面に手を当てた。

「では行こうか。彼の友達を連れて」

暗いトレーラーの中で、男の声が響き渡った。



9 - 12 謀略 進△理由 (後書き)

どうも、櫻井です。

前書きは無法地帯なのでお構いなく。今となっては懐かしいネタ、かな？ いろんなところで目にする台詞ですよね（笑）

さて、今回もまた比較のおとなしい回になります。最後の大暴れはスノボで大立ち回りでしたね、次辺りからは戦闘シーンも織り交ぜていこうと思っています。

本作は基本的に原作をなぞりつつオリジナル要素を盛り込んでいく形ですが、構想段階では最後の方はほぼオリジナルになる予定です。まあ、本作の科学と魔術の交差したところに立ってるあの男が色々言ってくれちゃってるわけなんですけどね。

さて、少しの間は主人公不在の女性メンバー仕上がりで進んでいきます本作、終わる終わる詐欺と言われても差し支えないくらい進度が怪しくなってますが、最終章は一気に進んでいきます（汗）

それでは次回も、どうぞよろしくお願いします！

9 - 13 合致 消エル少女 (前書き)

「いつまで待たせんだよ……」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「我慢強い奴だな……」

墮天使を名乗るフィアンマの傀儡

瀬良 悧皇

## 9 - 13 合致 消エル少女

美琴と多重観測は『学び舎の園』の中にある大型デパートにやって来ていた。

紙袋を提げて、多重観測と一緒に試着室の傍まで来る。戦争を行っているひとつの国家とも言える学園都市だが、前線が遠く離れているからか市民は実感が沸かない様子だった。

強いて言うなら、食糧を始めとする物資が優先的に戦場に送られるお陰でちよつとした購入制限が置かれるくらいである。

二人の居る洋服売り場に関しては、戦前とほとんど変化がない。戦争中ということでは自粛しているのか、客の数が少し少なくて感じるもそれは二人にとって好都合だった。

既に寮で着替えを済ませていた美琴は、持っていた紙袋を試着室に体を収めた多重観測に差し出した。

「はい。サイズの心配はいらないよね？」

「問題ありません、とミサカは頷いてみせます」

言いながら、紙袋を受け取った多重観測が試着室に体を収めた。紙袋の中には私物の極力目立たない防寒服が入っている。

美琴は試着室の横の壁に背を預け、作戦の概要を反芻する。

夕風曖は先に『学び舎の園』中央の噴水に向かい、協力を仰いだ仲間と接触すると言っていた。美琴と多重観測は荷造りを済ませた後で噴水に向かい、合流することだ。そこから先は個々の役割分担の上で第23学区に向かい、音速戦闘機の類を奪取する。作戦

としては、実質戦力である美琴と情報操作の容易な曖が居る以上何の問題もない。むしろスムーズに行きすぎるような気さえする。だが、それだけに領けない。

(……まさか、畏だったりとかしないわよね)

相手は精神操作系の超能力者<sup>レベル5</sup>。知らず知らずのうちに頭の中を操られていたという可能性も否定できない。ここへ来ても、彼女の能力の性質は美琴にとって『信用の置けない』要因となる。だが逆にそう決めつけようと思えば、あらゆる奇跡も運命も胡散臭いものになってしまうだろう。

多重観測<sup>エクスプローラ</sup>が他の妹達<sup>シスターズ</sup>と比べて人間らしいところも、『心理掌握<sup>メンタルアウト</sup>』の前には単に洗脳したで片付いてしまうのだ。

別に彼女を悪いと言っているわけではない。ただその身に宿った超能力が、美琴のような人間からの信用を得にくくしているのである。

(……らしくない、か)

美琴は眉間に浮かんだ皺をほぐすように指先でつまみ、腕を組み替えた。

「ねえ、アンタ」

「なんでしよう、とミサカはカーテン越しにお姉様を視認します」

律儀に返事が帰ってきた。ごそごそと音が続いていることを考えると、まだ着替え終えていないようだ。少し悪いなと思いつつ、美琴は口を開く。

「アンタあの第五位と知り合いみたいだけど、いつ知り合ったの？」

「第七学区の病院に入院中、ばったり会ったのが初対面です、とミサカは要点を纏めてお答えします」

「ばったり、ねえ……」

疑心暗鬼になっても仕方ないが、胡散臭いことこの上ない。ついさっきまで彼女の能力について考えていた後だと尚更に。

このまま本当に曖と行動を共にしていいのだろうか。元々、曖の手を借りずとも多重観測と二人で同じことをしようとしていたのだからこのまま勝手に行くこともできないはない。ただ、本当に善意で協力してくれるのなら、彼女の存在が大きいのも確かだ。

しばらく虚空を眺めて考えていると、シャツ、というカーテンを引く音と共に多重観測が現れた。やや暗めの赤いジャケットを羽織り、首元は美琴と同じくマフラーで埋まり、厚手のミニスカートとレギンスで防寒対策万全だ。自分と同じ姿なのだから自分の思うコーディネートでいけると思っていたのだが、やはり表情が違ったり服の印象というものも変わるんだなとぼんやり思う。

多重観測のことだから、「似合うでしょうか？」とミサカは緊張気味に尋ねてみます「なんて『らしい』ことを口にするかと思っただが、彼女の唇はまるで違うことを発していた。

「第五位が信用できないのですか？」とミサカはお姉さまの様子を観察しながら尋ねてみます」

ほんの少し、咎めるような瞳をしていた。意外な反応に、美琴は一度目を丸くして、目を細める。

「まあね。そりゃ、手伝ってくれるのはありがたいし、心強いとも思うわよ。けど能力が能力だから、どこまでが本当でどこまでが嘘なのかとか、いつの間にか操られているとか、そんなことばかり考えちゃってね。私らしくないとは思っただけど」

「ミサカは信じます、とミサカはお姉様に意を唱えます」

多重観測はあっさりとした調子で言った。彼女は美琴の前へ出て、瓜二つの顔を目の前に晒す。

「確かにミサカとしても一切の反要素がないわけではないですが、夕風曖はあの人信用した人間です。そして大変に遺憾なことですが、夕風曖はあの人にだけは能力を使わない根拠があります、とミサカは主張します。その上で彼が夕風曖を信頼していた以上、ミサカは彼女を信用します、とミサカは結論を口にします」

……どうということ？と問い返したくなる。とりあえずさっきの曖との会話から、エクストラローラの「あの人」がインターフェイスが接続回路という人物で、その人物を信望……というか、曖が美琴と多重観測を比べていたということは、表現しにくいですが、御坂美琴における上条当麻に相当する人物、なのだろうか。いや待て。

インターフェイス（接続回路キルシフトって、確か調度この多重観測が参加したっていう多重能力進化実験の模擬戦闘の相手、じゃなかったっけ……）

基本的に学園都市の能力名は被ることも少ないし、大体そんな能力名をつける人間は当人以外に居ないはずだ。ありとあらゆる物体から原子までを結合・分解する公にされていない超能力者<sup>レベル5</sup>。

曖と関わりがあったということは……いや待て。そういえば二週間

ほど前に、曖と灰色の髪インターフェイスの少年が一緒に居たことがあったが、あれがその接続回路インターフェイスなのだろうか。もしそうなら、確かに何となく仲がよさそうだった様な気もする。

というか、もしそうならこの多重観測エクストラローラがこんなにも成長した理由はその接続回路インターフェイスと夕凧曖との三角関係的なもののせいなのだろうか。それはそれで興味があるが、それ以上に気になることがひとつ。

並んで歩き出しながら、美琴は多重観測エクストラローラに目を向けた。

「今さらだけど、なんでアンタを殺そうとしてた接続回路をアンタは好きになってるわけ？」

「お姉様とあの少年との馴れ初めを話していただけるのであればミサカとあの人との馴れ初めもお話しましょう、とミサカは狡猾に対応して見せます」

初めて『馴れ初め』という言葉エクストラローラを正しく用いた多重観測であった。

\*

第八学区の一角、教員寮の一室に、一人の少女の姿があった。

茜色のショートヘア。目つきは虚ろで、かつての妹達にも通ずる虚無的な印象すら受ける。

そんな彼女の足元には、無残な姿の男が数人倒れていた。血の臭いが充満する室内。彼女は近くにあったアタッシュケースに手を置いて、その中身を確認する。

掌サイズの袋が複数個、ケース一杯に詰め込まれていた。開封しないと詳しくはわからないが、一目でそれが公なルートで入ってきたものではないものだとわかる。おそらく麻薬だ。

(……………総重量、3kg……………。情報通りなら外の金銭価格で3000万円相当……………)

頭の中で簡単に見積もってから、彼女は制服のポケットから携帯電話を取り出した。年頃の少女らしさの欠片もない、ストラップのひとつもつけられていない事務的なものだが、彼女が手にしているとそれも気にならないほど自然に見える。

「……………『ユニオン』の深怜みれいより連絡します。任務完了。目標の物品を確認……………おそらく違法に搬入されたと思われるドラッグと思われるます……………」

『了解。死体の処理はこちらに任せてくれ。ドラッグは君が直接車両の方に運んでおいてくれ』

「……………了解」

少女、深怜みれい 錯弥さくやは頷いて、アタッシュケースを持ち上げベランダに出た。制服の上からでもわかる細腕には荷が重いように思えるが、深怜は片手で持ったままベランダの手すりに足を掛け、両足でその上に立つ。

端から見れば自殺志願者のようにも見えてしまうが、彼女にそんなつもりはない。

「……………演算開始。座標、(589、-461、277)。  
演算終了」



ぼそりと呟いた刹那、少女の体はベランダから消えていた。

9 - 13 合致 消エル少女 (後書き)

どうも、櫻井です。

今回は美琴に多重観測と接続回路の関係性について気付かせるために設けたようなものですね(汗)  
もちろん新キャラの紹介も兼ねていますが。

どんどん話の進め方が下手になっている気がしますね…この後ひと悶着あるのですが、書いてる僕が少し心配になってきました。夏休み中に終了と言っていました。九月中、十月くらいまでかかるかもです(汗)

こんな作者ですが、これからもどうぞよろしくお願いします。

次々回辺りにはロシア勢のターンも設けていくつもりです。

それでは次回、お楽しみに

9 - 1 4 心理掌握へメンタルアウト (前書き)

「おっほー、頑張るなああの子ら」

レベル5に肉薄する最初の妹達シスターズ

欠番個体フルチューニング

「……暇だな」

学園都市最高峰の超能力者 (レベル5)

接続回路インターフェイス

## 9 - 14 心理掌握へメンタルアウト

学園都市第五位の超能力者<sup>レベル5</sup>は直接的な戦闘能力を持たない能力者である。その能力は直接相手に触れなければ驚異というほどでもない。

故に学園都市第五位と云えど、実質戦力となる第七位を前には為す術もないというのが定石だ。

何も単純な強さだけが順位に比例しているわけではない。事実、学園都市第二位の『未元物質<sup>ダイクマター</sup>』は第一位の『一方通行<sup>アクセラレータ</sup>』と互角以上に渡り合ったし、第四位と第三位も同義である。

故に単純な『殺傷能力<sup>レベル3</sup>』、『破壊力<sup>レベル3</sup>』で優劣をつければ、大能力者<sup>レベル4</sup>、果ては強能力者<sup>レベル3</sup>ですら、『心理掌握<sup>メンタルアウト</sup>』を凌駕しているわけだ。その代わり、触れさえすればその力は他を圧倒する有用性を有するようになる。たとえ相手が第二位であろうとも、その身に触れるだけで、自滅させるも味方につけるも思いのままなのだ。

そんな能力を持つが故に、夕凧は本当の意味で友人や仲間を作ることが難しい少女だった。

彼女を『女王様』と称しているのも、その顕れと言えるだろう。

『友人』という対等な立場で関わろうとしない。

表の彼女はそんな無数の壁に挟まれ閉じ込められているようなものなのだ。

だから、芯から穢く醜い暗部の世界、『ユニオン』での日々は、暗闇でありながら彼女にとってひとつの価値があったと言えるのである。

深怜錯弥とは、そんな『自由な居場所』が崩れかけた時に出逢った。

\*

第三次世界大戦が勃発している現在、第23学区はついひと月前とは大きく変わった様相を呈している。第23学区は航空・宇宙関連の技術を集約した区画であり、大戦が起こる前は航空機を利用した物資搬入を主とするのだが、10月30日現在のそこは爆撃機や戦闘機、軍事輸送機などがせわしなく整備されては飛び立っている。

エクスプローラ 多重観測と夕風曖は物資を詰め込んであるだろうコンテナの陰に隠れ、ずらりと並んだ鉄の鳥たちを伺っていた。

「整備スタッフの数は全部で15人です、とミサカは電磁性ソナーによる解析結果を報告します」

小声で、エクスプローラ 多重観測が呟いた。曖はその大まかな位置をエクスプローラ 書きとらせ、手帳に書き出された人間の配置を記憶すると、それを上着のポケットにしまう。エクスプローラ 着ているのはどこか大人っぽいベージュのコートだ。脚は多重観測同様レギンスで覆っている。曖は別なポケットから携帯くらいの小さな端末を取り出し、

「御坂さん。そっちはどう？」

『誰に言ってるのよ。準備万端、いつでもいいわ』

頼もしい声が聞こえてきた。曖は周波数を切り替え、

「深怜さん。大丈夫？」

「……大丈夫。合図と同時に決行可能……」

声は小さいが、それでも頼もしい声だ。曖は「了解」と一声かけて、設定を通話からメールへと変更する。宛先は美琴と錯弥の二人。カーソルを送信に合わせ、メールが二人に届けば作戦が始まる。

曖は多重観測<sup>エクスプローラ</sup>と顔を見合わせ、彼女が頷くのを確認すると、端末のキーを押した。

刹那。

バンツ、という鈍い音が響くと同時に、空間を照らす照明が落ちた。

何事かと整備員がざわつくなか、二人はコンテナの陰から飛び出す。

早朝の薄暗い空間では、人間の姿がぼんやりとわかる程度でしかない。多重観測<sup>エクスプローラ</sup>は赤外線ゴーグルから見える緑色の世界に神経を研ぎ澄まし、空間移動<sup>レポート</sup>と体術を混同させた戦法で自分達より一回り二回りと大きな男たちの急所を突き、極力ダメージがないように配慮する。曖はそれに続きながら、多重観測<sup>エクスプローラ</sup>が薙ぎ倒した相手に触れ、その精神に介入する。

「……わかった。協力、する」

間の抜けた声が口から洩れた。それを確認するや、曖は多重観測<sup>エクスプローラ</sup>

が能力で飛ばしてくる整備士を次から次へと洗脳していく。すると、異変を察知したのだろうか。格納庫のシャッターが開かれ、警備を担当していたであろう武装した人間達が、こちらへ銃を向けて警告する。

「お前たち、そこで何をしている！！」

ありふれた警告だった。曖はちら、と目に映った少女に念話を使って語りかける。

次の瞬間。

「うっごあっ!?!」

警告を発した男の顔面に、工具ボックスが激突した。それは中のスパナやドライバーをまき散らしながら、よろけた男に降り注ぐ。追い討ちを食らった男が呻き、顔を上げると、そこには茜色の髪を揺らす少女の姿。空中に現れた彼女は、そのまま男の胸を蹴った。次の瞬間、男はその場から消失し、彼の立っていた床面に人を上から捉えたような穴が生まれ、そこから男の声がした。

この下には、地下シェルターがある。

「!?!?」

訳のわからない状況に、彼と一緒に来ていた武装集団は反応が遅れ、次の瞬間にはそれぞれ異なる方向に現れていた。それはシャッターを越えた滑走路とを区切るフェンスの向こう側であったり、格納庫の屋根の上であったり、あるいは閉ざされたコンテナの中であったり。

そのいずれも、間にある障害物はさまざまな方向から捉えた人間

の形に貫かれている。

彼女の能力は『アウトライン転送直線』。

始点座標と終点座標を繋ぐ直線上にあるものを変形させつつ物体を転移させる能力である。

その性質故に、味方を巻き込まない形での使用に少々手間がかかるため、戦略的有用性における欠点から能力強度は大能力者<sup>レベル4</sup>であるが、少人数での作戦行動であればその能力は真価を發揮する。

あつという間に小隊クラスの部隊を戦闘不能にした錯弥は、洗脳作業を終了させ、背後に整備士たちを従えた曖を振り返った。本意ではないと言っていたが、洗脳とはいえ男共を従えるその姿は『女王様』の名に恥じない威厳を感じさせる。

「……時間稼ぎには、なつたかな」

まったく表情を変えぬまま、錯弥は曖に尋ねた。曖はにっこりと微笑んで、

「文句なし、さすが深怜さんね。あなたにお願いしてよかったわ」

「……曖のお願い、絶対だから。……友達を手伝うの、当たり前……」

後の方はほとんど聞こえないくらいに、錯弥が小さく呟いた。照明がついたのを確認し、曖は笑顔を見せながら端末を取り出し美琴に繋げる。

「整備員を確保したわ。情報管制の方は上手くいってる？」



『だから誰に向かって言ってるのよ。もうそっちに向かってると』  
『！』

「そう。さすがは第三位、仕事が早くて助かるわ」

『……アンタに褒められると調子狂う……』

そんな声を聞いて、曖は回線を切つて多重観測と錯弥、そしてたつた今『仲間』にした男たちを見まわした。シエルターへ転送された男は美琴が電子機器にした細工で外には出られないし、屋根の上に転移された男は降りようにも降りられない。コンテナの中に詰め込まれた男は冷えたミサイルの感触に背筋を凍らせていることだろう。他の武装した人間も、迂闊に動けない状況を作られている。

さて、次だ。

曖は心の中で呟いて、胸を張って命ずる。

「それじゃあみんな、平常運転に戻って頂戴。各機の整備を再開して」

味方につけた整備士たちが、各々の持ち場に戻る。曖たちは堂々とその横を通つて、並べられている機体を眺めて、そのうち一つに目を付けた。

超音速爆撃機、HSB-02だ。

80mにも及ぶ超える全長に、そのスペックは時速7000kmとぶっ飛んでいる。下調べは既に済んでいたため、彼女らはこのうちの一機をジャックするつもりでいた。曖はその機体を優先的に整

備するよう指示し、出発準備を整えていく。

\*

数十分が経過し、曖たちを乗せるH s B - 02はとうとう発着用のカタパルトにセットされた。いつも通りと思つてのこのこやつてきたパイロットを洗脳し、同じく搭載される予定だった戦闘部隊も半数をボデイガードにおいて、全ての準備が整う。何とかなつて、美琴と曖は安堵のため息を漏らした。多重観測も、表情には出さないが肩の力を抜いている。

「これで後は黙つていればロシアまで行けるわけですね、とミサカは興奮気味に尋ねてみます」

「声音は相変わらず平坦だけど、そうよ。いよいよね」

美琴が多重観測エクスプローラに笑いかけ、ハッチ近くで会話している曖と錯弥に目を向けた。

「色々ゴタゴタしちゃったけど、二人には感謝するわ。ありがとう」

再び、美琴の口から感謝の言葉が飛び出した。

確か曖は、『無事に脱出できた』と言つておいたはずなのだが。

曖は苦笑しながら、

「いつからあなたはそんなに素直になつたの？私は確か

」

「ぐあああああああああああつー！！」

ッ。

突如聞こえた悲鳴に、一同が振り返る。カタパルトから離れたところで、整備士が地面に倒れ込んでいた。その肩からは血が流れ出している。

銃弾だとすれば銃声で気付けたはずなのだが、そんな音は一切しなかった。それもそのはず。

倒れ込んだ整備士の肩に刺さっていたのは、彼らが使い慣れたスパナだった。

「……空間移動系能力者……！！」  
テレポーター

先に口に出したのは錯弥だ。弾かれたように、曖はハツチから顔を出し、格納庫の方へと目を凝らした。そこには、数人の人影がある。

「……まずい連中が動いたわね」

それらの人物を見定めると、曖は不愉快そうに眉をひそめた。

現れた3人組の一人、金髪にサングラスをした少年が、口を開く。

「『ユニオン』の夕凧曖と、深怜錯弥だな。身柄を拘束させてもら

うぞ  
」

少年の名は、土御門元春。

現れた3人組は、暗部闘争で唯一編成を変更されることなく生き残った暗部組織。

『グループ』だった。

## 9 - 14 心理掌握へメンタルアウト（後書き）

どうも、櫻井です。

一気に進めていきましたね。今回は錯弥の能力を大々的にお見せしました。超電磁砲のアニメで黒子が窓を柱にレポートさせることでそれを切断したシーンを見て思いついた能力です。ある意味熱と光を発しない原子崩しですね。移動先だけでなく移動するまでの過程も押し広げる、と言いましょか。前回、転移と同時に風が吹いたのは空気を押し広げた際に発生したエネルギーによるものです。ちよつと禁書におけるレポートの原理から外れてしまったように思えますね。穴が開いたりするのは転移し終えてからで、転移した際に移動させた過程にも同様の現象をきたす、と考えていただければよろしいかと（汗）

学園都市編のボス（？）は原作ではこの時の動きが明かされていない『グループ』です。戦闘シーンは…結標VS錯弥なら考えていますが、未定です。

それでは次回、お楽しみに！

9 - 15 約束

絶タレ又繋ガリ

(前書き)

「……私、なかなか台詞がない……」  
『アウトライン転送直線』の名を冠する大能力者レベル4

深怜 錯弥

「活躍してるんだからいいじゃない」

夕凧暖の姉にして元研究員

夕凧 志乃

「『グループ』……統括理事会の潮岸さんを襲撃して、情報を吐かせたって疑惑は解けたのかしら」

ハッチから地面へと伸びるスロープに踏み出しながら、曖は相手を睨みつけた。金髪の土御門の表情は、目元を覆うサングラスに阻まれて見えない。

後ろには、スーツ姿で柔和な笑顔を浮かべている海原光貴とブレザーを羽織って胸だけを隠したようなインナーを着た結標淡希がこちらに顔を向けている。

話に聞いた通り、あの対抗するだけ無駄な第一位の姿はない。どこかの非公式野郎と同じように。

「生憎とお咎めは受けちゃいない。聞いたのは、耄碌した老人の戯れ言くらいなものだからな。それよりも、お前たちの動きの方が不審に思われている」

淡々と、土御門は言って退けた。曖はその背後の二人にも目を向けながら、スロープの中腹辺りで立ち止まる。

「そう。それじゃ手っ取り早く済ませて貰いましょうか。私と錯弥の身柄を拘束させてあげればいいのよね？」

後ろから、錯弥が茜色の髪を揺らして降りてくる。潔い二人の動きに、土御門は眉をひそめた。

「随分簡単に諦めるな。こいつを盗んで、お前はどつするつもりだった？」

ハッチの閉まった音速爆撃機を示して、土御門が言う。曖は「別に」&ldquo;とどうでも良さそうに呟いて、肩越しにコクピット傍の窓に目を向けた。隠れるようにしているが、多重観測の頭が見える。自分達が話している間に向こうまで移動したらしい。もつとも、そうするのは計画の内ではあるが。曖は意識を集中し、多重観測の意識へと届かせる。

『…というわけだから、一緒には行けないわ。後は御坂さんと上手くやって頂戴』

『ですが、あなたも接続回路に会いたいのでは、とミサカは懸念を口にします』

まさか多重観測の口からこんなことを聞く日が来ようとは。いつぞやの、夫の浮気対象を発見した妻のような警戒心剥き出しの姿とは大違いだ。

曖と錯弥はとうとう土御門たちの目の前まで歩を進めた。

「正直に答えてもらえないかしら。あなた達二人の行動には上も困惑しているのよ」

白旗を上げた甲斐もあり、結標の声からは敵意のようなものは感じられなかった。とはいえ、組んだ腕の指先でベルトから提げられた警棒に触れているところを見ると、臨戦態勢ではあるらしい。錯弥は無表情で、

「……話なら後でする」

「…まあ、投降すると言うのであれば、こんな場所でも話は



できますが……」

警戒した様子で、海原が言った。「グループ」の面々の様子を伺いながら、曖は再び意識を多重観測エクスプローラと繋げる。

『適材適所つてもものがあるのよ。あなたはそのまま行きなさい』

『ですが』

何を名残惜しそうにしているのだろう。こんな時、曖が浮かべるのは笑顔だった。その底の知れない意味深な笑みは、胸に去来する様々な感情を覆い隠し、仮面の役割を果たす。多重観測エクスプローラは無表情だが、その無表情からも勘の良い人間ならその胸中を能力なしでも読み取れてしまうものだ。その点、笑顔こそ最も感情の読み取りにくい顔と言える。

笑うことで、相手の心配を回避できるのだから。

そう思った上で、曖は口には出さずに考える。

『彼に会いに行くんでしよう？あなたが連れ帰ってきなさいよ。二度と会えないわけじゃないんだもの、機会をひとつ潰すくらい、なんてことないわ。だからね多重観測エクスプローラ』

そこで、曖は思い切り背後を振り返った。端正なその顔に、とびきりの笑顔をくっつけて。

『私達に構わず行きなさい。そして必ず帰ってくるよ』

返事が聞こえるその刹那。

突如カタパルトが動き出し、二人を乗せた高速爆撃機が火を噴いた。

「なにっ!？」

鼓膜を破るような轟音。弾薬を積んでいない音速爆撃機はカタパルトデッキから飛び出して、滑走路へと滑るように突き進んでいく。土御門たちが耳を塞ぐ中、曖と錯弥は耳栓代わりの防音仕様イヤホンを装着し、わずかに動揺した土御門たちに拳銃を向ける。

「ごめんなさいね!! 私達の処分はご自由にだけど、中の二人は行かせてもらっわよ!!」

自分の声すらまとも聞こえないが、相手の声はその心を読めば聞き取れる。

『中の二人だと……!？』

土御門の声だ。思ったより耳がいいのか、この轟音の中大声を上げただけの曖の声を聞きとっている。とはいえ、そろそろその轟音も徐々に小さくなってくる頃だ。

「そうね、三人とも、特にその海原君は詳しいんじゃない？」

「僕が……? そうか、メンタルアウト『心理定規』を使って……」

一切の戦闘能力を持たない『心理定規』<sup>メンタルアウト</sup>の恐ろしさは、相手と視線を交わすだけでその深層意識と記憶までを読み取ってしまうことにある。直接相手に触れずとも、その心の奥の奥底の底に眠る辛い記憶を引きずりだすだけでも、相手の精神を大きく揺さぶることが可能だ。ある意味、この世界を生き抜く上で特化した能力とも言える。そんな能力を持った少女は続ける。

「私を捕まえたければ捕まえなさい。その代わりに、今飛び立ったHSB-02のことは今すぐ忘れる事。……何なら、直接忘れさせてあげても」

その時だった。

曖のすぐ傍にあった爆薬が、轟音を上げて爆発した。爆風を受けて、曖と錯弥、『グループ』の面々が宙に舞う。空中で、双方の間移動系能力者が動き出し、仲間の体を転移させるが、爆発は一つだけではなかった。

続けて整備途中のHSB-02が次から次へと爆発し、生まれた衝撃派と爆風が格納庫を炎に包んでいく。それはもはやテロ行為だった。

錯弥に掴まって次元の狭間を飛び越えていく曖は、徐々に遠くなるも被害が拡大していく格納庫の惨状に目を見張る。

こんなことは作戦にはない。

(どうしようかと……)

滑走路に飛び出した爆撃機は、そのままの勢いで整備された進路を滑走していく。一度着地し、曖は手の中の端末を操作して、美琴へとコールする。応答はすぐにあった。

「御坂さんっ！！大丈夫！？状況は……」

「大丈夫だけど、どうなってんのよ！？合図で飛び出すとは聞いてたけど、あんな爆発起こすなんて聞いてないわよ！？」

良かった。さすがは最新鋭機、慣性補助装置が作動したらしい。曖は一度深呼吸して、

「私にもわからないわ。後から出てきた三人組の仕業でもない。おそらく、第三者による攻撃行為と見ていいわね」

「攻撃？」

自分達か『グループ』か。少なくとも、あの距離を考えると『グループ』の味方ではない。仮にも学園都市第五位の超能力者レベル5にあのような攻撃をしたということは、もはや夕凧曖は計画とやらに必要になったのだろうか。それとも、それを犠牲にしても為さなくてはならない理由があったのか。

「計器類……ていうか、パイロットが取り乱したりしていない？機体に不備があったとか、そういう問題が起きていたら

」

ひとまずは、美琴と多重観測エクステンローラが飛び立つことが先決だ。と、言ったところで、ゆっくりと機首が上を向き、少しずつ上がっていくの

が目に映る。曖は小さく息をついた。機体を目で追いながら、ふつと微笑む。

「どうやら問題ないようね。エクスクローラ多重観測にも言っておいたけど、健闘を祈るわ、御坂さん」

『ちょっと待つてよ！アンタそんなこと言ってる場合なの？その攻撃してきた連中の狙いがアンタたちだったら……』

「だから何？」

『はっ……っ？』

曖の茶髪が揺れた。コートの裾や襟、袖口のベルトの余りが、風に揺れる。頭上からは、バラバラという羽音を立てる学園都市の化け物が迫っていた。曖はそれを見やっってから、隣の錯弥と頷き合う。

「私はやりたいようにやって目的を達成した。狙われる立場になることなんて珍しくないし、戦闘能力は低くても私はあなたより『こっち』の世界を知っている。……どこかのお馬鹿さんと、何度か切り抜けてきてるわ。心配してくれるのはありがたいけど、この世界じゃ私はあなたに心配されるほど間抜けじゃないって、覚えておきなさい」

言いながら、曖は錯弥の手を握った。転移する先は、決まってる。

『……ありがとう』

そんな声が聞こえた瞬間、曖は自分の体が一気に軽くなるのを感じた。

景色が消え失せ、滝を挟んで向こう側を見たような歪んだ風景が広がっていく。

次に世界が瞬いた時、そこは空中だった。

高さにして60メートル、鳥の目線で世界が見えた瞬間、10メートルほど下にあつた戦闘ヘリに不自然な穴が広がり、炎と煙を撒き散らして墜ちていく。

しかし、曖の視線は地ではなく、空に向いていた。もう点にしか見えないHSB-02だ。

「……どういたしまして、御坂さん」

どうせもう聞こえていないのだろうが構わない。できる限りの笑顔を黒い点に向けてから、曖は次の演算を開始した錯弥を見た。

「それじゃ、早速動き出しましょうか。慎重しく、ね」

居場所たる闇に沈みし少女は、さらに深い闇へと踏み出していく。

\*

土御門たち『グループ』のメンバーは、結標の『座標移動』ムーブポイントで近辺の施設屋上へ退避していた。

「ふう…間一髪、ですね」

屋上フェンスから黒煙の上がる格納庫を見やり、海原は小さく息をついた。ケホケホと咳込みながら、結標がフェンスに背を預けているのが見える。彼女が最大の弱点となっていた自身の転送を克服できていなければ、今頃は土御門と二人だけだったかもしれない。

顔についた煤を拭いながら、土御門が口を開く。

「……あの爆発、反応を見た限り、『ユニオン』の二人は無関係のようだった」

彼の言に、海原と結標は小さく頷く。結標は腕を組み、

「どういうことかしら。私たち以外にも、二人を狙っていた部隊があったってこと？」

話が違う、と彼女は思う。彼ら『グループ』は、『ユニオン』の二人の不審な動きを警戒した上層部に言われてここまで来たのだ。

受けた命令は生け捕りだった。話が違う、と彼女は思う。彼ら『グループ』は、『ユニオン』の二人の不審な動きを警戒した上層部に言われてここまで来たのだ。

受けた命令は生け捕りだった。あのような爆発、どうやらこちらと同様向こうも脱出できたようではあるが、下手をすれば貴重なレベル5とやらが欠損するところだ。

つまり、今回の攻撃は『グループ』側でも『ユニオン』側でもない、第三勢力によるものと考えるのが妥当だ。

「狙いは我々か、彼女達か。はたまた

」

口に出しながら、海原は柔らかな笑顔を空に向けた。こちらに向かってくる物体がある。

おそらくは、彼らの考える第三勢力の駒。

戦闘ヘリの形をしたそれは、真っ直ぐにこちらへ向かってくる。

三人は静かな瞳でそれを見て、ニヤリと笑った。

『両方か』

学園都市最強の暗部組織が、再び動き出す瞬間だった。

\*

音速爆撃機HSB-02は、安定した状態で雲を切り裂きながら進んでいく。早くも日本海を通り過ぎようとしているのが、コクピットに表示されるナビゲーターから見て取れた。

この機体の中には、曖が遣した『味方』が十数人乗り込んでいる。その割には、機体の中で言葉を発する者がいない。音響制御も効い



ているため、機体の中は非常に静かだった。

(……さっきの三人)

多重観測は窓から見えた『グループ』の姿を、ぼんやりと思い出していた。彼らを見るのは今日が初めてではない。

接続回路と最後に会った日に、一方通行と一緒に冥土帰しのホテルを訪れていたのを見た記憶がある。つまり一方通行は彼らと仲間が協力関係にあったのだ。打ち止めが、最近一方通行と会っていないと通信してきたことがある。それはちょうど、接続回路となかなか会えなくなつた時期と重なる。

「仕事がある」と、ただ一言理由を言って。

そしてその仕事仲間が夕凧姉妹と、あの空間移動系能力者。そして病室に現れた長身の少年。この一件で、接続回路が暗部の組織に属し、今までひた隠しにしてきた疑惑が、今度こそ確信に変わった。

やはり判断は間違つてなどいかなかったのだ。

(接続回路……ミサカがあなたの所へ行ったら、あなたはミサカを咎めるでしょうか)

曖昧の言葉が蘇り、多重観測は返答の無い問いを頭に浮かべる。

どの道、今ここで接続回路の音が聞こえて「来るな」と言われようと、引き返すつもりもないのだが。

隣を見ると、同じく考え事をしているらしい美琴の姿が映った。

「お姉様、とミサカは徐に話しかけます」

「ん？」

美琴がこちらに顔を向けた。多重観測は凜とした表情で告げる。

「必ず二人に会いましょう。そして、必ず連れて帰ってきましょう、とミサカは意気込みます」

言っと、美琴はしばらく目を丸くして、「あいつと同じこと言ってる」と笑いながら、多重観測の頭に手を乗せた。

「……誰に向かって言ってるのよ。当たり前。次はみんな帰ってくるわよ」

美琴が微笑み、多重観測もそれに笑い返す。かつてはできなかつた、まさしく姉と妹らしいやり取り。

そこにクローン人間であるとか、量産品であるなどという負の要素は絡まない。二人の少女を乗せた怪物は、刻一刻と極寒の大地へと近付いていく。

瓜二つの二人の、瓜二つの想いを乗せて。

どうも、櫻井です。

学園都市編は謎を残して終わらせていただきました。この続きは学園都市編は本作ではない別の機会に、外伝として書きたいと思っています。曖か錯弥辺りを主役にして(笑)

今回はほぼ全員女性キャラで話を作り、超電磁砲的な空気感が出せればと思いましたが、如何だったでしょうか(汗 結構強引な設定や展開が多かったのではと思います。

これで第九章は終了し、この後キャラクター紹介で欠番個体をやって再び接続回路が主役のロシア編に戻りたいと思います。

それでは次回、お楽しみに！

## 章末特典 キャラクター紹介？ 欠番個体へフルチューニング

ミサカ000000号

身長：166cm

体重：47kg

血液型：AB型

来歴：

レディオノイズ  
量産能力者製造計画以前に作られた、御坂美琴のクローン第一号。試作型であると同時に考え得る強化プログラムを全てつぎ込まれた『禁忌の存在』でもあり、その能力は非常に高い。

しかし研究者の考えとは裏腹に、明確な自我が確立され計画には必要のない感情データが検出された上に、能力強度も御坂美琴には肉薄しても届かない、という多くの意味でイレギュラーな個体となつてしまった。これにより、研究者たちはレベル5の量産による精鋭部隊の形成から、量を優先し固有のネットワークによる作戦行動を行う軍隊の形成へと計画をシフトさせた。用済みとなった欠番個体は身一つでどこかへ廃棄され、餓えと苦悩に苛まれながら長い時を孤独に過ごし、再び研究機関に回収される。

その後体内浸透型のナノデバイス、『クラスター』を埋め込まれ、学園都市から逃亡した接続回路を撃破するために送り込まれた際に『クラスター』を排除されて彼に協力することとなる。

容姿関連：

御坂美琴をそのまま高校生にしたような風貌をしており、改造の

際に使われた成長剤の影響で体型も女性らしくなっている。美琴や他の妹達が付けるような髪留めなどは身につけておらず、変わりにスポーツサンングラス状のバイザーを頭に装着している。これは妹達のゴーグルの改良型であり、暗視ゴーグル、望遠機能、簡易照準などの機能を有する。Hq-R2搭乗時には目に装着するのが基本。

性格関連：

襲撃当時は心が折れており、自虐的で自殺願望が行動と言動に見え隠れするほど病んでいたが、接続回路に救われてからは一転、御坂家に通じる明るい性格を見せた。

少々言動に思わせぶりの表現を含めたり、時として大胆な発言をし出すなど、男性側からすればやや困らされる小悪魔的な一面も持つ。

接続回路と多重観測が親密であることは知っている様子。だが断ると言わんばかりに接続回路に対して攻めの姿勢を見せているが、まるで効果がなく悩む姿が目撃されている。

能力・武器：

レベル4の『オバードライヴ超過電刃』。『レイディオノイズ欠陥電気』をはるかに上回り、電撃使いの中では最も『レベルガン超電磁砲』に近い6億ボルトもの出力を有する。接近戦を好み、美琴のコイン並びに番外個体の鉄釘のような弾丸は常備せず、電流を剣のような形に固定して扱うことが多い。

Hq-R2 スノーボード型アンチグラビティ反重力ソーサー

学園都市が欠番個体専用装備として開発した移動兵装。

名の通りスノーボードに酷似した外見をしており、機体後部には

推進ユニットが取り付けられている。

機体に流す電気量に応じて出力が変化し、最大時速は200kmオーバー。その速度から想像もつかないほど小回りが利き、乗り手の体重移動に鋭敏に反応し最高速度からの急ブレーキにも対応する。起動時は機体下部から反重力場が発生し、地面から5cmほど浮遊した状態からスタートする。力場の発生対象も任意に変更でき、壁面や天井であつても電磁場さえ形成できればそれを重力として壁面なども移動することができる。

尚、機体前部には牽制射撃用の小機関銃が機首に埋め込まれる形で二門搭載されており、機体にかけて電圧による電磁加速で射出される。弾数は一門につき40発。

作中では兵器としてだけでなく接続回路と欠番個体の移動手段、そして不遇な少女に役得を作るといふ大活躍を見せた。

章末特典 キャラクター紹介？ 欠番個体へフルチューニング（後書き）

CVイメージ：坂本真綾

10-1 惨劇 血塗ラレタ祭壇 (前書き)

「いよいよ最終章か……」

学園都市最高峰の超能力者（レベル5）

インターフェイス  
接続回路

「ちゃんと伏線全て回収できるでしょうか……とミサカは懸念します」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号 10412号

エクステンローラ  
多重観測



10 - 1 惨劇 血塗ラレタ祭壇

エリザリーナ独立国同盟。

近年、政府の方針に異を唱え、独立した小国同士で形成された国家である。

独立の立役者であるエリザリーナは、複数の小国を繋げることで東ヨーロッパとの国境沿いまで国土を広げ、大国の中で行う物資搬入において孤立する小国家の弱点を補い、独自のルートでの貿易を可能とした。そのため、ロシア政府からは疎ましく思われているという。

インターフェイス 接続回路はそんなエリザリーナ独立国同盟の車両に乗り込んで、手の中の羊皮紙に目を向けていた。

彼の隣では一方通行と打ち止めが眠っている。上条の力で、小さな少女は今のところ安定した状態にあった。とはいえ、処置を施したらしい本人が「完治はしていない」と言うのだから油断はできない。ラストオーダー 打ち止めを蝕むエイワスからの影響は、時間経過に従って大きくなるタイプものだ。今は良くとも、そのうちまた酷くなると考えていい。

(そうなる前に、先手を打たなくちゃならねえな)

インターフェイス アクセラレータ 接続回路は一方通行と別れた後、外の世界の『異なる法則』と接触した。その課程で、彼はロシア成教という組織の存在を知り、彼らが『生贄』を用いて何かを成そうとしていることまでは把握している。

だが、これだけでは話にならない。

( やっぱロシア成教の連中と接触しねえことには、『生贄』の詳細は分からねえか…… )

「 やっほー。進んでる? 」

不意に、明るい声が思考を遮った。羊皮紙から顔を上げると、そこにはニッコリと笑う欠番個体の姿がある。接続回路は首を横に振り、

「 サツパリだ 」

「 おほー、そっかそっかあ。そんな悩めるミサカの騎士様に朗報だよん 」

言いながら、欠番個体は目の前まで歩み寄り、人差し指と中指で挟んだ紙切れを接続回路の鼻先に突き付けた。

接続回路はそれを受け取って、紙切れに書かれた文章を読み取る。

『 Index - Librorum - Prohibitorum 』。

『 禁書目録 』とただ一文、メモ帳か何かを千切った紙に書かれている。説明書きのようなものもない。

接続回路は目を見開く。

エイワスは、禁書目録という言葉覚えておけと言っていた。接続回路は欠番個体に顔を向け、

「こいつをどこで手に入れた？」

「さっきあの上条って人から貰った。あなたと一方通行アクセラレータに渡してく  
れって。」

「アイツが？」

こちらの動きを知らない彼が寄越したとなると、やはりエイワスの言った通りこの『鍵』は存在するのだ。彼の言うことの証明がこ  
こで行われた。これで、より効率的に調査ができる。

「他にやることがあるから一緒には居られないんだって。野戦病院  
に着く前に別ルートを探るらしいよ。」

「そうか。まあ今は打ち止めを安全な場所に置くのが先決だからな。  
一方通行アクセラレータが目を覚ましたら次の方針を考えるぞ。」

そう言って、接続回路インターフェイスは羊皮紙に注意深く目を通していく。そし  
て、わずかに眉をひそめた。

「どっしたの？」

表情の変化に気付いたのか、欠番個体はひよいと自分の顔を接続インターフェイス  
回路フルチューニングの視界に入り込ませた。接続回路インターフェイスは羊皮紙の一枚、外枠のよう  
なものしか描かれていないものを凝視している。接続回路インターフェイスはジャケ  
ットの襟から首の装置のスイッチを押し、能力を解放する。床に広  
げた羊皮紙の一枚に触れて、分子配置を確かめる。

羊皮紙の表面には、何らかの塗料が塗り付けられているようだっ

た。彼は無表情で、羊皮紙に意識を注ぎ込む。

その瞬間。

何も書かれていなかった羊皮紙に、掠れた文字と模様のようなものが浮かび上がった。

「ほー、そういうトリックだったんだ。所謂炙り出しみたいな仕組みかな？」

感心したように、フルチューニング欠番個体が羊皮紙に注目する。だが、相変わらず羊皮紙に刻まれた文字は解読不能の妙な文字だ。フルチューニング欠番個体はやれやれとでも言いたげに肩を竦める。

「謎の解決はさらなる謎を呼び込む、ってね。特殊な一枚は他と変わらない一枚になったわけだ。わざわざプロテクトかけられてたってことは、これはちよっぴり重要なやつだったりするのかな」

フルチューニング欠番個体が何か言っているが、インターフェイス接続回路はただその一点、羊皮紙に描かれた絵のようなものを見ていた。彼は小さく笑い、

「そうだな。謎は謎だが、またひとつ繋がったぞ」

それもそのはず。

彼の見つめる羊皮紙の絵は、ひとつの事柄を表しているのが見て取れた。

祭壇のようなものの前で、磔にされている数人の人間。

その祭壇の上に宙を浮く形で描かれた、翼を持つ人間。

それは、さながら人間を生贄として天使が舞い降りたかのような光景だった。

\*

学園都市の軍勢を蹴散らした瀬良は、国内のとある教会を訪れていた。学園都市の近代的な建物とは違い、外見も中身も古めかしい雰囲気です。

瀬良は顔の傷を隠すように深くかぶったフードの中で、そんな建物を見回していた。礼拝堂の中に入ると、そこには数人の修道服の人物が集まっている。

彼らは瀬良の姿を認めると、小さく頭を下げた。

「術場の移植はできたか？」

瀬良はそれを無視して本題を尋ねた。神父らしい男は前へ出て、

「『ベツレヘムの星』の形成さえできれば、いつでも術式を起動可能です」

「そうか。『エデンの蛇』の方はどうなっている。『ヴァルキュリア戦女神』の現出にはどうしても必要な素材だ」

瀬良は胸の前で腕を組み、真正面に位置するステンドグラスに目を向けた。神か天使か、神々しい人型の存在がデザインされている。つい数週間前までは神の存在など信じなかった瀬良だが、ここ数日の活動でその存在を認めるようになってきた。フィアンマを始めと

する外の住人の扱う未知の法則　　彼らは『魔術』と称している

を幾度となく見てきたからだ。目の前の者達も、学園都市でいうレベル3からレベル4くらいの技術を持っているとみていい。

「先ほど脱走した『生贄』を発見し拘束しました。『エデンの蛇』並びに『ヴァルキユリア戦女神』の現出にも支障は出ないかと」

相手の言葉を聞いたとき、瀬良は胸に違和感を感じた。鼓動の方向が変わったような、そんな感覚だ。彼はフードで陰った瞳を細め、

「……なるほど。それが貴様らの結論か」

彼は黒い革手袋で覆った手を開け閉めし、

「僕を前にして謀反とは見上げた度胸だな」

振り向けば、そこには剣や斧、槍などの武器を手にした修道服の者達が十数人、瀬良を囲っていた。報告をした男はハッ、と笑い、

「我々ロシア成教が全員、お前や右方のフィアンマに付き従うと思っっているのか？まして貴様は元より学園都市の人間だ。そんなものを利用する時点で、フィアンマは信用できん」

ガチャガチャと、武器を手にする音が聞こえる。おそらく瀬良がここに来た時点で目視できていた者たちが武器を構えたことだろう。見る限り、ここにいる教徒はこの教会を拠点として活動しているロシア成教の一握りのようだ。瀬良はしばらく黙りこんで、

「……なら、貴様らにはもう用はないな。反乱分子をいつまでも放置しておくほど、僕達は愚直じゃない」

次の瞬間、臍脂の背中から青白く発光する12枚の翼が出現した。発生した衝撃波が、古めかしい教会の堂を薙ぎ、通路を挟むように並んでいた椅子が吹き飛ばされ、壁に当たって碎け散る。威嚇の一撃は、対して効果を得られなかった。修道服の戦士は皆各々の武器で身を守り、破壊の渦をやり過ごしている。瀬良は陰の中でニヤリと笑った。

陰った瞳が、深紅の輝きを宿す。

刹那、瀬良に向けオレンジ色の閃光が進った。あれも魔術によるものだ。

彼は身を翻すこともなく、翼を広げたまま佇んでいる。が。

放たれた閃光は、瀬良の1メートルほど手前で跳ね返り、解き放った修道服の腕を貫いた。

『リフレクター反射物質』。

第二の『シークレットナンバー非公式の超能力者』、瀬良惺皇が持つ唯一無二の超能力。

どよめく集団に彼は余裕の笑みを浮かべて、

「どうした？まさか、僕が貴様らの扱う『法則』に対応していないとでも思ったのか」

ははははははつ、と彼は笑う。そして、その能力の脅威を知覚した彼らは迂闊に動くことができなくなる。瀬良は手袋をしていない左

手で、神父らしい男の首を掴んだ。

「確かに、こちらの世界に来た時点では、僕の力は貴様らには及ばなかった」

「うつぐつ……!？」

信じられない光景だった。瀬良は日本人の中では背の高い方だが、相手は2メートル近い大男。それをねじ伏せるように一瞬で床に叩きつける姿は、奇妙としか言い様がなかった。

「だが今は違う。フィアンマから譲り受けたこの『霊装』のお陰でな」

「なんっ……だとっ!？」

首を絞める力が強くなっていく。男は呻く中、瀬良がもう一方の手で示した胸元に目を向けた。すると、背後から絶叫のような声が聞こえてくる。ダダダダダッ、という大理石の床を走る音が耳に届く。横目で見ると、そこには得物を手に一斉に襲いかかる教徒たちの姿があった。瀬良は冷淡な瞳でそれを見ながら、青白い翼をわずかに動かす。

すると、襲いかかってきた教徒たちは見えない壁に跳ね返され、振り下ろした得物に自らの骨を砕かれた。ハンマーのようなものを持っていた者は、その強靱な塊に押しつぶされるように胴の骨を破砕されている。悲鳴が反響する中、神父らしい男は目を見開き、

「貴様まさか、『憎悪の核』を……!？」

出てきた答えに、瀬良は凶悪な笑みを浮かべた。彼は頷いて、



「便利だよな。あの程度の代償で、墮天使の力を『拝借』できると  
いうのは」

「貴様それは、神の御心に……ぐっ！！がぼあっ！！ぼああああ  
ああああああああああああああっ！！？」

その刹那、男の体は中から裂けるように弾け飛んだ。生々しい臓  
物が大理石の床を滑り、血の筋があちこちに出来上がる。瀬良はゆ  
っくりと立ち上がり、祭壇の傍で縮こまっている男達に微笑んだ。  
背後からしていた悲鳴は、目の前に広がった凄惨な光景にかき消さ  
れたかのように止んでいる。

瀬良は翼を閃かせ、

「愚かな真似をしたものだ。僕達に齒向かいさえしなければ、『新  
世界』を目に出来たかもしれないものを」

瞬く間に、祈りをささげる場は悲劇の舞台へと変化した。

どうも、櫻井です。

ようやく最終章、第十章に突入しました！ちゃんと十章が最終章になって良かったです。本格的に科学と魔術の『交差』する章ですからね、十字架は魔術の代表的なオブジェですし（笑）

というわけで、今回は20巻と21巻の跨ぎのお話です。ここから先はほぼオリジナル展開になります。原作にも少し介入しつつこちらのストーリーもこなす、相変わらずの手法で行かせていただきます！！

接続回路サイドは羊皮紙の一枚から『生贄』のヒントを発見、瀬良サイドではロシア成教の一部の謀反を一蹴する瀬良を描かせていただきました。

今回で瀬良が一番のチートであることを発覚させました。もっとも見返りは割と大きいのですが。ここで示す『墮天使』が誰であるかは、原作を全巻読まれている方には推測がつくかと思えます。

それでは始まりました最終章、次回もお楽しみに！

10 - 2 冷淡

魔神ノチカラ

(前書き)

「最近はお番が増えて嬉しいな」

フィアンマの傀儡となった学園都市最高峰の超能力者(レベル5)  
瀬良 惺皇

「俺も出たいところなんだがな。こんな姿じゃ晒すに晒せない」

学園都市第二位の超能力者(レベル5)

垣根 帝督

右方のフィアンマはその赤い瘦身を翻し、ロシア国内のとある基地へと戻ってきていた。

エリザリーナ独立国同盟で、彼は望むもの三つのうちふたつを手に入れていた。三つ目も手に入れようと思えば手にできるものだったが、あの『右手』は下手をすれば折角手に入れた水脈を干からびさせてしまう可能性を孕んでいる。

三つ目の回収はまた後で行えばいい。彼はあくまでも余裕をもって優雅な足取りで堅苦しい基地の廊下を歩いていた。すると、手の中の本の頁の一部がわずかな光を発し始めた。フィアンマは動揺することなく、慣れた仕草でそれを開いた。開いたページは何のことはない、ありきたりな文章の綴られた頁。ただほんのわずかに、それはオレンジ色の光を帯びている。それを見るや、彼は口を開いた。

「セラか。何か問題でも起こったか？」

『「エデンの蛇」の管理を任せておいたロシア成教の一派が謀反を企てた』

本からは、若い少年の声がした。フィアンマは表情を変化させることはない。少しの沈黙を挟んで、

「確か、ウラルの研究施設で村民の脱走を許したんだっただな。その者達の回収はできたのか？」

『奴らは回収できたと言っていたが、探索術式を使ってもこの近辺には見つからない。おそらく僕を欺くための虚勢ハッタリだろうな』

「なるほど」

まあそういう者が出てくることも想定内ではあった。協力関係にあるとはいえ、ローマ正教とロシア成教とは考え方からまず違う。今は利害が一致しているに過ぎないのだ。そして彼の使役する少年はもとはと言えば学園都市製の超能力者。この存在を知って疑念を抱かない者はいないだろう。まあそんな些細な反抗も、優秀な駒の代償と思えば安いものである。

「ならその裏切り者共を贄にしまえばいい。6人足りないと言っていたな。上から順に召還術式に『天使の力』テレスマごと放り込んでやれ。端数はお前の好きにしろ」

そこに躊躇いはなかった。今となつては身内である者達が相手でも、フィアンマが躊躇することはない。術式の向こうの少年は、『ああ、わかった』と素っ気なく答えた。すると頁の発光が止まり、相手の声も聞こえなくなる。フィアンマはそれを確認するとゆっくと本を閉じ、整った唇をカーブさせた。

瀬良は着実に『憎悪の核』の力を操れるようになっていた。後少しだ。後少しあの器に核が馴染みさえすれば、彼を呼び覚ますことができる。

かつて『神ミカエルの如き者』に敗れ地上に墮ち、体を失い力の塊となつたあの存在を。

( …… 『ルシフェル光を掲げる者』 )

かつて神の大地で三分の一もの天使を引き連れ、神に抗った天使の長。結果として彼は敗れたが、その圧倒的な力はフィアンマ達『神の右席』の司る大天使にすら匹敵する。

訳あって使いようのなくなったそれが再び目覚めた時、フィアンマの勝利は確定するのだ。

第三次世界大戦は、今のところ瀬良惻皇の活動により五分五分の状態を維持している。

後は『ベツレヘムの星』と『エデンの蛇』、そしてたった今手に入れた『鍵』で矛を目覚めさせれば戦局は一気に変化する。

そうして彼は再び本の形をした霊装を開いた。きつと軍の被害に不安を隠せないであろう同志に、こちらの持つ『隠し玉』の存在を教えるために。

\*

「バッテリーは……こんなモンか」

石でできた一室で、アクセラレータ一方通行は目を覚ましていた。今はもう、学園都市からまともに充電する機会がなかったバッテリーを補充し、次の行動を起こそうとしているところである。石造りとはいえ、この一室には後付けの生活用品が取り付けられたり置かれたりしてお

り、特別不便に感じることはない。

もつとも、こんな歴史映画に出てきそうな部屋に文明の利器が並んでいるという光景には不自然さというか不釣り合いな印象を受けるのだが。

(……アイツらはどこ行っただ?)

あの無能力者の少年……いや、ここまで来るともはやそんな言葉は彼を表さない気もするが、確か彼に殴り飛ばされた後、一度目が覚めた時に打ち止めと接続回路の姿が見えたのだ。

しかし、今一方通行の居るこの部屋に二人の姿はない。こちらが見えているのかも怪しい迷彩服の男女が、せわしなく扉から扉を行き来している。一方通行から見える『人間』は、そんな見ず知らずの人間だけだ。全員がロシア人。

エイワスから聞いた、エリザリーナ独立国同盟の人間達である。

一方通行はしばらく考え、立ち上がってドアノブに手をかけた。しかし、一方通行が開けるより先に、ガチャツ、と勢い良く扉が開く。

「うおっ」

目の前に出てきたのは、打ち止めとよく似た妹達の顔だった。一方通行は目を見開くが、その前に妹達の抱く毛布に目がいった。

打ち止めだ。

「目え覚めたんだね。いやはや誰かさんとそっくりな顔が目の前に出てくるから心臓止まるかと思ったよ」

シスターズ  
妹達は軽快に笑いながら、部屋にあったベッドの上に抱えた打ち  
止めを寝かせ、丸め込んでいた毛布を小さな体に被せる。そんな姿  
を見て、一方通行は眉をひそめた。  
アクセラレータ

「オマエ、何者だ？妹達の系列らしいが」  
シスターズ

見る限り、その体型は妹達というより番外个体に近かった。かと  
言って、彼女とは表情や雰囲気も大分違う。底からの悪意を表現し  
たような番外个体よりも、オリジナルの御坂美琴に近いように見え  
る。ただ、ライダースーツのような装束の色は番外个体と共通して  
いるようにも見え、まるきり関係ないとも言い難い。  
シスターズ

妹達は「んーとねー」と頬のあたりに指を当て、

「接続回路宛ての番外个体と違ってくれればいいかな。名乗ってお  
くと、ミサカ00000号『欠番个体』」  
フルチャーニング

「欠番个体だと？」  
フルチャーニング

それは確か、妹達の試作型だったはずだ。接続回路宛ての番外個  
体ということは、彼女も番外个体同様学園都市の送り込んできた刺  
客と言うことになる。  
シスターズ

わざわざ作られた番外个体よりはマシとしても、自分たちに妹達  
をそれぞれ刺客に送り込んでくるとは。虫酸が走るが、ならばそれ  
よりも気になることがある。と、一方通行が尋ねる前に。  
アクセラレータ

「言うておくけど、今は別にあんたや接続回路に敵意なんか抱いて  
ないからね」  
インターフェイス

あっさりと、欠番个体は言うてのけた。一方通行は少しの間黙り  
アクセラレータ



込んでいたが、フルチューニング欠番個体の体を見て察知した。

その体が、五体満足そのままの形で、自由に動いていることを。

フルチューニング欠番個体は笑って、

「あいつには救ってもらっちゃったんだよねえ色んな意味で。ってわけで、一応ミサカはあんたらのミ・カ・タ。いきなり銃口押し付けるみたいなのは真似はしないで欲しいかなー」

「……インターフェイス接続回路はどこに行った」

あっさりと、アクセラレータ一方通行は話の腰を折った。早い話が、インターフェイス接続回路は無傷でこの欠番個体を助けたということだ。色んな意味で、という口ぶりから察するに、単純な『懐柔』とはまた違うのだろう。

確かにこの少女のことも気にはなるが、敵ではないことさえわかれば今はいい。今の彼には、そんなことよりも重要な目的がある。

「あのなんかよくわかんない羊皮紙持つてここの責任者のヴァチエスラーフって人の部屋へ行ってるよ。なんか聞きたいことがあるんだってさ……って、いないし」

フルチューニング欠番個体の声を置き去りに、アクセラレータ一方通行は部屋を後にした。

\*

瀬良悧皇は殺戮を行った教会の中で、ただ一人祭壇の前に立っていた。

辺りからは死臭が漂い、わずかに蠢く音すらしない。

瀬良はそれらの死体を一瞥して、小さく息を吐いた。どれもこれも、綺麗なまま果てている者は一人としていない。腕が肩から溶け落ちている者もあれば、引き裂かれた腹から臓物を撒き散らしている者まで、死の形は様々だった。人によってはこの血生臭い光景を見て吐き気の一つも催したり、一生のトラウマとなる者もいることだろう。

瀬良は至って平静だった。

むしろ、力の加減について冷静に分析しているくらいだ。

胸に埋まる偽りの心臓、『憎悪の核』の扱いに関して、瀬良は完全に理解してはいない。

精々基礎となる『リフレクター反射物質』の強化に用いたり、通信術式や探索術式を行使するくらいのものだ。外の世界で見つけた魔術と言う名の法則には、もっとはるかに強大で驚異的な力が込められていると言っのに。

「……奴の翼を引き裂くには、さらなる力が必要だ」

ぼつりと、瀬良は血しぶきを浴びた壇上の銅像へと呟いた。司教か何か知らないが、宗教において高位に属しているであろう男の像。瀬良はこんな人物は知らないし、興味もない。彼は像に触れ、静かに唇に笑みを刻んだ。左半分に火傷の走る端正な顔が、劣悪な感情を顕していく。

振り返り、死体すべてを視界に入れ、臙脂の腕を尊大な調子で広げると、彼は再び瞳を深紅に輝かせた。異界の法則を解き放つ際、彼の意志とは関係なく発現する現象だった。『ダークマター未元物質』がその力を解放した時、三対の翼が出現するのと同じように。

燃えるような紅蓮の瞬きが、『憎悪の核』の解放を示す。

刹那。

フォンツ、という浅く甲高い音が、連続して聞こえてきた。

それは円陣だった。

血塗られた大理石の床に、数十個の円陣が浮かび上がる。

長方形の部屋の中で、死体すべてを包み込むように円陣が円陣を作る。やがて生まれた巨大な円陣に、外側から内側へと細かな模様が走る。ゲームか何かで出てくる魔法陣のようなそれは、それよりもはるかに複雑で難解な紋様を刻み、やがて夕日のようなオレンジ色の輝きを発していく。陣の中心で、瀬良は笑みを絶やさなかった。思った以上にスムーズに事が進んでいることを、感覚的に感じ取る。

魔術の行使。

やはり払った代償の大きさに足る、いや、それ以上の効果と言っても過言ではない。

ゆつくりと、死体の中から何かが這い出てきた。それは血や膿といった生々しいものではなく、神秘的とすら形容できる光球だった。それは導かれるように、光の尾を引いて陣の中心に立つ瀬良の掌へと集まっていく。

陣の光に照らされればやけたオレンジ色に染まる礼拝堂。舞い降り

る天使のステンドグラスを背に、墮天使は抽出した『材料』を興味深そうに眺めていた。

(……還る前に回収できて良かった、と言っべきか。ともあれ、これで『戦女神』ヴァルキユリアの材料は揃ったな)

フィアンマの計画の片棒を担ぐ『兵器』。それがこの『材料』という名の贄を以て生まれ出る切り札。

しばらくして、展開した円陣は氷が溶けるような不規則さで消え失せた。

瀬良の掌の『材料』と共に。

赤い輝きは瞳から消え、背中の翼も根から先端へと消えていく。残ったのは、翼を広げた悪魔ではなく、臙脂のコートを着ただけの少年だけだ。

死体の転がる礼拝堂から、瀬良は何も言わずに去っていった。

どうも、櫻井です。

またしても更新遅延申し訳ありませんでした>(一一)<  
原作の展開の整理に時間がかかってしまつて、ずいぶん遅れた更新となつてしまいましたね。お待ちいただいていた方々にはお詫び申し上げます。

さて、敢えて言わせていただきますが、この先の展開は作者自身その都度臨機応変に流れを変えていくつもりですので予想外です。  
オリジナルの戦闘シーンだけでも数が多いので、またしても浜面VS麦野は割愛、上条さんVSフィアンマもおそらく入りがあるかどうか程度だと思えます。描写しない点は今まで通り、原作まんまなんだなと思つていただければ結構です。

えー、今回は瀬良がどこまで魔術的に進んでいるのか、本作でも準主役級の扱いをさせていただいている一方通行の目覚め、そして最終戦に向けての伏線をばら撒いた回でございます。

瀬良の魔術は特殊な方法で行つているのでステイルたちのような魔術名はありません。その謎は後々解き明かしていきますのでお楽しみ。

今はまだおとなしい話が続いていますが、もう一、二話すると最後まで慌ただしい流れになります。

それでは次回、お楽しみに^^

10-3 糸口

拓カレル可能性

(前書き)

「オマエがガキの世話できるってのも意外だな」

学園都市最高峰の超能力者(レベル5)

インターフェイス  
接続回路

「そりゃ将来のためだしねえ」

シスターズ  
極限まで改造された最強の妹達

フルチューニング  
欠番個体

「そのくらいミサカにだってできます、とミサカは対抗心を燃やしてみます」

シスターズリアルナンバー  
妹達認識番号10412号

エクストラローラ  
多重観測

インターフェイス  
接続回路は施設の責任者ヴァチエスラーフの部屋で、古ぼけた数十枚の羊皮紙を広げていた。

テーブルを挟んで反対側に立つ中年の男は、広げられた羊皮紙を見て眉根を寄せる。

「……先に言っておこう。私は単に憶測の話しかできない。きみの望む『答え』そのものと思わないように」

ヴァチエスラーフはそう、申し訳無さそうな調子で言った。耳に入ってくるロシア語の連なりは、鼓膜に届いて数瞬後には日本語の形で脳に届く。接続回路は背の高い男の目を見据え、

「真実は自分で探す。だがこつちのことはサツパリだからな。些細な情報でも構わない。話せ」

きつぱりとそう答えた。ヴァチエスラーフは「わかった」と小さく頷いて、

「君はこの図から、意味はわからずともどういった書類なのかくらの予想はついているか？」

「ああ、そいつは」

「取扱説明書みてエなモンだろ？」

ふと、背後から声がした。振り返ると、そこには接続回路と瓜二つの少年の姿がある。彼は接続回路の隣まで来て、テーブルの羊皮

紙に目を落とした。あまりによく似た二人の姿に、ヴァチエスラーフは目を丸くしている。

「……双子、なのか？」

呆けた言葉が、唇から漏れる。二人はほぼ同時にため息をついて、

「「こいつの意味は？わかるのか」」

一様にヴァチエスラーフに尋ねた。彼は「あ、ああ」と動揺した調子で何度か頷き、

「これは多分、魔術の変換条件みたいなものリストだろう。ローマ正教式の術式をロシア成教式の仕様で実行するためには、どことどこをどのように置き換えれば良いのか、という内容だと思う。……まあ、私は専門家ではないからどんな術式の発動法を伝達しようとしているかまでは分からないな」

すらすらと私見を口にするヴァチエスラーフだが、インターフェイス接続回路と一方通行はいまいち要点を掴めていなかった。

ローマ正教というのは、ロシア成教と同じような組織として定義すればいいが、『魔術の変換条件』というものがどうにも理解し難い。仮説を立てるとするなら、この世界にある『異なる法則』が『魔術』に当てはまりそうだが……。

そんな二人の反応を見てか、ヴァチエスラーフは「すまない」と一言言い、

「さっきも言ったが、私は詳しいことはなにも知らないんだ。魔術なんてものは、小さな火をぶつぶつ呟いただけで出たくらいのも



のしか見たことがない」

待て。

制止の声が出ることはなかった。二人の頭には、小さな混乱が訪れていた。

今この兵士の言っていることは、何かおかしい。

ローマ正教やロシア成教のような固有名詞は、その意味を知らない二人がわかるはずもない。

術式や変換条件リストと言った発言は彼らの使う公式と考えることもできる。

しかし、呟いただけで火が起こる？

インターフェイス  
接続回路インターフェイスの生きる世界の常識では、火とは燃焼という名の現象の一部だ。一定以上の熱量を特定の物質に集中させることで発生できる現象だ。自分が今立つ『世界』の法則は、そんなにまで学園都市の常識からかけ離れているというのか。対して、ロシア成教のことすら知らない一方通行は接続回路インターフェイスよりも疑問点が多いようだった。

「……その『魔術』について、詳しい知識があるやつに心当たりはないか」

インターフェイス  
接続回路は話を進めることにした。『わからない』と言っている人間を問い詰めても仕方ない。今は一分一秒が惜しく、少しでも多くの情報を手にしたい時だ。

グвачェスラーフは難しい顔をして、

「生憎魔術師はここにはいないんだ。エリザリーナ様ならわかるだろうが、あの方は今……」

「今？」

エリザリーナ、という名前から察するに、この連合国家を生み出すきっかけになった人物なのだろう。訊き返され、ヴァチエスラーフはしばらく迷うように視線を泳がせてから目を合わせた。

「今は野戦病院のベッドの上だよ。魔導師として優秀な魔術師を何人も排出したあの方なら、これの解読も容易いんじゃないかな」

魔導師やら魔術師やら。

あるなら辞書のひとつでも奪い取りたいぐらいに、訳の分からない単語ばかりだ。エイワスの言う解決の糸口に辿り着いてもなお、糸口から答えまでがひどく遠いことに気付かされた気がする。文脈から、何となく魔導師が教師、魔術師が生徒、のような関係性かと予想は立つものの。

「……そのエリザリーナ以外で羊皮紙を解読できるヤツは？」

アクセラレータ

一方通行が質問した。今は単語の理解よりも解決までのプロットを確立させる方が先と判断したのだろう。ヴァチエスラーフはふるふると首を左右に小さく振り、

「すまない。ウチに所属してる魔術師たちは実戦使用だけを想定した訓練を受けているから、こういった専門書みたいなものには多分対応できないだろう。正確な解読を望むなら、エリザリーナ様が目覚めるのを待った方がいい」

確かに間違つて解読されるよりは多少時間はかかっても確実な方を選ぶべきだろう。アクセラレータ一方通行と顔を合わせ頷く。

「眠り姫はいつ起きる？」

「順調に行けば一時間から三時間程だ。それでエリザリーナ様の全身麻酔が抜ける。……とはいえそれも術後だからな。文字を目で追うくらいが限度だと思う」

となると、エリザリーナを頼つて解決する方法を採れば最低でも二時間以上はここで不毛に消費するわけだ。それで全面解決するならまだしも、その作業もまだ通過点でしかない。火の件と同じように、内容を口にするだけで打ち止めの呪いが解けるならそれもいいと思うが……。

「あまり長居するつもりはなかったんだがな。どオやらしばらく世話になりそうだ」

アクセラレータ  
一方通行が言った。

「それについては構わないが。それより、君たちの連れの小さな女の子は」  
「そのためには」

アクセラレータ  
一方通行の言葉と共に、瓜二つの二人は拳銃を引き抜いた。烈風で吹き飛ばした木の扉の裏に現れた人影の足を、問答無用で撃ち抜く。突然の行動に、ヴァチエスラーフは言葉を失っていた。接続回路インターフェイスは部屋から出て、足を撃ち抜かれた兵士に屈み込む。

「スパイだよ」

絶句するヴァチエスラフに一方通行は静かに告げた。ヴァチエスラフは目を瞬いている。

「他にも何人が居たはずだ。今からそいつらを炙り出してやる。ガキのベッドの料金代わりにな」

言いながら、一方通行は接続回路が屈み込む廊下へと歩き出した。慌ててヴァチエスラフが追ってくる。呻く男を気絶させ、接続回路はその懐から何かを取り出した。出てきたのは、何かの小型端末とバラエティ番組でタレントの首もと辺りに付いているようなマイク。ケーブルで繋がれたそれらを見て、接続回路は目を細めた。

「……通信機の出来は大したモンじゃねえ。この分だと、外にはもつと高性能なアンテナ装置なんかを持った連中が待機してるはずだ」  
「となると、今は慌てて逃走準備中ってトコか。あるいは玉砕覚悟で『ロシアのために』なる行動を起こすかもしれねえな」

「スパイの炙り出しは俺がやる。オマエは外の連中を頼む」

「ああ」

作戦会議を早くも済まし、二人はそれぞれの方向に走り出した。すると、通信機に向かって指示を飛ばしながらヴァチエスラフが接続回路の方に走ってくる。

「どうしてわかったんだ？さっきの奴はおそらくK B GやC I Aのような大規模組織型のスパイじゃない。公式記録に載れば国際問題

になるような仕事を引き受けるタイプのスパイだ。君みたいな日本の若者が見分けられるようなレベルじゃない」

「そうかよ。じゃあ俺が特殊とでも考えてくれりゃいい。通信機を持つてるなら仲間にスパイの侵入と出入り口全ての封鎖を命令しろ。……調オ度、今はガレージエリアに駆け込もオとしてるみてエだからな」

一瞬だけスイッチを押して、インターフェイス接続回路はスパイの配置を確かめた。さっきの通信機に搭載されていた電子回路と同じ分子配置のものに絞って検索を掛けたのだ。サーチにのみ演算を集中させれば、半径2kmほどまではカバーできる。

「なんだって？……わかった」

これでいい。さっきのスパイを見つけたことで、この男はこちらを信用しつつある。こちらが魔術と聞いてわけがわからないように、向こうも超能力と聞いたところで理解できないはずだ。今は単なる勘のいい日本人で充分。

(いや待て)

さっき浮かんできた配列図面を思い出して、インターフェイス接続回路は目を見開いた。

外に出ていく者に注目していたからすぐに気付かなかったが、確か今。

立ち止まり、インターフェイス接続回路は首のスイッチを押した。数値化された図面が頭の中に広がり、無数の情報が整理された形で視界を埋め尽く

す。

それを認識した瞬間、彼はぐるりと踵を返した。

（クソツたれが……寄りにもよって打ち止めを寝かせておいた部屋ラストオーダーに！）

彼は能力使用モードのまま走り出した。

ゲージ粒子によって伝達される力の割合を素粒子の組み換えによって変換し、インターフェイス接続回路は一切の風を使うことなく浮くように走り出す。ウラル山脈での一件を経て考えついた新たな移動手段だ。

あつという間にヴァチエスラフを置き去りにして駆け抜けていくインターフェイス接続回路。

部屋の前までたどり着くと、彼は容赦なく破るように、木製の扉を開いた。

どうも、櫻井です。

今回は原作の流れに接続回路を加えた形で進行しました。本作での羊皮紙は原作通りのものと以前出てきた炙り出しのものと二種類あります。接続回路はその炙り出しの方について説明していくことになりましたね。そして原作ではあっさりスパイを見つけ出してそのまま一掃を始めていましたが、折角なのでスパイの下りを拡大させて次回もお送りしたいと思います。

さて、今回出てきたゲージ粒子ですが、これは垣根の言っていた物質を構成する素粒子クォークとレプトンとは異なる、力を伝達する素粒子です。今回接続回路が行ったのは、自分の脚と地面との間で起こる素粒子の相互作用を変換し、かかる力のベクトルを可能な範囲で操ったわけです。一方通行と違うのは生まれた力の大きさそのものは操作できないという点ですね。接続回路の場合はその場にある素粒子をあくまで操るだけですので、一方通行のように莫大な力をすぐに生み出すことはできないのです。

ある意味劣化『一方通行』と言えますね。劣化なら『一方通行』も『自分だけの現実』の内と言うことです。後付けなのに偉そうに話して申し訳ない(汗)

それでは次回もどうぞお楽しみに！

10-4 道筋

約束ノ責任

(前書き)

「よもやこんなところで出番が来るとは思いませんでした、とミサカは素直に喜んでみます。しかし、何がどうして嫌な予感しかしないのでしよう」

シスターリアルナンバー  
妹達認識番号 10777号

ミサカ 10777号



「フルチューニング  
欠番個体ツ！！」

少女の名を叫び、インターフェイス接続回路は破らんばかりの勢いで簡素な扉を開いた。

あまり広くはない一部屋に、茶髪の少女二人の姿はなく。代わりに扉を開いてすぐの床には、何人かの兵士が横たわっていた。彼は弾かれるように兵士の一人の懐を探る。

スパイの持つていた通信機はない。撃たれているところを見ると、ラストオーダーフルチューニング打ち止めなり欠番個体なりを人質にとろうとしたロシア側の人間を止めようとしたのかもめない。全員の頭が向いている方向が同じことを鑑みるに、彼らは全員独立国同盟側の人員らしい。彼はこめかみに指を当て、

(……反応はまだ生きてる。逃走を始めたか)

感じ取るや、インターフェイス接続回路は窓を破って白銀の大地に降り立った。白が大きく占める視界の隅にヴァチェスラーフらしき人影が映るが、インターフェイス接続回路は気に留めなかった。素粒子操作に加え周囲の空気を背後で圧縮し解放する。

瞬く間に、灰の装束に身を包む少年は弾丸のような速度で銀世界の中へと放たれた。

\*

フルチューニング  
欠番個体はHq・R2に乗って雪上を滑走していた。

彼女の進む先には、一台のオフロードバギーが走っている。汎用移動兵装であるHq・R2は水上だろうが雪上だろうが関係ない、地形から一切の影響を受けない代物だが、前を走る車も局地仕様なだけあって結構な速度でこわこわした雪の上を軽々と進んでいく。バギーとの距離は50メートルもない。一応今は能力を使って電波攪乱を行っているため、増援が来ることはないはずだが…。

（スパイってことは、これきつと帰り道なんだよね。行った先でどんな目に遭うか、想像はしたくないなあ）

もしも自分にミサカネットワークとの接続能力があるとするれば、バギーに連れ込まれた打ち止めラストオーダーに作戦の一つも伝えることができただろうか。もしもそれができれば、『今からちよつと車がスピンすると思うからちゃんと捕まっとしてね』くらいのことと言えるだろう。もっとも、今の打ち止めラストオーダーはそれを言われて実行する事はおろか、伝わるかどうかすら危ういのだけだ。

「ッー!!」

瞬間、欠番個体フルチューニングのすぐ横で小さな雪の柱が立った。

見れば、バギーの後部座席に座っている男二人のうち一人がこちらに銃を向けていた。

もう一人は、毛布からはみ出した首根っこを捕まれた打ち止めラストオーダーに黒光りする銃口を突きつけている。彼らは暗に告げているのだ。

『これ以上追跡を続けるならこいつを撃つ』と。

打ち止めラストオーダーを拉致したのは、当然人質として使うためだろう。彼女

ぐらいのサイズなら足枷にもならず連れ去るにも効率がいい。対して、人質を使われる側としてはデメリットしかない。子供を盾に取る行為が卑怯と言われるのにはそういった理由があるのだ。

やろうと思えば、今からでも機体に装備された機関銃で動きを止めることもできるが、今の打ち止めの状況を考えると危険としか言いようがない。

刹那。

ゴオッ！という烈風が、欠番個体のすぐ横を通り過ぎた。それは雪を巻き込んで吹き飛ばし、バギーの後ろから襲いかかる。視界を遮る氷の塊。次の瞬間、それは眩い閃光に貫かれた。

「ぐおおおおおおおおおおおおあああつ！！？」

と同時に、前方から聞こえてくる悲鳴。目を凝らすと、打ち止めを持ち上げていた男の腕から煙が漏れているのがわかる。それに気付くのとどちらが先か、再び生まれた烈風が欠番個体の横から車上へと吹き荒び、次の瞬間にはどこからか現れた少年が打ち止めを抱きかかえ、斜めに弧を描いてバギーの真上を舞っていた。

インターフェイス  
接続回路だ。

彼は片手でしっかりと少女を支え、バギーのボンネットへと着地する。ベコンツ！という金属が凹む音を立てて、彼は悪魔のような形相を車に乗る三人へと向けた。彼らからすれば、こんな芸当をやつてのけた人間はまさしく悪魔に見えたことだろう。それとも、こ

ちらの世界でいう『魔術師』か何かか。

どちらにしろ、この状況から彼らに生じる感情は決まっている。

「ひいいいいいいっ!!!」

恐怖だ。

恐怖に取り憑かれた人間は、それを排除しようとはあらゆる可能性を無視して行動する。

欠番個体フルチューニングに向けられていた銃口は、震えながらインターフェイス接続回路へと向けられた。狙いをつけたかも怪しいほどの短い時間の間に、銃声が迸る。

しかし、飛び出した弾丸は少年の体より数十センチ手前で跳弾し、あつという間に車外に飛び出した。運転手の男は必死にハンドルを左右に切って振り落とそうとするが、灰髪の少年は動かない。それどころか、彼は左腕に装着した伸縮杖を展開し、グリップにつけられた引き金を引く。

飛び出した弾丸は、正確に後部座席の男の銃を弾き飛ばした。そして男が飛ばされた銃の行方を目で追った時には、その顔面に向かって白い影が迫っている。

「げっぽあっ!!!?」

情けない悲鳴とともに、男の体は宙を舞った。ぼさりと雪に埋まる音と重なって、Hq-R2が車体の左側に着地する。完全に併走している欠番個体フルチューニングは、そのまま強烈な電磁波を展開し、バギーの制御を奪い取った。

数秒と待つことなく、悪路に最適なカスタマイズをされたオフロードバギーは純白の雪原に横転した。

＊

(間に合ったか)

綺麗に着地したインターフェイス接続回路は、腕の中の打ち止めを見て安堵の溜め息を漏らした。彼は足首程まで積もった雪の上に杖を立て、横転したバギーの様子を窺う。

上手く吹き飛ばしたお陰で、乗っていた三人はほぼ無傷で気絶していた。こんなことをする輩なのだから腕の一本二本折っても構わないと思うが、彼らの持つている情報も無視はできない。極力傷は付けずに持ち帰った方がいいだろう。

「……ミサカももつとサイズが小さかったらなあ」

「あん？」

顔を上げると、どこかつまらなそうな表情のフルチューニング欠番個体が。こちらも無事だったようだ。

「にゃーんでも。相変わらず頼もしいことで」

「……連れ去られる前に何とかできてりゃ良かったんだがな」

自嘲気味に、接続回路は呟いた。事前に防ぐことができなかったことが情けない。他の何よりも妹達の身シスターズの安全と平和な生活を守ろうと掲げているのに、これでは本当に一生守りきれぬかも怪しいものである。インターフェイス接続回路は小さくため息をついて、

(……こいつらは撤退命令に焦りやがった拍子抜けのクス共だが、施設の方にはまだ息を潜めてやがる奴が居るだろうな)

当初の予定通り、それらの炙り出しを行う必要があるだろう。

「神経質すぎるんじゃないかな」

「？」

不意に、フルチューニング欠番個体が呟いた。いつもと少し雰囲気が違う。ウラル山脈で戦った時のようなダウンナーな印象とも少し違う、普段の言動からすれば数段大人らしいというか、容姿に見合った雰囲気だ。彼女は柄にもなく諭すような笑顔を浮かべ、

「今回その子が連れ去られた原因はミサカにあるし、あなたがそんなに気に病む必要はない。原因のミサカよりあなたの方が凹んでるっていうのも変な構図だよ」

「大口叩いた身としちゃそうも言ってもらえないんだがな」

言った言葉の責任は取る。悪党を自称するなら最後まで悪党を、英雄を自称するなら最後まで英雄として。そうあるべきだと考えるようになった以上、些細なミスも気にかける。結果的に無事助け出せたとしても、一歩間違えば最悪の事態になっていたかもしれない。

「だったら返上する？あなたの覚悟はミサカの頭の中にしかない。取り消しなんていくらでもできる」

「んだと？」

あつさりと言う欠番<sup>フルチューニング</sup>個体に、接続回路は眉をひそめた。

「『一生かけて守る』だなんて約束、本気で果たさなくちゃいけないみたいに考えてるみたいだけど。あなたはそれを守れなかったからって、ミサカが『約束破った』って呪詛を聞かせると思う？よっぽど腐った人間でもなければ、そんなことは言わない。完全完璧なんて求めるのがおこがましいことぐらい、誰だってわかってる」

姉のように微笑みながら、欠番<sup>フルチューニング</sup>個体は言葉を連ねていく。

「約束なんてのは信じることに価値があるんだよ。特にあなたが言ったようなことは。それに実現もできてる。ミサカも打ち止め<sup>ラストオーダー</sup>も、あいつらだって死んでない。ミサカ達の命を守り切って、尚且つ敵さんまで生きたまま回収できる状態にするだなんて、逆に評価されるべきことだと思っけどね」

「……………」

どうやら、また自分がわからなくなっているらしい。

悪党なのか何なのか、よくわからない存在になっているのが、今になって分かった。

悪党のころの自分なら、この程度のことをクヨクヨと悩んだりはしなかったはずだ。必ず何かを悩んでいたが、少なくとも、結果がついてきていて悩む事はなかったはずだ。

拘りすぎている。

上条の姿を見て、少しでも彼に追いつこうとしている。

そんな子供っぽい性分が、いつの間にか出てきていたのかもしれない。

一人の人間としてのアイデンティティではなく、自分よりも上に立つ者を目指そうと。

「……やれやれ」

インターフェイス  
接続回路は小さく漏らした。彼は舌打ちしながら、フルチューニング  
欠番個体から目を逸らす。

「こんなトコに来てまで、夕凧みてえな話をされるとはな」

「夕凧？」

どうやら少し元気を取り戻したらしい少年を見て、フルチューニング  
欠番個体は声のトーンを少し上げた。切り替えが早いのが彼女の長所のひとつだろう。インターフェイス  
接続回路はザシザシと雪の上を歩き、

「学園都市でちっと世話になった研究員だよ。オマエが言ったみてえなことを恥ずかしげもなく言いやがって、頼んでもねえのに色々世話を」

瞬間、インターフェイス  
接続回路の緋色の瞳に何かが映り込んだ。彼はそのまま固まって、目を見開く。

彼の視界に入り込んだもの。

それは、バズーカのような装備を手にした十数体のワードスーツ  
駆動鎧の編隊だった。



驚く理由はそれだけではない。

そのいずれもが、自由自在に空中を飛行しているのである。

「……なんかヤバそうなのがいるけど？」

それを見て、フルチューニング欠番個体が思わず漏らす。インターフェイス接続回路は目を細め、

「決まってる。一人残らずスクラップだ」

命を守るために命を穿つ。

それが、一人の少年の生きる道。

\*

瀬良は雪に閉ざされた軍事基地に足を踏み入れていた。ゆっくりと、まるで貴族の館に設けられた雄大な庭園を歩くように優雅な歩調で、威圧的な空間を闊歩する。そんな彼の周囲には、夥しい血が広がっていた。血だまりの中には無数の人間が倒れており、まだピクピクと痙攣するものもある。

（この分だと、僕は死亡扱いにでもされているのかもしれないな）

浴びせかけられる銃弾は、瀬良の手前で倍速になって跳ね返され、放った本人を容赦なく蜂の巣にする。細かい計算など行っていない。

『リフレクター反射物質』という絶対的な壁ひとつで、ありとあらゆる攻撃は

無意識の反撃へと変化する。故に、辺りで突つ伏している下等生物からすれば『戦闘』であつても、瀬良からすれば単なる『移動』に過ぎないのだ。

彼が進むのは、ロシア国内に存在する学園都市の軍事基地だった。念入りに隠蔽されていたこの場所も、フィアンマの傀儡となつた瀬良にとっては容易く探し出せる場所である。

やがて臙脂の体は奇妙な一部屋へとたどり着いた。部屋といつても、そこは大穴の開いた階下を見下ろす吹き抜け。何かを採掘するために設けられたものらしいが、瀬良は特に気にすることなく穴のすぐ傍に降り立った。これが何のために使われるかは問題ではない。ここが事を成す上で最も適切な場所だから使うだけである。

「術場に到着した」

ぼつかりと開いた穴を見やりながら、瀬良は人知れず呟いた。人の光に囲われた空間に、瀬良以外の人影はない。

しかしどこからともなく、答えは聞こえてくる。

『いいタイミングだ。ちょうどニコライに連絡を入れようと思ったところだよ』

ニコライとは、彼らローマ正教と同盟を結ぶロシア成教の重鎮である。彼に連絡を、ということはいよいよフィアンマは札のひつつを場に出すつもりなのだろう。瀬良は「そうか」と短く返し、

「『ガブリエル』に『ヴァルキユリア』。用意周到にも程があるな」

『それだけ本気と思えばいい。この二週間、俺様の傍に居てそれは充分に理解できているだろう。付け足すと、お前自身も俺様の札の一枚であることを忘れるなよ』

札、その一文字に、瀬良から一瞬表情が消えた。もしもフィアンマがこの場に居れば、露ほどの変化を見て取ったかもしれない。あるいは、『憎悪の核』を通じて今も伝わっているのか。

「……当然だ。僕はあなたの駒となる道を選んだ。命令は遵守する」  
きつぱりと、瀬良は答えた。答えを聞くや、フィアンマは話を進める。

『頼もしいことだ。召還の術式を展開しておけ。それを終えたら引き上げる。……ここからがお前の正念場だ』

「わかった」

答えて、瀬良が翼を広げようとすると、轟音と共に彼の顔のすぐ横を、高速で何かが通り過ぎた。思わず動きが止まる瀬良。気配のひとつも感じなかったことにわずかに眉をひそめながら、彼は静かに振り返る。

そこには一人の兵士が立っていた。

だがそれは、兵士と聞いて思い浮かべるイメージとはほど遠い姿をしていた。

軍帽からはみ出た赤みを帯びた茶髪。片耳に装着したヘッドセットとは不釣り合いな、整った白い顔。無気力そうな瞳に反して眉は

強い意志を感じさせる形をとり、こちらを睨みつけているのがわかる。身を包む軍服も、着用する人間の体格にはそぐわない。幼い子供が小さなトレンチコートを着込むような、そんな不自然さがある。

「……お前は」

見覚えのある顔に、瀬良は小さく言葉を発した。口から出たのは日本語だ。

相手が日本人だとわかっているからこそその発言。

学園都市の最新技術を腐るほど見てきている瀬良からすれば玩具のようでさえある旧式のマシンガンを構えて、瀬良を睨み付ける人物が息を呑む。こちらが日本人であることに驚いたのか、姿に見覚えがあるのか。どちらかなど、大した問題ではない。

茶髪の人物は一瞬の動揺から戻り、ガシヤツ、と威嚇するようにマガジンを鳴らして。

「同胞の仇を取ります、と、ミサカ10777号はマニュアル通り、襲撃者との交戦を開始します」

どうも、櫻井です。

更新遅延が連続してしまつて申し訳ありません。最近の筆のノリが悪いですね、これからも何度かあるかもしれませんが、極力更新後二、三日以内には次話投稿できるよう努力したいと思います。9月末に期末テストがあるので、その一週間前に更新一時停止をする予定ですので、最終話は10月頭から中旬にかけてになるかと思ひます。

さて、今回はスパイの打ち止め誘拐に始まり、瀬良と露ミサカの邂逅という流れになっております。最初は屋外に出る流れではなかつたのですが、久しぶりに派手に能力を使いたいと思つて屋外戦となりました。直後の接続回路と欠番個体の会話は、何を今さらという感じではありますが、悪党にもヒーローにもなりきれない接続回路を一喝するための流れです。接続回路はウジウジ悩むタイプの主人公ですので、彼に救われた欠番個体の口を借りて喝を入れました。今回は新型駆動鎧との戦いになります。

そして瀬良は依然回収した『材料』を使つて『準備』のために学園都市の基地へ。露ミサカの居た学園都市協力機関の拡大版というか、敵対関係になる前に秘密裏に建設したものです。そこが偶然フィアンマが使うとしていた術式の行使に適した座標だつたという設定です。魔術にも風水的な力の集まり易い場所、みたいなものがあると思ひましたので。

正直露ミサカをここで出したのは当初の予定から大きく逸れていますが、最終決戦の流れのために必要なことだったので出させていただきます。

それでは次回、お楽しみに！

10・5 超越

断手切ラレタ迷イ

(前書き)

「最近志乃が帰ってこないじゃんよ」

学園都市の治安を守る警備員<sup>アンチスキル</sup>

黄泉川 愛穂

「冥土帰しのところに居るみたいよ」

量産能力者製造計画に携わった元研究員

芳川 桔梗

(……シスターズ妹達)

瀬良は目の前に現れた少女について、冷静に考えていた。シスターズ妹達の行方については諸説あったが、よもやこんなところで出くわすとは物珍しそうに、瀬良は少女に呼びかける。

「量産品がどこに飛ばされたかと思えば。それで？ 仇を取る、と言ったか」

彼は体ごと振り向いて、シスターズ妹達と向かい合った。それだけで、目の前の少女は動揺する。実戦経験は浅いようだ。人間に銃を向けるだけでも、いささかの躊躇いがあるように見える。

「ならあの光景も目にしただろう。僕が手を下したと判断する材料はそれしかない。お前と僕の間にある埋めようのない力の差くらい、考えずとも答えがそうなものだが」

「動かないで下さい、とミサカは警告します」

面白い。

瀬良は胸の内で呟いた。

対抗する力も持ち合わせていないガラクタが、よくもまあここまです強気になれるものだ。

「……尻尾を巻いて逃げ出していれば、結果は変わったはずだ」



臙脂の腕が振るわれた。次の瞬間、シスターズ妹達の足元に張り巡らされた鉄板が、いとも簡単に捲れ上がり、その破片が宙を舞う。シスターズ妹達は何らかの電磁波を発生させたらしく、鋭いそれらを一つ残らず弾き飛ばした。が。

「っ……………ぐっ……………!？」

意識の波を切り裂く一撃が生じた。気が付けば、シスターズ妹達は宙空を飛び過ぎ、堅い壁面に激突する。いつの間にか、手の中のマシンガンは真っ二つになっていた。瀬良は一步も動いていない。

何が起こったのか。

一時は学園都市で数多の力を目にした彼女も、まるで想像がつかなかった。ガクガクと痙攣するシスターズ妹達。まだ生きているというのに、瀬良はそれ以上相手をしようとしなかった。既に撃破したと言わんばかりに背を向け、中央の大穴へと手をかざす。弾き飛ばされたシスターズ妹達は、遠く離れたその背を見ることができなかった。

故に、目にする。

臙脂の背中から生まれた、12枚の翼を。

それは左右対称に伸び、空を舞うための機構と言うよりは何かの構造式のような広がりを見せる。

(ヴァルキユリア『戦女神』……………どうやらこいつは、神話に出てくるものとは別物のようだな)

確か神話におけるヴァルキュリアは、半神、即ち神と人間の間  
に位置する存在だったはずだ。戦場で朽ちた戦士の魂を選び分け、  
オーディンの宮殿への導き手となったとか。しかしこの『ヴァルキュリア戦女神』  
は、そんな高尚な者とは言い難い。

魂の導き手が、魂を喰らうというのは妙な話だろう。

戦局を優位に導く女性のことをヴァルキュリアと呼ぶ場合もある  
そうだが、どちらかと言えばたった今ねじ伏せた妹達シスターズの方が余程そ  
の名を冠するに足ると思う。勝てないと分かる相手に立ち向かう勇  
気は、戦場で弱った兵士たちを鼓舞するに違いない。

崇高とは言い難い存在について考えながら、瀬良は胸の内を呟い  
た。

(……世界を作り替える)

二度と孤独を起こさぬように。あんな悲劇を生み出さないために。  
全てを一からやり直す。

(そのためならば)

瀬良は翼を揺らめかせ、目の前の空間に意識を集中する。翼から  
漏れたオレンジ色の輝きが、目の前の空間に形を残す。直径5メー  
トルほどの円環が現れ、上下に光の紋様が伸びていき。複雑な図式  
のような形を描きながら、オレンジ色の輝きは増していく。

やがてそれは、図式で表面を埋め尽くされた球となった。瀬良の  
身長以上の大きさを持つそれに向け、瀬良は左手を差し出した。  
ほどなくして、掌から青白い光球が生まれ出る。

(開け放とう、このパンドラの箱を)

掌の光球が、オレンジ色の球の中へと入り込む。

刹那、視界は眩い光に埋め尽くされた。

\*

HSTX-03L、『エアフォース』。機体背部に大出力バーニアエンジンを二門を搭載したバックパックを装備しており、名前の通り『飛行』が可能。肩や腕、脚などに小型のスラスタが複数個存在し、最大時速900kmに相当する機体を完璧に制御する。

そんな空中戦に特化した兵器は、戦闘機さながらの編隊を組みながら目標の搜索に乗り出していた。

『電磁性ソナーを展開……目標を補足。ポイントAX-2です』

『上の言った通りのようだ。やはりあの場所を狙ってくるか。当初の目的通り、班を分ける』

『了解』

返事が聞こえるとはほぼ同時に、編隊から5体の『エアフォース』が飛び出していった。それを見送って、残り6体を率いて滑空する。眼下の白い世界に対して目を向けることもなく、グレーの機体は恐ろしいまでの速度である地点へと向かっていた。そんな時である。

『部隊長。我々が捕獲を命じられた「瀬良悧皇」とはどのような人

物なのですか？」

通信を回してきたのは、まだ若い新入りだった。

『「シークレットナンバー非公式の超能力者」の二代目選ばれた男だ。詳しいことは俺も分からないが、奴の能力は第一位と同じくあらゆるベクトルを「反射」する能力らしい』

『それって……我々に勝ち目があるんですか？ 装備は高出力プラスマ砲と高周波ナイフくらいしか……』

新入りの問いに、部隊長は『まあ待て』と制した。

『奴の扱う能力には、アクセラレータ一方通行にはない弱点がある。確かにお前の言う通り、俺たちの装備では歯が立たない、むしろ撃つただけ返り討ちにされるだろうな。だが弱点を見つければ話は別だ』

『弱点、ですか』

知識が足りないのだろう、新入りはよくわからない、とでも言いたげに呟く。精鋭とは言え『エアフォース』を使つての作戦行動は初めてのようだし、不安なところも多いのかもしれない。

『なに、お前は俺の指示通りに動くだけでいい。手を打つのは、この道のベテランに任せて』

刹那、背後から轟音が聞こえてきた。何かと情報を求める前に、音源が何か気付かされる。

それは絶叫だった。

『部隊長！！深山が！！』

『撃墜されただと！？』

空戦歩兵の編隊がどよめく。彼らは一度方向転換し、墜落した深山へと目を向ける。

すると。

『ッ

！！』

どこからともなく下方から、突如として青白い閃光が迸った。

それは味方の内一機の背部バックパックを貫き、白い鎧ごと叩き落とす。

『「マルチタワー原子崩し」か……？』

『いや違う。もっと面倒な手合いだ。各員モードを戦闘形態に切り替える！！』

彼らの視界に映った灰色の影。こちらとは違い推進剤の類を持っていないのにも拘わらず、恐ろしい速度で空を切る化物。

『どうやら目標の「先輩」のお出ましのようだ。コードはインターフェイス！フォーメーションをAに切り替え応戦する！！』

\*

(まずは二人……)

早速二機の駆動鎧を墜とした接続回路は、空中戦専門の駆動鎧部隊に追いついていた。

その異様な姿に怖じ気づくこともなく、接続回路は隊列を変更した駆動鎧の動きを把握する。

(装備はあのデケエバズーカみてエなモンしか見当たらねエが、万が一に備えての近接武器もあるだろオナ。なら驚異になるのは前者だけだ)

接続回路は体に働く重力子を、コンマ数秒だけ切り離れた。

次の瞬間、地上十数メートルに彼を留めていた重力は灰色の瘦身を解放し、凄まじい速度で上昇させる。ほんの一瞬にも満たない時間でも、一切の重力から逃れれば地球の遠心力によって天高くはね飛ばされてしまうのだ。

あっという間に駆動鎧の上につけた接続回路は、高度を維持しながら次なる一手を打とうとする。だが彼の掌に電子が集った一瞬、敵のバズーカも火を噴いた。

巨大な砲口から放たれたのは火薬の詰まった砲丸ではなく極太の電子の束。接続回路の放った閃光と駆動鎧の放った閃光が、真正面から接触しようとする。すると、直進していた二つの閃光は互いに避けるように湾曲すると、お互いの後方へと抜けていった。

マイナスの電子同士が近づくことで反発作用を起こしたのだ。

意外な戦局に、接続回路はわずかに笑みを浮かべた。

面白い手を打ってくる。

「いいなア、それ。張り合いがあッていいじゃねエか！」

賞賛の言葉すら発して、インターフェイス接続回路は笑みを深めていく。今や学園都市最強に最も近い場所に居るこの自分に蹂躪されてばかりだったバードスイツ駆動鎧が、見事に対応してみせたのだ。すると、縦横無尽に動く4つの砲口が同時にこちらへと向けられた。インターフェイス接続回路は迎え撃つ。彼を取り囲むようにランダムな動きで飛び回りながら、五体のバードスイツ駆動鎧は狙いを付け、その引き金を引いた。

時間差で四方から放たれる閃光。インターフェイス接続回路はそれら全てを細かく引き裂き、強制的に電子に戻すと、一瞬のうちにそれらすべてを自らの矛へと変換し、無数の細い閃光として己が敵へと解き放つ。しかし、バードスイツ駆動鎧は見た目通りの敏捷性で浴びせかけられる火線全てを回避した。

「ハン、上等オだッてンだよ」

久しぶりに、フェアな戦いに身を投じていると思った。

精神攻撃を前提とした卑劣な戦略でも、こちらの感情を揺さぶるわけでもない。

正々堂々とした戦い。

インターフェイス接続回路は連続して発射される電子の束を左手一本で受け止め、感慨深く思いながらもそれを破壊する行為に出る。確かに、『マルチ原子崩し』を模した戦いでは対応される。だが、こちらの手段はそれだけではない。

『インターフェイス接続回路』はある意味で規格外の能力だ。  
『アクセラレータ一方通行』、『ダイクマター未元物質』に並ぶ、第三位以降に圧倒的な差をつける怪物の力。

その許容範囲は、認識できる範囲とはいえ『空間』そのもので。素粒子によって形作られる全てが、彼の掌の上にある。

故に、ここでの『拮抗』は意味を為さない。

「お遊びはここまでだ。チェックメイトで構わねエな？」

少年の言葉と共に、五つの砲口から放たれた閃光は不可思議な変化を起こし。

それぞれの閃光がそれぞれの砲口へと、巻き戻されたように跳ね返された。

『なんつ……………』

パワードスーツ 駆動鎧から、驚愕の声が漏れる。

『ぐつぎゃあああああああああああああああああああッ  
！！！！！？』

次に聞こえたのは絶叫。

閃光の余波か、はたまた狙いが逸れたのか。数体のパワードスーツ駆動鎧は肩口



から先を失っていた。かと言って、そこには生身の腕もない。まとめて吹き飛んだのだらう、インターフェイス接続回路はその程度の感想しか持たなかった。

『ハンデ』を終えた少年は、急速にパワードスーツ駆動鎧のひとつに近づきその機体頭部を『中身』ごとにもぎ取った。動作の流れで投げ飛ばしたそれは、銃弾にも匹敵するスピードで別の機体の胸をくり抜く。腕の改造杖が火を噴き、悲鳴を上げながら動き回る機体の頭部を正確に貫いた。組み付いた機体からバツクバツクを分離させ、そのままの形でバーニアを噴かす。時速900kmの鋭い翼が、逃げ去る機体を上下に分断する。

たかが十数秒の間に、互角にも思えた戦いはただの殺戮へと変化した。

10-5 超越 断ち切ラレタ迷イ (後書き)

どうも、櫻井です。

前回の煽りの割にはあつさりし過ぎた瀬良VS露ミサカですが、これで終わりではないのであまりお気になさらず(汗) 徐々に魔術サイドのオリジナル用語の詳細も明かしていきます。『戦女神』に関しては本話である程度予想がついたかと。

『エアフォース』の高出力プラズマ砲は完全に作者の趣味です(笑) これももう少し発展させるつもりでいます。また本編に登場するのでどうぞお楽しみに^^

今回は接続回路に迷いを断ち切った戦いをやっていただきました。最近あまり相手を傷つけないようにと配慮した戦いが(と言っても殺していましたが)多かったと思うので、まさしく善悪の境界を排除した戦い、容赦をしない戦いとして初期の彼に通ずる惨たらしい戦闘シーンに仕上げたつもりです。

瀬良のときなどにも何度か敵に対する容赦云々の話は出してきましたが、接続回路は根っこが本人が思うより臆病で優しいところがあるので、覚悟を決めてもどこか踏み切れないところがありました。それを前回の欠番个体との対話などを通じて乗り越え、ある意味では吹っ切れた形になりますね。

それでは次回、お楽しみに



一方通行は野戦病院も兼ねた石造りの施設に戻ってきていた。  
アクセラレータ  
白い防寒服に身を包む彼の目の前には、ベッドで半身を起こして  
いる金髪の女性の姿がある。

エリザリーナ独立国同盟の指導者、エリザリーナだ。

ようやく全身麻酔から解放されたところなのだが、その姿はお世辞にも『健康そう』とは言えない。スレンダーと言えば聞こえはいが、包帯が巻かれた骨まで見えそうほど細い体は一方通行が能力抜きでへし折れそうなほど虚弱に見える。白いと言うよりは青白い肌といい、インターフェイス 接続回路や番外個体にも通ずる目の下の隈といい、不治の病に侵された悲劇の女性、と形容して差し支えない像を体現している。

「……参ったわね」

病み上がりという表現が正しい彼女は事の一部始終を聞いて、これまた細い片腕で頭を抱えた。

「……回復魔術を使える機会があるなら、まず真つ先に私自身を何とかしたいところなのに」

「はあ、すみません」

エリザリーナのぼやきに応えたのは、勿論一方通行ではない。アクセラレータ茶色の髪に鍛え上げられた体を持つ日本人の少年だ。

名を、浜面仕上。

かつてはスキルアウトのリーダーとして戦い、『アイテム』の下部組織構成員として麦野沈利を二度に渡って打ちのめした、真正銘の無能力者だ。<sup>レベル0</sup>一方通行とも面識があり、遠くロシアでその姿を見たときは少し驚いたものだが、その目的は一方通行<sup>アクセラレータ</sup>と何も変わらない。

エリザリーナに頭を下げる彼の隣には、何とか座っている、という感じのジャージ姿の少女が居る。

この少女が一浜面にとって打ち止めに当たる存在らしい。<sup>ラストオーダー</sup>灰髪の少年にとっての多重観測のように。<sup>エクスプローラ</sup>

「頭を下げる必要はないわよ。そもそも、私は休む必要はないと言っていたのに、側近の手で強引に緊急手術させられていただけなんだから」

頭を下げた浜面に、エリザリーナはそんなことを言っていた。

すると浜面は顔を上げ、何やら首を傾げ始める。エリザリーナの言葉の中に不審な点でも見つけたのだらう。例えば『回復魔術』とか。

羊皮紙の存在、大まかな自己解釈から推測するに、文字通り何らかの効果でダメージのリカバリーを図る方法だと考えられる。とはいえ、一方通行はそれがどんなものなのかは知らないし、解説のしようもない。それにわざわざ説明せずとも、この日本語を喋る指導者様から何とかなるか、ならないかは聞き出せる。重要なのはそこなのだ。

エリザリーナは頭がこんがらがっている様子の浜面を無視し、その隣の滝壺理后と、一方通行の隣で欠番個体に抱えられている打ち

オウガイ

止めとを交互に見た。値踏みするような挙動だが、おそらく可か不可かの判断をつけている。

しばらくしてから彼女はそれぞれの保護者に目を向けた。

「結論を言わせてもらおうと、こっちのジャージの子は何とかかなりそう。そっちの小さい子は難しそう。以上よ」

ぴくり、と一方通行はわずかに眉を跳ねさせた。抱き抱えているフルチューニング欠番個体は「え……」と小さく声を漏らす。浜面はまだはつきりわかつていない様子で、疑問符を浮かべ続けている。エリザリーナは「要約して話すわ」と前置いて、

「見た通りの症状に差異はないけど、実際には大きな違いがある。小さい子の方は恒久的、即ち常に毒素を注入され続けているような状態だから、仮に今溜まっている分を抜いてあげてもまたすぐに補充されてしまう。それに対してジャージの子は、体の中に蓄積された毒素すべてを一度でも抜ききれば何とかなると思うわ。完全に治療できるかは保証できないけど、今よりはずっと良くなるはずよ」

「そっか！！やったぞ滝壺！何の当てもなかったけど、俺達はロシアマまで来て正解だったんだ！！」

話を聞くと、浜面は傍らの滝壺を抱きしめて喜ぶ。が、すぐに一方通行たちを見るやバツの悪そうな顔をして、喜びを口に出すことをやめた。

欠番個体はそれを一瞥し、一方通行へと目を移す。

「……あいつ、遅いね」

また手詰まりになったと言うのに、接続回路は欠番個体と打ち止

めの囿アになつたまま帰つて来ない。腕を組んで今後の方策を練る一方通行クセラレータはそんな欠番個体の視線に応えることなく、ジャケットの懐から羊皮紙の束を取り出した。

「治療についてはそつちの方針で構わねエ。だがその前に質問に答えろ。オマエはこいつが読めるのか？」

羊皮紙をエリザリーナに見せるように軽く振ると、彼女は微かに頷いた。

「時間をかければおそらくね」

「そオカ。それだけわかれば充分だ」

一方通行アクセラレータはそれだけ言つて、部屋の出口へと踵を返す。確かにエリザリーナに解読してもらうのが手っ取り早いアが、病み上がりでしかも別に患者を抱えているとなるとそれも言つていられない。一応こちらにもまだ手段自体は残っている。エリザリーナはあくまでも最後の手段、緊急時の保険と思つておいた方がいい。

「あてはありそう？」

背中に、女の声が投げられた。一方通行アクセラレータはドアをあけた状態で肩越しに振り返り、

「なけりや探す。オマエはいざつて時に俺が頼れるようにしとけ」

\*

遠く離れた雪原に、灰髪の少年は立っていた。その周辺からは黒煙が立ち上り、神秘的とさえ表現できる雪景色に一石を投じている。

インターフェイス  
接続回路は杖の鍵爪ががっしりと地面を掴むのを確認しつつ、鎧の中で炙られたであろう者たちへと冷えた眼差しを向けた。

(飛行タイプの駆動鎧……横断鉄道やあの施設の連中といい、こんな新型をホイホイ寄越してくるとはな)

茂田の話ぶりからして、自分が学園都市にとって貴重な素体であることは間違いない。だが、これに関して接続回路はわずかだが違和感を感じていた。

装備だ。

彼の瞳に、一人ほどの大きさもあるバズーカ砲が映り込む。

学園都市の技術だから、と言えばそこまでだが、あのエネルギー変換スピードは異常だった。通常のバズーカと違い装填の必要がないのはわかるが、それにしても発射から再装填・再発射までに三秒もかからないのはおかしい。

(……………いや)

頭の中で何かが引っ掛かった。弾かれたように、インターフェイス接続回路は雪の上に片膝をついてバズーカを調べる。能力を使わなければ持ち上げることもできそうにないが、インターフェイス接続回路はバズーカの機関部にあるカバーを外し、慎重にパーツを外していった。

そして。



(……こいつは)

手の中には、スプレー缶ほどの大きさのひび割れた筒があった。ヒューズのようにも見えるそれは、薄い青色の液に満たされている。どうやら予感は的中したらしい。

彼は立ち上がり、ひとつ舌打ちをする。その顔は忌々しげに歪められ、緋色の瞳にも鋭い輝きが宿っていた。

「クソつたれが……どこまで腐ってやがる」

おそらくこのヒューズの中身は、蟬脇エクスプローラが多重観測を監禁したあの培養カプセルによって作られたものだ。禁断の技術を、とうとう完成させたらしい。

(……クローンの次はこいつかよ。まったくやる事が変わんねえ)

下手をすれば、また新たにヒューズにされる『素材』が出てくるかもしれない。が、今はそれよりも急ぐことがある。いつもなら両立しようと考えるところだが、生憎今はそこまでの余裕もない。一石二鳥で済む話でもないのだ。

次の目的地へ向け歩き出そうとしたところで、不意にジャケットのポケットに入っていた無線機が音を立てた。躊躇うことなく、接タイフェイス続回路はそれを耳に当てる。通話の相手は一人しかいない。

『……俺が出て行ってる間に、なかなか厄介な事になっていたみてエだな』

「つーことは、フルチューニング欠番個体は無事に戻れたんだな」

タイフェイス電波の向こう側に居る、自分とそっくりな顔を想像しながら、インターフェイス接続回路は言った。相手は「あア」と短く返し、

『単刀直入に説明するぞ。あのエリザリーナつつウ女が言うには、ガキの治療は容易じゃねエらしい』

「それで？」

『俺はひとまず、捕まえたスパイ共から情報を引き出すつもりだ。』

……さつきからオマエの連れが騒がしいんだが、オマエはどオする』

誰が騒がしいのかは大体見当がつく。インターフェイス接続回路は小さくため息を吐いて、

「悪いが、その騒がしい野郎はソコでおとなしくさせといてくれ。」

俺はロシア成教と接触してみる」

『ソだと？』

「わざわざエリザリーナを使わねえで別の手段を選ぶところを見ると、遠慮しなきゃならねえ理由があんだろ。だったらそれ以外に知識人を探すまでだ」

言い切ると、電話の向こうのアクセラレータ一方通行はしばらくしてから舌打ちし、

『……確かに、そいつらを探し出せるならその方が効率的だろオな。だがその方法はどオすんだ』

「羊皮紙を偽造する。あの特急列車の積み荷になってたつて事は、奴らにとって喉から手が出るぐれえに重要な代物なんだろうよ。そいつを餌にすりゃ、誘き出すことはできるはずだ」

後はそれから情報を引き出すなり、下つ端をトレースしてやれば本丸まで辿り着ける。それが彼の考えだった。相手は嘆息し、

『何かあつたら連絡しろ』

とだけ口にして回線を切った。物分かりが早くて助かる……いや、それほどに向こうも必死なだろう。打ち止めにもしものことがあつて一番傷つくのは彼であり、引いては接続回路、彼女が関わってきたたくさんの人達までもが傷を負う。一つの死は、複数の悲劇となつて周りの人間に襲いかかる。

必然ではない悲劇を食い止めることが、今の自分に課せられた『役割』なのだ。

\*

接続回路から遠く離れた森林地帯。一応道が作られているそこには、数台のトレーラーが停車していた。

どう見ても正規品ではない、ホバークラフトを採用したこのトレーラーの主は、タバコを口にくわえて何かの資料らしいものに目を通している。

『桐沢さん。「エアフォース」部隊の先発隊が、我々の支部に到着

したようです』

わざわざ外してある受話器から、きびきびとした声が聞こえてきた。白衣の男、桐沢は口のタバコを灰皿にこすりつけ、

「……まとめて報告しろ」

『はい。内部に侵入した先発隊の報告によりますと、施設に勤務していた人間は抹殺されているとのこと。生命反応を調べたところ、最深部に一つ反応がありました。また、微弱ですが同じ場所にもう一つ反応があります』

報告に、桐沢はわずかに眉をひそめ、「……ふむ」と小さく声を漏らした。

「死にぞこないが奴を追った、というところだろう。構わん。そのまま奴を」

「桐沢さんっ！！」

不意に、トレーラーのドアから部下の男が入ってきた。息せききったその姿に、桐沢は目を細め、

「どうした？」

「『エアフォース』後発隊の反応が途絶えました！！衛星からの情報では、部隊を攻撃したのは接続回路インターフェイスとのことです！！」

桐沢の切れ長の瞳が、一度大きく見開かれた。しかしそれは、自らの損失から来るものではない。

その証拠に、そんな彼の口元は緩んでいる。

「……まさかこうも早く現れてくれるとはな」

不気味な笑顔を浮かべたまま、彼は自分の後ろに並べられている物体へと目を向けた。部下からすれば、虎の子の兵器を五機も墜とされて平然としている桐沢の姿はさも異様に思えることだろう。彼はいつものようにその物体の固い表面に掌を当てた。

「Hgk - 170を起動する。運用OSの準備を手伝ってくれ」

どうも、ご無沙汰しております櫻井です！先日ようやくテストが終了し、連載再開することができました（^^）

テストの出来？ハハッ！そんなことはどうでもいいじゃないですかッ！！

さて、パソコンの故障にテスト期間と紆余曲折を経て投稿しました本話、はつきり言って、地味ですね（^^）；

せっかく記念すべき復活回なのだからド派手な話にしたかったのですが、なかなか上手くいかないものです。

一応新キャラとして研究職の桐沢が出てきました。彼は最終決戦に向けて物語を盛り上げてくれるキーマンなのでどうぞお楽しみに。

今回は前回とうとう『戦女神』を解放した瀬良が主体となります。

それではこれから、どうぞよろしく願います！！

「……予告詐欺じゃないのか、これは」

フィアンマの傀儡となった学園都市最高峰の超能力者（レベル5）  
瀬良 惻皇

「思ったより出番なかったからって凹んでんじゃねえよ」

迷いを断ち切った学園都市最高峰の超能力者（レベル5）  
インターフェース  
接続回路

学園都市軍の軍事施設の奥深くで、瀬良は仰向けに倒れていた。

どうやら意識を失っていたらしい。

ゆつくりと身を起こして、瀬良は体からする駆動音を不愉快そうに聞き流した。この音には、改めて自分が人間とは違うことを認識させられる。

見れば、術式の球で包んだ光球は半透明の物体へと姿を変えていた。胎児のような形をしたそれは、一定普遍の術紋の中で蠢いている。

「……………これが、『ヴァルキユリア戦女神』……………？」

そういえば以前、第三位の御坂美琴がAIMバーストという思念体と交戦した記録を見たことがあるが、目の前の物体はそれとよく似ているように思えた。こちらは掌に収まるようなサイズだし、あれほど生々しくもないのだが。

(……………こんなものに、『エデンの蛇』を統括する力があると言っのか……………？)

イマイチ実感できずに居ると、こめかみの辺りに違和感を覚えた。フィアンマからの通信か。瀬良は眉唾の塊を横目で見ながら、胸に手を当て術式を行使する。

『ヴァルキユリア「戦女神」を目覚めさせたようだな』



第一声はそれだった。主には全てお見通しらしい。瀬良はそうかもわからない胎児を一瞥し、

「蓋を開けてびっくり、だよ。拍子抜けだ。『ヴァルキューリア戦女神』は成長する標なのか？」

『かもしれん。形はどうあれ、ちゃんと「エデンの蛇」を制御し「ベツレヘムの星」、並びに「神の力」ガブリエルの召喚に利用できればいい。15分後に「浮上」させる。その間に「エデンの蛇」から離れる』

ぶつりと、フィアンマからの通信が途絶えた。割り込まれた、瀬良はそう直感する。

もっとも、ここまで準備が進めば老人の小言など押さえつけられるだろう。『浮上』と『召喚』さえできれば後はまさにヴァルキューリアの導くままだ。

か（……さて、用は済んだ。ひとまず『浮上』の見物でもしていよう

15分という瀬良にとっては長すぎるタイムリミットを提示され、焦ることなく瀬良は踵を返した。

そして。

「……………」

\*

『……………？何の音だ？』

瀬良を捕獲するため学園都市の軍事基地に派遣された『エアフォース』部隊は、奥へ進むほど大きくなる奇妙な音を感知していた。気のせいか、違和感は振動という形でスーツ越しに伝達されてくる。スーツの中で訝しげに眉をひそめるも、異常というほどのレベルでもないせいも、危機感のような物は感じない。

『施設に電気は通っていないはずだがな……………』

5人の隊員は口々に言い合いながら、生命反応を追って進んでいく。だが、進めば進むほど、隊員たちはより大きな違和感を感じ始めていた。

『なんだ……………？急に、胸が……………』

苦しい、というのか。心臓が内側から痒いような、それでいて緩やかな痛みも感じる。奇妙なことに、症状は隊員全員に表れていた。

『つく……………はあっ……………ぐうっ……………っ！』

とうとう、隊員の一人が崩れ落ちた。それを見ても、彼らは駆け寄りたりはしない。そんな暇があるなら、死にかけてでも使命を守る。それが彼らのルールだからだ。

ようやく最下層まで辿り着くと、彼らは急に体が重くなるのを感じた。まるで重力が倍になったような錯覚を受ける。いや、果たしてこれは本当に錯覚なのか？

後少しで、瀬良の居る部屋まで辿り着ける。桐沢に指示された作戦を敢行すれば、それで使命を

『……………！？』

震える脚が行き着いたボーリング跡。その中心、巨大な穴の上に浮かぶもの。それは、彼らの捜している栗色の髪の少年ではなく。

翼。

次の瞬間。

それはこちらに目を向けた。

「驚<sup>スマ</sup>j n d w いた。汝 c J n p g a d 妾 a m w p m w g a j」天<sup>テレ</sup>使の力』 e t z b l i g g q」

口らしき部位より漏れ出した言葉。半透明な体から発せられる幾条もの光の筋が、部屋全体に広がっている。美しくもあり、これ以上ない『理解不能』の恐怖をも内包する光の筋と、人間の顔らしき形をした部位を持つ半透明の異様な存在。人類が初めて辿り着いた宇宙や深海は、こんな『理解不能』から始まったのかもしれない。

だが、それとこれとでは話が違う。

初めて宇宙に行った者は、十分に学者が考察し導き出した理論を元に、真実を確認する覚悟を持ってシャトルに乗った。

しかし自分たちの目的は、超能力者とはいえ人間の捕獲だった。こんな超常現象など見る覚悟はない。

不確定だとしても、予備知識があるのとないのでは天と地の差がある。

「どこの世界に、『よくわからないが宇宙空間というものがあるらしい。だからそこにいけるはずの乗り物を作った。これに乗って調べてみてくれ』と言われて言うとおりにする馬鹿が居るだろう。」

今の『エアフォース』部隊は、まさしく知らず知らずのうちにその馬鹿になっているのだ。いや、なったのか。

「導か j n w t g a d m s u j」

限界まで混乱していた脳内は、刹那の瞬きと共にクリアになった。

\*

「……………」

一定の揺れに身を委ねていた接続回路は、二回きりの偏頭痛のよ  
うな違和感を受けた。嫌な予感がすることは多々あるが、これはそ  
れらとは少し違う。疑問符を浮かべつつ、接続回路は貨物列車の荷  
の中で舌打ちした。いい加減慣れもしたが、この『不思議に思えて  
も確認する術がない』状態は快くない。

そんな灰ずくめの少年の手の中には、数十枚の紙片があつた。紙  
片と言っても、模様やその質感、色素などにも配慮して、一方通行  
の持つ羊皮紙とほぼ同じ代物が出来上がっている。見た目だけ見れ

ば、餌には十分すぎる出来だ。分解に比べて生成はあまり経験がなかったため不安もあったが、何とかなりそうである。

(後はカモが居る場所まで向かえばイイわけだが……)

ガシャガシャと、列車の音に混じって今まではなかった音が聞こえてきた。接続回路インターフェイスは嘆息して、

(どオやら別のカモを誘き寄せちまツたみてエだな)

荷台をこじ開け、車両の上へと降り立った。

が、そこにあつたのは彼が想像したものとは異なる兵器だった。いや、兵器と呼んでいいのかもわからない。

旧式の貨物列車の上で蠢いているのは、クモのような形をした機械だった。クモと言うよりはT2ファージに近いかもしれない。大きく上部に張り出した部位の頂点には、まさにファージのそれを思わせる結晶体が鈍く輝いていた。

図りかねていると、不意にファージ型の兵器はどのように踏ん張っているかもわからない細い脚を折り畳み、強烈な速度で接続回路インターフェイスめがけ飛んでくる。

「なん……ッ!」

急な動きに、反射的に屈んでそれを避けるが、避けたかと思つた一瞬、真上を飛び過ぎかけた兵器はその場で垂直に、接続回路の上インターフェイスに落ちてきた。

「っ……ぐっ!?!」

頭の左右と脇から腰まで、六本の足が接続回路インターフェイスの周囲を囲む。とはいえ、接続回路インターフェイスとあらゆる物質を分解できる超能力者レベル5だ。俯せの状態から反転し、ファージの下部に分解公式を宿した脚を振り上げる。

しかし、ファージは再び垂直に上昇することでそれを回避しコンテナの下へと着地した。

(何なんだ？こいつら……)

立ち上がり、接続回路インターフェイスは宙空を舞いながらひとまず先ほど覆い被さってきたファージに向けて光の刃、マルチタワー「原子崩し」の閃光を放った。大抵の物体はこれで風穴を開けることができるはずだが、ファージは頂点の結晶体の色を変化させると接続回路インターフェイスの閃光を屈曲させ、その軌道を大きくねじ曲げた。反対側のコンテナに着地し、接続回路インターフェイスは目を見張る。

(何なんだありやア……フルチューニング欠番個体のスノーボードみてエに磁場操作でもしてやがンのか?)

可能性を導き出した接続回路インターフェイスだったが、それは一瞬にして崩壊させられた。

列車の進行方向から発生するはずの突風が、背後からも生じたのだ。

体が押し潰されるような刹那の感覚の後、接続回路インターフェイスは大気の流れを左右に散らすことでその圧迫から逃れる。

大気の流れまで操った？

さっきの磁場操作に加え大気操作。これほどの芸当は、それぞれ

最低でも強能力者<sup>レベル3</sup>程度の能力者でもなければ不可能

いや待て。

インターフェイス  
接続回路は放たれる烈風の刃や雷撃の槍を回避し分解しながら手探りにポケットを漁る。一度自分は、この可能性に辿り着いていた。後回しにしようとしていた案件だ。探り当て引き抜いた手に掴まれているもの。

ワードスーツ  
駆動鎧のバズーカから抜き取った、液体で満たされたヒューズのような筒。

インターフェイス  
それを見て、接続回路はわずかに笑みを浮かべた。もちろん、喜びや嬉しさから来る笑顔ではない。

(……後回し、と思っていたんだがな)

白い顔に刻まれたのは、かつての彼を彷彿とされる凶悪な笑みだった。

「今はもオ間に合わねエだろオがよ。解明はさせてもらっぜエ」  
「もしも、この仮説が正しいとするなら。」

今から討つのは、『同類』だ。





どうも、櫻井です。

更新が遅くて申し訳ありません。隔日投稿を約束していましたが、これからは不定期気味になりそうです。学校生活において、三年生の引退もあり係の仕事が増えたりして忙しくなりそうなので、それでもなるべく早く早め早めに更新はしていきたいと思います。

さて、今回は瀬良主体と言いながら接続回路のシーンの方が長いですね。瀬良好きな人が居たならごめんなさい(汗)

今回の話の主題は『顕現』、即ちオリジナル設定『戦女神』の誕生にあります。フィアンマと瀬良との会話である程度その役割は予想できましたでしょうか。展開的にはここからラストスパート、といった感じですね。魔術サイドの変化ももちろんのこと、接続サイドでは科学サイドの新たな刺客が登場、割と急展開だったかもしれません。

ちなみにT2ファージというのは細菌に感染し増殖するウイルスのことです。形状が映像にしたら不気味に見えるかということを採用しました。バクテリオファージと入力すれば詳しい解説が見れるので、わからないという方は見てみてください。

それでは次回、お楽しみに^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1901r/>

---

とある化学の接続回路《インターフェイス》

2011年10月12日12時39分発行